THE CENTRAL REVIEW

中央公論

11-1919

十月號

第三十四年第十一號　第三百七十五號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



谷崎精二氏著

長篇小説 結婚期

大阪特製 三百三十頁

價壹圓參拾錢 郵送料金八錢

新刊

初版再版十日間に全部賣切第三版出來す

堅實にして情趣に富める作風を以て、若き文壇に重きをなせる谷崎氏が其の蘊蓄を傾けたる一大長篇作也。不慮に死せる一青年詩人と其友なる文學者、美しき藝妓と純潔なる處女、雜誌記者と其愛人なる女記者を主要なる人物となし、具さに結婚期の惱みと歡びとを描く。嚴正なるリアリズム、一味の甘き感傷を交へて、作者獨得の藝術味と人生味と、汲めども盡きざるものあらん。

原作 國木田獨歩

脚色 眞山青果氏

脚本 酒中日記

酒中日記は獨歩集中の逸品たるは云ふ迄もなし。青果氏は深く獨歩に私淑せるの人。曩に此の一卷を脚色して上演するや、脚色者縱横の構想、興味を原作に一倍して、而も原作の藝術味を失はず、近來の好脚本として大に世に迎へられ、今現に各地に上演せられつゝあり。乃ちこゝに上梓して獨歩の靈に捧ぐ。

(附錄)原作「酒中日記」國木田獨歩作

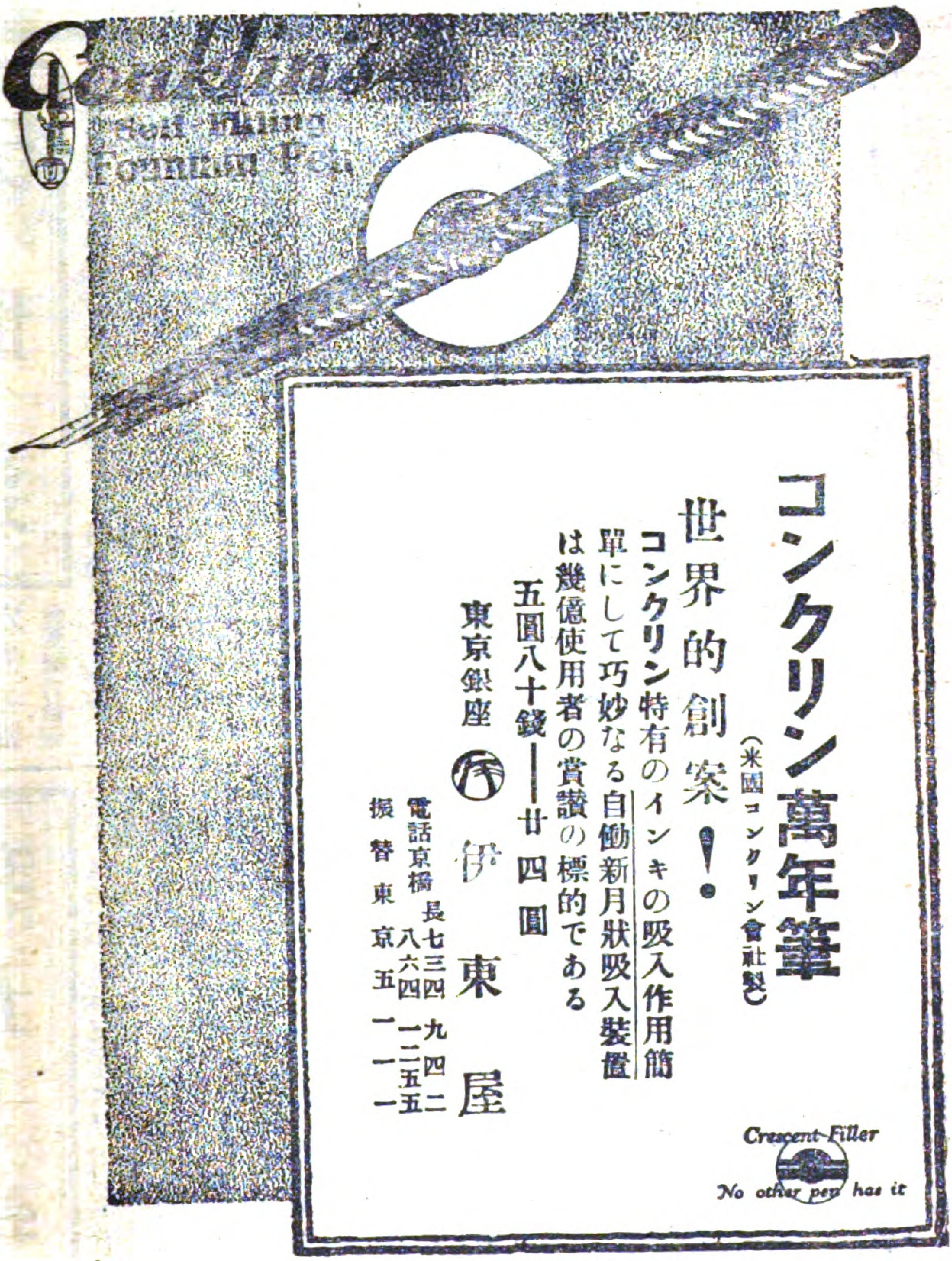
定價金八拾錢 送料八錢

東京牛込矢來中の丸 振替(東京)一七四二

新潮社

電話番町 長八〇九番 八九九番

No. 2286—F. E. R., ¼-page—J. R. K. Co.



大戰の最高紀念大出版

熱烈熾烈なる渴望の下に後篇發行全部完成！

文學博士 箕作元八先生編

一九一四年 一九一九年 世界大戰史

後篇 菊判背革天金函入千六百頁◇挿畫二色版二葉寫眞版四頁大二葉一頁大冊一葉◇地圖着色二頁大六葉一頁大二葉單色二頁大五葉一頁大十五葉切圖四十餘◎大戰年表八頁大

特價金七圓五拾錢 定價九圓

前篇 特價金六圓五拾錢 定價八圓

郵稅不要

◎後篇三ケ月月賦特賣

申込送本規定——詳細内容見本

箕作博士の世界大戰史は出版界近時の一大驚異也。前篇公刊の後半年にして十萬部を普及し盡し、よく大戰の概念と教訓とを全國民の間に徹底せしめ得たるのみならず、ヴエルサイユ會議に提供して佛米國大統領及英佛講和全權の最高批判を求め以て世界的最初の完備せる大戰史としての國際的評價を確得せり。而して今や公約の期日を違へず、前篇に繼ぎ一九一六年夏より休戰講和に至る全般の史實を網羅して後篇を完結す。

全篇を貫いて編者箕博士が憂國の至情奕々として生けるものあり。帝國々民をして大戰の眞相を詳悉する事により當面世界改造問題の神髓に深く潜入せしめ、現に國民思想の一大危機に際し、必ず國家國民の覺醒を促さずんば止まざらんとす。果然本書は尋常の學術書に非らず。深邃なる學者的頭腦と熾烈なる國士的熱情の結成せる現代の一大精神的産物たり。實に博士が本書の編述に從事せらるゝや、日夕寢食を忘れて攻究討査に熱中せられ、自ら苦心監督、大類文學博士、齋藤、阿部、時野谷三教授以下協力諸家の寄稿を整理せられしのみならず、加ふるに我陸海軍事當局の始終非常なる厚意を以て貴重なる調査史料を寄與せらるゝあり、以てよく最小の時日に最大の勞作を成功せしむるを得たり。不幸後篇印刷將に成らんとして急に博士の長逝に會へるは學界千秋の恨事なりと雖も、博士の大精神は永く本書と共に朽ちざるべし。

今や四圍の形勢は博士の豫言に違はず大戰の影響は日夜痛烈に國民の生活を脅迫しつゝあり講和會議の經驗は我政府と國民とをして共に國際擧國一致一層透徹せる世界的知識を研磨するに非ざれば將來よく國際競爭ノ伍伴たるに耐へざるの事實を痛切に自覺せしめたるに非ずや。思ふに慘憺たる兵器の戰爭纔に止めるも更に深刻なる平和の戰爭は無限に永く續行せらるべし。此時に當りて大戰全局の徹底的知識は事業に學問に一切の計畫の根幹たり判斷の基礎たるべく、況や人類文明空前の一大回轉期と帝國曠古の世界的飛躍とを永く後世に記念すべき不朽の典籍としても苟も教養ある國民の書架本書一部を備ふる事なくして可ならんや。

內容見本進呈 往復葉書申込次第

東京神田 **富山房** 振替 一〇五


専賣特許 黒中山帽
今年の世界中は
平和ダービー
ピース
鷹印帽子製造元
大阪
株式會社 高橋製帽所

國際勞働會議へ出席する我代表委員



S.S.S.

販路の廣きに於て
名聲の高きに於て
生産の多きに於て
東洋一の
レコードをつくる

サンエス萬年筆

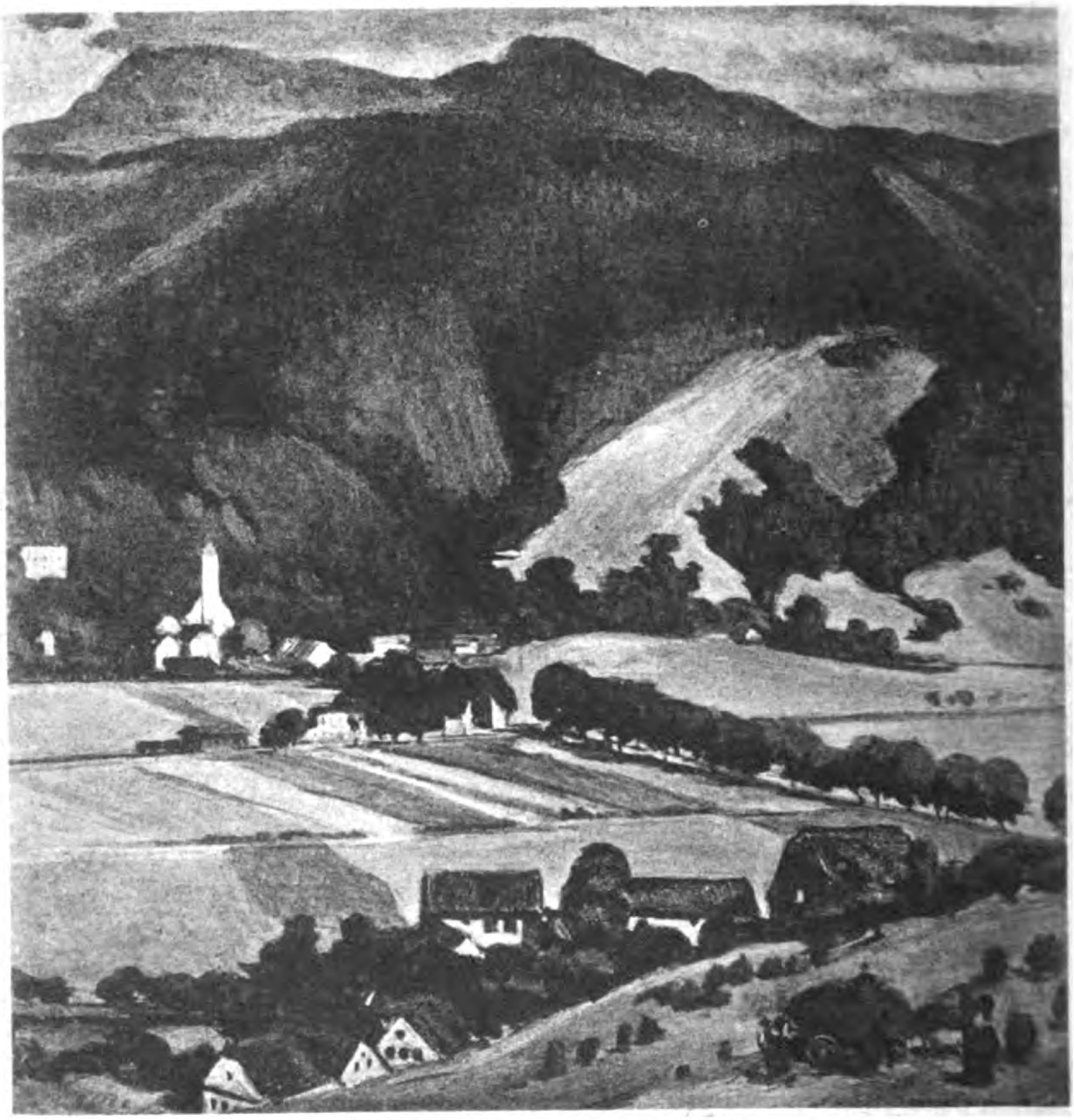
價一圓八十錢以上

色調に於て
さわやかさに於て
レコードをつくる

萬年筆用 サンエス・インキ

價金參拾錢

本舗　東京馬喰町　細沼淺四郎



LANDSCAPE

BY RICHARD HARLFINGER

生田長江氏全譯

マルクス資本論

第壹分册發賣

大版四四〇頁

定價	貳圓貳拾錢
特價	壹圓九拾錢
送料	拾貳錢

大勢はまさに―

急峻なる角度を畫いて、急轉直下し去らんとしてゐる。

來るべきは暗憺たる恐怖時代であるか、はたまた春風の駘蕩たるが如き理想實現の社會であるか。之を明らかにするものとしての『資本論』の研究は、社會問題勞働問題に對する一切の質實なる解決方法のアルファアにして且つオメガアであらねばならぬ。しかも天才者の大なる獨創は常に、學究者流に取ての謎語である。マルクスの難解も亦、マルクスのほかに、社會主義のほかに、或は經濟學のほかに何物をも知らざるが如き一味學徒に取ての難解に外ならぬ。いま本書の譯者生田氏に於て特に人意を強うするものは、氏が其尖鋭なる直觀と精嚴なる論理とを以てして、總ての科學及哲學に精通し徹底することの用意を具備しつつも、尚ほ且つ其部門の孰れにも偏落すが如きことなく、渾然たる全人格的努力を傾倒して、常に潑溂たる文化運動の指導者となつて來てゐる點にある。若くは文壇思想界の先覺として、忌憚なき社會批評文明批評の權威者として、日本の現代に於て重きをなして來てゐる點にある。そして氏は、氏が前きに個人革命の詩人ニイチエの推奬に於て貢献した所のものを、此度び更に社會革命の預言者マルクスの紹介に於て貢献すべく、昨冬以降萬事を放擲し去つて此一事に執し、最善の後に最善を盡して泣血の苦心を惜まなかつた。刊行者また、空前にして恐らくは絶後なるべき斯の如き壯擧に參加し得たことの大なる光榮を思ふものである。

第二分册以下刊行豫定

第壹卷全部――大正九年一月中

第貳卷全部――同　四月中

第參卷全部――同　八月中

大賣捌　東京堂・東海堂・北隆館　上田屋・至誠堂・慶文堂

東京麻布十番通り

綠葉社

振替東京三二七五二番

電話芝七〇一二番

FIRST AND LAST!

初めての満足！最後の満足！

萬年筆を好まざる諸君が
初めて満足するにオノト

種々の萬年筆を散々試みて
愈々の最後に満足するはオノト

オノト萬年筆 無飾金七圓 飾付金八圓以上

アルビオン萬年筆 金五圓五拾錢

オリオン萬年筆 金貳圓八拾錢

萬年筆用アテナ・インキ 金參拾五錢

送料各金拾八錢



東京日本橋通
大阪心齋橋筋　福岡上西町
京都上條通　仙臺國分町

丸善株式會社

絶好機會＝再來絕無

專門大家百廿四名分擔署名執筆

（即時送本）

修訂四版

哲學大辭書

四六倍判天金四册

總紙數三千五百頁

增刷 五百部限 特賣

哲學宗教に關する一切知識の大寶庫

十月末日〆切

定價金五拾五圓 特價金四拾圓

送料内地壹圓 其他貳圓

本書の内容は哲學概論―哲學史―論理學―認識論―日本及支那哲學―印度哲學―神道―佛教―基督教―猶太教―回々教―心理學―兒童研究―倫理學―東洋倫理―宗教學―美學―社會學―法理學―言語學―教育學者及宗教家傳記―其他哲學宗教に關する一切の方面に亙りて無慮九千七百の大項と數萬の細目を收め各項に一々英、獨、佛、希臘、羅甸、印度梵語、巴梨、波斯等の原語を添へ有らゆる方面より淵源を剔抉し學理を剖析し縱論横説餘す所なし。

内容見本進呈（送料二錢）

東京神田 株式會社 同文館

振替東京一三五

懸賞小說募集

▲締切＝本年十二月廿日

本社は茲に左の賞金を懸けて洽く江湖の有名無名の作家から小說を募る事になりました。小說は百五十回前後（一回十五字詰百行位）の長篇であり、現代物であるといふ唯二つの制限を附するのみ、苟くも家庭の讀物として推奬すべき新聞小說でさへあれば結構です。

懸賞金一等　金貳千圓

懸賞金二等　金壹千圓

選者　徳田秋聲氏　田山花袋氏　佐藤紅綠氏　【イロハ順】

採點法は八十點以上を一等、七十點以上を二等とし各等二人以上ある時は高點順により當選者を定む

分量　約百五十回

著作權及興行權は賞金引渡しと同時に大阪時事新報社に移轉す

宛名

原稿は必ず書留郵便物となし本社編輯局「懸賞係」宛にて送附さるゝ事

原稿の返還を望まるゝ方は書留郵便料附にて申込まるべき事

▲發表＝明年二月下旬

大阪時事新報社

——（大阪市北區曾根崎）——

抱月全集

豫約追加募集

抱月全集は既に第一卷第三卷第五卷第四卷を發行せしが、好評籍甚、豫約希望者日に漸増し來るの盛況を呈するを以て諸彦の熱誠を空うするに忍びず左の條件を以て追募集を爲す

◎**全集惣て八卷每壹册** 紙數五百頁の豫定 布表裝背金文字箱入菊版 大册九ポイント細活字印刷

○第一卷文藝評論○第二卷同上○第三卷美學及歐洲文藝史○第四卷新美辭學及文藝概論○第五卷飜譯○第六卷小說創作○第七卷文藝雜纂○第八卷隨筆日記及書簡○見本二錢切手封入申込の事。

●發行順は必ずしも卷の順序を追はず製本出來濟の分より漸次送本す。

●**申込** 十月十五日限り●

拂込金 左の通り

一時拂 金廿三圓外送料

每月拂 三圓廿錢外送料

送料左之通

東京(市內) 每一册金六錢 一時拂四拾八錢

(內地) 每一册金十八錢 一時拂一圓四十四錢

相馬泰三氏著

山脇信德氏裝幀

隣人

筆を執つて苦心慘澹若くして既に名匠の俤ありと稱せらるゝ作者が、最近の執筆にかゝる『隣人』『落第生』『卒倒』等合計十九編を收む。本書は實に氏が泣血の結晶にして文壇の珍たるべきもの也。

四六判箱入 美本

定價一圓五十錢 送八錢

東京市飯田町一丁目二番地 株式會社 **天佑社** 振替東京一〇一二八 電話番町一一七九

勞働運動と國家精力の涵養

昔封建專制の世に、百姓町人にも參政の權を認むべしと唱ふる者あらん乎、人誰か其無謀僭越に驚かざる者があらう。併し今日となつては、立憲政治の實行こそ、却て社會民人の慶福繁榮の源なることを疑ふ者はない。

所謂資本主義は資本をして產業經營の全權を獨占せしむるものである。資本主義の下に於ける勞働の地位は、要するに封建制下の百姓町人に外ならない。而して善政主義は、老猾なる專制政治家が立憲主義の徹底を阻まんが爲に屢屢口にする所なるが如く、溫情主義は、亦勞働者の自主的運動を抑へんとして、資本家の好んで叫ぶ所である。併し乍ら、特殊階級の權力壟斷は、如何なる方面に於ても、結局許さるべきものでない。立憲主義が政界に於て既に十二分の勝利を占めた事實に鑑みても、產業界に於て獨り資本主義の此上永く許さるべき道理はない。

勞働運動は、其始め勞働者階級の利福增進の要求であつた。而して今や一轉して產業管理の全般に亙る積極的參與の要求たらんとしつゝある。是れ歐米勞働界の最近の風潮に最も顯著なる所。即ち斯くして、立憲的精神は、政治界より更に經濟界に進み、今や漸く人類生活の全局に行き渡らんとしつゝある。

斯の大勢を前にして退いて我國の現狀を觀る。吾人は轉た其の餘りに遲れて居るに驚かざるを得ない。成程勞働問題は我國に於ても最近大に渦卷いて居る。併し乍ら、其第一步たる利福の要求すら、仍ほ十分に容れられないではないか。賃銀は多少上つた。が、勞働時間の短縮の如きは、一國產業能率の減退を口實として體よく拒まれて居る。概して國家の產業的利害と云ふことは、勞働運動の根本要求を斥くるの口實として、今仍相當有力なることは掩ふ能はざる事實である。

國際競爭の烈しき今日、一國產業能率の消長は決して輕微なる問題ではない。然し、特殊階級の利害は必しも常に國家其ものゝ利害でないのみならず、假令然りとするも眼に見える利害と眼に見へぬ利害との間に比較を誤るは、斷じて避けなければならない。目前の利益の爲に永久の利益を犧牲にするは、宛も元金を喰つて派手に今日の生活を立てる樣なもので、畢竟國家の精力を消耗し盡さずんば止まない。此流儀で朝鮮人はその國土を擧げて禿げ山とした。是豈百年の大計を念ふ者の默視し得る所であらうか。

尤も勞働運動は、右述ぶるが如く、一面に於ては國家精力の涵養を目的とするものである。而して其涵養に力むる所以は、之をして眞に國家の發達に貢献せしめん爲に外ならぬから、勞働者階級は此任務を忠實に盡すの範圍に於てのみ、其要求の貫徹を迫り得るは言ふ迄もない。是れ予輩が勞働運動を論ずるに方り、資本家に對すると共に、常に彼等に對つても亦其愼重なる省慮を求めて熄まざる所以である。

中央公論



第卅四年第十一號
十月號
第三百七拾六號

個人策及び國策としての聖雄主義

杉森孝次郎

皇帝に屬する物をば皇帝に與へよ、神に屬する物をば神に與へよと、ナザレスの天才が、機に臨んで叫んだのは、辯護的に解すれば、一種の韓信股くぐりであつたらう。批評的に觀察すれば、僞善の發達は、こゝに一とつの新たなる端緒を開いたのである。僞善とは無力の善をいふ。手なしの善思想を私はこの場合に僞善と呼ぶ。惡意にして善觀を裝ふ事を僞善と稱するが本統ならば、問題の如き事實をば似而非善と名づけることが正當かも知らぬ。名は多く拘はるところでない。弱い善人を單純に善人とみづからも心得、他をも認むるの習慣は、二千年乃至それ以上のいかほど長い歷史

をば有しやうとも、瞬間の理想たる價値もない。

善人が讀んで字の如くお人よしであることを慨嘆した一人はニーチェであつた。彼れは主として基督敎國の善人を眼中に置いたのである。けれども、義を見てせざるは勇なきなりと說き、發強剛毅を君子の一德に算へた東洋の儒敎國でも、聖人君子といへば、當世に志を得なかつた孔孟が先づ眼に浮ぶ、陳蔡の間に窮厄して、吾が道非なるか、吾れ何すれぞ此に至ると、曠野にさまよふ孤兒のやうな悲調をかなでたる孔夫子と、凡そ第九時と覺しき刻に、十字架上から、わが神、わが神、なぜそなたはわれを見棄てたまふたかと、絕命の韻をしらべたる耶蘇基督とは、共に吾人の要求を滿たさない。ショウが、『アンヅロクリーズと獅子』の序論の首めに、耶蘇は一個の臆病漢なりしやと設問して、聰明なる英國人間には、耶蘇が、マホメット式に、武勇と猾智とを發揮して、身を救ひ敵を打ち負かすことが出來なかつたといふ理由で、深刻に彼れを嫌ひ、輕蔑する者があると言つてをるのは面白い。ショウ自身の結論は、耶蘇が普通の臆病者であつたといふ意見には反對してをる。そんな者が、世界の注意の一中心となり得た筈がないからといふのである。成長した男女は、臆病男に追隨したり、その命に聽いて行動したりせねであらう。なぜかといふに、彼等は、その男の敗北と不面目のお鉢を分かち頂戴することには不贊成だからともいふてをる。この結論にどれほどの眞理があるかは別の詮議として、耶蘇の勇怯を話題にした事は功績である。

ウエルスといへば、新氣運の創造者ではないが、豫報者としての資格が絕無ではない。『視えない王としての神』に於て、理想の神を描き、勇氣をその隨一の特徵と定めたのは、流れ矢の功名とのみは思はれず。われらが信ずる神は、プロメトイスのやうに、謀叛人である。不孝者である。若しも十字架上の、處刑せられたる神といふ心像なり、畫像なりが有用であるならば、うな垂れた、敗北と屈從の相を具へた像であつてはならぬ。勝利の意思を滿顏に發露せる、抵抗

と支配の傾向を觀者の胸に誘起する性質のものでなくては失敗であると述べてをるのは、空論でない。ラッセルが、『戰時の正義』のなかで、無抵抗の哲理を宣傳してをるのは、文人のウェルスが、新信仰の名に於て、無抵抗の教へを排してをるに劣つた智見である。政治家たる要件は、人間の本性の聰明なる信者たるに存するが如く、哲學者たる要件が、ただ彼れが手を以てする代はりに、此れは頭腦心胸を以てするだけの差を保つて、矢張り人間の本性の聰明なる信者たるに存するの一例とも言はうか。

ナポレオンは、埃及に遠征してはコラーンの信者であると揚言し、佛蘭西に在つては舊教々會を建て、ウトレヒトに於て、和蘭陀の僧侶の集會に臨んでは、今まさに新教徒を名乘らんずる瞬間であつたと聲明する。既成宗教のいづれにも特殊の歸依を捧げてゐなかつたことは、偶ま彼れの聰明を證する所以であつたが、宗教上道德上の根本義に對しても、無主義、無定見の人であつたことは、彼れが人生の技術家たるにとどまつて、藝術家ではなかつたといふ哀史である。マホメットは耶蘇ほどに詩人でない。また耶蘇ほどの思想人でもない。きめがあらい。レナンが、耶蘇の最大特質は、その感情が無限に纎細な點にあると見たのは、疑ひもなく當を得てゐる。纎情と聰明と覇氣の結成した作品が耶蘇であつた。彼れには覇氣があつた。あつたどころではない、覇氣のみがあつたほどに、幅廣く、底深い存在をなしてゐた。けれども、政治家と將軍とは、恐らくは彼れの天賦でもなかつたらうが、すくなくとも彼れの修養ではなかつた。ナポレオンは政治的帝國の樹立に腐心し、耶蘇は精神的王國の創造に沒頭した。兩人共に、神の者は神に、皇帝の物は皇帝にといふ誤まれる二元論の實行者であつた。茫々八千歳、人は興り人は亡び、民は盛え民は衰へたる興亡盛衰の個人的及び衆團的徑路を顧望して、先づ感ずる一事は、強い善人が、明けがたの戸邊に彷徨する盜賊よりも稀有なことである。しかしながら、善人が強者でないならば、善人とはそも〳〵何を意味する語であらう。ワイルドが、「藝術家としての批

評家」のなかに於て、「不正よりも惡るいものが唯だ一とつある。それは劍を手にせざる正である。義が力でない時には、それは邪である」と憤慨してをるのは、論理的に整頓する餘地のある、平凡なる眞理である。「わが眼前に一個の幻像あり。その幻象の意味は限りもなく深長にして、しかも驚絶すべきほどに不思議な幻象である。シーザー・ボージーが法皇になるといふのである。嗚呼、これこそはわが熱望する勝利なれ。基督教は玆にその終焉を告ぐるのだ」、といふニーチェの文句を引用して、「近代主義と基督教」のなかに於て、往々にして着想に警拔なる點を有するサンタヤナが、自説を敷衍してゐる。ニーチェの趣味と、サンタヤナの解釋とから離れて、私もまたその數聯の文字を讀んで、多少の想像を刺激される。しかしながら、ボージヤーと法皇などは桁が低い。なんぞマホメットを直觀せざる。

耶蘇は想像力に於て古今に卓越する。深强にして火焰の如き想像力を、彼れの本體と觀たるワイルドには眼があつた。けれども、耶蘇には、手がなかつた。惡人にむかつて石を投げる手もなかつた。自己が善人でありながら、惡人に石を投げつけられた事實は、その善人の不充實を談る。內的に充實しただけでは、生活には、的方面が存在するが故に、半端である。不具である。眞の理想主義が、そんなものであつてはならない。コルシカの天才には手があつた。人並ならぬ巧緻な形質を帶びたる彼れの雙手は、物と力の世界を意の儘に成壞する藝術能を示してをる。彼れには想像力もあつた。埃及への航行中に、食後の座興として、彼れは、周圍の從者にむかつて、人間が水または火の力を方法として、地球を破壞することが出來るかどうかを討議問題として提出したことがある。彼れの想像力は、世を蓋ふ雄大性をば有すれども、外的植物に依賴する性質のものである。內發的自動的生命の眞實鄕は、意に彼れの想像力の域外にあつた歐洲の教會に於て、讃美歌を滿浴する主人公が耶蘇であつてナポレオンでないことは、前者が物力界の英雄でなかつた

如くに、後者が心靈界の英雄でなかつた證據である。

生活が本統に心物兩界に別かれてをるなら、或者はナポレオンの途を取り、或者は耶蘇の途を選み進むに異議はない。しかしながら、ナポレオンは兩國の花火の如く、瞬間に轟き輝いて千古に寂寞たり、耶蘇は、長く尾を曳きたれども、その光芒の因は、疾くに燃えて死灰となれり。法律と豫言者等を打ち滅ぼすためにわれ來たれりと思ふ勿れ。われは打ち滅ぼすために來たらず、充足履行せんがためのわが到來なりと、耶蘇が常識道徳の基礎に確信を與へたのは首肯される。新古が眞僞の換言ではないからである。けれども、國家を攻撃することも、國家に奉仕することも、兩つながら出來ないで、勞働、富、權力、幸福、榮華及び學問といふやうな、國家存立の目的をなす諸般の事物を輕蔑し、無視したる耶蘇の罪は、後世の基督教にその禍果を結んだ。中世の教會は、先づローマ帝國の人爵的階級制度をその通りに採用した。後に至つては、封建的階級主義を受信した。政治上に於ては、教會は發見したる制度慣習の信者であつた。創造することによつて始めて存在となる制度慣習の信者では殆ど曾てなかつた。安全な、容易な理想主義者であつた。ルーソーが新約全書に於て、外生活上に於ける事大主義の要素を認め、爲政者を警誡したのは奇矯でない。『社會契約』の第一篇第三章に於て、「すべての權力は神から來るといふ。よろしい。けれども各の病氣もまた神から來る。吾人が醫者を呼び迎へることは罪惡であるといふ結論になるのか」と論じて、政治上の神權説を揶揄したのは無意義でない。制度の制裁力が必至不可抗である場合に、人はこれに威壓されて、殊にその制度が歷代を通じて、萬人を律して來たものであることを知るに及んでは、恐怖に基づく服從を尊稱して義務と呼び、個性を沒却することが奉公の要義であるかの如くに信じ込む。世の光りであるべき思想家までもが、さうであつたら、なさけない話である。宗教が思想でなかつたら、そんなものは無用有害である。

基督教が、その教理を政論上に適用し來たらなかつたことは、人間の進歩のために慶ぶべき事であつたと考へる人もある。英國に於ける新進の一思想家デライル・バーンスなどもその傾向を有する一人である。しかしながら、それは別問題に屬する。魂の改造を事務として、形體世界の改造に着眼も着手も、銳意努力は言ふまでもなく、しなかつたことは、基督教の制限であつた。人格としては耶蘇その人にその第一原因があつた。制度としては教會にその成績が現れてをる。中世を代表する思想はストア哲學と基督教である。その前者の一權威たるセネカも、その後者の一中樞人物たる聖オーガスティンも、奴隸制度の非を頭腦心胸に於ては若干意識したけれども、口と手を以てその救濟を講ずることには、不熱心であつた。耶蘇その人が最も恐れたる一事は、無政府主義者といふ嫌疑を蒙るかも知れぬ事であつた。彼れの教への純個人主義的な方面と、デモクラティックな方面とが、彼れをして自然當然にその顧慮に及ばしめたのである。何人かこれを目して單純に卑怯視しやう。東坡が張子房を論じたる文の中に、大勇者を説明して、彼れはその挾持するところのもの甚だ大にして、その志甚だ遠なりとある。千金の子は盜賊に死せず、何となれば、その身愛すべくして、盜賊の以て死するに足らざればなりとも言うてある。古今東西に變はりのない眞理である。改革狂の一面を有するラツセルも、世の改造に志ある者は、かしこく、用心深い人であらねば、その志に忠なる者でないことを述べてをる。

一七九四年の八月十二日に、二十五歲のナポレオンは、ジエノアからニースに歸ると間もなく、アーンティーブ附近の一城砦に監禁された。その年の七月二十七日に斷頭臺上の露と化したるロベスピヤの策士であつたといふ嫌疑の名目下に於てであつた。書類を檢したる結果なんらの證跡も見付からない。實をいふとナポレオンは、今は亡くなりし主權者ロベスピヤと、その生前の關係に於て極めて愼密なる豫防を怠らなかつたのであつた。萬一の虞れもないやうに用意したのであつた。ロベスピヤがナポレオンに、巴里の軍司令官たる位置を提供した時にも、功名には急なる、若かきナポ

レオンは、かしこくもそれを謝絶した。當時の巴里ほど物騒な場處はない。いかなる頭も安全ではあり得ない。且つまた勝利成功の月桂冠も、いまだ彼處に於て贏ち得られる見込なし。から見ての處置であつた。愼慮は徒勞ならず。同月二十日にナポレオンは釋放された。古來の英雄にして、險を冐さなかつた者は一人もあるまい。しかしながら、若し彼れにして非凡の智術なかりせば、そしてその智術を自衛的目的にむかつて發揮しなかつたなら、どうして英雄といふ果を結ぶことができたらう。嫩にして摘まれ、蕾にして掻きむしられ、花にして散らされたにきまつてゐる。セールのコラーン英譯は、今尚ほ尊重すべき活價値を有する。その長大序論は、世に最も面白い讀み物の一であらう。そのなかに、「マホメットの狂熱を反證することに興味を有する人々が、論據とすべき一事は、このアラビヤの豫言者が、終始一貫して、その企圖を遂行する上に於て、かしこき行爲と、大なる細心愼慮とを示してをる事であらう。熱頭の宗敎漢の破天荒的思想と不一致に觀えるからである。けれども、たとひ世のすべての狂熱者が、マホメトほどの實際的まじめさと用意周匝とを以て進退擧措を決せずとしても、マホメットが、唯だ或一事に關してのみ、氣ちがひじみてをり、その他の萬事にかけては極度の穩當と豫戒とを以て行動せる最初の活例ではなからう」といふ言句がある。いかにもその通りである。耶蘇がすでにその一人であつた。耶蘇にもまして、革命の注意人物視せられることを疑懼し、戰々兢々として、小心翼々として、赤子を抱いて薄氷を渡るの感を切實に經驗した人は多くあるまい。耶蘇が、彼れの信者たる事の明白な人々に對しては、隨つて謂はゆる門下の直弟子等に對しては、峻嚴無假借の要素を著るしく顯揚してをるに拘らず、未信の人々に處する態度は、慇懃寛恕を極めてをつたといふ史家の觀察に、私は信を置く一人である。叩けよ、さらば開かれん。求めよ、さらば授けられん。雲雀は原を必要として原に遊び、狐は穴を不可缺として穴を獲る。耶蘇も、當代の政治的權威の忌諱に觸るることをば切欲して避けて、首尾よく成功した。耶蘇が法庭に引致されたのは、アナスと

ケーヤファスの宗旨的嫉惡心を招いたからである。パイレートは、不本意ながら處刑に賛したにほかならなかつた。耶蘇のみではない。聖ポールから第六世紀の末葉の法皇であつたグレゴリ一世に至るまでの、基督教及びその代表者としての教會が、いかに政府を讃嘆することに努めたかは、史乘に明らかである。私は耶蘇がもつと放膽であつたことを希ふわけではない。恐らくは時代の政治的興味の低調が主原因となつて、しかしながら耶蘇その人の能力に、全智全能の理想が、片側的に發達してをつた結果として、生活の外的方面の理解をも、改造をも、創造をも後世の範となり、奨勵となるほどに實現しなかつたことを、平素回顧しては遺憾に思ふ。

耶蘇は英雄であつた。單に精神界の巨人としての意味に於てではない。普通の意味に於ての英雄的力量を具へてゐなかつたなら、いかにして百代を通じて、幾千萬の男女を一人の如くに、たとひ實行的責任を伴はざる多少の內生活上に於てではあるとしても、心服させ拜跪させることが出來たであらう。動かし、組織し、統導する、複雜なる人間力を、彼れが異常に所有してをつたことに毫頭懷疑する餘地はない。オイケンが認めてをる通りである。けれども、總勘定を行うて、殘るところの結論は、耶蘇には手及び手の方向を照らす智が缺乏してをつたといふ事實である。現に生きつゝあるわれ〳〵は、その事實の意義を、將來のために完成せねばならぬ。

手が示す實在は工藝である。産業である。政事法律である。海陸軍と警察である。教育である。社會問題の發見と解決である。その方向を照らす智は科學である。哲學である。思想學問である。社會的に見ての話である。個人的に言ふならば、國家を縮寫したやうな人をいふ。財政力は大藏省の如く、文化力は文部省の如く、外交力は外務省の如く、正義力は司法省の如く、戰鬪力は陸海軍省の如き個人格をいふ。文部省の如き文化力外務省の如き外交力は、極樂の必要を證明する地獄のやうなものでないかと、噴飯する讀者があるならば、隱喩を解せざる昧者である。心太さかしまにと

かけて、銀河三千丈と釋くに不始末はない。マキアヱリが、君主は獅子たることを要する。狼を辟易させるためである。けれども、獅子だけであると係蹄にかゝる。だから同時に狐であることが必要であると說いてをるのは、淺薄な考察であつて、生活の詩的奥義を堂々たらしめる資格には缺けてゐるけれども、三度の食事のやうな、普通妥當な眞理である。ニーチェのツァラトゥストラが、日の下で最も誇りの高い生物である鷲と、日の下で最も多智な生物である蛇とを、その後者がその前者の頸に、親友の如くにからまり、そしてその鷲が、大輪を空中に描きつゝある光景を、正午の太陽に射られながら仰瞻し、あれ〳〵、あれこそはわが動物なれと歡びの胸を躍らし、彼等は、われの健否を知らんとして來たのだ。世路險なり、希くばわが動物どもわれを導けよ。われは智者になりたい。わが蛇の如くに、徹底的に多智でありたい。能ふべくんば、わが誇りがわが智と同伴せよ。けれども、智は必ずしも望んで得べき事でない。人はややもすれば愚に返る。よし、さらば、誇りのみは常住せよ。わが誇りは、わが愚と共にでもよいから翺翔せよかしと、感慨の語を自己に寄せて、十年修養の生活から、光と熱を身に載せて下山の途に就いた一節は、ニーチェの傑作の內に於ても、餘韻の嫋々たる文字である。今より三百有餘年前に、近代文明の源流に竿さしたるベーコンは、知識は力であると喝破した。心理學の最近の趨勢は、意思の位置を高揚する努力とも見られる。意思は行動である。行動は客觀世界を變成する。意思の中心は自己にある。第三者的に言へば個性にある。科學は現存の事物を知ることを目的とする。陽明も言うた通り、知るは行ふ始めである。人は何が故に現存の事物を知らんと欲するのかと問へば、知識欲の滿足がその一答ではあるが、唯一答では無論ない。科學的活動の目的は、工藝的活動にある。一七六九年に、ワットは蒸汽機關の新原則を發表した。曰はく、汽筒をば、それに入る蒸汽と同熱度に保つべし。汽筒より出づる蒸汽をば、凝縮器に受け容れて凝縮すべし、その凝縮器をば、ぽんぷを以て空氣と水を拔き置くべし。蒸汽の膨脹力を利用すべしと。この科學的研

究が機會となつて、石炭の價値が創造された。從來は手によつて成された工藝が、機械によつて成されるやうになつた。産業の中心が家庭から工場へ移つた。工場の勃興は人口の都市集注を促がした。産業そのものが、適當な意味に於ては、ワットの科學的活動にその起源を有する。汽車、汽船の發達は文化的及び經濟的に世界を一村一家となさんずる傾向を齎らし、人間が欲望を滿たす方法を獲得したることによつて、生活の信者たる近代人の發足地は、ますく\その論理的到達境を約束する。知識は、文字通りに力であることが、漸々として實證されて來た。科學が工藝のために道普請し、工藝が産業の門戸を開く鍵となり、産業が政治の換骨脫體を行ひつゝある。中世に於ては、宗教熱が政治熱から分離してをつたために、實世界の改造は全然閑却された。近世殊に産業革命以來は、經濟生活上の自覺運動が、政治熱と併行合同してをるが故に、實世界の改造が活潑に成績を擧げつゝある。心熱は必要である。心熱なしでは、改造も創造も不可能である。何人か耶蘇及び原始基督者の心熱を信じないことができやう。第一世紀の殉教史は、二千歲の星霜を經たる今日に及んで、人生の理想的一面を、赤鐵の如くにわれらの心肝に燒きつける。詩といふほかに、實行的詩歌といふほかに、それに對して捧ぐべき名詞もない。しかしながら原始基督者が、その熱情を、既に成立してをる、但しその場處と時間とが地上でもなければ現世でもない、神の王國を讃美渇仰する一途に傾注したことは、すくなくとも知識の缺乏を意味する。無いものを在ると思ふたからである。智識の缺乏は蔽はれないが、意力にも窮を告げてゐたらしい。本質的にはペーガニズムの主張である近代生活の功績は、宗教的熱情の所在を、主觀世界から客觀世界に奪ひ取つたことである。同時に、宗教的熱情の方向を、來世から現世へ矯正したことである。それには智力がいつた。その智力の結果を事實化する意力が殊にいつた。人間の智性を刺激して、それをして科學的及び哲學的活動の新形式を求め成さしめた境緣をしらべて見たら、生活力の旺盛といふ事がその一條件をなしてゐたらう。本能と衝動と欲望と意思と能力と、

それらのすべてを背景とする氣分とが、その固有の聰明を、影を追ひ響を尋ねる閑事業に委却する筈がない。現實を照らし、そのなにものであるかを知り、これを暖めて花を咲かし、實を結ばす。工藝と産業と、政治と社會問題解決とを豫想する學問的、思想的準備に、近代人の聰明が自己を發表したのは自然である。直ちに實在を衝き動かさんとするのが近代人の智性である。才と氣力のあつた聰明人の王陽明は、行は知の成であると唱說したけれども、個人的規模に於ての原則の發見と、適用の實現とを見たるにとどまつて、社會的規模に於ての大運動は、智と行の關係の一側面を闡明したものとしては、吾人はこれを十六世紀以來の、歐米を中心とせる近代主義の發展に認めねばならぬ。熱情が宗教方面のみに限られて、しかもその宗教方面が、人間の本性の感情的方面のみに限られる時には、實生活の改造が、科學と哲學と工藝と政治と經濟とが不可能にされるとによつて、荒廢する道理である。近代は無宗教の時代である。一人の名を署した生活の興味の實行的及び觀念的原則が地を掃うて曠しいといふ意味に於てである。近代に於ける基督教の位置は正午齡後に於ける朝顏の位置である。ニーチェの獅子吼、それに先だつミルの警醒的論說の如きは、識者の眼より覗れば、死屍に鞭つにも比すべき業であつた。けれども、基督教は、實に死して名に死せず、行動事業に倒れて旗幟標榜に於ては昂然たり。現代の大多數者が、無理想の現實主義者と、非現實の理想主義者との、いづれかであるとは、どの點から考へても改造を要する狀態である。科學主義、國民主義、資本主義、社會主義、これらが近代の宗教である。無名有實である。草は千里萬里、見渡す限り乾きたり。ところどころに點火さへもされてある。科學主義を表札とせる自然どの點主義運動、國民主義の心臟である愛國心、資本主義に僞惡の假面をかぶる超人主義と英雄崇拜、それの動力であるの宗教支配的個人主義、組織と責任を象徵する社會主義、かくの如きは卽ちそれである。要するところのものは大局である。風を呼べばよいのである。熱情は近代に有りあまる。缺くところのものは集大成である。總結束である。一人の名が必要で

ある。その一人は、名に相當する實のある人でなくてはならぬ。その一人が耶蘇の如く、マホメットの如くに、既成の位置を獲得するに到らない。それが時の問題でないならば、近代生活は、玉の盃底なきに似たる悲喜劇である。なまなかに宗教の名に於ての熱情でないだけに、近代生活上の熱情は、僞善と、誤魔化しと、無責任とがすくない。定相と內容とが現存してゐる。科學主義も、國民主義も、資本主義も、社會主義も、それぞれに、なにと、いかにとを知つてをる。宣教師と、神學者的哲學者が、人類の罪惡と、宇宙の救濟とを、天を仰いで祈り且つ論ずる際に、科學主義は富を興こし、社會主義は飢餓と無智を社會の大多數民から驅除すべく現實に奮闘する。現代において、飢えたる者に石を投ずるものは既成宗教であつて、パンを與ふるものは非宗教的超宗教的活動である。學校は教會に代はり、施捨は勞働組合のために廢用となる。俗物が僧侶であり、僧侶は俗物の幇間と寄生動物となつてをる。幇間と寄生動物とが尊敬に値しないことは輿論であるが、僧侶も半信半疑である。漸く固まりかけた、鍋の中の煮糊のやうな現代の俗人である。上手に攪きまはす者が、早く出現する急要が瞬間ごとに增進する。增進すると言ふよりも切迫する。熱情が經濟にあることは結構である。時代の熱情が、或は國民主義に集中し、或は社會主義に結晶することは、現實生活の改造を意味する、慶ぶべき現象である。布呂敷のやうな宗教や哲學よりは比べにならぬほど貴い。けれども、熱情の發表は、經濟でも、政治でもよいが、熱情の源泉は、眞の意味に於ての、哲學宗教のほかにあり得ない。なにをいかにすべきか、またなにがいかになるかといふことをば、世上の特殊的運動と機能とが心得てをる。なぜの一問に遇うて、呆然自失しない國民主義も、社會主義も見付からない。諸省の上に總理大臣職あるが如く、われらの經濟的活動をして、超經驗的意義あらしめよ。實在の深處から、光りと熱とが迸り發して、經濟上の階級主義打破の運動ともなり、政治上の國粹保護とも世界心開發ともなるでなくては本統でない。耶蘇の熱情は、彼の想像力と等しく、宇宙に充滿したとも言へようが、山川

草木を動かした如くに、身體と物質と制度の世界を動かしたとも許し得る。卽ちそれらをば、毫も動かさなかつたと許し得る。ジェームスが、その著『プラグマティズム』のなかで、形而上學的哲學と呼ぶほかに、適稱のない一類の智識體系を非存在の如くに扱ふてをるが、謂はゆる宗教が、氣を付けないと、これと同然なものになる。酒に醉うた當人は熱く感じても、驗溫器で計つて見ると變化はないといふ素人話を聞いたことがある。宗教がこれであつては、持ち甲斐もない。ややもすれば、宗教は不聰明の隱れ家となり、無智識の蓋となる。吾人が、宗教と聞き、宗教家と聞き、宗教的と聞いて、しばしば一種の輕蔑嫌惡の念ひを禁じ得ないのは、まさしくこの理由による。この心のほかに心を假定するは虛僞であり、この世界のほかに世界を豫想するは迷妄である。この心を聰明にし、建强にして、この世界を、創造的に改造するほかに生活の意義はない筈である。個人が、どんなに宗教的であり、哲學的であつても、食はねばならず、着ねばならず、算へねばならず、時としてはまた歌ひ踊らずにはをられない如くに、民族乃至人類が、どんなに宗教的であり、哲學的であつても、織らず、耕さず、建てず、商はないわけには行かない。經濟や政治は俗界の事務であつて、教職は神聖であるなどとは言はさない。僧俗二元論はいづれの代に於ても嘘である。俗が僧でなかつたら、逆にまた僧が俗でなかつたら、俗は永久にひき手のない琴であり、僧は常恒に琴のないひき手であるほかない。彈手が琴を擁し、琴が彈手を捕獲したる瞬間に、神の都市の城壁も鳴らし築かるゝ見込みあり。城壁のみではない。神の王國も、直下現前の傾向を取る。耶蘇及び原始基督者が、無限の熱情を有せしにも拘らず、天上空際にこれを揮發せしめ、ワツトの謂のはゆる膨脹力を機械力に化する途を講ぜず隨つて科學なく、隨つて工藝なく、隨つて產業なく、また政事的制度の改造創造もなかつた人間社會と地上世界とを、近代の幕開きまで曳きずつて來た現象の奥には、膨脹力も偏へに感情性のもてあつたといふ悲劇がある。宗教は古來一人の開祖を有する。基督教は、いかに融通適應の妙を盡しても、開祖の人格

を超越することは出來ない。耶蘇の全人格を部分的要素として、餘計な或物を有する新人格の出現が、超人的規模に於ても、群衆的規模に於ても、また總團的形式に於ても、今明日の、各人、列國、世界全體の共通必要事である。

耶蘇に失望して史上を再顧するとき、先づ吾人の視線を遮る一人は、六世紀の後半中に亞拉比亞の一平民兒として生を享け、七世紀の前半中に、七百年後の、詳しくは一八一七年のナポレオンをして、基督の宗教は地歩を固むるに三世紀を要したれども、マホメットの宗教は十年間に既知世界の半分を征服せりと嘆稱せしめたる。そのマホメットである。ナポレオンは、この一聯の文字に先き立つ、同じマホメット評の部分に於て、一個の人は、畢竟するに二個の人以上たる能はず、けれども、時として一個の人が大事を成すことができる。一個の人はしば〳〵可燃物の間に投ぜられたる一點火の如し。マホメットをして今日の亞拉比亞に在らしめば、あのやうな成功をば能くせざりしならんと言つてをる。ナポレオンは、マホメットは、すべての人々が、唯一神に對する信仰に權威付けられんことを切欲しつゝあつた瞬間に出現したのだと觀察してをる。ナポレオンの評言に、どれほどの價値があるかは別問題として、象徴的に取るならば、世界の各國と各個人とが、今明日に、その根本策として實現するを當然とする一件は、疑ひもなく六、七世紀の交に於ける亞拉比亞を二十世紀初頭の坤輿全面に發見するにある。そして現存及び以後存在の老若男女のおの〳〵が、その特殊の位置と志向とに忠實な方法に於て、マホメットとなるにある。

マホメットは武勇の人ではなかつたらしい。丁年近くの際に、彼れは、當時の亞拉比亞の弊習であつた部族間の戰鬪に、伯父の人々に從つて臨んだことがある。敵の矢を、落つるに隨つて拾ひ集めて、伯父さん達に手渡すほかに、何等の勞をも取らなかつたといふ説もある。しかしながら、後年彼れが、メッカからメディーナへ逃げて、次第に兵力を、自己の積極的目的のために使用するに至つた經歴を參照する時には、及び彼れが、友に對して慇懃懇切を極めたに反比例し

て、敵に對して絶對無假借を必要とした感情を持してゐたことを考へる時には、マホメットは、ニーチェの如く、人格的深要求の保護と發展とのためには、强者を理想としたことに疑ひはない。ニーチェは思想上の强者たるにとゞまつたが、マホメットは、隨分の程度まで實行上の勇者であつたといふ差があるのである。戰爭のために戰爭を欲し、喧嘩のために喧嘩を好むほどに、マホメットの趣味と聰明とは低劣でない。道義的目的の明確でない、況んや反道義的目的の明確である部族間の葛藤なゞに、沒批判的に熱を持ち、心身を奴役すべく、彼れの智性は餘りに優秀であつた。無意義の亂と破壞とを嫌惡輕蔑したる、達人の見識にほかならなかつた。彼れは人間の本性の總指揮官たることを理想とした。蠻勇に興味を持つ小人ではない。彼れは人間の本性は、慾望と恐怖と理性と情愛とから成り立つことを看破した。耶蘇の如く情愛のみに全部の信仰をば托さかつた。ソクラテスのやうに理性の偏信者でもなかつた。ナポレオンのやうに、また四百年前の、同じ伊太利の天才のマキヤエリのやうに、慾望と恐怖のみの崇拜者でもなかつた。マホメットが、聖者と政治家とを兼ねてこれを一身の人格事業に發揮したのは、古今の精神的及實行的英雄の間に特立獨行する彼れの雄姿である試みに彼れの行動を通ほして、彼れの人物を點檢せんか

　彼れは第一に神學上の改革者である。言ひ換へれば新宗教の創設者である。無論私はマホメットの神學に感服しない。彼れの宗教の信者では會てない。マホメットの神學は、神を既成現存と信ずる分際の神學である。基督教と同然である。私は、神を二重の意味に於て承認する。方法としての神と、目的としての神である。宇宙は混沌として無秩序のやうに見える。たしかに或標準から見ればさうである。けれども、自然主義の宇宙には、理想主義の宇宙が、卵として生きてゐる。歴史的宇宙の内に、論理的宇宙を發見して、これを世界の光りとし、人間の道として履行するところに、至上の滿足は常に得られる。そとにこの合理的組織を仰親して、吾人はこれを神と呼ぶに差支へはない。うちにこれを俯察し

て、良知と稱へ、良心本心と稱呼すると、一紙の表裏を代表する眞理である。讃美歌の第十八章に、神はわが巖なり、またわが城砦なり、またわが救濟者なり、わが神、わが丈夫な巖、余は彼れに信頼せんと欲すとあるのが、手段神の意義を語つてをる。暑苦るしいから障子をあける。目的は凉を入れるにある。障子をあけるのはその手段である。けれども、この目的と、この手段とを、吾人は直ちに神とは呼ばない。特殊的だからである。全人の統導的位置を占むる目的と、それを達する唯一最上の手段であるといふ意識が伴ふ瞬間に於て、すべての特殊的目的と、特殊的手段とは、最も正當な意味に於て神となる。カントの本具的良心主義と、ミルの經驗的功利主義とは、この神を、一はその內的條件に專ら依據して、他はその外的條件に專ら依據して說明せんとした企てである。打算を超瞬間的意義としない直覺と、直覺を現瞬時の實在としない打算とは、前者は倫理的に不具であり、後者は心理的に不可能であるから、謂はゆるカント主義者と、謂はゆる結果論者との對立は、僞と僞との對立である。眞の道德は、兩者を一照變滅する。すべての特殊的手段は、それが一人の取る手段である以上、全人の總目的に對する絕對的手段を經驗的に代表する。凉を入れるために障子をあける行爲が、信神の發現でないならば、その人は、その時間に、他の活動形式を實現しなければ、正善といへない。手段が絕對的絕對價を持つためには、目的が絕對價を有することが必要である。凉を入れるためには障子をあけることが必要かも知れぬ。けれども、その場合に凉を入れることが、入れないよりも全人から見ての善でないならば、障子をあけるといふことは相對的絕對價を有する手段に過ぎない。世に手段なき目的はあらず。刺なき薔薇はないといふにもまさる無例外の約束である。絕對的手段は、あたかも葱の莖が根に移り、隅田川が東京灣に流れ込む如くに、絕對的目的に接續する。むしろ成長發達の關係が、兩者の間に存在する。一元的なのである。人は目的なくして生くる能はず。目的を選擇して絕對價ある目的を立て、手段を選擇して絕對價ある手段を講ずる所に、宗教的生活の全部が成り立つ。目

的神は、理想として存在するほか未存在である。手段が成功した暁に存在となる。目的神は、作る神ではなくて、吾人が成るべき神であると云ふ道理は、各人の常識が心得てゐて、專門家の哲學がしばしば心得てゐない、餘りに偉大なる新神學である。現存の宇宙を創造した者を崇拜する宗教は、創造の日影を追うて走る質である。之よりも誇張された悲喜劇はない。創造者は自己である。今此處に生きてをる自己である。其ほかに、直接に創造者といふ名前で通用すべきものはない。吾人の創造を俟たずして存在する世界は、吾人の改造に値ひする世界である。吾人の智と意とは、既成の世界を知り、之に固執するために、吾人に具はつてゐるのではない。吾人には情がある。情の生活は評價の生活である。苦しいと評價しては、智性と意力とが、その命を受けて、いかにして脱苦すべきかを問題として解決する。障子をあけるといふ事實が生ずる。あけられた障子といふ狀態は、その人が創造した世界の新秩序である。風雨俄かに到つて、その人は、障子をしめるといふ行動に及んだ。再び快苦の間に智と意の自然的使命が果されたのである。轟々として天地をゆすぶる如き光景を、硝子越しに靜觀しつゝ、他が世界創造の眞最中に、机上の紙片も安泰な無風雨境を享樂するならば、その人は、ここにもまた創造者の意義を體現したのである。プロメトイスが、文明の開祖であり、人類の創造者であつたことは面白い。彼れは、主宰神ツォイスに抗爭した。ツォイスが人類を信じないことを憤つて、火を天より盜み、これを人類に與へて、發明と自然征服の總本元を供給した。人爲的作用としての技術藝術といふことを、火を御する術に寓して敎へ投けた。私はプロメトィスの火は、聰明であつたと解釋する。人爲は藝術である。藝術は創造である。人は聰明である。聰明が創造でないならば、月光は日光の反射でなく、胡瓜の蔓に茄子がなつたことになる。聰明とは、智情意の渾然一體に命名した一方法である。聰明の多寡が實在の優劣であるから、人が自然に從ふのは、優者が劣者に從ふ罪惡である。宗敎道德が、罪惡を奬勵する性質のものであつてはならぬ。神が不聰明であつては、これを信ずる結果は非創造で

ある。聰明の信者たるプロメトィスは、二十世紀の今日に於ては、日の内に喰はれた肝臓をば、日の内に創造して見せる誇りをさへも示すであらう。日中の敗北を、夜間に取り返すなどは、十字架上の屈辱を、後日と來世とに於て光榮化せんとする緩漫である。無際無限が實在の本質である。「獄壁の彼方に、煤烟に黒ずんだる、見すぼらしい數株の樹木が立つてをる。栗魂させんばかりの新緑芽を、今し萌發せんとする氣勢である。余はその數株の樹木の心事を解す。彼等は發表を實現しつつあるのだ」と、ワイルドが直觀したのは實在の眞相であつた。發表は創造の別稱である。聰明は發表の原因である。自己發表に、即ち自神創造である。ニーチエは超人を說いた。超人が憧憬するところのものは、自己發表としての宇宙でなくてはならぬ。自成の宇宙である。マホメットが、卓越せる聰明を持つてゐたに拘らず、他成の宇宙を信じたのは、時代の罪か、個人的聰明の缺損か、私はその兩者であつたと信ずる。繰り返して言ふが、私はマホメット教の信者ではない。彼れの神學の信者では一度もない。しかしながら、それは、マホメットを、二十世紀の、世界的大改造の陣頭に立つ人々、またその中堅となり、殿軍となる人々の、最有力の活例の一として推稱せんとする私の目的を毫も妨げない。諸神雜處し、群神割據する時代に產まれ、哲學的大統一を智情意の三方面よりして一網總遂せんとした彼れの識見は千古の偉質である。神と言へば、神社、佛閣、敎會の專有物であるとは思ふべからず。その邊には神はない。今の世で言はうなら、社會主義は神である。國民主義は神である。資本主義も神である。これらこそが本統の神である。本統の神が、幾つもあるところからして、確執が融けない。マホメットは、精確ではないが、五七〇年の八月二十日に、メッカにその生涯の第一日を經驗した。そして、六三二年の六月六日に現身的勢力の幕を落した。五八〇年から五九〇年に至る間に、メッカ及び附近の地方は、異なる部族間の國民主義の衝突交爭のために、血腥き殺傷事件の斷ゆる日もなかつた。年々、メッカ市の東方三日旅程の一地に於て、二月頃に、諸族總出の市が開かれる例になつてゐた。亞

拉比亞の老若男女の虚榮心が、組織的に發表される競技會のやうなものであつた。蔭の傘を一面に大きく擴げてをる棕櫚と、清冽な噴泉とは、遠來の商人と旅人とを歡んで滯在せしめるに足る設備であつた。物々賣買が行はれ、晴れの舞臺に武勇と詩歌の勝負が營まれ、その場で功を奏してその場で廣告された。能力を發見する機會であつた。この年の市の開期中に、マホメット自身が屬する、コライシュといふ最大部族と、隣郷の雄族ハワヂンとの間に、爭鬪戰が激成された。コライシュ族の一詩人が、萬邦冠絕式のお國自慢をやつたといふので、國憤を抱ける一ハワヂン人に毆打された。ハワヂンの一處女が、コライシュの青年等に不禮を加へられた。かゝる小故の發生する度びごとに、鞘が拂はれ、血が流れ、統導者の手加減がまづい時には、すぐに雙方擧族の戰爭となる。十九世紀に發達して今日に及んでをる國民主義の實際と、規模の大小と、程度の高低を異にするほか、一致點の多い現象であつた。マホメットの聰明と良心とは、この偏小なる愛國主義の惡と惡とに、歲を重ぬるに從つていよ〳〵深く開眼した。おのおのの民族におのおのの特質あり、おの〳〵の特質がおの〳〵の誇りを助成するに不都合はない。けれども、道德的責任が個人に存せずして部族に存し、一人の犯罪が、直ちに全部族の刑罰を豫想する制度慣習、及びそれらのものゝ根底をなす道德思想が、いかに暗昧なものであるかといふことを、マホメットは痛感せざるを得なかつた。不斷の戰爭を覺悟するか、若しくはそれを怖れて、異民族間の私的犯罪を默恕するほかなき狀態を、彼れは放置することが出來なかつた。民族的、國籍的異同に拘らず、共通目的を發見して、これを確把することが、急務中の急務であることを、彼れは時代に率先して明視した。唯一神を、各民族が、その自己の最深處に掘鑿して、行動の源泉をその統一的眞理實在に仰ぐやうにしなければならぬといふのが彼れの不可拔の確信となつた。神學上の改革と呼ばゞ、閑人の閑事業とも響かう。マホメットの眞意は、そんな抽象的なものではなかつた。演繹と歸納とを、彼れは兩信して併用した。神學上の地盤から固めて行かないでは、經驗的

得喪に遇うて、脆く動搖する社會問題解決、道德問題解決となることを彼れは知つた。近代の熱情は、社會主義と、國民主義と、資本主義とに吸收されて、宗教はもぬけの殼である。あき家のやうな不景氣である。貸家札唐様に書く三代目といふ評句は、近代の各宗教にこそ當て嵌まるなれ。けれども、思想界の無政府主義は危險である。國民主義と國際主義と、資本主義と社會主義との背奥に、大いなる人間の本性の活存を見て、それを伸ばし、それに方向を、またその方向に對する自覺を、天上の一輪が、天下の萬類に光りと熱を投げ及ばす如くに投げ及ぼす者が出現しなくてはならぬ。その者とはほかでもない。各人の常識が即ちそれである。其常識の基礎であると同時に屋瓦であるところの哲學が即ちそれである。神學は、正當な意味に於ては哲學である。哲學が、眞實本統の意味に於ての神學であると同義である。マホメットが、當時の亞拉比亞相當に粗雜不備な形式と内容とに於てではあつたけれども、兎も角も社會改造、道德改革の根本條件として、宗教創造を必要としたことは、素通りのならぬ現象である。

大統領ウィルソンは、遲れ馳せに馳せ參じて、國際聯盟を唱道した。彼れの思想は尋常を拔くこと極めて僅かである。けれども彼れには多少有力な手があつた。すくなくとも多少手を動かす便宜のある位置境遇に彼れはゐた。國際間の競爭を制限するに急にして、列國の能力を充分に伸展せしめる機會を完備することを目的としないといふ缺陷を、目下の國際聯盟が持つて居ることは、その不成功に値ひする過失である。或はむしろ無能力である。國際心を燃燒する宗教火が、おの〳〵の常識を燭臺として點ぜられることが、政治以上の政治であることに、今の理想主義的政治家は必ずしも回頭しない。英雄頭をめぐらせば即ち神仙といふ意味は、英雄を廢業して神仙を開業するにあるか知らぬが、眞の神仙は、英雄を開業するための第一資本であることに、今明日の政治家は着眼する必要がある。マホメットは、部族的愛國主義萬能の弊害を深察して、統一的政府を組織する要を認めた。けれども、政治的帝國を建設する準備として、條件

として、また目的として、道德的帝國を樹立するの要を知つた。相爭ふ諸神の上に、唯一神を高く揭げたる彼れの趣旨は、經世的意義をも帶びてゐた。宗敎を政治の道具にしたといふのではない。政治的改造が、宗敎的努力でないならば、政治的改造は、羽織ゴロが私心を公營する事を意味する。

道德的帝國の基礎目的にむかつて、政治的帝國を創建したるマホメットは、後世の政治家に對する警告であると同時に、後世の思想家に對する頂門第一針である。年の市の地名はオカツである。オカツの市には、基督敎徒も、またそれよりも多數の猶太敎徒も、及びこれら兩敎徒から蔑視された亞拉比亞固有の異敎徒も集まつた。信條の蔑視が旺んであつた。神と神との鉢合はせと、むしり合ひが、當たり前の事のやうに公行した。聰明なるマホメットは、反省を刺激されずには濟まなかつた。そして統一的眞神を、現存する諸神の代はりに、それらの上に、齎さうといふ素志大願を夙に決意する身の上となつた。カーライルがナポレオンを評して、彼れは事象の外廓に阻止されずして、直ちにその殿堂に突き進んだといふ意味を述べてゐるが、そしてこれが、すべての偉大なる人物と成功家の秘訣であると論じてをるが、マホメットがまさしくそれである。雜多の中に統一を發見し、爭鬪の上に協力を望見したのが彼れである。物を見て、彼れはその本質的要素と、偶然的要素とを明察する。本質的要素は、比較的に共通であるを常とする。朧ろに霞む本質的要素を、衒照する偶然的要素の奥底に、最確實な存在として經驗する智性をマホメットは持つてゐた。最確實なとは發展的といふことである。今こそ朧ろに霞めども、時と共に赫耀し來たる、朝霧の奥の太陽を彼れは見た。虹の七彩を、天日よりも尊信する彼れではなかつた。發聲者と反響とを聽きわけた。諸神の廢墟から、生き神を掻き起こしたる彼れの手は、活人刀を持つてゐた。感ずる必要が、眞實の必要とは限らないといふ金言がある。表面皮相の執着を打破して、核心と核心とを比較するとき、人は皆同じ理想の信者であることが發見される。マホメットは、

當時の各宗教が、その本を忘れてその末を愛するが故に、相他殺せんとして相自殺しつゝあることを認めた。彼れの唯一神は、千二百有餘年前の亞拉比亞に於て、最大創造であつたけれども、今日の文明諸國に於て、唯一神の發達が、尙ほ甚だ不充分になつてをることは、時代相當の迷信と偶像とが、民衆の不聰明の土壤に、雜草の如く枯れては生え、また枯れてはまた生えるものと見える。再び注意して置くが、唯一神の名の下に、謂はゆる宗教學者の神をば必ずしも意味しない。全信の對象でさへあればよい。迷信と偶像とも、護符と鰯の頭には限らない。政治生活、經濟生活に關屬した方面の道德觀念、敎育思想であつて差支へない。謂はゆる民衆も、富と權力の低級者を指したのでは勿論ない。知識聰明の低級者を意味したのである。

マホメットが、終始一貫して、必死の覺悟で敵としたものが一とつあつた。それは彼れの神學上の改造に直接關聯したものであつた。宗教上の儀禮に屬するものをも含めて、すべての偶像崇拜が卽ちそれであつた。彼れには外交術あり、政略あり、心事と行動との間に彼れほど複雜な關係を保つた人は多くあるまい。英雄人を欺くの例に彼れもまた洩れなかつた。一本調子、表裏透徹の性格ではなかつた。ウトレヒトでは新敎、佛蘭西では舊敎、埃及では回敎を告白したナポレオンにも劣らぬ融通家であつた。けれども、マホメットの方便力を以てして、荒海の佐渡に横たふ天の川よりも明らかに太い主義が、崇高莊嚴に生涯を貫徹してゐたことは眞に百世の偉觀である。權勢欲と成功心が常現したことをいふのではないかと先づ疑ふには及ばない。彼れが一貫して聰明の信者であつたことをいふのである。偶像崇拜に對して、彼れは超經驗的不快を感じた。偶像崇拜に對する反抗的衝動そのものは、彼れの偶像崇拜ともいふべき自然的なものであつた。そしてこれは世に最も尊むへき事であつた。聰明の信者たる瞬間に、人は生活の目的を遂げてゐる。聰明狂は、唯一の無害有益の變態である。生活の努力は、この變態を常態とするに存する。古今東西を見渡して、聰明狂の稱呼に値ひ

する人が何ぞ寥廓として稀少なるの甚だしき。徳川時代を廻査して二宮あり、明治を物色して福澤あり、近代を模索してミルあり、上世を總覽してプレトーあり。今尚ほ古の如く、聰明狂が、依然として例外に屬することを如何にせんか。星が近く頭上に光明を放つ亞拉比亞の丘原に牧したるマホメットは、無際の宇宙から、聰明の神秘を感受せし折々もありしならん。天に日月星辰あり、地に各種燭光あり。文明の程度は、全盛都市の第一街の夜景を觀て、いかに人工燈が發達してをるかに察知することが出來ると言ひたい位である。聰明が個人の優劣計であるが如くに、社會の進度は聰明の進度である。マホメットが、不聰明に對し、本質價と偶然價との當然の位置關係を理解せざる蒙昧に對して、絕對無假借の征討を決意して敢行したのは、吾人が最も彼れの人物に興味を持つ所以の一點である。國際と階級際とに、不聰明が蟠つて仇をなす。競爭が機會の競爭である現狀に對して、質的協力を犧牲とせる量的協力のみの世界を理想の狀態として押し付けんとす。個性を目的とする改造運動は、個性を目的とする守成主義者と等しく、物理學書の中に心理學の知識が影をも見せぬ如くに、世界を通じて索寞たり。膚色、言語、風俗習慣、歷史及び地域の異同によつて相結合して獨自の法律と政府とを所有し、國家を維持し主張することは、その始め個性保護の目的に出づ。汽車、汽船、電信及び飛行機船の發達につれて、人と、思想と、原料及び製品の交通が增進し、國際間の帶が國內組織を、本根から生えた毛細根の如くに生かしもし殺しもする時代に到達して、尙ほ且つ自國萬能信の夢に耽らば、その夢から覺めた頃には、國は亡びて、野分の後の果物畑よりも廢殘せる自己を見出ださん。十八世紀末の世界主義が一種の偶像崇拜であつた如くに、二十世紀初頭の國家主義もまた一種の偶像崇拜である。前者はナポレオン戰爭に醒まされて新國民主義に變裝し、後者は大戰に撼搖されて新世界主義に猛進する必要に面接してをる。いかなる名目形相の下に於ても、偶然價を本質價よりも尊重することは偶像崇拜である。文化生活と經濟生活の實質が、逝くもの斯くの如きか、晝夜を舍かぬ勢ひ

を以て、國際的に移り進む今日、自己生活、自國存立の本質的要素に開眼せずして、空虚なる愛國心に執着する如きは偶像崇拜の甚だしいものである。愛國の要義は愛道德にある。道德は個性を目的とする。個性の沒却を要求する愛國心は、愛國心以上の原則にそむく。哲學は地業である。愛國主義は、社會主義と等しく柱石であるかも知れぬ。地業成らずして柱石を信頼するも何かせん。生活の家屋を朽土の上に建つるなかれ。個性の保護をほかにして哲學はない。個性の保護をほかにして政治なく、產業なく、敎育なしと同理である。一とたび個性の價値に本能と衝動と聰明とが體驗識到する時、人は協力の要を悟る。國家はその一產物にほかならない。この起原を忘却して國家を尊信する者は偶像崇拜の弊に陷る。協力は種々に可能である。膚色、言語等に自然的共通點を相認めて協力するも一方である。しかしながら、從來の普通の國家構成の要素中には、理想的要素が缺乏してをる。理想的結合もまた種々に可能である。藝術上の近代派同志の結合もある。醫學者同志の結合もある。勞働者の結合もあれば、社會主義者の結合もある。結合の最高形式は道德的結合である。善人善人と相組んで善を大成するための結合が、他のあらゆる人爲的結合の統宰的位置に立たねばならぬ。私の謂はゆる道德的帝國が、政治的、產業的、科學的、藝術的帝國の總司令官でなくてはならぬ。主義、理想の異同を標準として向背を決するのが、人間にふさはしい敵味方の定めかたである。天下を勞働者の有に歸せんと意氣込む產業的結合も、世界を自國民の臣隷に落さんと希ふ國民的結合も、個性本位の結合にあらず、隨つて道德的意義ある結合でない。膚色よりも魂を見るべし。職業よりも品性を察すべし。道德的帝國の樹立を信ずる以上に、或特殊の人爲的結合を信ずる者は、悉くこれ偶像崇拜者である。道德は個性を目的とすることはすでに再說した。道德的帝國の樹立に全信を捧ぐる者は、個性の信者でなくてはならぬ。國民であり、組合員である前に、人は先づ個性主義者であることを要する。本が立たずに末の立たう筈ない。個性主義の確信立たずして、國民主義も、社會主義も、

國際主義も、資本主義も、菫花一朝の榮を競はんのみ。

本質價は個性である。偶然價は機會である。機會を偶像と呼び、個性を眞紳と稱すべきなり。マホメットの精血が、偶像打破のために惜し氣もなく費やされたのは、十有餘世紀の今日に及んで、幾百千萬の熱烈なる信徒を、彼れが創造し得たる主原因である。彼れの信徒は愚昧であらう。論ずるの價値もあるまい。既成宗教のすべての信徒が、今日に於て保つ一般的位置である。マホメットの純眞的價値は、實に彼れの偶像崇拜に對する深甚なる義憤にあつた。すべての偶像崇拜に對して、彼れは本質的不快を覺えた。これよりも堪えられない經驗はなかつた。一事生命よりも重しとは斯くの如きをこそ稱するなれ。この反偶像崇拜の宇宙を貫く決意なかりせば、マホメットの一生は、砂漠のオアシスなきにも比すべからん。腥坊主の大將とも見られたらう。けれども、源流濁つて、下流ひとり淸きことはあり得ない。野心一片の大俗人にほかならなかつたならば、超現身的感化勢力が、あのやうに永く發展する筈がない。嘘から出た誠は、この場合には適用されず。マホメットは、最後の計較に於て、ナポレオンよりは上位に立つ。野心以上、功名心以外の主義狂が、マホメットにあつてナポレオンにない。權勢のみに憧るゝ男女のいかに醜なるよ。偶像打破は、マホメットの生命であつた。餘は彼れの偶然的價値に屬する。決意といはんよりも傾向といふを適當とする。彼れの本質的要素を、彼れの反偶像主義は代表してゐた。油池に投ぜられたる一把の炬火が、おのづから滿池を紅蓮の潮と化せされはやまぬ如く、崖上に轉下せられたる一巨石が、百千萬石を誘落せずには措かぬ如く、彼れの反偶像崇拜は、天才的自然現象であつた。だから永照する。意義ある生活を生活せんと思はゞ、世のおの〳〵の老幼男女に寄語する、聰明だけをば信じたまへ。經驗を批判するために智性あり。本質價と偶然價を、經驗の內に識別する能力もないならば、識別してこれに主從關係を實施斷行する勇氣もないならば、恥かしき五尺の醜骸かな。吾人は天地を裝飾するために生まれたり。思想なくして、

思想に伴ふ行動なくして、藝術家と、哲人と、英雄とは、等しく吾人が生存の理由に疑ひを懐かん。マホメットは、如何に生くべきかを解してをつた、古今有數の一人である。そして彼れの第一永賞は、本質價に對する彼れの頭腦であつた。

マホメットは頭腦の巨人であつた。文字通りの形體的意義に於てもさうであつた。賴朝のやうな巨頭漢であつたらしい。しかしながらそれは問題でない。問題は彼れの聰明と智力が當代一であつた事である。問題中の問題は、當代一の手腕が、その頭腦に直接連續してゐたことである。彼れの手は、彼れの頭から生えてゐた。彼れの知るところは彼れの行ふところであつた。修身程度、齊家程度の規模に於てにはとゞまらない。治國平天下乃至それ以上の規模に於てゞあつた。宋明の儒生よりは能があつた。止水は孑孑を生ず。壺中の天地に樂屋落ちを並べあうて興ずる聖人君子ではなかつた。道德的帝國を發念したる彼れは、直ちに政治的帝國を發念した。神の物は神に、帝の物は帝にといふ遁辭を、遁辭としても放たざるを得ないやうな人間であることを彼れは厭うた。神が收税者である必要を彼れは感じた。物心二ならず、彼れの倫理學は彼れの心理學に基礎を持つてゐた。彼れの政治は彼れの詩であつた。實行を以て詩を書くことが彼れの方法であつた。經綸は彼れの思索であつた。第一に神學上の改革者であつたマホメットが、第二に社會改造家であつたことは、彼れに取つては最も自然當然なことであつた。彼れ以外の世界に取つては、當然であるほどに自然でない。この不自然を自然にし、當然をして實行の擔保あらしめるが新教育の能事である。

マホメットの社會改造の最主要點は部族割據を覆へして統一政府を打ち建てる事にあつた。及びこれと關聯して、當時外人が相異なる部族領内に於て受けてゐた偏狹不正なる差別待遇を除去するにあつた。時弊を見たる彼の眼は、政治家の水準を拔いた深智あるものであつた。哲人の眼であつた。時弊を救ふ彼れの手腕は、俗界の英雄をして呆然自失せしめ

る底の怪强至極のものであつた。彼れには聖人の志があつた。そして彼れには英雄の手があつた。その志を行ふにその手を以てして、彼れは生前に於て豫期通りの社會改造を遂行した。社會改造と關聯して、彼れは習慣道德を改良した。なかんづく顯著なる風俗改良は嬰兒殺しを禁遏したことである。當時の亞拉比亞人は、女兒を生き埋めにする弊習があつた。人口の過增を防ぐためであつた。それが大概の場合ではあつたけれども、マホメットの崇高なる道德見を以てして、これが犯すべからざる罪惡であつたことは當然である。簡單に彼れを敍するならば、マホメットは同時に宗教上、社會上、及び道德上の改造者であつた。興味ある一事は、彼れの神學的確信を告白する者は、政治的に平等待遇を受けたことである。部族的差別待遇は全滅して、道德上、宗教上の主義理想が、唯一の個人的差別待遇の條件となつたことである。マホメット自身の家族子孫と雖も、單に彼れの家族子孫たるの理由によつて、社會上の特權を享樂することには彼れは反對であつた。斯くの如くにして彼れは、固定した役人階級といふものをも設けなかつた。歷史的價値よりも理想的價値に重きを置いて、親緣と雖も不信の徒をば優位に置かず、他人と雖も正信の者をば、制度上の特權者となしたのみならず、永時任用といふことを彼れはしなかつた。事ある間の任用であつて、事の濟むと共に解任する制度を彼れは採用した。役人の永時任用をしなかつたと同時に、役そのもの、官位そのものをも永時的に設置することをば彼れはしなかつた。或町で病院を建てたといふ。創立の趣意は、地方の病人を救ふためであつた。年處を經るに從つて、町の人々は、その病院附着の醫者や看護婦を維持するために、病院を經營するに至つたといふ。これは近代の譬へ話に過ぎないが、マホメットは、制度を生活の目的とし、生活を制度の手段とするやうな不聰明人でなかつた。病人が無くなれば病院を解散するのがマホメットの方法であつた。こゝにも彼れの本質價と偶然價に對する識別が發動してをる。醫員を永任せず、醫院をさへも永設しない見識である。後に至つて、亞拉比亞族以外の改信者に對して、差別待遇を設け、同信なれ

ども異族の徒はしばしば人頭税をさへも徴せられたことがあるが、これは明白に祖師マホメットの意向に反したものであつた。そしてこの弊制は再び廢棄された。言語、血液、地域、風俗習慣、及び歴史といふ、いづれも現存既成的、外部的、自然的である條件を便宜として成立せる國民人を背にまはし、同信、同理想、同主義といふ道徳人を脇に擁護したる實行政治家マホメットは、世の改造家の護符であらう。マホメットは國民主義の信者であつた。けれども彼れの國民主義には、道徳的要素がその支配的勢力となつてゐた。品性と才能とを歴史的自國の内外に發見し、創造して、その總動員下に本質價と偶然價とが最も正當な位置を占むる新世界秩序を建設することが彼れの趣意であつた。彼れの國民主義はこの趣意の實行案の一としてのものであつた。この趣意の實現のためには、彼れはあらゆる便宜と機會とを利用した。彼れの多妻制もその例に洩れない。彼れ自身は、大なる女好きではあつたけれども、久米の仙人にもあらず、荒淫の徒では尚更らなかつた。聖なる野心が、彼れの全興味を常に統導したからである。多妻制は彼れの發明にあらずして、發見であつた。當時の亞拉比亞は、すでに多妻制になつてをつた。この既成現存の慣習を打破することに彼れは必ずしも躊躇しなかつたであらう。しかしながら、彼れの英雄眼は、人口の價値を視た。善の惡のと爭ふても、畢竟するに人の爭ひである。命あつての物種といふが、人あつての功罪である。不信者、未信者、反信者の本據を突く一策は、彼等の人口を減却するにあり。同信者の勢力を張る一策は、その人數を増すにあることを彼れは思うた。回教の歴史を觀れば、財貨を投じて一度に萬に達する小兒を購買したこともあるといふ事蹟談もあり、異教徒の幼小年者を掠奪せる話は堆し。貢賦として赤子を徴收したこともある。東西南北に道徳帝國の鴻業を成す手段として、東西南北に敵の種を枯らして味方の種を播き散らしたる回教最初の責任者はマホメットであつた。小兒は成長する白紙である。これに字を書く時には、その字は獨りでに擴大する。加ふるにマホメットは、多妻制の道徳的價値について、必

ずしも明確なる否定的覚見をば持つてゐなかつたらう。國語もまた彼れが利用したる自然的一便宜であつた。回教徒が、その征服したる國土に亞拉比亞語を押し弘めたる成績は、ローマ人がローマ語をその征服したる國土に押し弘めたる成績以上であつた。スペイン及び北阿弗利加から中央亞細亞へかけての全回教區域を亞拉比亞語が支配した時期があつた。マホメットは武力をも信じた。彼れが自覺宣傳に從事したのは六一一年頃からである。その後十二年間、メッカ布教中の彼れは、名實共に說得感化一方の主張者であつた。メディーナへ逃げて、次第に戰鬪力を周圍に準備し來たるや否や、彼れは說得武力の兩刀使ひとなつた。コラーンの第二十二章に於ける文字を最初の發現として、この兩刀主義の告白はしばしばなされた。しかしながら、彼れをして文武兩道主義を採らしめるに至つた第一機會は、むしろ防衞的なものであつた。コライシュ族が彼れの命を取る計畫を講ずるに及んでからの事であつた。基督教と雖も、戰つても負けるとわかつてゐた間こそ說得一方の信者たりけれ、三百年の迫害に堪えたる曉に、ローマ皇帝自身をして改信せしめたるを機會として、國權公權の力を以て、信者を保護し、不信者を迫害する順序となつた。末世澆信、外力を以て内的生活を强ふるほかなきまでに墮落したのであらうか、人間の本性、機會を待つて早晚發露するの一例か、マホメットの場合に於ても、耶蘇の場合に於ても、多少の程度はあつたらうが、ふたつながら眞實であつたに相違ない。

マホメットは、すべての偉大なる男女、成功した男女がさうであつた通りに、人間の本性の信者であつた。レナンが、『反基督』のなかに於て、耶蘇とポールとを比照し、ポールが耶蘇に劣る所以は、人間味のすくなかつた點にあるといふ意味をのべてゐるところがある。一面の眞理に觸れた觀察であらう。これをその質の精粗について考へずに、單に輪廓を主として解釋する時、古來の超人のなかで、マホメットよりも完全に人間の本性の信者であつた人は恐らくあるまい。耶蘇は情愛を信じた。ソクラテスは理性を信じた。マキヤヱリとナポレオンは欲望と恐怖を信じた。マホメットはそのすべて

を殆ど平等に信じたといひ得やう。そのすべてを平等に信じたと同時に、そのおの〳〵に於て一代に冠絶してゐた。みづからそのおの〳〵の要素に富み、随つて他の同類要素を支配するに長じてゐた。彼れが偶像破壊の一面は、熱狂至極のものであつた。この一面をのみ觀察すれば、彼れは論理主義者の巨人であるぞ。しかしながら、彼れがその獨自の政治的帝國を剏建したる跡を精査すれば、彼れは決して單純なる論理主義者にはあらずして、深酷なる歴史主義者であつたことが確認される。彼れが人を見るの明を見よ。彼れが多策にして竟に窮することなきを察せよ。變幻出沒限りなくして、しかも歩一歩その地盤を築き上ぐる技術を看破すべし。ロイド・チヨージも三の三乘舍を避くるばかりなり。彼れにはレーニンの自信があつた。レーニン以上の自信があつた。何となれば彼れはレーニンたると同時にマルクスであつた。私はレーニンの大小を今日に於て斷言することを好まない。すべての現存者に對しては、道德的希望を屬するからである。しかしながら、現代にマホメットたらん者は、十年間に世界を統一するの實力なかるべからず、それほどのレーニンであらうとは思はれない。彼れ恐らくは、露西亞の一時の救濟者たらん。世界の運轉手達に、一考再慮をその方途の選擇と、その機關の適不適とに費さす男子であらう。天下の各能を組織して、地上に曠古の大音樂を奏する樂師とも、作曲者とも思はれない。ラッセルの如きは、自照星の資格をいくらか有する衆星中の一星のみ。ロイド・ジョージの手がない。ソクラテスが毒盃を仰いだのは驚嘆するに値ひせず。何すれぞ聰明なる政府と國家とを創造せざりしぞ。脱獄逃亡を企てれば、首尾よく落ち延び得べかりしものを、位の筆法でほめそやすのは、小學校の教科書にも入るべからざる弱善なり。ロイド・ジョージに一分の手はあるかも知れぬ。しかしそれはラッセルを投獄する手である。ラッセルに五厘の思想はあらうも計りがたし。けれどもそれは、宰相に體刑せらるゝ思想である。ラッセル全善にして、ロイド・ジョージ皆惡なるが故であらうか。私は兩者を、恐らく平等に忠實に研究した。私の全我を僞らない限り、彼らの一方が存在に値

ひし、他方は非存在に値ひするとは言ひ得ない。御都合主義者であるから當代に成功し、理想主義者であるが故に日中の螢の如き生涯を送り、現身消え失せて後に闇黒を縫ふ光明となるとは思ふなかれ。善の實現を延ばす理由がどこにあるか。託せられたる處女が亂暴を加へられた後に、兇漢取締りの法を立つるは吾人の理想とすべき方針でない。惡を未發に防ぎ、既發に制し、小善を大成し、宇宙を善の競進場に、各瞬間に化する無限の智力と意思とあるべし。人類は恐らく永生ならず。壞結且夕の人間の歴史を計算して、餘りに呑氣な善人たることは、悔を最終の日に貽す所以たるを知るべし。

國民主義の一例を考へて見ても、結局は、人間の本性に理解と同情とを有する、しかしながら其奴隷とならずして、却つてその支配者となる所に、それに對する吾人の理想的態度は存する。國民の生活が、過半乃至大部分は、文化的にも經濟的にも自給であつた當時に於ては、外人を夷狄視する事に大いなる道德的過失はなかつた。けれども、思想界を内察し、實際界を外匝して、今日の國民的生活は、必ずしも政治的境界内に起始し、發源し、若しくはまた政治的内境界に終着し、宗朝するとは限らない。イブセンに觸發された我が文壇の一角もある。トルストイに生命の泉を汲む邦人もある。科學の世界は、藝術思想の世界よりも、更に一層國民的障壁を超躍す。引力の法則を披發したのは、英のニウトンの手であつたには違ひないが、披發された法則は、獨にも露にも一樣に當て嵌まる如くに、凡そ科學者の功績は、太陽が、緯度の高低に應じて厚薄の照らしわけをするほどの偏頗もなし。耶蘇の眞友が佛敎國にあらうとも、釋迦の憧憬者が歐米の中央に現はれやうが、なんらの不思議もなきと同理なり。經濟生活を轉訪して、最近の進潮に屬する保護國産主義をほかにしては、貿易のをさは、そが織る經緯よりも繁からんとす。産業界の超人は、原料と製品とを、直接に世界市場に呑吐する。軍人も、記者も、農民も、志士政治家も、浪人書生も、多少舶來品、模製物の消費者なり。光源は世界にある。列國と、列國の各人とは、大小精粗の水晶塊の如きかな。外力のまに／＼割るべからざる單元ではあらう。け

れども、世界を反映するほかに、示すべき自己を有せず。しかしながら水晶は多角なり。多角にして個性の天分豊きものが、最も要するところのものは機會である。聾者揃ひの村に生活する樂人は、いかにしてその天分を發揮することができるか。盲者揃ひの町に生存する畫家は、いかにしてその畫才を伸展することができるか。村よりも郡、郡よりも縣、縣よりも國、また場合によつては田舍よりも都會が、能力に自信を有する男女のしば／＼選ぶ舞臺となるわけは、機會が多いからである。村で發見されない能力も、東京なら發見されうも知れず、丁度その通りに、一國內に於ては發見されない能力も、世界の大舞臺に出たら認識される機會に遭遇するかも知れぬ。英雄英雄を知る譬へもある。迷霧の間に活きざるを得ざる鵬は不幸なるかな。地球の全面を見渡して一時に幾何の人口がある。それ位を友人として持て餘す個性であつてはならぬ。人は知己を欲す。知己は能力發展の機會を意味する。知己を國內に限るべき理由はない。何となれば國家は、言語、血液、風俗習慣、歷史及び地域の共通を便宜として、構成せられたる政治的團結である。個々人の品性能力を條件として出來た協力形式ではない。人間の協力の一形式であつて、唯一形式ではあり得ない。唯一形式でないものが、唯一形式であるかの如き行動をしてよい筈がない。人としては機會を世界に求むべし。國は人の結成である。機會を世界に求むる個人の結成たる國家にして、始めて存在の保證が立つ。國家を、內に個性を壓迫し、外にまた他族の個性を蹂躙する具とせんこと思ひも寄らず。國家は、內外にむかつて、個性に、その發展の機會を與ふる人爲的一大方法である。この智識なくして國を經營する者は、この智識あつて國を經營する者のために隷屬の民とされん。隷屬に値ひするからである。何人か、自己のためのみを圖り、他をば犧牲とする用意のみしてをる現實の强者の支配下に生くることを好まんや。寸鐵の生ずるをも待たずして、謀反するのが人間の意氣地である。道德人は國民人に裏切つて、斯かる場合には謀反者に肩を持たうも知れず。個性が不斷の目的であつて、宇宙そのものが、況んやその內の萬物

は、悉くその手段たるの眞理に一毫の不明點もあるべからず。個性は宇宙の代表である。特殊の位置に於ける宇宙が即ち個性である。宇宙は自覺體である。その代表的意義を有する個性は、自覺的宇宙を代表する個自覺體である。この樣な事を言うては空理に墜から。正直な常識に愬へて見て、個性が生活の道德的原則である事の論證は萬様に可能。言語も血液も、個性の要素たるには洩れまい。しかしながら、個性の核心は、言ふまでもなく道德である。聰明である。趣味である。判斷力である。決行能である。良心が即ち個性である。感情と意思と智識とが即ち個性である。國籍と民族とを問ふ前に、吾人は相手の感情と意思と智識とを問はざるべからず。華士族平民といふ族籍を聞いて、始めて相手を侮蔑したり卑下したりする人があるならば、その人は道德界の賊である如く、國籍民族を聞いた以上には、黒い相手をも白く塗り、白い相手をも黒く塗らねば愛國を正義でないと心得る者があるならば、彼れもまた道德界の外道である。文野諸國諸民族を通覽して、道德人の屛息せること一に何ぞ甚だしきや。世を擧げて、國民人と、階級人の跳梁跋扈しつつある現狀である。個性の尊重者は、殆ど絶無に近い。憂ふべき事實でないか。自覺の缺損を意味するからである。天才を擲きながら、凡才を發揮しつつあるのが現代の各人である。各人に個性あり。その個性は、各人が實現しつつある生活よりも高價なものである。私は世の謂はゆる革命を理想としない。けれども、世の謂はゆる革命を避くるの唯一の途は、道德的革命を興こすにある。現代についていふならば、國民人と階級人とに反抗して、道德人の勢力を糾合して、普遍的革命を興こすにある。破壞的革命を避くる。これが唯一の方途である。暴力の革命はいやしむべし。しかしながら、暴力に支配せられる聰明と正善とは、しばらくも安住すべからざる地獄である。革命を避け、進歩を貴にし、國を強大にするために、吾人は個性主義の福音に聽かざるべからず。個性主義は消極的であつてはならない。個性原則が成長だからである。他の成長を助ける自己になることが、個性主義の憲法である。國としても勿論さうである。隣國、他

國、世界列國の必要と能力に對して、その必要に滿足を與へ、その能力に機會を供給する因となることが、唯一の正當の國策である。侵略的帝國主義は、個性に開眼せざる自主義である。しかしながら、他の侵略的帝國主義に機會を供給する如き聖人主義は、恐らくは無上の罪惡である。防ぐ最上法は攻めるにあるといふにさへも多少の暗示的眞理ある人の世である。聖志あるべし。けれども、その志が聖である程度に正比例して、その人の手は英雄的である必要を生ずる。英雄の手なき聖人の志は、天女の如き美質が、騎士を擁せずして惡魔の群に舞ひ下がる以上の危險である。人は多少理性の動物たることを、自省して他察すべし。第三者同志の間の關係に對して、人は理性の信者たることを忘るべからず、沒利害の爭鬪を見物して、理性の衝動を感じない惡人は古來ない。觀劇の心理を參照すべし。人は甚だしく欲望の支配下に生息す。商業の過半は欲望の功績かも知れぬ。恐怖は欲望の半面なり。法律と普通道徳とは、この心理を利用した部分が大である。宗教までも、或は、宗教こそは殊更にさうである。骨肉、親族、朋友に對する吾人の心事を靜觀すれば、人は情愛のしもべなるかな。人の營む國家である。國際間の倫理が個人間の倫理と異曲同工なるは言を俟たず。責任觀念が、自國の人工を分母にしたる一となるだけ、手放しに欲望と情愛とが理性を壓殺する場合多きたけの差別しかない位の比較になる。聖志は理性を準繩とす。自己の個性に、理性を準繩としての積極的統一を實現することが先務である。けれども、自給策には、生活のどの方面に於ても制限あり。他の情愛と、理性と、欲望と恐怖とを、理性を中心にして支配することが、個人策としての如く國策として必要である。欲に勝つには大欲を以てするにしかず、恐れを制するには、それ以上の恐れを面前に差し向くるを手段とす。情愛も理性も、それ〴〵に、同質ならば優量なるべし、成るべくは優質優量を以てこれに臨むべきなり。量を犠牲にしての質と、質を犠牲にしての量と、共に生活の主義でない。米英人、支那朝鮮人、露獨人の經濟力と兵力を知るよりも、その人間の

本性を、內側から轉翻する智見と意思と、感情的要求となくんば、國策は急湍に描ける文字よりも短命ならん。言語異なれば意思の疏通を缺く。血緣近ければ、情愛生じ易き場合もあらん。歷史を共有すれば、難阨相助の記憶に縛らる。風俗習慣を異にしては、會食の度數も少なからう。地域遠隔とあつては、火災の急にも馳せ赴くこと能はず。血の別、言葉の相違、歷史の異、今日の如くにして、また交通機關の發達の幼稚なること今日の如くにして、俄かに國際主義の直接全現を望まんは、不可能を望む輩に座す。しかしながら、個性は機會を理想とす。帝國民にして、道德智能に自信あらば、建國の祖の英志を、今日相當の規模に發揚して、あすをも待たず、世界を一家一村に收縮する常識なかるべからず。列國諸民の各個性に、充分の機會を供給する英雄は、現存せる、窮屈なる國家組織、國際關係の中からこそ出でねばならね。英雄は各人の個性に雌伏してをる。その英雄が雄起して、高蹈飛躍するために、音樂もいらう、詩もいらう、世界再造の序曲が、この一文の趣意である。英雄と聖人とは、餘りに久しく離婚したり。兩者の自由意思によつて、熱烈なる戀愛と抱擁とが、この序曲を機會として兩者の間に成立せよ。個性の解放、事何ぞ容易ならんや。何となれば、個性の解放は、個性の組織を意味するからである。聖人と英雄と抱擁して、そこに始めて、われらが希望する新世界秩序は產まれん。

急進思想家の陥穽

中澤臨川

ラツセルの新著『自由への道』を讀んで行くうちに、特に我等の注意を牽くのは、彼がその中で全體の著述の主旨とは餘り關係の深くないマルクス對バクーニンの一生を通じての爭ひを丹念に描いてゐることである。彼はこの事件に對して何かしら隱れた好奇心を有してゐるやうにも見える。事實を平淡に叙述してゐるうちにも、バクーニンに對する同情が優つてゐるのは明らかである。

それはなぜであらうか。之に對する私の見方は簡單である。素質と周圍の境遇とがマルクスとバクーニンでは全く違つてゐた。前者は猶太人の子であつて、然も當時官憲の壓迫がこの種屬の上に至て殘酷であつたトリエル市に生れた。血と生ひ立ちとのかやうな關係がその人の上に及ぼす影響は知るべきである。然るに後者は貴族の子であつて、若いころから何不足なく素直に育て上げられた身分であつた。マルクスには何となくひねくれたところがあり、冷酷で復讐ずきで、憎惡の念が先きに立つのに對して、バクーニンは長い牢獄と放浪との生活にも拘らず、一生坊ちやんらしい性格を支持してゐた。(彼の後繼者クロポトキンが矢張さうであつた)。英國の古い名門の出であり、伯の榮號の所持者であり、その前半生を學問の研究に沒頭し盡したラツセルが、氣質の上からいつてバクーニンの同情者であることとは自明の理である。

かやうな想像を起縁として、わたくしは急進思想家の生涯・之に對する危險な誘惑と陥穽、思想家の生ひ立ちと思想との關係などいふ事柄に考へ及んだ。

頑固な因習とその因習を保護する爲めに出來上つてゐる十重二十重の社會制度との間に生れ落ちた人間が、それに反對する急進思想を懐いて、世の中を敵として立つといふことは、餘程困難でもあり且つ危險な仕事である。それには第一に異常な素質が必要だ。眞理の欲求それ自らが既う誰でも持つて生れる上

いんだな性質ではない。お互は時代の通り物であるところの思想なり感情なりを素直に受け入れて、無爲に安易にこの世を過ごすといふのが落ちだ。偶まには平安に馴れた心の奧からも小さな懷疑が芽を吹いて、自身達の身邊を圍繞する虛僞、不正義を恨んだり憤つたりする場合があるにしても、かの大袈裟な社會組織の重い車輪の廻轉を妨げようなどといふ大それた考がどこから出ようぞ。かやうな一瞬間の懷疑それ自らでさへが、既に我等の優華な社交觀念や暖かい家庭思想と相添はないのである。

自由な思想はア・プリオリに破壞的であり、無政府的である。思想の前には制度もなく習慣もなく特權もない。されば人は眞理を恐れる――何物にも増して、或る場合には死よりも。眞理の現はす僞らざる實在の本相は我等が傍目から想像する如しいものではない。寧ろそれは多くの場合冷索で、醜惡で、苦慘の相を伴つてゐる。實相の野には冷たい風が吹き暴れる。その野々旅する者のどれだけ難澁であるかといふことは昔からの尊とい書物に綴られてある。基督でさへも死ぬまで疑つたではないか。十字架の上では、彼でさへ心弱くなり「父よ父よ、なぜあなたは私を見捨て給ふぞ」と言つてゐるではないか。

眞理の探求者――急進思想家の第一歩は世間と戰ふことである。彼は時代の因習、偏見、迷信、不正義、横暴、掠奪、そのほか凡ての罪惡を敵に廻して生涯の苦戰を戰はねばならぬ。彼は歴史の汚濁に生じた荒土に鍬向けして、その沼をほさねばならぬ。山のやうに積まれた重い鑛屑の中から眞理の黄金をより分けねばならない。彼にとつては幸福は及ぶべくもない。彼は一般者の爲めに自己を犧牲にした悲壯生活を營まねばならぬ。彼はそれに對して僅かに酬ひられることもあるが、然し普通には全く酬はれない生涯を覺悟せねばならぬ。彼はイプセンの『ブランド』の主人公のやうに、一見は冷酷なイゴイストと見へる態度を採つて、親愛なるべき妻子眷族をも泣かせ、自分は扱役の悲劇へ突進せねばならぬ。

然かしたつた之だけが彼等の遁過すべき運命であると思ふならば、それは急進思想家の心理を侮蔑したものである。彼等の中に燃える正義の念が充分強く、彼等の眞理慾が長い試錬にめげないほど根深いものであるならば、我等には堪えがたく見えるかやうな困苦も、彼等は案外平氣で押通してゐる。外からの迫害は却て彼等を勇氣附けることとさへある。バクーニンやクロポトキンが爵位と財産とを棄てて長い牢獄と放浪との生活に甘んじた如き、マルクスがその異常な才能を出世の道具に使はずして赤貧な異郷生活を押通した如き、さうした苦勞をば彼等は笑つて退けたかに見える。

彼等の忍ばなければならない一番困難な仕事は、外部からの迫害でもなければ、彼等自身の利益に關はる事でもない。それは彼等の内に潜むいろ／＼な魔を征服することである。その第一は彼等の當然の運命なるべき恐ろしい孤獨と、自己の命よりも大事な思想に對して時々その無力を暗示する絶望とである。

「お前は淋しくはないか。お前はそんな無益な生活をしてゐてどう成ると思ふのだ。お前の突飛な思想がいつになつたら實を結ぶ時が來ると思つてゐるのだ。それは馬鹿げた空想だ。世の中は今在るが儘よりほかに成るものでない。運命の重い車輪をお前のやうに孤獨で無力な者が動かさうと考へるほど大それた事はない。お前の生活を見よ。お前は淋しくはないか。一人ぼつちで物好きに社會の埒の外に立つお前は餘ほどの間抜け者だ。それ、皆んながお前を見て笑つてゐる。お前の妻子までがお前を狂人扱ひにしてゐる。然し彼等は眞底からお前を憐んで泣いてゐる。さあ來い、ここへ來い。さうすれば皆んながお前の友達だ、親切な話相手だ。お前は淋しくはないか、お前は自分の無力に氣が附かないのか。お前ももういゝ齢ではないか……
……………」。

サンチカリストのソレルは老來かやうな魔にかゝつてころりと倒された——懷疑を生命とした彼の一生ではあつたが。一九一〇年十二月、伊太利サンチカリスト會議に招かれた彼はそれを斷はつた。彼はその時から言つた。自分はもう老年で、遠い希望に生きるには不向だ。それで自分は今日の佛蘭西の青年を動かしてゐる重要問題(國民主義)の研究に餘生を費すつもりだと。

孤獨の寂寥と無力の絶望——それにも増して急進思想家をれる恐ろしい魔がある。それは人間の心理のうちでも最も深そしてデリケートな現象で、必ず貴い犠牲者を出さねば已まない人間性の根本的矛盾を示すものである。

彼が誠實な人であればあるほど、彼が彼自らの信念に篤い人であればあるほど、その人は自分の眞理を重んずる。彼は何物を犠牲にしてもその眞理を汚されまいとする。であるから、彼の信念の深ければ深いほど、その人は自ら守ることが堅くなり狹くなり、他に對することが嚴しくなり、容赦できなくなる。然るにまた一方から見れば、かやうな人は人一倍に誠實であり、より敏感であり、より情け深い素質を有してゐるのであるから、世の中に反對した說を支持するには非常な努力が要る。憐憫は彼の第一の敵であるのに、彼は彼の内に多分の憐憫を抱いてゐる。かやうな矛盾はトルストイの一生によく現はれてゐる。彼は口を極めて敵を攻撃することがあるかと思へば、

心弱い時には昨日の敵をも忘れて誰でも許さうとする。思想家のかうした矛盾が屢ば彼等を導く先きは、冷笑か、殘忍か、さうでなければ憐憫の奴隷となつて自分に絶望の刄を向けることである。我等は有爲の人才が冷笑に隱れた世捨人となり、又は殘忍燥狂な怒號者となり、又は捨てばちの絶望者となる例を見せつけられなんだか。之に就てニーチエは次のやうに言つてゐる。

高き人々、常人と違つた心を持つ人々の墮落敗滅は一種の常則である。我等の眼前にかやうな常則を見なければならないといふことは實に恐ろしい事である。或る心理家がかうした材料の損失を發見し、歷史の中に高き人の全き「不治」、文字通りの「最早及ばず」を覺つたとき、彼も亦自身の未來に對して絶望的反逆的になり、遂に彼自身を滅ぼし、自らも一の消耗した材料となるであらう。

ニーチェはそれに對し、思想家が自らの信念を守る爲めの必要な武器として「冷酷」の德を教え、「假面」の必要を述べてゐるが、それは實際彼自らの場合から割出した眞理であつた。彼は言つた、一の價値の創造者は人一倍冷酷でなければならぬ。ダイアモンドの樣に、彫刻家の鑿のやうに、堅くなければならぬ、それでなければ彼は自分の意志の爲に運命の岩を碎いて自畫像を造るわけにいかない。彼が新價値の製作者たらうとするならば、未來の人道に或る型を押し附ける望を有するならば、彼の意志を黒鐵よりも堅く鍛へなければならないと。

かやうな理由から、一の思想家の思想が急進的であればあるほど、それに對する彼の信念が强ければ强いほど、彼の思想は無意識的により狹くなり、より險はしくなり、彼の外に對する態度はより冷酷になり、より峻嚴になるのは已むをえない道行である。それは彼を護る保護色である。然しそれはまた彼の生涯を狹くし、彼の說をして無邪氣に受け入れがたいものにする陥穽でもある。

老ハイネはラザリイに送つた手紙の中で斯う言つた、「不遜なといふ事は貴兄にして初めて許さるべき行爲で、世人は唯だこの聖なる特權を侵害してゐるのである」と。さうだ、「不遜なといふ聖なる特權」(さすがに詩人は旨いことを言つた)は急進思想家に對して、或る程度までは我等の認めなければならない事實である。ニーチェ自らも然り、彼がツアラツストアにも洩らした高慢な「假面」にしてが、矢張同樣である。多年の牢獄生活に老ひて骨と皮ばかりになつたバクーニンは、自分の憎惡の念が消耗し、自分の反逆的感情が薄らぐことを第一に警戒した。彼それは不義の敵を許し、自分の運命に降服するやうになるのを怖

れたからである。

急進思想家をして殘酷、憎惡などの作爲に陷らしめるもう一つの傾向がある。彼が當然その理想なる擴大鏡を用ゐて見るであらうところの世相は、善惡の區別の判然と別れたものでなければならぬ。そこで彼の劇しい正義觀は、その善の部に對して思ひきり寛大であると共に、その惡の部に對して思ひきり峻嚴であるであらう。彼はどれだけの用意を拂つても憎惡の情を隱しえないであらう。彼の思想が長くその熱を保つためには、無意識に彼はその憎惡を高める必要にさへ驅られるであらう。不用意な場合には彼の内奧に潛む獸性が手傳つて、彼は自分でさへ驚くほどの獰猛を現はすであらう。

急進思想家の已むをえない陷穽――その冷酷、その憎惡、或る場合にはその獰猛――を理解する爲めに、わたくしは長い說明を發した。然しそれは決して無駄ではない。私たちが偉大な思想家に對して屢々輕はずみにする失望は、思想家の心に内在するサブトルな心理、その矛盾、を會得しないところから來る無同情の失敗である。

一つの例をトルストイにとつて見よう。彼は極端な社會主義嫌ひであつた。彼と時代を同じくした露西亞の革命黨員に對して彼の採つた態度がどれだけ冷酷であつたかは、ちよつと豫想のつかないほどである。彼は生來自我の強い人で、人と携へて事を與にするといふことの能きない者であつた。彼が革命黨員を嫌つた表面の理由は、彼等が彼の毛嫌ひした科學の信者であつたといふ事に歸する。彼等に對する彼の罵詈は隨分極端なものであつた。彼の眼に映つた當時の革命黨員は、心の貧弱な「知識」一方の徒であつて、理想をば愛しうるが人間を愛することの能きない手合であつた。『復活』に出てくる同黨の首領ノボトロポフは、虛榮心と自我心とが强過ぎた爲めに、生來の賢明な性質を失くして了つて、想像の泉をも枯らし盡し、「貴い懷疑の源である道德的及審美的情緒の皆無」まで行つたとしてある。

然しこの判斷は明らかに間違つてゐた。前世紀の六十年代に露西亞の青年間に起つた「平民の中へ」の運動ほど純で犧牲心に富んだものはなかつた。幾千の青年男女は彼等の富んだ家庭を去つて、殆んどたゞの勞働者と異らない生活に就いた。で、その一生を平民の爲めに捧げた。同じ頃トルストイが莫斯科の細民窟を視察した結果發揚したといふ同一の動機が、彼等をして彼と同一の歸着點へ行かしめたのである。トルストイがそれを知らない筈がない。それを知り乍ら彼が彼等に對して非常な憎しみを覺えたといふことは、常人には直ちに解しがたい心理である。なぜ彼はさう殘酷であつたのか。なぜ彼は志を同うする

同胞に對して敬意を拂ふ代りに罵詈を以てしたのか。

そこが私の所謂急進思想家の掛る陷穽である。彼が殘酷であり偏狹であるのは、或る程度までは已むをえない人間性の缺陷である。それは彼の生命を防禦する保護色である。殊に彼の信念の厚ければ厚いほど、彼は自說を重くみるために、偶々自分の同類らしい者が少しでも自分の考と違つた考を懷くとすると、恰もその者が內部からの反謀者のやうに見えて、とても彼は寬容でありえないのである。

トルストイが當時の革命黨員を反謀人扱ひにしたやうに、當時の革命黨員は自分たちの同情者であるところの老大家ツルゲーネフを反謀人扱ひにした。それは彼が『親と子』の中で描いたバザロフが生溫るいといふだけの理由によつてである。それと同じ理由がマルクスとバクーニンとをして一生の爭をさした。

マルクスに至つては、トルストイにも增した偏狹家の一例である。彼は當時の中流階級に對して、殆んど生れ乍らの敵であるかの如き憎惡を燃やした。彼がどれだけ資本家階級を憎んだかといふことは、科學の名の下に隱れた彼の著作が、「仕拂はれざる勞働」であるとか、「勞働の掠奪」であるとか、「剩餘價値」で、あるとか、「階級鬪爭」であるとか、「大變革」であるとかいふ恐ろしい詞で殆んど紙面を充たされてゐるのを見てもわかる。『資本論』の動機には科學的好奇心よりも社會的正義——寧ろ資本家に對する憎惡——が先に立つてゐるのである。それでなければ、あれだけ劇しい憤怒と苦がい諷刺とが表てに現はれる筈はない。浩瀚なる『資本論』三卷が我等に教へるところは、畢竟するに資本家と稱する階級は一種の盜賊により、仕拂はれざる勞働の上に遊食する憎むべき徒らであるといふ一事に過ぎぬ。

マルクスの憎惡は決して資本家に對する時ばかりでなかつた。より柔らかでない罵詈が當時の知識階級にも向けられた。彼の先代の社會主義者や、彼の論敵やを、彼は糞味噌に貶なしつけた。彼は「正義、人道、自由」などの叫びを實現されない夢だと罵り、「宗教は人民の阿片だ」と嘲けり、プルードンは「無恥」、誰の說は「夢魔の巣」、誰々は「ブールジョア理智」の持主、誰々は「俗惡經濟家」といふ風に片付けた。彼は時折その論敵に對して議論を鬪はす代りに、口汚なく卑下して了ふことさへあつた。俺の說は六ケ敷いぞと高飛車にでるのが彼の策であつた。(今でもその策で『資本論』を振り廻して世間をおどしてゐる學者がある。ヘーゲル式の辯證法と中途半端な代數式とで)。

堺利彥氏の書いたものゝ中に、コローン市の或る大會に出席した一青年がマルクスの態度を批評した文章が載つてゐる。「然

し私は彼ほど傲岸な頑其な人物を見た事がない。彼は自分の意と違つた發言には一顧だも與へなかつた。苟くも彼に反對する者は悉く輕蔑擯斥を蒙り、苟くも彼の好まざる議論は無智無學として嘲弄され、又その提出の動機を口ぎたなく罵詈された」と

バクーニンに對するマルクスの態度はとりわけ酷烈を極めた一八四八年の『新ライン新聞』は何も知らない女小說家ジョージ・サンまでだしに使つて、バクーニンの事を露西亞大使の密探だと書いた。次で一八六九年の萬國勞働大會の折にも、會議が二派に分れて紛擾した揚句、亦々バクーニンの密探說がマルクス派から持出された。當時マルックスは共友に宛てゝ、バクーニンがパン・スラブ黨から一ケ年二萬五千フラン宛の手當を受けてゐるといふ事を誠としやかに書いた。かうした風說は確かにマルクス派の惡意から出たものか、さうでなくともほんの取り止めのない噂を惡用したものであつた。一八七二年の大會では、マルクス派の詐計によつて、バクーニンはとう／＼共れへ出席することが能きなんだ。

バクーニンはマルクスを評してかう言つてゐる——

獨逸人ども、職人ども、ボルンステッド、マルクス、エンゲルス——特にマルクス——が例の惡戯を企らみながら此地にゐる。虛榮、惛惡、陰げ口、學理的尊大、實行的卑怯、——生命行爲、實興などといふ事を考へてゐる自に、その實生命、行爲、實素などの全く缺けた生活を營り作ら——文學的並びに論理的職工どもが、「ホイエルベツヘは紳士閥だ」などと言つて、厭味たらしく自分に諂らつてゐる。彼等の間でこの「紳士閥」といふ詞は通り文句になつてゐて、飽々するほど繰返される。その癖、何奴も頭から脚まで、てんきり川合紳士だ。一言でいへば、嘘つきでたはけ、たはけで嘘つきだ。こんな仲間にゐて自由な思ふ存分な呼吸をしようたつて無理な話だ。それで俺は彼奴等から遠ざかつてゐる。そして斷然かう宣言した、俺はあの職工どもの共產組合へは這入らん、何事にも關係しないと。

私は決してマルクスを貶する爲めに是等の事實を擧げてゐのではない。然しこれ等の偽らざる事實は、誰が見ても——よしんば彼の學說に傾倒してゐる人々が見ても——驚き怪まざるを得ないほど、そして反感を催さざるをえないほど、明らかに惡意をさへ包藏してゐる。私は之あるが爲めに、急進思想家の冷酷、偏狹、惛惡などを辯護しうるだけ辯護したいと考へて、この文章を書いたのである。これの前半は私はマルクスに對す心持で書いた。然しどれだけの辯護と差引とにも拘らず、マル

クスの性格には救ふことのできない缺點があるやうに思ふ。それが彼の主張を狹くし、世の同情を失はしめ、永く彼の主義に惡性の「憎惡」を附き纏はしめた基であらう。ジョーレスがドレフュースを辯護した折などは、何も社會主義者が紳士階級の事件に携はる必要はないといふ議論さへ起つたくらひである。今日、社會主義者といへば、どの國でも偏狹で、固陋で、議論好きで、仲間揉めがし同士打ちが行はれ、或る場合には陰鬱で、一友を賣ることさへしかねぬやうに、世間から思ひ做されてゐるのは、一つはマルクスの蒔いた罪でゞあらう。私はかへすがへすもそれを惜しいと思つてゐる。

政機轉換の際にも立憲の常道を誤るな

文學博士　三宅雪嶺

（一）

內閣の更迭は豫想の事件よりも突發の事件を以てする形がある。豫想されたことは內閣でも準備が出來、困難から免れる。思はぬ出來事で大騷ぎとなり、首相が何等かの名義で辭表捧呈の餘儀なきに立至つたりする。原內閣が何時如何に斃れるか、豫め知るべきでなく、今は內閣側に於て二通りに考へて居る。一つは內閣存續の期間が平均二年であつて、餘り長引いては民心が倦み、施政上に便宜を失ふ、大抵の處で時機を見計らひ、總辭職するに如くはないとする事、今一つは內閣でも短い期間で成績を擧げる事難しく、英國でも近來存續の期間が長くなり、アスクイスでもロイド・ジョージでも相應に長い。米國は大統領選擧と共に四年間に定めて置く。せめて四五年位續かなくては思はしい仕事を爲し難いとする事。此二つが何れに傾くか判らんが、先づ第一を餘儀ない事として諦め、第二に希望を賭して居らう。今のところ明後年の總選擧まで續かねばならぬ事にして居る。三年になつては民心の倦むは姑く措き、官僚派に於て何とか動き出す事になる。樞密院及び貴族院に不穩の雲が漂ふようになる。官僚と云つても山縣公が中心であり、其中心を

失ふの時、何等かの變化の起くべからざる勢であるが、何にしても今の狀態では、二年も過ぎれば大抵にして退くが可からうといふやうな事になり、仍ほ强ひて居据らうとすれば、貴族院で直接又は間接に妨害をする。貴族院は一切私情を挾まずと云つて眞綿で首を括り始める。これまで其例が幾許（いくら）もあり、今後も多少其懸念がある。ところが以前と事情の違ふのは、前に兩院對等を振翳し、內閣は衆議院のみを以て立つべきものでなく、之と同じく貴族院を重んぜねばならぬ。衆議院を以て立つ事を許すならば、貴族院を以て立つ事をも許すべきであるとし、所謂官僚內閣を組織したりしたが、貴族院に據つて立つ官僚內閣も、衆議院の多數を無視し得ない事が次第に知れ來り、寺內內閣も政友會と諒解するの必要を感じた。衆議院に多數を得ても貴族院の多數を失ふては對議會策に躓き、存續し難くなるが、それならば兩院を平等に視、貴族院內閣と衆議院內閣とを交代させても差支へないか。前に此例無いではなく、大隈內閣に次いで寺內內閣が成り、更に原內閣が起つたなど、之を示して居る。寺內內閣は政友會と妥協したが、大隈內閣は官僚と妥協し、原內閣も官僚と妥協し、何と云ふても妥協せずに居れぬ。一應兩院を平等に視て然るべきであると云へさうである。

（二）

けれども其平等は議案の討議に關しての事であつて、內閣の基礎となるに於て平等たるを意味するものでない。內閣は大命を以て組織せらるのであるが、成るべく國民と密接の關係あり、國民的內閣と稱すべきものたるを要する。國民の輿論といふ點に於て貴族院は主體を形造らず、參考たるに過ぎぬ。世襲的議員及び勅選は殆ど全く代表する所ないと云ふべきであり、互選議員は約千人を代表する。之に比べれば衆議院議員は改正選擧法でも三百萬に足らぬ選擧人に推されるものであるが、比較的多く國民の意を表明するといふべきであり、他の幾千萬は今こそ選擧權なけれ、漸次廣きに及ぼすべきに定まつて居り、少くも精神に於て衆議院は國民を代表するの跡形がある。四年毎に改選するのも民意の變遷を知るが爲めである。貴族院に終身議員あるのは、最初より民意と沒交涉なるべきを豫定したのに因る。議論は眞實を旨とすべきであつて、少數必ずしも誤らず、多數必ずしも正しくない。一人で幾千萬人に比敵すと云ふべきを假定し得られる。議會で兩院を設け同等の權限で議論するのは宜しい。貴族院で衆議院の決議の謬れる事を指摘しと一再でない。蓋し將來は格別、今のところ貴族院は議場に於て衆議院と平等たるべき權利あり、必要ありと云へる。貴族院は議場に於て衆議院に一歩も讓らず、苟くも謬れりと見れば何處

までも駁撃すべきである。けれども元と議論する爲めに貴族院が置かれたものであつて、何を代表するといふこと無く、强ひて擧げれば僅かの人に過ぎぬ。國政に何の變動があつても、貴族院議員は之と無關係で過ぎて行かれる。衆議院議員は四年に能く選擧區民の心を得るか否かに就て苦心慘憺、爲めに家を喪ひ、或は病んで歿したりする。貴族院の互選議員も相當に競爭するが衆議院と比較にならぬ。勅選議員なんか煙草を燻かして議員競爭を傍觀し、演劇を觀ると同じに心得て居る。何故に衆議院議員が選擧毎に七顚八倒せねばならぬか、種々の事情があり、話しにならぬ事もあれど、結局四年後尙ほ選擧區を代表するの資格あるを要ふるのである。今のところ比較的國民の多數を代表するのは衆議院議員と云はねばならぬ。普通選擧の聲は一層其代表の實を擧げようとするに外ならぬ。兎も角も衆議院議員は國民を代表すべき者になつて居り、貴族院に如何なる偉人があるにしても、國民を代表すべき相當の手續きを經て居らぬ。實際衆議院の多數を統率する者よりも智能德器の具つても、國民を代表すると云ひ難き事、尙ほ或る教育家又は宗教家の如しである。

（三）

內閣が政黨を基礎とすべき事が云ひ來つたが、政黨は隨分弊があり、之を基礎としてよいかと疑はれる。けれども衆議院に多數を制し得るか得ぬかは、之を他にして知りようがない。內閣が政黨內閣たるを要すとする事、つまり國民の代表を基礎とするを要するからであつて、政黨が無ければ夫れまでの事、既に存在し、剩へ相當の經歷あるに於ては、之を基礎とすること比較的鞏固なる內閣を造るの途である。貴族院に立派な人物があつても、夫れで鞏固なる內閣を作り得るものと云へぬ。夫れ程立派な人物がなければ尙更らの事とする。前にも衆議院の有象無象などに國政を託すべきでないとして、樞密院及び貴族院より人物を選拔し內閣を組織した事があるが、いよ〳〵成立したのを見れば、何等感心すべきものでなく、關係者自ら省みて氣耻しく感じたらう。原內閣は賞すべき事無いにしても、貴族院を基礎にした內閣と何れ優劣つて居るか。今は政黨內閣も餘り心配して程のものでないと分つたらう。絕えず黨勢擴張の爲めに惡い事を爲るけれど、考へて見れば官僚も立派な口を利けたものでもなからう。原內閣の後に何內閣が成るか。官僚の方で寺內內閣の如く、貴族院に據り政友會と妥協したものを造らうとの意があり、政友會中又之を考へて居るのがある。然し貴族院既に解散無く、衆議院が常に政府黨多しと成つては、かゝる內閣更迭は國政を私するものと見ねばならぬ。議論は

兩院を平等とし、國政の衝に當る者は衆議院を基礎とするのが順當である。官僚も政友會も種々の事情あらうが、世界の對轉の急なる今日、かゝる事情に絡まつて居るべきではない。今は殆ど事毎に遲れ過ぎて居る。米國より歸り來たるものが every-thing too slow. といふのは酷に失して居らぬ。選擧法の如きも明かに其一例に屬する。

（ロ）

夫れは夫れとして内閣更迭の場合、以前の如く元老會議で後始末するなど最早遠慮すべき事である。原内閣は何時迄續くか分らぬが、首相が辭職する際、政友會以外の黨首を候補者として奏薦するのが宜い。貴族院議員と種々の話合ひがあり、研究會又は公正會と離れ難い事あるにしても、其内より首相の後繼者を選定すべきでない。次の首相が之と計かると否とは其自由に屬するし、首相たる者は衆議院に多數を制し又は制すべき政黨の首領たるを必要條件とする。そこで政友會以外に加藤子が憲政會總裁として控へて居り、差當り指を此處に屈すべであるが、何分にも現に少數黨である。多數黨の首領として原氏が首相職に居り、少數黨の首領を後繼者に推すのは内閣更迭の常道と云ひ難い。加藤が内閣を組織し、衆議院で多數に反對せられた時、解散して多數を得るやうに成るかも知れんが、其プロバビリチイーがどれ位であるか。大隈内閣が解散して多數を得たが、大浦氏の如き選擧手段に由つて居る。かゝる事は再びすべきでない。加藤首相亦多數を制するかも知れぬけれども、「かも知れぬ」に程度がある。後繼者を奏薦するに「かも知れぬ」位のところでは申譯がない。と云ふて政友會が政府黨たる以上は、之に代つて多數黨となり得るものがないが、實は今の政友會も眞に多數黨でなく、黨員は百六十數名であり、國民黨及び同情議員を合せて多數を制するのである。政友會以外を合せば優に多數を制するに足り、憲政會で之を成し遂げれば何の批評がない。唯之を成し遂げるのが覺束ない。そこで原首相が後繼者を奏薦する時、曾て伊藤公が大隈及板垣を奏薦した例に倣ひ、加藤及犬養を奏薦すべきである。國民黨は眇たる小政黨、形勢を輕重するに足らぬやうでも、現に政友會は之れと共に過半數を制して居る。新政會及び無所屬を以て過半數を得るけれども、國民黨と共にしても過半數になり、政友會は双方を操つて優勢を占めつゝあるのである。憲政會は政友會より議員少く、國民黨と合せて百五十名に達せぬが、解散後の總選擧に於て現在の政友會の如く成り得るを打算して不可無い。犬養氏が加藤子と共にするを承諾するか何うかは分らず、其處は兩人の心任かせにすべきであつて、離れるならば離れて差支へな

い。原首相に於て其處まで念を入れて考へさへすれば、自ら爲すべき職分を果した事になる。兩人を奏薦し、後一人で内閣組織を伏奏することになつても、それは伏奏者當人の責めである。堂々たる一政黨の首領に對し先の先まで案ずるに及ばぬ。何政黨も一黨を以て多數を制し難く、今日二人を奏薦するのが穩かである。新政會及び無所屬もあり、中に相當の人物もあれど、政黨の形を成して居らぬ。政黨と云へば政友會の外憲政會及び國民黨のみであり、外交調査會は形式上何と規定するにせよ、主として黨首を容れようとしたのである。一政黨として少くても、それ相應の敬意を拂ふを要する。原氏は後繼者を奏薦する場合、自黨以外の二黨の首領を推すのが順當であるまいか。犬養の承諾不承諾が分らぬとし、加藤が内閣を組織し、衆議院で政友會の反對を蒙り、解散して打撃を政友會に與へては、政友會は仇を以て恩に報いられることとなり、かゝる事は政友會の爲すまじき事と思はれるが、原首相にして此の如き態度に出では、今後内閣を組織する者は前の如く總選擧に選擧取締法を惡用するやうな事が無くならう。倘惡用して恩を仇で報ずるやうな事があれば、世間一般が默つて居るまい。然し此邊も更迭の際に豫め黨首會合し互に諒解して置くべきである。政府黨が必ず多數を得ると云ふのは、實に惡例であり、恥辱であつて、取締法の惡用は、今後絶對に廢絶することに決定するを要する。政黨と政黨と相交代するとなれば、衆議院で火花を散らして戰ひつゝ、他に惡感情なくて正當の方法を以て總選擧に多數を得るに努むることにならう。十分に注文通りに行くべくもないが、その傾向を見るであらう。前の事は前の事、内閣更迭の際、原首相に於て此邊に思慮あつて然るべきである。

妥協か改造か日本の將來

マスター・オヴ・アーツ　村田勤

孤立か。協同か。世界の大勢に順ふか。これを逆行するか。或はこれを回避するか。日本の採るべき方針は二者その一を出ないであらう。後者を採ればその結果は孤立退嬰となり、前者を採れば協同進[illegible]となる。孤立退嬰は衰頽を招くこと必定なれ

ば、吾人は大勢順應の方針を採り、ひとへに國運の開拓を謀るべきである。明治維新の危機に際して、我邦には守舊攘夷思想と開國進取思想との劇甚なる軋轢爭鬪があつた。五事の御誓文は開國思想の勝利を證明するものである。しかしこれに由つて保守思想が一掃されたかといふに決してさうでない。この兩思想の爭は五十年來嘗て息止したことがない。一上一下猛烈な奮鬪を續けて今日に及んだのである。フランス人やロシヤ人は極端から極端に走る。即ち電光線狀を呈して進むが、日本の國民性は大にそれと趣を異にして居る。日本人は中庸を愛して極端を惡むが故に、その行動は妥協折衷に終はるを常とする。即ち波線狀を呈して居る。然るに輓近世界の大勢は日本に一大飛躍を強要する有樣である。吾人はその慣用手段たる妥協折衷に由つて、他國民と協同するとができるかどうか。既に我邦の少壯者の中に盛んに傳播しつゝある新思想新主義又其結果としてあらはれ又將にあらはれやうとして居る新運動に對する當局者若くは在野有力者の態度いかにと見るに、畢竟妥協折衷をその基として居る。妥協折衷は圓滑で結構のやうではあるが、要するに不徹底たるを免かれないのである。其所信を貫徹して往くべき所まで往く丈けの勇氣を缺いで居る。吾人は果してこの傳統的慣用手段で出つて今後の國際問題を處理し又國運を指導して行くとができやうか。これ實に吾人の考慮すべき重要問題である。

吾人の生活そのものがはや妥協である。帝都を始め大都市の大通りには巍然たる洋館が聳えて居る。その間に日本造りの家屋が取り交つて居る。これすでに妥協である。洋館其ものも內に入つて見ると日本式であるか、半洋半和のものが多い。私邸になると一部分洋風他は日本式といふのが紳士向邸宅の通則である。日本服は上品で經濟的で其上我邦の氣候にふさはしい服裝である。全く日本風の家屋に適して居る。和服殊に禮裝して汽車や電車に上り下したり、洋風の官廳や會社や工場で活動するには甚だ不向である。況して宮殿內の動きや戰場の進退などに至つては所詮和服でできた仕事でない。その結果外勤には洋服、家居には和服といふ折衷に歸着せざるを得ない。市中や列車電車宴會集會等の場席は兩樣の服裝の混合である。下駄足駄で靴やヅボンを汚損されたり、防水外套で絹衣が濕されたりする不愉快は何時の世にか無くなる時が來やうか。或は永久の妥協であるまいか。甚しきは洋館の入口で靴を脫がせたり、日本家屋に敷ものを敷いて靴のまゝ上らせる處もある。どちらも不徹底至極である。食物についても富豪貴族等は和洋折衷か和洋交替を常として居る。中流以下も無論これを欲するものが多いが懷中との相談が折合はないまゝである。番傘をさして足駄を穿

いて洋服を着た姿は正さしく日本現代の風俗を寫したものであるまいか。滑稽と諷刺の逸品が自らそこに浮んで居るやうに思ふ。又木造ペンキ塗りの洋館こそ我邦現代文明の象徴と見るべきでなからうか。勿論鐵筋コンクリート若くは煉瓦のものもダン／＼殖えて來たが、一方にはまた板ふきや藁屋根の家屋も澤山あるから、總平均はペンキ塗位であらうと思ふのである。

洋裝の紳士淑女が叮嚀にお辭儀をし合つて居るツイその隣りに和服で握手をして居る仲間がある。面白いのは一方で手をさし出さうとするのに、他方で頭を下げたので俄かに氣付いて模様替をしたり、或は和洋兩式共用になる例も亦多く見受ける。同じ會合があるにしても時間通りに正直に出て一時間以上も空費して馬鹿を見ることがあり、タツタ十分遲くれても間が惡かつたり顔を失したりする場合がある。目下のものが少しおくれても嚴しく叱られ怠慢と認められるのに、目上の方は約束の時からは半時間おくれても一時間おくれても堂々と威張つて御臨場だ。流行となればそんな方々からデモクラシイの御講釋を聽かされるから笑止ではないか。要するに禮法も亦妥協折衷的である。兩刀使である。學問教育も素よりこの範圍を脱することができない。漢文も讀め古い國語も分りその上歐洲語の一つ二つもやらなければならぬ。地理歴史も自國は愚か東洋西洋に亘らなければならぬ。その上に數學といふ大きな難關がある。現今青年の負擔は甚だ重い、而して國家は彼等を充分に收容する教育機關を設け得ないのである。左れば私立學校を保護して充分其の補充に心掛けるかといふに、事實はさうでなく、教育官僚主義の方針は依然として動かない。この點では折角の妥協折衷が除外されて居る。昔しに和魂漢才を學者の理想としたが今日では和魂漢文洋才でなければならぬ。しかし國民に高等普通教育を授くるを主旨とする中學卒業生の學問はどうかといふに、何一つ實力の基礎となり得るものがない。國語漢文の力は淺薄であり、又外國語は新聞一枚讀めず、西洋人と交通のできる者も稀である。科によると帝大の卒業生で外人と話したり外國雜誌を自由に參考と爲し得ない人がある。矢張不徹底の誇を免かれ得ないやうに思ふ。

日本の佛教ほど妥協性の豐富なものはあるまい。本地垂跡の說を振り翳はして神道と妥協し、遂には神道を佛龕の中に包含して俗人をして殆どその差別をさへ解するに苦ましめた。兩者の區別をハツキリしたのは維新以後のことである。四百年前ゼスイット教の渡來に對しては、政治的勢力と結合してこれを驅逐した。近代の諸派基督教の傳播に對しては如何攻擊反抗を試みたが、此事所詮不可能と見るや、彼の長を採つて我が短を補

ひ、努めて妥協包容の妙計を弄しつゝある。どれほどまでが宗敎の固有性であり、どれほどまでが我國民性の特徴であるか。その區劃線をどの邊に引くべきかは判斷に迷ふが、兎に角妥協折衷の妙を盡して居ることは著しい事實である。然るに政府の當局者が三度合同などを企てやうとすると、固い頭を四角に振り立てゝ反對するのはお愛嬌でないか。永い〳〵迫害や反抗や戰爭の歴史を有つて居る基督教が、我邦に入つてから、妥協性をあらはした事も、亦看過すべからざる事實である。眞に信念の爲或宗教上の主義の爲に、刑せられたか獄に下されたものは、明治初年の極少數者を除いて、殆ど絶無である。豊臣氏徳川氏時代における殉教者と比べることができないほどである。虎が化して猫となつたのは原づくところ日本國民の妥協性に存するのであらうか。予常に思ふ日本は預言者を容れ得ない國民である。イザヤにしろ、エレミヤにしろ、或はルーテル、カルヴキン、ノックスにせよ、若くはカーライル、トルストイ、カールマルクスにせよ、日本は彼等を寛容してその生を遂げその使命を全ふせしめないであらう。彼等を殺す國民である。二千五百年の永い歴史は此種の偉人を産出しなかつた理由は、主としてその國民性と社會組織にあるのであるまいか。『神を畏るゝことを知つて人の面を恐るゝことを知らない』(ノルトン卿がノックスを評した迄) 英雄は日本に生存する權利を許されない。眞理の探求をこれ念としてその結果一身一家にどんな禍が起らうとも頓着しないといふ學者は警視廳の危險人物である。よし終りには死刑に處したにせよソークラテースをして七十歳の壽を保たしめたアテネ市民は寛容でないか。たとひ磔殺を免かれなかつたにせよ、耶蘇をして一千有餘日侃々諤々持説を吐かしめた猶太人は寛容でないか。不寛容の社會にあつてその生を安んずる道は妥協である。我邦で最も能く成功した學者政治家實業家は總じて妥協性に富んだ人々である。圓轉滑脱臨機應變に妙を得た連中である。下手に馬脚をあらはした輩が折々曲學阿世と呼ばれたり、收賄瀆職罪に問はれるのである。彼等は樹から落ちた猿である。これに反して成功者は爵位人臣を極めて榮耀榮華に暮らし、死後は神に祭られるのである。古くは春日神社から近くは玉盤の伊藤博文公の墳墓がそれである。これらの詐術を崇拜する國民が妥協性を愈よ發揮するのは勿論である。

維新革命は薩長の妥協に由つて成功したのである。土肥二藩も追々その中に包擁されたのである。眞向から尊王倒幕を標榜して起つた連中は大抵非命に倒れた。堂々と開國主義を唱へた象山小楠の如き識見群を抜いた人々も亦然りである。所信を斷行して一直線に進まうふとした老西郷も亦無慘な最後を遂げた

徹底的に西南の亂を平げて容捨したかつた大久保利通も亦斃死を免かれなかつた。明治初年以來交も〳〵組織された內閣悉く妥協の結果である。初めは公卿と士族の妥協、次ぎには藩閥相互の妥協、今では元老と政黨が重要な役割を演ずるやうになつた。現內閣も亦正さに妥協の產物である。だから少しでも重要な事件の解決は大抵暗中妥協の結果と見るべきものが多い。我邦の政體は君主獨裁政治であるか。立憲帝政であるか。理論は別として實際は兩者の妥協であらうと思はれる。米國人や獨國人が我政治をアウトクラシイであるといふのも強ち無理でなからう。帝國憲法はウヰルヘルム二世登位以前のプロイセンの憲法にそつくりである。伊藤公がグナイスト博士から授つた秘傳は即ちそれだ。要するにプロイセンの憲法を地塗として其の上に薄つすらと英國憲法のワニスをかけたものと見るのが適當であるまいか。兎に角大權の萬古不易といふ箇條によりて元老大官等は安心し、參政權の恩賜によつて一時八釜しかつた當時の政論家も鬼の首を取つたやうに悅んだのであつた。朝野目出度妥協して明治廿三年の秋第一議會が開かれたのだ。强者が弱者に對する外交は命令である。古代羅馬の外交、ナポレオン一世全盛期の外交がそれだ。近時列國環視の中に交涉する外交は槪ね互讓妥協である。ブリモス條約が妥協に了り、近くはヴエルサイユ會議の結果も同じく妥協である。特使の行動に關して各派政黨者から種々なる非難を持出し、新聞の社說にも利口さうな注文が出たが、扨その批評者その人を特使の一行に加へ加藤子これを引卒してヴエルサユに往つたとしても、其人達がキツト目覺しい大功を立てゝ歸つて來たらうとは誰も信じ得まい。否加藤子が往つたら大變な不首尾不面目になつたであらう。加藤子外相時代に成つた一九一五年の日支秘密條約二十一箇條の祟りがヴエルサイユで勃發したのである。支那は江戶の敵を長崎で打つ作戰法を用ゐたのだ。彼等は旨く時勢に乘つた。ブリモス談判の時小村侯の代りに伊藤公が出馬されたらどうであつたらうかといふのと、五十步百步であらう。

ヨーロツパの列强は四箇年半に亘る熱血のバプテスマを受け、今や國家社會の大改造に向つて着々步を進めやうとして居る。ペートル大帝以來二百三十年間左しもに堅牢無比と思はれたロマノフ家の專制政治が脆くも三日間の革命によつて粉碎され、一七〇一年以來王國と號し最近四十五年間中歐の覇者たりしホヘンツオレルン家もヨーロツパで一番古い皇帝たりしハプスブルグ家も、一四五三年東方帝國を滅ぼして黑海海峽に新月旗を翻かへし、以來久しくヨーロツパの中原を威壓した土耳古帝國も、續々倒れて復昔日の面目を見ることは出來なからう。[illegible]

英米伊白の如きも、その共和政體なると立憲王政たるとを問はず、內實は駸々として民主主義の軌道を進んで居る。今日の所謂民主主義は寧ろ政體の問題を通り越して社會のあらゆる制度就中經濟組織を民主化しやうとして居るのである。歐米諸國は最早や改良や協調若くは妥協折衷に滿足せず、改造に向つて一大飛躍を試みやうとして居るのだ。惟り我邦のみはこの勢に對して手を拱いて居る譯にゆくだらうか。それが果して維新以來の皇謨に順ふ所以であらうか。久しく我邦の識者有力者が仰いで以て模範と爲し理想とし教師と尊んで居た獨逸就中プロイセン國はいかに。大戰の第二年目第三年目に至るまで獨墺の必勝を信じ且祈つて居つた人の我邦に寡くなかつたのは事實である。今日に於ても或國人は日本を東洋の獨逸と稱し軍國主義者と見て居る。吾人が今後過去の獨逸に倣ふことの愚策たるは智者を待つて後知るを要さない。左れば將に興らうとする社會主義的民主主義の獨逸に倣ふべきか。これ亦不可能であらう。比較的日本と近似した國柄は英伊兩國であるまいか。我邦は今や第二の維新革命を爲すべき秋である。政治の改革に止まらず社會制度の改造を爲すべき機運に遭遇して居る。吾人は大岡育造氏のやうに『歐洲戰爭後世界の中で最も健全な國は日本である。……二千六百年の歷史は民本的進化の痕形である』と樂天的に安心して居ることができない。吾人は徒らに外國に模倣しては ならぬ。しかし大小の外國がそれ〴〵實施しつゝある改革を平氣で看過しては大變である。刻下の日本に大に缺けて居ることは思想上の準備である。ロシヤが良い實例だ。ロシアは多年の虐政の爲に一般人民に何等思想上の訓練が與へられなかつた。無智な農民職工等は僅少の政治家の爲に乘ぜられて過激主義の渦中に飛び込んでしまつた。獨逸人はこの點でロシアと千里の差がある。有力な智識階級があり且一般人民に教育が普及して居る。のみならず獨逸政府は思想言論の自由を許して居つた。一九一四年三月末日の調べによると、帝國內における社會民主黨員は百八萬五千人以上あり、其內婦人が十七萬五千人近くもあつた。一九一二年の獨逸帝國議會議員選擧の投票の三分の一以上が該黨員に投ぜられた。即ち三百九十七人の議員中百十人が同黨員であつた。社會主義者中の碩學カール・マルクスを生んだ獨逸にはさすがに徹底した思想家が多い。萬難を排しつゝ彼の志業を繼承するものが續々輩出する。思想言論の自由を許す點に於ては日本は甚しく獨逸に後れて居る。寧ろロシアの方に近からうと思ふ。獨逸が今日の逆境に處して狼狽せず落膽せず社會の秩序を保ち泰然として將來の方針を立て直さんと努力しつゝあるは、國民に思想上の準備と自制訓練があつたからであ

る。日本は獨逸の外部のみ見倣ふて更に優秀なるその内部的致發を逸したるやの憾みがある。エマーソンのいつた如く『模倣は自殺である』。しかし孤立退嬰も亦國家衰頽の基である。

輓近世界列國の改造期に際して吾人は徒らに妥協折衷を事としてはならぬ。これ牛を割くに鷄刀を以てするのだ。日本は果して世界の大勢に乘じて居るか。將にこれに乘ぜられて居りはせぬか。これに順ふて進んで居るか。寧ろいや應なしに引ずられて往くのではないか。戰後の世界を支配する思潮は何であるか。吾人は須らく先づ現代を理解しなければならぬ。同胞は上下各々若干の利得を獲て目前の物質榮華に醉ふて居るのである。思想も大勢も彼等の目には總て一文の價値がない。しかし世界における最後の捷利者は大勢であり思想であり正義であり眞理である。彼等はスフィンクスの如くその謎を理解し得ない者を滅ぼすであらう。曾て日本に來た外國人の中でラフカヂオ・ヘルン氏(小泉八雲)ほど善く日本を理解し又日本を世界に紹介した人はあるまい。氏は日本心醉者の第一人であつた。氏は日本の家に住ひ、古い型の日本婦人を妻とし、死後佛式で葬られんことを願ふに至つた。來朝後十五年間氏は日本に對して殆ど幻覺の裡に在つて日本を歎美した人のやうにも思はれる。その幻覺から醒めかけた頃、氏は世を去つたのである。氏の最後の筆に成つた『日本』の中にはその一端がほの見える。『國運の前途は暗澹である。その暗黑の中から凶夢が生じて日本を愛する者を折ふし襲ふ。必死の勇氣もて傾瀉された日本のあらゆる努力も、つまるところこの國を、商賈上の經驗に秀でた年功を經た人民の住家と爲すためでなからうか。幾千百哩(マイル)も連なる日本の鐵道や電線、又鑛山や鐵工所、また武器庫や砲兵工廠、また造船所や艦隊も、外資の運用のために整頓されるやうになりはすまいか。日本の立派な陸軍も勇敢な海軍も、政府のいかんとも爲し得ない事情成行の下に、貪婪な或邦々の同盟から挑發され或は攻勢を取るべく餘儀なくされて、勝つ見込のない戰爭に於て、その最後の犧牲を爲すべき運命に立ち至ることがなからうか。かくの如き恐しい夢が屢々日々を愛する者を襲ふのである』。(日本四九七—八頁)日本の歸化人であり心醉者であり又謳歌者であつたヘルン氏の心の奥底から發せられた叫であるから、予はいつも一種畏敬の念に充らてこの一文を讀み味ふのである。しかし氏が左の一句を以て吾人を勵まして居ることを忘れてはならぬ。『これまで遭遇した幾多の國難の中に日本を指導して來た經世的(ステーツマンシップ)識見はこの將に來らんとする危險と拮抗してこれに堪へることができるであらう』。

文豪ヘルンがこの豫言に筆を染めてより十六年後、即ち去る

七月三十日發行のアウトルック誌上に、同誌の特派通信員シドニィ・グリンビイ氏の吾人に對する警告を見出した。氏は日本がこの度の大戰中に失ふた所のものよりも得たもの丶多大なるを指摘した後にかう言ふて居る。「近代の日本には一大弱點がある。其爲め日本が折角贏ち得た社會的又び物質的の利得も不安定な基礎の上にあるやうに思はれる。しかも不幸にしてこの危險に對する意識が殆ど全く缺げて居る。何ほどの收益によつて、日本が信用をどれほど增さうとも孤立によつて失ふところを償ふことはできない。……」

予は再言す、吾人は眞面目に大膽に且つ綿密に現代思潮を理解しなければならぬ。その思潮を成すに至つて歷史に溯つて幾多の原因をも探求しなければならぬ。吾人は姑息な妥協や彌縫によりて世界の進運を追ふことゝはできない。吾人は我邦百年の長計は維新の開國進取の皇謨を遵奉して、新智識を世界に求めて改革を徹底するにあることを信ずる者である。

俸給衣食者生活難問題

俸給衣食者生活難問題

法學博士　堀江歸一

生活難問題の對象は勞働者のみに非ず

今や生活問題に對する世人の意嚮は極めて眞面目と爲り、之を解決する能はざる政友會内閣を以て、國政上に無經綸、無能力の甚だしきものとするに至れり。凡そ生活難の現象の起るや、爲めに困難を感ずる者は勞働者階級に多く、生活難を緩和するは、即ち勞働者階級を救濟する所以なりと認められたり。然るに我國現下の事實に徴するに、勞働者階級に屬する者は必ずしも生活上に大なる困難を訴へず、寧ろ彼等に比較して、社會上の地位に於て、上級に居ると目せらるゝ俸給衣食者こそ、今日生活の維持に最も大なる苦痛を覺へつゝあるものなることを爭ふ可からず。

俸給衣食者と云へば、其範圍に於て、極めて漠然たることを免かれず。内閣總理大臣の俸給衣食者たるが如く、内閣の屬吏若しくは使丁給仕の如きも亦俸給衣食者たるの點に於て、其趣を一にす可し。物價騰貴して、生活費の上進するや、彼等が俸給として、給與せらるる金額の貨幣價値低落するが故に、生活に不如意を告ぐるは、其總理大臣たると、屬吏給仕たるとに依て異ならざるが如しと雖も、其困難の實質に至つては、雲泥も啻ならざるの相違ありとす可く、隨て俸給衣食者の生活難なるものも、主として下級の俸給を收得する者に止まるとす可し。何を以て下級の俸給とし、又何を以て上級の俸給とす可きやに就ては、標準の正確なるものを存せず。歐洲戰前の英國所得税法に於けるが如く、所得税の所得免税點、比較的に高く、年額百六十磅を以て、其制限としたる場合には、之を以て上級俸給と下級俸給との區別に充つる得たれども、我國の如く租税徴收上の必要より、殊更に所得税の免税點を低くしたるものに於て、之を同樣の標準とする能はず。聊か事の獨斷に失する

據なきを得ずと雖も、假に現行所得税法に於ける課税目的物たる較に級の所得即ち年額千圓以上と其以下とを以て、上級俸給と下級俸給とを區別するの標準とす可きか。然らば武官に於ては陸海軍の大尉以下、文官に於ては高等官六七等以下並に判任官、民間事業に於ては課長、係長、主任以下の銀行會社員、中等教員、小學教員等は總て下級俸給衣食者の内に網羅せらる可し。而して今斯る下級俸給衣食者が近年の社會的變動に依て、生活難に陷り、其艱難なることの勞働者階級に比較して、甚だしきものあるに就ては、畢竟左の數點を以て、其原因とせざる可からず。

第一、勞働者には其生活に於て一定の樣式を存せず。所得の多寡若しくは増減に依て、如何樣にも生活狀態を伸縮し、以て生活難を防止するを得れども、俸給衣食者に至つては、生活上に然るものあるを得ず。如何に所得に對して、絕對必要に屬する生活費が膨脹するも、相當の家屋に住居して、門戶を張らざる可からず、四季に適する和洋の禮服通常服を用意せざる可からず。自己の子弟に對しては、少なくとも中等程度の敎育を施さざる可からず。是等に要する費用が絕對必要費と同じく、伸縮の自由を許さざるに於ては、彼等が生活に済むこと亦怪むに足らざるなり。

第二、物價騰貴し、生活費膨脹する時代に於ては、商工業は極して好景氣の狀態に居るものとす。斯くて既設の事業は其規模を擴張する一方に、新設事業亦其續に就きて、職工勞働者に對する需要を増進し、其賃銀を上進せしむるを得るに反し、俸給衣食者に對しては、商工業の好景氣に依て必ずしも所得を増進するに至らず。現に最近數年間に於ける我國の實際に就て見るも、銀行會社の從業員中、戰時有利なる影響を蒙り、所謂成金事業を以て、目せらるゝ者に從事する者は事業其ものゝ繁昌するに隨ひ、或は増俸に或は賞與金の増給に所得を増加するを得て、殆ど生活難の何ものたるを知らざるの觀を呈したりと雖も、時局に依て、有利なる影響を受けざる事業の從業者に至つては、到底然るものあるを得ず。況や官廳、市役所、町役場、學校、教會等非營利事業に從事するものに於てをや。物價高くして、所得の増加之に及ばず、生活上に慘憺たる狀況を生ずるに至れるもの亦自然の理なりとす可し。

第三、職工勞働者にして、賃銀の形態に於ける所得に若干の増加を告げたりとするも、尙ほ此増加が生活費の膨脹に及ばず、生活に困難を訴へんか、直に團體の威力を藉りて、傭主に賃銀の増加を迫るを得べく、而して團體の背後には、同盟

罷業の武器あり、傭者にして勞働者の增賃要求を容れざらんか、罷業の爲めに、事業の經營に頓挫を招くことを恐れ、利益の一部を割いて、賃金を增加するを辭せず。時に同盟罷業の起るものありとするも、經濟社會好景氣の場合には、罷業者の勝利に歸して、解決を告ぐること多しとす。卽ち勞働者が從來の如き經濟狀態に於て、生活難を感ぜざるを得たる所以なれども、俸給衣食者に至つては、全然趣の異なる點あり。外國に於ては小學校敎員、巡査等の間に、組合の存するものあり。彼等が同盟罷業を賭して、俸給の增加を給與者に要請するの事例は吾人の屢々見聞する所なれども、斯の如きは未だ我國に於て一個の習俗を以て認めらるゝに至らず。我國の官公吏、敎員、銀行會社員の如きは、服從、規律、穩和、柔順を以て、其道德の本旨とするが故に、自己の勤勞に對する報酬の薄きを知るも、單に苦痛に堪ゆるのみにして、何等積極的手段に出でず、俸給給與者をして彼等に對して顧みる所なからしむるを常とす。

中產社會の存立と滅亡

中產社會に屬する者は必ずしも俸給衣食者のみに非ず、都鄙に於て、相當の規模の下に、農商工業を經營する者の如き、自ら中產社會の一員たるを失はずと雖も、今日の如く社會生活の發達したる場合には、一定額の俸給に依て衣食する官公吏若しくは民間事業に於ける從事者は自ら中產社會の大部分を占むるものと認めざるを得ず。中產階級は一國の社會に於て、實に其中堅を以て、目す可きものなり。社會に中產階級あり、之に屬する人々が堅實なる生活を營むが故に、上流社會の動もすれば奢侈に流れ、逸樂に耽りて、社會に害毒を流すの弊を矯むると共に、下層社會に屬する人々に向つて、其努力の結果、生活を上進するを得るの目標を示し、以て社會階級間の關係を調和するを得べし。我國に於て歐米諸國に比較して、社會階級間の反目鬪爭大ならざるを得たるは、要するに中產社會の堅實なるものありて、其一部は上流階級に進むと共に、下級社會に依て其缺補はれ、階級間の融通自由なるを得たるの一事に之を歸せざる可からず。然も今日に於ては果して如何。所謂資本的生產制度の旺盛なる結果として、大企業を經營する者、大資本を運用する者は小企業家、薄資者を壓迫し、後者の存立を脅しつゝあるの事實を掩ふ能はず。東京大阪の如き大都會に、大規模のデパートメント・ストーア設立せられ、各地方に郵便註文の便を開くことに依て、地方小規模の商店の業務を壓倒しつゝあることの如何に大なるは、世人の想像に餘りありとす。

既に商工業者の社會に於て、中產階級の存立、危險の狀態に

居る一方に、俸給衣食者の生活亦困難なりとすれば、之を放任するときは、如何なる結果を生ず可きや。俸給衣食者の如きは、從來薄給を割いて、其子女の敎育に意を用ひ、男子は中學校より大學又は高等專門學校に、女子は高等女學校に學び、斯くて次代に於ける社會の公民たり、又中產社會に於ける後繼者たるに負かざるを得たれども、近年の如く中產階級の生活難の甚だしき場合には、彼等は到底子女を敎養するに就て、每月每年定額の學資金を負擔するの苦痛に堪ゆる能はず。子弟は義務敎育を終了したる後之を職工とするか、又は簡易なる技術敎育を授けて、技手技工とするを有利なりとす可く、女兒は之を女工交換手とし、官廳銀行會社の事務員とするに至る可く、生活の必要に迫られて、斯る流風の盛なるを告げんか、結局我國の中流階級は衰微するか、然らずんば中流階級として殘存する者の品質亦低下することを免れざる可し。斯くて上流階級と下層階級と、資本家階級と勞働者階級と、有產者階級と無產者階級と相對立するに至らんか、一部の論者が如何に嫌惡し、又如何に回避するに拘はらず、階級戰爭の慘狀は求めずして社會に殺到し來らんのみ。或は斯く一の社會に於て、立脚地々異にする階級が鬪爭に依て、各自階級の利害を決定せんとするは、社會進步の自然の趨勢なりとして、之を歡迎するの態度を持する者あるが如しと雖も、吾輩は斯る所說に與する能はず。寧ろ將來は知らず、目前に於ては、中流階級の爲めに、其存立を維持するの政策を施すの急要なるを認むる者にして、俸給衣食者の生活難を緩和せんと欲するが如き、要するに中流階級保護の見地に於て、之を必要とするが故に、外ならざるを以てなり。

俸給衣食者の動搖

俸給衣食者が近時の生活狀態に對して、不安の念を感じ、現狀打破を希望するに至れるは、明白の事實にして、一方に彼のサラリー・メンス・ユニオン即ちS・M・Uなる名稱の下に、俸給衣食者を統一し、團體的運動を試みんとするの計畫あれば、他の一方には一會社若しくは一銀行內に於ける俸給衣食者自ら團結を設けて、俸給の增加を傭主に求むる事實の歷然たるものあり。即ち俸給衣食者の生活を今日の儘に放任して、顧みざるに於ては、必ず彼等の勤務上に於ける能率を害し、彼等をして自暴自棄の狀態に陷らしめ、彼等の後繼者の素質を不良ならしむるは勢の免かれ難き所にして、如何にして俸給衣食者の生活上に於ける動搖を除却す可きやは、一個の重要問題なり。而して斯る動搖を來したる原因如何を探究せんか、吾輩は左の三點を擧げて、之に充つるの至當なるを認む。

第一、銀行會社における利益分配制度の不公正なること。

第二、俸給衣食者の所得たる俸給に伸縮性を有せざること。

第三、政府が物價の調節に有效なる政策を施さゞること。

今日銀行會社に於ては、必ず利益分配制度を採用し、株主に利益の一部を配當すると共に殘餘の一部を重役以下社員並びに行員に分配するもの丶如し。此事たる、會社銀行の利益と社員行員との利益を一致せしめ、後者をして前者の爲めに、多額の利益を擧げ、自己亦之に均霑するに、努力せしむるの趣意に出づるものにして、甚だ可なるが如しと雖も、分配せらるゝ利益の金額と此利益を生ずるに就て各員の致したる努力との間に、公正なる割合を保つやと云へは、決して然らず。利益分配金即ち賞與金は各員の地位の高下と俸給の多寡とを以て、大體の標準とし、地位高く俸給多き者に對しては、歩率を大にするの習慣なるが故にして、事實に於ては、上に厚うして、下に薄く、賞與金制度あるが故に、却て下級吏員の上級者に對する反感を刺戟するの憾なき能はず。

或は今の政府の如き、現下に殺到せる生活難を緩和するには、増俸の必要ありとし、官吏に對して之を行ひたる一方に、民間事業の經營者にも之を勸奬し、後者亦使用人に對して、増俸の擧に出でたりと雖も生活費膨脹の程度の二倍三倍の多きに及べる場合に、三割又は四割の増俸を以てして、能く生活難を緩和するを得べきか、其至難の業たるは、一片の常識を以て、之を推すに苦しまざるなり。或は政府にして專心物價の調節に力を致し、少なくとも食糧、綿布、木材、砂糖等の市價を低落せしめたらんには、自ら生活難を緩和し、俸給衣食者の生活に一道の光明を與ふるを得たるの道理なれども、政府は物價調節を勵行せんか、地方に於ては農民、都會に於ては實業家の感情を害し、又其利益を傷け、政權の擴張に支障を生ず可しとする政黨者流の私利的根性に制せられて、今日に至るまで通貨の收縮も最高價格の公定も實行せず、物價を其奔騰するに任せて、顧みる所なし。物價調節を閑却して、俸給衣食者を苦しめ、中産階級を脅す原内閣の罪や大なりとせざる可からず。道途傳へて言ふ、原内閣と雖も、物價調節の必要を認めざるに非ず、今秋の府縣會議員改選を終れば必ず根本的政策を確立し、以て輿論に副ふものある可しと。此一事は即ち今日の政黨者流が國政に對して、如何に眞面目を缺くやを語るものにして、思ふに府縣會議員選擧の終了したる曉には、更に次期の衆議院議員改選に備へざる可からずとして、物價調節に着手せざる可く、隨て吾人にして物價の調節を急務とする以上は、原内閣を倒壞するを以て、先決問題とせざる可からざるなり。

本稿を脱稿して、茲に至り、偶々配達せられたる新聞紙の夕

刊を閲するに　東京市の稅務署員は結束して、增俸の實行を當該局長に迫ることを決議したりとの記事あり。流石に温順を旨とする官吏も堪忍袋を破るに至れるものか、然も彼等をして之を破らしめたるものは原内閣に外ならず。今や生活難を感ずる者は一の稅務署員に止まらず、若し彼等の運動が發端と爲りて、全國到る所に同樣の氣運を釀成し、行政に收拾す可からざる失態を惹起するが如きことあらんか、政府は到底其責任を回避する能はず。政府は如何にして俸給衣食者の生活難を救濟せんとするや、自家の責任問題として、眞面目に考慮する所なかる可からざるなり。

俸給衣食者の生活に於ける根本問題

俸給衣食者の目前に於ける生活難は或る程度の增俸若しくは一般的物價の調節に依て、之を緩和するを得べしと雖も、更に一步を進めて、根本的に彼等の生活に安定を保たしめんとするには、別に施設する所なかる可からず。吾輩は左に其要目を揭ぐ。

第一。營利事業に於ける從業者が利益金の分配を受くる場合には、從業者の代表者をして、分配の標準決定に參加せしむること。

第二。官公吏の如き營利事業に屬せざる業務に從事する者に對する俸給は營利事業の從業者の受くる俸給に比較して、常に均衡を保たしむること。

第三。俸給衣食者は自ら政治上に團體的勢力を發揮し、政府をして中產階級に有利なる政策を實行せしむること。

第四。公平正確なる方法の下に、國民の標準生活費を調査し、或る程度まで其高に依て、俸給を上下し、又少なくとも、增俸の時期と金額とを左右すること。

第五。公私團體の給與する恩給年金遺族扶助料の如きも、亦右標準生活費の增減に依て之を上下すること。

以上の要項に就て、簡單なる說明を試み、以て立案の根據を示す可し。從來各種の營利事業に於て、賞與金を分配するや、重役の受くるものは重役自ら之を決定し、社員行員に給與するものも亦重役の獨斷專行に係る。然らば賞與金分配の上に厚くして、下に薄きは、免かれ難き所なるのみならず、時に下に厚くするも、下級者は其厚き所以を理解する能はざる可し。況や賞與金の分配は現在の俸給增俸等を重なる標準とし、事實俸給に對する加俸と異ならざるに於てをや。即ち賞與金分配の標準を決定する場合には、使用人の代表者をして之に參加せしめ、以て彼等の理解を得るの手段とせざる可からず。官公吏殊に官吏の俸給が營利事業に於ける從業者に比較して、菲薄なるは、前者が勤勞位階を拜受し、其他官吏として、種々の特典に浴

するを得るの故なる可しと雖も、今日の如き生活難の酷烈にして、人心の物質慾に驅られつゝある場合に、所謂榮典の如きものを代價として、官吏の俸給を寡小にするは、却て官界に人才を逸するの所以たらざるを得ず。現に相當の地位に達したる官吏にして、職を辭して、民間に下るものゝ少なからざるが如き、著明の事實なりとす。官吏の生活を豐にして、官界に人才を求め、又其能率を發揮せしむるの點に於て、增俸の必要あるは勿論にして、官吏の增俸と共に、民間非營利事業の從業者に對する俸給亦自ら上進の標準を得べきなり。

俸給衣食者中、其下級に屬する者が從來の選擧法に於て、選擧權を有せざりし一事は彼等をして虐げらるゝ階級たらしめたる所以なり。新選擧法の下に於ては、薄給の吏員にして、尙ほ選擧權を有するに至る可く、普通選擧實行の曉には、更に其權利の洽きに至るを以て、彼等は宜しく團體的利害の命ずる所に從ひ、一國の立法をして自己に有利ならしむるの點に就て努力せざる可からず。固より定額の俸給に衣食する者が物價の騰貴、生活費の膨脹に依て、困憊するは、現行貨幣制度の不備に基く所少なしとせず。茲に於てか從來學者の間にも所謂計表本位制なるものを主張する者あり。要するに國民の生計に必要なる物資の代價を調査し、其高低に依て、俸給其他總て人の支拂ふ可き金額を調整するを眼目とす。例へば物價の平均數が前月に於て百なり、今月に至りて、百十に增加したりとせんか、總て俸給として支拂はるゝ貨幣の金額を一割增とするが如し。斯の如くすれば物價の騰貴するに隨ひ、俸給として支拂はるゝ貨幣の購買力亦之に伴ふの道理にして、生活難を除却するの一法たるや、論を俟たず。唯斯る調整策を正面より實行す可きか、又は其趣意を參酌し、國家若しくは法人に於て其會計を律す可きかを以て、一個の問題とす可し。

若し夫れ恩給年金遺族扶助料の如きものに至つては、俸給の繼續とす可く、又俸給の附加物とす可し。現在或る職業に就きて、俸給を受くる者は時勢の變遷に伴ひ、自家の努力に依て、俸給の增加を期する道なきに非ずと雖も、恩給其他の給與を受くる者に至つては、到底然るを望む能はず。俸給增加の理由あり、必要ありとすれば、恩給其他に至つては、更に其增加を必要とせざる可からず。俸給を受くる者は現に社會の表面に於て、或る勤勞に就き、團體の力を發揮すれば、傭主に對して一勢力たるを得るを以て、其增俸の不充分ながら、尙ほ行はるゝに反し、恩給年金の生活者は何等傭主を威嚇するに足るものを有せざるの故を以て、顧みる所と爲らざるが如き、社會に於ける公正の關係を蹂躪するの甚だしきものとせざる可からず。

今や俸給衣食者が忍順隱忍を能事とするの時代は既に經過したり。勞働者が此社會上の他位に就て、自覺したるが如く、俸給衣食者亦自覺しつゝあり。前者が團結して、雇者に當り、同盟罷業を賭して、賃銀の増給を要求し、時にサボタージの一手段として、怠業を行ひつゝあるが如く、後者亦何等かの手段に出でざるを保すべからず。所る場合に於て官廳銀行會社學校等多數の俸給衣食者を使役する團體が彼等の公正なる要求を顧みざるが如き、社會の平和を維持する所以に於ず。斯の如くして時日を經過する間に、社會に大なる決裂を生ずるは、吾人の斷言するに苦しまざる所なり。（九月二十日稿）

新聞記者の生活難

室伏高信

（一）

月給取階級のうちで今日の日本で最も多く生活難に苦しんでゐるものの一つは恐らく新聞記者であらうと思はれる。新聞記者の收入の乏しいものであることは一般に認められてゐることであるからこゝに事新らしく述べる必要はないがこれ等の生活問題を解決することの第一歩は私の考では事實を隱蔽することなく公衆に發表することであると思ふ。私は約七年間の新聞記者生活を通じて新聞紙について二つの重要な問題を與へられてゐる。その一つは新聞のコントロールの問題であり、他の一つは新聞記者の生活難の問題である。新聞のコントロールの問題については今日の日本の新聞のビューロークラチズムと資本主義とをもつて二大問題であるとして之に對する態度を研究すべきものであると思ふがこの點は他の機會に詳に私の思ふところを述べる考へである。現代新聞記者生活の落伍者としての私はこの朝日新聞のビューロークラチズムと資本主義とから驅逐せられたために却つて自由に、さうして何等の偏見を挾むことなくしてこの問題を論ずるの自由の與へられたことを感謝するものである。たゞこゝにはその問題は一切避けて單に新聞記者の生活問題についてのみ簡單に所見を述べたいと思ふ。

（二）

新聞記者は今日は如何なる待遇をうけてゐるか。私はこの點について可成り知るところがあるがこゝには暫らく詳細な陳述を差控えることとする。たゞこゝにいひえられることは、先頃電車の車掌の月給が上り、多きは六十圓に達する（或は超える）といはれた時に新聞記者のうちで電車の車掌以下の月給取りがそれ以上のものよりも遙かに多かつたことである。電車の車掌

と新聞記者とを一所にして論ずることは新聞記者の側に非常にお氣の毒なことではあるが兎に角月給の方面から見れば電車の車掌と新聞記者との間にあまり大した相違のないとは事實である。否、却つて小規模のところでは車掌以下のもの〻甚だ多いことを想像しえられるのである。何ごとも貨幣を尺度とする今日の經濟制度においては、新聞記者の地位は電車の車掌と同格であると見なくてはならない。これは無論貨幣經濟の弊害を一面に語ることとなるわけであるが、それとともに新聞記者が正しく報ひられてゐないこととの證據でなくてはならない。この一事をもつてしても新聞記者の生活難は想像にあまりあることである。彼れは電車の車掌と同一の收入をもつて大臣と面會しなくてはならない。政黨の首領とも、會社の重役とも接近しなくてはならない。新聞記者はその內部においては官僚的な組織に反抗する力に缺けてゐるが外部に對しては可成り自由を要求する。さうして彼れに對して世間の尊敬の不足してゐることを憤るの念において割合に旺盛である。特に若き記者においてさうである、若き多くの記者は、大きな抱負をもつて新聞記者生活に入つてゆく。さうしてその新聞社の內部における、彼れに對する待遇においては辛抱强くしてゐるのに反對に、世間の彼れに對する尊敬の足らざることを憤るのである。さうして世間の彼れに對する尊敬の不足か、新聞社の彼れに對する待遇から起つてゐるものであることに氣が付いてゐない。氣がついてゐてもそれから拔け出ようとする勇氣も努力もない。さうして資本家が彼れに對して電車の車掌と同一の待遇を與へてゐることに內心の不平を抱きながらたゞ現狀から拔け出ることの艱難におびえてゐる。彼れがこの艱難におびえてゐる間は、彼れは世間の彼れに對する尊敬の不足についても、またあきらめてゐるのほかはない。

（三）

新聞記者は何故にこういふ待遇をうけてゐるか。それには今日の新聞記者に能力の缺けてゐるといふことも一つの原因として否むことはできない、けれどもそれが決して重要な原因ではない。能力の點からいへば、新聞記者だけが不足してゐるのではない。他の知識階級の人々に比べて、新聞記者かそれほどに劣るとも思はれない。無論新聞社の幹部階級のうちには隨分怪しい人もある。大新聞の主腦記者であつて論文の一つ滿足に書けない人もある。政黨の院外團位ひの人もある。年功のほかには何の取柄もない人がゐる。この點からいへば新聞社の人材の缺乏は實に夥しい。若しこれ等の人々から何々新聞の主筆、何何新聞の編輯長といふ肩書をとつたら、恐らく政黨の院外團へでも入るよりほかに仕方のない人も少くないことであらう。か

くのごとくに幹部階級には少數の例外を除いて人物に乏しい。新聞社は宛として社會の落伍者の集團のごとき觀がないでもない。けれどもこれは主として年功連の集團としての幹部階級についてのことである。また從つてこのことは新聞界の空氣の如何に沈滞してゐるかを證據立てゝゐるものである。ところがこの年功階級或は新聞記者の俸給階級はそれほど生活に困まつてゐない。さういふ階級は新聞記者といふよりも寧ろ新聞社の重役であり、表面だけでも重役となつてゐる。これによつても報酬と能力との重要な關係のないことがわかる次第である。それに反して多數の新聞記者、即ち rank and file の諸君は、中には學問もあり、文才もあり、人格も立派である人が少くなく、恐らく尊敬すべき能力をもつて高尚な理想に生きてゐる人が少くないが、その高尚な理想と優れたる能力とは新聞記者の生活が長ければ長いほど墮落してゆくのである。今日の新聞社はその『組織』と共に記者に與へてゐる生活難とを通じて、人材を『殺戮』することに妙をえてゐる。資本主義は新聞記者生活のうちにおいて唯物史觀の眞理であることを教へてゐるのである。彼等はその物質的事情のために『それ自身に目的をもつてゐる人』としての存在を全然葬られて、その與へられたる地位、經濟生活における物質的關係のために、一切の新聞記者的精神をさへ喪失しつゝあるのである。この點において新聞記者の生活難の問題はただ新聞記者それ自身だけの問題ではなくして、新聞紙の一切の態度についての問題として影響するものであるといふことができるのである。

（四）

新聞記者の待遇の改善されないことは決して新聞記者の能力の問題としてのみ論ずべきものではない。新聞記者のうちに月給問題についてこれを口にすることを恥づるの惡風のあることは慥にその理由の一つである。新聞記者の月給は密封によつて手交される。その結果は同一新聞社にあつてもその親友の月給がどれ位ひであるかをさへ知ることができない、また今日の新聞記者の月給は親友に打明けることが氣恥しい位ひに薄給である。それを打明けることは何か自分の價打ちにでもかゝわることのごとくに思はれてゐる。甚だしいのになると自分の妻にさへ月給額を打明けない人さへもある。それだけに今日の新聞記者は心の中では月給はどうでもいゝと眞實に思つてゐるものでないことが問題であるが、心の底と外部的表現との矛盾に虐げられつゝあるものの、さうして俸給經濟または資本主義について徹底した考をもつことのできない人々の陷り易い傾向である。この缺陥は獨り新聞記者だけではない。俸給經濟の洗禮を

うけたる一切の人々に通有な傾向である。そのうち月給階級がこの弊害に浸透することにおいて最も甚だしいと思ふ。彼等は生活に苦しみながらその生活苦を公表することを避ける。それを恥とするの精神、然り資本主義的精神に囚はれてゐる。その精神から脱することができない。これは單に日本だけではない。近頃英國の中等階級の生活難は社會上の一大問題である。彼等の生活苦は日本の月給取階給と同一のごとくである。さうして私はこの問題について英國の一學者が、中等階級の生活苦は、その生活苦を隱蔽することから生れるといふ説を發表してゐるのを見た。この點においては、日本も英國も同一である。さうしてこの生活苦を自ら苦悶しながら世間に訴へることのできない月給取階級のうちで、新聞記者は筆頭に計へられるものである。彼れは訴ふべき筆をもつてゐる。けれども新聞記者の大部分は一行と雖も自分の思ふことをその自己の屬する新聞紙に發表することを許されてゐないのみならず、これを許されても發表するの勇氣ないほどに一種の偏見をもつてゐる。その偏見は彼れ自ら社會上の地位の『神聖』を維持するために必要なことゝ考へてゐるのであるが、その實はたゞ資本主義的精神に征服せられてその自己の赤裸々なる地位と實力とを發表することができないに過ぎないのである。資本家にとつては誠に好都合な精神であるが、彼れ自身はその勇氣の欠乏と『自己欺瞞』とのために、それ自らの葬らるべき穴を穿ちつゝあるに過ぎないのである。彼れの『自己欺瞞』は、彼れをして彼れが月給問題について宛かも心から無頓着であるかの如くに裝はしめるに至る。資本家はこゝに乘ずる。さうして資本家の注文通りに、且つ新聞記者の『自己欺瞞』通りに、彼れは貧しき收入と、不愉快なる生活とを與へられる。

（五）

この外に、更に生活難の重要な他の原因がある。これも獨り新聞記者に限られたことではないからこゝに論ずる必要があると思ふのであるが、それは月給階級の無組織といふことである。生産手段の所有者としての資本家は一切の秩序を彼れの支配のもとに置かなくては止まないのに對し、體力勞働者はこれに對抗すべき組織をもつてゐる。或はもちつゝある。ところが月給階階だけは丸で亂世であり、無政府であり、無組織である。從つて彼れは勞働階級からも壓迫され、資本家からも壓迫されて、その社會的地位を失墜しつゝある。その結果外國では月給階給の組合が續々組織せられ、役人まで勞働組合に加入する有様である。獨逸、英國では教員、醫者、新聞記者、官吏、こういふ階級の人々がみな勞働組合を組織してその地位の維持と

改善とに努めてゐるのである。日本でも俸給生活者組合とかいふものができて河津博士がその指導者となるといふ說もある。月給取階級を如何に組織するかの問題は別として兎も角月給階級に對する社會の壓迫は善かれ惡しかれこういふ團體を生み出すようになつたのである。こういふ種類の團體の發達によつてのみ月給階級の社會的壓迫は除きさられるのである。その見易い事實は新聞社の職工と記者との關係についても見ることができる。今日まで新聞社内において、職工の人格なぞは無論認められてはゐないし、記者と職工との地位と威力とには非常な相違のあつたものである。この相違のあつたことは必ずしもいゝことだとはいはれないが、兎も角非常な相違があつた。ところが職工は團結の力であることについては記者よりも先きに氣がついた。その結果は印刷職工は新聞社においての威力となつてきた。その待遇からいつても、記者と職工との間に殆んど相違がなくなつた。今後において印刷工の團結が益々鞏固になればなるほど彼れの地位は向上せざるを得ない。これに反して記者側の威力、平記者の威力は全然缺けてゐる。朝日新聞者の例からいつても七月に月給十割値上の要求が記者一致の決議で通過したところが、その社の社長がこれを見て月給の値上なぞを要求するものは退社してくれといつたとかで、その問題はそれなりになつた。なるのほかはないのである。無組織の月給取が生產手段の所有者としての資本家に匹敵することのできるわけはないからである。だから新聞記者の生活問題を解決すべき鍵がこの組織の點にあるとが了解せられるわけである。獨り新聞記者だけではなく凡ての月給取階級の生活難を解決すべき鍵はただそれを組織することになくてはならない。或は新聞社は營利會社でないといふ人もあるかも知れないが、それは今日の大規模の營利的新聞社の內情について何ごとも知らない人のいふことである。

（六）

月給取階級の資本主義的精神は彼等を滅すものである。彼等を救濟する道はたゞ月給取階級 Salariat が勞働階級 Proletariat と結合することである。それでないと資本家から輕蔑されるばかりではなく勞働階級からも輕蔑される。その時が既にきた。彼等は其『小さき社會的地位』を世間に買被らせんがために却つて自ら輕蔑せられる。彼等は赤裸々でなくてはならない。

俸給衣食者生活難問題に就きて

法學博士　神戸正雄

（一）

一口に俸給衣食者といふても色々の種類があつて一概にはいへない、大體、國家公共團體公益團體等、非營利的事業に從事する者と、廣義の營利事業に從事する者との別があり、そして其の何れに於ても高給者と低給者とがあり、其間に事情の一樣ならざるものがある。而かも營利事業と非營利事業との別といふても其區別の困難なるものがあるといふのは、例之、政府の營む營利的事業の如きは、政府の營む以上は、純然たる營利事業とは少し又異る。併し又純粹なる公益事業でもない。其れから高給と低給との別といふことも何れの處より以上又は以下を高給といひ低給といふかは隨分六つかしい問題であり、別に中等とでもいふものを設けても良いが、其れにしても矢張り、上中下の間の區劃は困難である。細かく詮議すると六つかしくなるが、大體に於て今日の我邦にて生活難を訴えて居るのは公益事業に從事する低給なる俸給衣食者である。之に異り營利事業に從事する高給俸給衣食者に至ては、近時却て益々生活境遇の向上を享受して居る。（勿論其に若干の例外はあるであらうが）。而して此二の極端の中間に立つて居る人は各場合に於て區々であるが、其も大體から見て公益事業の方の人々が一般に不利を被て居る。戰前と比較して物價騰貴の割合には其俸給が增して居らない。物價の十五六割增加に對して三四五割の增俸では困難の程が察しられる。營利事業に於ける低給なる俸給衣食者に至ては、近頃、其高級者や、肉體勞働者の收入の增加に比較してこそ其俸給の上り方が少いが、公益事業に於ける對等の人に比すれば餘程優良になつて居り、處によつては物價騰貴と平行又は其以上に良くなつて居るもある。で問題は何としても公益事業に從事する者の問題が主となる。

（二）

營利事業に從事する俸給衣食者に至ては、右にもいふ如く既に大體物價騰貴に伴ふて其待遇が上ぼつて居るのみならず、向ほ此上ともに其地位を向上せしむる爲めに、既成の勞働者組合に加入し、又は新に組合を作て資本家に對抗して運動を爲すことを妨げない。彼等は將來此道を取るであらうし、又彼等が此道を取つたからといふて、資本家の方にて無下に之を排斥し、

此組合に加入した者は採用せぬなどといふことは六つかしからうと思ふ。今日では彼等俸給衣食者の團體が幼稚だから、私の處では左様な亂暴な人達は使はないなどといつて居らるるが、間もなく左様のことをいつて居ては、良き人の得られざるとになるであらう。今日其々資本家の處では其處の使用人を斥候扱して居るさうであるが、其は段々と維持の出來ざることになるであらう。早く時勢の推移に着眼して其を止めた方が萬全である。此からは資本家も勞働者も無形の事業てふものの下に働く對等の人格者といふ考で往かぬと、甘く往かなくなると思ふ。私は其邊の考慮が資本家側に望ましい。

（三）

處が公益事業に從事する俸給衣食者は現在も物質的待遇が哀れなゝのたるのみならず、彼等が其地位を向上する爲めに組合運動をすることも正當ではない。近頃、外國では巡査などが組合運動をする傾が出來、隨て其同盟罷業をも聞くことになつた。又日本でも或府縣では下級の官吏、更には中等學校及小學校教員の同盟罷業、同盟怠業なども現はれたと聞くが、其は私は凡べて不當と思ふ。營利事業の關係なる資本家に對してこそ、勞働者の組合運動を認むべきであるが、公益事業に從事する者が左様なことをするのは不都合である。彼等が其職務を供する相手方たる國家又は公共との間の關係は、決して對等なる者の間の純經濟關係ではなく、不對等なる者の間の純道徳關係である。勿論彼等が俸給を受るだけに於て經濟關係はあるが、此は此兩者の間の主たる關係ではなく、第二次的の關係で、主たる關係たる兩者の間の道徳關係から、其に附帶して此經濟關係が生ずるものである。で國家公共に仕ふる者は自己の全力を以て之に仕ふるの道徳上の責務を感じなければならぬ。又之に仕ふる者も、其々資本家の使用人となりたると異り、此公に仕ふる場合には少しも自己の人格を辱せらるることなく、而も彼が爲す所は凡べて世の多數の人々の福祉を進むることになるから、彼等は報酬の多寡などを眼中に置かずして仕事することが出來る。又而かすべきものである。彼等に與へらるる俸給は彼等の仕事の報酬といふよりは、むしろ其地位に相當したる生活を爲すの資料といふのである。其多寡如何を普通の賃金（少くとも從來の意義にての）などと同一に見てはならない。全く報酬の意味がないとはいはぬが、此意味は第二次的であり、隨て役人が其仕事の功を誇り報酬の大小を云々するが如きは不心得至極である。役人達は右の如き道義關係に意を用ゐて、全力を注いで其仕事に從事すべく、夫の營利を行ひ私利を事むる資本家に對する階級鬪爭の心持にて、國家公共に對すべきものではな

い。

（四）

但然し國家公共よりいへば、其役人に對して其純道德關係のみ振り廻はして、物價騰貴により困る所の役人を傍觀すべきではない。俸給が役人の地位に相當したる生活資料たる以上は、假令役人が其道德上の義務を守つて沈默するとしても、進んで相當の處置を採らなければならぬ。卽ち一方には俸給を物價騰貴の割合だけ上ると共に、他方には物價騰貴抑制の政策を講ずる。前者の爲めには增稅を斷行し、後者の爲めには通貨の緊縮なり、各箇の生活必需品の輸出禁制乃至は價格公定等を行ふとが肝要である。此等を政府が等閑にして居れば、如何に役人には如上の德義上の義務ありといひたりとて、彼等も生活脅威の前には動物性を發揮し、道義をも無視せざるを得ざることとなる。其處になると最早理窟を放して事實の問題となる。又斯の如くにして或程度を超ゆれば德義をも無視するのが人情の自然又は必然のことであつて、其處に矢張り一の動かし難き道理もが存在して居る。

（五）

斯くて政治家には折角、役人の俸給をして物價と調和せしむるとに全力を用さらんことを希望しなければならぬが、又役人に於ては飽迄も其道義關係に十分考慮を拂つて、物價騰貴の脅威に拘らず、其職務に忠實にあつて欲しい。楠公の湊川殉死位の心掛があつて欲しい。斯くて彼等は此物價騰貴に抵抗する爲めに、其生活方法の改造修訂を行つて、自箇の健康及能率を傷はざる範圍に於て、有功に消費を行ふとにつき一段の工夫を要することと思ふ。日本人各階級に共通なる不經濟的消費は別として、此種の階級に特に從來存在したる間違つた考方を改めるやう、此に特に注意を仰がうと思ふ。それは從來、此種の人々は役人の威嚴を示す爲めに衣服とか、特に住居に對し不相應に大きな支出を爲す傾のあつたことである。此等は此からの時代には馬鹿げたことで、凡べて其收入相當の粗末なもので辛棒すべきである。勿論彼等が公の仕事をする時の氣分は、天下蒼生の爲めに高尙な仕事をするといふとにつき自尊自重を持つて居らなければならぬが、其衣住といふ如き外形的の事物については全く頓着しないだけの氣分にならなければならない。營利事業の使用人の贅澤なる生活振に對して羨望するやうな卑劣な考を出してはならない。尤も其は近頃の如く唯物的風潮の盛な時代には望み難いことでもあらうが、併し修養によつて此氣分になれないことはなからうと思ふ。私は今や滔々として墮落せんとしつつある我邦の役人に此心掛の修養を勸むるものである。

俸給生活者問題

早大教授 安部磯雄

俸給生活をする者は社會の中に特別の地位に立つて居る。俸給生活者以外の者は大抵獨立の經營者であつて、自分の資本で自分一人で事業を經營し、それに由つて自分の生活費を得て居るのである。けれども俸給生活者と賃銀勞働者とは、自分で事業を爲ないで、他人の仕事に傭はれて報酬を受けて居るのであるから、特別な地位に立つて居るといふのである。それで物價騰貴といふやうな經濟上の變動が起ると、俸給生活者は他の階級の人々の受けないやうな甚だしい影響を受ける。獨立の經營者であれば、物價が騰貴する場合には、それに應じて自然に其人々の收入も増加するやうになつて居る。少し極端な言葉で云へば、其人々の收入は物價の高低に因つて自動的に上下し、或は増減する傾向を有つて居る。中には物價の騰貴に因つて比例以上に自分の收入を増す階級さへある。先づ其著るしき例を云へば工業家で、尙ほ其他生産事業に關係するものである。斯ういふ階級は物價が騰貴しても、比較的廉い原料を買入れて、それが出來上る場合に價が高くなるので非常に有利な地位に立つ事になる。之れには工業家許りではなく、實業家も其恩典に與る。仕入れる時と賣る時との間に多少の時間が懸れば、價はずん／＼高まつて比例以上に利益を得る。

それから又實業家の中に又一種の階級がある、即ち小賣商人で、資本も少く極く小規模でやつてゐるが、之も物價の騰貴につれて利益を受くるとも、決して損はしない。彼等は卸値が高くなると零すが、其實物價の騰貴は、或意味から云へば小賣商人の暴利を貪るに由る。物價の騰貴に付け込んで値段を上げて行く。爭はれぬ事實は公設市場を設けて安い物品を市民に提供しようといふ企てが起つたのでも證明される。確かに小賣商人は物價騰貴に由つて其生活費を高められはするが、同時に儲けもそれだけ増加するのである。

斯く考へて見ると、收入を得つゝある人に二つの階級がある。第一の階級は獨立の經營者で、之れは物價の高低に直ちに順應して行く力を有つて居る。だから物價が昇騰すると其收入を殖やし、之に反し物價が低落すると其收入を減ずる。即ち機械的自働的に高低する事が出來るのである、之に對して他の一方には、俸給生活をして居る階級がある。之は前にも述べた通り、獨立に事業を經營するものでなく、他人の事業に入り込

み、約束した賃金で生活するから、若し傭主が増給するのを俟たなければ、決して物價騰貴に出つて收入を増さない。それから此の外に他人の事業で働くものに賃銀勞働者があつて、之れは數も多い。此二の階級は獨立の經營者でない點に於て一致して居る。けれども物價騰貴といふ事になると、勞働生活をする者の方が比較的有利の地位に立つて居る。一つは勞働者の平生の生活費が俸給生活者のよりも割りに苦るしい。漸く衣食の費を得て居る丈けで餘裕がないから、一旦物價が騰貴すると、眼に見えて生活費に困まる。十割五割と眼に見えて來るから辛棒が出來ない。さうなると、斯ういふ事は言ひ度くないが、俸給生活者などのやうに自分の地位などを考へないから、遠慮會釋も無く賃銀の増加を要求し、甚だしきはストライキを起こす。それが爲めに俸給生活者より困難を切り抜ける事が容易である。のみならず、物價が騰貴しても、世間の景氣が好くなるので勞働者の需要も増加し、又一般の物價と共に賃銀も増して來る。今日では勞働者の賃銀は、大概の者は戰前の二倍若しくは二倍半になつて居る。最下等の土方などで、戰前一日大概五十錢であつたものが今では一圓五十錢位取る。だから勞働者の方が物價の騰貴について早く順應して其收入を増して行く事が出來る。同じく他人の事業に働いてゐても、俸給生活者と賃銀生活者との間には之れだけの差がある。

更に同じ俸給生活をする者にも種類がある。營利事業に働く者、即ち會社・工場に働く者は同じく他人の仕事で働いて居つても多少の融通がある。物價の騰貴につれ工業家や會社の景氣も好くなり、配當が殖える。故に臨時の手當も十分になり、莫大なボーナスを給與されるから、其生活も割合に樂で、不平もさう起らない。然らば何ういふ俸給生活者が困難を感ずるかといへば、營利を目的とせざる事業に從事する俸給生活者が一番打撃を受けるのである。營利を目的とせざる事業に從事する者の代表は、一は官吏で、二は教育家である。まだ他にもあるが、之が代表的の二大階級で、此二つは今日餘程苦しい立場に在る。併し官吏も教育家も階級があり、上の方は苦しい中にも何とか方法がつく。官吏などでも月に二百圓以上を取つて居る人は割りに樂である。教育家でも百五十圓位の收入があれば、何んなにでも自分の生活費を切詰めてやつて行ける。併し下級官吏特に巡査になつて來ると實に何とも云へない困難な生活をしなければならない。教育家の方では、一口には云へないけれども、小學校の教師、中學校の教師の或る者などは隨分樂ではないと思ふ。學家又は社會問題を論ずる者が第一に注意を拂ふべきは巡査、小學校の教師及び中學校の教師等である。

斯ういふ階級が特別の地位に立つ事を認めるならば、之に對する救濟法はあると思ふ。政治家や輿論の認めなければならぬ事は、俸給が物價と自働的に高低するやうな方法を設ける事である。之れは決して困難な問題ではない。物價の騰貴に伴ふて、獨立の經營者の收益が自働的に上り、或る種類の工業家などは比例以上に利益を得て居るものがある以上は、俸給生活者の收入を自働的に增す方法も亦講ぜられなければならない筈である。即ち俸給は俸給として、他に別に手當を與へる。而して其手當は時に應じて伸び縮む事の出來るやうにして置く。物價が五割增せば收入も俸給と手當を合せて五割增すやうにする。今日日本銀行や大藏省の調査に據れば、重要なる食料品は戰前より二十三四割も上つてゐる。故に戰前に百圓の收入があつた人は、二百三四十圓の金がなければ元通りの生活が出來ない。小學校で三十圓取る人ならば六十六七圓或は七十圓位までの收入があるやうに手當を增す。而して其手當は物價が低下するに應じて減ずるといふやうに、俸給は別にして、手當は物價を標準に高低する方法が一番好いと思ふ。

斯かる特別の地位にある人の救濟を政府が斷行しないのは訝しい。政府の經濟は人民の租稅から成立つてゐる。物價の騰貴に伴なつて、土木費、衞生費も一倍乃至二倍以上に上つてゐる。今まで通りの租稅では駄目である。凡ての物價が昂騰すれば租稅を增徵するのは當然で、それに不平云へば、それは人民が無理である。封建時代ではないから、我々が自ら國家の經濟を料理して行くのである。租稅が騰貴しても、これだけ收入が增加して行つてゐれば世の中に不平はない。小學校は地方費で經營されて居るが、人民が之を負擔しないのは訝しい。小學校教員の收入の三十圓を七十圓に增す事は、我々が負擔すべきである。之れ程判り切つた事を斷行しないのは何故であるか。租稅を增徵すると、租稅の重なるものをなす地租、家屋稅、所得稅を多く負擔する者は金持であるから、之れが二倍になると先づ第一に金持が不平を云ふ。さういふ連中は平生うんと儲けて居る。儲けはさん〳〵儲けながら、租稅は出さない。政府も金持に遠慮して增徵しない。斯うして金持の鼻息を窺はなければ內閣が續かない。さういふ下らない政治の行はれて居るのは、人民に取つて大不幸である。我々はまるで金持に奉公してゐるやうなのである。之れでは駄目である。輿論を喚起して金持に進んで金を出させるやうにしなければならない。

此點になると外國の金持は餘程自覺して來た。英國の今年の豫算案に於て戰時と同じに財政が膨脹する、そこで麥酒稅や金持に對する負擔として遺產相續稅の率を高めた。千萬圓の財

を一息に許す時には、二割懸けられて二百萬圓の稅を拂はねばならない。二千萬圓以上は稅率四割で八百萬圓の稅を課せられる。議會には金持の代表者が出てゐたが此案は通過した。米國では所得稅の率を高めた。上になれば上になる程率を高めたのである。百萬弗の收入があると所得稅七十五萬弗を納めなければならぬ。百萬弗儲けて二十五萬弗しか懐中に入らない。之れが可決された。皆金持が自覺して來たからである。之につけても日本の金持の自覺が足りないと思ふ。政府が增徵の出來ぬ程增長して、金持が租稅を出し澁ぶるのでは悲觀せざるを得ない。若し政府が先々と先手を打つてやつて見れなければ、聲を大きくして運動をするより外に途はない。金持は傲慢で、ストライキでも起らないと天下は泰平だと思つて居る、私はストライキが良方法だとは思はない。況んや教育家の增給運動などは理想的とは思はないけれど、或る意味の運動をしなければ世間が認めない。所で六月の末に小學校の教師が日比谷公園で大會を開かうとしたが政府では手を廻して鎭壓した。其後小學校校長會議に於て生活問題が主として論議され、五割位の增俸があるやうになつた。其後S・M・U（俸給生活者同盟）が大手町の衞生館で開かれ、次いで判任官の增俸運動が七月十三日の日曜日に日比谷に大會を開くと云つて、其趣旨書を謄寫版に刷つて私にも送つて來た。所が其後ある新聞記者が尋ねて來たので其話しをしたら知らないと云ふから、其謄寫版を渡して新聞に書くようにと勸めて見た。すると其記者が手紙で返事を寄越して、あの事に關しては一切[illegible]載しないようにと云ふ政府からの命令があるから新聞には出されないと云つて來た。さういふ風に政府は頻りに此種の運動に干渉の手を廻してゐるのである。教育家や官吏が增俸要求の運動をやるのは素より望ましくないが、之を鎭壓する位なら何故進んで特別の地位にある者を救濟しないのであるか。物價は二倍し三倍してゐるのであるから、何うしても元通りの生活をするには二十五割はかゝる。それを僅か五割の增給などとは寧ろ滑稽である。此の生活問題の解決が出來ない政治家は駄目だと思ふ。幸ひにS・M・Uが出來、河津博士などが會長になられたのは大變喜ばしい事である。我々は世間に無理な要求をしてならぬ。勞働者でも同じで、世間の尤もと思ふ所を進んで行かなければ、折角の要求も貫徹する事が困難になる。俸給生活者でも變りはない。運動を起すのは下品な事ではない、團結して正々堂々と其要求を社會に爲すならば、世の中に不平は無くなる。運動は一種の安全瓣で、社會も大に注意する事になる。餘り不平を内に鬱屈させて置くと、遂には面白くない事が生ずる。幸にS・M・Uが組織されたのであるから、之が自治的に行はれ、よく統一されたならば、それだけでも何物かゞあると思ふ。

俸給衣食者生活難問題に就きて

法學博士　神戸正雄

(一)

一口に俸給衣食者といふても色々の種類があつて一概にはいへない、大體、國家公共團體公益團體等、非營利的事業に從事する者と、狹義の營利事業に從事する者との別があり、そして其の何れに於ても高給者と低給者とがあり、其間に事情の一樣ならざるものがある。而かも營利事業と非營利事業との別といふても其區別の困難なるものがあるといふのは、例之、政府の營む營利的事業の如きは、政府の營む以上は、純然たる營利事業とはいひ又難る。併し又純粹なる公益事業でもない。其れから高給と低給との別といふことも何れの處より以上又は以下を高給といひ低給といふかは隨分六つかしい問題であり、別に中等とでもいふものを設けても良いが、其にしても矢張り、上中下の間の區劃は困難である。細かく詮議すると六つかしくなるが、大體に於て今日の我邦にて生活難を訴えて居るのは公益事業に從事する低給なる俸給衣食者である。之に異り營利事業に從事する高給俸給衣食者に至ては、近時却て益々生活境遇の向上を享受して居る。(勿論其に若干の例外はあるであらうが)。而して此二の極端の中間に立つて居る人は各場合に於て區々であるが、其も大體から見て公益事業の方の人々が一般に不利を被て居る。戰前と比較して物價騰貴の割合には其俸給が增して居らない。物價の十五六割增加に對して三四五割の增俸では困難の程が察しられる。營利事業に於ける低給なる俸給衣食者に至ては、近頃、其高級者や、肉體勞働者の收入の增加に比較してこそ其俸給の上り方が少いが、公益事業に於ける對等の人に比すれば餘程優良になつて居り、處によつては物價騰貴と平行又は其以上に良くなつて居るもある。で問題は何としても公益事業に從事する者の問題が主となる。

(二)

營利事業に從事する俸給衣食者に至ては、右にもいふ如く既に大體物價騰貴に伴ふて其待遇が上ぼつて居るのみならず、尙ほ此上ともに其地位を向上せしむる爲めに、既成の勞働者組合に加入し、又は新に組合を作て資本家に對抗して運動を爲すことを妨げない。彼等は將來此道を取るであらうし、又彼等が此道を取つたからといふて、資本家の方にて無下に之を排斥し、

此組合に加入した者は採用せぬなどといふことは六つかしからうと思ふ。今日では彼等俸給衣食者の團體が幼稚だから、私の處では左様な亂暴な人達は使はないなどといつて居らるゝが、間もなく左様のことをいつて居ては、良き人の得られざることになるであらう。今日其々資本家の處では其處の使用人を奴僕扱して居るさうであるが、其は段々と維持の出來ざることになるであらう。早く時勢の推移に着眼して其を止めた方が萬全である。此からは資本家も勞働者も無形の事業てふものの下に働く對等の人格者といふ者で往かぬと、甘く往かなくなると思ふ。私は其邊の考慮が資本家側に望ましい。

(三)

處が公務事業に從事する俸給衣食者は現在も物質的待遇が甚れなゝのたるのみならず、彼等が其地位を向上する爲めに組合運動をすることも正當ではない。近頃、外國では巡査などが組合運動をする傾が出來、隨て其同盟罷業をも開くことになつた。又日本でも或府縣では下級の官吏、更には中等學校及小學校教員の同盟罷業、同盟怠業なども現はれたと聞くが、其は私は凡べて不當と思ふ。營利事業の貪慾なる資本家に對してこそ、勞働者の組合運動を認むべきであるが、公益事業に從事する者が左様なことをするのは不都合である。彼等が其職務を供する相手方たる國家又は公共との間の關係は、決して對等なる者の間の純經濟關係ではなく、不對等なる者の間の純道德關係である。勿論彼等が俸給を受るだけに於て經濟關係はあるが、此は此兩者の間の主たる關係ではなく、第二次的の關係で、主たる關係たる兩者の間の道德關係から、其に附帶して此經濟關係が生ずるものである。で國家公共に仕ふる者は自己の全力を以て之に仕ふるの道德上の責務を感じなければならぬ。又之に仕ふる者も、其々資本家の使用人となりたると異り、此公に仕ふる場合には少しも自己の人格を辱せらるることなく、而も彼が爲す所は凡べて世の多數の人々の福祉を進むることになるから、彼等は報酬の多寡などを眼中に置かずして仕事することが出來る。又而かすべきものである。彼等に與へらるる俸給は彼等の仕事の報酬といふよりは、むしろ其地位に相當したる生活を爲すの資料といふのである。其多寡增減を普通の賃金(少くとも從來の意義にての)などと同一に見てはならない。全く報酬の意味がないとはいはぬが、此意味は第二次的であり、隨て從人が其仕事の功を誇り報酬の大小を云々するが如きは不心得至極である。役人達は右の如き道義關係に意を用ゐて、全力を注いで其仕事に從事すべく、夫の營利を行ひ暴利を占むる資本家に對する階級鬪爭の心持にて、國家公共に對すべきものではな

い。

（四）

但然し國家公共よりいへば、其役人に對して其純道德關係のみ振り廻はして、物價騰貴により困る所の役人を傍觀すべきではない。俸給が役人の地位に相當したる生活資料たる以上は、假令役人が其道德上の義務を守つて沈默するとしても、進んで相當の處置を採らなければならぬ。即ち一方には俸給を物價騰貴の割合だけ上ると共に、他方には物價騰貴抑制の政策を講ずる。前者の爲めには增稅を斷行し、後者の爲めには通貨の緊縮なり、各箇の生活必需品の輸出禁制乃至は價格公定等を行ふとが肝要である。此等を政府が等閑にして居れば、如何に役人には如上の德義上の義務ありといひたりとて、彼等も生活脅威の前には動物性を發揮し、道義をも無視せざるを得ざることとなる。其處になると最早理窟を放して事實の問題となる。又斯の如くにして或程度を超ゆれば德義をも無視するのが人情の自然又は必然のことであつて、其處に矢張り一の動かし難き道理もが存在して居る。

（五）

斯くて政治家には折角、役人の俸給をして物價と調和せしむるとに全力を用さらんことを希望しなければならぬが、又役人に於ては飽迄も其道義關係に十分考慮を拂つて、物價騰貴の脅威に拘らず、其職務に忠實にあつて欲しい。補公の誠川殉死[illegible]の心掛があつて欲しい。斯くて彼等は此物價騰貴に抵抗する爲めに、其生活方法の改造修訂を行つて、自簡の態度及能率を傷はざる範圍に於て、有功に消費を行ふとにつき一段の工夫を要することと思ふ。日本人各階級に共通なる不經濟的消費は別として、此種の階級に特に從來存在したる間違つた考方を改めるやう、此に特に注意を仰がうと思ふ。それは從來、此種の人々は役人の威嚴を示す爲めに衣服とか、特に住居に對し不相應に大きな支出を爲す傾のあつたことである。此等は此からの時代には馬鹿げたことで、凡べて其收入相當の粗末なもので辛棒すべきである。勿論彼等が公の仕事をする時の氣分は、天下蒼生の爲めに高尙な仕事をするといふとにつき自尊自重を持つて居らなければならぬが、其衣住といふ如き外形的の事物については全く頓着しないだけの氣分にならなければならない。營利事業の使用人の贅澤なる生活振に對して羨望するやうな卑劣な考を出してはならない。尤も其は近頃の如く唯物的風潮の盛な時代には望み難いことでもあらうが、併し修養によつて此氣分に[illegible]れないことはなからうと思ふ。私は今や滔々として墮落せんとしつつある我邦の役人に此心掛の修養を勸むるものである[illegible]

俸給生活者問題

早大教授　安部磯雄

俸給生活をする者は社會の中に特別の地位に立つて居る。俸給生活者以外の者は大抵獨立の經營者であつて、自分の資本で自分一人で事業を經營し、それに由つて自分の生活費を得て居るのである。けれども俸給生活者と賃銀勞働者とは、自分で事業を爲ないで、他人の仕事に傭はれて報酬を受けて居るのであるから、特別な地位に立つて居るといふのである。それで物價騰貴といふやうな經濟上の變動が起ると、俸給生活者は他の階級の人々の受けないやうな甚だしい影響を受ける。獨立の經營者であれば、物價が騰貴する場合には、それに應じて自然に其人々の收入も增加するやうになつて居る。少し極端な言葉で云へば、其人々の收入は物價の高低に因つて自動的に上下し、或は增減する傾向を有つて居る。中には物價の騰貴に因つて比例以上に自分の收入を增す階級さへある。先づ其著るしき例を云へば工業家で、尙ほ其他生產事業に關係するものである。斯ういふ階級は物價が騰貴しても、比較的廉い原料を買入れて、それが出來上る場合に餘ど高くなるので非常に有利な地位に立つ事になる。之れは工業家許りではなく、商業家も其恩典に與る。仕入れる時と賣る時との間に多少の時間が隔れば、價はずん／＼高まつて比例以上に利益を得る。

それから又商業家の中に又一種の階級がある、即ち小賣商人で、資本も少く極く小規模でやつてゐるが、之も物價の騰貴につれて利益を受くるとも、決して損はしない。彼等は卸値が高くなると零すが、其實物價の騰貴は、或意味から云へば小賣商人の暴利を貪るに由る。物價の騰貴に付け込んで値段を上げて行く。爭はれぬ事實は公設市場を設けて安い物品を市民に提供しようといふ企てが起つたのでも證明される。確かに小賣商人は物價騰貴に由つて其生活費を高められはするが、同時に儲けもそれだけ增加するのである。

斯く考へて見ると、收入を得つゝある人に二つの階級がある。第一の階級は獨立の經營者で、之れは物價の高低に直ちに順應して行く力を有つて居る。だから物價が昂騰すると其收入を殖やし、之に反し物價が低落すると其收入を減ずる。即ち機械的自働的に高低する事が出來るのである、之に對して他の一方には、俸給生活をして居る階級がある。之は前にも述べた通り、獨立に事業を經營するものでなく、他人の事業に入り込

み、約束した報酬で生活するから、若し傭主が增給するのを停たなければ、決して物價騰貴に出つて收入を增さない。それから此の外に他人の事業で働くものに賃銀勞働者があつて、之れは數も多い。此二の階級は獨立の經營者でない點に於て一致して居る。けれども物價騰貴といふ事になると、勞働生活をする者の方が比較的有利の地位に立つて居る。一つは勞働者の平生の生活費が俸給生活者のよりも割りに苦るしい。漸く衣食の費を得て居る丈けで餘裕がないから、一旦物價が騰貴すると、眼に見えて生活費に困まる。十割五割と眼に見えて來るから辛棒が出來ない。さうなると、斯ういふ事は言ひ度くないが、俸給生活者などのやうに自分の地位などを考へないから、遠慮會釋も無く賃銀の增加を要求し、甚だしきはストライキを起こす。それが爲めに俸給生活者より困難を切り抜ける事が容易である。のみならず、物價が騰貴しても、世間の景氣が好くなるので勞働者の需要も增加し、又一般の物價と共に賃銀も增して來る。今日では勞働者の賃銀は、大概の者は戰前の二倍若しくは二倍半になつて居る。最下等の土方などで、戰前一日大概五十錢であつたものが今では一圓五十錢位取る。だから勞働者の方が物價の騰貴について早く順應して其收入を增して行く事が出來る。同じく他人の事業に働いてゐても、俸給生活者と賃銀生活者との間には之れだけの差がある。

更に同じ俸給生活をする者にも種類がある。營利事業に働く者、卽ち會社・工場に働く者は同じく他人の仕事で働いて居つても多少の融通がある。物價の騰貴につれ工業家や會社の景氣も好くなり、配當が殖える。故に臨時の手當も十分になり、莫大なボーナスを給與されるから、其生活も割合に樂で、不平もさう起らない。然らば何ういふ俸給生活者が困難を感ずるかといへば、營利を目的とせざる事業に從事する俸給生活者が一番打擊を受けるのである。營利を目的とせざる事業に從事する者の代表は、一は官吏で、二は敎育家である。まだ他にもあるが、之が代表的の二大階級で、此二つは今日餘程苦しい立場に在る。併し官吏も敎育家も階級があり、上の方は苦しい中にも何とか方法がつく。官吏などでも月に二百圓以上を取つて居る人は割りに樂である。敎育家でも百五十圓位の收入があれば、何んなにでも自分の生活費を切詰めてやつて行ける。併し下級官吏特に巡査になつて來ると實に何とも云へない困難な生活をしなければならない。敎育家の方では、一口には云へないけれども、小學校の敎師、中學校の敎師の或る者などは隨分樂ではないと思ふ。家又は社會問題を論ずる者が第一に注意を拂ふべきは巡査、學校の敎師及び中學校の敎師等である。

斯ういふ階級が特別の地位に立つ事を認めるならば、之に對する救濟法はあると思ふ。政治家や輿論の認めなければならぬ事は、俸給が物價と自働的に高低するやうな方法を設ける事である。之れは決して困難な問題ではない。物價の騰貴に伴ふて、獨立の經營者の收益が自働的に上り、或る種類の工業家などは比例以上に利益を得て居るものがある以上は、俸給生活者の收入を自働的に増す方法も亦講ぜられなければならない筈である。即ち俸給は俸給として、他に別に手當を與へる。而して其手當は時に應じて伸び縮む事の出來るやうにして置く。物價が五割増せば收入も俸給と手當を合せて五割増すやうにする。今日日本銀行や大藏省の調査に據れば、重要なる食料品は戰前より二十三四割も上つてゐる。故に戰前に百圓の收入があつた人は、二百三四十圓の金がなければ元通りの生活が出來ない。小學校で三十圓取る人ならば六十六七圓或は七十圓位までの收入があるやうに手當を増す。而して其手當は物價が低下するに應じて減ずるといふやうに、俸給は別にして、手當は物價を標準に高低する方法が一番好いと思ふ。

斯かる特別の地位にある人の救濟を政府が斷行しないのは訝しい。政府の經濟は人民の租税から成立つてゐる。物價の騰貴に伴なつて、土木費、衞生費も一倍乃至二倍以上に上つてゐる。今まで通りの租税では駄目である。凡ての物價が昂騰すれば租税を増徴するのは當然で、それに不平云へば、それは人民が惡るい。封建時代ではないから、我々が自ら國家の經濟を料理して行くのである。租税が騰貴しても、これだけ收入が増加して行つてゐれば世の中に不平はない。小學校は地方費で經營されて居るが、人民が之を負擔しないのは訝しい。小學校教員の收入の三十圓を七十圓に増す事は、我々が負擔すべきである。之れ程判り切つた事を斷行しないのは何故であるか。租税を増徴すると、租税の重なるものをなす地租、家屋税、所得税を多く負擔する者は金持であるから、之れが二倍になると先づ第一に金持が不平を云ふ。さういふ連中は平生うんと儲けて居る。儲けはさん〳〵儲けながら、租税は出さない。政府も金持に遠慮して増徴しない。斯うして金持の鼻息を窺はなければ内閣が續かない。さういふ下らない政治の行はれて居るのは、人民に取つて大不幸である。我々はまるで金持に奉公してゐるやうなのである。之れでは駄目である。輿論を喚起して金持に進んで金を出させるやうにしなければならない。

此點になると外國の金持は餘程自覺して來た。英國の今年の豫算案に於て戰時と同じに財政が膨脹する、そこで麥酒税や金持に對する負擔として遺産相續税の率を高めた。千萬圓の財産

十二大家書畫會

規定

一、本書畫會の筆者左の如し（順序なし）

大口鯛二先生和歌 富田溪仙先生畫
佐々木信綱先生和歌 長野草風先生畫
高濱虛子先生俳句 山村耕花先生畫
河東碧梧桐先生俳句 津田青楓先生畫
黑木欽堂先生漢詩漢品 石井柏亭先生畫
中村不折先生漢詩漢品 長原止水先生畫

二、會費金六拾圓也（他に送費ヶ地六拾錢、滿、鮮、臺等の殖民地八拾錢を要す）

三、申込金等一切不要、會費は揮毫出來の節居宅代金引換小包郵便にて現品と引換の事（但し外國等代金引換小包郵便を取扱はざる所は會費前納の事）

四、色紙、扇面、短冊各四枚合計十二枚の中、書六枚、畫六枚を十二ケ月に組合せ一組となす、右十二枚は必ず十二先生の揮毫せしもの各一枚を以て組合す事（十二枚中短冊二枚だけ普通形にて他の十組は總て普通より大形のものなり）

五、申込期限十月三十一日。募集數、二百組限りとす。依て期限内と雖も豫定數に滿ちたる場合は謝絶すべし。

六、揮毫出來期限は申込みを受けたる日より十日乃至五十日間とす、發送の際は一日前に案內狀を送る（但申込一時に多數なる時は揮毫多少遲延する事あるべし）

七、申込の際は普通郵便端書に（貴協會開催の十二大家小品書畫會に入會致し候間、揮毫出來の節は居宅代金引換小包郵便にて發附相成度此段申込候也）と記し住所姓名を明細に記入して、なるべく姓名の下に認印を捺し（東京市麴町區元園町中央美術協會）宛て投函の事。

別に印刷せし明細規定書あり御申越し次第贈呈す

東京麴町區元園町
中央美術協會
電話番町九段八四一番
振替東京八五七三番

島村民藏氏新著

◇最新刊◇

近代文學に現はれたる兩性問題

（中判クロース裝幀箱入美本　定價一圓六十錢〇送料八錢）

本書は近代歐洲文學を通じて見たる男女兩性問題の研究にして諸文豪の作品を經として多數哲人の思想を緯として『永遠の女性』『人間としての婦人』『個人としての男女』異性としての男女』『性に對する世界苦』『性的戀愛と結婚』『子供の國』の諸項目の下に、性に對する近代人の精神爭鬪、破壞と建設、現實と理想を組織的に文明史的に討究敍述したる先人未着手の新研究なり。

馬場孤蝶氏新著（定價一圓五十錢　送料八錢）

鬪牛

文壇の耆宿、悠然として文學、社會各方面に涉る縱談横語を試む。肉鳴り骨動く『鬪牛』の壯烈編を始めとして、該博の知識庫は輕妙の老筆を以て本書に傾注せられあり。

秘密

近松秋江氏新著（定價一圓六十五錢　送料八錢）

梢風物語

村松梢風氏新著（定價一圓五十錢　送料八錢）

紫水圖

小杉天外氏新著（定價二圓三十錢　送料十二錢）

東京市飯田町一丁目二番地　株式會社　天佑社　振替東京一〇一二八　電話番町一一七九

家庭醫學叢書

全部六十冊完成　定價各冊金貳拾五錢　郵稅各冊二錢

吉川醫學博士述●お產の話
井澤醫學博士述●小兒病の話
千草醫學博士述●耳鼻咽喉病の話
山田醫學博士述●神經衰弱の話
額田醫學博士述●肺結核の話
岡醫學博士述●皮膚病の話
佐藤醫學博士述●婦人病の話
廣川醫學博士述●淋病の話
佐藤病院長述●黴毒の話
森肛門病院長述●肛門病の話
杉村醫學士述●ヒステリーの話
南醫學博士述●胃腸病の話
中原醫學博士述●外科療法の話
森醫學士述●呼吸器病の話
竹中ドクトル述●性慾教育の話
森醫學博士述●病人看護の話
中村醫學士述●精神病の話
菊地醫學士●脚氣とリウマチスの話
佐藤ドクトル述●寄生蟲の話
竹腰醫學博士述●小兒傳染病の話(上卷)
同醫學博士述●小兒傳染病の話(下卷)
竹中ドクトル述●感冒と肋膜炎の話
岡崎醫院長述●有益な食物の話
阿久津醫學博士述●男子と生殖器病の話
森醫學士述●良藥と毒藥の話
落合ドクトル述●尿病と遺精夢精
近江ドクトル述●女子生殖器病
菊地醫學士述●消化不良と其治療
宮原ドクトル述●肺炎と其の他の肺疾患
森醫學士述●頭痛の話
高橋醫學士述●妊娠と避姙の話
杉本醫學博士述●便秘と下痢の話
森醫學士述●注射の話
上醫學士述●眼病の話
落合ドクトル述●科學的美容法の話
額田醫學博士述●糖尿病と腎臓病の話
土田醫學博士述●腦病の話(上卷)
同●腦病の話(中卷)
同●腦病の話(下卷)
岡崎醫院長述●有效和漢藥療法の話
竹中ドクトル述●肺病有効療法の話
衛生新報社編纂●物質的健康増進の話
同●化學的健康増進の話
同●精神的健康増進の話
同●滋養食物と滋養剤の話
同●兒童健康増進法の話
同●婦人健康増進法の話
同●黴菌と消毒の話
同●生殖衛生の話
同●營養療法の話
同●癌の話
横手醫學博士述●理想的飲食物の話
小川醫學博士述●心臓病の話
宮原ドクトル述●理學的療法の話
森醫學士述●肺傳染病の種
森醫學士述●肝臓部と盲腸炎
竹中ドクトル述●神經衰弱と腦病の話
味齒科醫學士述●齒と口腔病
菊地醫學士述●胃潰瘍と胃癌
高橋醫學士述●花柳病の話

體力養成叢書

定價各冊金三十錢　郵稅各冊金四錢

大澤醫學博士述　冷水浴と冷水摩擦
窪田醫學士述　滋養物の攝取(上卷・下卷)
二木醫學博士述　腹式呼吸
遠山醫學博士述　深呼吸
栗本博士述　海水浴
伊藤衛生新報主幹述　呼吸靜座法

健康法研究叢書

定價各冊金三十五錢　郵稅各冊金四錢

森醫學士述　健腦法
竹中ドクトル述　強肺法
深瀬ドクトル述　胃腸健康法
宮島ドクトル述　食養健康法
菊地醫學士述　運動競技に依る健康法
以下順次刊行

通俗治療養生法叢書

定價各冊金三十五錢　郵稅各冊金四錢

千葉醫學博士述　目鼻咽喉病治療養生法
額田醫學博士述　肺結核治療養生法
岡村醫學博士述　皮膚病治療養生法
阿久津醫學博士述　生殖器病治療養生法

發賣元　東京市銀座通新橋際　新橋堂
振替東京二〇〇番
電話銀座五九一番



日本に來てからの俺

＝「私の自叙傳」續篇＝

大泉黒石

京都時代

俺の話は東海道のやうに眞つ直ぐだ。

長崎へ歸つた年の夏、故郷の中學で友達になつた圭吉と二人で京都へ高等學校の入學試驗を及第に出掛けた。長崎から京都まで可なり長い道中を汽車の中で圭吉は親切に俺に漢文を教へて呉れた。今でも感謝してゐる。

處が試驗なんてものは不思議なもので、危ないと思つてゐた俺が及第して、落ち着いてゐた彼が落第したから俺は申し譯がなかつた。試驗の前の日、實は圭吉が「俺だつてビールの半ダースは造作なく飲める」と威張つた。俺は酒の上で他人に壓倒されるのが嫌だから、「よし。のんで見ろ。夕飯を食つて、洗湯へ行つた序に散歩をするから、その時のんで見ろ。飲めたら偉い。試驗は合格だ。」とけしかけた。

すると彼は「よからう」と、肩を聳かして、ビールの半ダース位、樂に片づけさうな氣勢を示した。圭吉の方では俺が奢るのだと考へたらしい。俺の方でも奢る積りでゐたんだから。

俺と圭吉は岡崎の下宿屋を出た。大極殿の松林を通り拔けると、必ず疏水へ出る。其處を智恩院の方へ出た。圭吉は濡手拭と石鹼とを兩手に握つてゐる。俺は二十八圓入りの蟇口を袂の外から、握つて歩いた。

圭吉は英語が下手なので、いつも懷に變な本を隱してゐた。

俺は、今でも左樣であるが、漢文と來た日には全で解らなかつた。俺は外國で教育を受けたから、漢字に打つつかる機會が

なかつたんだ。その代り、西洋の漢文を知つてゐる。知つてゐるだけで何の足しにもならぬ。
この際圭吉に倣つて、俺も懐へ漢文の種を潜ませることを知つてゐるが、面倒臭いから、吹き通しにしてゐた。
粟田口で「お前も京都は始めてなんだね」と圭吉に言つた。
「さうだとも。その代り臺灣なら何遍も行つたぞ」と答へた。
彼の故郷は臺灣の基隆にあるんだ。親爺は其處の小役人ださうだ。
圭吉が中學に居る時、夏休みに臺灣へ行つて來た。生れつき色の黒い顔に物凄い艶が出た。その顔を其儘持つて歸つたものだから、アメリカ人のホヒラアと云ふ英語の教師が仰天して、「お前は一體何處へ行つたんだ」と尋ねた。すると圭吉は言下に I [illegible] Taiwan ですと答へて、はつはと笑つた。今でも、これで差し支へないと思つて居るだらう。
彼は柔道が旨い。脊が高くて、横が張つてゐて、よく人を毆る癖があつたから受持教師が恐れをなして彼を級長に推選すると、根が正直だから、大きな圓盤に赤いネル製の櫻の花を貼りつけゝ貰つて、他愛なく腕力を振り廻して喜んだ。卒業試驗の時、同病相憐むんだと稱へて、教師の目を盜み乍ら、俺の英語の答案と彼の漢文の答案を交換したから、たとへ尻の方でも、首尾よく卒業出來たんだが、さもなければ、何遍落つこつたか知れやしない。その時こそ、二人は心得べきことを心得てゐる間になつてゐたんだが、その實、圭吉は英語を知らんし、俺は漢文を知らなかつた。
散歩をする途中で酒を飲む積りでゐたが、京都は不便な處で、バーもカフヱーもない。
智恩院の山門と尼さんの學校の間の狹い路を、多分こつちへ行けば清水へ出られるだらう。そしたら酒を賣る家があるだらう、あの通り、八坂のパゴーダが見えるんだがと、丸山公園から祇園へ拔けた。すると、圭吉がパゴーダつて何だいと平氣で尋ねた。
清水寺に漸く着いた。音羽瀧茶屋で、約束通りビールを五本づゝ飲んだ。三本目の栓を拔くとき圭吉が突然「試驗なんて屁のやうなもんだ。心配するな。大丈夫だよ」と呟いて見せた。英語は知らなくても元氣のいゝ男だ。五本のビールを到々飲み盡して了ふと、「醉つた。醉つた。試驗なんて、試驗なんて屁のやうだ」と都々逸をやつて、赤毛布の上に正體を失つて了つた。
俺は茶屋の婆さんに賴んで、寺を一回巡つて戻つたが、まだ寢てゐた。翌朝試驗を受けたが、頭がぴん〳〵鳴つて敵はないとこぼした。生憎その日に英語が、から駄目だつたさうだ、俺は

何だか氣の毒で仕樣がなかつた。

　翌年漸く圭吉は入學を許された。けれども酒の上で、決して强情を張らない。酒は俺が强いと云ふことに定つたのもその時分からだと思ふ。

　寂しいと言ふことが直ちに美しいと言へるなら京都は美しい町に違ひない。金に屈托がないと、王城花に埋れて、洛水春の影長しなどゝ優美に形容する筈であるが、どうも俺の懐の立場から見ると、幾千年前から降りつゞけてゐる氷雨に叩き落された栗の朽葉が、地面に縋りついいたまゝで町一面に化石しかけてゐるやうに冷やかだ。南禪寺は松の名所で、左へ行けば祇園、右へ行けば如意ケ嶽の麓の白川へ出る。俺は滅多に左へ行けない。

　俺の小屋を見下ろす黄色い木犀の花がこぼれつくして、栗のいがが目立つ後から、比叡颪が小屋を脅やかしに來る。突然雨が降る。御陵の土饅頭を掠めた雨が堂の落書を消しに來る。參詣人が俺の小屋へ雨宿に來る。寺の厠と間違へて來る。

　町を通ると、暗い家の暗い窓口に、よく女の白い顔を見ることがある。あつと氣がついて立ち止ると、顔が引つ込む。たまには、こんな女も驅け込んで來ればいゝ。

　俺は學校へ行かないで、毎日死人とお寺の番をしてゐるやうな氣がする。他人が見たら、まるで天下茶屋の仇討先生が非人に落ちぶれて山門の下に、敵の來るのを氣長に待つてゐるやうな形に見えたらう。

　世界大戰亂で、カイゼルやロマノフも困つたらうが俺も弱つた。何しろスイスのラリーザ叔母から一文も送つて來なくなつた處へ、俺の持ち金も殆んど失くなつて了つた。スイスの叔母は前に書いたやうに露西亞人の學校を建てゝゐた。それが戰爭のために閉校したから、金は當分送れないと云つて來た。俺の生涯を通じてこれ程效目のある打擊はないだらうと思ふ。

　すつかり弱つて了つた。金が貰へなければ學校は廢さねばならぬが、折角漕ぎつけた此處で浪人に逆戻りするのも男らしくない。故郷には祖母がゐる。祖母は一人で食つてゐる。

　この年になつて祖母に食はせて貰ふのも不面目だし、ぼんやりしてゐると、明日の米にも差し支へるやうに窮迫して來た。

　そこで俺は圭吉に相談をした。何故圭吉に話を持ち込んだかと云ふと、彼は、京都の親爺から送つて寄越す金で食べて學校

へ行けない。それに、時々伜が京都にゐることを忘れると見えて月によつては一文も送つて來ないことが屢あつた。その用心に、彼は夜間だけ京極の青年會館の小使ひに傭はれてゐたんだ。

青年會館では困つてゐる人間に職業を世話するさうだから、兎も角も一番先に駈け込んで見たが、苦學生の內職は何にも見當らない。幹事が俺の顔を観察して「そんなにお困りなら、學校を退いて、神戸の棧橋で毛唐の客引をしたらどうです。それだと、ミカドホテルから頼まれてゐるから。いつでも世話して上げる。何。此處から神戸まで、汽車は僅かですよ。それが一番適業ぢやありませんか。」

と吐した。

「學校を退く位なら、苦勞はしまん。大きにお世話樣」

と云つて歸つた。京都なんて云ふ處は、お寺の修繕だけ喜んでする處だ。

俺は小さい時から困り通しに困つて來た。が、さて明日から食ふ米がなくて、突差の間にどうしやうかと思つて、途方に暮れたことは、さうたんとない。

あると云へば、巴里のリセーを追ひ出された時と、この時と、東京で原稿を斷はられた時だ。

東京の話は、それから後のことだから、此處で披露すると話が、しどろもどろになる恐があるかも知れない。然し大體が、筋も肉もない、のつぺらぽうの自叙傳だから、どうせ書くなら十年前のことも廿年先のことも、何だか、今朝見た夢のやうに、ごたごたと、人樣に解り難く、廻りくどく一本調子に列べてお目にかける方が俺に取つては大變都合がいゝ。

東京へ逐電して間もなく、食ふに困つて、小使錢に困つて、家賃に困つて、酒代に困つて、日本で思ひついた最初の原稿を買つて貰はうと思つて「新小說」へ出掛けた。

俺は垢だらけの着物を纏ふてゐた。俺は通り三丁目迄步いて春陽堂の店頭に立つて、御免なさいと云つた。俺は昔から見ず知らずの家へ、臆面なく出掛ける癖がある。乞食さへしなければ、どんな場所へでも、平氣で出かけて差し支へないものだと思つてゐる。圖々しいと云ふ方の性質だらう。

番頭が出て來て

「何か御用ですか」

と俺の着物を見た。俺は日本の文壇を知らない。枕草紙の作者が清少納言であつて、徒然草の作者が兼好法師であることだけ高等學校で敎つたから餘儀なく知つてゐる。だから、無論知名の文士で俺を知つてゐる者もない代り、不幸にして俺の方で知つてゐる文士もない。從つて本屋の店頭から一步を疊の上へ乘

り出して行くために必要な紹介狀もない。どんな物を書けば、いくらに買つて呉れるのか、文士でなければ、相手にするのかせぬのか、その邊の消息も知らなかつた。今でも知らない。せめて、紹介狀の代りにと思つて、勿體ない頭を惜しまず下げてやつた。

「編輯のお方はいらつしやいますか」

「編輯のどなたですか」

「誰でもいゝんです。」

「貴方樣は何と仰有いますか」

俺は昔から名刺を持たないで成長した男だ。この位贅澤な玩具はないと云ふ考へから、其時も持ち合せてゐなかつた。幸にしてこの番頭氏が穩やかに見えたから、疊の上に落ちてゐた紙ぎれに、鉛筆を借りて姓名を書いて渡すと、番頭は名刺と俺の顏を較べて、不思議さうに頭を傾け乍ら穴の奥へ潜り込んで、やがてまた鼠のやうに首を出して、

「何卒御上り下さい」

上れと云ふから俺も鼠の眞似をして、上つた。後で考へて見た。鼠のやうに體をまるめて這ひ込まないと、頭と足が穴の入口に突つ張つて入れないんだ。番頭は餘程鼠の修養が出來てゐると見えて、譯なく、ぴん／＼と出たり入つたりする。

西伯利監獄の窓は丈夫な鐵の棒で囚人を逃がさぬやうに出來てゐるが、此處のは鐵の棒がない。逃ぐる心配がないからだらう。其の中で、俺と編輯者とが相對して坐つた。俺はこんな時に狼狽へる性だから、到々初對面の挨拶を忘れて、

「昨日明治座で松井須磨子の「生ける屍」を見ました。その以前私が露西亞に居りますとき、露西亞の俳優が演つた「生ける屍」を何度も見ました。今、露西亞の芝居と日本の芝居とを見て、色々面白い處を發見しましたから、それを書かうと思ひます。つまり、印象の差であります。新小說に御願ひ出來ないかと思つて御伺ひに上りました。早く云へば、日本の俳優の演り方と、露西亞俳優のやり方の違つた點を書くのであります」

その時「生ける屍」が流行つてゐたんだ。何とか白秋と云ふ詩人が、「行かうか、戻ろか、オロラの下を」などゝ奇妙な唄を造つた時である。俺が一人で、あまり旨くもない日本語を繰つて來た頃、編輯者は、彼の堂々たる態度を寸毫をも崩さずに、忽ち

「君は一體何だい」

と來た。俺は腦天から鐵槌で一擊を食つたやうに感じた。俺は答へた。

「日本人でございます」

「日本人？むふ。日本人にしちや少し變だね」

「爺親だけが露西亞人でございます」

「左樣だらう！」

左樣だらうとは手酷い。

「先生は失禮ですが、お名前は？」

「田中と云ふんだ」

「はあ」

俺は恐れ入つて控てへゐると、「田中と云ふんだ」が

「原稿は出來てるのかい。」

「いゝえ。まだ、これから御相談の上で、書いていゝと仰有つたら書きます」

「左樣か。それで、何かい。君は一度何か書いて雜誌へ出して貰つたことがあるかね」

「どういたしまして、まだ一度も」

此處に至つて彼の態度が俄かに猛威を加へて、俺の頭上から壓迫して來た。俺は愈々恐れ入つて了つた。

「君は全體日本語で文章が書けるのか。先刻から話を聞いてゐるが、どうも、はゝゝゝ。解り難いね」

こうなると、もう笑はれても、毆られても、引つ込めない。

「少しは書ける積りです」

「少し書ける位で、「生ける屍」のやうな非常な複雜した心理を扱つた劇の善惡を批評するといふのは間違つてゐる。大膽過ぎるぢやないか。まあ見合せて置いた方がいゝだらう」

大膽過ぎて、間違つてゐるから、無勝手にぽか〳〵出向いて來るんだ。その位の事は本人、百も二百も承知してゐる。然し此處へ來て罵られたお陰で、「生ける屍」が複雜な心理を捏ね廻した芝居だと云ふことを敎はつたから有難うございますと禮を云つた。

最後に、俺の話は物にならず、穴倉の二階から、塵と一緒に掃き落されて歸つた。俺はもつと大膽な筈だつたが、よく考へて見ると足の裏から指先へかけて、泥がぺつとりついてゐたんだ。ハンケチの嫌ひな俺は、春陽堂の店頭で、一寸着物の裾で拭いたが、いくらか狼狽ゝ居たから、半分泥を殘して上つた。店先から、穴倉まで疊の上に足跡がついてゐた。愈々「田中と云ふんだ」編輯子を向ふに廻して强談にとりかゝらうとすると、ぼろ袷の裾蔭から、大きな、大きな十三文半の驚くばかりの足が泥つきいまゝで、鼈の首のやうな指を揃へて出てゐたから、氣がついて眞つ赤になつた。その刹那に俺は日頃の勇氣と無遠慮とを失つたんだ。でなければ、もつと氣焔を吐いた筈だ。俺は、人間が、がさつでも流石に上品だから、足袋の爪先が摺り

切れてゐたり、指の頭が汚れたりしてゐるのを人に見られるのが、苦になる。

その次に早稻田文學へ行つて、同じやうに中村星湖から斷はられた。丁寧に門の外まで出て來て追つ拂つた。二人ともいやな奴だ。「生ける屍」が何だか知らないんだらうと思つて引上げた。この位困つて行き詰つて、家へ歸れずに往來で思案に暮れたことはない。つい其時の苦しさを思ひ出して書いたら、到々こんなに長くなつた。

自叙傳の方から云ふとまだ東京へ來てゐない。京都で浮ばふか沈まふかと藻搔いてゐる處だ。取り敢へず京都の南禪寺の境内へ戻る。俺の家は石川五右衛門が隱れてゐた山門から遠くない。五右衛門が生きて居たら、可憐さうに、日本人とも西洋人ともつかない書生が門の下に恐縮してゐると思つて、彼は貧乏人に物を呉れて喜んだと云ふから、俺にも學校の月謝位は喜捨して呉れたらう。

俺はメリケン粉に湯をぶつかけて、辨當箱の中で捏ねて、團子を拵へて飢を凌いでゐた。そのメリケン粉が盡きやうとした。つまり俺の壽命が細くなる頃、圭吉が飛んで來て「よろこぺ。よろこぺ。英語教授の口を探して來た。中學生がお前にリーダを教はりたいといふんだ」

と云ふ。圭吉は米を食つてゐるので元氣がある。何處で、どんな男に教へるのか、篤と云ひ渡さぬうちに、

「これから直ぐ出掛けやうぢやないか。俺は寒くつてやり切れん。早く行かう。金儲けだぜ」

と、心細い俺に外套を脱いで被せたかと思ふと、俺に續け續けと云ふやうな格好をして、南禪寺から京極まで、むさゝびのやうに飛んで行つた。

基督教青年會館の三階の屋根裏に彼の別の巢があつた。俺を其處の暗い二疊敷へ、引摺り込んだ。

五燭の電燈の下に、二十歳前後の男がかしこまつてゐた。俺が部屋の中を覗いたとき、この男は垢じんだ前掛けの下へ兩手を突つ込んで、默禮した。俺は一見して いやな、死人のやうな不景氣な顏をした、小汚ない男だと思つた。

「圭公。この人か。俺に物を習はふてのは」

「左樣だよ。大泉先生です」

と前掛けの男に圭吉が俺を引き合せた。こんな前掛けに、先生だなんて第一滑稽だ。

「お前は中學生だと云つたぢやないか」

と圭吉に言ふと、突然、今迄かしこまつてゐた前掛けが、

「わてえ。中學生だつせ。」

と哀れな聲を出したから、意外だつた。

「君が？おい圭吉。京都の中學生は、頭を角刈りにして、外へ出るときは、みんな前掛けをしめてゐるか」

「さうかも知れない。何でもいゝぢやないか。折角會館へ賴みに來てくれた人だから、敎へてやれよ」

「それは構はんがね。君は中學の何年生です」

「三年どす。」

「幾歳になりますか」

「當年二十一歳どす」

して見ると俺より二つ下だ。三年生で徵兵檢査だとすると、屹度二度位落第したに違ない。容貌が何となく低能に見える。

「今日から毎晩此處へ來るんですね。君の家は一體何處ですか」

「京都市どす」

「京都市は解つてゐるが、京都の何處です」

「九條」

「へえ。そんな處から毎晩通ふつもりですか。偉いね」

「はあ。自轉車だと譯なう來られますさかい」

「成る程、自轉車か。」

すると前掛けが、卑しい聲で

「今晩から敎へて貰ふとしまして、月謝はなんぼにして貰ひまほか」

と云ふ。すると突然机に腰を掛けてゐる圭吉が横合から口を出して。

「三圓五十錢位でいゝでせう？なあ君。それで敎へろ」

「三圓五十錢？偉う高いなあ」

と前掛けが目を見張つて圭吉に振り向いた。

「わてえの學校が、あんた二圓で敎へて吳れまつせ。三圓五十錢は高いなあ」

　圭吉が個人敎授は學校の月謝より高いのが通り相場だと云つたが、前掛けは、偉う高い、偉う高いで頑として容かない。俺は癪に障つて、もう敎へるのは嫌だ。そんな安い先生があるもんか、お前一人の爲に南禪寺から四條下だりまで出張るんぢやないかと云はうと思つたが、馬鹿げて物が云へなかつた。

　それで、どうなつたかと云ふと、最後に二圓五十錢で手を打つた。古椅子でも買ふやうな氣でゐる。

　前掛けは、明後日親から小使を貰ふから、その日に月謝を納めると云ひ乍ら、揃へて前に突き出した膝の下から、何とかリーダーを取り出した。可笑しな藝をする男だ。リーダーを尻の

下に敷いて、先刻から、先生になる俺と、机に腰かけてゐる圭吉の形勢を觀望してゐたんだ。

　知らぬことゝは云ひ乍ら、飢えかけて、ひよろ、ひよろして餓鬼のやうな手つきをして、狂犬のやうな眼を据えてゐる俺を相手に、いつ物になるか解らぬ英語なんぞを、悠々と稽古しやうとする奴の氣が知れない。こんなに困つた先生が、親切に落ちついて敎へる道理がないぢやないか。前掛けのリーダーを見ると、鉛筆で振り假名がべつたりついてゐる。その下に左から右へ、橫文字の通りに譯が施してある。多分人の本を間に合せに借りて來たんだらう。これだと、習ふ方も樂だ。敎へる方も骨が折れない。その通り敎へる。

　前掛けの中學生は翌晩も、きちんと、ルビ付のリーダを、膝の下に敷いて、俺の出張を待つてゐた。

　リーダーの中に、瘦せ犬が骨つきの牛肉を盜んで人間に毆り殺される話があつたが、何だか、泥棒犬が可憐相でならなかつた。圭吉が時々顏を出して

「そのうちに、ぼつ〳〵生徒が殖えて來るから、辛棒してくれ」

と云ふけれでも、何だか子供をだますやうで、あてにならない。三日目には、前掛けが二圓五十錢持つて來る約束だつたから、勇躍して三階の屋根裏へ突進した。

　俺は二圓五十錢が、色々の形に化けて、目先にぶら下つてゐた。勢よく扉を開けて入つた。誰も居ない。前掛けの中學生も圭吉もゐない。暗い廊下を見廻したが誰も居ない。俺は烈しい不安に襲はれて、今に前掛けがリーダーを抱いて來るだらうと考へたから、寒い部屋に立つたり坐つたりしてゐると、圭吉が

「大變だ。大變なことになつた」

と事務室の方から、階段を夢中で登つて來た。俺の不安は寒さを伴ふて俺を疊の上から廊下へ突き飛ばした。

「この葉書を見ろ。今受付に投げ込んであつたんだ。」

と彼は一枚の葉書をくしや〳〵になる程摑んで持つて居た。俺は引つ奪つた。

「お前は何處にゐたんだ」

「活動寫眞の辯士を練習してたんだ。」

「辯士を?」

「まあ、いゝから兎も角も葉書を讀め」

俺は讀んだ。こう書いてある。

『拜啓陳者私事家事都合に依り、英語の夜學を中止致候。先生に今月迄敎へて頂きし御恩は決して忘却仕らず候。匆々頓首。

先生樣』

　意外だつた。俺は驚愕と憤怒と失望とを一瞬間に經驗した。

「亂暴な奴ぢやないか」
と圭吉が、わな〳〵慄えてゐる。
「前掛けの居所は九條の何處だい」
「それは聞かなかつた。まさかお前の英語を泥棒しやうとは思はないからなあ」
「お前が大膽呑氣だ。迂濶だよ」
「そう云はれると、俺が彼奴を世話したんだから、全く申し譯がない」
彼は眞つ黑な顏を崩して、みゝず色の唇の外へ、大きな門齒を二本はみ出して、氣の毒さうに頭を下げた。
俺は生れた時から眼が大きかつたさうだ。その大きな眼で、圭吉を睨みつけた。ずつと後で、圭吉が、あの時お前の眼は顏一杯に擴がつて怖かつたと言つた。小さい時、俺が肝癪を起すと、顏中が、眼だらけになつたさうだ。或は、今度も顏一面に眼が擴がつたかも知れない。何しろ俺は無暗に怒つてゐたんだから。腹が立つて其晩は眠れないで了つた。
メリケン粉がなくなる時の用意に、最後に殘された一枚の夜具を擔いで、寺町の質屋へ行つて、ぼろ〳〵の紙幣を五枚掴んで戻つた。山門が閉されてゐたから、垣を越えて、家へ入つた。家は、二疊と三疊で、戸と壁が隙だらけだから、新聞紙で貼り廻してある。このぼろぼろの紙幣が失くなる時、今度こそは俺が寂滅する時だと覺悟して、酒を買つて來て、唯一の財産であり、且つ南禪寺から家賃の抵當に押へられてゐる抽匣のない机を中央に置いて、四圓何錢を、その前に置いた。
そして、これから絶望世界の首途に、やけ酒を呷らうと云ふ段になつて、慌しく圭吉が馳け込んで來た。
「おや〳〵。大變な景色だね。德利があつて金があつて。どうしたんだい」
「默つてろ。お前に飲ませるんぢやない。俺が勝手にやるんだ。」
「はゝゝ。まだ怒つてゐるね。時に、おい〳〵。今度は確かな仕事を見つけて來たぞ」
「もう、懲り懲りだ。よく人を馬鹿にしたがる男だな」
「冗談ぢやない。先刻の謝罪をしたいと思つて、無理に仕事を引受けて來たんだ」
「何だい」
俺は一人で飲み始めた。圭吉は拱手として俺の茶碗の運動を眺めてゐた。
「繪をかくんだ。ユーゴーの Les Miserables を來週から俺の處で活動にやるんだ。俺は辯士を引受けた。電車の廣告を畫工に頼むと云ふ話だつたから、俺が幹事にせがんで、お前に書か

せやうと思つて來たんだ。決して嘘ぢやない」

俺は日頃から自分の繪を自慢する。圭吉も確かに俺の繪を認めてゐた。

少なくとも、ミゼラブルの廣告繪位は綽々としてかけることを信じてゐたから、こんな話を持ち込んで來たんだらう。

圭吉の講釋によると、廣告繪は長さ一尺、幅七寸の紙に繪の具を用ゐて、塗れば、造作ないんだ。それで、値段の處は、俺が特に會計の何とかさんに賴み込んで、十圓拂ふと云ふのである。

「ほんたうに、今度は物になるんだらうな。書いて了つてから一圓にまけろつたつて、駄目だぜ」

「其處は丈丈夫だよ。俺が直接に賴んだんだから。その代り繪が出來ても、俺の方で取りに來る迄、決して持つて來ちやいけないぜ。書家に賴んだことにしてあるんだから」

「ぢや今夜からかゝらう。いゝだらう」

「いゝとも。早い方がいゝ。」

「有難う。」

「どういたしまして」

この男から、どういたしましてなどと古典的な言葉を聞くは滅多にない。それにしても、圭吉は、よく色々の商業を拾つて來る男だと思つて感心した。

大學を出たら、新潟で辯護士をやる豫定ださうだが、それよりも一層のこと東京へ上つて、上野の山下あたりで周旋屋でも開業すれば、成功するだらう。彼は法科の生徒だ。俺は理科だ。

彼は廣告繪の注意をして歸つた。今度は俺の方が、いくらか氣の毒になつたから、二十錢袂の中に投げ込んでやつた。彼は新潟產の下素だ。うどんが好きで、誰の前でも憚りなく七杯落ちついて食ふ。俺が、製圖用のワットマン紙を延べ乍ら、ミゼラブルの圖案の下繪を始める頃、恐らく彼は、祇園坂下の夜泣屋の赤い提灯の下にうづくまつてゐたらうと思ふ。

學校は自由休業をしてゐた。一文なしではどうしても本を讀んだり、講義を聞いたりするやうな呑氣な心持ちになれぬ。それに、殆んど毎日のやうに、學校から小倉服の小使が來て、粗末な狀袋へ入れた月謝の催促狀を與れる。

會計係の言ひ分は、學校を休むのは、貴殿の勝手に屬するが、月謝だけは人並に納めろと云ふんださうだ、この小使の爺さんが、破れかけた緣側に腰を据えて、小倉服のポッケットから烟

管を出して、煙と一緒に、

「正確に何日納めるか、そこんところを云ふて貰はんと困りまさかい。どうぞ。定めて下さい。その期日によつては、待つこともあるだらうし。また除名することもあるだらうし」と大變親切に數へて呉れるが、ないものは仕方がない。

御覽の通りだ、翌朝の米に屈托してゐる。昨夜實は一枚の夜具を金に替へて來た位だから、月謝に至つては、何時納められるか、士寨見當さへつかぬ。小使さん、左樣云つて呉れ。親代りの叔母は戰爭のとばつちりを食つて、スイスで弱つてゐる。戰爭が濟んだら、何とかなるだらう。それ迄待てたら待つてくれつて。

京都へ舞ひ込んだ目的は確かに勉强するためだつたが、こう窮地に陷つて見ると、學問なんぞは、贅澤の沙汰だ。要するに坊つちやんの道樂だとことづけてくれと、つけ足した。無論放校は覺悟の上で、さう云つた。すると、爺さんが、呆れた顏をして、

「そないなこたあ、あんたはん庶務さんへ行て云ふてんか」

と云ふ。

「俺は忙しいんだ」

「遊んでゐなはるんちやろ」

「遊んでゐるもんか。これ、この通り、一生懸命ユーゴーの廣告ビラの製造をやつてるんだ。」

「ユーゴーかね。」

「お前知つてるのか。知るまい。それよりあのな。圭吉の處にも月謝の催促に行つたさうだね。爺さん」

「松原さんかね。行きました。」

「呉れたかい。」

「いゝえ。松原さんの姉さんが月末に來やはるさうで、それまで待つてくれつて、云はれました。困つたもんです」

「おい〳〵爺さん。圭吉の姉が來るつて。」

「はあ。月末に」

「彼奴には姉なんか、ないんだぜ。爺さんがだまされたんだ。庶務さんに云ふといゝ」

俺は可笑しかつたから椅の上で笑つた。爺さんが、さよなら、また來まつせと云ひ乍ら歸りかけたとき、圭吉も月謝滯納組の仲間なんだから用心せろと注意してやつた。

爺さんが戸口を離れる時、俺の身の周圍を、じろじろ見廻して出て行つた。あの老爺は一體、どう云ふ氣で、あんな商賣をやつてゐるんだらうと思つた。

久しく、橋本靑雨や厨川白村の偉さうた顏を見ないが、こう厭

が坐ると、結句、この手合とは逢はない方が、爽々しいやうだ。

俺は出來上つた廣告繪を一人で感心して眺めて、眺めては、俺は天才だと思つた。圭吉は馬鹿だが、俺の書いた物は何でも賞める。そして、いつも無條件で天才にして、くれるから好きだ。

橋本青雨は、俺の面を見ると決まつたやうに、お前は餘つ程勉强んと落伍するぞと脅かすが、俺は學校の門から一歩外へ出ると、すぐ天才になるんだと考へてゐたから、青雨の云ふことなんか、てんで耳に入れなかつた。白村は虫が好かぬ。

圭吉を待つてゐると、間もなくやつて來た。俺が繪を見せて、どうだい。これで物になつてゐるだらうと暗に彼の推賞を求めると、「結構々々。色の配合が素敵だ。レス・ミゼラブレス の下に立つてゐるのは西洋の悪魔かね」

と解らないことを言ふ。

圭吉は無學だから、レー・ミゼラーブルをレス・ミゼラブレスと讀む。その癖ヒューゴーとは云はない。いくら訂正してやつても頭が悪いから、すぐまたレス、レスと云ふ。奇妙な男だ。レ・ミゼラブルの下には小説の中に出て來る僧正を描いたつもりだつた。西洋の悪魔ぢやないと注意すると

「あ左樣か。成る程、僧正に見えるよ」

と云ひ乍ら、金は直ぐ屆けると云つて忙しさうに繪を持つて行つた。

繪を持つて行つた晩に、寒い。寒い。と呻き乍ら、蝙蝠のやうな形をして來た。

俺は確かに十圓呉れるんだと思つて待ち佗びてゐた。買ひ物の寸法まで立てゝゐた。處が、圭吉が、持つて來た紙包みの中には十圓の代りに五十錢銀貨がたつた一枚入つてゐた。

俺はまた憤慨した。

「何故こんな悪戯をするんだ。」

何か云つたら、酒德利を振り廻さうと、机の下へ手を延べてゐた。處が、圭吉は、不思議にまた低頭平身を始めた。

譯を聞くと、廣告ビラが急に不用になつたから、只戻すのは氣の毒で、五十錢持つて來たんだと言ふ。そんならいゝが、もし俺が本當の畫工だつたら、やつぱり五十錢で追拂ふ積りだらうかと云ふと、圭吉は、術なさゝうに、さあと云つて、こそこそ引揚げた。

處が、奇怪なことには、不用であるべき筈の繪が、三日して電車の中に現はれた。それは俺の繪ではなかつた。

俺はその市街電車から飛び下りて、そのまゝ、切符も渡さず

に四條へ疾驅した。
俺は今でも、瘦せぎすだが、その時も決して肥つてゐなかつた。反對に圭公は肥つた上に柔道が旨いから、喧嘩をすれば、どつちみち負けるに決つてゐる。然し俺は向ふ見ずで有名だ。算盤を彈いて喧嘩が出來るものか。今度こそ毆れるだけ毆つてそれから素敏しこく引揚げる積りで青年會館の屋根裏へ驅け込むと、出し拔けに面食つた。
迂濶に掴みかゝらうものなら、とんだ耻を晒すのだつた。其處に居たのは、圭吉でなくて、若い見知らぬ女だつたからだ。女は俺の血相に驚いて飛びのいた。
「圭吉はゐないんですか」
「はあ。松原さんを、先刻から待つてゐるんですけど、まだお歸りになりませんので」
と、怖さうな樣子をして、俺を見るやうな、見ないやうな、おど〱した風で、どうしやうかと云ふ處だ。
彼女は誰だか知らない。無論この女が、俺の細君になる可き女だとは夢にも思はなかつた。
巷說に從へば、俺の細君は美人でないさうだ。美人でないと言ひ切つて了へば、俺が氣を惡くすると考へて、「その代り愛嬌があります」さうだ。愛嬌の點は亭主の俺も確實に認めてゐる。

「活動寫眞のビラでも配つて步いてゐるんぢやないでせうかね」
「はあ。さうかも知れません」
と未來の細君は、もじ〱して、この野良犬のやうな獣が、どうかしやしないだらうかと云ふ樣子で、疊の上に坐りかねて、腰を浮かせてゐる。
「失禮ですが、貴女は圭吉の御知り合ひなんですが？お友達ですか？」
「は。はあ」
女は、奇妙な返事をした。そして、きちんと坐つたつきり默つて了つた。圭吉を毆りに來た俺は到々氣拔けした。
漸く圭吉が戻つて來た。俺の顏を見ると、いきなり、
「おや。來たのか。こないだは失敬」
と女と俺の中央に陣を構へた。
「何が失敬したんだ」
「また怒つたね。や。三輪子さん一寸待つて下さい。」
「當り前だ。俺の繪はどうしたんだい。あるなら返せ」
「うんあれか。あれはねえ」
と圭吉は、袖の中に煙草を探してゐる。仲々煙草が出て來ない。いつもなら、此奴が、俺に一本呉れろと云ふ可き處だが、今日

は俺が血相變へてゐるから、遠慮してゐるらしい。誰がやるものか。

俺は圭吉に逢ふたら、あゝ言はう、こう言はうと、豫め喧嘩の獨白を腹の中で拵へてゐた。愈々圭吉と差し向ふ段になると喧嘩の順序が滅茶々々になつてた。けれども、一つ位は是が非でも毆つて見せないと、癖になる。俺は外套のポッケットの中で拳固を握つてゐた。汗臭い拳固は今にも飛び出さうだつた。

「あれはねえ」

また、あれはねえと、煙草を、ごそ〳〵探して居る。煙草を喫まないうちは、答辯が出來ないんだらう。ざまを見ろ。

「お前は大體俺を何だと思つてるんだ。」

「俺の親友ぢやないか。」

「糞でも喰へ。餘り馬鹿にするな。俺は怒つてるんだぞ。お前が頼みに來たから書いたんだ。五十錢問題は別として、不用だと云ふ廣告繪は堂々と電車の中に出てらあ。お前も見たらう。」

「あれやお前の繪ぢやない」

「默つて聞いてろ。俺の繪ぢやないから癪に障るんだ。俺の繪が、拙いから、他の奴に畫いて貰つたんだらう。」

俺はこれだけでも怒鳴つて了ふと、いくらか胸が空く。然し考へて見ると、忌々しい。圭吉に言はす可き文句を俺が饒舌つたことになつたから、圭吉が、

「實は左樣なんだ。俺はお前の繪を傑作だと思つてるんだが、幹事が、承知しないから仕方がない。我慢してくれ。決してお前を馬鹿にしたんぢやないんだから。幹事がいけないんだ。解らずやなんだよ」

と言ひ乍ら、頭を下げた時に、突つ返してやる下の句が出なかつた。拳固も無駄になつた。俺は談判事にかけちや、から意氣地がない。權謀術數を知らぬから、いつも負ける。

仕方がないから、怒るのは止めた。嫌だ、嫌だと頑張つて見た處で、相手が蒟蒻の生麩ぢや張り合がない。

俺は今の處、目的も方針もない。行き當りばつたりで、どうかなるだらうと思つてゐた。南禪寺の小屋にはまだ三圓と若干ある。

俺は圭吉の側に女を置きつ放して歸るのが何だか氣になつて仕樣がないけれども、女が話をしかねてゐるし、圭吉が邪魔になるだらうと考へて、立つと、圭吉が慌てゝ

「一寸待つてくれ。面白い話があるんだから落ち着け。」

と外套の裾を捕へた。意外だから、何だと云ひ乍ら坐つてゐると、お前の將來を支配する重大な問題だから、兎も角も坐れと、到頭俺を据ゑ直した。圭吉の重大問題だから、柔道を稽古して、

もつと肥れと云ふだらうと思つたら、出し拔けに、お前は學校を止めろと途方もない相談を持ち出した。

「學校は、お前に、忠告されないでも、とうに止めかけてゐる。庶務の小使が毎日責め立てに來るんだ」

と迂濶に煙草を出したら、此奴が、重大問題も勿論だが、俺にも一本と、横着な手を出して、がつ〳〵喫み始めた。そして、庶務の爺さんが來るか、はつはつと笑つた。

女は相變らずつゝましやかに控へてゐる。

「お前は文學が好きだと言つたね。少しは讀んだか。」

「文學は好きだが、ちつとも讀まない。」

天才が無暗に他人のものを讀むものか。

「文章は旨かつたね。」

「旨いとも。」

「そこで。お前には誂へ向きの仕事があるんだ。今日職業紹介部へ頼んで來たんだが、學生ぢや時間の都合がわるい。」

「場合によつちや明日でも學校は廢業する氣でゐるが、何だいその仕事つてな」

「新聞記者をやるんだ。大阪朝日の京都版の、國太郎さんが助手が欲しいさうだ」

桃太郎は知つてゐるが國太郎は知らん。知らないけれども、國太郎の爲に助手が欲しいなんて生意氣だ。圭吉は作文は下手だから、とても人間の形容などは出來ない。只大きな男だ。始終洋服を着てゐると言ふ。よし。やらう。今から直ぐ行つて見やう。案内をせろと云ふと、圭吉は急に女を顧みて、會館の向ふ隣だから、お前一人行つて來るがいゝ。大體の話はしてあるんだと動かなかつた。氣の早い男だ。

俺は女より國太郎さんが大事だから、早速逢ひに行くと、始終洋服を着るが、俺が差し出した手製の名刺を熟々眺めて、その次に俺の骨相を熟々眺めて、漸く。

「『堂傳藻奈禮』と云ふのは君の雅號かね」

と迂散臭い目をした。俺は左樣と答へた。圭吉の云ふ通り法外に大きな圖體だ。それで、まん丸い。

俺は日本に來てから、餘りこんな種屬の男に出逢はないから珍らしかつた。俺が珍らしさうに彼を見ると、彼も亦、此奴は變つてゐると云ふやうな目をした。

ずつと後になつて、中央公論の親方に出會した。田中貢太郎さんに出會した。どちらも大きい。貢太郎さんは腫れてゐるが親方の方は膨れてゐる。然し國太郎に較べると、お話にならぬ程貧弱だ。俺は先づ國太郎の體格に壓迫されて、大きな聲が出なかつた。國太郎は第一に俺の經歷と境遇とを根掘り葉掘り聞

いて、記者になると、通信を書かなくつちやなりませんが、どうです。出來ますかねと、流石に出來ますまいとは云はなかつたから此奴は紳士の禮儀を知つてゐると認めた。短篇で何かあつたら見せなさい。小説でも感想でもいゝと命じた。俺は歡んで、もう新聞記者になつた氣で、出來合ひの短篇小説を携へて行つて見せた。すると、無躾にも、

「君は小説を知らないんだね」

と頭からどやして置いて、

「小説と云ふものは、こんなべらべら調子で書くもんぢやない。もつと、しんみりと、落ち着いて、靜かに人生を寫すんだ。例へば」

と彼はチョッキの釦の穴に豪然と兩手を突つ張つて、俺の小説を睨み据え乍ら。

「――俺は苦しまぎれに醉拂つて女郎買ひに行くんだ――などは丸で小説の文章ぢやないね。」

「はあ。」

俺は彼の左の指に輝く指環を見詰めてゐた。

「これなんか、小説にしやうと思ふなら。――私は自分の心を醉はせ神經を痲痺させる事によつてのみ、一刻の猶豫もなく私を追窮する不安や焦燥やから逃れやうと試みた。また激しい酩酊が必然に導く一切の思慮分別を撥無した精神狀態の中に、私の出口を持たぬ猛烈な野性を爆發させやうと試みた――とするんだね」

と云つて、俺の小説を卓子の上へ放り出した。國太郎は旨い。醉拂つて女郎買ふより、酩酊して必然に導いて貰つて、出口がなくて爆發した方がいゝ。國太郎は旨い。彼はこんな名文を、三十秒で敎へて異れた。俺は、すつかり感心して了つた。

小説は國太郎のやうに、心を醉はせて、神經を痲痺して、不安や焦燥から、まわりくどく逃れて、綺麗に白粉を塗つて胡魔化さなけれや駄目だ。

だから俺は、お前は小説を知らないと嚴しい宣告を受けても、異議を稱へずに、感心して引退つたが、翌日「新聞記者應募者ともあらうものが、能力試驗に自作の小説を見せるやうな心掛けぢや、とても使つて間に合はぬから一應お斷りする」と云ふ葉書を受取つたとき、國太郎に亂暴な奴だと、蔭で憤慨した。すると、圭吉が、何が濟まないのだか、頻りに濟まない。濟まない。國太郎はあんな皮肉な奴で、仲間から嫌はれてゐるんだと詫びに來て、二圓異れた。

「この金は何處から持つて來たんだ。出處によつちや受取らんぞ」

と一旦受取つたものを突つ返さうとすると、

「俺が活辯の前借りをしたんだから費つてくれ。ミゼラブレスが明日から始まるから見に來て呉れ。この間の女も來るぜ。木野も來るさうだ」

と云つたが、突然。

「あ。お前は木野を知らないんだつけ。大佐の息子なんだ。今度紹介する。だから是非觀に來い」

と獨りで饒舌つてゐたが、歸りがけに、

「こないだの女ね。あれや一寸美(よ)かつたらう」

と門齒を二本むき出して歸つた。忙しい男だ。學校へ行つたり、青年會館の小使をやつたり、夜になると辯士迄働く。高等學校の生徒で辯士を稼ぐ男だと云へば、此奴位なもんだらう。

　俺は高等學校で理科をやつてゐると前に斷つたが、やつて見ること、この位下らぬ學問はない。到頭理科に愛想をつかして、貧乏に志すと同時に、スイスのラリーザ叔母に手紙を、つゞけ樣(さま)に三本書いた。

　金は送つて來なくなつても、小言(こごと)だけは相變らず來る。俺は文學で飯を食はうと考へた。一途に思ひつめた。それには早稻田がいゝさうだから、これから京都を見限つて早稻田へ出奔して、文學をやるんだから、親愛なる叔母さんも贊成して下さい

と云つてやつた。

　文學なら貧乏で通る。理學はいけない。物にならぬ。仕事がしん氣で、眼が惡くなる。

　その返事が、今來た。俺の叔母ラリーザは、前の自叙傳で露西亞人だが、今度も露西亞人だ。手紙は露西亞人の破格(ブロクン)な英文で來た。

「妾の愛するキヨスキー。

　妾は日本の若者は非常に惡くて、勉强を嫌ふさうだが、ほんたうはみんな悧巧者なんでせう？」

　俺はラリーザ叔母がまた始めたと思つて先を讀んだ。

「——悧巧で勉强家なんでせう？　でなければ、ほんたうのJapan boysでないんです。そんな人を見倣つてはなりません。

　でも、そんな惡い學生を日本の教師は何故罰しないか不思議でなりません——」

ラリーザ叔母は日本とスイスと同じやうに考へて居る。

「學校の先生は、惡い性質や怠惰な生徒を遠慮なく放校することです」これだけが序で、これからが、猛烈な本文である。

「お前は、東京へ出て、ワセバ大學で（俺は手紙にワセダと書いてやつたつもりだ）學問したいさうですが、妾の考では、『ワセバ』は實務的でないから、お前には適せぬと思ひます。

お前は一體學問に幾年費す氣ですか？そして、その結果どれだけのことが出來ると思ふのですか！　これから實業學校へ入つて二三年のうちに卒業するんです。ワセバ大學へ行けば五年もかゝるではないか。五年の後に、それも、ひどく勉强した上でやつと卒業證書が貰へるだけではないか。それもいゝとして、その五年でとてもお前には卒業出來ますまい。」

これだから、俺は伯母から手紙が來ても、悅ばないんだ。

「お前はとても、祖母を連れて東京へ行くだけの金があるまい。若しあんな老婆を長崎へ置い行くと云ふお前は、不實者です。不孝者です。

お前は今廿一でせう。五年の後には廿六以上になる。日本で廿六は老人なんです。お前はその五年で金を費ひ盡すだらう。

無理をして勉强したゝめに惡い病氣にかゝらぬとも限らない。それよりも早く月給取りにおなり。

東京には無數の無政府主義者がゐるさうですからすぐ惡い知己が出來る。金も健康も時間も空しく消えて、最後に殘るものは病態と不成業の悔のみです。無政府主義者とならなければ社會主義者となるでせう。

お前は何故もつと、大人びないんだらう。

ヨーロッパでは、新聞記者や文學者となるためには學問ばかりで金がなければ、迚もなれません。人並み優れた體格を持たねば駄目です」

俺は國太郎を連想した。

「强い大きな心と勇氣と、力と、精力の持ち主でなければいけない。」

此處まで讀んで來ると、こう條件が澤山あつちや、迚も俺には文士や記者には向かない。いゝ鹽梅に國太郎から斷られたと思つて喜んだ。新聞記者志願に落第した矢先に、こんな怖い手紙が來るのは、愈々文學は俺の商賣ぢやないと、神樣が教へてゐるんだらう。有難い。ほんたうに有難い。俺は此處の下りを繰り返して讀んで、ラリーザ叔母は流石に世間師だと感服した。

「──善良な記者の位置を得ることは容易でありません。その繰新聞や雜誌の記者の立ち場は、大變六ケ敷しく、責任が重くて、心配が多い。」出來損なへば、世間の邪魔になるばかりだと云ふんだ。ひや〳〵する。

「お前が記者になつて拵へた新聞や雜誌は、反古籠の中へ投げ込む時だけ正當な存在の理由を持つてゐるんです。歐洲では今日學問をした人は掃く程ある。本を著したり、新聞や雜誌に寄稿する學者はざらにあるけれども、みんなストーヅの

たきつけにしかならぬものばつかりです。」
「妾の愛するキヨスキー。お前などが、なんで文學者になれるものか。お前は勇氣も精力もない。善良な文學者になる氣質もないではないか。」正直な伯母さんだと思つたら。その先にお前の惡口を云ふんぢやないから、誤解するなとあつたが。誤解のしやうがない。
「妾は只お前の身を案じて、お前の行く末を氣づかつて、お前の希望と計畫を考へると、どうしてもお目出度うと云へません。」
「何卒もつと悧巧におなり。妾は貧しい女です。この上どうして上げることも出來ない。これから先迚も長く學資の仕送りは出來ません。五年間！五年間！とても！とても！
一ケ月二十圓をこれから先六十ケ月！とても！とても！」
俺は一ケ月の學資に二十圓だけある銀行の手を經て送つて貰つて生きてゐたんだ。此處からペンを持ち直して。彼女は俺を商人にならねば飢え死すると。思ひも寄らぬ説に入るのだ。
俺はラリーザ叔母をいぢめたくないが。俺の理想と彼女の理想とが、巴里以來、どうしても妥協しないから、もどかしくつて仕樣がなかつた。學者になれば。いづれ貧乏したり。無政府主義者になるものだと書いてある。
「お前の、愛すべき父ワホヴヰツチは大學者でした」
「彼は二つの大學を終へました。卒業證書と金メダルを貰ひました」
卒業證書が。そんなに有難いんだらうか。金メダルなんさ、三丁目の時計屋に行きや、いくらも賣つてゐる。學校を卒業さへすれば。卒業證書を呉れるのは當り前だ。俺が高等學校へ入るとき。どうあつても卒業證書が必要だとあつたから。半分に切れた奴を持つて行つたら。酒井と云ふ校長が。半分はどうしたんだと言つた。どうしたかよく存じません。多分がらくたと一緒に屑屋に賣つたんでせうと答へたら。そんな馬鹿なことがあるか。も一遍よく探せと吐したが高等學校の校長なんてものは。話せない奴だ。確かに屑と一緒に拂ひ下げたやうに思てゐる。
「――彼は非常な勤勉家で二十一歳の時に」とまた始めた。
自分が稼いで勉強したと云ふんだらう。偉いんだらう。だから俺にも眞似をせろとつゞいてゐる。これが昔から彼女の口癖なんだ。
「妾の愛するキヨスキー。お前はまだ若い。お前は世間と云ふものをてんで知らない。用心しないと世間は妾たちに向つていつも不運を準備してゐます。」
ラリーザは。此處で。世間は惡魔の巣だと罵つた。學者が惡魔

の張本だときめつけた。

「妾の愛するキヨスキー。妾は云ひたいことをすつかり言つて了つた。可愛いゝキヨスキト。妾はお前のほんたうの友達です。お前の行末に心を惱すだけで、貧しいから、どうすることも出來ない。

妾はお前の國へ行けないのが悲しい。お前と一緒に生活せないから殘念です。

考へ深い神樣よ！妾の愛するキヨスキトは決して愚か者でございません。

お前の取る可き道は、今の學校を卒業るか、實業界に入るか二つに一つです。そして善良な悧巧な娘と結婚するんです。そして長崎が嫌なら、どこでもいゝから家庭をつくるんです。どれだけお前のために幸福だか知れない。學問や友達は決して的にはなりません。

お前の父ブホヴキツチは大層自然を愛してゐました。花園や森を愛してゐました。田舍の生活が大好きでした。ペトロダラトド大學生時代には錠前屋、鍛冶屋などの稽古をしたり、大工や左官の仕事を習つて、自分の家を自分で建てたり、生活に必要なものを自分で拵へたりしました。妾はその時分女學生でしたが、彼の色々の手傳ひをしたんです。ですから、彼が若し今日まで生きてゐたなら、屹度お前に向つて、妾と同じやうな忠告を與へるに違ひありません。學問も勸めるが、自分で生きる道も敎へたでせう。

妾は生涯のうちに、これ程長い手紙を書いたことがない。妾は疲れて了つた。もう終りに近づかうと思ひます。

妾の愛するキヨスキト。妾の言ふことを御聞き。そして忘れずに時々詳しい眞心からの消息を下さい。さようなら。キヨスキト。

愛する

マリヤ・ラリーザ」

それからお前のお祖母さんにも何卒よろしく。お祖母さんは、どう云ふ意見か報せて下さい。早く貞操な娘と結婚しなさい。と繰り返してあつた。中頃まで何でもなかつた。讀んで行くうちに俺の目には手紙の文字が突然見えなくなつた。俺は臆病者だが、すぐ涙を零す癖がある。突然、まつ毛の先から、ぽと、ぽとゝ手紙の上に落ちた。

「おい〳〵」と云ふ圭吉の聲が突然入口に聞えた。俺は手紙を隱して、振返つたら、やつぱり圭吉だつた。

圭吉の後ろには、この間圭吉の部屋で見た小柄の女が綺麗な樣子をして横を向き乍ら日傘の先で、土を弄つてゐた。

くどいやうだが、この女があとで俺の細君になつてくれたお三輪さんだ。俺は彼女の荒つぽい黒い髪と黒い瞳を最も賞讃した。始めの間は、この二つを正面から見詰めるのが怖かつた。

結婚式の場所にお三輪さんが仰々しい姿をつくつて物々しく俺と向き合つて坐つて、きちんとすました時、俺は乞食が革の鞄を盜んでゐるやうな戰慄を覺えた。俺にお三輪さんを呉れないと云つて猛烈に騷いだ親類共が、我を折つたのか、負けたのか兎に角、このお目出度い席に、續々押寄せて祝辭を列べた時、俺は赤くなつて、うろ／＼してゐたが、そのうちに俺の恐怖は頂點に達して、途中で戸外へ跳び出した。

お三輪さんと彼女の伯母の家で結婚した。二條の烏丸にあるんだ。俺は閾を跨ぐや否や出町の方へ、どん／＼駈け出した。後で聞いたらお三輪さんが驚いて、俺を探し廻つたさうだ。親類共が酷く憤慨して、こんな祝言は生れて始めてだと言つたさうだ。

圭吉に小聲で、あの女は何だいと尋ねた。すると圭吉が、うん長崎の人だよ。お三輪さんだと云ふと、地聲だものだからお三輪さんが、此方向いて、何かしら云つたかと思ふと頭を二つ下げた。

「上れよ。あなたもお上んなさい。」

「いや。上らん。今日は大變なことをやつたんだ。それで、これから引越すんだ。お前も手傳つてくれ。實はお三輪さんも半日借りて來た譯だか。いやかね」

「何だつて引越すんだ。今日から辯士をやるんぢやないのかい」

彼は辯士を止めた。詳しいことは歩き乍ら話すから、出て來いと云ふ。俺は何だか馬鹿に外へ出たくなつたから、それぢや行かうと云ひ乍ら、三人で南禪寺の山門を出た。

「何方だい」

「松原通り」

と圭吉は杖で大佛の方角を指して見せた。圭吉の話によると、中學時代に長崎の西山で隣り合せてゐた賴田と云ふ家の娘が東京から京都の二條烏丸へ來たさうだ。東京で大名屋敷へ奉公しやうと云ふ氣だつたが、まだ奉公口がきまらぬうちに嫌になつて、東京の伯父の家から默つて跳び出して來たんださうだ。

愈々烏丸に落ちついて見ると、以前隣りにくすぶつてゐた圭吉も京都へ出て、學校へ通つてゐるから、暇があつたら、一度學校を訪ねるといゝと、長崎から手紙が屆いた。俺が先夜青年會館の屋根裏で出逢つたのがその娘が即ちお三輪さんだつた。

それは解つたが、辯士の方はどうしたと尋ねた時、圭吉は眞つ黒に煤けたお能の面のやうな顏を赤漆のやうにして、大きな

馬鹿を空に向けて睨み乍ら、實は幹事の奴が、お三輪さんと俺が、屋根裏で話をしてゐたのを、扉の鍵の穴から覗いてゐたんだ。俺はちつとも知らないから、お茶を入れて來やうと思つていきなり扉を蹴開けたと思へ。

外で、あつと叫ぶ聲がした。あすこの廊下が狹いうへに、ほら、手摺がないだらう。到々轉げ落ちたんだよ階下へ。それがお前、幹事だから、默つてる譯がないさ。もと／＼故意にやつたんぢやないことは誰でも知つてゐるが、そのまゝ済むもんかとお三輪さんの日傘の奥を覗いて苦笑した。お三輪さんは、どんな顔をしたか見えなかつた。

「それで屋根裏を空け渡せと云つたんだね」

「そんな事は云はないけれども、辯士だけは斷る。お客さんに對して、どんな粗忽をするか解らないと云つたから、それぢや一層のこと俺は出て行くと云つて、悲田院に引越して、そこから通ふことにしたんだ。今から荷物を運ぶぞ」

俺はこんな話を聞くと、面白くて、やつて見たい氣になる。祇園神社の大通りで、圭吉は車を傭ふて四條の屋根裏へ行つた。

俺とお三輪さんは、悲田院の道を敎はつて先へ出掛けることにした。そのとき、お三輪さんは、氣の毒さうな小さい顔をしてゐた。

八坂下から護國神社の石段の前を通り拔けて、寂しい路へ入つた時、俺は默つてゐるのも變だから、

「幹事が三階から落ちたときは驚きましたらう」

と挨拶した。お三輪さんは益小さい顔をして、

「えゝ。ほんたうにどうしやうかと思ひましたの。松原さんの處へ行かなければよかつたんでんが、伯母が、かき餅を」

と云ひ乍ら微笑して、

「是非持つて行つて上げろと申しますので、」

「はゝあ。かき餅を食つて圭吉め、屹度お茶が欲しくなつたんですね。平生客にお茶なんか出すやうな男ぢやないんですから。それで幹事は怪我でもしたんですか」

「えゝ。腰の骨を折つたとかで」

と終ひ迄言へずに赤くなつた。俺は先達の敵を打つたやうな氣がして、痛快々々と手を拍つて笑つてやつた。そしたらお三輪さんも可笑しかつたと見えて笑ひ出した。

圭吉は元來無頓着な男だ。俺よりも遥かに無邪氣だ。この間、態々學校を休んで詩を造つたから見に來いと言つた。圭吉にも詩が出來ることを讀者諸君に紹介する。

「湯氣立ち騰る食堂の。中は眞黑にそめられて。皆ばな垂らす賄ひが。顔におどろの髭まばら。米やこれ南京の砂混り。汁は

山吹の色も濃く。嚙めど切れせぬ牛の腸。舌にまだるき脂肪皮」
「どうだい。旨いだらう。」
と云ふから。
「旨いね。一寸節をつけて唄つて見ろ」
とおだてると、彼はいきなり、汽笛一聲の節で唱つた。翌日學校へ行くと、この詩が告示板に貼りつけてあつた。圭吉はその前に突つ立つて、頗る得意だつた。

察するにこれはデモクラシイの詩だらう。ホイットマンより解り易いと感服して見せたら、元氣よく左様かねえと言つた。だから、世話になる幹事が腰を拔かしても平氣で喜んでゐられるんだ。

お三輪さんと俺は漸く悲田院を探し當てた。三十三間堂の前から狹い山路を紅葉寺の方へ行かずに眞つ直ぐに登ると、東山の中腹に孝明天皇の御陵があつて、竹籔をすかして悲田の屋根瓦を望む、と京都案内記にあるが、大體當つてゐる。
「徒然草」の中の悲田院を叩つ破して、以前あつた場所から此處へ建て直したんだから、材木は當時のものどすえと、坊主が自慢した。圭吉が此處へ引籠つてからも、ちよい〳〵出掛けた。坊主が尻を端折つて、冬枯れの柿の木の枝にとまつて、しみつたれな黑い實を、もぎ取つてゐると、若い細君が丸髷を脊中に擔いで、圭吉が借りてゐる部屋の、ぼろ〳〵の縁側から、もつと右、もつと右と指揮をしてゐたことがある。

圭吉は食ひ意地が張つてゐるから今に呉れるか今に呉れるかと待つてたが、一向呉れなかつた、ケチな坊主だと不平を鳴らしてゐた。お三輪さんが、
「あら、此處に石碑がございますわ」
と松並木に傾いてゐる大きな四角のみちしるべを指すから、苔を剝ぎ落したら悲田院と云ふ文字が跳び出した。
「此處から入るんです。ほら、向うに門が見える」
と云ひ乍ら茂りを分けて入ると、大佐の子が此方を向いて小便をしてゐた。俺とお三輪さんを發見すると、吃驚して、
「あなた方でせう、圭吉君の引越し手傳ひに來なすつたのは、私は木野と云ふのです」
と四角な帽子を取つて、栗々坊主をちよいと下げた。だから、大佐の子だと解つたんだ。三人はお互に初對面だ。圭吉は晩くやつて來た。これが引越しの日の印象である。簡單なものだ。
歸りがけ大佐の子は、紅葉寺の側で、
「私の家は此方ですから此處で御別れします。あなたは血天井を御存じでせう。あそこの直ぐ側です。木野と仰有れば、直ぐ解りますから、是非一度御遊びにお出下さい」

と云つて、俺とお三輪さんを、大街道の方へ追ひやつて、こそこそ逃げて行つた。

坊主から借りた寺紋入りの細長い提灯を中央にぶら下げて、俺とお三輪さんは歩いた。閑院宮別邸の前で、

「あなたは何方へ」

と俺が立ち停つた。そしたらお三輪さんが、まだずつと先まで御一緒に參れますのと小さい返事をした。清水と西大谷に狭まれた坂の下で、道が二つになつたから、

「あなたは何方へ」

と俺は立ち停つた。すると、お三輪さんが、まだずつと先まで御一緒に參れますわと答へた。まだずつと先は八坂神社と祇園遊里に面した小路のことだつた。火の消えた提灯をぶら下げて停留場に茫然立つてゐたら、お三輪さんを乘せた電車が走り出したから、俺は南禪寺へ戻つた。

何處かで見たやうな娘だ。長崎だと云ふなら長崎で見たやうな娘だ。京都だと云ふなら京都で見たやうな娘だと思つてゐるうちに眠つた。すると翌日不思議にお三輪さんがやつて來て、悲田院へ提灯を戻して來ますと、袖の中から蠟燭を二本出して見せた時、眞白な腕の下が袖の蔭から、ちらと見えて、俺はぞつとした。押入から古提灯を出してやると、彼女は後ろに隱してゐた風呂敷包みを內證で解いて、疊んだ提灯を押込まうとした時、包みが切れてかき餅が飛び出して、お三輪さんは赤くなつて笑つたやうに思ふ。

「圭吉に持つて行つてやるんですか」

「いゝえ。お寺樣へ持つて參りますの」

と恥しさうな返事をした。あんな坊主にかき餅なんか食はせることが要るものですか。それより、圭吉にやれば、助かる、と云つて喜ぶでせうと忠告をしてやると、彼女は暫く逡巡つてゐたが、

「では松原さんにしませうか」

と云ふ。

「それがいゝです。お寺樣には蠟燭で澤山ですよ。坊主の癖に昨宵はお茶一杯のめと云はなかつたぢやありませんか」

お三輪さんは奇拔な女だ。では、左樣いたしませう、ほんとうに左樣でしたわねえと俺の忠告を容れて呉れたから、何だか、嬉しくてたまらなかつた。すると、突然思ひ出したやうに、

「でも松原さんは、まだ持つてゐらつしやるから、これはあなたへ差し上げませう。伯母が拵へましたんです。御好きなんでせう」

と、また提灯を出して、メリンスの風呂敷を俺の膝の下へ押し

やつた。これが不意だから面食つて、それには及びませんと言へないで、坊主のものを到頭横合ひから頂戴して了つた、後で氣の毒だつた。お三輪さんに、歸りにお寄んなさいと云つた。すると彼女は歸りに眞個に立ち寄つたから正直な女だと思つた。

俺の顏を見るや否や「昨晩ねえ。松原さんの部屋へ狸が石を投げたんださうですよ。戸を繰ると誰も居ないから、蒲團の中へ入るとまた、石を投げる。また戸を繰ると誰も居ないのですつて。到頭一晩うつらうつらしてゐたんですつて。今朝お僧樣に實は昨夜これ〳〵だと云ひますと、お僧樣は、はゝあ。多分それは狸でせうつて。隨分怖いお寺ですわねえ。妾怖くなつたので、もう松原さんの處には行きませんから、あなたの方から家へいらつしやいつて云つて、とんで來ましたの。」

お三輪さんは頻りに怖い時の表情をして見せた。

「それは屹度狸に違ひない。私もそんな目に逢つたことがありますよ。殆んど毎晩のやうに。」

「こゝで？」

と彼女は、あどけない目を圓くした。

「此處ぢやない故郷ですよ」

と笑ふと、まあ、そんな怖いお故郷？いやですわねえ。どち？と云つたから正直に白狀すると、あら嘘でせうと最初は嘘にして居たが、終ひには、まあと云つて呆れた。呆れた處を見ると、お三輪さんは眞個に今まで俺の故郷を知らなかつたんだ。圭吉は迂濶な男だ。長崎の證明が漸く濟むと、餘程暇だと見えて彼女は漸くこげ茶色の疊へ座つた。

「あなたは八幡神社を御存じですか」

「お芝居の隣りでせう。知つてますよ。妾の親類がございますわ。妾の祖父の兄の家が」

「へえ。八幡宮の境内ですか。」

「えゝ。鳥居を二つ潜つて右の方」

「へえ。可笑しなものだな。あなたのお祖父さんの兄さんは何と仰有るんです。ひよつとしたら、私が知つてるかも知れない。」

「本川と申しますの。」

「それは俺のうちだ！」

俺が出し拔けに頓狂な聲を出して飛び上ると、彼女は、「あら、あなたは本川つて仰有るの！」と俺につゞいて慌てゝ起ち上つて、暫く俺と睨み合つてゐた。

俺が小說家だと、こんな時に、憚り乍らこれで濟ますんぢやないんだ。つゞけ樣に感嘆詞を三つばかり奮發するんだ。殘念乍らその邊の修養に缺けてゐて、小說の呼吸を心得て居らぬ。

今度閑太郎に逢つたら、男と女が十二年目に巡り合つた刹那の心理描寫はどうやるんだか聞かうと思ふ。そして改めて、お三輪さんと俺が目を廻す光景をも一遍始めから出直したいもんだ。

お三輪が

「キヨさんでしたの？」

と驚嘆して、べつたり座つたまゝ

「まあどうしたの！」

と敬々しく呆れた時に、俺は申し譯がなくて、恥かしくつて、額から膏汗がどろ〳〵湧いた。これからお三輪さんのことを、親しくお三輪と呼びすてにする。俺が八つの年、お三輪を大阪へ送つた頃は、ビワちやんと云つてた。

彼女には父親がない。母親が一人で彼女を連れて大阪へ行つた。何しに行つたか知らない。そのうちに俺も露西亞へ行き、佛蘭西へ行つたから消息が絶へた。長崎へ殘して置いた俺の祖母にも便りがなかつたさうだ。不思議なのは圭吉が長崎で下宿をしてゐた西山の家の隣りに、行衛不明である筈のお三輪の母親だけが一人住んでゐたことだ。

そして折々、何處からともなく、お三輪がお袋の家を訪ねて來たことだ。

どう云ふ譯だか、さつぱり解らない。何か深い譯があるんだらう。でなければ俺の家へ隱して居る譯がない。

そのわけは、東京へ移つてから、漸く解つた。その後俺とお三輪とが夫婦になれさうで、なか〳〵なれずに、ごた〳〵してゐた譯も解けた。

それが偶然圭吉の屋根裏で出逢つたんだから、出逢つた時は双方顔を見合せてもお互に知らずにゐた筈だ。狸の一件から到頭素性が露れた。お三輪が俺の遠縁だと聞いたら、圭吉めさぞ意外に思ふだらう。お三輪は幼ない時から俺が好きだつた。俺もお三輪以外の子と遊ばなかつた。俺の家と彼女の家は十町を隔てゝ、川があり、橋があり、田甫があり、丘があつた。その川を渡り田甫を越え、丘を登つて俺は彼女を訪ねた。

俺が行かぬ時は、彼女の方から、風船玉のやうに、ふら〳〵やつて來た。お三輪は六つだつた。俺が二つ多いから、滅多に喧嘩はしなかつた。

お三輪の家は春德寺山の下にあつた。彼女の父は農夫だつた。鼬色の柔らかな芝土に綠の絹絲を綯はせたやうな櫨の木が彼女の家を繞つてゐた。汁の多い若芽をふくらませた背櫨が、芝土の泥路へ枝を垂れてゐた。春の月を浴びた彼女の牧場は悲しめる美しい幽靈の如く寂かだつた。櫨の下の小路は青い雲のやうな牧場に蜥蜴の尾のやうに光つて弧を描いたまゝ黑い流れへし

なだれてゐた。流れは低く灰色の粘土を溶いてゆた〳〵と、銀鍔の鱗を重ねたやうな岸を舐めてゐたが雨が降ると、銀鍔を二分ばかり越えて、すゝゝゝと走り廻る赤い小さい粟粒のやうな水蟲を浮べて、それが小路へ流れ込むと、呼吸を塞ぐやうな草いきれの牧場へ湖をつくつて見せた。雨が止まぬ時は、山の赤土（まつち）が洗ひ落されて、流れが血のやうだつた。長崎四郎の亡靈が流れの血を浴びて朦朧と見えたさうだ。

　河床から膨れ上つた水は、ほんたうに血と泥を捏ねたやうに毒々しく波立つた。お三輪と俺は牧場の欄の下で、ぼんやり生活した。お三輪の家へ豚賣りの來たことがある。初夏の白い雲が雨上りの山の上から勢よく盛り上つてゐた。豚賣りの老爺は家の中へ入る前に、汗じんだ汚ない肌衣を脫いで、牧場の木柵に掛けて行つた。

　家の中でお三輪の父親と豚賣老爺の笑聲が聞えてゐた。俺は老爺の肌着の襟から腋の縫目にかけて無數に小さい白茶化けた蟲が匍ひ廻つてゐるのを發見した、今考へると、虱に違ひない。

　俺は水溜を掻き廻して泥まぶれになつてゐるお三輪を手招ぎすると、お三輪が飛んで來た。俺はうごめいてゐる虱を、お三輪に臺所から茶碗を持ち出させて中へ、一匹づゝ摘んで入れて、虱が茶碗の底から匍ひ上らうとするのを日向（ひなた）へ持ち出した。

　お三輪はその時分から悧巧だつた。彼女は、物置の柱の釘に懸けてある鷄の羽蟲を調べる時に使ふ蟲眼鏡を持つて來た。

　お三輪と俺は半日かゝつて、虱を天日で燒き殺した。

　その夕方だつた。

　俺は彼女に難題を吹つかけた。富次郎も松尾の倅も、春徳寺の坊主の子の龍雄も俺と同じやうに彼女の友達だつた。

　富次郎は質屋の子だ。松尾は地主の倅だつた。俺は、龍雄や松尾や富次郎が彼女の幼ない歡心を買ひに來るのが一番氣に入らなかつた。四人とも同年だ。俺は虱を殺した後で、お三輪に四人のうちで誰が一番好きかと尋ねた。すると、彼女が、あんたが一番好きだと答へたから、俺は眞個かと念を押した。お三輪は非常に怒つて、嘘だと思ふのなら妾の手を斬つてもいゝ、痛くつても耐（こら）へてお父さんに告げないからと大膽なことを云つて內證で臺所からナイフを持つて來て、俺に握らせて、妾の手をお斬り。痛くつても辛棒すると云つた。俺は思ひ切つてお三輪の左の手首を傷けた。細い絲筋のやうな血が噴き出たから、ナイフを棄てゝ俺の家（うち）へ逃げて歸つた。

　お三輪は感心な女だ。痛さうな顏をしてゐたが、誰にも腕の疵を見せなかつた。十二年見ないと、こんなに大きく、ませるも

のかと、俺は驚いた。

讀者には甚だ申し譯がないけれども、俺は戀といふ字が大嫌ひだから、此邊から端折つて、一足跳びに俺とお三輪の駈け落ちを描いて、東京へ突つ走らねば、もうあとに紙數がない。今この邊で惚れたとか、惚れないとか、煮え切らずにゐると雜誌の校正係が表に待つてゝ、可憐さうだから、思ひ切つて俺がお三輪に惚れて、お三輪が俺に惚れて、兩方で戀の渦を巻き起して、頗る混沌としてゐるうちに、お三輪の伯母が驚いて南禪寺へ飛んで來て、怒つたり、恨んだり、しまひには慰さめたりした。心中でもされちや、取り返へしがつかぬと思つたからだらう。そのうちにお三輪の母親が上つて來て、混雜に混雜を重ねて、あつちへ走つたりこつちへ駈けたり、夫婦にするのか、夫婦にしないのか、要領を得ない掛け合ひがすんだんだらう。夫婦になつたら、死んでも離れるなとお三輪に言ひ含めたかと思ふと、俺に向つて、何卒いつまでも可憐がつてくれと泣いて下から出られて、大いに赤面して、返事をしやうと思つたが、舌がこはばつて、齒の根が合はずに、脣が意氣地なくぶる／＼震へて、聲が塞つて出なかつた。そんな不思議な戀があるものかと云ふなら、俺の家へ來い。お三輪が細君になりすましてゐるから。

愈々、結婚反對黨を征服して、祝言を擧ぐる段になつて、出し拔かれて口惜しがつたのが圭吉だつた。それつきり向ふから來もしなければ、行きもしない。

お三輪のお袋が、南禪寺の小屋の中で俺に秘然言つたつけ。お前とお三輪は二つの年から許嫁だつたと。その時、そんなら、さうだと早く言へばいいと恨んでやつたら、處が實は、お前の祖母樣、姉樣と、八幡樣、松西が露西亞のお父樣の財產が欲しいから、お三輪をあんたにやるんだと云つたから、妾は、そんな、あさましい女ぢやない、この話は、こちらから打ち毀すと云つて、間もなく大阪へ去つて、以來杳然として消息をしなかつたんださうだ。結婚反對黨は、結婚後も、異人の俺にお三輪をやつちや天道樣に濟まない。祝言は祝言でと、秘かに離婚策を構じたから、怪しからん奴だと思つて、お三輪をそゝのかして東京へ駈け落ちした。

世間では祝言がすまないうちに駈け落ちするさうだが、俺は祝言してからやつた。不思議な夫婦だと思つた。

南禪寺には机が一脚置いてある。あれは小屋の借り賃だ。坊主のものになるだらう。庭箒や下駄や傘や靴は酒屋へやると、戸口に貼紙して來た。圭吉が來たから、しつかり勉強せろ。俺は東京で新規に蒔き直すんだと書き置きを、お三輪と二人で、

暫く囓つてゐたかき餅の中に入れて來た。圭吉は鼠のやうな男だから、先づ押入れを開けてかき餅を嗅ぎつけて、手紙を讀むだらう。

學校には默つて來た。お三輪のお袋には手紙で居處を知らせた。

俺は、とても髪の黑い女を、細君に持てまいと覺悟をしてゐた。だから、お三輪が愈々俺の細君になつて具れた時、俺は氣の毒でならなかつた。そのために、友達からも親類からも見限られて了つたんだから。

俺のお袋のケイタの苦勞を、今俺はお三輪に繰り返へさせてゐるやうなもんだ。俺と一緒に外を歩くと、通行人が目をそばだてるさうだから、いつも一町位離れて、見失はぬやうに散步した。お三輪は平氣だわと云ふけれども、俺の氣が咎めるから、成る可く一人で、外へ出る。

駈け落ちをする時、俺は裸一貫だつた。高等學校の制服の外に一枚のシャツもなかつた。お三輪がじみな伯母の着物を盜み出して、袖を縫ひ詰めて具れたから、俺は七條停車場から、へんなへら／＼の銘仙を着て夜發つた。新橋へ着くまで、俺は死んだ氣でゐたんだ。旅費だけは制服を賣つて拵へたから間に合つたが、新橋へ下車して、青い目で、べら／＼の女の着物の袖の隙間から、秘然東京を眺めた時、俺は嘆息と不安な恐怖の外に、何にも覺えがなかつたんだ。

俺は一人で逃げた。お三輪は翌朝早く伯母の家を拔け出すと云つた。俺は少しも彼女を疑はないで、長い時間大きな赤ら宇の長煙管を啣へ乍ら、へら／＼銘仙の蔭に隱れて、三等待合室のベンチで、勞働者の群や、汚ない朝鮮人と共に、お三輪を待つた。

大正六年の一月一日であつた。元日の夜明け頃、ぞろ／＼吐き出される客が、改札口から雪崩れて出て來る中に、小さい、ぽつんとしたお三輪の姿を認めたとき、溺死しかけてゐる人間が、救助船の影を發見したやうに心強く感じた。

東京時代

俺とお三輪は京橋に落ついた。

小說家になつたら、駈け落ち者はみんな東京へ來いと、書かうと思つて居る。何をしたつて、食つて行ける。

俺は石川島鐵工所の職工募集に應じて、正直な履歷書を出した。すると翌日面談するから來いと云つて來た。俺はお三輪が持ち出して來た例のべら／＼した女物の銘仙の裾を引摺つて出掛けたら、職工長が膽を潰した。

そうだらう。目色毛色が尋常の日本人とは違つてゐる處へ、紅絹裏の袷で表裝をしてゐたんだから。あれで日本語が出來なかつたら、そのまゝ巣鴨の病院へ追ひ込まれたかも知れない。

感心に日本語を饒舌ると思つて相手になると、どうして、大したもんだ。職工長は驚いて庶務係長を引つ張つて來て、こそ〱耳打ち話をしてゐたが、突然

「あなたは、經驗のない職工になるより、鑄物工場の書記心得をやつたら、どうです。見た處字も旨い。教育もあるやうだ。それに丁度空席があるんだから」

と云つた。俺は敬々しく頭を下げて、何卒よろしくと答へた。

その翌日から日給三十二錢五厘で鑄物工場の書記になつた。書記は嫌な商賣ださうだ。炭團のやうな、まつくろな職工の方から苦情は容かねばならぬし、技師や親方の機嫌は取らねばならぬさうだ。入つてから三日目に江口と云ふ古參の書記が愚痴を零した。

この江口と云ふ書記は俺より一つ年が上だ。佐賀の産だから、やあ君も九州か、それや有望だと大きな聲を出して、親方に矢ケ間敷しいと怒鳴られた、歸りがけに渡舟の中で、

「俺は此處に給仕の時から勤めて居るんだ。工藤や親方より、よつ程古いぜ」

と云つて、むさうな顔をしたが、口程でもない。古榮えのしない男だ。工藤と云ふのは技師で、江口の說によると、惡性工學得業士ださうだ。何だか、インフルエンザ見たいな技師だと思つた。始終鼻の穴へ綿を詰めてゐる。

俺を捕へて、

「どうだい。此處に辛棒する氣なら、社長に頼んで、晩だけでも、工手學校へ通はせてやらうか。俺んとこにも、ちつと遊びに來い」

と云つたが、有難過ぎるから、それには及びませんと斷つた。

この間銀座のまん中で、ひよつこり、このインフルエンザに出會つた時、彼は鼻の綿を押へながら、

「いよう。珍らしいね。あなたは大變偉い小說家におなんなすつたそうですね。社長が噂をして居りましたよ。何ですか、一ケ月の收入は千圓位あるでせうな」

とわめいたから、往來の人が集つて來た。俺は面到臭いから、それは大違ひでせう。さようならと、電車に跳び乘つたら、呆氣に取られて、工手學校へやつてやるから、ちと俺の家へ遊びに來いと云はなかつた。

お三輪が第一回のお産の仕度をしてゐる時、お三輪の伯母の

義兄がやつて來た。助三と云ふんだ。のんだくれで行商をし乍ら、到々此處まで流れて來て、俺の家へ當分漂着するから左様心得えろと云つて置いて毎日酒ばかり浴びてゐた。俺は相變らず二時間宛定刻に遅れて鐵工所へ通つた。

最初は、大きな天洋丸の煙筒のやうな釜でヅクを熔かすのが面白かつたから、仕事を放つといて、專らその方ばかりのんきに見物してゐた。

ヅクと云ふのは鑄鐵の雅號だ。煙筒が赤熱されて憤慨した拍子に臍を爆發させると、熔けた鐵がどろどろの赤い湯になつて、恐ろしい叫喚と共に、痛快に飛び出す。すると、炭團連が、素つ裸で、ワツと鬨を揚げる。珍らしものだから、事務所の窓の中で、呼吸をはかつて、手に汗を握つてゐた。すると、到頭インフルエザに見つかつて、

「仕事をせろ仕事を！お前の方の帳薄は、ちつとも捗かどらんぢやないか。何だつて茫然してゐるんだ」

と俺の肩を掴んで卓子の前へ突き飛ばした。すると、來合せてゐたインフルエザ共が、どつと笑つた。俺はよつぽど跳びかゝらうと思つたが、江口が、卓子の蔭で、袖を曳いてたから、勘辯してゐると、親方が、小脇に五六冊の帳薄を抱へてやつて來た。

「おい。新參！この帳薄はお前が預つてやつてるんだらう」

と鼻の先に突きつけた。いかにも俺が扱つてゐるんだ。

「左様です」

「これは一體何と云ふ字か」

と横柄に帳薄の表紙の獨逸文字を鐵槌のやうな指の頭で突いた。それは、日本で、職工精勤調と云ふんだと説明すると、彼は拳固をかためて、いきなり卓子を、どんと叩いた。

「誰が、毛唐の文句で帳薄を造れと言ひつけたんだ。この工場で、横文字の見える奴は一人もゐねえんだから、手前一人が、讀めると考んげえやがつて、ふざけた眞似をしやがると、承知しねえぞ。早く書きけえろい。畜生」

と恐ろしい目で俺を睨め据えて、さつさと出て行つた。

親方は炭團連を人民とする工場と云ふ專制政治國の暴君だ。こ奴には逆も敵はぬと思つたから俺は、温順に詫つた。

もと〱、帳薄を獨逸語で拵へなのは、インフルエンザ共が、寄ると觸ると、書記を馬鹿にするからだ。天井の註文を命じたり煙草を買はせたり、まるで小使か給仕のやうに追ひ廻すから、酷めるつもりで、俺一人で、企んで、やつたことなんだ。

江口は側で蒼くなつて慄えてゐた。酷める積りであつたが、あべこべに頭からどやされて、卓子を叩いて脅かされたから、

それから三日ばかり胸樣がわるくつて無斷で休んだ。

忌々しいから、行商人の助三と三日打つ通しで飲んでゐると、突然お三輪の義理の祖父が、中風病みの揚句に、ぽこ／＼京都からやつて來た。伯母の夫の親で助三の親にも當る。助太郎と云ふんだ。

人間の壽命は、いつ、どこで、飛んで行くか解らないもんだ。この老人も京都へ温順してゐれば、死なゝいで事濟みになつたかも知れない。なまじつか老爺の揚句にお三輪のお産の手傳ひに來たんだと云つて、俺の家の梯子段を無暗に上つたり下つたりしてゐたから、足を踏み外して逆樣に落ちて、階子段の下の火鉢に頭を打ちつけて、あつけなく死んだ。

お三輪は大きな腹を抱えて狼狽へた。助三は、泥のやうに醉つてゐたが、慄え上つた。俺は葬式代の心配で胸がつまつた。仕方がないから京都へ電報を打つと、五十圓送つて來た。

その五十圓は忽ちのうちに火葬場の切符となり、棺となり、早桶となり、葬屋の辨當料となり、線香となり、蠟燭となり、殘つたのが、酒代となつてなくなつたが、死んだ老爺の死骸のやうに、始めから、こつちのものでないと思ふと、さつぱりした。

困つたのは、老爺の胴體が並外れてゐたものだから、並みの早桶に抱えて入れたら、頭だけ桶の外へ出た。

すると助三郎がよし。と云ひ乍ら鴨居にぶら下つた。醉つ拂つてゐるから何をするか解らない。少々、持て餘してゐるんだから何をしやうと勝手に任せてゐると、宙に浮いてゐる兩足を、死人の二つの肩に乗せた。

乗せたかと思ふと、渾身の力を足の先へ集めて、うんと踏んだ時、可哀さうに、老人の肩の骨が、ぼり／＼と鳴つて、一二寸ばかり、棺の中へめり込んだ。

「おい。まだか／＼」

と鴨居にぶら下つて足を突つ張つてゐる。俺は助三の勇氣に惚れ入つた。

「まだ五寸も棺の外へ出てゐますよ」

「それぢや駄目かなあ。お前は頭の方を力一杯押して見ろ」

俺は滑らかな老人の冷めたい頭を力任せに押した。押す度に、いくらか前へ傾き乍ら、棺の中へ入つて行くが、手を放すと、筋肉の硬ばつた恐ろしい彈力でびつくり箱の猫の首のやうにまた飛び出した。

「いけないねえ。」

と助三郎は到頭諦めて、鴨居の手を放した。死人の頭は、助三郎の足と俺の手からと不氣味に漂つた。

お三輪は、眉を潜めて、兩手を胸に當て乍ら、怖々棚の陰に佇んで、見てゐた。俺と助三郎は、一先づ死人を寢かして置いて、大きな皿に盛つてあるすしを、臭い指で摘んで頬張り合つた。

「仕方がないから、も一廻り大きい棺を貰つて來るんだね。これぢや、蓋が出來ない」

と助三が自分で、葬儀屋へ走つて行つたが暫くすると、駄目々々、明日でなくちや、職人がゐなくつて出來ないさうだと、云ひ乍ら戻つて來た。かう云ふ譯で俺と助三郎とお三輪とは、早桶から首を出してゐる老爺と向合つて一夜臭い思ひをした。

火葬場から戻つて來ると一文なしだつた。仕方がないから、鐵工所へ給料の前借りに出掛けた。獨逸語で帳面を拵へて酷い目に逢はうとした親方を探して、不本意ながら、先日の詫をして、憐れみを乞ふと思つて、鑄物場を探し廻つたが、居ない。

事務小屋の入口で途方に暮れてゐると、木工場から突然ヴァイオリンの音が流れて來た。こんな地獄の底のやうな處にヴァイオリンは變だと思つた。金の工面が出來ないで、悄然と事務所を出て歸りがけに、木工場を覗いたら、眞つ暗な奥から、ヴァイオリンが聞えて來た。折々赤い火が閃めいた。閃めく度に赤い鬼のやうな人間の顔が輪をつくつて仄かに現はれた。ヴァイオリンの音は、その邊から傳つて來る。

俺か、眞闇の中に茫然突つ立つて、この不思議な光景を見詰めてゐると、出し拔けに後ろから俺の肩をぐつと掴んだ奴がある。

俺は驚いた。其奴の手を捕へやうとすると、

「おまへ、其處で何してゐる？」

と耳端で銅鑼のやうな聲がした。それと同時に、材木の陰から、また一人躍り出た。其奴が、マッチを摺つて俺の顔を覗いてゐたが、

「あ。書記の毛唐だ。脅かしやがる」

と云ふと、肩を掴んでゐた黒ん坊が、

「左樣か。」

と俺を地べたへ突きのめした。俺が悄然として、逃げ出さうとすると、

「まて〳〵。此方へ來い。今逃げられちや困るて」

と、二人がゝりでヴァイオリンの方へ、俺を引摺つて行つて、闇の中へ引据ゑた。俺は烈しく藻掻いた。時々マッチを摺ると、俺の前で車坐になつて、賽を振つて、必死に勝負を爭つてゐる猛獸のやうな職工の影が、十五六まで數へられた。

彼等は賭博に耽つてゐたんだ。ヴァイオリンを彈く男は意外にも山口だつた。山口は職工に傭はれて賭博を胡魔化す爲にヴ

アイオリンを弾いてゐたんだ。彼が樂器を持つてゐることも木工場が、賭博場であることも、俺は始めて知つた。

俺はその月末に馘られた。

馘りの宣告を下したのは例の親方だつた。原因は、朝寢をして定刻を二時間過ぎねば工場へ出て來ないこと。職工の缺勤調べが行き屆かないで、職工に餘計〇星をつけたこと。〇星を職工の金札につけると、其日の工賃が十錢ふえるんだ。

それから、職工と口を利くこと。職工と口を利いて仲よくすると、職工がつけ上つて、秩序が亂れるさうだ。まだある。親方が職工の中に混つて、賭博をして居る最中を俺が知らずに發見したこと。それに獨逸語を喋つてる奴は、工場に不向だと言ふこと。これたけだ。

月末の給料を與れる時、親方が、

「社長が手前に話があるさうだから、歸りがけ一寸行つて見ろ」

と怒鳴つた。行つて見ると、給料が上るんぢやなくつて、馘られた。面白くもない。給料を上げるから行つて與れつたつて、眞平だ。

馘られて意氣揚々として家へ歸ると、京都から、三輪の伯母

が爺さんの骨を受取りに來て居た。

それから間もなく淺草の今戸へ引越した。どう云ふ譯で穢多の群へ飛び込んで、牛の皮を剝いだり、豚の毛を挘たりして、血まみれになつて働いたかと尋ねる人があるなら食へなかつたからだと答へよう。板倉繩次郎と云ふお三輪の伯父の友達が京橋で火山灰の問屋をしてゐる。面到だから、板繩と云ふとにする。

板繩が新潟の稅關で、賄賂を取り過ぎたので、終いに露れさうになつたから、職を止めて、京橋に來て火山灰の問屋を始めたんだ。團十郎の顔に似てゐるから、芝居狂いの細君が板繩に惚れたんださうだ。板繩は欲の皮の突つ張つた男だ。露西亞が獨逸に宣戰した時、日本へ長靴の注文が來たさうだ。

何でも、東京の靴屋だけでは持て餘す程どつさり註文があつたから、新規の靴屋が、三河島にどし／＼ふえた。どう云ふ處から聞き込んで來たのか板繩が俺の家へ突然やつて來て、革屋が儲かるんで、すぐ明日から淺草の龜岡町へ製革工場を建てゝ、君に行つて働いて貰ふんだと一人で定めた。俺は食へない最中だつたから、革屋の番頭になつて見る氣になつたんだ。

俺が三河島邊に割據してゐる穢多の仕事に詳しいのは、そう云ふ譯で自分で彼等と同じやうな商賣で漸くでも飯を食つてゐたからだ。

その時分知らない奴が、俺の素性をよく聞きたがるから、西洋の新平民だと公言して、彼等を欺ばせてゐた。穢多なんて愚かな動物だ。西洋のこちとらもやつぱり牛や馬の皮を剝ぐかと云つた。剝ぐから西洋でも穢多なんだらう。

俺は京都から脫け出して來て、まだ一度もスイスのラリーザ伯母へ便りをしなかつた。お三輪と駈け落ちして途方に暮れてゐるうちに革屋になつて、子供が生れて、今盛んに泣いてゐるとは、どうしても言へない。言ふたら、お前やうな獸とは緣を切ると云つて寄越すだらう。

板垣の革屋は半年で沒落した。沒落する時は悲慘なものだつた。

彼は稅關で袖の下を歡迎するやうな狡猾な男だから、三十日間鞣液の壺へ漬けて置く筈の牛の皮を二十一日で引き揚げた。仲間の玄人が、旦那、それや駄目ですぜ。とても皮の心まで藥が通りませんぜ。燥かしてからブリキの樣に固ばつて了ひますぜと忠告をしたが、なあに大丈夫だと云ひ乍ら三千枚すつくり壺から出して陰干しにした奴　靴屋に別けて賣つた。みんなで六萬圓になつた。

「どうだい俺の腕は、とても先祖からの穢多共が敵ふもんぢやあるまい」

と威張つて、また空いてゐる壺に新らしい三千枚の皮を漬けた。

三十日間鞣液に漬けて置くのが定則ださうだ。一日でも早く引揚ぐる發明が出來たら皮一枚について十錢だけ餘分に儲かるんだつた。儲かるから板垣が[illegible]つてやたんだらう。

彼は頗る得意であつた。二度目に藥劑へ投込んだ皮はもつと早く引揚げて、まだ濡れてゐるうちに、賣り飛ばしてやると意氣込んでゐると、三千枚の牛皮を買つた靴屋が突然結束して押し寄せた。

代表者の一人が、

「あの革で露助の長靴を造つて、露助の檢査官に見せたら、念の爲一足無駄になるからと云つて、ナイフで出來上つた一足をズタズタに切つた。切り口を見るとちつとも藥が沁み込んでなくつて、眞白だつたから、露助は怒つて戻つた。翌日靴の註文を廢めるからと、日本のお役人を通して來たんだ。どうしてくれる」と溫順く理由を語つた後で、穢多の本性を表はして、板垣工場を叩つ壞せと騷いだ。工場は叩つ壞されずに濟んだが、板垣は三千枚の牛皮を棒にふつた上に、一露助の長靴一から絞りそこねた儲けを板垣から取れるだけ取つて、漸く默り込んだ。

板垣工場は翌日潰れて、俺は腐つた牛の牛皮を二三枚内緒で賣り飛ばして其處を引拂つた。

坂龜な芝居好きの妻君を犠牲にして、彼女の男の前で醜態を突いたのは、工場に來て、置いた革が、ぼつ／＼盜まれる翌々日であつたと思ふ。

だから、俺は、皮の話が出來る。革屋を始めやうと云ふ人があつたら、壺の中へは三十日漬けなさい、懲ばつて二十一日で引き揚げると大變なことになりますよと、敎へてやらうと思ふ。その時分俺は穢多もやつたが大學にも通つてゐた。學校は、ついこの間廢した。成業の見込みがなくて、月謝が滯つて、學校の門を潜るのがつらかつたからだ。

そのうちある官吏が西伯利へ行かぬかと云つて來た。西伯利は一度汽車で素通りしたことがあるんだ。

「西伯利へ行つて、何をするんです」

と問ふた。すると、

「戰爭が始まつてゐるから、どさくさ紛に金鑛でも占領するんだね」

「金鑛なんて、そんなに手易く行つてもいゝものかね」

「あゝいゝとも。過激派の露助に荒らされて、持ち主は逃げちまつたさうだ」

とその時は自分の病氣を他人にゆづるやうなたやすい話だつたから

「これならえ、なんだ」

とうつかり返事をしたら、

「ほんたうに出掛ける積りかね」

といやに念を押し出した。

「行くとも。さう云ふ譯だつたら行く。然し命に別狀はないだらうな」

と今度は俺が駄目を押した。するとその男が、俺の眞劍な樣子を眺めて、はゝゝ大丈夫だよ君と肩を叩いて笑つた。

この官吏がどこから、どう話を持ち込んだものか、間もなく俺はある會社から西伯利へ出張を賴まれた。無論俺ばかり行くんぢやない。その會社の重役が、こんど西伯利に支店を建てるについて、俺を通譯者としてお供を命じたんだ。

愈々出發する日に、官吏が來て、

「此度旨いことがあるぜ。あつたら俺も仲間に入れて呉れ。」

と云つたから、よし承知した。ごた／＼最中へ飛び込んで行くんだから、何かあるとも、あつたら知らせるから出て來るがいゝと答へて置いた。

すると、東京驛で、汽車が動かうといふ間際まで、見送り人の中に、きちんと、すましてゐたこの官吏が汽車がごと／＼動き出すや否や、慌てゝ跳んで來た。窓口につかまつた。

何か云ふことを忘れたやうに、口を動かしてゐたから、

「何だい。あつちへ行かんと危ないぜ」

と注意すると彼は細い聲で、

「別に用はないんだがね。西伯利へ行くと靴の裏に砂金が密着いて、歩いてゐるうちに動けなくなるさうだから、用心をしろよ。動けなくなつて、凍へちやおしまいだからな」

と心配さうな顔をした。そんなに砂金があつたら、少々動けないで、少々凍つてもいゝと、強がつたが今年東京へ戻るまで、靴の裏には一粒もくつつかないでしまつた。お蔭で凍らずに濟んだ。

俺には年老いた祖母がある。西伯利へ行くときお三輪へ預けて置いた。

俺が過激派に殺されずに舞ひ戻つた時、俺の顔を見て、

「妾が息のあるうちに、とても、よう歸つて來んともとんだばい。よかつた。よかつた

とぼろ〳〵凋んだ眼から涙を零し乍ら、もう何處へも行くなと云ふから、もうどこへも行かないと答へたらまた、よか〳〵と云つた。

俺の原稿が賣れるやうになつたのは西伯利から歸つて來てからだ。或るとき或る本屋に小説を賣りに行つて二人の客に出會した。一人の男は狆のやうな顔をしてゐた。これが生方敏郎さんで、今一人の方は二宮尊徳のやうだつたが、これが田中貢太郎居士だつた。その時貢太郎居士が俺の小説を見て旨い旨いとつづけ樣に赤い舌をぺろぺろと二度出した。

それから俺を中央公論の親方へ引つ張つて行つて、こ奴は物になるから、何か書かせろと言ふと、親方が、俺の話を聞いて、そんなら自叙傳を書いて見ろと云つたから、直ぐ書いたのが、ざつと此通りである。（完）

アナトオル、フランスの夢

井箆節三

これはアナトオル・フランスの小說「白い石」の中にある二つの物語の一つであるが、アナトオル・フランスの夢物語(ユウトオピア)ともいふべきものであるから、種々のユウトオピアを語つた序でに、「ユウトオピア物語」の補遺として、その梗概を玆に叙べる。(因に「白い石」は一九〇三年即ち日露戰爭以前の作である)。

或時數名のフランス紳士が、ロオマの古蹟を訪問して、發掘主任のジアコモ・ボニと懇意になつた。或日、それは五月の朔日であつたが、一行はボニの官宅で、雄大な廢墟を眺望しながら、古今東西の治亂興亡に就いて、爽快な談論を交換した。最初にボニの秘作に係る「ガリヨの傳」(使徒行傳第十八章第十二節乃至第十七節參照)が朗讀せられ、一同が之に和して各自の感想を叙べると、議論に花が咲いて現代列强の角逐に及び、最後に閑人ヒポリト・デユフルスヌが、「鹿角又は象牙の門から」と題した、一綴の原稿をポケツトから取出して、朗讀したのが以下の物語である。

＊

夜の一時頃であつた。もう休まうと思つたが、私は其の前に暫く窓を開いて、卷煙に火をつけた。をりからボア・デユ・ブウロニユの大通(アヴニユ)を疾驅する一輛の自働車のプウプウといふ唸聲が聞えたが、其外には羽蟲の唸聲も杜絶えて、四邊は悉く物靜かである。空には一面に星が輝いて居たが、空氣が善く澄んで居るので、その夜は取り分け星が美しく、白熱に輝いて見える。尤も星によつては、消えかかつたラムプのやうに、黄色を帶びたのもあつたが、しかし多くは紺靑で、その中の一つの如きは、いつまで眺めて居ても眼を離すことが出來ないほど、非常に美しく軟かに澄んだ神々しい靑味を帶びて居た。惜しいことに、私はその星の名を知らないが、どうせ人間のつけた星の名などは、彼等の本名ではないのだと思つて、それで私は滿足した。

私はこんなに無數の星があつて、それが單に單に吾々の住んで居る世界ばかりではなく、其外に幾つもの世界を照らすのに

と思ふと、ひとりで心に尋ねて見る、一體あの光の下は、どれもこれも吾々の太陽のやうに、吾々の住む世界のやうな、永久に苦惱にのみ充滿した地上ばかりを照らすのであらうか。それとも宇宙の何處かには幽玄微妙な世界もあつて、或る星は其の世界に光を映して居るのではあるまいか。無論吾々は別な世界のことを想像するにしても、結局自分の住んで居る此の世界を基礎にして推察するより外はないのであるが、しかし吾々は唯だ單に此の地上に營まれて居る生活の形式だけしか知らないのであつて、元來此の地球といふものが、遊星としても餘り上等なものでないといふことを考へると、どの世界でも全く此の通りだと信ずることは出來ない。ことによると幸福なのは、あの火のやうな狼星（シリユス）の光の下に生れた者で、もう老衰に傾いた太陽なぞの光を仰いで生を享けるといふことは、大變な不運であるのかも知れない。現に私なぞは他の人に比べると、敢て不幸な者とは思はれない。妻子の係累があるではなし、たいして富裕ではないが、生活のために營々として働くといふ必要もない。だから私なぞは先づ幸福な人間の一人といはなくてはなるまい。さういふ私がどうかといふに、それほど人生を愉快と思はないのだから、餘の人々はどうであらう、推して知るべしではないか。實に人間は憐れなものだ。尤もこれは人の罪でもない。假に天を怨むとしても、自然は本來無心であるから、自然を裁判するわけにも行かない。それでは社會はどうかといふに、社會は人間の天性の生出した當然の結果なのだから、既に自然が咎めるわけに行かないとなると、社會もまた責めることが出來ないわけだ。蟻の社會でも蟻の天性、鮭の社會でも鮭の天性から當然に出來たものだ。人間の社會でも同じことである。さうして地球といふ惑星では、すべて動物は食はずには生きられないのであるから、即ち地球は餓鬼の世界で、之に棲む動物は悉く貪婪殘忍であるが、その中でも最も智力の優れた人類は殊に貪婪である。古來貪婪は人間社會の根本道德であつて、實に自然が人間に賦與した諸德中の傑作である。だから私が文士であつたら、必ず貪慾の讃を書かうと思ふ。もしもそんな書物を著したからとて、格別社會の耳目を聳動させるやうな新味のあらう筈もない。これはもう道德學者や經濟學者が幾度となく取扱つた陳腐極まる問題なのだ。要するに人間の社會には貪慾と殘酷とが牢乎として拔くべからざる根柢を成して居る。

しかし、どの世界でも斯うであらうか。今私が眺めて居る星はあの通り無數であるが、それが悉く吾々のやうな人間ばかりの頭上に光線を浴せて居るのであらうか。何處の世界へ行つても、吾々のやうな人間が貪慾と殘酷とに永久に戰つて居るので

あらうか。――私は斯ういふ疑問を抱いて居るから、犬に隠かつた火の筆を見ると、どうも沈思默想せざるを得ない。

しかし、かういふことを考へて來ると、心が何となく明くなつて、人生は必ずしも醜惡にのみ充滿したものではない、寧ろ醜惡と善美とを兼ねたものだといふやうな觀念が今更湧いて來る。だから私は時々思ふ、人生はやはり善美である、若し醜惡のみで善美がなかつたならば、どうして善美と醜惡とを識別することが出來るものか。

數　以前から、モツアアトの樂曲(ソナタ)の節々が、瀏亮として鳴出して、白金の譜と薔薇の詞とを夜の空に漲らせて居る。これは隣家の洋琴家(ピアニスト)で、毎夜モツアアトを彈奏するのだ。私は窓を閉ぢて衣物を脱ぎながら、さて明日はどうして一日を送つたものかと思案して居ると、ふと私は一週間前から、ボア・デュ・ブウロニユで晝食(ランチ)に招かれて居ることを思出したが、あればたしか明日といふことになつて居たと思つて、それを確かめるために、卓上に開いたまゝの招待狀を覗いて見ると、果して「一九〇三年九月十六日。デュフルスヌ老臺貴下、本月二十三日、來週土曜日、云々、晝餐に御臨場被下度候、云々」とある。やはり明日だ。私は呼鈴を鳴らして召使(ヴアレエ)を呼んだ。

「ジュアン、明日は九時に起しておくれ。」

一九〇三年九月二十三日といへば、私は明日で丁度滿四十歳になるわけだ。さてこれからまだ何年生きるのか知らないが、今日までの經驗から考へると、これから何年生きたところが、格別面白い浮世とも思はれない。明日の晝食にしたところで、ボアの料亭へどんな人間が集つて、どんな談話に耽るかといふことも、もう大抵は分つて居る。「僕の自働車は一時間に六十キロメエトル走る」とか、「ブランシュはすけべいでいけないが、私には確かに惚れて居る」とか、「政府は社會黨にかぶれて居る」とか、「これからは少しばかりの遺産を相續するのは寧ろ迷惑だ、尤も獨身者は氣樂だ」とか、「僕はエピンドルに賭けやう、きつとラナワロを負かすよ」とか、「警察では何故思切つて惡人共を退治しないのか、僕にはとんと譯が分らない」とか、「どうでせう、フランスはジウのお蔭でイギリスとドイツとに賣られたやうなものではありませんか」とか、いづれ明日はこんな話ばかりを聽かされるのだらう。かういへば大抵想像せられるであらうが、私の交友といへば、まづ工場の殿樣、鑛山の王樣といつたやうな連中で、つまり（フランス）革命以來の成上り者の一族なのだ。同じ一類の私から見ても、とてもフランスの國威や國力を永久に維持することの出來るやうな頼もしい人間とは思はれない。唯だ銀の光りや金の光りで光るといふだけの一

とて、學問とか見識とかいふやうなものには、至つて貧弱な連中である、第一生れてから頭腦を眞面目なことに使つたといふやうな經驗もないのであらう。勿論かくいふ私自身も、多分には漏れない一人である。懶惰で無學で俗物で、折角此世に生れて來ても、一體どれだけの働きをするのかと思ふと、何一つとして出來さうなことはない、實にお恥かしい次第であるが、それでも私に幾分か、彼等ほど虛榮心が強くないとか、彼等ほど頭腦が愚劣でないとか、多少の自信がないでもないが、それも畢竟境遇の結果で、私の父といふのは一廉な實業家で、保守黨の代議士であつたが、私の十七歲の年に、内氣で無口で少女のやうな若い「師匠」を雇つてくれた。此の師匠は私のお傅をしながら、一方には革命運動に參加して、しきりに其方に盡力して居た。その人物の溫厚なことは實に驚くべきものであつたが、其後は幾度も監獄に入つたこともあつて、今日では立派に代議士になつて居る。其頃私は此の男が、國際無產階級に通信の手紙を出すときには、いつでも其の淸書をした。それから社會主義に關する種々の書物を讀まされた。私は此の男が敎へることを、餘り信用しなかつたが、しかし其のお蔭で社會といふものに眼を開くことだけは出來た。此の男の說明によると、今日の社會で尊重せらるゝやうなものは、すべて卑しむべきものであつて、卑しまれて居るものこそ、實は尊重すべきものである。それから私は此の男から革命に參加することを勸誘せられた。勿論此樣な意見や勸誘には贊成しなかつたが、結局私は斯ういふやうな結論に到着した。それは無知と僞善とは社會の秩序を維持する上に最も確實なものであるから、無知は尊むべきものであつて、僞善は敬ふべきものであるといふのだ。そこで私は父と同じやうに保守黨に籍を置いて、現狀維持を主張したが、それでは現在の社會を讃美するかといふと、事實は寧ろ反對で、私の魂は今日の社會の罪惡に對する嫌惡の感情で、いつでも一杯になつて居た。

私が段々眠りに落ちて行くと、何の譜であるかはしきりしないが、モツアートの數節が、まだ時々私の耳を掠めて、何だか斯う高葉の繁みに打建てた大理石の殿堂のやうなところへ夢を誘つて行く。

やがて眼が醒めると、もう耿々たる白晝である。私は大急ぎで衣物を着た。一體何故此樣に急いだのか、私には一向分らないが、私は衣物を着ると、何心なく街道へ飛出した、街道へ出て四圍の風物を見ると、私は悉く面喰つて、頓に反省の能力も出ない。尤も餘り面喰つて、反省の能力が停止したために、私の驚きはまだ大きくなるべきものか、私の心は此上にも驚

くといふことを忘れて、案外平氣なものであつた。かういふ場合に憖じひに常の　を取直したら、私は却つて安心して、狂氣か阿呆になるところだ。それほど周圍は激變して、何一つ私の見馴れたものはない。見馴れた庭樹でも芝生でも、何時しか消えて無くなつて居る。昨日までは大厦高樓が聳々と立並んで、互に肩を摩かして居たところに、今日は庭園を遶らした瓦葺の小家が點々として、夢のやうに散在して居る。私は自分の家がまだ有るかと振返つて見ることも忘れて、眞直にダウフアンの港の方へ歩いて行つた。ところが、それも今は無くなつて居たから、今度はシユルスヌの方へ行く通り、であつた筈の通りへ出て見ると、兩側の家屋の建方が全く一變して、此邊一帶の金持の邸宅としては、餘り小さな家屋ばかりで、如何にもをかしいと思つたが、しかし善く／＼注意して見ると、どの家も此の家も、如何にも住み心地が佳さそうで、綺麗な繪畫や彫刻や陶器なぞで美しく裝飾してある。家屋の土臺は道路から一段高く盛上つて、さうして道路は直線でなく、心地の佳い曲線（カアブ）を畫いて居て、何だか夢の國の繪を見るやうな配景を現はして居る。その道路を歩いて行くと、處々に横路が交叉して居るが、これも彎曲の道路である。それから電車とか自働車とか、すべて車輛は通行しない。路傍には木蔭が黒々と流れて、木梢には大きな鳥が棲んで居る、樹蔭には大きな噴水が湧いて出て、その美麗な壯觀とは、宛も空と海とを一緒に　たやうである。

セイヌ河の近くに來ると、私は一團の若者に出會つたが、いづれも短い上衣を着て、長いゲエトルを穿いて居る。その服裝から判斷すると、彼等は職工に相違ないが、しかし職人の服裝にしては、衣裝が如何にも優美である。それからよく／＼注意して見ると、中には婦人も混つて居るが、婦人も男子と同じ服裝で、而もアメリカの婦人のやうに細腰であるから、ちよつと婦人とは氣がつかない。私は餘り不思議に思つて、男女の顏付を眺めたが、先方でも私の樣子を見て、異樣な眼光を向けたから、私は生れてから、これほどまでに他人から注視されたことはないと思つて、それを避けるために、人通のない小路へ曲ると、間もなく一つの大辻へ出た。そこには深紅の旗が立てゝあつて、それに金字で「ヨオロツパ大聯邦」と書いてある。さうして其下には平和の記號で縁飾を施した大きな掲示板があつて種々の布告が掲示してある。飛行時間表といふのを見ると、氣流航路圖といふものが添へてあつて、「世界聯邦紀元二二〇年六月二十八日改正」とある。はてなと思つて、其次に地球節に關する布告を見ると、これは聯邦委員が布告したもので、「諸君、御承知の通り、二十世紀の末年に舊社會の組織が破滅して、其後

無政府の狀態に陥ること五十年で、遂にヨオロッパ諸國民の聯邦が組織せられ」云々。成程、二十世紀の末年から五十年を經て、更に二百二十年とすると、キリスト紀元二二七〇年だ、すると私は何時の間にか二百七十年だけ通り越したわけだが、これは不思議なことが起つたものだ。

「私は木伊乃になつた覺えもなし、ウエルス氏の空想したやうな時間を伸縮する機械を利用したこともないぞ。それともウイリアム・モウリスの眞似をして、眠つて居る間に知らず識らず、二百年經過したのか知らん。しかし現在私は夢を見て居るのではない、確かに眼を醒して居るのだ。」

ひとりでこんなことを考へながら、ぶらぶら歩いて居たが、ふと氣がついて見ると、私の歩いて居た道の末には、大きな廣い牧場があつて、一條の小川が其中を流れ、牝牛が其處で草を食つて居る。さうして牧場の周圍を見廻すと、例の如く小さな家が、美しく立並んで居て、何だか田舍のやうである。と、私の面前には、一つの大きな建物があつて、その前庭には綺麗な植木鉢が處々に陳列してある。その張出し窓から内部をのぞいて見ると、華麗な廣間に多勢の男女が食卓を圍んで居る。私は料亭かと思つて、その中へ入つて行くと、入口に立つて居た男が、私に切符を請求するから、私が當惑の色を見せると、男がいふには、「あなたは此邊のお方ではないやうですが、どうして切符も持たないで旅行なさるのですか。まことにお氣の毒ですが、旅行係か救助係へ行つて、賴むことにして下さい。」

すると、そこへ體格の立派な一人の大男がやつて來て、慇懃に私に教へてくれた。

「もしもし、旅行係へ御用なら、役所へ御越しにならなくても私が役人で、そこのパン係をやつて居ますから、さあ、御案内いたしませう、直に工場へ來て下さい。」

さては此男、私をパン工場へ連れて行つて、働かせやうとするのであらうが、私はパン屋でないのだからといふと、彼は不審な顔付をして、はゝア、あなたは御冗談がお好きだねといふ。私は益々面喰つたが、とにかく其の男に跟いて行くと、巨きな鋳鐵の建物があつて、その門の兩側には、一對の巨人の銅像が跨つてゐる。これは「蒔く者」と「刈る者」とで、渾身に力が充ち溢れ、滿面に靜かな誇りを湛えて居る。その風貌の雄々しいことは、とてもムニエなぞの製作する逞しい勞働者のやうなものではない。

男は私を案内して、高さ四十メエトルの一室に導いたが、そこでは濛々と立騰る蒼白い埃の中で、機械が靜かに朗かな音を立てゝ動いて居る。見ると彼が目發羽に小刀に觸れると、私と

りでに袋の口が開けて、麥粉が木製の鉢の中へ流れ込む、器の手がそれを捏ねると、生のパンになつて、燒型の中へ流れ込む、直に燒型がトンネルのやうな大きな焙爐の中へ入つて行く。五六人の男が何もせずに、じつと機械を監督して居る。

「これは舊式なパン工場ですから、一日八萬斤しか出來ませんし、人手も多くいるのです。まあ、それはどうでも善い。今度は品物の著くところを見て下さい。」

品物の著くところとは何のことかと、それを尋ねる間もあらせず、一臺の昇降機が一階上へ私を運ぶと、直に鯨のやうなものが、私の傍へ近づいて來て、澤山な袋を背から卸した。此の不思議な器械には一人の人間も乘つて居ない。すると同じやうな機械が幾臺も、後から後から下りて來て、同じやうに袋を卸すと、袋はひとりでに小刀に觸れて、袋の口が開かれる。推進機が廻轉すると梶が動く。向うの方で地蜂が唸るやうな音がしたかと思ふと、機械は驚くべき速力を以て活動を始める。様子の皆目分らない私は何だか危険なやうな氣がして、これからどんなことが起らうも知れぬと思ふと、私は内心ビクビクもので、幾度も、もう下へ降りても善いかと、尋ねて見やうと思つたが、それも何だか耻かしいので、一生懸命我慢して、それを見物して居ると、やがて太陽が西に傾き、時計が五時を報じたので、これで此日の仕事は終つて、私はパンと階上の部屋を去ることが出來た。

「お腹が空きましたらう。それではね、これから料理工場へ電話をかけて、あなたの食物を注文しやうと思ひますが、如何です、公會食堂になさいますか、御自分の部屋でなさいますか、それとも私の處で同役の人達と一緒になさいますか。どちらでも構はないのですよ。おお、こんなにくだくだ申し上げては失禮ですが、餘程遠方からいらして、一向様子がお分りでないやうですから。それから今日の仕事ですが、あれは一番た易い仕事で、あれだけでは生活が出來るわけではありません。今日はZ（ゼット）光線の動力が充分でしたから善いが、時々故障が起ると今日のやうには行きません。それにあなたは大層不慣でいらつしやるやうですが、一體本業は何ですか、それから御國はどちらですか。」

私はこんなことを質問せられて、大きに當惑したが、どうも本當のことを告白して、二十世紀の社會から來た金持（ブルジョア）だとは云兼ねた。そんなことを言つたら、氣狂と誤解せられるだらうと思つたから、至極曖昧な態度で、私は何も本業とてはない、さうして大分遠方から來た者だと答へた。男は微笑して、さうして言ふには、「いや、分りました。つまりアフリカ合衆國からいら

したんでせう。」かういはれても私は頓に返事が出來ないで默つて居ると、彼はスツカリ推量が當つたと思つたのか、私の風俗を倘もつく〲觀察しながら、「アフリカも餘程邊僻ですね。ジユラスかパストスかのうちでせう。あちらでは鬚を剃落して、鬚と頬鬚だけをチヨツピリと殘すのださうですが、こちらでは裝飾のために體に刺青したり、頭を剃つたりする蠻風はなくなりましたよ。尤も三四百年以前には、フランスでもやつて居たといふことですがね。それはさうと、私の住ひはごく近處です、ソロニユといふところで、それに私の飛行機は隨分よく飛びますからね、すぐに行かれますよ。」

私は名を聞かれてヒポリト・デユフルヌヌと答へると、男は私が名前を二つ持つて居るのかと思つて、一寸小首を傾けたが、

「ああ、さうですか、私はミシエルです。」

結局私はミシエルの招待を受けることになつて、鋼の鳥の懐に抱かれたが、その速力の早さといつたら、息が詰るほどである。見下せば此邊は、すべて田舍ばかりであるが、その様子は普通の田舍と違つて、路傍には人家が連立し、田畑には無數の運河が縱横に走つて居る。

「田畑ですか、さうです、隨分よく開墾してあります。二三百年來といふものは、化學者が研究をすることになりまして、改良に改良を加へましたからね。つまり共産主義になりましてから資本主義の時代に比較すると、四倍も五倍も土地を利用することになりましたので。あなたもジユラスかパストスの御方なら御承知ですが、野蠻な地方では生産能力が乏しいものですから、土地を公平に分配すると、結局、富を分配することにならずに、貧を分配することになるのですが、こちらでは科學が發達したものですから、生産が非常に發達しまして、それに都會といふもの亦なくなつて、番頭も小僧も工場や田畑で働くことになりましたので。」

「それでは都會は無くなとりましたか。パリなぞはどうですか。」

「パリなぞに住む人間はありません。なにしろ、あの狹い處に五階も六階もある家を建てて、人間がギツシリ住んで居たといふのですから、永續のするわけがありません。尤も博物館や圖書館が非常に增加しましたから、昔の兵營や法廷や會社などの大きな建物は、今でも保存して、博物館や圖書館に利用して居りますがね。しかし交通が自由ですから、一緒に固まつて住む必要はありませんね。」

「兵營や法廷や會社が無くなつたわけですか。」

「さうです、商業は無論必要がなくなりましたし、私有制はない

ではないのですか、法廷の必要はなく、なりませんかね。」

「すると罪人も無くなつといふわけですね。」

「罪人ですか、それは無論人間の天性でも變化しない限りは、絶對に無くなることはないでせうが、しかし貧民といふものが無くなると、罪人といふものも餘程減じましたね。昔は都會といふものがあつて、罪人を製造する本場になつて居たものですが、今日では都會といふものはなくなりました。みんな田舍ばかりですが、無線電話が普及して、晝夜用心堅固ですから、惡事を働く餘地がないのです。尤も昔ならば輕罪とでもいふやうなものは、今でも幾らもありますが、一々詮索しないのですから。昔は罪人の檢擧が些末に流れて、根本の大罪を逸したものですが、今日では裁判官も辯護士もなくなつて、裁判といつても、人民が交替で集會して、重罪だけを處分するので、輕罪などといふものはありません。多少の惡事は誰でもするのですからね。」

こんな話をして居る中に、やがて飛行機は着陸した。見れば其家も盛上つた築地の上に建てられて、さゝやかではあるが氣持の佳い建物である。

「さあ來ました。これが私の住ひです。同役の人達と一緒に、早速食事をいたしませう。みんな私と同じやうに本業は統計學者です。」

「おや、あなたは統計學者でしたか。私はまたパン屋さんとばかり思つてゐました。」

「さうです、毎日六時間だけはパン屋ですが、本業としては統計を研究します。今日では統計が史學の代理を務めるのですからね。歴史は少數の人間だけを對象にして、花々しい件だけを取扱ふのですが、昔はそれが存外尊重せられたものです。無論今日ではその代りに統計といふことを大切にして、統計で人民全體の生産と消費とを公平に調齊するのです。」

屋上便所で用を足すと、私はミシエルに案内せられて、階下の食堂へ降りて行つた。一面に眞白な一室で、裝飾には綺麗な植木鉢に滿開の薔が植えてある。陶製の卓上には、金屬の釉薬を施した食器を竝べ、それに三人の男が着席し居た。ミシエルの説明に從へば、此の三人はモオレンにパアスヴァルにシエロンで、いづれも粗織の上衣にヴイロオドのズボンを著け、灰色の靴下を穿き、さうしてモオレンは老人と見えて、長い白い鬚を蓄へて居たが、シエロンとパアスヴァルとは無髯であつた。此無髯の二人は、髪を短かくして居るし、容貌も極めて快活であるから、最初私は青年とばかり思つたが、此の二人は實は婦人で、殊にパアスヴァルは餘り若くはないが、而も頗る美人であつて、またシエロンも若いだけに中々愛嬌がある。

したんでせう。」かういはれても私は碌に返事が出來ないで默つて居ると、彼はスツカリ推量が當つたと思つたのか、私の風俗を尚もつく／＼觀察しながら、「アフリカも餘程變僻ですね。ジユラスかバストスかのうちでせう。あちらでは髯を剃落して、鬚と頰鬚だけをチヨツピリと殘すのださうですが、こちらでは裝飾のために體に刺靑したり、顏を剃つたりする風はなくなりましたよ。尤も三四百年以前には、フランスでもやつて居たといふことですがね。それはさうと、私の住ひはごく近處です、ソロニユといふところで、それに私の飛行機は隨分よく飛びますからね、すぐに行かれますよ。」

私は名を聞かれてヒポリト・デユフルヌヌと答へると、男は私が名前を二つ持つて居るのかと思つて、一寸小首を傾けたが、

「ああ、さうですか、私はミシエルです。」

結局私はミシエルの招待を受けることになつて、鋼の鳥の懐に抱かれたが、その速力の早さといつたら、息が詰るほどである。見下せば此邊は、すべて田舍ばかりであるが、その樣子は普通の田舍と違つて、路傍には人家が連立し、田畑には無數の運河が縱横に走つて居る。

「田畑ですか、さうです、隨分よく開墾してあります。三百年來といふものは、化學者が研究をすることになりまして、改良に改良を加へましたからね。つまり共産主義になりましてから資本主義の時代に比較すると、四倍も五倍も土地を利用することになりましたので。あなたもジユラスかバストスの御方なら御承知ですが、野蠻な地方では生産能力が乏しいものですから、土地を公平に分配すると、結局、富を分配することにならずに、貧を分配することになるのですが、こちらでは科學（シアンス）が發達したものですから、生産が非常に發達しまして、それに都會といふものが無くなつて、番頭も小僧も工場や田畑で働くことになりましたので。」

「それでは都會は無くなとりましたか。パリなぞはどうですか。」

「パリなぞに住む人間はありません。なにしろ、あの狹い處に五階も六階もある家を建てて、人間がギツシリ住んで居たといふのですから、永續のするわけがありません。尤も博物館や圖書館が非常に増加しましたから、昔の兵營や法廷や會社なぞの大きな建物は、今でも保存して、博物館や圖書館に利用して居りますがね。しかし交通が自由ですから、一緒に固まつて住む必要はありませんね。」

「兵營や法廷や會社が無くなつたわけですかね」

「さうです、商業は無論必要がなくなりましたし、權利はなの

ではないのですか、法廷の必要はなくなりませんかね。」

「すると罪人も無くなつといふわけですね。」

「罪人ですか、それは無論人間の天性でも變化しない限りは、絶對に無くなるものではないでせうが、しかし貧民といふものが無くなると、罪人といふものも餘程減じましたね。昔は都會といふものがあつて、罪人を製造する本場になつて居たものですが、今日では都會といふものはなくなりました。みんな田舍ばかりですが、無線電話が普及して、晝夜用心堅固ですから、惡事を働く餘地がないのです。尤も昔ならば輕罪とでもいふやうなものは、今でも幾らもありますが、一々詮索しないのですから。昔は罪人の檢擧が些末に流れて、根本の大罪を逸したものですが、今日では裁判官も辯護士もなくなつて、裁判といつても、人民が交替で集會して、重罪だけを處分するので、輕罪などといふものはありません。多少の惡事は誰でもするのですからね。」

こんな話をして居る中に、やがて飛行機は着陸した。見れば北家も盛上つた臺地の上に建てられて、さゝやかではあるが氣持の佳い建物である。

「さあ來ました。これが私の住ひです。同役の人達と一緒に、早速食事をいたしませう。みんな私と同じやうに本業は統計學者です。」

「おや、あなたは統計學者でしたね。私はまたパン屋さんだとばかり思つてゐました。」

「さうです、毎日六時間だけはパン屋ですが、本業としては統計を研究します。今日では統計が史學の代理を務めるのですからね。歴史は少數の人間だけを對象にして、花々しい件だけを取扱ふのですが、昔はそれが存外尊重せられたものです。無論今日ではその代りに統計といふことを大切にして、統計で人民全體の生産と消費とを公平に調査するのです。」

屋上便所で用を足すと、私はミシエルに案内せられて、階下の食堂へ降りて行つた。一面に眞白な一室で、裝飾には綺麗な植木鉢に滿開の薔薇が植えてある。陶製の卓子には、金屬の釉藥を施した食器を並べ、それに三人の男が着席し居た。ミシエルの説明に從へば、此の三人はモオレンにパアスヴァルにシエロンで、いづれも粗織の上衣にヴイロオドのズボンを著け、灰色の靴下を穿き、さうしてモオレンは老人と見えて、長い白い髭を蓄へて居たが、シエロンとパアスヴァルとは無髯であつた。此無髯の二人は、髮を短かくして居るし、容貌も極めて快活であるから、最初私は青年とばかり思つたが、此の二人は實は婦人で、殊にパアスヴァルは餘り若くはないが、而も頗る美人であつて、またシエロンも若いだけに中々愛嬌がある。

したんでせう。」かういはれても私は頭に返事が出來ないで默つて居ると、彼はスッカリ推測が當つたと思つたのか、私の風俗を猶もつくづく觀察しながら、「アフリカも餘程邊僻ですね。ジュラスかパストスかのうちでせう。あちらでは鬚を剃落して、髭と頬鬚だけをチョッピリと殘すのださうですが、こちらでは裝飾のために體に刺靑したり、顏を剃つたりする蠻風はなくなりましたよ。尤も三四百年以前には、フランスでもやつて居たといふことですがね。それはさうと、私の住ひはごく近處です、ソロニユといふところで、それに私の飛行機は隨分よく飛びますからね、すぐに行かれますよ。」

私は名を聞かれてヒポリト・デュフルヌヌと答へると、男は私が名前を二つ持つて居るのかと思つて、一寸小首を傾けたが、

「ああ、さうですか、私はミシエルです。」

結局私はミシエルの招待を受けることになつて、鋼の鳥の懷に抱かれたが、その速力の早さといつたら、息が詰るほどである。見下せば此邊は、すべて田舍ばかりであるが、その樣子は普通の田舍と違つて、路傍には人家が連立し、田畑には無數の運河が縱橫に走つて居る。

「田畑ですか、さうです、隨分よく開墾してあります。二三百年來こいふものは、化學者が園藝をすることになりまして、改良に改良を加へましたからね。つまり共產主義になりまして資本主義の時代に比較すると、四倍も五倍も土地を利用することになりましたので。あなたもジュラスかパストスの御方なら御承知ですが、野蠻な地方では生產能力が乏しいものですから、土地を公平に分配すると、結局、富を分配することにならずに、貧を分配することになるのですが、こちらでは科學が發達したものですから、生產が非常に發達しまして、それに都會といふものがなくなつて、番頭も小僧も工場や田畑で働くことになりましたので。」

「それでは都會は無くなとりましたか。パリなぞはどうですか。」

「パリなぞに住む人間はありません。なにしろ、あの狹い處に五階も六階もある家を建てて、人間がギツシリ住んで居たといふのですから、永續のするわけがありません。尤も博物館や圖書館が非常に增加しましたから、昔の兵營や法廷や會社なぞの大きな建物は、今でも保存して、博物館や圖書館に利用して居りますがね。しかし交通が自由ですから、一緒に固まつて住む必要はありませんね。」

「兵營や法廷や會社が無くなつたわけですか。」

「さうです、商業に從事する必要がなくなりましたし、刑罰はない

ではないのですか、法廷の必要はなくなりますかね」

「するとつ罪人も無くなつといふわけですね。」

「罪人ですか、それは無論人間の天性でも變化しない限りは、絶對に無くなるものではないでせうが、しかし貧民といふものが無くなると、罪人といふものも餘程減じましたね。昔は都會といふものがあつて、罪人を製造する本場になつて居たものですが、今日では都會といふものはなくなりました。みんな田舎ばかりですが、無線電話が普及して、晝夜用心堅固ですから、悪事を働く餘地がないのです。尤も昔ならば輕罪とでもいふやうなものは、今でも幾らもありますが、一々詮索しないのですから。昔は罪人の檢擧が些末に流れて、根本の大罪を逸したものですが、今日では裁判官も辯護士もなくなつて、裁判といつても、人民が交替で集會して、重罪だけを處分するので、輕罪などといふものはありません。多少の悪事は誰でもするのですからね。」

こんな話をして居る中に、やがて飛行機は着陸した。見れば此家も盛上つた臺地の上に建てられて、さゝやかではあるが氣持の佳い建物である。

「さあ來ました。これが私の住ひです。同役の人達と一緒に、早速食事をいたしませう。みんな私と同じやうに本業は統計學者です。」

「おや、あなたは統計學者でしたね。私はまたパン屋さんかとばかり思つてゐました。」

「さうです、毎日六時間だけはパン屋ですが、本業としては統計を研究します。今日では統計が史學の代理を務めるのですからね。歴史は少數の人間だけを對象にして、花々しい件だけを取扱ふのですが、昔はそれが存外尊重せられたものです。無論今日ではその代りに統計といふことを大切にして、統計で人民全體の生産と消費とを公平に調合するのです。」

屋上便所で用を足すと、私はミシエルに案内せられて、階下の食堂へ降りて行つた。一面に眞白な一室で、裝飾には綺麗な植木鉢に滿開の薔薇が植えてある。陶製の卓子には、金屬の釉藥を施した食器を竝べ、それに三人の男が着席し居た。ミシエルの説明に從へば、此の三人はモオレンにパアスヴァルにシエロンで、いづれも粗織の上衣にヴイロオドのズボンを着け、灰色の靴下を穿き、さうしてモオレンは老人と見えて、長い白い髭を蓄へて居たが、シエロンとパアスヴァルとは無髯であつた。此無髯の二人は、髮を短かくして居るし、容貌も極めて快活であるから、最初私は青年とばかり思つたが、此の二人は實は婦人で、殊にパアスヴァルは餘り若くはないが、而も頗る美人であつて、またシエロンも若いだけに中々愛嬌がある。

「諸君、私は今日から同役になつたヒポリトさんを案内しました。デユフルスヌともおつしやるさうですが、お國はアフリカの山奥ださうです。今日は晝食をせずだつたさうですから、お腹がお空きだらうと思ひます。」

全く私は空腹であつた。見馴れぬパンの小片も私には結構である。食卓には種々の乾酪も備へてある。モオレンは私のコツプに輕いビイルを注いで、アルコホルを含まないのだから、欲しいだけ飲んでも差問ないといふ。

「こちらではアルコホルには餘程注意するのですか。」

「はあ、もうアルコホルを飲むことはなくなりましたね。舊時代の末に禁止したのですが、さうでもしなかつたら、新時代は來なかつたのかも知れませんよ。プロレタリアの解放も、酒飲では駄目ですからね。」

「それでは何でせうね、食物の方も餘程進歩しましたらう。」

「それは何でせう、化學的營養のことをおつしやるのでせう。」パアスヴアルがモオレンに代つて答へた。「それなら格別變化もしませんわ。でも化學者を臺所へ派遣するのは考物ですからね。化學者はよく化學的營養なぞと申しますが、あれは駄目ですね。無論、澱粉と滋養とは適當に配合しますけれども、食物は大體昔と同じで、格別進歩しませんわ。」

シミエル、「しかし今日では化學者も、何とかして今少し合理的な食物を發見しやうと努力して居りますよ。」

すると年の若いシエロンが口を出して「あんな子供臭いことが何になるでせう。本當は人間の肉體から大腸のやうな有害無益なものを取除かなくては駄目ですよ。さういふ時代も必ず來ますわ。」

「どうしてそんなことが、」私は思はず詰問した。

「ですから取除けばいいんですよ。さうするとですね、先づ第一にさういふ人間が相當の數に上りますと、その結果彫質遺傳といふものが成立して、結局それが一般人類に普及するのです。」

どうも此の人達の言語動作は、如何にも慇懃ではあるが、私とは更に調子が合はない。努めて調子を合せやうとすると、却つて彼等の同感を失つて來る。私は至極丁寧にシエロンに愛相を使つて見たが、彼女はもう私を顧みもしない。食事が終つて、私は四人の中でも最も温厚篤實らしいモオレンに向つて、心から眞面目に懇願した。

「モオレンさん、私にはさつぱり樣子が分りませんので、全く閉口いたしますが、御承知の通り、私は遠方から、ごく遠方から來た者ですから、どうか恐入りますが、一體ヨオロツパ聯邦

といふのは、どうして出來たものでせうか、それから今日の社會組織も一應説明して頂きたいのですが。」

老人のモオレンは之に答へて「それは大變、三百年來の歴史を語れとおつしやるのですね。とても一月や二月ではむつかしいでせう。それに私も知らないことが多いのですから。」

そこで私も仕方がないから、丁度學校の生徒のやうに、それではごく大略で宜いから、聞かせてくれと頼んで見た。するとモオレンも承諾して、肘懸倚子に反返りながら、次のやうに説明を始めた。

「まづ、づゝと古いことから話すと、二十世紀で一番重大な出來事といふのは、戰爭の廢止といふことです。十九世紀の野蠻時代にも、ヘエグの仲裁々判所といふものがあつたのですが、これは實效の薄いもので、これでは戰爭を絶滅することなぞは出來なかつたのですが、其後國際議員會議といふものが出來たのです。今日から思ふと、此の議員會議が背後に於ける多數選擧民の後援を得て、國際議會といふものを組織したならば、戰爭の防止に一歩を進めるとも出來たらうとも考へられますが、當時はさういふことを提唱する者もなくて、平和の破壞は各國の政府の一存に委ねてありました。それで政府の役人が、列強の均勢といふやうなことを標準にして、テエブルの上で和戰を決定したのです。無産階級の人民は、自己の勢力を自覺しないものですから、有力な團結を組織して、之に掣肘を加へるといふことをしない。それで戰爭の原因は何かといふと、植民政策といふもので、イギリス、フランス、ドイツ、ロシアなぞか、アジアやアフリカで勢力範圍といふものを擴張するために、激烈に競爭して、自國の經濟を發展させるためには、干戈に訴へることを辭せないのです。それでアジアでもアフリカでも、彼等のために縱橫に蹂躙せられたのですが、如何に未開の民族でも、さう何時までも蹂躙せられて滿足はして居ません、日本といふ小國が、西洋諸國の眞似をして、之に對抗するやうになつた。これは西洋の眞似をしたのですが、それでも西洋の横暴を挫いて、人道を喚起する上には、非常な效力のあつたものです。そこで二十世紀の前半に、植民地の獲得と商業權の擴張とのために、各國の戰亂が頻出しましたが、それも遂に終りを告げた。尤も各國は尙ほ暫くは軍備を維持して居りましたが、當時資本といふものが發達して、從來のやうに職人が道具で手細工をするといふやうなことは少くなつて、大抵の品物は大規模の工場で生産せられるやうになつた。これが即ち資本制度といふので、これがために人間社會は、非常に富を増加しましたが、其結果無產階級といふものは、益々増加する一方です。そこで多數の勞

働者は、自分だけで國家を造つて、國家の中に今一つ國家が出來るといふ狀態でしたが、かうして無產階級は自己の解放を企てたのです。一體今日の共產制度は資本制度の母胎から當然に生出されたものですから、資本制度の發達は無產階級の未來のためには、寧ろ祝福すべき現象であるのに、當時の勞働階級は、しきりに資本制度を呪咀して、幾多の犧牲を出したものです。

「尤も社會の幸福といふものは、すべて血と淚との結果です。しかし資本制度といふものも、榮枯盛衰を免れません。つまり資本制度といふものは、生產を非常に增加したけれども、生產を整理するといふことに失敗して、それがために種々の困難に際會し、何とかして之を取除かうと努力しましたが、折角の苦心も結局無效でした。

「あなたも無論御存知でせうが、二十世紀の後半になつて、資本主義が極度に發達した時代には、生產は亂雜になる、競爭は過激になる、當時の經濟社會といつたら、まるで精神錯亂で、資本家は極力企業を合同して、此の病弊を除かうとしましたが、一步々々末路に近づくばかりです。それから一方では之と同時に、資本家と勞働者との階級鬪爭は極端に激烈になつて來ましたが、無產階級でも運動が亂雜で、頻りに內部に訌爭を惹起し、適當な指導者や深切な同情者を運動の埒外に放逐して、一定の秩序もなく、妄りに盲動するといふ有樣ですから、社會はまるで無政府です。尤も無產階級も、こんなことをして居る間に、幾分かづゝ境遇が改善せられて、賃銀は增加する、勞働時間は短くなる、勞働團體や主義宣傳の自由が承認せられる、社會の人心を覺醒する。たゞ其の缺點としては一定の主義がなく、且つ堅固な統一のないといふことでしたが、これは多數の場合には勢ひ免がれないものです。ところが二十世紀の末葉になつて、一般の事情が社會主義の發達に頗る有利になつた。といふものは、其頃になると、軍備は次第に縮少せられてゐたが、普通選擧の結果として、紳士階級(ブルジョアジイ)の反對にも拘はらず、都鄙の民衆が結束して、議會で議決したために、軍備は全廢せられることになつた。尤も國際の戰爭のための軍備は夙に無用になつて居たが、國內の平和を維持するために、依然軍備が保存せられたのであるが、遂に之も廢止せられて、唯だイギリスとロシアとだけは、軍備の撤廢に贊成しなかつた。しかるにロシアでは、無產階級が知識階級と提携して、一大革命運動を起し、幾多の慘劇が演ぜられたが、遂に革命黨の勝利に歸して、立憲代議制度を打建てた。當時無線電話が普及して、世界の隅々と談話することが出來るやうになつて居たから、ロシアの農民はベルリンやマルセイユの同主義者と自由に談話して、機械に氣

脈を通することが出來た。殊に飛行機も此の時代には、既に一般社會の實用に供せられて、その結果國境といふものが薄弱になつて、偏狹固陋な愛國心は次第に濶達寛大な人道主義に變化したから、ヨオロツパ大陸では、フランスは勿論、ドイツもハンガリイも、ロオマもイタリイも、スヰスもベルギイも、すべて共和國になつて、各國の議會から代表者を派遣して、一大會議を開かしめ、各國共同で各國の領土や產業に危害を與へる外敵を防遏することを協議した。ところが協議の結果として、外敵の危害に抵抗するには、やはり軍備が必要だといふので、再び軍備が囘復せられ、處々に要塞や砲臺を再築し、番頭も職工も軍服を着て銃劍を執るといふことになつたが、この喜劇も三年で終つて、其間に何等軍隊を動かす必要も起らなかつたので、今度は愈々永久に軍備を廢止することになり、茲に於て平和主義は急轉直下の勢を以て發達した。ヨオロツパの諸國が武裝を解いて一致提携するといふが如きは、果して何千萬年の未來のことかと思はれたものが、意外にも早く實現して、平和が確立すると共に、共產主義の勢力も著々社會に普及した。

「しかしですね、ヒポリトさん、前にも申した通り、共產主義は資本主義の當然の歸結なのですから、社會主義の勝利と申しましても、それが偶然に起つたのでもなく、また一朝一夕に成功したのでもない。社會主義が成功した場合には、事實に於て資本制度及び私有財產といふものが、無產階級の努力によつて、根底を失つて居たのです。

「そこで共產主義は最初何處で實行したかといふに、當時世人は一般に社會主義はドイツのものだといふので、ドイツが率先して實行するだらうと想像して居たのですが、實際はフランスが先驅を着け、社會革命はまづリヨン、リイユ及びマルセイユに起つて、パリは二週間程維持しましたが、これも遂に赤旗を掲げるやうになり、その翌日には早くもベルリンに波及して、ドイツも共產國家を宣言する、それから以後といふものは、社會主義は燎原の勢を以て、ヨオロツパ大陸を風靡したのです。それで間もなくブラセルで、各國の代表者が集會して、ヨオロツパ同盟の憲法を制定しましたが、獨りイギリスだけは同盟に加入せず、局外の地位に立ちまして、社會主義は採用しても、王室は依然として存置することにしましたが、當時社會主義東洋や南洋の方面にも波及して、濠洲も支那も之を採用し、唯だアフリカだけは當時漸く資本主義の時代に進んだのですから、一種特別の聯邦を組織しました。それから南北アメリカは提携して一大同盟を創設しましたが、これも重商主義（メルカンチリズム）や軍國主義（ミリタリズム）を放棄しましたので、内外の事情はヨオロツパ同盟の發達に

頗る便利になりました。尤も此の同盟制度は、當初非常な人氣で歡迎せられた割合に、其後半世紀許といふものは、諸般の設備が整頓せず、經濟上にも社會上にも、種々の困難に遭遇しました。唯だ軍備を全廢した結果、人民も決して暴力に訴へて政府に反抗するといふやうなことをしなかつたのですが、何分經驗の不備なために、各國政府の處置には幾多の紛雜を生じたのです。それで同盟を組織して五十年程經つと、社會も一般に同盟制度を一時悲觀するやうになりましたが、その結果今度は改めて勞働階級から十四名の委員を出して、同盟制度に代ふるに聯邦制度を以てすることになりました。これが即ち今日の聯邦制度で、此の制度が確立した結果、五十年間繼續した無政府の狀態も漸次改良せられることになり、且つ聯邦制度の創設と同時に、生產制度及び分配制度も略々理想的に確定せられまして、今日に至るまで依然として當時の制度が遵奉せられて居ります。ですから此の聯邦の創設が一新紀元を開くことになつて、之を新代の紀元々年としたわけです。——そこで今度は新代の社會組織を說明する順序ですが、今日社會制度の根本原則となつて居るのは何かといふと、それは私有財產の全廢といふことです。」

「そんな馬鹿なことが出來ますか。」

「どうして馬鹿なことですか。昔は何處の政府でも、人民から税といふものを徵收したのですが、これは政府の仕事は即ち人民共同のものだからです。ところが今日では此の眞理を推詰めて國家と人民とは一つであつて二つでないのだから、一切の財產を共有にして、之は國家のもの、之は箇人のものといふやうな區別を撤去したのです。」

「しかし食器とか衣物とか寢臺とかいふやうなものはどうするのです。それもみんな共有ですか。」

「あなたは存外單純なお方だ。私有財產を全廢すると言つても、敢て箇人の周圍の品物まで取上げるといふのではありませんよ。昔の坊さんは禁慾主義で、努めて箇性を沒却したものですが、今日の吾々が其樣な眞似をして居るのだと思つたら、大變な間違ですよ。吾々は自分の周圍に必要な品物に對しては、非常な執着を持つて居ます。それは今日では人間の趣味が非常に發達しましたものですから、資本主義時代の金持(ブルジョア)が愚劣な品物を愛翫したのとは違つて、それより一層痛切に、心から品物を愛撫するのです。ですから趣味の高尚な人達は、誰でも藝術的な品物を所屬して、それを愛翫もし自慢もします。現に私たちも、あの戸棚に、前代の末葉に最も尊重せられたスタインレンの名畫を全部集めて居ますが、どんなに高價で [illegible]

ふとは思ひません。

「あなたはお國はどちらですか知りませんが　こちらでは私有を全廢すると申しましても、單に土地とか、運河とか、道路とか、鑛山とか、原料とか、植物といふやうな、生產要素の私有を禁止するだけのことで、ラムプだとか倚子だとかいふやうなものまで、共有といふわけではないのです。つまり勞働の結果を有效にするために必要なものだけを共有にするので、身邊の什器まで共有にするといふのは、必要のないことでもありますし、また元來人間の天性に反したことです。

「次に精神勞働と肉體勞働との關係を一應說明しなければなりませんが、今日の社會では、資本主義の時代と違つて、悠遊徒食するといふやうな人間は一人もありません。昔は何もせずに遊んで居る人間も隨分多かつたのですが、今日では生產と分配とは公平に整理せられて、昔のやうに役員とか議員とか、商人とか番頭とかいふものが、多勢都會に集つて、生產はせずに消費ばかりして居るといふやうなことは無くなりました。それから器械といふものは、昔は勞働階級に寧ろ不利を及ぼしたものですが、これも今日では絕無の現象です。」

「それでは今日では、どんな人でも一人殘らず勞働するのですね。」

「さうです。しかし勞働といふことは、人間の天性に適つたことです。野蠻時代、と申しましても、舊代の末期までといふものは、貴族や金持は、肉體の勞働を卑下しまして、知識的勞働のみを重んじたものですが、それすら彼等には餘り適當でない。殊に精神ばかりを使つて、肉體を使はないといふやうなことは、到底出來ないことですから、體育だとか運動だとか言つて、銃獵とか乘馬とかいふやうな無益な遊戲に耽つたものです。一體當時の社會では、無益な遊戲に耽るのを上品として、必要な勞働に從事するのを卑下したものです。ところが今日では鍬や槌を以て働くことが上品となつて居るのですから、人情も全く一變したわけですが、これは人間の天性が變化したのではない、これが人間の天性で、社會の基礎を少し改めると、人間の天性も餘程變化して見えるのです。」

それからミシエルは今日では貨幣の通用といふこともなくなつたといふから、どうして貨幣といふものが無くて、取引が出來るのかと尋ねて見た。

「生產の結果を交換するには、先刻差上げましたやうな切符を使用するで、勞働した時間によりまして、切符を交付することになつてゐます。つまり品物の價格といふものは、生產に使用せられた勞働の時間を標準にして決定するのです。ですから、

ンでも、肉類でも、麥酒でも、衣物でも、飛行機のやうなものでも、その値段は何時間とか何日とかいふことになつて居ます。」

「しかし時間で計算するとなると、技術や知識の優れた者でも、全く素人で、私のやうな他國から來たばかりの者でも、全然區別なしといふわけですか。」

「何といふ馬鹿なことを。」パアスヴアルは思はず失笑したが、モオランは之を遮つて、「すべて學問とか研究とかいふものは、人間社會の向上進歩に最も有用なものですから、共產國家でも專門の學術を充分に奬勵します。しかし研究といふことは、即ち生產といふ事と、密接な關係があるのですから、學問も一種の生產です、ですから專門の研究に一身を委ねるやうな人達には、社會も充分の待遇を與へるのです。たとへば彫刻家が一箇の彫刻を作るにも、單に製作するだけならば二週間位で足るのですが、それまでには五年の修業が必要なのですから、國家は五年の報酬を支拂ふのです。また化學者が一箇の發見をなすにも、多年の研究が必要ですから、其間國家が其の生活を保持する。醫者も療治をするまでには、十五年間を要するから、國家は十五年分の切符を交付します。」

「それで其の切符の値段ですが、やはり金錢や品物と全じことで、始終上つたり下つたりして、相場が昇降するといふこありませんか。」

「切符の投機といふことは絕對に禁止してありますが、しかし實際では嚴重に勵行することは不可能です。今日でも昔と全じことで、勤勉な人間もあれば怠惰な人間もあり、貪慾な人間もあれば淡泊な人間もある、隨つて富者も貧者も出來るのですが、しかし生活するだけには誰でも困難は感じません。」

私は暫く考へて居たが、今一つ質問して見た。「モオレンさん、あなたのお話のやうですと、昔は「自由、平等、博愛」といつた、其中で平等と博愛とは、今日の社會に實現せられたやうですが、しかし自由といふ一點になると、却つて今日の制度では、人間の自由が束縛せられたやうに思はれますが、自由、平等、博愛の中でも、人間に一番必要なのは、自由であるといふではありませんか。」

かういふとモオレンは肩をすくめて、「今日の社會でも、決して平等ではありません。唯だ人間が一樣に生活の安全を得たといふまでのことです。勞働の報酬を時間で測るのも、一切の勞働が平等だからといふのではありません。大工は大工で自分の勞働は世界で一番尊いと思つて居るでせうし、詩人は詩人でやはりさうでせう。各自が自己の天分を第一と自信する、これは

結構なことですから、其間に人爲の區別を立てないのです。一體、自由、平等、博愛といふのは、十九世紀に流行した文句ですが、これは當時の迷想で、社會には自由なぞといふものはありません。昔は人間が法律をさへ遵奉すれば自由だといつたものですが、隨分幼稚な考へです。それから資本制度の存在した時代には、箇人の自由といふやうな言葉もあつたのですが、これも當時の迷想です。次に平等といふことですが、これは一層間違つた觀念で、今日では人間が平等だなぞといふことは申しません。今日では人間は全力を盡し、さる代り自己に必要なものは、遠慮なく要求するといふことになつてゐます。それから博愛といふことですが、これも昔のやうに人間が、にらみ合つて生活して居た時代にこそ、博愛を力說する必要もあつたのですが、今日では人間が生活のために、互に爭ふといふやうな必要がないのですから、博愛なぞといはなくても、人間は自ら調和します。」

「あなたが前代とおつしやる時代には、私有財產といふものがあつて、箇人は自分の子孫に對して、之を相續させることが出來たのですが、どんなに優れた才能があつても、自分が受取つた報酬を、自分の子供に貽すことが出來ないとなると、隨分心細くはありませんか。」

「成程、さういふ習慣もありましたが、しかし財產を用意しろといつたところが、それは少數の人達で、多數はさうでもなかつたのです。殊に當時は家族制度といふものがあつたのですから……」

「おや、今日ではもう家族といふものも無くなつたのですか。」

私が餘り頓狂に吃驚したので、婦人には餘程滑稽であつたと見えて、シエロンが私に說明して吳れた。「未開地方では今日でも結婚制度を維持して居るさうですが、こちらでは男女が契約で共棲するといふやうなことはいたしません。そんなことをしたとて、法律では無效です。昔は女は男のものと定まつて居たさうですが、それは隨分不合理なことで、男でも女でも、自分は自分のものではありませんか。それから昔は性慾を恥ぢたといひますが、何といふ僞善でせう。」

シエロンは大分昂奮して居るので、傍からパアスヴァルが助言して、「こちらでは男女を區別しないのですから、女子が男子に從屬して、一歩を讓るといふやうなことをしないのです。」

「けれども子供はどうするのです。家族といふ觀念がなくては、子供の世話も出來ないではありませんか。」

「まあ、何をおつしやるのです。子供をかあゆがるといふことは、母親の天性ですよ。昔は愛情のない夫婦の間に生れた子

でさへ、母親は相當にかわゆがりました。それを今日では本當に相愛する男女が子供を生むのですもの、どうして子供をかあゆがらないわけに行なきせう。」

成程、これは尤もだと私も思つたが、今度はまたシエロンの說明が頗る奇拔である。「一體昔は男女といふことに就いて、人間の觀念が大變間違つてゐました。昔は男女と申しますと、人間には男といふものと女といふものと二種あるのだと思つて居たのですが、男にも女らしい男もありますし、女にも男らしい女もあります。つまり、どんな人でも男の性質と女の性質とを折衷して居るので、絶對にこれは男だとか女だとか區別の出來るものではありません。それを昔は社會の習慣で、單に肉體の構造で男女を區別して、男子と女子との風俗習慣に大變な區別を設けたものですから、それが幾代も幾代も遺傳して、男女の區別といふものが、不自然に著しくなつたのです。新代になりましてからは、男女の性質が段々接近しましたが、將來は男女平等に働くやうになつて、それだけ生產が安樂になるでせうし遂には男性と女性との外に、中性といふものも出來て、それが增加して來ますと、人口の過剩を防ぐにも容易だらうと思ひます。」

私は二人の婦人から、如何にも面白い話を聞いたことを感謝し、再びモオレンに向つて、今日では教育といふものはやはり尊重せられるか、それから思想とか藝術とかいふものは、どういふことになつて居るかと尋ねて見た。

「教育は非常に發達して、誰でも高等の專門教育を受けます法學とか神學とかいふやうな、無用な學問は無くなりましたが、其外の學藝は各自の嗜好によりまして、自由に選擇するのです。書物の出版も盛大ですが、しかし近年は次第に活版印刷(タイポグラフイ)が衰微して、蓄音印刷(フオノグラフイ)が流行しますから、將來は活版印刷は無くなるでせう。詩人や小說家は今日でも一般に蓄音印刷を利用します。」

「さうすると今日でも詩人といふものがあるんですね。」

「あるどころではありません。今日でこそ詩歌といふもの、領分が本當にはつきりして居ります。昔は散文で書くべきことを、故意に韻文で書いたものですから、詩的でも何でもない事柄が詩歌の領分に侵入したものですが、これは官廳の法令や通牒などが、すべて紋切り形の形式的な勃萃な文章で書かれた當時の遺風で、そんなに固苦しく言はなくても善いことを、いやにしかめらしい文體で書くのも、そんなに詩的でもないことを、氣取つた句調で書くといふのも、どちらも同じやうに馬鹿なことです。ですから今日では詩歌といへば、普通の文句では言表は

せないことを、音律の作用で表現するのに限るのです。それで演劇なぞも全部叙情詩的で、社會の萬事が整頓しまして、實際の社會に悲惨なことや滑稽なことが無くなつたものですから、昔のやうな悲劇だとか喜劇だとかいふものも無いのです。それから美術も、一般に社會の趣味が敏感になりましたから、非常に珍重せられます。尤も繪畫よりも彫刻が歡迎せられまして、公共の建物でも、私人の住宅でも、盛んに彫刻を装飾します。」

「そこで結局の話ですが、どうですか、今日の社會は人間に取つて、餘程幸福なものですか。」

「それは幸福といふものが、元來絶對的なものではないのですから、幸福を得るためには努力を要する、努力には多少の勞苦を伴ふ、これは人性の自然として、已むを得ないことですが、しかし今日の社會では、五十年前の狀態に比較しましても、此種の勞苦を忍ぶことが、餘程容易になつたのですから、吾々の子孫の時代には、一層善くなるだらうと思ひます。」

「しかし野蠻な外國が侵撃するといふやうな危險はないのですか。先刻からのお話では、今日でもアジアやアフリカには、未開の地方があつて、軍備を維持して居るといふことですが…………」

「其點は安心です。アメリカやアオストラリアが攻めて來ればともかくですが、今日まで資本主義を廢止しないやうな地方では、軍備があると申したところが、二十世紀當時の舊式なもので、第一知識の程度に於て、遙かに劣つて居りますから、とても吾々の敵ではありません。こちらでは國境に管制を裝備し、外敵が襲撃するやうな場合には、强度のＸ光線を發射して撃退します。それで何處だか知りませんが、何處かに番人が置いてあつて、一朝有事の場合には、鍵をちよつとひねるのです。それでヨオロッパ聯邦に兵隊があるかと申しますと、天にも地にも一人で、即ち此の番人です。尤も今日では敵といつても、本當の敵は外國から來るのではない、實は國内に居るのです。といふのは無政府主義者のことで、これは中々多數ですし、熱烈でもあり、殊に知識が進んで居ますから、無知な外敵よりは餘程恐ろしい。ところが今日では科學者とか文學者とかいふ連中は、大抵は無政府主義者です。此種の連中に言はせると、人間の社會といふものは、文明を破壞しなくては、本當に幸福にはならないといふのです。しかし先づ大體から言へば、今日の社會は幸福で、私有財産を廢止した結果、盜賊といふやうなものもなく、其他の犯罪も少くなりました。」

「成程、色々有難うございました。そこで今一つだけお尋ねします。宗教といふものはもう無いのでせうか。」

「どういたしまして。今日では宗教の種類も澤山あります。フランスだけでも人道主義、實證主義、キリスト教、精神主義、此の四種を數へることが出來ます。或國にはカトオリックもありますが、これは勢力が餘程微弱で、昔は法王といふものがあつたのですが、それはもう無くなりました。」

「ところが、さうでないのですよ。」とミシエルが傍から口を出して、「私は偶然にそれを知つたのですが、法王パイウス二十五世といふのが、ロオマで染物屋をやつて居ますよ。」

「何ですつて。法王が染物屋ですつて。」私もこれには驚いだ。

「何も驚くことはないではありませんか。法王でも同じく人間ですもの、何か商賣はありますよ。」

「それでお寺はどうなんですか。」

「無論お寺もありますし、信徒も四五千人はあるといふことです。」

これで今夜の話は切上げることにして、私は一同に分れたが、私はミシエルの近所に宿泊することになつて、シエロンが歸路に私を案内してくれることになつた。

屋外には乳光の電燈が、強く軟かに輝いて、樹木の繁みに反映して居る。私はシエロンに寄添つて歩いた。彼女は踵(かゝと)の低い靴を穿いて居るので、姿勢が男のやうに正しくて、歩く調子もしつかりして居る。而も片手をポケツトに入れて、婦人のやうないしなを作らず、堂々と濶歩するが、それで一向醜くない。黒頭巾(シヤンダア)の下から覗いて見ると、彼女の容貌は如何に[illegible]洗錬せられて、才と情とに充ちて居る。先刻彼女は私の言ふことに一々酷く當つたから、多分私の人格を嫌つて居るのであらうと思つたが、突然私の商賣は何だと聞くから、私もちよつと[illegible]した揚句に、電氣技師だと答へると、「私もさうで[illegible]ふ。」

私は暫く遠慮して、口を噤んで居たのであるが、此の[illegible]氣技師を、見れば見るほど、愛著を感じて、又しも突然口を切つた。

「それでは何でせうね、今日では戀愛といふやうなことでも、能くまで科學的に研究して、昔のやうな依體の知れないものではなくなつたでせうね。」

「さうではありません。無論間違つた法律や道德で戀愛を束縛するといふことは無いのですが、しかし戀愛といふもので、男女を引きつけるといふことは、どういふ理由であるかといふことは、今日でも神秘ですよ。今日でも昔と同じことで、衝動は理性よりも力強いのです。唯だ今日では昔のやうに、一概に衝動を抑制せずに、寧ろ放任するものですから、却つて弊害が少いのです。」

それからシエロンの說明によると、婦人の氣質には男好きと男嫌ひと、唯だ何となく好奇心から男子に接近するのと三種あるといふから、あなたなどれに屬するかと聞くと、彼女は少し氣色ばんで私を見て、「それから男子にも種々な氣質がありますか、一等多いのは無遠慮で……」

此の返事を聞くと、おや、此女はやはり二十世紀の婦人と同じやうなことを云ふぞと思つたから。二十世紀の婦人をからかふやうな口調になつて、「あなたの苗字でない名前を敎へないこと。」といふと、「そんなものはありませんわ。昔は洗禮を受けると、も一つ名前が貰へたさうで、マアガレットだとか、テレエゼだとか、ジエアンヌだとか言つたものださうですが。」成程、あなたは生きた證人だね。」

かういつたら彼女は私を睨み返すだらうと思つたが、彼女は一向平氣であつたから、さてはいよよい賢女だなと思つて、私は心中大いに喜び、私はあなたに惚れましたとか、あなたの愛婦にはかなはぬとか、繰返して掻き口說いたが、それでも彼女は平氣なもので「何をおつしやるのか分りませんわ。」

それでも私は尚も執着を高めて來た。すると彼女も遂に立腹して、「あなたは何をなさらうとするのです。」「まあ、いゝではありませんか。」「いゝえ、いけません。」「シエロンさん、シエロンさん、まあ、さう言はないでも……」

私は彼女を強いて、樹の下のベンチに腰を下させ、彼女の手を取つて、自分の唇へ持つて行つた。……と、私は突然何も見ず、何も聞かなくなつて、ただ一人自宅の寢臺に横はつて居た。私は兩手で眼をこすつて、朝の明りにキヨトキヨトしながら、ふと見廻はすと、私の側には召仕が顰間を顰をして立つて居た。

「只今九時でございます。今朝は九時に起せとのお申しつけでございましたから、只今九時でございますと、申上げに參りました。

*

ヒポリト・デユフルスヌが此の物語を讀終ると、一同は熱心に喝采して、各自之に對する感想を叙べた。まづ古典學者のニコオル・ランジユリイアは、「フイロパトリス」の第二十一章にある、クリチアスの文句を引いて、「君は夢の國の人間のやうに、白い石の上で夢を見たのでせう。さうでなくては一晩にそんな長い夢は見られませんよ。」

すると大使館員のジヨセフイン・ルクラアルがいふには、「どうも未來の社會といふものは、君の夢に見たやうなものではないでせう。私は社會主義の實現を希望しないが、しかしそれ

恐れもしません。一體共産主義といふものは、普通の想像するのとは餘程違つたものでせうね。誰かがコンスタンチヌス時代に、キリスト教會が始めて成功した當時のことを想像して、かういふことを言つたのではありませんか。——キリスト教は成功したが、しかし此の成功は、社會の變遷に伴つて、宗教上及び政治上、種々の黨派の事情が變化した結果で、キリスト教其者が成功したのではない。如何なる黨派でも教義でも、競爭の結果全く原形を失つて、最後には種々なものゝ結晶が殘る。さうして表面上最後の勝利を得たものゝ名前が、その結晶を表徴する名目となるのだ。」

「さうすると未來のことなぞを考へることはやめろといふことになるのですね。」考證學者のグウパンが尋ねた。

しかし發掘主任のジアコモ・ボニは、曾て地下へ四五尺掘ると、忽ち現代から石器時代に掘下げた經驗があるので、「要するに、人間社會といふものは、たいして變化しないものですよ。いつでも大抵同じことです。」

すると技師のジユアン・ボアリイが之に應へて、「全く人間は變化しません。人間は人間といふ一定の種屬に屬するので、種屬の進化といつたところが、一定の種屬として進化するので、人間の天性を後天的に變化することは不可能です。種屬が形態を變化することもありますが、これは最早在來の種屬を失つたのです。しかし此の地球上で、人間が進化の最上で、もう此上の進化はないといふことは言はれるでせうか。自然は人間といふものを生んでから、全く石婦になつたのでせうか。ウエルスの如きは、人間は最上のものでないと言ひます。實際、人間は地球に於ける最初のものでもなければ、最後のものでもありません。人類が發生する以前にも、地球の表面には種々の生物が既に發生して居たのですから、人類が將來衰滅した曉にも、之に代るべきものが發生するでせう。その種屬は多分人間から脱化するのでせうが、しかし既に生態を一變すれば、最早別屬の種屬ですから、恐らく從前の種屬であつたところの人類なぞは下等動物として輕蔑して、餘り重きを置かないでせう。さうなると吾々人間が、どんなに優秀な藝術なぞを貽したところが、新に發生する種屬から觀ると、何等の價値が無いかも知れませんよ。」

雅邦論

野口米次郎

雅邦の藝術は必ずしも形式の詳細を輕視するもので無かつたが、色澤と空氣の幻想のなかに翔け上つて『氣高い灰色の存在』と顯はれることを切に希望した。彼は藝術の因襲主義を敵視しなかつた。彼は狩野派のいつも不合理で無稽に近い因襲主義をも、自分獨特の錬金術的魔法でそれを超絶的美と鑄かへ藝術的權威を與へて居る。彼は因襲主義からそも〳〵出立したといふ事を如何に喜んだであらうと僕は想像することが出來る。そしてまた、彼が因襲主義から離れた時、如何に追懷的な悲しい眷戀の眼で見直したであらうかと僕は想像することが出來る。因襲主義もぎら〳〵輝かぬ限りはそう悪いものとも云へない。因襲主義を暗示たらしめるには大な手腕を必要とする。雅邦の藝術に於ける個人性を說くことは、決して彼に對する正しい行爲でない。彼の思想や概念は（假令批評の餘地は澤山あるにしても）高尙なものであつて、少くも西洋の近代藝術家のそれとは隨分相違して居た。彼は藝術上に個人性を表現するといふことを目的としなかつた、寧ろそれを極力非難し又輕蔑したとさへ想像することが出來る。僕は彼の藝術に接すると、東洋哲學を讀むかの感があるといふことを告白し得る、彼は確に禪宗の教理から多大な影響を蒙つて居た、禪の悟入から藝術上の無我境に到達し得たものであらう。彼は生前機會ある毎に『心持ち』といふことを語つた。僕はそれを單に精神的といふ意味で無く、雅邦に對する『心持ち』は遙にそれ以上に深い意味があつたと了解するものである。『藝術の心持ち』はその性質上、果して主觀的なるものか又は客觀的なるものか。或はまた主觀客觀の兩者を結合して居るものか。こういふ質問を僕が雅邦に掛けたとしても、雅邦はきつとその返答に窮したであらうと想像するのである。彼は實際の人としても少い言葉の藝術家であつた。また沈默を雄辯とも考へ又完全な返答とも思つた禪僧の一種であつた。今僕は雅邦に替つて彼の『心持ち』を說明して見やうと思ふ。

恐れもしません。一體共產主義といふものは、普通の想像するのとは餘程違つたものでせうね。誰かがコンスタンチヌス時代に、キリスト教會が始めて成功した當時のことを想像して、かういふことを言つたのではありませんか。――キリスト教は成功したが、しかし此の成功は、社會の變遷に伴つて、宗教上及び政治上、種々の黨派の事情が變化した結果で、キリスト教共者が成功したのではない。如何なる黨派でも教義でも、競爭の結果全く原形を失つて、最後には種々なものゝ結晶が殘る。さうして表面上最後の勝利を得たものゝ名前が、その結晶を象徴する名目となるのだ。」

「さうすると未來のことなぞを考へることはやめろといふことになるのですね。」考證學者のグウパンが尋ねた。

しかし發掘主任のジアコモ・ボニは、曾て地下へ四五尺掘ると、忽ち現代から石器時代に掘下げた經驗があるので、「要するに、人間社會といふものは、たいして變化しないものですよ。いつでも大抵同じことです。」

すると技師のジュアン・ボアリイが之に應へて、「全く人間は變化しません。人間は人間といふ一定の種屬に屬するので、種屬の進化といつたところが、……

を變化することもありますが、これは最早在來の種屬を失つたのです。しかし此の地球上で、人間が進化の最上で、もう此上の進化はないといふことは言はれるでせうか。自然は人間といふものを生んでから、全く石婦（うまずめ）になつたのでせうか。ウエルズの如きは、人間は最上のものでないと言ひます。實際、人間は地球に於ける最初のものでもなければ、最後のものでもありません。人類が發生する以前にも、地球の表面には種々の生物が既に發生して居たのですから、人類が將來衰滅した曉にも、之に代るべきものが發生するでせう。その種屬は多分人間から脫化するのでせうが、しかし既に生態を一變すれば、最早別屬の種屬ですから、恐らく從前の種屬であつたところの人類なぞには下等動物として輕蔑して、餘り重きを置かないでせう。さうなると吾々人間が、どんなに優秀な藝術なぞを貽したところが、新に發生する種屬から觀ると、何等の價値が無いかも知れませんよ。」

雅邦論

野口米次郎

雅邦の藝術は必ずしも形式の詳細を輕視するもので無かつたが、色澤と空氣の幻想のなかに翔け上つて『氣高い灰色の存在』と顯はれることを切に希望した。彼は藝術の因襲主義を敵視しなかつた。彼は狩野派のいつも不合理で無稽に近い因襲主義をも、自分獨特の錬金術的魔法でそれを超絶的美と鑄かへ藝術的權威を與へて居る。彼は因襲主義からそも〳〵出立したといふ事を如何に喜んだであらうと僕は想像することが出來る。そしてまた、彼が因襲主義から離れた時、如何に追憶的な悲しい眷戀の眼で見直したであらうかと僕は想像することが出來る。因襲主義もぎら〳〵輝かぬ限りはそう惡いものとも云へない。因襲主義を暗示たらしめるには大な手腕を必要とする。雅邦の藝術に於ける箇人性を說くことは、決して彼に對する正しい行爲でない。彼の思想や概念は（假令批評の餘地は澤山あるにしても）高尚なものであつて、少くも西洋の近代藝術家のそれとは隨分相違して居た。彼は藝術上に箇人性を表現するといふことを目的としなかつた、寧ろそれを極力非難し又輕蔑したとさへ想像することが出來る。僕は彼の藝術に接すると、東洋哲學を讀むかの感があるといふことを告白し得る、彼は確に禪宗の教理から多大な影響を蒙つて居た、禪の插入から藝術上の無我境に到達し得たものであらう。彼は生前機會ある每に『心持ち』といふことを語つた。僕はそれを單に精神的といふ意味で無く、雅邦に對する『心持ち』は遙にそれ以上に深い意味があつたと了解するものである。『藝術の心持ち』はその性質上、果して主觀的なるものか又は客觀的なるものか。或はまた主觀客觀の兩者を結合して居るものか。こういふ質問を僕が雅邦に掛けたとしても、雅邦はきつとその返答に窮したであらうと想像するのである。彼は實際の人としても少い言葉の藝術家であつた。また沈默を雄辯とも考へ又完全な返答とも思つた禪僧の一種であつた。今僕は雅邦に替つて彼の『心持ち』を說明して見や[illegible]ふ。

(105)

日本政府で華盛頓の國際勞働會議へ委員を派出する經路は、ヴエルサイユの[illegible]

主觀的藝術心で捕はれない畫家が描いた客觀繪畫の生命則ち生きた呼吸が雅邦の『心持の繪』であらう。畫面に對して自分の主觀を無くして仕舞ふことが、雅邦の最初で又最後の努力であつたであらう。描かんとする題材と完全な結合を築くといふ點に、眞實な藝術の解放の途が開かれる。『自然自身をして語らしめよ』といふ言葉は餘りに使用され過ぎては居るけれども、雅邦の場合位この言葉の眞實なるは無いのである。雅邦の意見では、繪畫上に箇人性の光線を投込むといふことは必竟自然に對する冒瀆に外ならぬど考へたに相違ない。斯ゝる藝術家が如何に内氣な謙譲な人であつたかは容易に想像される。又同時に彼の藝術家としての誇もそのうちから産れたものであるといふことは勿論である。實に眞實な藝術の道は謙譲無くして達せられ無い、謙譲の保護を得て初めて自然の神龕に踏込む權利が得られぬのである。雅邦に對する藝術は墨や筆や絹の問題で無く、實に神聖な祈願的行爲であつて、藝術家になるといふことは人生の最大勝利であると彼は思つたに相違無い。彼は心に神聖な聲を聽いた、然し彼はその靈聲を唯無我境に入る一媒介として尊敬したといふ點に、彼の偉大な人格が閃いた。

北齋や廣重の風景畫は、人間對自然の關係を寧ろ箇人的に傳へんとした所謂風土的繪畫である。西洋の繪畫でいふと、十七世紀に於ける和蘭風景畫の如く、その鄕土に對する國民的興と誇とを反映したものである。然るに雅邦の自然は充實して何等の破綻を示さない宇宙の全眺望を暗示するを目途としたものとして居る、故に外面的描寫で無く心の描寫である。雅邦の言葉を使用すると『心持ち』の繪である。漢畫論で三品の第一に置かれて居る氣運生動的繪畫を藝術の極致と是認した繪である。（夏文彥曰、氣運生動、出於天成、人莫窺其巧者、謂之神品、筆墨超絕、傅染保宜、意趣有得者、謂之妙品、得形似而不失規矩者、謂之能品。）この氣運生動をジャイルスは Rhythmic vitality と譯し、故岡倉覺三氏は The Life-movement of the Spirit through the Rhythm of things と譯し、又その他の人は The fusion of the rhythm of the spirit with the movement of living things と譯して居る。これ等の譯語の不充分な點を見ると、如何に支那は文字に豐富であるかゞ容易に了解される。又此言葉は單に藝術の原理であるに止らず、永らくの間それが東洋繪畫の上で實行されて來たものである。前にいつたやうに、人間對自然の關係といふ外面的意義から自然を眺めたもので無く、自然と人間を繋つて一丸とした態度を眞實としたものである。

雅邦の描いた自然は、單に自然に對する慇懃な禮讃たるに止まらない、英語でいふと The solidarity of the universe を自然

現象の一角から暗示したものである。

僕は屢々西洋に於ける東洋繪畫研究者の說を謹聴して非常に開發されることがある。ある賢明な英國の批評家は僕にこういふことを語つたことがある。『人間の靈は空吹く風や散じては雨となり又變じて空中に飛ぶ霧や霞と同一性であることを確める。この流動的な可入性で變轉極まりない靈根の至上至高の鋭氣が、東洋藝術では龍の一枚で表象せられる。今ではこの表象の起原を知るものは無い。兎に角空中に飛躍する奇怪な龍は、水や燐を飛ばす暴風雨や雲や雷に關聯する。老子は何處かで水は宇宙の現象中、一番弱くて柔かで、しかも一番強く固いものだと說いて居る。水は爭無く又無努力で巧妙に何物にも滲徹する。そして又世界中如何なる存在にも(又人間の存在のなかにも)穿入し得る點から。永遠無終の靈を表象的に代表することゝ成つた。龍は則ち水の流動的鋭氣を表象したものである。龍と共に東洋藝術が好んで取扱ふ題材は瀑布である。今日日本の風景中最古の作品と認められて居る一點は、巨勢金岡の「那智の瀑」であらう。(ある研究者の鑑定では金岡よりずつと以後の作品だといふ說があるがそれは何うでもよいことだ。)この繪に關する特に[illegible]神秘感が無い人でも、これを見ると宗教的印象の何物を受けないといふ譯に行かない。樹木が茂つた[illegible]絶壁から落ちる清い細い水の線條と、黄金の圓を描いて居る[illegible]人間の表現には藝術的權威が漲つて居る。僕はこの作品の場合に於て、東洋の詩人や哲人が瀑布の美を眺めて無我の境地を開拓せんとして居る圖を知つて居る。支那の詩人が歌つたやうに、人間はとこしなへに亡びるけれども自然は永久に同じであるといふ感無きを得無い。宋時代に李龍眠といふ名家が居て、この人は酒一壺を攜へて山間水落つる間へ出掛けて橫臥して暮らした。この有樣を描いた繪は今日澤山殘つて居る。こういふ自然と人生を一に了解した思想も、我々西洋人のあるものには必ずしも奇異で無い。』

ウォツウォズは老子の所謂無爲を信じていつも受動的態度を尊重する結果、西洋人に稀れな孤獨靜座の詩人たることが出來た偉人である。ライダル山退隱の人としては、その情調を山河のそれと合一ならしめ、偶然を必然のうち又永遠を瞬間のうちに發見した。自然の原子と人間の本然性を同一視して、人間の喜觀のうちに自然の變移を聞いた。一言で云ふと、彼は宇宙の[illegible]に對する完全な觀念の所有者であつて、自然を人間生活の背景とのみに見ずして、その主要な一部と信じたものである。この態度は正しく東洋藝術家のその繪畫に於ける態度であるといふことが出來る。藝術家として輝く出た偉作に又門徒を[illegible]

地と考へた東洋の詩人や藝術家には、決して西洋の詩人シエレーの歌つた『雲』の一篇は容易に了解され得る一篇である。『われは自分の墓石を無言で笑ひ、母體を出づる子供の如く、墓地を去る幽靈の如く、霰と雨のなかゝら登る』といつた天空の雲に對する作者シエレーの自然觀は極めて感激的であつた。然るに東洋人は自然を靜止の態度でいつも眺めたのである。彼等に感激が無かつたので無いが、その感激が靜止に返つた時初めて自然を眺めたものだ。其處に大な相違がある。近代の西洋詩人でメレデスが一番東洋思想に接近した人である。ビンヨン氏は禪の默想から彼の澤山の詩は出來たとさへいつて居る。東洋人が自然を靜觀住視するといふことは、自箇實說を遂行する一着歩であることはいふまでも無い、木や水や花や山の非人間界に入ることに依つて、人間は自分の主我を忘れることが出來、宇宙に於ける眞實なる場所を發見することが出來るのである。故にメレデスに對する自然の考察は決して感傷的な放縱な行爲ば無く、何處までも自箇を强める訓練であると信じて居たのである。この態度は移して以て、風景繪の上に於ける橋本雅邦の態度であつたのである。

自然が高く翱翔すると夢幻の深淵に入り、之の場合に於ける自然の聲は沈默である。東洋藝術では空氣色澤の靜寂を傳へる所のものを最も高尚として、この點から最大審美は沈默の鑑賞に歸することが出來ると結論して居る。沈默の觸れた人生の喜悅には如何にも力强い戰慄がある、そのうちに自箇を忘却して漸次に理想とでもいふことが出來る或物を摑むことが出來るのである。少くも僕自身は雅邦の藝術を凝視して居ると、『沈默の觸れた喜悅』の印象を得る、彼の藝術には靜寂な空氣のなかに微動する蓬萊島の追憶的消息があるといふことが出來る。（雅邦は幾枚もこの蓬萊を題とした繪畫を描いて居る。）人は雅邦の藝術を見て、一言で理想主義だといつて退けたければそれも良からう。雅邦自身は他の批評に對して唯無言の返答だけ持つた藝術家である。如何に人に理想主義に見へるにせよ、彼自身に對しては自分の藝術は實現の藝術である。人には空想と思はれても、それは彼が赤裸な眼で見た現實の姿であつたのである。彼は理想から解放された人だといふことは眞實で、そしてまた彼に對する夢は現實的であつたともいふことが出來る。

彼の藝術は徹頭徹尾調和の藝術である。宛も見る床の間の掛物に描かれた遠方の高山の如く、深淵と斷巖の胸のなかゝら離れた諧調の幽雅が彼の藝術だ。それを眺めて居ると、大な空間の鼓動に觸れて自然に自分を永遠（エタニチー）に結合せしめることが出來、又現實と呼ばれて居る所のものも、畢竟するに大自然の直覺的

情調の震動たるに過ぎないことを了解するに至るであらう。彼の藝術は少くも東洋一部の最高藝術で、その眞實なる點で西洋の最高藝術と握手することも出來る。僕はある彼の作品中に、多少たりとも西洋藝術の暗示を感ずることが出來るが、それに依つて眞實なる藝術は東西兩洋の出發點を何處かに持つて居るとの自信を與へられるのである。彼は藝術の秘密を發見した。人が彼の秘密に觸れるとある追憶が絡み合つた感動の或物を感じて、美の最高領土へ飛躍することとさへ出來るのである。いふまでも無く彼の藝術は單純であり又彼の幻想は複雜で無い。然し最大單純性は常に最大複雜性の產む所であるといふことは、必ずしも東洋だけに限つた哲理ではあるまい。雅邦もその他の偉大な藝術家同樣、單純と複雜との兩極端を握つて居た。彼の藝術の原子たるものには所謂藝術より更に老ひた或物、人生より更に大い或物、幽玄とか奥妙とかいふ文字で說明される或物を包んで居るやうに感ぜざるを得ない。故に年取つた自然の不思議な絕對的な衝動を我々に與へる、又我々が喜んで死さへ辭しない夢の急激な恍惚の感をも與へる。我々は彼の藝術から平靜と無言の深い印象を得て、これまで摑みたいと切に希望して居た或物を摑み得たやうな喜悅を感ずるのである。この喜悅は最も純な精神的のものである。彼の終覺は明滅を極める幽靈の如くに生きて居る。

彼の宗教に對する觀念は悲しいもので無かつた。元來佛教は悲觀主義ではあるが、一面には喜ばしく同情的である。故に單に悲哀と涙とのみに關聯して考へるといふことは佛教の正解ではあるまい。今雅邦が描いた宗教畫を見ても、必ずしも莊嚴な觀念だけを傳へては居らない。彼の羅漢の畫の如きは寧ろ樂天的表情の一種とさへ見ることが出來る。詩歌は悲哀が觸れた柔軟な喜悅の表白で、これを通して人々は眞實な涅槃に入るのである。雅邦に對する沈默の境地は平和の最高土を意味して、人生の最高喜悅なる悲しい喜悅は、人生の諧調を破壞しない進化そのもので、彼は涙と悲哀を反逆的に了解したと僕は思つて居る。彼の藝術は我々に大な尊敬心を起さしめる、——如何となれば、それは宗教的であつて常に是認されべき藝術であるからである。彼は藝術家としての信仰の光明を放散して、如何なる彼の作品を見ても、何んなに喜悅の情を湛へて彼がその作に從事したであらうと感ぜざるを得無い。彼の藝術的熱望は決して偶發的のもので無く、絕きざる努力が一歩々々と發育してその結果を出したものに外ならないのである。

千九百七年一月に死んだ彼の七十年間の一生は分ちて三部とすることが出來る。その第一期は狩野派の傳統的研究に沒頭し

た時代をいふ。第二期に於ては、彼は徐々として古い狩野派の拘束から離れ、有らゆる流派の獨特な特調を穿鑿吟味して居る。そして第三期は則ち彼が前時代に於ける努力が結晶して彼一箇の藝術となつた創造的權威の顯はれた時代を云ふのである。一言で蔽ふと、彼は純眞なる東洋藝術の總勘定であるといふことさへ出來る。彼は朝から晩に至るまで、靜かな畫室に自分を閉込め、宛も尊嚴なる燈火で輝く祭壇に對坐する如く、手に畫筆を持ち絹に面して一生を送つたものである。彼は支那は宋元明淸時代に顯はれた諸名家の作品から、東山派諸大家の作品に渡つてその追憶的微光のもとで自分の思想を練磨した。彼の言葉に依ると、何等の影響を光琳派から受けて居らない。然し僕は彼の作品に西洋藝術の智識を發見することが出來ると信じて居るのである。明治二十二三年頃、今泉雄作氏は雅邦の事を書いて彼の藝術を歷史的に眺めて居られる。『古來畫山水の變遷極めて多し。支那によりては營邱の李成長安の關同華元の范寬の三家を以て百代に鼎峙せしむ。畫論に所謂氣象蕭疎、烟林淸曠、毫鋒穎脫、墨法精微者、營邱之製也、石體堅凝、雜木豐茂、臺閣古雅、人物幽閑者、關氏之風也、峰巒渾厚、勢狀雄強、槍筆俱匀、人屋皆質者、范氏之作也とあるに依りて之を見るもその主とする所異あるを知るべし。然れども前に王維李思訓李道荊浩胡翼の論あり後に許道寧郭忠恕趙千里高克明李唐李山高馬遠夏珪劉永能貢の輩あり、或は水墨の淋漓を最上とし或は金碧の明麗を第一とす。其變化枚擧するに遑あらざるべし。本邦に於ては正倉院御琵琶撥面冬獵の圖あり。東寺山水の屏風あり藤能愛恩の纖麗より因伊陀彼の渾厚あり信實となり周文宗丹となり秀文雪舟となり永德山樂となり探幽常信となり應擧吳春となり幾多の異趣を現出せり。將來の山水は果して如何なる形相を得べきか想ふに種々の方面より進化すべき者ならん。或は雪舟元信より轉じて來るものならん或は六條道場の風格を摸して別に一種の土佐山水を生ずる者あらん。或は圓山四條の粹を拔きて更に雄大の勢壯を張る者あらん。橋本雅邦氏は則ち狩野の骨髓に基きて新たに機軸を出したるものなり。』それから其時の博覽會に雅邦が出品した『白雲紅葉の圖』を批評してこう書いて居られる。『夕陽遠空に在り一片の白雲半天の紅樹を擁し山骨高秋に聳へ飛泉碧霜に入る巖巒古苔深く滴り老樹地に臥して靜に奔流の聲を聽くものゝ如く之に對する者巴峽三峽の猿啼に接するの思あるべし。氣品の淸雋意匠の創新筆力墨氣の流暢なるは固より論を待たず九尺有餘の大幅を自在に書き去り一筆も苟もせざるに至りては究竟に出藍を窮さす老熟の大家に非ざれば企て及ぶ所に非ざるなり。蒼色の山水は尋常奇抜なるに非ざる

ば則ち淡彩模糊たらんと欲するなれども此畫は特に彩色中に濃淡を用ひ照映陰影に大に味ふべき者あり。樹法に至りても亦一種の描法を用ひ不得の特質を示せり。其他大に從來の手法に依りて轉化を試みたるは現品を見たるものゝ能く認め得べき所なるべし。』人はこの雅邦の現物を見なくても、今泉氏の言葉を讀むと大略如何なる作品たるかは容易に想像することが出來る。又雅邦其人が生前に於て已に贏ち得た藝術上の名聲の程度も知ることが出來る。彼は生前已に大家と尊敬せられ、死後その名聲を一層高くならしめて居る。

彼の藝術上の趣味は偏狹を嫌つて極めて寛裕なものであつたが、決して辨別力を缺いた場合は無つた。彼の哲學（漠然たるものであつたが）は慢然と彼の時代の紛亂から離脱せしめて、如何なる場合でも自分の藝術心を攪亂されたやうなことは無つた。藝術家としての彼の人格は近來稀れに見る偉大なもので、無理戒に取り入れた細い藝術的智識のため彼は何等の抑壓をも感じなかつた。彼は實際それ等を超絶して大な勝利の歌をうたつた。人は彼の作品を靈感（インスピレーション）の仕事といゝたければ、そう稱しても差支ないが、雅邦自身は靈感の二字を喜ばなかつたであらうと僕は思ふ。彼は心に殆ど宗敎的ともいふことさへ出來る諧音の感に打たれ、それに依つて自然と自分と合一せられて、彼が描かんとする題材と自分との間には何等の間隙をも見出さなかつたのである。

彼は魔法的伎工の所有者であつた。この魔法は特に彼の線に顯はれた。東洋の繪畫は線の美を基調として居ると彼は確に信じた。實に彼の作品を調べると、彼の線には何んたる驚愕と何んたる變化とがあるであらう。彼が虎や龍を描くに當つて使用した線と、鳥とか花とを描きあらはした線とを比較して見給へ。虎や龍の繪には熱烈な表象的に強い力が線にあり、又鳥や花の線には優はしい精緻な印象を傳へる所がある。線自身が已に藝術であるといつても必ずしも過言ではあるまいと思ふ。然しかういつたからとて、僕は色彩の畫家として雅邦の價値を安く見積るので無い。

雅邦は天保五年（千八百三十二年）江戸で生れた。七歲の時分から繪を習ひ初め、十三歲の時勝川雅信の門人となつて勝園雅邦の名前を貰つた。元來雅邦の家は藝術家の家筋で、系圖を晉へ遡ると明和時代（千七百六十四年頃）に何んとかいふ雅邦の先祖に當る人が京都に住居して居て、前川越藩主松平周防守の知遇を得た。この周防守が任務を終へて京都を辭する時、雅邦の先祖は畫師として江戸へ連れられて來た。江戸へ着いて京橋の木挽町に住居を卜し間も無く狩野家の友情を得るに至つた。そ

の人から系圖がずつと續いて雅邦の親橋本晴園養邦に至つたのである。雅邦が勝川雅信に弟子入りすると翌年父母を失ふに至つた。彼の美術上の發達は頗る迅速なものであつた。僅か四年間の稽古で、彼は師匠勝川の助手として將軍家御杉の間の裝飾に從事した。勿論この事が破格であつたことはいふまでも無いことである。二十歲の時彼は勝川畫塾の塾頭といつたやうな格を得た。二十六歲で結婚し畫家としての獨立生活を營むことになつた。然しこの結婚の不幸であつたことは間もなく知れた、彼の新しい妻は發狂者となつた。そしてこの憐れな妻を抱いて雅邦は生活難と闘はねばならなかつた。

雅邦夫人は師匠勝川が持つて居た埼玉縣下樋口村の地所へ退いて、江戸の騷擾を離れ徐ろに病氣を養ふことになつたが、病狀は益々募つて狂ひ廻つた。田舍に居ても時々隣家から惡戯を仕掛けられるとかいふので、狂者の雅邦夫人は再び江戸へ歸つて、親切な夫の保護のもとに置かれた。こうゆう工合で、藝術上の煩悶と家庭の不幸の爲め苦しみ拔いて居る際中に、三百年間續いた江戸幕府は愈々倒れ此處に明治時代の曙光が東天に輝くに至つた。然し開かれた新時代に於ける社會の混亂と豫期しなかつた大變化は、日本を外國文明の侵入を容易ならしめて、日本の社會はそれに對する適當な反抗を發見することが出來なかつた。舊日本を亡ぼして化粧ふといふことは、寧ろ賢明な行爲であるとさへ一班に了解されるに至つた。これは藝術に對する暗黒時代であつた。人民が生存の安全さへ得ることが出來なかつた時代なれば、藝術を稱讃したり又これに對して金錢を費やすなんどといふうとは思ひもよらなかつた。今日から考へると何うしてこういう時代に美術家が生存し得たかさへ奇蹟に受取られる。

假令それが最も悲慘な物語でなかつたにしても、雅邦の生活上に於ける奮闘は悲しいものであつた。彼は繪畫を捨てゝ、その筆で支那へ輸出する安價な扇子の繪を描いて衣食の路を求めた。彼は扇子の繪が下手だといつて雇主からしたゝか罵倒させられたことがあつたと聞いて居る。彼は扇子の繪描きを止めさせられる破目になつて、鎖帷子みたやうな網絆を作る内職をしたそうだ。これから三味線の駒を作つて問屋へ卸し、當時の相場駒一箇が一錢で三日懸かつて二十箇仕上げることが出來たといふことである。して見ると雅邦といふ名人の域に達する運命を持つて產れた藝術家の一日の賃金七錢に足らないとは、實に天も悲慘な無同情な取扱を彼に與へたものだ。彼晩年物質的にも酬ゐられ一代の名聲を背負ふに至つた時、その往昔を追懷して嘸今昔の感に撃たれたことであつたであらう。千年からの歷

史を持つた日本美術は一時代の冷酷の爲め決して亡びるものでないといふ彼の信仰は不動であつた點は、實に雅邦の偉大な所である。明治時代の社會的精神が整理されて、常態に歸つて來るに從ひ美術に對する嗜好は目覺め初めた。又それに連れて優秀な藝術家は迎へられて來たのである。雅邦はその日の來らんことを忍耐して待つて居たのである。彼の信仰は答へられた。彼の豫言的先見は報ぜられるに至つた。彼が悲慘な狀態のなかを、氣高い眼で天上の星を眺め乍ら徐々と足元確に歩いた態度は實に敬服に價すると云はねばならない。彼のこの態度は時代を超絶して居た。藝術の上に於けるばかりか、彼の人生は勝利の歌であつたといふことが出來やう。

狂者なる彼の妻は死んだので彼は重荷を降したやうな氣樂さを感じた。彼は間も無く海軍省に出仕することになつた。海軍省の職にあること幾年間であつたかは知らないが、明治十八年に鑑畫會やその他の諸會が成立して東洋美術奬勵の機運が開けて來た時分まで在職して居た。其後文部省に出て、その時の同僚狩野芳崖や岡倉覺三と共に美術調査事務に干與した。いふまでも無く雅邦芳崖岡倉の三人は明治時代に於ける日本美術の救濟主であつた。

明治二十二年に美術學校が開かれるに至つて、雅邦は直にそれに關係したが、當時の美術學校長岡倉氏が辭職した時雅邦も岡倉氏に殉して學校を辭職して仕舞つた。岡倉氏がその後日本美術院を創立した時、彼は馳せ參じて院長の職を引受けた。この時代の歴史は今日なほ人の記憶に新しいであらう。

祖先のまぼろし

田中貢太郎

この八月、郷里へ歸つてゐた時の事である。ある日、自分の家から北の方になつた町甫へ出る畑の間の小徑を歩いてゐて、ふと眼を見張つて、其所と思はれる邊を見廻はした。それは、私達の先祖を祭つてあると云はれてゐる社地に、目標

になつてゐた木立の見えない爲めであつた。黄熟した麥、夕闇に頷付く里芋の葉、茂つた甘藷の莖、猿のやうに延びたかんしよの丈の高いの、さう云つた四季折々の農作物の植ゑられた畑地に添うて、十坪ばかりの狹い土地があつて、其所に小さな社が祭られてゐた。社の周圍には木立があつて、春は椿の花が赤い斑點を見せ、それに集まつて來る目白が淋しさうに啼いた。木立の中ではつきりした記憶のあるのは、社の前の地面の左隅になつた桂の並木と、右側の小徑との境に並んで立つた梢の枯れた杉の木とであつた。社の祠は瓦葺にしであつた。そして、祠の背後に地面からすこし露出した塚らしい石疊みがあつた。

『この下に大きな瓶があつて、先祖様の骨が入れてある。』

などと聞かされた事を覺えてゐる。その社は夏と秋との二季に祭つた。それを祭るは私の家の本家になつてゐる澤田姓の家であつた。其所には腰のくぐんだ老人がゐて、祭の日には、朝から祠の周圍の草を引き、夕方には袴を穿いて、神酒錫の徳利や、供物の小餅の搗いたのを白木の三寶に入れて持つて來た。夏祭の時には、私や澤田の子供達で、附近の家々から五厘一錢と集めて、それで買つた澤山の蠟燭提燈を頂から杉に吊り渡した小繩に釣し、夕方それに火を灯した後で、その繩を切つて下に落した。それを目的に集まつて來てゐる子供の群が、押し合ひへし合ひして、それを拾つた。

社の名は澤田神社であつたが、私等は新明神様で通した。——その新明神の目標になつた木立がなかつた。そして、私の眼に映つた周圍は、雜草がぎつしりと茂つて、きりぎりすがキリース、チョン、キリースと鳴いてゐる狹い草地であつた。木立も、祠も、石疊みも何もなかつた。

私は不思議に思つて、その夜、父と酒を飲みながら聞いてみた。

『新明神様がなくなつてゐるが、あれは、どうしたです。』

『澤田が横濱へ行つて、祭れなくなつたから、氏神様へ合併して貰うて、後を賣る所にしてあるが、社地や寺領は人が嫌うて買はない。』

澤田では老人も、老人の子も皆亡くなつて、その孫夫婦が横濱で旅館をしてゐた。私は先祖に對して非常に濟まないやうな氣がした。

『先祖の墓地を賣るのは惜しからん、内で買はふぢやないか。』

と云つてみたが、父は別に興味を持たない風で、何も云はなかつた。

その先祖の事蹟に就ては、これと云ふ記錄も殘つてゐないので、今の所謂ゆる史學的考證の材料にはならないが、私には、その先祖の幻を髣髴さするに尤も適した材料を持つてゐるから、それを筆にする事にした。それは、私の郷里に殘つてゐる口碑である。

一

池の城では家臣を集めて評議にかゝつた。岡豊の城主長曾我部國親が山田・大津・介良・下田の諸城を攻掠して、その手兵を南に向けやうとした。下田は山一つ隔てた隣村であつた。十市栗山の城主細川備前入道宗桃はこれに恐れて、降を乞ふ事になり、池の方へもその旨を通じて來た。池には備前入道の二男池豐前守頼和がゐた。

これは、天文十三年の春の事であつた。頼和の傍には、子息市正頼定も控へてゐた。色の白い、眉と眼との間の迫つて見える若者は、我が家の浮沈に關する重大な評議に耳を傾けてゐた。其所には、岩松、池、青木、山口、池内など云ふ老臣達が連つてゐた。

『皆の考はどうじや、十市と一所に降參した物であらうか、」

頼和は皆の顏を一わたり見廻はすやうにしたが、その心では、強敵を前に廻はして、一門の興廢に關するやうな危險な事はしたくなかつた。

「十市殿のなさるゝ事でございますから、御連枝の當でも、御同意あるのが理の當然かと存じます。」

和平を欲する老臣達の顏には、十市と同じやうな手段に出るのが當然であると云ひたさうな色を浮べてゐたが、頼和の直ぐ前に控へてゐる岩松を憚つて、何人もそれを口に出す者がなかつた。岩松七郎經重は池の長臣であつた。

「岡豊は一條殿の聟が目出度い上に、本山と婚儀を結んで居りますから……」

青木と云ふ老臣の一人は、それとなしに岡豊の恐るべき敵である事を云つた。それは、岡豊の長曾我部は恐るべき敵であつた。康暦の頃、細川武藏守頼之が四國の探題に補せられて以來、土佐も細川氏の威令の下にあつたが、應仁の亂後、その覊絆を脱した土豪が各地に黨を立てて爭闘を事とするやうになると、國親の祖父文兼は、國內靜謐の爲めに諸豪と盟約して、一條教房の兵庫の逆旅にあるのを迎へて、それを土佐の國司と仰いだが、それが爲めに長曾我部家の勢望が高まり、その結果、國親の父兼序は、山本茂宗を始め諸豪の妬む所となつて襲殺せられた。家難の當時、嬰兒であつた國親は、皮籠の中に隱れて幡多へ走り、一條家の庇護を受けて成長した。そして、永正十三年、一

條房家の取做しによつて諸家と和して、岡豊の舊領へ歸ると、第一に本山家と婚を通じて、昔の恨みなどは覺えてもないと云ふやうな風をしてゐた者であるが、それが手兵を提げて立つた。池の老臣達は、國親の心の奥底の深いのを見たのであつた。

『それもな十市殿さへ、岡豊勢を引受ける御所存なら、當家が先に立つて手合せをする所ぢやが、其所がさ、』

山口と云ふ老臣は、右隣にゐた頬髭の濃い男の横顔を見た。それは池内と云ふ老臣であつた。

『左様でござるとも、十市殿さへ、その御所存なら、如何に岡豊勢が強くても、兩家の人數で挾み討てば、さして恐るゝ程の事もないと思はれるが……』

池内は山口を顧みて、その乾からびたやうな顏を見返したが、詞に調子付いて來て、引締められてゐたやうな口が柔らかになつて來た。

『何に致せ十市殿がその御所存では、當家ばかりで岡豊勢を引受けると云ふ事も、十市殿に二心があるやうで、それは出來ない事ぢや。それに山田は昨年の事とは申せ、大津も、介良も、布師田も、下田も、この春になつて數瞬く間に切り從へたと云ふ事は、國親の武勇と申すよりは、この頃世上に噂のある岡豊八幡の加護ではないかと思はれる。若し、それとすると、それにさからふ者は神罰を蒙る譯になる。これは、矢張り、綺麗に和睦するがお家安泰の基ぢや。』

岡豊城中の楠の大木が、ある夜、風もないのに不意に倒れた。國親が氣にして卜はすと、『楠は木に南と書く。又木は東である然らば東南の方の亡ぶべき瑞相である』と云つた。で、城中の八幡宮の臨時祭をすると、社の前にゐた十二三の小童が、社壇に駈け上つて、『我は正八幡大菩薩である。汝が父祖の敵を討つて年來の欝憤を散ぜんと思つて、日夜寢食を安くせぬ志は不便の至りであつたが、今既にその時節が到來した。急いで南方へ馬を出せ、我れ前後に附添ふて力を添へてやる。』と云つたと云ふ噂が、岡豊勢が出た頃から傳はつてゐた。

『さればさ、拙者もその事で迷ふてをる。』

山口は空間に何物かを見詰めるやうな眼付をした。さうした會話は、其所にも此所にも交はされてゐたが、岩松のみは、兩手を膝に置いたなりに默つてゐた。

『七郎の考はどうじや、』

老臣達のそれぞれ意見を交ゆるのを聞いてゐた賴和は、ふと氣が付いて岩松を見た。

『私は降參などと申す詞を口にするさへ穢らはしいと考へます。當家は四國探題細川武藏守の後胤として、國中に誰れ知ら

ぬ者もない名門でありながら未だ敵の顔色も見ずに降參するやうな事があつては、世上の物笑ひになるばかりかこの上なき武門の恥辱かと存じます。それに、岡豐八幡の神託などとは、國親が人を欺く妖言でございます。山田の滅びたのは武運の拙い爲めの致す所、大津も介良も、布師田も皆妖言に惑はされて不覺を取つた者、下田は老女に謀られて燒き討ちに逢ふた者、國親の武勇はすこしも恐るゝに足りません。それでも尚ほ降參致されるとの事でございますなれば、この七郎はお暇を頂戴して、國親に一矢射て討死する覺悟でございます。』

岩松は鋭い眼を頼和の顔にやつてゐた。頼和は岩松から侮辱せられたやうに思つて、神經がいらだつて來たが、道理のある詞に對して怒る譯には行かなかつた。

『よし、それでは重ねて談合する。』

頼和は不快を耐へて云つた。座はしらけて寂として見えた。

二

岡豐と池との間は、四里位しかなかつた。皆長岡郡の内であつた。池は土佐湖に臨んだ丘陵に據つた土地で、山城になつた城の前には、もと入江であつたらしい水の碧い大きな湖があつた。其所は土佐日記に『かゝる程に、人の家の池と名ある所より、鯉は無くて、鮒より始めて、河のも、海のもことものども、長櫃に荷ひつゞけて、おこせたり。若菜籠にいれて、雉につけたり。若菜ぞ今日を知らせたる。歌あり。その歌、―淺茅生の野へにしあれは水もなき池に摘みつる若菜なりけり。いとおかし。この池といふは、所の名なり』とある所であつた。城の周圍の山には、其所此所に山櫻が咲いてゐた。

池城の評議は、岩松七郎の一言によつて終結した。頼和は七郎の強硬な己れの臆病を嘲り耻しめるやうな詞を聞いて、重ねて岡豐に降服するやうな評議をする事は出來なかつた。彼は仕方なく長臣の反對する趣を十市の方へ答へた。十市の方でも岩松の詞に耻ぢたのか、降服の事はそれなりになつて、岡豐勢に備へる準備に取りかゝつた。

岡豐では十市と池の降服するのを待つてゐた。山一つ隔てた下田蛸魚の森の落城を見ては、必らず降服して來るものとたかを括つてゐたが、幾日經つても使の者が來ない。國親は不審して、ある日、中島大和が前に來るとその事を聞いた。

『十市と池とは、どうしたゞらうな。』

『その事でございますが、私も十市と池の腹を疑うてをります。』

『下田の落城したのをどう見てをるだらう、怖ろしくはないだらうかな、……それとも太平樂の夢でも見てをるだらうか。』

條房家の取做しによつて諸豪と和して、岡豐の舊領へ歸ると、第一に本山家と婚を通じて、昔い恨みなどは覺えてもないと云ふやうな風をしてゐた者であるが、それが手兵を提げて立つた。池の老臣達は、國親の心の奥底の深いのを見たのであつた。

『それもな十市殿さへ、岡豐勢を引受ける御所存なら、當家が先に立つて手合せをする所ぢやが、北所がさ、』

山口と云ふ老臣は、右隣にゐた頬髭の濃い男の横顔を見た。それは池内と云ふ老臣であつた。

『左樣でござるとも、十市殿さへ、その御所存なら、如何に岡豐勢が強くても、兩家の人數で挾み討てば、さして恐るゝ程の事もないと思はれるが……』

池内は山口を顧みて、その乾からびたやうな顔を見返したが、詞に調子付いて來て、引締められてゐたやうな口が柔らかになつて來た。

『何に致せ十市殿がその御所存では、當家ばかりで岡豐勢を引受けると云ふ事も、十市殿に二心があるやうで、それは出來ない事ぢや。それに山田は昨年の事とは申せ、大津も、介良も、布師田も、下田も、この春になつて數時く間に切り從へたと云ふ事は、國親の武功と申すよりは、この頃世上に噂のある岡豐八幡の加護ではないかと思はれる。若し、それとすると、それにさからふ者は神罰を蒙る譯になる。これは、矢張り、綺麗に和睦するがお家安泰の基ぢや。』

岡豐城中の楠の大木が、ある夜、風もないのに不意に倒れた。國親が氣にしてトはすと、『楠は木に南と書く。又木は東である然らば東南の方の亡ぶべき瑞相である』と云つた。で、城中の八幡宮の臨時祭をすると、社の前にゐた十二三の小童が、社壇に馳け上つて、『我は正八幡大菩薩である。汝が父祖の敵を討つて年來の欝憤を散ぜんと思つて、日夜寢食を安くせぬ志は不便の至りであつたが、今既にその時節が到來した。急いで南方へ馬を出せ、我れ前後に附添ふて力を添へてやる。』と云つたと云ふ噂が、岡豐勢が出た頃から傳はつてゐた。

『さればさ、拙者もその事で迷ふてをる。』

山口は空間に何物かを見詰めるやうな眼付をした。さうした會話は、其所にも此所にも交はされてゐたが、岩松のみは、兩手を膝に置いたなりに默つてゐた。

『七郎の考はどうじや、』

老臣達のそれぞれ意見を交ゆるのを聞いてゐた親和は、ふと氣が付いて岩松を見た。

『私は降參などと申す詞を口にするさへ穢らはしいと考へます。當家は四國探題細川武藏守の後胤として、國中に誰れ知ら

ぬ者もない名門でありながら、未だ一度の敗色も見ずに降參するやうな事があつては、世上の物笑ひになるばかりかこの上なき武門の恥辱かと存じます。それに、岡豐八幡の神託などとは、國親が人を欺く妖言でございます。山田の滅びたのは武運の拙い爲めの致す所。大津も介良も、布師田も皆妖言に惑はされて不覺を取つた者、下田は老女に謀られて燒き討ちに逢ふた者、國親の武勇はすこしも恐るゝに足りません。それでも尚ほ降參致されるとの事でございますなれば、この七郎はお暇を頂戴して、國親に一矢射て討死する覺悟でございます。』

岩松は鋭い眼を賴和の顔にやつてゐた。賴和は岩松から侮辱せられたやうに思つて、神經がいらだつて來たが、道理のある詞に對して怒る譯には行かなかつた。

『よし、それでは重ねて談合する。』

賴和は不快を耐へて云つた。座はしらけて森として見えた。

二

岡豐と池との間は、四里位しかなかつた。皆長岡郡の内であつた。池は土佐灣に臨んだ丘陵に據つた土地で、山城になつた城の前には、もと入江であつたらしい水の碧い大きな湖があつた。其所は土佐日記に『かゝる間に、人の家の池と名ある所より、鯉は無くて、鮒より始めて、河のも、海のもこともものをも、長櫃に擔ひつゞけて、おこせたり。若菜籠にいれて、雉につけたり。若菜ぞ今日を知らせたる。歌あり。その歌——淺茅生の野へにしあれば水もなき池に摘みつる若菜なりけり——いとをかし。この池といふは、所の名なり』とある所であつた。城の周圍の山には、其所此所に山櫻が咲いてゐた。

池城の評議は、岩松七郎の一言によつて終結した。賴和は七郎の強硬な己れの臆病を嘲り耻しめるやうな詞を聞いて、もはや岡豐に降服するやうな評議をする事は出來なかつた。彼は仕方なく長臣の反對する趣を十市の方へ答へた。十市の方でも岩松の詞に耻ぢたのか、降服の事はそれなりになつて、岡豐勢に備へる準備に取りかゝつた。

岡豐では十市と池の降服するのを待つてゐた。山一つ隔てた下田蛸魚の森の落城を見ては、必らず降服して來るものとたかを括つてゐたが、幾日經つても使の者が來ない。國親は不審して、ある日、中島大和が前に來るとその事を聞いた。

『十市と池とは、どうしたらうな。』

『その事でございますが、私も十市と池の腹を疑うてをります。』

『下田の落城したのをどう見てをるだらう、怖ろしくはないだらうかな、……それとも太平樂の夢でも見てをるだらうか、』

條房家の取傚しによつて諸豪と和して、岡豐の舊領へ歸ると、第一に本山家と婚を通じて、昔の恨みなどは覺えてもないと云ふやうな風をしてゐた者であるが、それが手兵を提げて立つた。池の老臣達は、國親の心の奧底の深いのを見たのであつた。

『それもな十市殿さへ、岡豐勢を引受ける御所存なら、當家が先に立つて手合せをする所ぢやが、北所がさ、』

山口と云ふ老臣は、右隣にゐた頬髭の濃い男の横顔を見た。それは池內と云ふ老臣であつた。

『左樣でござるとも、十市殿さへ、その御所存なら、如何に岡豐勢が強くても、兩家の人數で挾み討てば、さして恐るゝ程の事もないと思はれるが……』

池內は山口を顧みて、その乾からびたやうな顏を見返したが、詞に調子付いて來て、引締められてゐたやうな口が柔らかになつて來た。

『何に致せ十市殿がその御所存では、當家ばかりで岡豐勢を引受けると云ふ事も、十市殿に二心があるやうで、それは出來ない事ぢや。それに山田は昨年の事とは申せ、大津も、介良も、布師田も、下田も、この春になつて數[illegible]く間に切り從へたと云ふ事は、國親の武功と申すよりは、この頃世上に噂のある岡豐八幡の加護ではないかと思はれる。若し、それとすると、それにさからふ者は神罰を蒙る譯になる。これは、矢張り、綺麗に和睦するがお家安泰の基ぢや。」

岡豐城中の楠の大木が、ある夜、風もないのに不意に倒れた。國親が氣にして卜はすと、『楠は木に南と書く。又木は東である然らば東南の方の亡ぶべき瑞相である』と云つた。で、城中の八幡宮の臨時祭をすると、社の前にゐた十二三の小童が、社壇に驅け上つて、『我は正八幡大菩薩である。汝が父祖の敵を討つて年來の欝憤を散ぜんと思つて、日夜寢食を安くせぬ志は不便の至りであつたが、今既にその時節が到來した。急いで南方へ馬を出せ、我れ前後に附添ふて力を添へてやる。』と云つたと云ふ噂が、岡豐勢が出た頃から傳はつてゐた。

『さればさ、拙者もその事で迷ふてをる。』

山口は空間に何物かを見詰めるやうな眼付をした。さうした會話は、其所にも此所にも交はされてゐたが、岩松のみは、兩手を膝に置いたなりに默つてゐた。

『七郎の考はどうじや、』

老臣達のそれそれ意見を交ゆるのを聞いてゐた賴和は、ふと氣が付いて岩松を見た。

『私は降參などと申す詞を口にするさへ穢らはしいと考へます。當家は四國探題細川武藏守の後見として、國中に誰れ知ら

ぬ者もない名門でありながら未だ敵の旗色も見ずに降參するやうな事があつては、世上の物笑ひになるばかりかこの上なき武門の恥辱かと存じます。それに、岡豊八幡の神託などとは、國親が人を欺く妖言でございます。山田の滅びたのは武運の拙い爲めの致す所。大津も介良も、布師田も皆妖言に惑はされて不覺を取つた者、下田は老女に謀られて燒き討ちに逢ふた者、國親の武勇はすこしも恐るゝに足りません。それでも尚ほ降參致されるとの事でございますなれば、この七郎はお暇を頂戴して、國親に一矢射て討死する覺悟でございます。』

岩松は鋭い眼を頼和の顏にやつてゐた。頼和は岩松から侮辱せられたやうに思つて、神經がいらだつて來たが、道理のある詞に對して怒る譯には行かなかつた。

『よし。それでは重ねて談合する。』

頼和は不快を耐へて云つた。座はしらけて森として見えた。

二

岡豊と池との間は、四里位しかなかつた。皆長岡郡の内であつた。池は土佐灣に臨んだ丘陵に據つた土地で、山城になつた城の前には、もと入江であつたらしい水の碧い大きな湖があつた。其所は土佐日記に、『かゝる裡に、人の家の池と名ある所より、鯉は無くて、鮒より始めて、河のも、海のもこともの在も、長櫃に荷ひつゞけて、おこせたり。若菜籠にいれて、雉につけたり。若菜ぞ今日を知らせたる。歌あり。その歌――淺茅生の野へにしあれは水もなき池に摘みつる若菜なりけり――いとおかし。この池といふは、所の名なり』とある所であつた。城の周圍の山には、其所此所に山櫻が咲いてゐた。

池城の評議は、岩松七郎の一言によつて終結した。頼和は七郎の強硬な己れの臆病を嘲り辱しめるやうな詞を聞いて、重ねて岡豊に降服するやうな評議をする事は出來なかつた。彼は仕方なく長臣の反對する趣を十市の方へ答へた。十市の方でも岩松の詞に恥ぢたのか、降服の事はそれなりになつて、岡豊勢に備へる準備に取りかゝつた。

岡豊では十市と池の降服するのを待つてゐた。山一つ隔てた下田蛸魚の森の落城を見ては、必らず降服して來るものとたかを括つてゐたが、幾日經つても使の者が來ない。國親は不審して、ある日、中島大和が前に來るとその事を聞いた。

『十市と池とは、どうしたゞろな。』

『その事でございますが、私も十市と池の腹を疑うてをります。』

『下田の落城したのをどう見てをるだらう、怖ろしくはないだらうかな、……それとも太平樂の夢でも見てをるだらうか、』

『いや、私の考へでは、池の方には岩松七郎と云ふ智慧も武勇も人にすぐれた軍師がをりますから、何か考へがあつての事と思ひます。』

『さうか、それで降參せんと見えるな、そんな事なら池から先へ軍勢を向けて踏み潰さう。』

『なんの兩縣の精鋭を差し向けるなら、一潰しにも足りませんが、その爲めに多くの人馬を失ふやうな事があつては、一人の士卒も大切な場合、それは得策になりません。これに就いて私に一つの考がございます。今年一杯お待ち下さいますなら、多くの人馬を損めずして、綺麗に池と十市とを落してお眼にかけます。』

『さうか、それでは、池と十市の事はその方に任かすとせう。』

國親は中脊の小肥滿のした體を脇息に凭して、大和と向き合つてゐた。

三

池の家臣の池萬五郎は、庭の口に立つて、下男が刈つて來たばかりの草を馬にやつてゐた。根元から二つに別れた高い柿の木がその出口にあつて、その青々とした枝葉が涼しい日蔭を作つてゐた。柿の根元には、藁盤にする碁盤の形をした大きな石灰石を据ゑて、その下に二つばかりの栓を捨てたやうに置いてあつた。

萬五郎は草がすむと、柿の根元へ來て、碁盤の石の上に腰をかけた。狹い襦袢のやうな布子を大きな體に當てゐる爲めに胸がはだけて、その赤黒い胸元に生へた短い獸のやうな胸毛がもぢやもぢやと見えてゐた。彼は田の置き釣のことを思ひ出して、夕方には小さな青蛙を捕へて、鯰と鱧の釣れる置き釣をしようと考へてゐた。

『……太い、好い餌が釣れたら、お殿へつかひ物にしよう、何か又下され物があるだらう……』

春の頃、鯉を献上して、人參を拜領した事を思ひ出した。鯰を献上した時には、三枚の小判の下され物があつた。

『矢張り小判の方が好いぞ……』

置き釣の中に糸が朽ちて、鉤の離れてゐるのが有るのを思ひ出した。

『糸をかへんといかんぞ、さうだ、鉤も十本ばかり入るぞ、』

その夜は宵月があると思つた。一番草を取つたばかりの稻田の畦際に浮いてゐる青蛙の手頃な姿に心が行つた。

『お暑うございます。』

暑苦しさうに云ふ聲がした。萬五郎はひよいと顔をあげた。痩せた背の高い老人が被つた竹子笠の紐を解き解き來た。それ

は、遠縁に當る介良の在所の者であつた。

『おゝ、これは、孫右衞門殿か、よう來てくれた。』

萬五郎の頭には、まだ青蛙の色が殘つてゐた。孫右衞門は笠を脫つて片手に持ち、片手で半白になつた鬢の毛を撫でながら、木蔭へ這入つて來た。

『春から除になつたから、一度來よう來ようと思ひながら、よう來ざつたが、今日は十市へ來たから、傳手に廻はつて來た。』

『それはよう來た。春と云へば、春の頃は、彼の騷ぎで、過ちでもしはせんかと心配したが、人に聞くと、どうもないと云ふから見にも行かざつた、困つたらう、』

『坂搦山では、すこしやつたが、多勢に無勢では、とても相手にならんから、直ぐあんなやうに國數方になつたが、私もそれ限り、倅に世を讓つて隱居した。』

『さうか、それは好い、……まア、兎も角坐敷へ、』

萬五郎は起ちあがつて、孫右衞門を母屋の方へと伴れて行つた。そして、二人は客坐敷へ這入つて、有り合せの肴で酒を喫みはじめた。

『萬五郎殿は、獵が好きぢやが、鐵砲を持つてをるかよ、』

孫右衞門は獵の話の後で、思ひ出したやうに云つた。

『さア、その鐵砲が欲しいが、とても手に入らんから、時たま城から借り出して來て討つ位ぢや、』

『それでは一つ買ふたらどうぢや、』

『手に入るぢやらうか、』

『明後日、上方から來てをる鐵砲商人が、私の所へ來る事になつてをる。來たらどうぢや、』

『行いても好いが、買はんと何にもならん。どの位するだらう、』

『値がはつきりせんが、十兩前後はするぢやらう、』

『それ位で買へるものなら、買ひたいよ、兎に角、買うても買はいでも、遊びに行かう、刻限は何時が好からう、』

『八つ頃が好い。八つ頃來ると云ふから、』

『さう、それでは行かう、小母さんにも逢ひたいから、』

四

萬五郎は翌々日、介良の在所へと行つた。それは薄曇のして涼しい日であつた。

門の内には夾竹桃の花が紅く咲いてゐた。玄關へかゝると、もう、その足音を聞きつけたのか、孫右衞門がそそくさと出て來た。

『萬五郎殿か、さアどうぞ、お前さんには、すこし氣の毒な事があるが、まアあがつて貰はう、』

『なんぢやらう、』

『いや、私の考へでは、池の方こは岩松七郎と云ふ智慧も武勇も人にすぐれた軍師がをりますから、何か考へがあつての事と思ひます。』

『さうか、それで降參せんと見えるな、そんな事なら池から先へ軍勢を向けて踏み潰さう。』

『なんの國縣の精鋭を差し向けるなら、一潰しにも足りませんが、その爲めに多くの人馬を失ふやうな事があつては、一人の士卒も大切な場合、それは得策になりません。これに就いて私に一つの考がございます。今年一杯お待ち下さいますなら、多くの人馬を痛めずして、綺麗に池と十市とを落としてお眼にかけます。』

『さうか、それでは、池と十市の事はその方に任かすとせう。』

國親は中脊の小肥滿のした體を脇息に凭して、大和と向き合つてゐた。

三

池の家臣の池萬五郎は、庭の口に立つて、下男が刈つて來たばかりの草を馬にやつてゐた。根元から二つに別れた高い柿の木がその出口にあつて、その青々とした枝葉が涼しい日蔭を作つてゐた。柿の根元には、藁葉にする莓盤の形をした大きな石灰石を据ゑて、その下に二つばかりの竹を竝べたやうに置いてあつた。

萬五郎は草がすむと、柿の根元へ來て、藁葉の石の上に腰をかけた。狭い襦袢のやうな布子を大きな體に着てゐる爲めに胸がはだけて、その赤黒い胸元に生へた短い獣のやうな胸毛がもぢやもぢやと見えてゐた。彼は置き釣のことを思ひ出して、夕方には小さな青蛙を捕へて、鯰と鰻の釣れる置き釣をしようと考へてゐた。

『……太い、好い鯉が釣れたら、お城へつかひ物にしよう、何か又下され物があるだらう……』

春の頃、鯉を献上して、人參を拝領した事を思ひ出した。鰻を献上した時には、三枚の小判の下され物があつた。

『矢張り小判の方が好いぞ……』

置き釣の中に糸が朽ちて、鉤の取れてゐるのが有るのを思ひ出した。

『糸をかへんといかんぞ、さうだ、鉤も十本ばかり入るぞ、』

その夜は宵月があると思つた。一番草を取つたばかりの稲田の畦際に浮いてゐる青蛙の手頃な姿に心が行つた。

『お暑うございます。』

暑苦しさうに云ふ聲がした。萬五郎はひよいと顔をあげた。痩せた背の高い老人が竹子笠の紐を解き解き來た。それ

は、近縁に當る介良の在所の者であつた。

『おゝ、これは、孫右衛門殿か、よう來てくれた。』

萬五郎の頭には、まだ青蛙の色が殘つてゐた。孫右衛門は笠を脱つて片手に持ち、片手で半白になつた髪の毛を撫でながら、木陰へ這入つて來た。

『春から隙になつたから、一度來よう來ようと思ひながら、よう來ざつたが、今日は十市へ來たから、傳手に廻はつて來た。』

『それはよう來た。春と云へば、春の頃は、彼の騷ぎで、過ちでもしはせんかと心配したが、人に聞くと、どうもないと云ふから見にも行かざつた、困つたらう。』

『坂折山ではすこしやつたが、多勢に無勢では、とても相手にならんから、直ぐあんなやうに岡豐方になつたが、私もそれ限り、倅に世を讓つて隱居した。』

『さうか、それは好い、……まア、兎も角坐敷へ。』

萬五郎は起ちあがつて、孫右衛門を母屋の方へと伴れて行つた。そして、二人は客坐敷へ這入つて、有り合せの肴で酒を喫みはじめた。

『萬五郎殿は、獵が好きぢやが、鐵砲を持つてをるかよ。』

孫右衛門は獵の話の後で、思ひ出したやうに云つた。

『さア、その鐵砲が欲しいが、とても手に入らんから、時たま城から借り出して來て討つ位ぢや。』

『それでは一つ買ふたらどうぢや。』

『手に入るぢやらうか。』

『明後日、上方から來てをる鐵砲商人が、私の所へ來る事になつてをる。來たらどうぢや。』

『行いても好いが、買はんと何にもならん。どの位するだらう。』

『値がはつきりせんが、十兩前後はするぢやらう。』

『それ位で買へるものなら、買ひたいよ、兎に角、買うても買はいでも、遊びに行かう、刻限は何時が好からう。』

『八つ頃が好い。八つ頃來ると云ふから。』

『さう、それでは行かう、小母さんにも逢ひたいから。』

四

萬五郎は翌々日、介良の在所へと行つた。それは薄雲のして涼しい日であつた。

門の内には夾竹桃の花が紅く咲いてゐた。玄關へかゝると、もう、その足音を聞きつけたのか、孫右衛門がそそくさと出て來た。

『萬五郎殿か、さアどうぞ、お前さんには、すこし氣の毒な事があるが、まアあがつて貰はう。』

『なんぢやらう。』

「まア、あがつてからにしよう。一人客があつて、一杯やつてをる所ぢや。』

萬五郎は鐵砲商人に手違があつたらしいと思つたが、其所で問ひ正す譯にも行かないから、笠を脱つてあがつた。孫右衛門はこれを客間へと伴れて行つた。額の寛い、袴を着けた男が床を背にして坐つてゐた。萬五郎は刀を脱つて、その下手に坐つた。

『話は後にして、まア、このお人を引合はさう、』

孫右衛門は額の寛い客の方を向いて、

『これが先刻お話し致しました池萬五郎でございます。以後御別懇にお願ひします。』

と云つて、又、萬五郎の方を見て、

『このお人は、關豐の中島大和殿ぢや、』

萬五郎と大和とは、初對面の挨拶を交はしたが、萬五郎は氣がさしてゐた。

『私は、昔、當家の御主人に大恩を受けた者でございます。以後御別懇に願ひます。』

萬五郎の前に盃が出來ると、孫右衛門は鐵砲商人の事を話し出した。それは、一所に商賣をしてゐる相棒の男が病氣になつたから、看病をしてやらねばならんが、約束があるから申譯に來たと云つて、一挺の銃を持つて早目に來た所へ、丁度大和が來て、それを買ふ事にすると、商人は急いで歸つたと云ふのであつた。その銃は床の壁に立てかけてあつた。

『萬五郎殿には氣の毒ぢやが、さう云ふ譯ぢやから、この次に來る時まで待つて貰はふ、』

『次とは何時だらう、』

萬五郎は床の銃を斜に見ながら聞いた。

『そこぢやて、相手が癒り次第國へ歸る事になつてをると云ふから、もう來年の春ぢやらうよ、』

萬五郎は殘念でたまらなかつた。

『萬五郎殿、失禮ぢやが、この鐵砲を差しあげやう、』

と、大和は萬五郎の顏を見た。萬五郎は眼を見張つてその顏を見返した。

『本當に差しあげやう、私は二挺可成りな物を持つて居るから、無くても好い。貴殿は獵が好きぢやが鐵砲をお持ちにならんと云ふ事を、先刻御主人から承はつてをります。どうか遠慮なしにお持ち下され。』

萬五郎の腑に落ちない所があつた。

『それでは私が讓つて貰ひます。なんぼでございませう、』

『ただ差しあげます。何も仰せられずに綺麗に受けて下されば

萬五郎は思ひがけない幸にありついたのであつた。そして、大和殿はさすがにお大家の大臣であると思つた。

『それはどうも、あんまりでございます。』

と云つて、傍の孫右衛門を見て、

『なア孫右衛門殿、』

『そんな物をただお貰ひしてはすまんが、折角のお詞ぢやから、お貰ひしてはどうぢや、』

と孫右衛門が云ふと大和は盃を口の縁にやりながら、

『どうか綺麗に受けて下され、』

五

山林の中には、高い赤松の幹が交つてゐた。その赤松の梢に見える蒼い空には、薄すらした落暉の光があつたが、下はもう薄暗かつた。岩松七郎は、四五人の郎従を伴れて鶴尾の山をおりてゐた。林には寒い風が立つてゐた。暖い南の國では、落葉樹の葉も黄ばんだなりに落ちなかつた。風がばらばらとその葉を吹き靡けてゐた。

岩松は銃を肩にして先に立つて歩いてゐた。その朝の東天から狩つた獲物は、それぞれ郎従の肩にあつた。一人の郎従の背には大きな鹿が人間の負ぶされたやうに負ぶされてゐた。一疋の犬は、主人の足許を歩きながらハアハアと呼吸を吐いてゐた。

朝早くからの働きで皆疲れてゐた。若い元氣の好い郎従達も、樹の根の注意ばかりして、黙りこくつてゐた。

麓に近くなつた頃に、眞黒に暮れてしまつた。赤松の梢に星が二つばかり光つた。

傍の林の中から銃の音がした。と、何人かがどつさりと倒れた。一行の間に恐らしい混亂が起つた。犬は頻りに吠えて、その附近を狂ひ走つた。

岩松七郎は何者にか暗殺せられたのであつた。岩松の郎従は冷たい主人の骸を山の麓の民家に擔ぎ込んで、池と十市とに急を報じた。

岩松の死は、細川家に取つて大打撃であつた。岩松を喪つて幾日も経たないのに、岡豊勢南下の噂が傳はつて來た。池と十市では評議をしたが、今、降服する事は、岩松が無くなつたから臆したと云はれる恐れがある。いつそ一合戦してから和睦しようと云ふ者もあつて、評議は軍に傾いた所で、市正頼定に室がないから、國親の息女を迎へてはと云ふ者が出て來た。そんな都合の好い事はとてもむつかしからうと思つたが、それは斷はられても、何か他に和睦の口實が見出されないとも限らないので、試にと思つて使をやつてみると、案外に國親の方で承諾し

た。

六

梅の花も白く咲いてゐた。長い長い山路の片側の丘には、うすら寒い斜陽があつた。五六十本ばかりの簱指や長柄を擔いだ人の群が、騷ぎながらその山路を通つて行く。それに續いて華奢に着飾つた男女の行列がやつて行く。行列の中に被衣(かつぎ)を著た若い女が一人白い馬に乘つてゐる。

その一行は、市正賴定に嫁ぐ國親の息女の一行であつた。一行は山路をおり、田甫の間を通つて、それから池城の方へと行つた。陽は落ちてゐた。城の麓には松明を灯して池の家臣が出迎へてゐた。一行はそれを先頭にして坂路を上へと登つて行つた。城の大門口には篝火が盛んに燃えてゐた。

一行は城の內へと這入つた。城の中は一頻りさゞめき立つた。やがて大廣間に嫁入道具が飾られて、北所に婚禮の席が設けられた。岡豐から來た供の者や人夫達は、一室で酒を貰つた。

銀燭が艷かしく燃えてゐた。市正賴定は二人の老臣を伴れて席に著いた。綿帽子を著た國親の息女も、一人の老女と、三人の家臣とに伴れられて這入つて來た。

祝言の盃がはじまつた。二人の童女が長柄の銚子を持つてゐた。二度目の瓦盃が息女の手に行つた。息女はこの瓦盃を受けて、靜に上にあげやうとしてぶるぶると手を顫はした。瓦盃に手を滑つて膝の上に落ち、それから疊の上に落ちた。老女ははつとしたやうに、急いでそれを拾ひ、懷紙で拭つて息女に渡さうとした。息女は手が顫へて取れなかつた。俯向きになつてゐた賴定にも、それがちらと見えた。

やがて、その瓦盃が賴定に廻はつて來た。一人の童女が銚子を差し向けた。城の建物を搖がすやうな鬨の聲が一室に起つた。賴定は瓦盃を投げ捨てゝ片膝を立てた。背後に飾つた長櫃の蓋がばたばたと內から開いて、二人三人と隱れてゐた者が飛び出した。皆な小具足に身を固めた岡豐の軍士であつた。池の二人の老臣は、脇差を拔いて賴定をかばふて立つた。岡豐の軍士の刀は、池の老臣の一人を倒した。その血が島臺の三寶に滴つた。息女は已れを連れ出さうとする老女を突き退けて、池の老臣を倒した軍士の傍へ行つた。綿帽子は落ちた。息女の手には短刀があつた。軍士は脊を刺されて倒れた。息女は賴定を背にして短刀を振りかざした。賴定に從つた軍士は、息女に隔てられ　進めなかつた。

池の家臣が六七人、賴定を救ひに馳けつけた。銀燭の光は消えてしまつた。狂亂の暴風雨の中に金屬を叩き合はす音が續いた。賴定は夢の中を馳け歩くやうな氣になつて、足の向くまゝ

に行つた。行く先にも敵の軍士の影があつた。

頼定は小さな谷間を下へくだつてゐる己の姿を見出した。冷たい白い月が空にあつた。三四人の人影も傍にあつた。頼定は氣が付いてその顔を覗いた。青木と云ふ老臣が先づ眼に入つた。

『政右衛門か。』

『は、政右衛門でございます。』

『父上はどう遊ばされた。』

『殿樣はお落ちなさいました。』

『本當か、』

『山口や山田に伴れられて、拔穴の方へ行く所を見かけました。』

『落ちてくれてをれば好いが、』

『私達ちは、これから何處へ行く。』

『この下から舟に乘つて、その上で方向を定めませう、』

『さうか、』

月に照らされた湖の水が見えて、直ぐ湖の汀に出た。一艘の小舟が枯蘆の骨のやうに立つた中に繋いであつた。家臣の一人が汀におりて、その纜を解いた。頼定はこれに乘らうとして、ふと背後に立つてゐる女の姿に眼をつけた。それは國親の息女であつた。頼定はそれをぢつと見入つてゐたが、

『政右衛門、私はこの女子と同船する譯にはいかん。』

息女は首を垂れて俯向いてゐた。

『若殿、一行が此所まで落ち延びる事の出來たのは、息女の働きでございますぞ、』

青木は取做さうとした。

『いや、如何なる事があつても、城を掠り取られた敵の娘と同船する事はならん。』

『若殿、私に考へがございます。どうぞ、私に免じて息女を御同行して下さいませ、』

『ならん、私は厭ぢや、』

『さう仰せられるなら、是非に及びません、息女はこれからお歸し致します。どうかお舟へ。』

と云つてから、青木は息女の傍へ行つた。

『息女の御心中は好く私にも分つてをりますが。若殿が聞かるる通りのお詞でございますから、どうかお歸り下さいませ、』

息女は微に頷付いた。青木はその容がいぢらしかつた。彼は涙を滴しながら汀へ引きかへした。

皆舟の上にあつた。青木も續いて乘つた。舟は枯蘆に舟縁を撫でられながら汀を離れた。青木は恐ろしい物でも見るやうに、

そつと陸の方を見た。月の光で白く浮けて見える女の顔に、その時ふらふらと動いたやうであつた。

頼定はぢつと俯向いて顔をあげなかつた。

七

頼定の舟は、はじめに十市の方へと向つてゐたが、十市も池と同時に何等かの方法で襲撃せられてゐるかも分らないので、方向を變じて西南に向ひ、北所から上陸して西へ西へと落ちた。

十町ばかり行くと仁井田の在所が來た。もう夜半を過ぎてゐた。頼定に隨ひてゐる者は、青木をはじめ三人の家臣であつた。一行は夜明けまでに種崎の在所まで行つて、北所から舟に乘つて香川郡の方へ落ちて行かうとしてゐた。

落人の先廻はりをしてゐた岡豐勢の一隊が、松原の松の幹にかくれて一行の來るのを待つてゐた。頼定主従は刺し違へて死んだ。

頼和も三四人の家臣に守られて、前後して落ちて來たが、これも岡豐勢に圍まれて討死した。その場所は頼定の討死した所から北に當る山の麓であつた。

國親の息女は、その夜、池から下田の方へ越へる鉢松越の坂の上で縊死してゐた。

岩松七郎を暗殺した者は、池高五郎であつた。彼は池城が滅んだ後、岡豐に出仕してゐたが、人に惡まれて、土地にゐたたまれず、一向坊主になつて一生を送つた。

これが私の先祖と關聯した口碑である。澤田神社の主は、はじめにも云つたやうに、史學的には分らないが、あなた方は、その何人であるかを知るであらう。今、その古墳の位置を云ふと、仁井田部落の東に寄つた方、郡道に添うて頼定の社と云はれてゐる小社があつて、それを南にある三角の一點として、北一町ばかりの山麓に頼和の社がある。人によつてはそれを頼定の墓だと云ふ者がある。澤田神社は、すこし線が延びるが、丁度その西に當つて三角點を保つてゐる。

美術季

山本鼎

△有つてとかく喧多く、無くても寂しい美術セーゾンがまた周つて來ましたね。

當代の美術家が、一年間の生産を、院展、二科展、文展の三市場に出陳して、てんぐに、批評と賣約とに、名と利を併せ占めやうと待ち構へる、大競技(コンクール)がはじまりましたね。

△いつも非賣品を持ち出す日本畫家にとつては、大切な見本市場であり、畫價といふものを有たぬ洋畫家にとつては、又、唯一の貿易市場であるところの秋の展覽會は逐年盛大になつて、美術院も二科會も昨年あたりから、入場料がうんとはいるやうです。

どうでせう。もし其收入を會員に分配するとしたら、――其額は、彼れ等の一年間の豐富な繪の具代であらうし、質素な洋畫家などには一年間の衣食住が保證される事でせう。まつたく、畫を賣らなくとも、たゞ畫をお目に懸けただけで、毎年の生活が支持されるとしたら――それは頗る氣の利いた組織といふものぢやありませんか。

△院展も二科展も共に六才になりましたよ。院展は、日本畫部が十八人、洋畫部が六人、彫刻部が八人、合計三十二名の同人に若干の院友を擁し、二科展は、十名の會員に若干の會友を加へ、更に新に彫刻部を建設す可く、まづ藤川勇造君を羅致して、陣容をひろげ、共に社會に隆々たる聲價を占めて來ました。併し、聲價と共に、賣價も高まつたやうに思つてはいけません。なぜなら、聲望の籍かれる時分には、畫家達に退屈がやつて來て居る筈ですから。

現に見給へ、どちらの展覽會も、退屈だらけぢやないですか？。

△黑田君に足立君ですか。新聞や雜誌で、これを本年の好取組として居ますね。

兩君とも關西の産です。共に昨年巴里から歸つた、所謂中央畫壇の新人(ヌーボー)です。

黒田君に就ては、なか〱讀書家で理解に敏な人、といふだけしか知りません。

足立君は、熱情家で理窟屋で、いつも靜かでない人です、僕も風景畫の方を良いと思ひますね。

南佛蘭西の明澄な陽と其陽のなかに濃い香ひを吐くオソビエの林を懷しく想起しますよ。

兩君の技倆の比較ですつて——そんな事は出來るもんぢやありません。

足立君の畫を浮氣な畫だと貶す人もあれば、黒田君の畫をしみつたれた畫だと貶す人もあります。どつちも當つて居ますよ。

△安井君の畫ですか。久米正雄君なぞも大さう褒めて居ましたね。つまり、濃淡の正確なトオーンで立體觀を表現する西洋畫の要領を深く摑むで居るといふのでせうが。僕は『樹陰』といふ畫にはちつとも魅されませんね。あれも人間の畫でなく畫家の畫です。一切の表現が冷めたい强情な畫家慾で鍛えられて居ます。

△正宗君の畫ですか。とにかくあの人の血色を見るやうに、活き〱して居ますね。だれかが、おしやれな畫だ、と評して居ましたが。穿つて居る。

△山下君のですか。あの子供の畫は實に可愛いぢやありませんか。瀧のまわりへ內氣に出て居る樹のかたまりも良い感じですよ。唯いつも不足に思ふのは、骨組のたよりない事です。だから山下君の畫には自然の麗はしさは淑はれてあつても自然の性格は捉えられて居ませんよ。

△木村君の畫ですか。あんまり傑作とは云へませんね。併し僕は好きなんです。描寫の力は不足に思ふが。ほの暗い光線のなかに優しく姿する果物や瓶にむけられた畫家の澄んだ愛に僕は同感するのです。

△長谷川君のですか。どうも觸に趣味を有ちすぎますね。あの人の心に置かれた裸體の魅惑に對して、モテイフも技工ももつと輕くはないですかね。

△倉田君は勉強でしたよ。そして良くなつたと、ひます。全體を支配する非外光的な暗鬱な色を好きないか、あのむきな描寫慾を通して、畫家の信仰的な自然觀を感じるじやありませんか。

△作品評はもうよー度いですね。

では次に帝國美術院問題、ですつて。まるで意見販賣所見たいですね、僕は。——今日までの過程で察しると、あの官制には一つの禍根が植えられて居ますよ。といふのは、政府の推重する公設展覽會が帝國美術院の附帶事業にされて居る事です。

政府の關與する展覽會は云はゞ國家的展覽會であるから、國民に對つては現代美術界全般の相を紹介するの意を以て、綜合的の審査機關を設けなければ合理的でないのです。處が、舊文展系——むしろ美術學校系を以て結ばれた帝國美術院の經營に任じてあるために、それは不可能な事ときまり、折角の動搖も利目なく、再び文展を復活するやうなわけになつてしまつたぢやありませんか。

一體、今度の事件の發端が文展改革問題であつたので、最後まで文相は文展問題に囚はれたんですね。だから思ひ設けぬ苦勞をしたし、今後もたえずめんどくさい思ひをしなければなりますまいよ。

帝國美術院が設けられる事になつたら、文部省は文展を單純に解散して、知らん顔をして居るがよかつたのです。

さうすれば、帝國美術院が勝手に帝展を創めるでせう。

さうすれば、政府の尻押しのない、美術家の自治による展覽會が鼎立することになつて、極めて合理的になり、文相も高見の見物で氣樂になれたのです。昨年僕が『中外』で、

『文展に關し文部大臣の脊なかに向つて語る』

といふ題で建議した其結論は、文展を廢止せよ。といふ事でした。然らずむば、現在に或程度の聲價を備へたる團隊に自選せしめたる、美術家を以て審査機關をつくり、三年或は五年に一度位國家的展覽會を開催して、それに賞賞・獎勵法例へば、エコル、ド、ボーザールの羅馬賞の如きを行ふべしと說いたので、此度の動搖には大いに興味を有つたんです。

和田三造君も昨年建議しましたね。あれは改良意見で、穩當なものでしたが、それすら文部省は受容しなかつたのです。

一體政府は、自分が管理し推薦する團體が美術界の一部分であつて、どちらかと云へば、質も力も社會的信認すらも他の剩されてある部分より劣つたものであるといふおかしな結果を何と考へて居るのでせう。左樣な政策は植民地には必要かも知れないが、東京には無用です。

君は、どう考へます。

うつかりすると、弊害を勅任官にしたやうな事になりますぜ。

△それにしても、更新された審査官が主に青年であるのは結構です。彼れ等は、公務を處するに道理を以てするでせう。政府の管理よりも、老先生の監督よりも、彼れ等を同じ呼吸で監視する現役兵——即ち吾々青年畫家に對して恥しくない態度を示すでせうから。九月廿日

外遊中に味つた酒と料理

小野賢一郎

いよ〳〵紐育を發たうといふ前夜であつた。西暦千九百十九年六月三十日――その日限りで、永久にアメリカから酒といふものがなくなる、卽ち七月一日からアメリカ全體に亘つて禁酒令が斷行されるといふ其前夜、私だつてアメリカを步く間酒に別れを告げなければならぬから、無論酒場の扉を排して、酒を呼ぶ人の群に加はつたのである。

私が、英國を放れて、貨物船で憂き目を見乍ら、紐育についた時は、モウ禁酒運動はしてゐなかつた、已に法令となつて七月一日から嚴行されることになつてゐたからであらう。しかし、店頭などに禁酒運動の名殘がないでもなかつた、私が十仙で二つ三つ買つて來たメタルなどは最も振つたものである。小さなコップにビールが盛られて泡立つてゐる、如何にもおいしさうなガラス製のものを、三色のリボンで吊つて、メタルの表には NO BEER NO WORK（酒なくて何の己れが仕事かな）と書いてある。これは勞働者が瞬間にぶら下げてゐたものだらうな、こんな酒落たメタルなども當時の反對運動を思はせるものであつた。

今、酒場は葉卷の煙で咽せ返るやうに人がこみ合つてゐる、煙の中に浮き出てゐる幾つもの顏は、皆赤く頰照つてゐる。目の廻りにつくビールの泡などを忙しさうに拭く人もある、立てつづけに呑んでゐる人もある、ちびり〳〵と呑むのは誰もの習慣らしいが、立つゞけに呑む人などを見ると如何にも「アルコール終焉の夜」の感じがする。

私はS君と二人並んで、しづかにビールを傾けてゐた。この日は紐育を少し離れたコネーアイランドに遊びにいつた。淺草六區とでも言ひさうな見世物のあるところで、つく〴〵紐育人の馬鹿さ加減に呆れて歸つたところである。アメリカには所學も趣味もない、アメリカが今のまゝで世界の文明國強國として誇り得るものならば、人間には藝術も哲學も入らない、――而

の處などでは、よく憤慨したものだが、今日といふ今日はつくづく厭になつた。馬鹿々々しいといふ腹立たしさで一ぱいだつた。

しかし、斯うしてアメリカ全體に禁酒令を斷行するといふ處に、又アメリカ一流の偉大なる馬鹿々々しさを認めない譯にも行かない。無遠慮な、がさつな、浮薄な國民、世界一たりたがる子供のやうな國民、うぬぼれる國民。いろ／＼な評語を並べて見たが、しつくり合はない、どれでもいゝ、みんな中つてゐるやうな氣がする位、此日は不快な印象を受けたのである。——が、禁酒斷行の一條に突き當つて一寸考へさせられた。

此酒場へくるまでに、私達はかなり呑んでゐた。コネーアイランドの歸りにチャイナタンを通つた。紐育ほど文明と文明の暗黒面とを持つてゐる街はない、摩天閣街の文明に人を脅すかと思へば、チゴマ、銀行泥棒に類する犯罪の頻發に人を戰慄させる——その暗黒面の縮圖ともいふべき、支那街を通つて暗い不快な印象を受けた。それから日本人倶樂部にいつた、S君が、いよ／＼禁酒となれば酒が呑めない、それにモウ一二ケ月すると同人無城君がやつてくる、酒がなくては暮らせない彼に、禁酒のアメリカは辛からうといふので、ウヰスキーを預けて貰ふべく倶樂部に寄つたのである。

ところが、モウ一二三ケ月前からも先約があつて、ウヰスキーの配分が會員全體に行きわたらない、S君も辛うじて一瓶だけしか割當てられなかつた。その序に當分日本料理に私が離れるといふので夕飯を濟ましたのである。S君は日本酒を呑んだ、私は餘り呑まなかつた、夜の酒場を覗きたいといふので——并して此酒場へ來たのである。

人は絶えず出たり入つたりした。酒場の人々は忙しがつてゐた、ウヰスキー、セリー、ビール、前のスタンドにはビールの泡がどろ／＼流れる、それを忙しさうに拭くのであつた。

立つて飲んでゐると、後の方でコチ／＼と音がする。通信の會社から事件や電報が着き次第知らせてくるのだ。加入者の家々の器械が丁度相場を知らせるチッカーのやうに、自動的に動いて自動的に印字するのである。長い／＼紙を讀んでゆくと、刻々に起る事件が判る。即ち一種の新聞記事を讀んでゐるやうなものである。その器械のところなどへ酒のコップを持つてゆき乍ら、且つ讀んでは且つ呑む者もあつた。酒場からドア排けると直ぐ食堂になつてゐる。そこにも多くの客があつた、私達はよく此食堂に來て蛤を氷で冷したものや燒肉やらを賞美した

のであつた。今夜も同じやうに、酒を飲んでは踊り場で男と女と、女と男と、腕を組み、脊に手を伸ばし、或は腰を擁して、ぐる〳〵と踊り興じてゐた。

「この連中は一週間働いてこゝに來て踊るのが唯一の樂しみさ」と、S君は苦り切つてゐた。

考へて見れば、短い間の旅だつたけれども、隨分國を歩いて來た、隨分いろ〳〵の酒を呑んで來た。

しかし日本料理と日本酒は、世界の都會のどこにもあることとは一つの驚異であつた。上海、香港は藝者までゐた、疊まで敷いてある座敷があつた。新嘉坡もさうであつた、馬來半島の小さな王國にも日本座敷があつた。彼南にもあつた。倫敦にも堂堂たる日本料理店がある、鰻の蒲燒まで食べられた。たゞ巴里だけがなかつた。諏訪といふ日本人の旅館があるからソコに行けば食べられるかも知れないが、夫れにしても迚も倫敦のやうにはいゝものは出來まいと思はれた。

巴里は不自由と聞いたから、倫敦で牡丹餅と稻壽司を折に詰めて、ぶら〳〵下げながら、フランスへ渡つたのであつた。渡る時に稅關の役人が異樣な手荷物に不審の問を發した、私も困つた、投首一番一代の智惠と一代の語學を搾つて、「ジャパニス、サンドウヰチ！」とやつつけた。役人も吹き出して通過の印をしてくれた。その一折は全權のホテルにも持込まれた。

日本記者團は、とある家の六七階に室を借りてすきやき倶樂部をこしらへてゐた。日本人の夫婦者が外人の處へ奉公してゐたのを伴れて來てコックに使つてあつた。

すきやきはうまかつた。しかし箸は汚なかつた。割箸が不足なので一人前の箸が何十度にも使はれた、箸の先が黑くなると折つて使ふと見へて四五寸の短い箸で食べてゐる人もあつた。私は牡丹餅よりも割箸を倫敦から持つて來なかつた事を悔ゐた。——

棚から棚へと並んでゐる酒の瓶が、次第に減つてゆく。酒は次第に終焉に近づきつゝあるのである。フランスの葡萄酒も伊太利の甘い酒も、イギリスの火酒も次第々々に消えつゝある、たゞだアメリカの麥酒ばかりは泉のやうに湧き出て盡きない。私達も幾つかの杯を重ねた。ビールをコップに滿しては篦のやうなものでコップの上を掠める、泡を落すのだ、酒場の男は忙しさうに、しきりなしに篦を使つてゐる。

瓶の酒の値が、時間が立つごとに騰つてくるのも、讀めた、

酒場に知り合ひをもつ男が來ては、夜を待つてゐる、去る毎に殘ンの酒は値が上つてくる。いよ／＼酒に別れる夜である、酒の値段は近づいた、酒の値は、ぐん／＼上つてゆく。三弗半と貼られた札が、いつの間にか五弗半に代つてゐる。

——忙しい旅であつたが隨分酒も吞んだ。印度洋を廻つて來た私達の船には、豐富な酒があつた。日本酒も四合瓶七十錢で呑めた、ウキスキーもブラック、エンド、ホワイトが四圓五十錢位、それ位に安い酒、安い煙草がのめた。地中海の眞ン中でキリンビールを吞むことも出來た、櫻正宗も吞めた、いや夫れ許りぢやない、倫敦の混雜する街でも日本酒は呑めた、然し二合瓶一本一圓五十錢位とられた。日本人は故郷の酒を寶玉のやうに貴び賞した。

「西洋へいつて醉へるものぢやない、言葉の不自由と勝手が分らないから、心配して醉へるものぢやない」と先輩は言つた。しかし私にはさうでもなかつた。寒暑を超越した三昧境には、いつでも入ることが出來た。

香港の陶々仙館の三階の一室で吞んだいろ／＼の支那酒も亦忘られぬ味をもつてゐた。とても東京の支那料理屋あたりで吞ませるやうな、いやにヒリつく酒ではなかつた、リキユウ酒みたいな芳醇なところがあつた。

南洋には日本のビールが入つてゐた。イギリス人が經營してゐるホテルの食堂に入つても日本のビールがあつた。彼南の宿屋で椰子の水を吞んだ時にも、日本のビールがあつた。しかし錫蘭島のキヤンデーの山上、椰子、橄欖、菩提樹の茂りに對して、涼風を喫し乍ら杯を擧げた、あのビールの味には適はなかつた。この島で醸される新しいビールであつた、新しくて濃い味があつた。

倫敦では、東海の遊子、太だ失望した。レストランに入つても、無暗に酒を吞むといふ譯には行かなかつた。ピカデリーあたりの相當な店でも、金を客から貰つて酒屋に買ひに行くといふ風だつた。許可證のある家でないと酒を賣つてゐない、而も酒を賣るのに午前と午後と時間が定められて、夫れ以外には決して賣らない。

スタウトはうまかつた。しかし渋かつた。ウヰスキーもうまかつた、然し豫期した程の味はなかつた、戰爭のおかげだらうと諦めはしたものゝ高いのにも驚かされた。案内記に見、先輩に聞いたやうな安い而もおいしい酒は倫敦にはない、名物のビフテキも小さく薄くなつてゐた。

酒場は雑閙する。時間が來ないと戸を開けないので、時間近くなると酒場の前に人が集まつて、恰度帝劇の大入場の切符賣場のやうに人が立つ。

入口がちがつてゐても、中に入ると同じコップで同じ酒を呑む。そして入口に依つて酒の値段がちがふ。紳士の入口と勞働者の入口とちがふのだ、中に入れば同じ待遇で同じ酒であるが、入口に依つて値をかへるところなど面白い。

女がよく呑んでゐる。未成年者は酒場に入れないので、子供を表に待たせておいて淑女が酒を呑んでゐる。日がくれるとべろ／＼に醉つた女を見かけることがある。管をまく女もある。

酒は何といつてもフランスである。

カフェ・ド・パリで呑んだ白葡萄酒の味は、今も猶舌の先に殘つてゐる。普通のレストランやホテルの食堂などでは、埃を被つたまゝの瓶を靜かに出すけれども、こゝの白葡萄酒は別の瓶に入れてくる。すでに古くして芳醇であるといふのが看板になつてゐるのかもしれない、兎に角私の舌は生れて初めて低藝醍醐味に觸れて歡喜に醉ふたのである。

赤い葡萄酒よりも白葡萄酒を好む。ブランデーも亦フランスの名物であるけれども、白葡萄酒の醉ひ心地に比ぶべくもない。

私は割合に勝手な酒呑みであつて、場所とか其時の氣分とかに依つて、酒の味も違ひ又量を異にする習慣をもつてゐる。然しフランスの白葡萄酒のみは格別であつた、場所とか氣分とか感興とかいふ事は超越して了ふほどの美味と舌ざわりと醉ひ心地とをもつてゐた。どんな處でも、どんな場合にでも、カフェ、ド、パリで呑んだやうな白葡萄酒なら――。

蛙料理も亦うまかつた。蛙は日本でも食べてゐるし、支那でも田鷄と稱して食べてゐるが、巴里の蛙料理ほどおいしく形して酒の興を助けるものはない。蛙を揚げて股だけ盛られたところを見ると宛として小鳥料理である、また味も鷄と違つたうまさがあるが大體に於て似てゐる。フランスの竹刀のやうに長いパン、それと蛙、そして白葡萄。到底日本に於ける初鰹の比ではない。パン、蛙、白葡萄酒――から並べてみると、舌にねばい唾液が湧く。――

――醉ひしれた人のないのに驚く。酒場は私達がゐる間に幾人の人が出入したか分らない、皆ほど／＼に酒を呑んで出てゆく。明日から酒に別れるといふ別離の情は誰にも顏には現はさないけれども、いつもより人の多いのと、酒の代が烈々に上つてゆくのとでそれとなく知られる。

る君と表に出た。昼間の暑さに引かへて夜は冷ッこ過ぎる程であつた、夫れに涼しい風さへ吹いてゐた。

酒場の二三軒おいて隣りに酒を賣る店があつた。ウヰスキー一本、七弗など〻正札の出てゐるところは賣切れてゐた。十弗と書いたところに二三本殘つてゐるのを見た。ペパアミントもブランデーも、キウラソーもみんな賣り切れてゐた。

ふたりは酒の話をし乍ら川邊に出た。ハドソン河は夜目にも白くしづかに流れてゐる、川向ふには電氣がいろ〱に飾られて光つてゐる。川の上には二萬噸位の軍艦や驅逐艇が幾隻も浮んでゐる、今夜も晩餐會でもやつてゐるのであらう、軍艦は電光飾をやつてゐる。人道主義とか國際聯盟とか言ひ乍ら、一方に軍國主義の鼓吹をやつてゐるのはアメリカだ。偉大なる馬鹿々々しい國はヒドイ矛盾をもつてゐる、幷して平氣でゐる國民だ。紐育の女は軍人でないと夜も日も明けない、有產階級の婦人といふものは兵卒の旅費を預つたり、見物の案内をする事に日も足らざる有樣である。——

青い芝生の上に二人は尻を下ろして、軍國主義を鼓吹すべく晩餐會をやつてゐる軍艦を見をろす。

思想問題、經濟上の話——そんな堅くるしい話題は飛んで故國の噂に移つた。新聞で見たゞけであるが、私が國を離れてからも、いろ〱の新しい社會現象の湧き起つた事を感ぜずにはゐられない。

尻からは、ひや〱と夜氣が傳はつた。

アメリカは今度全國に禁酒令を出したが、數年前から州に依つては禁酒してゐるところがある。華盛頓州などは三年前から禁酒してゐるが、犯罪が禁酒前の二十分の一に減つたといふ。酒の上の過といふことが皆無になつた、監獄は閑になつたといふ事である。併し一方には忌はしい噂がないとも限らぬ、アルコール中毒になつたものは、香水を呑んでゐるとか、又はモルヒネを注射して甜醉を買つてゐるとか、そんな極端な方法で酔はふとしてゐる。

禁酒令發布と同時に苺（いちご）の値段が高騰した。それは飲み物が不足になる結果、苺を使つた飲料水の賣れ行が多〱なるといふ見込からである。本年は殊に苺の出來がよかつた、華盛頓州あたりでは苺の栽培は日本人の手に殆んど歸してゐるといつてもよい。今年は日本人の苺成金がうよ〱出來たわけである。——しかし哀しいことには日本人はどぶろくを造る方法を心得てゐる。ひそかに濁酒を密造して醉ひを買つてゐる、ところが檢擧の手厳しく、日本人の罰せらる〻もの頻々、罰金も千圓や二千

國では濟まないので、折角積で成金になつた者も、元の杢阿彌になつたものがあるといふ。

ウヰスキーも亦禁酒してゐる州では一本二十五弗位に密賣されてゐるが、それでもアルコールを嫌うてゐる者は二本三本を飲むといふ。

體があまり冷つくのでS君を促して宿へかへつた。

翌日私は紐育を立つたのである。停車場の前で、S君と夕飯を食つた、その時念の爲めビールはないかと聞いたら持つて來た。禁酒第一日にドウしたのかと聞くと、ビールは極めて淡い、アルコールを含む分量に依つて、これをアルコールと認むるや否やといふことが、未だ懸案になつてゐる。

賣るのは無論不可ないけれどもビールをアルコールと認むるといふ判決令が出ない限りは賣るつもりだ。判決で愈々不可ないといふ事になれば罰金を納めるばかりだ――斯ういふ返事であつた。

しかし兎に角禁酒令は儼として行はれた。いつまでアメリカが我慢し得られるかゞ見物だ。

維新情話 堀の妾宅

村松梢風

一

舊幕府老中播州龍野藩主脇坂(淡路守)安斐(ヤスアヤ)は五年間の地方生活をした後で江戸へ還つて來た。

(作者は茲に江戸と書いたが、事實は江戸が東京と改稱されてから後の事である。それにも係らず、殊更江戸といふ名稱を用ゐたわけは、本篇の主人公脇坂侯が、當時決して東京といふ言葉を口にしなかつたと云ふ其の心持を尊重してである。東京と言はずに江戸と言ふ――單にそれだけの事柄か、主人公の樣々の心持を語つてゐるのである。江戸――既に世の中から亡びてしまつた江戸といふ名稱が、どんなに彼には懷かしく聞こえた

であらう。又時には、どんなに痛ましい思ひを引き出す源になつたであらう。）

江戸へ來て、安斐は今更のやうに驚きもし呆れもした。それは餘り世の中が變り過ぎてゐるからであつた。明治政府が樹立されようが、封建制度が打破されやうが、舊領地に居る間は彼は昔通りの藩公であつた。それと同じやうに、二百年の泰平を謳歌した江戸の市民が、一朝一夕に德川將軍家の威光と恩澤を忘れ得る道理はないと信じてゐた。處が事實は充分にそれを裏切つてゐた。

攘夷論は幕府に對する陷穽（おとしあな）であつた。明治政府は忽ち諸外國との間に提携を行つた。のみならず、過激な彼等は日本の國を一時に西洋化さして仕舞はふとまで企てた。矛盾撞著を極めた新奇な法令がどし／＼頒發された。見え透つた一時的の人氣取政策を徐々として行つた。

それはまことに不思議な世の樣であつた。しかし、薩長の陪臣が個々天下の政權を握つて有頂天になつてゐるのはまだしも無理が無かつた。それよりも、江戸の市民までが猫の眼のやうに變る目前の世相に蠱惑されてしまつて、傳統的に培はれて來た郷土的觀念もあらゆる物の批判力をも失つてゐるかのやうに見えるのが、彼には一層苦々しく想はれた。

彼は江戸へ來たことを後悔した。見る物聽く物總てが腹立たしくもあり、莫迦々々しくもあつた。それにしても、あれ程深く人心に滲み込んでゐた德川幕府の尊嚴と勢力が、かうまで脆く消え失せてしまつたことを考へると、彼は唯々不思議の感がした。同時に是れ迄尋常に見過ごして來た歷史上の治亂興廢も總て人力を超越した不思議な大意を語つてゐることに彼は氣がついた。是れ迄唯何んとなく、今一度德川幕府に復興の機會が向いて來さうな夢を見てゐた自身の愚かしさに彼は氣がついた。彼は譬へやうもなく寂しい氣持になつた。あらゆる幻影が消え盡してしまつた後の、冷たい灰色をした佗しい世界だけが彼の周圍に殘つてゐた。

二

初夏であつた。溫かい雨が降り續いた後で、海のやうに碧く澄んだ空があらはれたりした。

或日安斐は、當時向島の小梅に閑居してゐる舊家老の岡田頼母の許を訪れて見やうと思ひ立つて、駕籠脇に兩三名の供を隨れたばかりで屋敷を出た。彼はもう久しく屋敷から外へ踏み出したことはなかつたのであつた。徒らに世間の耳目に觸れて心を苛ら立たせたくないと思ふからであつた。ならうことなら生涯此の侘屋敷の内に閉ぢ籠つて暮してもよい——そんな氣持に

さへなることもあるのであつたが、偶さかかうして外の空氣に觸れて見ることは矢張り惡い氣持ではなかつた。繁華な街の事物が、眼が醒めたやうに彼の心を活き〳〵させた。

向島の堤の櫻はすつかり青葉になつてゐた。三圍の前で堤を下りると、其の邊にはかなめ垣など結つた風雅な住居があつたり、嚴めしい造りの塀だの門が壞れた儘繕ひもせずに捨ててある大名の下屋敷の跡などが眼についた。岡田の隱宅にはまだ青々した建仁寺垣が結つてあつて、門から玄關先の邊りまで欝陶しい程に竹などが植えてあつた。

岡田は駭いた容子で玄關へ出て來て平伏した。安斐はにこにこ笑ひながら駕籠を出て珍らしさうに邊りを眺めた。岡田は取敢へず主君を座敷へ招じ入れた。

家の割合に庭は廣かつた。泉水の靜かな水面に魚が波紋を描いたりして浮いてゐた。

「餘り突然の御尊來故、賴母賓は意外で御座りました」と、岡田はさも嬉しげに言つた。

「いや、徒然であつたから、急に思ひついて遊びに來たのぢや。予は此の邊を見るのは久し振りぢやが、昔に比べると何處も彼處も荒れてゐるやうぢやな」

「御意に御座りまする。なかなか以て一時は此の邊には住居する者も無かつたさうで御座りまするが、近頃は追ひ〳〵と開けてまゐるやうで御座ります」

安斐は錆びた庭の樣子を眺めながら、

「賴母、よい住居ぢやな――。どういふ者の住んだ跡であるかな」

「此所は元さる旗本の隱宅であつたさうで御座りまする。私が求めます前までは空屋敷で、いやもう狐狸の住居同樣で御座りました」

「左樣か――」

と言つて安斐は默り込んだ。細長く奥へ入り込んでゐる泉水の盡きた彼方に、燃えるやうな新綠の芽をつけてゐる椎や樫の老木が枝を擴げてゐて、其の側に壁の剝げ落ちた土藏が淋しくかけ離れて立つてゐる。安斐は、大部分離散してしまつた旗本達の運命を漠然と考へてゐた。

岡田の妻子の者などが衣服を改めてお目通をした後で、遠方からでも取り寄せたらしい料理などがそれへ運ばれた。

「賴母、予は今日は久し振りで外出したためか、種々の事を考へさせられる」と、安斐は杯を手に取りながら言つた。

「どのやうな事をお考へ遊ばします?」と、賴母は眼元で笑つて言つた。

一ど[illegible]るやうな事と言つて、側に寄つたことはないが……。先刻市中を通つて來た際にかう考へた。國民は殘らず新政府を謳歌してゐるのぢやと」

「……………」

「然し、それは強ち新政府の善政を謳歌すると云ふ意味ではない。彼等が曾ては徳川の世を謳歌した如く新政府を謳歌して居るといふのぢや。つまり、政治に關係を有たぬ百姓町人の身としては幕政であらうと王政にならうと自身の體に何の影響も無いからぢや。薩旗を立てゝ一揆を起す時だけが彼等の眞劍な望であらう。徳川二百年の勢力が一朝にして地を拂つてしまつたことを予は不思議に感じてゐたが、それが漸く會得された。同時に新政府の政治家共が、天下泰平を禁延の御威德に歸したり、自身の功勞でもあるかのやうに吹聽して居るのがまことに滑稽になつて來たわい」

かう言いつて安斐は大きな聲を立てて笑つた。それが何だか自分で自分を嘲つてゐるやうにも、またどうすることも出來ない淋しさを誤魔化すために笑つたやうにも、自身の耳に響いて彼は厭な氣がした。

岡田は默つてさしうつむいてゐた。其の頭にはめつきり白髮が目立つてゐた。

安斐が岡田の家を出たのは午後の三時過ぎであつた。岡田が屋敷迄送ると言ふのを無理に止めて安斐は駕籠に乗つた。

吾妻橋の側迄來ると、其處から淺草の方へかけて何處も彼處も非常な人出である。

「大層雜鬧して居るが、何があるのか」と、安斐は駕籠の内から訊ねた。

「今日は淺草三社の祭禮で御座ります」と駕籠脇にゐた家來の者が答へた。

駕籠は群衆の間を縫ひながら緩やかに進んだ。橋を渡つて花川戸邊へ行くと往來は一層雜鬧を極めてゐる。提灯や花で街が美しく飾られてゐる。屋臺囃子の音が人の足をそゝり立てるやうに響いて來る。

安斐は簾越しにうつとり外を眺めてゐた。すると全く突然に、駕籠が激しく後へ突き戻された。

「コラ！　何するかッ」と、供の一人が叫んだ。

「何するかとは何んだ、人の脾腹へ駕籠の棒を突き立てて默つて行く奴があるか」

「混雜の中ぢや、故意ではないに、無法に駕籠へ手を掛け居つて無禮な奴め。離せ」

「何、無禮だ。生意氣なことを言ふな。全體此の混雜の中をば、

駕籠を打たせて通る奴が間違つて居るのだ」

大聲でこんな爭ひをしてゐる。其のうちに相手の人數が殖えたやうで、到頭駕籠が地面へ押据えられてしまつた。其の時歩兵の猩々毛が安斐の眼に這入つた。

「御身分の高い御方ぢやぞ。無禮を働くと許さんぞ」と、供の者が慄へ聲で言つた。

「身分が何んだ。四民平等といふことを知らぬな己れは。吾々帝國の兵隊はな、天皇陛下と上官のほかに頭を下げる相手は無いのだぞ。」

「駕籠の中の奴を引きづり出して謝まらせろ」

十幾人かの歩兵が駕籠の側へ迫つて來た。群衆が輪を作つて黒山のやうに集まつて來た。其の時人を押し分けて中へ飛び込んで來た者があつた。手古舞の女である。

片肌を脱いで、緋縮緬に金絲で波に千鳥をあらはした襦袢を見せ、黒髮の先を惜氣もなく斬つて大髻に結つてゐる。金棒をチヤラ〱突き鳴らして、片方の手には「警固」と書いた提灯を持つて居る。

「皆さんお靜かになすつて下さい。どうしたいきさつかは知りませんが、何しろ今日は祭りのこと、お怪我でもあつてはなりませんから、お互ひに我慢なすつて下さいまし」と、女は双方の間へ割り込んでにつこり笑ひながら言つた。

歩兵達はみんな呆氣にとられて、眩しいやうな眼つきをして女の顔を眺めてゐたが、軈て一人が、

「こらやい。女の癖に生意氣に出しやばつて、貴樣こそ怪我をするな。默つて引つ込んでろ」

「引込んぢやゐられませんよ。いいぢあありませんか、女だらうが子供だらうが、仲人は時の氏神といふこともありますさあね。野暮を言はずに妾に任しておくんなさいましよ」

「よし、それでは貴樣に任せて遣るから、駕籠の中の人間を出して謝まらせろ」

「冗談お言ひなさんな。お供の人がどうしたといふか知りませんが、何も乘つてるお方の知つた事ぢやあありませんわね」

「俺の官服の上から駕籠の棒を突き當てたのだ」

「それあお前がどじだからさ」

「何んだ、此の阿魔」

女は美しい顔に癇癪筋を出して、チヤリンと金棒で地を突いた。

「お前達あ祭りを荒しに來たんだね。さあ、喧嘩は妾が買つたから、一人だつてお逃げでない」

賑やかな四丁目の囃子が間近に迫つて來て此場の喧嘩を奪つ

た。往來を塞いでゐた群衆はバラバラ左右へ逃げて道を開いた。

「何んだ、何んだ」

山車を引いてゐた揃ひの絆纏を着た若者連が口々にかう言ひながら駈けて來た。

「お愛ぼうぢやおねえか。どうしたつてんだ。」

「あのネ、此の人達がぐすぐす言つてるから、妾が扱はふとしたんだが、任せられないと言ふから妾が喧嘩を買つて出たのさ」

「なに喧嘩を買つた。そいつあ面白え、遣つ付けろ」

「猩猩生け捕つて山車の飾りにしちまへ」

歩兵達は駭いてみんな何處かへ逃げてしまつた。

「さまあ見やがれ」

と誰かが叫んだ。若者連は手古舞の女を中に取り圍んで「わあツ」と囃し立て山車の方へ駈けて行つた。

三

安斐は屋敷へ還つてからまでも妙に興奮した狀態が續いてゐた。池の水のやうに陰鬱で、そして單調な彼自身の生活の上に突然大きな波が捲き上つたやうに感じた。彼は今日一日の出來事をさまざまに回想して見た。閑寂とした小梅の岡田の隱宅、賑やかな祭りの光景、歩兵の猩々毛、手古舞の女の顔――それらの形が何處となく頭の中に現はれた。

手古舞の女の顔だけは妙に忘られなかつた。まる顔だがすつきりとした感じだつた。潤味つぽくて愛嬌のある眼元や口元、キビキビした聲。安斐は折り折りうつとりした氣持になつて彼の女の事を思ひ浮かべたりした。

安斐は書齋に籠つて書見をしてゐた。其處へ、先刻使に出して遣つた側用人の高橋東馬が戻つて來た。東馬は過日も供の中に加はつてゐたのであつた。

「どうぢや、判つたか」と、安斐はぐるりと體をねぢ向けて言つた。

「は」東馬はかう言つて少し頭を上げて、握り拳を膝へ突いて體を浮かせながら一寸膝を進めた。

「直ぐに知れまして御座ります。淺草仲町の彌吉と申す魚屋の娘で御座りました。丁度親子とも在宅で御座りましたゆゑ、過日の禮を述べまして持參の品を出しましたところが、なかなか潔白な人間で容易に受け取らぬので閉口致しましたが、當方の御身分をも話してお請けを致さねば却つて失禮になるからと申し聞かせ、漸う納めさせて參つたやうな次第で御座りまする――

「左様か」安斐はいつにない上機嫌で「して、生活の様子はどうであつた。祭りの衣裝を見ると餘程豐であるかと思はれるが……」

「どう仕りまして」東馬は飛んでもない咄だと言はぬばかりに眼をパチパチさせた。「あべこべで御坐ります。それから御前、あの衣裝に就きましては、いやはや馬鹿氣切た事が御坐りますので——。實はかうで御坐りす。今日私が參りました處が、どうも家内中樣子が變で御坐ります。お愛と申す例の娘は、それまで泣いてでも居りました容子で御坐りました。で、何か譯のあることとと存じまして、それとなく訊ねて見ますると、主の彌吉と申すが江戸兒氣質の至つて卒直な男で、何も彼も隱さず話すので御坐りまする。それは先般の三社祭りに娘を手古舞に出したばかりに、衣裝其の他萬端の入費が嵩んで莫大な高利の借財が出來てどうすることもなりませぬところから、彌吉が娘に向つて身賣りをして呉れと賴みましたので、娘は泣く母親は怒る大騷ぎを演じて居りました處へ、丁度私が參り合はせたのだと言ふので御坐りまする」

東馬はかう話しながらも其の時の可笑しさを思ひ出してゐるやうに笑つてゐた。安斐は解つたやうな解らぬやうな氣持がした。

「其の借財はどれ程の金高なのぢや」

「二百圓ばかりかのやうに承はりまして御坐りまする」

「なんぢや」安斐は自身の重荷でも卸したやうな顏をした。彼は暫時考へてから、

「其の金は予が出して遣はさう」と言つた。

「御前が……?」東馬は意外さうな面持をしたが、直ぐに主君の眞意を探らうとするやうな眼つきをして相手の顏をじつと見つめた。

「さうぢや。予が拂うて遣はすから、直ぐ樣其の彌吉とやらの許へ屆けて遣るがよい。——したが東馬、それに就いては、ちと其方に申含めて置く事がある」

かう言つて安斐は「もつと近くへ寄れ」といふやうに東馬を手で招いた。東馬は恐る恐る主君の膝の側近躙り寄つた。安斐は其の耳へボシヤ〱囁いた。

「は、は」と合點きながら聽いてゐた東馬は途中から急に笑顏になつた。

「委細心得まして御坐りまする」東馬は元の處へ退つて言つた。「では、善は急げと申す事も御坐りまする。是れより直ぐ樣參りまして、喜ばせて遣ることに仕りませう」

安斐はすこし心配顏をして「萬事ぬかり無く申せよ」

「大丈夫で御坐りまする」

と、東馬は意味ありげに笑つて、直ぐに起つて出て行つた。

其の返事を東馬が齎らして來たのは夜になつてからであつた。

「首尾はどうぢや」

安斐は東馬の顔を見るが否や、さも待ち兼ねたやうに言つた。

「大略は上首尾で御坐りまするが……」と、東馬は言葉尻を濁らした。

「誰か異存を稱へる者でもあるのか」

「いえ、決して左樣な次第では御坐りませぬ。御前のお思召しを彌吉に申し傳へました處、いやもう大喜びで御坐りましたが、ほかの事と違ひ當人の意嚮を確かめて置く必要も御坐りまするゆゑ、お愛を招きまして彌吉からも私からも話して聞かせましたところ、當人の申しまするには、殿樣の有り難い思召しといひ、且は家の難儀も救はれますことゆゑ誠に結構過ぎた話では御坐りまするが、お妾奉公としてお屋敷へ上がるのは厭ぢや。それとも町住居をさして下さる思召しならば有り難くおうけを致しまする、とかう申すので御坐りまする」

「それは又どういふ譯ぢや。何故屋敷へ參ることを嫌ふのぢや」と、安斐は不審顔をして言つた。

「お屋敷へ上がれば行儀作法も習はねばならず、又滅多に外出することもならず、そんな窮屈な思ひをするくらゐなら死んだ方が増しぢやと、斯樣なことをば申して居りました。で、私からも樣々に其の邊の道理を說き聞かせましたし、彌吉も隨分諫め申しましたなれど、何分我儘一杯に育ちましたものと見え、かうと言ひ出しましたからにはいつかな承き入れませぬので、殆んど手に餘してしまひまして御坐りまする」

かう言つて東馬は平手で鼻の上の汗を橫に拭いた。それでもまだ、安斐にはお愛といふ女の心持が解らなかつた。屋敷へ來て立派な生活をすればこそ出世とも言へるのだ。それを自ら好んで下賤な者のするべき町住居がし度いと言ふのはどういふわけだらう、と思つた。それにしても、かう言はれてみるとお愛に對する彼の熱心は一層募つて來た。

「左樣か。當人がさう申すならば望み通りにして遣はさう。萬事は其方に任せるによつて善きに取計らへ」

安斐はかう言はなければならなかつた。

四

其の日から東馬は専ら妾宅の設定に就いて奔走を始めた。安斐は日々其の報告に接したり相談を受けたりした。今戸橋の側

に格好の賣り家があつたから買ひ求めたといふ事、衣服調度等支度萬端は、越後屋を始め出入りの商人に命けて悉く出來に及んだといふ事、今まで知らなかつたがお愛は清元の名取りで舞踊なども頗る堪能だといふ評判を聞いて來た事、お袋が行き切りで働くと言つてゐるから下女は一人だけも雇ひ入れれば充分であるといふ事、其の他何彼れとなく安斐の耳には毎日新らしい事が傳へられた。

妾宅の雜作が悉皆新らしく出來上つていよいよお愛母子の者が引き移つたといふ報らせがあつたのは六月の末になつてからであつた。

最初の日に、安斐は東馬一人を伴れて屋敷を出た。柳橋迄駕籠で行つて其處から船に乘つた。上げ潮の川には白帆に夕陽をうけた船や小さな荷たり舟などが澤山浮いてゐる。安斐はなんとなく非常に遠い處へでも行くやうな氣持がした。

堀へ着く時分にはもう灯がついてゐた。川面は一面に煙つてゐる。向嶋の堤の青葉が糢糊として柔かな色を浮き出させてゐる。こちらの岸は待乳山が聳えて眞黑い樹木がおつ冠さるやうに枝を擴げてゐるせいか。何んとなく夕暮の襲ひ來るのが早いやうな氣がする。川に望んだ料理屋の二階で彈いてゐる三味線の音が水面を走つて來て、岸を洗ふ波の中へ揉み込まれるやうに消えていく。

お愛の住居は、其處から堀へついてのぼらず直ぐ左へ曲つて僅か行つた處にあつた。彼女は上り口に蹲踞まつて頭を下げてゐた。簪を一本差したばかりの下町風の髮と、水際立つた襟足が安斐の眼を惹きつけた。

二階の障子は明け放されてあつて、今通つて來た川の水が黑ずんで廣々と擴がつて見える。涼しい川風が心地よく流れ込む。

「いかがで御坐りまする。手狹な代りに又別な風情が御坐りませうが」と、東馬が自慢さうに言つた。

直ぐあとからお愛が來る。縞物の單衣に黑襦子の帶を締めてゐる。

「愛で御坐りまする。どうぞ末永くお目をお掛け下さりませ」

其の聲までが安斐には何んとも言へず美しく、愛らしく感じられた。

お愛は自身で料理など運んだり、酒の酌をしたりなどした。其の顏にでも、態度にでも、生娘の優しさや初々しさばかりが溢れてゐる。彼女は稍もすると頰を赤くするのであつた。勇ましい手古舞姿で歩兵達を相手に啖呵を切つた女とは別人のやうに安斐には思はれた。

五

茶間は、其處から向嶋が一目に見へる。安斐は時々小梅の岡田頼母の事を思ひ出しては後めたい氣持になる。それ程彼はお愛の側で暮す日が多くなつた。初めて心のはけ場が見出されたやうに、お愛に對する愛情と興味が限りもなく湧いて來るのである。

お愛の樣子は初めの頃とは餘程變つて來た。安斐に對する遠慮が無くなつて來ると、時々我儘でお俠な性格を發揮することがあつた。それでお袋に叱られると、「だつて性分だもの仕方がないわよ」と彼女は負けてゐずに言つた。

さうしたお愛の性情が安斐には珍らしく、そして却つて彼女の美しさを增すやうに見えて來る。形式的の謹み深さに囚はれてゐる屋敷の女などに比べたならば、無作法であらうと彼女の方がどれぐらゐ多くの眞情を有つてゐるかしれないと思つた。

妾宅の家族は、お愛と母親と房州生れの下女と其の三人きりであつた。母親は年中娘に凹まされながら、それが寧ろ嬉しさうな顏をして、家の內の拭き掃除から食事の世話、或ひは娘の化粧の手傳ひに至る迄不思議な位働いてゐる。彼女は安斐に對してはお蘭時代其の儘の絶對的尊嚴の觀念を抱いてゐるらしく直き／＼では口も利けなかつた。其の代り一方の性質は安斐の限にも悪い感じは與へなかつた。

一切の面倒を切つて捨ててしまつたやうな妾宅の生活に浸つてゐると、彼は何んともいへない自由で安樂でそして自墮落な氣持になる。其處には何も考へるべき問題はない。政權も、地位も、名譽も、それには何の交渉も無いのである。

「一體人間の幸福といふものは何處にあるのだらう。幕府の老中として天下の政に與つてゐた時の自分と、現在のやうに日蔭の身となつてこんな小さな生活を樂むでゐる自分と、果してどつちが幸福なのだらうか。老中をしてゐる間は自分は得意で暮らしたけれども、其の代りのべつに苦みばかりし通して來た。現在の境涯は失意の結果には違ひないが、かうして暮らせば何の煩悶もなく滿足して其の日が送れるのだ。過去の生活が虚僞であつたのだらう。それとも現在の生活が惑ひなのであらうか……」

屈托の無い顏をして三味線など彈いてゐるお愛の顏を眺めながら、安斐は漠然とこんなことを考へて見ることもあつた。

彼はしまひにはお愛と差し向ひで長火鉢の前で飯を食ふこともあれば、手拭をぶら下げて近所の錢湯へ出掛けて見たりすることもあつた。

或日お愛は湯から歸つて來ると何か嬉しさうに莞爾々々しながら二階へ這つて來て、寢轉んで煙草を喫つてゐる安斐の側へぺつたり坐つた。湯上りの體のほてりと、白粉の匂ひが安斐の鼻を撲つた。

「御前樣――」お愛はすこし甘つたれた調子でかう呼び掛けた。

「なんぢや」かう言つて振り仰いだ安斐の顏へお愛は蕩れるやうな笑みをあびせた。

「唯今お湯に參りますとね、藝者衆やお茶屋のねえさん達が澤山來て居りましてね、みんなで御前樣のお噂をいたしまして御坐いますよ」

「さうか。どういふ噂をしたのぢや」

「御前樣のことを阪彥に似てゐらつしやると言ふので御坐いますよ。すると有明樓のおきんさんと申す姐さんが、成る程阪彥にそつくりだが御前樣の方がお品がいいだけ勝ちだと、かう申しますので御坐います。それから後でみんなして妾をからかふんで御坐いますもの――」

「どう言つてからかふのぢや」

「おまへみたいなあやかり者はない。後生だから爪の垢を落さずに貯けてお呉れ、後で煎じて頂くからのと、まだいろ／＼可笑しい事ばかり申すので御坐います」かう言ひながらお愛はすこし顏を赤くした。

「一體其の阪彥といふのは何をする者ぢや」

「阪東彥三郎のことを詰めて阪彥と申すので御坐います」

「なんぢや、役者のことか」安斐はつまらなさうな顏をした。

「予は芝居といふものを觀たことはないのぢや」

「まあ、御前樣は芝居を御存じないんで御御坐いますか」と、お愛は呆れたやうに言つた。

「そちは芝居が好きなのか」

「大好きで御坐います。うちに居りました時は、替り目／＼に觀ないと氣が濟まなかつたんで御坐いますよ」

「さうか。では早速觀るがよい。予も一緒に行くとしようか」

「おや、ほんとで御坐いますか。」では何時に致しませう」お愛は嬉しくて溜まらないやうな容子である。

「何時でもそちの都合のよい時に致せ。然し、予は其の阪彥とやらの出る芝居が觀度いのぢや」

「それが宜敷う御坐います。妾も宮地の芝居が一番好きで御坐いますよ」

お愛はもう芝居小屋の中の空氣に浸つてゐるかのやうな空想的な眼つきをしてゐた。

前の日から、お愛は家中混雜する程の大騷ぎを始めた。着物だの帶だの頭の物などを座敷中に取り擴げて、どれか一番よからうかと言つてしまひには下女にまで相談を持ちかけた。髮の出來具合が今日に限つて氣に入らなくて結ひ直させたりした。

翌日は、仲町の方から留守居を寄越させて置いて、一家擧つて、それに東馬をも加へて、猿若町三丁目の守田座へ出掛けた。

晴れた朝の空に無數の幟が飜つてゐた。提灯や幕が其の附近を彩つて、芝居小屋の前には菰冠りが屋根よりも高く積み上げてある。安斐の一行は茶屋の男に案内されて廣々と取つてある棧敷へ通つた。舞台の前には「魚がし」と一ぱいに染め拔いた縮緬の幕が引いてある。ぎつしり詰まつてゐる見物人の頭の上には、もやもやした空氣が渦を卷いて澱むでゐる。

「大勢な人だこと」お愛は小さな扇で顔をあふぎながら上氣したやうな眼つきをして言つた。

幕が明くと、お愛はもう何も彼も忘れてしまつたやうに熱心に舞臺の方ばかり眺めてゐた。舞台には大きな樓門が造られてあつて、其の上に山賊の張本のやうな人間が座つてゐると、其處へ淺黄の頭巾を冠つた弱々しい男が出て來て上の人間と頻りに問答などしてゐる。

「御前様、あの五右衛門をして居りますのは何の役者で御座いますよ」と、途中でお愛は安斐の耳へ囁くやうに言つた。

然し安斐は舞台へ眼を遣るよりも見物人の方を見勝にしてゐる時が多かつた。初めて看る狂言といふものは彼にはさう面白いものではなかつた。それよりも寧ろ、場内へ集まつてゐる多くの人間を見る方に彼は興味をもつた。華やかしく飾り立ててゐる女達の姿、甘く噎せるやうな濃厚な空氣、さうした芝居全體のもつてゐる惑溺させるやうな一種の情調が安斐にも惡い感じは起させなかつた。

幕合に、脊後の杉戸を明けて羽織袴の男が一人で禮に來た。

「初めてお目通りを仕りまする。私事は當座元守田勘彌に御座りまする。またこれに居りまするは座頭坂東彦三郎に御座りまする。本日は一同に對し莫大の御祝儀に預かりまして誠に有難い仕合せに存じまする。何卒末々迄御贔屓を下さりまするやう幾重にも御願ひ申上げまする」と、前に屈むでゐる男が滑かな調子で慇懃に言つた。

其の脊後に蹲踞まつて頭を下げてゐる男に眼をつけて安斐の方から聲を掛けた。

「彦三郎、予は脇坂ぢや。今後は折々遊びに參るがよい」

「へへへつ、有り難い仕合せに御座りまする」

「これよ。予は其方に似て居るさうぢや。それで折々人から譽められるぞ」

「ヘヘッ」

彥三郎は恐縮して無闇に頭を擦りつけた。

六

それ以來安斐は彥三郎を贔負にし始めた。芝居小屋へ足踏みする機會が多くなつた。彥三郎を初め贔負の役者達を伴れて諸方を遊び步くこともあつた。

淵の妾宅へは、役者だの、三味線彈きだの幇間のやうな人間ばかりが始終出入りをするやうになつた。かうした階級の人間に特有な一種の肌合ひをば彼は愛した。藝人と贔負客との關係のだけの、何の警戒をも要しない、淡泊な交際をば彼は喜んだ。

近頃の彼は、絕對に自身の生活を幸福だと信じ得るやうになつた。それにしても、曾ては自己の全生命であると信じてゐた政治上の權力をば他人の手にもぎ取られてしまつた上、此の世に生れて來て最上の誇りとしてゐた大名の地位までも失つて、絕望の淵に呻吟してゐた自分が再び新しい世界に浮かび上つて返り花のやうな生涯を送ることが出來たといふのは、どういふ神の意志なのであらうか？　何んたる不思議な、皮肉な事柄であらう……。

或日のこと、安斐は富本半平といふ幇間を伴れて日本橋邊の街を步いてゐた。彼は近頃退屈しのぎの道樂の茶器を蒐め始めたので、今日も多少其の道に眼のある半平を話相手に伴なつて此の邊の骨董屋を漁り廻つたのであつた。

安斐は急に空腹を感じたので時計を見ると午を廻つてゐた。

「半平、もう午過ぎぢや。予は空腹になつて來たが、何處ぞで晝飯をしたためることにしやうではないか」と、安斐は足を停めて言つた。

「それがお宜敷う御坐りまする。したが、何處で召しあがりまする」

「何處でもよ。なにせい予は非常に空腹になつた。速い處ほど結構なのぢや」

半平は暫時考へてゐたがふと思ひついたやうに、

「では今日は手前が變つた處へ御案內仕りませう。餘り人の存じませぬ手輕な家では御坐りまするが、天麩羅とお椀の味だけは確かなもので御坐りまする」

安斐は默いて肯いた。そして今度は半平が先になつて步き出した。

軟かな秋の陽が靜かに往來を照らしてゐる。織るやうな人通りだが、風が無いので塵一つ舞つてもゐなかつた。安斐は、先

刻或店で見たまゝ買はずに來た茶碗のことを思ひ出して考へてゐた。

と、前方から二頭立ての馬車が威勢よく走つて來た。白毛の馬が足並みを揃へて 地よい蹄の音を響かせる。御者の振り上げる鞭がキラ〳〵と陽に光つた。

往來の者は慌てて左右に路を避けて珍らしさうに馬車を見送つた。安斐も擦れ違ふ時に何氣なくそちらを見た。馬車の中に悠然と體を据えてゐる洋服の男と彼は偶然眼を合はせた。彼は思はず「はツ」としたやうな氣持になつて其の場へ立ち竦んだ。

馬車は轍の跡に微かな砂塵を卷き上げて通り過ぎた。それでも安斐は茫として同じ處に立つてゐた。馬車に乘つてゐた男の顏がはつきりと彼の眼に映つてゐた。それは新政府の首腦と目されゝゐる木戸孝允であつた。安斐は木戸とは二三回の面識があつた。それは幕府瓦解の際のことで、彼にとつては苦い記憶の一つであつた。

「彼も出世したものだ――」

と、安斐は獨りで呟いた。彼は自身が往來の端に立つてゐることに氣がついた。往き來の人々は皆それぞれ自分の生活に忙しいやうな顏をして、彼の方を振り向いて見やうともせずに歩いてゐる。

安斐は譬へやうもない淋しい氣分に襲はれた。それは恰も自分一人だけが此の世で用の無いものになつたやうな淋しさであつた。(完)

正・誤・

前號所載渡邊博士論文正誤表

	誤	正
第二頁三行	思はれぬ。	思はれる。
第一六頁一〇行	金額	全額
第二八頁一〇行	千萬磅	百萬磅

「これよ。予は其方に似て居るさうぢや。それで折々人から譬められるぞ」

「へヘッ」

彦三郎は恐縮して無闇に頭を擦りつけた。

六

それ以來安斐は彦三郎を贔負にし始めた。芝居小屋へ足踏みする機會が多くなつた。彦三郎を初め贔負の役者達を伴れて諸方を遊び歩くこともあつた。

柳の妾宅へは、役者だの、三味線彈きだの幇間のやうな人間ばかりが始終出入りをするやうになつた。かうした階級の人間に特有な一種の肌合ひをば彼は愛した。藝人と贔負客との關係のだけの、何の警戒をも要しない、淡泊な交際をば彼は喜んだ。

近頃の彼は、絶對に自身の生活を幸福だと信じ得るやうになつた。それにしても、曾ては自己の全生命であると信じてゐた政治上の權力をば他人の手にもぎ取られてしまつた上、此の世に生れて來て最上の誇りとしてゐた大名の地位までも失つて、絶望の淵に呻吟してゐた自分が再び新しい世界に浮かび上つて返り花のやうな生涯を送ることが出來たといふのは、どういふ神の意志なのであらうか？　何んたる不思議な、皮肉な事柄であらう……

或日のこと、安斐は富本半平といふ師の幇間を伴れて日本橋邊の街を歩いてゐた。彼は近頃退屈しのぎの道樂の茶器を集め始めたので、今日も多少其の道に眼のある半平を話相手に伴なつて此の邊の骨董屋を漁り廻つたのであつた。

安斐は急に空腹を感じたので時計を見ると午を廻つてゐた。

「半平、もう午過ぎぢや。予は空腹になつて來たが、何處ぞで晝飯をしたためることにしやうではないか」と、安斐は足を停めて言つた。

「それがお宜敷う御座りまする。したが、何處で召しあがりまする」

「何處でもよ。なにせい予は非常に空腹になつた。速い處ほど結構なのぢや」

半平は暫時考へてゐたがふと思ひついたやうに、

「では今日は手前が贔つた處へ御案内仕りませう。餘り人の存じませぬ手輕な家では御座りまするが、天麩羅とお椀の味だけは確かなもので御座りまする」

安斐は默いて肯いた。そして今度は半平が先になつて歩き出した。

軟かな秋の陽が靜かに往來を照らしてゐる。織るやうな人通りだが、風が無いので塵一つ舞つてもゐなかつた。安斐は、先

刻或店で見たまま買はずに來た茶碗のことを思ひ出して考へてゐた。

と、前方から二頭立ての馬車が威勢よく走つて來た。白毛の馬が足並みを揃へて　地よい蹄の音を響かせる。御者の振り上げる鞭がキラ〳〵と陽に光つた。

往來の者は慌てて左右に路を避けて珍らしさうに馬車を見送つた。安斐も擦れ違ふ時に何氣なくそちらを見た。馬車の中に悠然と體を据えてゐる洋服の男と彼は偶然眼を合はせた。彼は思はず「はツ」としたやうな氣持になつて其の場へ立ち竦んだ。

馬車は轍の跡に微かな砂塵を卷き上げて通り過ぎた。それでも安斐は茫として同じ處に立つてゐた。馬車に乘つてゐた男の顏がはつきりと彼の眼に映つてゐた。それは新政府の首腦と目されてゐる木戸孝允であつた。安斐は木戸とは二三回の面識があつた。それは幕府瓦解の際のことで、彼にとつては苦い記憶の一つであつた。

「彼も出世したものだ――」

と、安斐は獨りで呟いた。彼は自身が往來の端に立つてゐることに氣がついた。往き來の人々は皆それぞれ自分の生活に忙しいやうな顏をして、彼の方を振り向いて見やうともせずに歩いてゐる。

安斐は譬へやうもない淋しい氣分に襲はれた。それは恰も自分一人だけが此の世で用の無いものになつたやうな淋しさであつた。（完）

正・誤・

前號所載渡邊博士論文正誤表

	誤	正
第二一頁三行	思はれぬ。	思はれる。
第一六頁一〇行	金額	全額
第二八頁一〇行	千萬磅	百萬磅

◎山川菊榮著（四六版ポイント入 約三百頁）定價壹圓四拾錢位 送料八錢

新刊 現代生活と婦人

十月十五日頃發賣

口著者曰く口

本書は著者の第一論文集であります。著者は過去數年間の論文中より比較的研究的な性質を帶びたものを選んで本書に收めました。本書の諸論文のうちには、外國に於ける婦人運動、批判と紹介があり、一般社會問題に對する批評と感想とがあります。其觸るゝ所の問題は雜多でありますが、著者の之れに對する立場と論結とは、全くの論文を通じて一貫して居ることを信じます。現代生活と婦人に對する著者の見解は固より之に盡されたものではありませんが、著者は本書に依て、思想界に對する著者の功罪の問はれることを辭しないものであります。

武者小路實篤著 四版 **幸福者** 定價壹圓 送料八錢

ロンドン作 堺利彦譯 有島武郎跋 五版 **野性の呼聲** 定價八十錢 送料六錢

柳宗悅著 再版 **宗教とその眞理** 定價壹圓卅錢 送料八錢（外地十四錢）

有島武郎著作集

第九輯 **或女（後編）** 二十版 定價壹圓卅錢 送料八錢

第八輯 **或女（前編）** 廿版 定價九十五錢 送料八錢

第七輯 **小さき者へ** 十九版 定價五十五錢 送料六錢

第六輯 **生れ出る惱み** 廿四版 定價八十錢 送料六錢

東京牛込神樂町二丁目十一番地 **叢文閣** 振替貯金口座東京四二八八九番

人物評論（一〇九）

國際勞働會議に出席する我が代表委員



▽鎌田氏と武藤氏

文學博士　三宅雪嶺

（一）

日本政府で華盛頓の國際勞働會議へ委員を派出する經路は、ヴェルサイユの講和會議

へ西園寺侯及び牧野男を送つたのに同じい。誰れの役目を政友會關係者に委ねたのである。人物を考へぬ事は無く、相當に任に堪へる者をと選んだのであるけれども、同時に我が畠から出さうと考へた。講和會議について始め深く慮らず、西園寺とか牧野とかを送れば大使連と協議し、無難に結末を付けやうと思ふた如く、鎌田氏を送れば大抵に取計らつて來るだらうと決めて居る。何事を爲すべき乎よりも、如何に花を持たさうかと云ふに重きを置く。講和會議に西園寺を出し、勞働會議に鎌田を出すところ、考へたと云へば考へたとも云へる。鳥渡着眼が面白い。一方は政治界の元老であつて新しい智識をも得て居り、他の一方は教育界の元老であつて、政治界・實業界に關係が多い。鎌田と云へば、何が何でも第一流の人物であり、文相にも推さうとし、確かに大臣級に屬する。全く官吏より離れて居りながら現内閣と氣脈が通じて居り、官吏以外から人を選び出すに持つて來いの人物である。鎌田氏が承知しさへせば、それで心配ないと云ふ事になる。政府の思ひ付き及び世間の氣受けは講和會議の西園寺と勞働會議の鎌田と略ぼ匹敵する。

（二）

ところで講和會議で、西園寺侯に豫期した程の事が有つたか何うか。侯が居らなくてもと云ふやうな事に成りはしなかつたか。鎌田氏は多數が適當な人物とするに一致するが、偖て會議に出席し、何を爲すであらうか。隨行員もあり、皆智恵を絞り、下手な事を爲すまいと考へられるが、たゞ出席したと云ふに止まる事がなからうか。氏は何事にも意見が有り、時と處に相應する事を失はぬが、世界に於ける勞働問題は、氏の從來の立場から頗る懸け離れ來つて居る。勞働問題は、氏及び隨行員が豫ねてより考へて居り、相應に見當が着いて居らうが、氏自らの日本に於ける位置は、一般世界の趨勢と背馳するの恐れがある。氏はデモクラシーの趨勢に於て順境に立ち、官僚と趣を異にするのは明白である。慶應大學はデモクラチツクの點に於て單に帝大に一頭地を拔くのみでなく、二個私大學の一なる早稻田大學を凌ぐ。早稻田もデモクラシーを念としながら、何を云ふても總長は大隈侯、何處となく貴族的の氣分が漂はぬとせぬ。早稻田では華族を薨去とし、慶應では貴族も平民も等しく死去とする。早稻田で大隈侯死去と書く事が出來まい。其處は慶應の方が平氣なものであつて、皇族以外公侯爵であらうが何であらうか、一様に死去とする。慶應は確にデモクラチツクの氣分が勝つて居るが、資本家に對する時、何程勞働者に同情し且つ之を理解し得るか。學校經營に於て資本家の出資を仰ぐここ私立學校普通の狀態であるが、さうして資本家には頭の上

らぬ方であるが、其中で早稲田の職員及び學生は甚だしく資本家感染れせぬ。中に純粋の資本家もあるけれども、一般に資本家氣質を帶びて居ると云へぬ。學校として資本家に頭を下げても、中に居る人々は資本家氣質が薄く、中に反感を抱き反對を唱へるものもある。慶應は職員でも學生でも資本家氣質を帶び、金の無い者まで資本家らしくし、他日資本家に成らうと心得て居る。特別の立場から經濟問題を取扱ひ、富豪を罵倒するを憚らぬ者まで、他から觀れば資本家氣質を脫してら居ぬ。つまり資本に重きを置き、資本家の位置を以て最も確實なるもののやうに考へる。拜金宗はあながち資本家に限らず勞働者にもあるが、勞働者の金を欲しがるのと違ひ、金を得て資本家に成るの可能性があると云へる。實に慶應義塾關係者に實業界に幅を利かすのが多く、寄附金の關係を別にして、尙ほ資本家と切つても切れぬ關係に居る。

（三）

鎌田氏自ら實業に關係せず、學校の敎育家、社會の敎育家として立ち、態度の立派なる所があるが、資本家と勞働者と相爭ふ場合、資本家の横暴を助ける意が無くつても、資本家より離れる事が出來まい。やはり協調とか溫情とかいふところに落着くであらう。斯くて落着ける間それで可い。いよ〳〵權利を爭ふ時如何にするか。根が資本家の分野に生長し、今更ら之を離れる事が出來まい。自分に何等金錢上の慾なく、公平な眼で問題を觀ながら、資本家の不利益になるやうな事を爲すに忍ぶまい。政府の要路者は由來資本家側に立ち、現内閣の基礎を形造る政友會亦資本家に由つて運動費を得て、資本家の擁護者たるを失はぬ。反對黨なる憲政會も同じく金權黨といふ丈けで、金權黨たるに於て變りが無い。官僚には時として資本家に反對する氣紛れ者あるが、政黨にかゝる者有るか。有つても幹部に列し得るか。政友會内閣は何としても資本家と理解ある人物を大使として出さなければならぬ。鎌田氏に白羽が立つたのは熟く人を見拔いたのである。デモクラチック氣分に於て申分なく、自由民權の擁護を以て任ずると云ひつゝ、資本家側に立ち、資本家側を擁護するを辭せぬ。少しも私利私慾を交へず、事は斯くあつて然るべきものと信じて居る。歐米にも之と同樣の思想の者が鮮くない。資本國の名あるところは其思想が最も力がある。鎌田氏が大使として赴任し、會議で決議に與る時、何等異樣に感ぜられる事がなからう。

然し會議は資本家の會議でなく、勞働者の會議であり、勞働者中資本家側に立つ者があるにしても、多數は勞働者側に立つべく、且つ今後いよ〳〵下級勞働者が力を伸す事を否定し得

い。露國過激派的思想は一般に傾り勝する所、容易に侵入せぬけれど、下級勞働者が勢力を伸すに相違ない。今日資本家及び資本家化せる勞働者の希望せぬ所に出でぬと限らぬ。鎌田氏が一議で何程口か利くかは判らぬが、少數者の諒解を得、多數者の好まぬ所に出ではせぬか。其邊は會議に何うでもなし得るとし、八時間問題、婦人勞働問題等に就きては思はぬ故障に遭遇する事が無からうか。今は露國の如きを除いて資本家が勢力があり、資本家側から勞働問題を扱つて多く疑惑を受くる事ないとし、勞働會議に大使として來りながら、勞働問題を理解せぬように疑はれる事がないか。

(四)

然し鎌田氏の態度は今日まで明白を缺き、平素の考巧なる態度を以て何とか埒を明けると考へられるが、既に態度を明かにした資本家代表者武藤氏は好い結果を齎し來るを期し得るか。之れ亦た慶應出身であり、剰へ純然たる資本家、資本家の爲めに氣焔を上げて可いのであるが、氏の云ふが如くんば、八時間など問題でなく、溫情主義を歐米に唱へるとの事である。斯くて能く歐米人を心服させ得れば可からうが、八時間は問題でないとし、何時までもそれ以上で可いとするか、又は今日日本の事情が之を許さず、尚ほ幾年の準備を要すとするか。準備を要すとするのは、日本の勞働者は歐米の勞働者と對等の位置に進まぬのを明言する事になる。何故に八時間と限るかは大部分の經驗的智識を以て獨斷するに出で、數字を以て精細に說明する事が出來ぬ。勝手な取り極めと云へぬ事はない。然し其故を以て論據薄弱とすれば、世界の問題で論據の動かぬものは無い。或る點に於て獨斷となり、其處で多數が一致するので力がある。論據薄弱として日本は之れに加はらぬ事にし、他國に於て日本の勞働者はそれ程までに進歩せず、徒らに勞働して居るといふ事になれば、其力で出來上つた生産品を特別扱ひにし、重く課税し、或は輸入を禁止せぬと云へぬ。それは亂暴と云つて抗議を持出し得るか。持出し得るけれども良い結果があると思へるか。八時間勞働は紡績業者に取つて不利益であり、紡績業は日本の産業で重要なものであるけれど、時間の長いのは果して長くする必要があるのか。又は訓練が足らず訓練を憚つて居るが爲めでないか。日本の軍隊は歐米の軍隊と戰ひ得るかと疑はれたけれど、訓練して優に之と戰ひ得るを證明するに至つた。他の國々で八時間以上とするならば兎も角、八時間と決定し、日本獨り除外例を要求せねばならぬか。否でも應でも他の工場で八時間と決めるのがあるらしい。或る造船所で之を行はうとして居る。或る所で行はれれば他で能く八時間に減

抗し得るか。此邊の事は先の事であつて、何れが當るか其時に至らねば判らぬが、武藤氏が人に語つた言分及び態度は何分にも資本家の傲慢を示すところがある。氏自ら傲慢でなく、實に鍛錬された人格であるにせよ、常に多數の役員職工に敬はれ、知らず識らず氣が高ぶるやうになつたのでないか。今は勞働者に勢力なく、かかる事に注意せぬが、其態度を以て進めば、早く勞働者の反感を買ひ、思はぬ邊に波瀾を捲き起す事ないとせぬ。

（五）

資本家代表に對し勞働者代表者の出づべき筈であるが、曲りなりに決定しさうであつて、決定を見るに至らなんだ。之れまた政府の鼻より人を出さうとし、慶應出身又は帝大出身を求めた形がある。恰も政治上で極力憲政會を叩かうとするが如く、今回も極力早稲田を叩かうとした。他に適當な人があれば殊更早稲田に人を求むるに及ばぬが、今少しく露骨さ加減を慎んだならばよいでないか。早稲田が默して居るのも意氣地無けれど、意氣地無しと見て叩き付けるのも褒めた話でない。大使として慶應の親分が出て、資本家側として慶應の出身者が出るならば、勞働者側にでも早稲田に運動し得る餘地を與へた方が面白かつたらう。何人が選ばれるかは判らぬが、出で得る餘地がなくてはならぬ。今の有様では再び以前の如く非政友の聲が高まり、勢を一變するやうな事が無いとせぬ。勞働者代表に關する協議會の如き、寔に不手際千萬であり、昔風に云へば世間に顔向けがならんのである。もとはと云へば餘りに細工をした事から起る。勞働會議の我委員の成績は講和會議の我委員の成績位のものであらうか。選定に臨んで失敗した所から見れば、更に多く心配を伴ふ。大使に於て生涯の智惠を絞り、奮勵黽勉するを要し、資本家代表者に於て調子に乗り過ぎた事を悟り、將來に禍を貽さぬやうに努めて貰ひたい事世間一般の希望であらう。（完）

▽勞働會議の日本代表者

匿名論客

一

此稿を草しつゝある時（九月二十日）には勞働會議に出席す可き日本の代表者は全部定まつて居らぬ。政府代表者二名の内、一名が鎌田榮吉氏で、他の一名は誰れであるか、分らず、資本家代表者は武藤山治氏であるが、肝腎な勞働代表者に至つて

は、本多精一、高野岩三郎、桝本宇平の三氏が第一位から第三位の候補者に當選したゞけで、誰れが任命されるか、判然しない。一體今度の勞働大會は勞働者保護の立法に就て、國際間の統一を求めやうと云ふ計畫であつて、勞働時間の八時間制限や、婦人の夜業廢止や、少年の就業禁止年齡の問題などは、解決の如何に依ては、我國工業の發展に大なる影響を及ぼす譯である。代表委員たる者は平生是等の問題を研究して居る可き譯であるが、(是れが道理だけで、委員中平生の研究を缺いて居る人の多いには恐れ入る) 尙ほ眞劍に攻究するなり、實地を踏査するなり、世間の批判を聽くなり、渡米前に充分の準備をしなければならぬ。然るに委員の出發す可き日取が目前に迫つて居るのに、其顏觸を揃へることが出來ず、寧ろ一夜作りで、一時を誤魔化さうとするのは、農商務省として、大なる失態と云はなければならぬ。

元來今度の會議で議事に上る五個條に對して、政府は如何なる方針を取らうとするのであるか。若しも鎌田氏が勞働問題の研究者で、何か意見でも發表して居れば、鎌田氏の持論即ち政府の方針と認めることも出來るが、勞働問題に就ては、鎌田氏は全然白紙であり、無意見である、少なくとも意見として世間に發表されたものを耳にしない。此白紙と云ふ所が或は政府の

殊に萬事放任な原首相の意に叶つて、鎌田なれば、何でも政府の命令通りに、華盛頓で行動して來ると見込を付け、一部の策士——切言すれば隨行希望者——が鎌田派遣說を政府に持込んだのを渡りに船と、鎌田を委員に任命したものと認めらるゝ。處で此隨行希望者中、逸早く名乘を上げて、顧問顏をした連中に落選者があり、又妙な名義で是非共隨行しやうと骨折つて居る者があるのは、滑稽の次第である。

處で政府は勞働大會に對して、如何なる方針を取るのであらうか。一體勞働問題に就ては、其行政を管掌する官廳が內務省と農商務省との二つに分れて居り、兩省の方針に大分相違のあるのは、誠に困つたものである。即ち內務省は溫情主義や、協調主義で當分此問題を取扱つて行かうとするのであつて、床次氏の如き即ち此傳統的信念の代表者である。然るに農商務省では、今日こそ省外に去つたが、岡實氏にしろ、片山義勝氏にろ、又現に省內に居る河合榮次郞氏にしろ、外國の勞働組合や、勞働運動の實情を見て來て居るから、內務省の連中よりも少しは進んだ考を持つて居る。即ち勞働組合の公認や、次第に依ては、治安警察法第十七條の廢止位は省內に之を必要とする空氣が漲つて居るので、是等の點に就ては、內務省と正反對である。處で今度鎌田氏を政府代表者とするに就ては、兩省から夫れ〲見

張人を付けるさうである。然らば太平洋の眞中では勿論華盛頓へ行つてからも、兩省を代表する役人の意見が衝突し、鎌田氏をして其採決に苦しませることであらう。鎌田氏に之を決裁して、判斷の正鵠を誤まらざるだけの自信があるかどうか、一の問題である。

何は兎もあれ斯る重大なる會議であつて、而して日本が如何なる態度を執るか、外交問題と違つて、少しも掛引を必要としないものである以上は、政府は代表委員に如何なる命令を下すものか、代表委員は五個條の議事に對して、如何なる意見を懷いて居るか、國民に公表して國民の安心を得又其批評を求めることが必要である。

（二）

資本家代表者は關西方面殊に紡績業者の運動で、武藤氏が推薦されることゝ爲つた。武藤氏は實業家として、從來名聲があるが、勞働會議の代表委員としては、武藤氏位の厄介千萬な代物はあるまい。彼は委員に當選する前から、八時間勞働制の尙早說を公言した。又委員當選後、何と言つたか、渡米の曉には、日本資本家の溫情主義を力說すると稱し、又夜業の禁止には反對すると答へて居る。直接に本人に質した譯でなく、新聞記事に據つたのであるが、之に對する取消もなく、反對の談話の揭げられない所から云へば事實と認めなければならぬが、私は斯人を委員として、華盛頓に送ることは、下等な移民を米國に送ると同じく、一種の國辱を加へるものと考へる。今や勞働條件を改善して、世界の改造に貢しやうとするのは、世界的潮流であつて、何ものゝ力を以てしても、之を動かせないのに、武藤氏は之に逆行しやうとするのである。假に武藤氏が日本で夜業を廢止したり、八時間勞働制を實行したりすると、自分の關係ある紡績業が窮地に陷ると說明したとして、若し外國委員から、日本の紡績會社は近年資本金に對して、幾割の收益を擧げ、又幾割の配當を株主に分配して居るかと問はれた場合に武藤氏は自分の會社では、前者が十二三割であり、後者が七八割であると答へて、能く彼等を正視し得るであらうか。斯る利益を擧げ得るならば、其一部を割いて、勞働條件を改善し、他の一部を割いて、物資の代價を低廉にし、資本家、勞働者並に消費者の三方面に利益を調和するのが當然であつて、此當然の事を爲し得ないで、何で夜業廢止や、時間短縮に反對する理由を得ることが出來やうか。武藤氏以下日本の紡績業は利益を貪るに急で、常識を失つたものと評するの外ない。斯る非常識者を資本家代表として、晴れの舞臺に送るに就ては私は絕對に反對を表するものである。

武藤氏は八時間勞働を尙早なりとするが大阪工業會の委員會では、曩に八時間制速行を可能なりと議決したではないか。本會議では此議決を飜したが、然も一票の差で八時間說は敗れたのであつて、其一票も或る方面からの干涉と噂されるではないか。而して神戸造船所其他では早く八時間制を實行せんとしつゝあるではないか。然らば武藤氏が如何に八時間說に反對した所で、事實は之を裏切つて居るのであつて、結局外國委員に笑はれて、世界の大勢に順應するの外に、道はないであらうと思はれる。

政府と資本家とは我國に於て、常に協調するものである。殊に原內閣の如き、資本家の勢力、企業者階級の利害を尊重して、思ひ切つた物價の調節すら行ひ得ない政府であつて、殆ど資本家の專制に服從して居る。斯る政府と資本家と一致して、勞働時間の短縮にも、夜業の禁止にも、少年工の就業制限にも猶豫と留保との一天張りで、會議に臨んだとしたならば、日本こそ勞働條件の改善に誠意を有せざる國であることを列國に廣告する結果と爲る。私は勞働會議の結末が斯く爲りはしないかと云ふことを憂ふるものである。

（三）

斯る論點から見て、私は勞働代表者の人選に重きを置いた。假令ひ政府代表者や、資本家代表者は役に立たないでも、勞働代表者に人を得て、我國の勞働者の勞働狀態や、勞働上の苦痛や、勞働立法の現狀や、其將來に改正す可き點を會議の席上で高唱させ、次第に依ては、外國の勞働代表者と一致の態度を取つて、決議を左右し、日本の勞働政策を改善する材料としたかつたのである。然し斯る人々を得ることが政府に取つては、甚だ恐ろしかつたので、協議員の選擧に干涉し、勞働代表者を選出す可き協議員の內に、會社の取締役や、技師長技師の類や、彼等の命令に左右せらる可き工場長などを加へ、純勞働者所謂筋肉勞働者や、筋肉勞働者の利害を純正に代表す可き人の選出されることを妨害したのは、何と云ふ淺ましい根性であらうか、驚くの外はないのである。

干涉脅迫色々な魂膽で選出された勞働代表の三候補者に對して、世間は何と考へるか。私は一人として勞働代表たる資格を持たないと斷言する。本多氏は成る程經濟學で法學博士の學位を持つて居るが、勞働問題で別段深い研究をして居らず、常識で新聞論說のお茶を濁す位に過ぎない。詰り本多氏の名が突然協議員の口に上り、最高點で第一候補者に當選したのは山本農相や犬塚次官の方寸が選擧を左右したことの動かす可からざる證據であつて、本多氏が代表者を辭したのは當然である。熟考

も何もあつたものではない。選擧されるのから、間違の沙汰である。高野氏は勞働問題に專門的研究を遂つて居り、又勞働組合主義で進んで行かうと云ふ穩健な主張を持つて居る人であるが、元來が官學の一人であつて、政府の意思に反いて、行動することを許され可きでない。又其人物も溫良和平で、勞働會議で大に列國の勞働代表者と肱を執つて折衝するだけの機略もなければ、才鋒もあるまい。政府代表者の顧問には其官學者たるの關係から、適任とも云へやう、又官邊の意を承けて、鎌田氏の行動を掣肘する位の役をするには、適するかも知れないが、此以上に勞働代表者の任に當らうとするが如き、僭上の沙汰であつて、本人も分を辨へて、辭することゝ爲るだらうと想像される。桝本氏に至つては論外である。同氏の如き一營利會社の取締役であり、技師長であり、而して其會社は鈴木商店の出資である關係上、鈴木某の一被傭者とも見る可きものを勞働代表とするのは沙汰の限りである。本多、高野の辭任した場合に、桝本が勞働委員を受けるかどうか今日邊り大分世間の噂に上つて居るが、桝本ならば、本多、高野以上に資格銓衡の合格に困難であると思はれる。桝本自ら逃げ出したと云ふ新聞記事は事實ではあるまいか。

本多辭し、高野退き、桝本逃げるとしたならば、結局日本では勞働代表委員を出さぬか、選擧會の遣り直しをするか、又は日本には勞働者の團體がないと政府自ら專斷的に解釋して、勞働代表委員を勝手に任命するか、三策の外に道はない。然し第一策を取れば、資本家代表委員は會議に於て票決に加はれない。第二の方法は既成勞働團體に對して、政府が不誠意の限りを示した今日に於ては、到底完全に行はれないし、協議員の改選は時日が之を許さず。第三の方法は益々勞働者を激昂させるばかりで、內閣の致命傷にならないとも限らぬ。其處で政府は結局高野を拜み倒して、勞働代表委員を承諾させる段取りであらうが、學者の生命は、其進退の合理的なる事に存する。高野が彼の辻褄の合はぬ勞働者協議員會から選出され、躊躇しながらも政府の命令に應じたならば、即ち官學者の弱點を暴露したものであつて、吾人は今後勞働問題に就て、高野輩の喙を容れることを許さない。又友愛會が高野なら我慢しやうと云ふやうな妥協的態度を執つたならば、是れ亦合理的なる可き勞働運動に不純の點を印するものである。兎に角委員の出發す可き日取が目前に迫つたに拘はらず、勞働代表者を任命することが出來ず、一方に勞働者社會を騷がせ、政府に對する、勞働團體の反感を强からしめたのは、農商務省近來の失態であつて、山本農相たるもの、宜しく責任を自覺す可きである。或はコンナ事が失策

武藤氏は八時間勞働を尙早なりとするが大阪工業會の委員會では、甞に八時間制速行を可能なりと議決したではないか。本會議では此議決を飜したが、然も一票の差で八時間說は敗れたのであつて、其一票も或る方面からの干涉と噂されるではないか。而して神戶造船所其他では早く八時間制を實行せんとしつゝあるではないか。然らば武藤氏が如何に八時間說に反對した所で、事實は之を裏切つて居るのであつて、結局外國委員に笑はれて、世界の大勢に順應するの外に、道はないであらうと思はれる。

政府と資本家とは我國に於て、常に協調するものである。殊に原內閣の如き、資本家の勢力、金權者階級の利害を尊重して、思ひ切つた物價の調節すら行ひ得ない政府であつて、殆ど資本家の專制に服從して居る。斯る政府と資本家と一致して、勞働時間の短縮にも、夜業の禁止にも、少年工の就業制限にも猶豫と留保との一天張りで、會議に臨んだとしたならば、日本こそ勞働條件の改善に誠意を有せざる國であることを列國に廣告する結果と爲る。私は勞働會議の結末が斯く爲りはしないかと云ふことを憂ふるものである。

（三）

斯る論點から見て、私は勞働代表者の人選に重きを置いたら假令ひ政府代表者や、資本家代表者は役に立たないでも、勞働代表者に人を得て、我國の勞働者の勞働狀態や、勞働上の苦痛や、勞働立法の現狀や、其將來に改正す可き點を會議の席上で高唱させ、次第に依ては、外國の勞働代表者と一致の態度を取つて、決議を左右し、日本の勞働政策を改善する刺戟としたかつたのである。然し斯る人々を得ることが政府に取つては、甚だ恐ろしかつたので、協議員の選擧に干涉し、勞働代表者を選出す可き協議員の內に、會社の取締役や、技師長技師の類や、彼等の命令に左右せらる可き工場長などを加へ、純勞働者所謂筋肉勞働者や、筋肉勞働者の利害を純正に代表す可き人の選出されることを妨害したのは、何と云ふ淺ましい根性であらうか、驚くの外はないのである。

干涉脅迫色々な魂膽で選出された勞働代表の三候補者に對して、世間は何と考へるか。私は一人として勞働代表たる資格を持たないと斷言する。本多氏は成る程經濟學で法學博士の學位を持つて居るが、勞働問題で別段深い研究をして居らず、常識で新聞論說のお茶を濁す位に過ぎない。詰り本多氏の名が突然協議員の口に上り、最高點で第一候補者に當選したのは山本農相や犬塚次官の方寸が選擧を左右したことの動かす可からざる證據であつて、本多氏が代表者を辭したのは當然である。熟考

も何もあつたものではない。選擧されるのから、間違の沙汰である。高野氏は勞働問題に專門的研究を遂つて居り、又勞働組合主義で進んで行かうと云ふ穩健な主張を持つて居る人であるが、元來が官學の一人であつて、政府の意思に反いて、行動することを許され可きでない。又其人物も溫良和平で、勞働會議で大に列國の勞働代表者と肱を執つて折衝するだけの機略もなければ、才鋒もあるまい。政府代表者の顧問には其官學者たるの關係から、適任とも云へやう、又官邊の意を承けて、鎌田氏の行動を掣肘する位の役をするには、適するかも知れないが、此以上に勞働代表者の任に當らうとするが如き、僭上の沙汰であつて、本人も分を辨へて、辭することゝ爲るだらうと想像される。桝本氏に至つては論外である。同氏の如き一營利會社の取締役であり、技師長であり、而して其會社は鈴木商店の出資である關係上、鈴木某の一被傭者とも見る可きものを勞働代表とするのは沙汰の限りである。本多、高野の辭任した場合に、桝本が勞働委員を受けるかどうか今日邊り大分世間の噂に上つて居るが、桝本ならば、本多、高野以上に資格審査の合格に困難であると思はれる。桝本自ら逃げ出したと云ふ新聞記事は事實ではあるまいか。

本多辭し、高野退き、桝本逃げるとしたならば、結局日本では勞働代表委員を出さぬか、選擧會の遣り直しをするか、又は日本には勞働者の團體がないと政府自ら專斷的に解釋して、勞働代表委員を勝手に任命するか、三策の外に道はない。然し第一策を取れば、資本家代表委員は會議に於て票決に加はれない。第二の方法は既成勞働團體に對して、政府が不誠意の限りを示した今日に於ては、到底完全に行はれないし、協議員の改選は時日が之を許さず。第三の方法は益々勞働者を激昂させるばかりで、內閣の致命傷にならないとも限らぬ。其處で政府は結局高野を拜み倒して、勞働代表委員を承諾させる段取りであらうが、學者の生命は、其進退の合理的なる事に存する。高野が彼の辻褄の合はぬ勞働者協議員會から選出され、躊躇しながらも政府の命令に應じたならば、即ち官學者の弱點を暴露したものであつて、吾人は今後勞働問題に就て、高野輩の喙を容れろことを許さない。又友愛會が高野なら我慢しやうと云ふやうな妥協的態度を執つたならば、是れ亦合理的なる可き勞働運動に不純の點を印するものである。兎に角委員の出發す可き日取が目前に迫つたに拘はらず、勞働代表者を任命することが出來ず、一方に勞働者社會を騷がせ、政府に對する、勞働團體の反感を强からしめたのは、農商務省近來の失態であつて、山本農相たるもの、宜しく責任を自覺す可きである。或はコンナ事が失策

武藤氏は八時間勞働を尙早なりとするが大阪工業會の委員會では、曩に八時間制遂行を可能なりと議決したではないか。本會議では此議決を翻したが、然も一票の差で八時間說は敗れたのであつて、其一票も或る方面からの干涉と噂されるではないか。而して神戶造船所其他では早く八時間制を實行せんとしつゝあるではないか。然らば武藤氏が如何に八時間說に反對した所で、事實は之を裏切つて居るのであつて、結局外國委員に笑はれて、世界の大勢に順應するの外に、道はないであらうと思はれる。

政府と資本家とは我國に於て、常に協調するものである。殊に原內閣の如き、資本家の勢力、金權者階級の利害を尊重して、思ひ切つた物價の調節すら行ひ得ない政府であつて、殆ど資本家の專制に服從して居る。斯る政府と資本家と一致して、勞働時間の短縮にも、夜業の禁止にも、少年工の就業制限にも猶豫と留保との一天張りで、會議に臨んだとしたならば、日本こそ勞働條件の改善に誠意を有せざる國であることを列國に廣告する結果と爲る。私は勞働會議の結末が斯く爲りはしないかと云ふことを憂ふるものである。

（三）

斯る論點から見て、私は勞働代表者の人選に重きを置いた。假令ひ政府代表者や、資本家代表者は役に立たないでも、勞働代表者に人を得て、我國の勞働者の勞働狀態や、勞働上の苦痛や、勞働立法の現狀や、其將來に改正す可き點を會議の席上で高唱させ、次第に依ては、外國の勞働代表者と一致の態度を取つて、決議を左右し、日本の勞働政策を改善する利器としたかつたのである。然し斯る人々を得ることが政府に取つては、甚だ恐ろしかつたので、協議員の選擧に干涉し、勞働代表者を選出す可き協議員の內に、會社の取締役や、技師長技師の徒や、彼等の命令に左右せらる可き工場長などを加へ、純勞働者所謂筋肉勞働者や、筋肉勞働者の利害を純正に代表す可き人の選出されることを妨害したのは、何と云ふ淺ましい根性であらうか、驚くの外はないのである。

干涉脅迫色々な魂膽で選出された勞働代表の三候補者に對して、世間は何と考へるか。私は一人として勞働代表たる資格を持たないと斷言する。本多氏は成る程經濟學で法學博士の學位を持つて居るが、勞働問題で別段深い研究をして居らず、常識で新聞論說のお茶を濁す位に過ぎない。詰り本多氏の名が突然協議員の口に上り、最高點で第一候補者に當選したのは山本農相や犬塚次官の方寸が選擧を左右したことの動かす可からざる證據であつて、本多氏が代表者を辭したのは當然である。熟考

も何もあつたものではない。選擧されるのから、間違の沙汰である。高野氏は勞働問題に專門的研究を遂つて居り、又勞働組合主義で進んで行かうと云ふ穩健な主張を持つて居る人であるが、元來が官學の一人であつて、政府の意思に反いて、行動することを許され可きでない。又其人物も溫良和平で、勞働會議で大に列國の勞働代表者と肱を執つて折衝するだけの機略もなければ、才鋒もあるまい。政府代表者の顧問には其官學者たるの關係から、適任とも云へやう。又官邊の意を承けて、鎌田氏の行動を掣肘する位の役をするには、適するかも知れないが、此以上に勞働代表者の任に當らうとするが如き、僭上の沙汰であつて、本人も分を辨へて、辭することゝ爲るだらうと想像される。桝本氏に至つては論外である。同氏の如き一營利會社の取締役であり、技師長であり、而して其會社は鈴木商店の出資である關係上、鈴木某の一被傭者とも見る可きものを勞働代表とするのは沙汰の限りである。本多、高野の辭任した場合に、桝本が勞働委員を受けるかどうか今日邊り大分世間の噂に上つて居るが、桝本ならば、本多、高野以上に資格審査の合格に困難であると思はれる。桝本自ら逃げ出したと云ふ新聞記事は事實ではあるまいか。

本多辭し、高野退き、桝本逃げるとしたならば、結局日本では勞働代表委員を出さぬか、選擧會の遣り直しをするか、又は日本には勞働者の團體がないと政府自ら專斷的に解釋して、勞働代表委員を勝手に任命するか、三策の外に道はない。然し第一策を取れば、資本家代表委員は會議に於て票決に加はれない。第二の方法は既成勞働團體に對して、政府が不誠意の限りを示した今日に於ては、到底完全に行はれないし、協議員の改選は時日が之を許さず。第三の方法は益々勞働者を激昂させるばかりで、內閣の致命傷にならないとも限らぬ。其處で政府は結局高野を拜み倒して、勞働代表委員を承諾させる段取りであらうが、學者の生命は、其進退の合理的なる事に存する。高野が彼の辻褄の合はぬ勞働者協議員會から選出され、躊躇しながらも政府の命令に應じたならば、卽ち官學者の弱點を暴露したものであつて、吾人は今後勞働問題に就て、高野輩の喙を容れることを許さない。又友愛會が高野なら我慢しやうと云ふやうな妥協的態度を執つたならば、是れ亦合理的なる可き勞働運動に不純の點を印するものである。兎に角委員の出發す可き日取が目前に迫つたに拘はらず、勞働代表者を任命することが出來ず、一方に勞働者組合を騷がせ、政府に對する、勞働團體の反感を强からしめたのは、農商務省近來の失態であつて、山本農相たるもの、宜しく責任を自覺す可きである。或はコンナ事が失策

の端緒と爲つて、原内閣瓦解の原因とも爲りはしなかつたらうか、局外者には興味ある問題である。（九月二十一日朝）

▽狐と狸と大恩人

堺 利 彦

『國際勞資協調會』に對する日本政府の代表が鎌田榮吉氏である事の代りに、よしやそれが桑田熊藏氏であらうとも、添田壽一氏であらうとも、將た又た澁澤榮一氏であらうとも、我々としては其適否、若しくば利害を批評する必要を認めず、亦それについて殆んど何等の興味をも持たない。純然たる資本家的政府の實質を具備せる原内閣が選任する人、そして喜んで其の選任を受ける人が、ワシントンに於いて如何なる言論行動を爲すべきかは分り切つてゐる。我々は狐や狸の數匹を並べて見せられた時、其の體格の大小や、其の毛色の濃淡や、其の尻尾の長短や、其の目付口付の多少の差異は眞逆に見えない事はないが、さりとて何番目の狐と何番目の狸とが特に好だとか嫌ひだとか云ふ事は全くない。只いづれも同じような狐、同じやうな狸として、其の狡猾陰險な共通性を認識するだけである。鎌田狐が桑田狐に優るとも思はず、榮吉狸が壽一狸にまさるとも思はない。

次に資本家の代表として、紡績界の『双璧』たる武藤山治氏と和田豐治氏とが、どちらが當選したにしても、我々は前同樣、何の關する所もない。實際、此の兩氏の名前は折々取違へるくらゐのものである。狐と狸を取違へるのは餘りヒドイといふ評もあるか知らぬが、武藤狐と和田狐として見たら、其の焦茶色に見分のつきにくいのは當然だらう。若し又、山治狸と豐治狸として見たら、いよいよ以て人間の目に區別は出來ない筈である。

然し勞働者の代表に對すると、我々の感覺が頗る鮮明になつて來る。先づ本多精一氏のうろたへ加減を見ると、若しあれを煽てゝ承諾させたら、定めし面白い滑稽劇が見られただらうにと、聊か殘念な氣がする。次に高野岩三郎氏はさすがに少し骨がありさうに見えて、頼もしい所が無いでもない。然しあゝいふ成行で選擧されて、而も次點に選擧されて、それでノコノコ出かけるやうだつたら、矢張り高の知れた者に思はれる。最後に桝本卯平氏は本多氏にも優つた喜劇役者として最適任者だと思はれる。あの人が行つてくれたら、そして大味噌をつけて得々として歸つてくれたら、それこそ日本勞働運動の大恩人になること請合である。

此文を草する時、高野氏はまだ諾答をせず、友愛會と信友會とは盛んに反對運動をやりながら、高野氏なら條件次第で折合ひそうな氣ぶりも見えてゐる。此の妥協の危機がどんなフウに開展するかは、我々見物人にチョット豫測が出來かねるが、折角あれほど勢ひこんでゐた友愛會と信友會とに、高野氏の個人に對する信任如何は別問題として、是非モウ一と踏んばり踏んばつて貰ひたいと思ふ。高野氏はどうせ政府代表の顧問として行く人である。骨を見せる秋りがあるなら其の地位からでも見せられぬ事はない。何も曲りなりに高野氏を勞働代表にして弱味を見せる必要はない筈である。それよりか勝手に桝本氏を遣らせておいて、日本勞働運動の大恩人に仕立てあげるのが上策ではないか。若し又、桝本氏が恐怖を感じて引込むなら、それは一層結構な事で、政府代表と資本家代表とを仲よく二人連で行かせるに限る。友愛會はツイ先日大會を開いて、內部組織の『理想的改造』を行ひ、硬化の評判が世間に廣まつて居る折柄、殊に會長鈴木文治氏が意外の男振をあげてゐる折柄、何とかして踏んばれるだけ踏んばらせたいものである。

と云つて見た所で、此文章が世に出る頃には、無論何とか片がついてゐるだらうし、そして其の片づき方が若し政府萬歲、友愛會へマの妥協現象ででもあるならば、……それを思ふと實にジレッタイ。（廿二日）

▲追記　只今新聞號外を見れば、高野氏勞働代表を承諾したと云ふ。今日までの彼が名聲信用は之で全く地に陷ちたと謂ふべしだ。只友愛會が飽くまで強硬の態度で高野攻撃の火の手を擧げてゐるのは愉快だ。（廿三日夕）

▽國際勞働會議の代表者

鵜崎鷺城

國際勞働會議に日本から三人の代表委員を出すについて、政府側と資本家側とは雑作なく定つたが、勞働側は自薦候補者の競爭があつたり、各工場から選んだ協議員の資格問題が起つたり、初めからナカ〳〵形勢が面倒で、三日も四日もゴツタ返したのは、資本家代表者が僅に五分か十分で定つたのと大きな相違である。是れに依つて日本の勞働團體の無組織幼稚であることを益々痛切に感ずる。而して日本の各代表者が國際會議の大舞臺に立つて何程の働をするか、又た是等の委員が日本の勞働組織に新紀元を劃する使命を帶びたものとして、立派に日本を代表するものと言ひ得るか、嚴密に論ずればいろ〳〵不足な點もあつて、決して萬人を首肯せしむべき最適任者とは云へぬ

が、さりとて一概に人選を誤つたとも思はれぬ。然し何事も理想なるは稀く、特に勞働問題の初期に於てはコンナ顏觸れでお茶を濁すのも是非ないところであらう。

政府が鎌田榮吉君を正使に擧げたのは、何を標準にしたかと云へば、恐らく勞資研究會の會長たる點にあるのだらうが、此の人にしては勞働問題と少し懸け離れたところがありはせぬかと思はれる。固より政府の手盛りであるから誰れを任命するも好い譯であるが、同じ手盛りにしても、國際勞働會議其物の性質と使命の特質とに鑑みて今少し役柄に嵌つた人を擧げることが出來さうなものである。尤も鎌田君は學識といひ人格といひ社會上の地位といひ、何處に押出しても恥かしい人物では無いが、國際勞働會議の正使として勞働問題を歐米の委員とジスカッスする人としては、單に教育家であるとか學者であるとか、若くは立派な人格であるとかと云ふこと丈けが資格の全部では無い。少くも多年勞働問題を研究したとか、若くは日本の勞働問題は斯う云ふ風にしなければならぬと云ふ一つの定つた見解を抱いて居るとか、其處に典據となるべきサムシングが無ければならぬ。尤も學者であるから何でも一通りは心得て居るだらうが、從來勞働問題に關して意見を發表したことも無ければ、又た何程の理解があるかも疑問であつて、當面の勞働問題には寧ろ門外漢であると云つて誤り無い。

鎌田君は紀州和歌山の人で、代議士の關直彥君と同郷同年にして又た郷里の學校時代も同學であつた。唯だ前者は慶應義塾に入り、後者は帝大に入つて私學と官學とに別れたが、共に藩の選拔生であつた。鎌田が塾に入つた當時は福澤翁の郷里の大分縣に次いで紀州のものが多かつたが、今では鎌田が紀州派の先輩で、明治七年以來今日に至るまで三田と始終して切つても切れぬ關係がある。今こそ慶應は發展して大學となり、我邦の私學中最も歷史に富み、且つ人物も各方面に分布されて早稻田以上の勢力を有つようになつたが、福澤翁の生前及び死後には經營難に罹つた時代もあつて、鎌田君の如きは殆んど衣食の資を顧みずして塾の爲めに働いた一人である。小幡篤次郎、門野幾之進に次いでの先輩で、小幡物故し門野が財界に轉じた後は、鎌田以外に福澤翁の志を繼いで塾を背負つて立つものが無く、先輩の中からプレシデントを推すとすれば、自然彼を取るべき順序である。彼には三田以外に何物の背景も無く、貴族院議員になつたのも、鎌田の耆宿であるが故である又た勞資研究會々長に推されたのも、其方の識者があるからで無くして社會上の位置よりした名譽職である。恐らく國際勞働會議の正使も幾分三田と云ふ勢力が背景になつて居りはせぬか。

鎌田の本職は本來教育にあるが、別に政治家及び學者の一面がある。教育家としては三田の塾長以外に、嘗て郷里の自修學校の校長を勤め、又た明治十四年福澤翁の推薦で鹿兒島造士館の教頭となり、或は大分の中學校長、師範學校長にもなつて、教育と云ふ點には經驗もあれば抱負もある。學問の方は嚴格なる意味に於ての學者と云ふことは出來ぬが、藩校に居た時分から學才があつて、三田では主として政治と理財を修め、又た初め福澤一流の變則で始めたのであるが、其の後修業を積んで語學は熟達した方である。それに塾長になるまでは塾で生徒を教へたから、廣い意味に於て學者と云へるが、然し新しい學者では無い。彼の政治經濟は高田早苗君のブルンチュリー・バジオットの國法學と殆んど同じ程度に古色を帶びて居る。又た前の舊藩主德川賴倫侯に隨つて洋行して、多少歐米の事情を觀て歸つて歐米見聞記と云ふ書物を公けにしたことがあるが、是れとて二昔以上も前のことだから新しい事情に通ぜぬ。唯だ然し現在に生きて居る人物だから内外一般の大勢を知つて、何物についても相當の意見を立てる丈けの頭はある。或は勞働問題についても世間に發表こそせざれ、多少の考を蓄へて居るかも知れぬが、然しそれが何程の價値あるものであるかは疑問である。政治家としては明治二十七年和歌山の舊第一區から代議士に選ばれたが、第六議會解散後を以て辭職し、それから洋行して歸て塾長に舉げられたのである。貴族院議員に任ぜられたのは第一西園寺内閣のときで、既に十四五年も議席を占め、勅選中では有力者の一人である。貴族院では屢々演壇に立ち、文部省の教育會議でもいろ〳〵演說するが、隨分皮肉を云つたり時としては三百代言流の理窟を並べたりする。出來の好い時もあるが極めて要領を得ないことがある。雄辯家で無いが下手な方で無く、何方かと云へばシャベリ好きである。或は教育家よりも寧ろ政治家に適したところがあるかにも思はれ、又た鎌田君自身も單に教育家と見られるのは本意で無く、矢張政治家を以て任じて居るらしく見える。

鎌田君は身を投じた方面が方面だけに、其の閱歷には是れと云ふ程の變化が無い。初めから荒い波風に揉まれずにノンビリと生ひ立つて來たから妙にヒネクレたところが無く、人間がやや樂天的に出來て居る。三田のサークルでは元老と云ふので立てられて居るが、德望の普く及んだ點に於ては門野に及ばず、關係者中には推服しないものもある。又た學校の經營振りについても消極的だと云つて苦情を鳴すものもある。由來三田風と云ふ中には一種忌なところがあつて、悧巧振つたり氣取つたりハイカツたりするものが多いが、鎌田はさうした臭味が無く、

が、さりとて一概に人選を誤つたとも思はれぬ。然し何事も理想たるは難く、特に勞働問題の初期に於てはコンナ顔觸れでお茶を濁すのも是非ないところであらう。

政府が鎌田榮吉君を正使に擧げたのは、何を標準にしたかと云へば、恐らく勞資研究會の會長たる點にあるのだらうが、此の人とても勞働問題と少し懸け離れたところがありはせぬかと思はれる。固より政府の手盛りであるから誰れを任命するも好い譯であるが、同じ手盛りにしても、國際勞働會議其物の性質と使命の特質とに鑑みて今少し役柄に嵌つた人を擧げることが出來さうなものである。尤も鎌田君は學識といひ人格といひ社會上の地位といひ、何處に押出しても恥かしい人物では無いが、國際勞働會議の正使として勞働問題を歐米の委員とジスカッスする人としては、單に教育家であるとか學者であるとか、若くは立派な人格であるとかと云ふこと丈けが資格の全部では無い。少くも多年勞働問題を研究したとか、若くは日本の勞働問題は斯う云ふ風にしなければならぬと云ふ一つの定つた見解を抱いて居るとか、其處に典據となるべきサムシングが無ければならぬ。尤も學者であるから何でも一通りは心得て居るだらうが、從來勞働問題に關して意見を發表したことも無ければ、又た何程の理解があるかも疑問であつて、當面の勞働問題には寧ろ門外漢であると云つて誤り無い。

鎌田君は紀州和歌山の人で、代議士の關直彦君と同郷同年にして又た郷里の學校時代も同學であつた。唯だ前者は慶應義塾に入り、後者は帝大に入つて私學と官學とに別れたが、共に藩の選拔生であつた。鎌田が塾に入つた當時は福澤翁の郷里の大分縣に次いで紀州のものが多かつたが、今では鎌田が紀州派の先輩で、明治七年以來今日に至るまで三田と始終して切つても切れぬ關係がある。今こそ慶應は發展して大學となり、我邦の私學中最も歴史に富み、且つ人物も各方面に分布されて早稻田以上の勢力を有つようになつたが、福澤翁の生前及び死後には經營難に陥つた時代もあつて、鎌田君の如きは殆んど衣食の資を顧みずして塾の爲めに働いた一人である。小幡篤次郎、門野幾之進に次いでの先輩で、小幡物故し門野が財界に轉じた後は、鎌田以外に福澤翁の志を繼いで塾を背負つて立つものが無く、先輩の中からプレシデントを推すとすれば、自然彼を取るべき順序である。彼には三田以外に何物の背景も無く、貴族院議員になつたのも、鎌田の耆宿であるが故であるし又た勞資研究會々長に推されたのも、其方の論者があるからで無くして社會上の位置よりした名譽職である。恐らく國際勞働會議の正使も幾分三田と云ふ勢力が背景になつて居りはせぬか。

鎌田の本職は本來教育にあるが、別に政治家及び學者の一面がある。教育家としては三田の塾長以外に、嘗て郷里の自修學校の校長を勤め、又た明治十四年福澤翁の推薦で鹿兒島造士館の教頭となり、或は大分の中學校長、師範學校長にもなつて、教育と云ふ點には經驗もあれば抱負もある。學問の方は嚴格なる意味に於ての學者と云ふことは出來ぬが、藩校に居た時分から學才があつて、三田では主として政治と理財を修め、又た初め福澤一流の變則で始めたのであるが、其の後修業を積んで語學は熟達した方である。それに塾長になるまでは塾で生徒を教へたから、廣い意味に於て學者と云へるが、然し新しい學者では無い。彼の政治經濟は高田早苗君のブルンチュリー・バジオットの國法學と殆んど同じ程度に古色を帶びて居る。又た前紀州藩主徳川賴倫侯に隨つて洋行して、多少歐米の事情を視て歸つて歐米見聞記と云ふ書物を公けにしたことがあるが、是れとて二昔以上も前のことだから新しい事情に通ぜぬ。唯だ然し現在に生きて居る人物だから内外一般の大勢を知つて、何物についても相當の意見を立てる丈けの頭はある。或は勞働問題についても世間に發表こそせざれ、多少の考を蓄へて居るかも知れぬが、然しそれが何程の價値あるものであるかは疑問である。政治家としては明治二十七年和歌山の舊第一區から代議士に選ばれたが、第六議會解散後を以て辭職し、それから洋行して歸て塾長に擧げられたのである。貴族院議員に任ぜられたのは第一西園寺内閣のときで、既に十四五年も議席を占め、勅選中では有力者の一人である。貴族院では屢々演壇に立ち、文部省の教育會議でもいろ／＼演説するが、隨分皮肉を云つたり時としては三百代言流の理屈を並べたりする。出來の好い時もあるが極めて要領を得ないことがある。雄辯家で無いが下手な方で無く、何方かと云へばシャベリ好きである。或は教育家よりも寧ろ政治家に適したところがあるかにも思はれ、又た鎌田君自身も單に教育家と見られるのは本意で無く、矢張政治家を以て任じて居るらしく見える。

鎌田君は身を投じた方面が方面だけに、其の經歷には是れと云ふ程の變化が無い。初めから荒い波風に揉まれずにノンビリと生ひ立つて來たから妙にヒネクレたところが無く、人間がやゝ樂天的に出來て居る。三田のサークルでは元老と云ふので立てられて居るが、德望の普く及んだ點に於ては門野に及ばず、關係者中には推服しないものもある。又た學校の經營振りについても消極的だと云つて苦情を鳴すものもある。由來三田風と云ふ中には一種忌なところがあつて、悧巧振つたり氣取つたりハイカツたりするものが多いが、鎌田はさうした臭味が無く、

又た自分の爲めに策を用ゐたりしない。正直で上手が無く人間にネバリ氣が無い。塾の教師時代は難解の點はアッサリ分らぬと云つて好い加減な誤魔化しをしなかつたさうである。孰れか云ふと直情徑行に近く、動もすれば部下の教授と衝突したりする。變物の福田博士も議論して飛出した一人である。商法のオーソリチーで癖の強いので有名な青木徹三博士も嘗て學校の經營方針について意見を云つたところが、鎌田の言振りが少し穩當を缺いたと云ふので、教授を罷めたことがある。然し概括して云へば稍々大雜把の方で、其の意見の如きも具體的に刻んで云はずに大體論が多く、何となく不得要領なところがあつて人物の輪郭は小さく無い。

貴族院議員としては初め木曜會にあつたが、木曜會解散後は交友俱樂部に籍を置いて居る。木曜會は政友會臭味の團體であつたし、特に今の交友俱樂部は純然たる政友系である。鎌田は自ら政友系を名乘りこそせざれ、事實に於て折紙附の政友會である。總じて早稻田系の議員は憲政會に屬するに反して、三田系は政友會に多いようである。其の政治系統から云へば、鎌田が勞働大使になつたのも不思議で無い。若し彼が適任で無いとすれば、西園寺と牧野を講和全權委員にしたのと同じで、眞に適任不適任の問題よりも、矢張り黨派と緣故から人を取ると云ふ原首相の流儀を看取することが出來る。それにしても古賀の拓殖局長官、南弘の文部次官、岡喜七郎の警視總監、最近には水野の朝鮮政務總監、加藤恒忠の西伯利大使、今また鎌田の勞働正使等總て交友俱樂部であるのは著しく目に附く。

慶應側から法學博士氣賀勘重、板倉卓造君の外に窪田文三君等が顧問の名義で同行することになつて居るさうである。氣賀は政友會の代議士として餘り振はぬが經濟學の造詣に於て堀江歸一君と並び稱せられ、現に經濟原論の講座を受持つて居る。前年墺國の經濟學者フイリツプ・フイツツの浩瀚なる經濟書を翻譯して、博士になつた位で、獨逸仕込みの學者である。社會の政策や勞働問題の新知識と云はれる堀江博士が行かぬのは、學校から一時に二人の經濟學教授を手放すことが出來ないからであらう。板倉は田中萃一郎と學問の系統を同うする新進學者で、夙に慶應から歐洲に留學して大戰勃發後に歸朝し、『歐洲戰亂の眞相と交戰列國』と云ふ著書を出した。外國に關しては比較的新しい頭を有つて居る。窪田は元と高商出身の外交官で、嘗て佐藤愛麿の和蘭公使時代に書記官を勤め、其の後總領事になつて罷めた人で、勞働問題の實際に精通して居る。鎌田自らは勞働問題の頭が無いにせよ、顧問役の中に其の道に通じた人があれば、勞働會議に出る諸問題に關して栃面棒を振ること

ともあるまひし、特に政府と打合して意見の大體を定めて會議に臨むとすれば、使命を辱めるような心配はあるまい。又た彼の地位、堂々たる風采、英語の達者な點だけは代表者として申分が無い。隨つて世間に彼是れ批難も無いようである。

資本家側は初め和田豐治君と武藤山治君とが候補者であつたが、特に武藤が紡績業者を代表した形で選ばれた。現在紡績界の戰士で、富士紡の和田に對して鐘紡の武藤と云はれる位に知られて居る。何さま多年職工を對手に奮鬪して來た經驗家だけに、勞働社會の實情に通じ、勞働問題についても相當の意見を抱いて居るが、然し大體から云へば、資本家の恩惠の下に職工の利福を計らうとする所謂溫情主義の主張者で、何處までも資本家の立場から勞働問題を論ずる方である。彼の意見には感服出來ない點が多いにせよ、兎に角資本家仲間では比較的物の分つた方で、資本家代表としては先づ此人と云ふ所であらう。尤も資本家と云つても工業の種類に依て違つて居るから、紡績資本家は直接自分の畠から委員を出して滿足しても、紡績以外の工業資本家は間接になる譯だが、委員を一人と限る以上は已むを得ざる所である。武藤君にしても總ての工業團體を代表して行く以上は、全體の利害を代表する心掛があるに相違なく、又た紡績以外の工業からそれ〲顧問を出せば、紡績とのバランスが取れる譯である。

勞働者側は擦つた揉んだの揚句第一が本多精一博士、第二が高野岩三郎君、第三が桝本卯平君と云ふ順序で候補者を選擧したが、承諾するせぬまで又々行惱んだ。勞働者の産業的團體がある歐米では、委員を選ぶに至つて面倒が起らぬが、日本のように勞働組合の公認されて居ない國では、勢ひ這回の如き出合に當つてヤレ政府の干渉があつたの、ヤレ資格が何うのと云ふような問題が持上つて、愚劣な長評定に日を重ねたのである。それに協議委員に選ばれて來たものも、コンナ事に慣れて居ないから新聞に煽てられたり小役人に丸められたりするのである。イクラ筋肉勞働者と云ふ叫びが强調されも、實際の結果は本多博士にせよ高野博士にせよ桝本君にせよ、唯だ勞働問題に理解があり勞働者に同情があると云ふ丈けで、全國勞働者の利害を直接に代表したものとは云へぬ。純理論から云へば勞働者の代表は純勞働者でなければならぬけれども、實際問題の上から云へば、まだ今日のやうな知識程度ではそれは困る事情がある。それ故に今日の如き勞働組織の不完全な時代には姑息であつても其人に政府臭味や資本家臭味が無く、公平な見地から勞働問題を研究し、勞働者の立場を諒解する學者を選ぶのも一策である。純勞働者に限ると云ふのは勞働組合法が制定され一勞

働者の頭が出來てからの事である。

第一候補者になつた本多雪堂君は我輩の知人であるから特に褒める譯でないが、財政經濟の才は天稟に近く、其の觀察といひ識見といひ群を拔いてゐる。無論勞働問題についても一家の見を有つて居る。越前鯖江の名門に生れ、其の風貌の貴公子然たるのみならず、何處となく我儘な而して高く標傍した所がある。帝大時代は目的以外の學科を修めるのが忌だと云ふので、我れから好んで本科から專科に轉じ、友人は損だと云つて止めたに拘らず、財政經濟を專念に研究するのは此方が便利だと云つて肯かなかつた。大學卒業後暫らく京都同志社の教師となり、添田壽一の推薦で大阪朝日新聞の經濟部長に聘せられ、經濟記者として操觚界に重きを爲した。加藤高明子の社長で東京日々が伊東巳代治の手から三菱の經營に移つたとき、主筆になつて洋行したが、日々の持主が代つてから再び朝日に關係し、現に財政經濟時報を經營する傍ら朝日の客員として筆を執つて居る。彼の立論は學者的偏埋に陷らずして極めて實際的である上に動もすれば無味乾燥に流れ易い經濟論を面白く平易に讀ませる手際は流石で、評論の才以外に文章家としても立派なものである。或る道に掛けても大家で隨分いろ／＼な逸話もある。雪堂君はチヤンと守るところがあつて何方かと云へば多少旋毛が曲つて居る。非常な官僚嫌ひで憲政擁護時代は急進者側で働いた一人である。彼が勞働代表者になつて行けば、徒に政府や資本家とコンプロマイズするようなことは無い。高野博士は帝大の經濟科教授で、勞働問題は假仕込みと違つて深い根抵がある。特に統計學に造詣するところ深く、國勢上の意見は此の人の右に出づるものが無いと云つて好い。一派の賣名學者と違つて輕々しく說を發表せぬが、學者としては著書がある。夫人は確か獨逸人であると思ふ。

然るに第一の本多君は代表者になることを辭退し、更に第二の高野君にお鉢が廻る順序となつたが、此稿を書き終る頃までは如何に決着するか分らなかつた。高野君も筆を取らぬとすれば結局第三の桝本君を殘すのみである。桝本君に反對があつたのは同郷の小村欣一侯の推薦で政府筋の後援があると云ふのと、現に某某造船所の技師長であるから資本家系であると云ふ以外に、多少感情問題も加味して居る。然し元と勞働生活の實驗があつて勞働者の立場を理解して居るし、相當頭もあつて纏つた考を有つて居ると云ふから、強いてケチを附けずに此の男を代表者にしても別に差支なさゝうに思はれる。變則な時代には變則な人間を出すのも已むを得ざる所である。

今度の勞働會議の模樣は今から想像が附かぬが、更に由日本

の勞働問題も之れに依て新意義、新生命を生ずる譯だから、政府も資本家も勞働者も、我邦の本業狀態は歐米と違ふと云つて、何日までも因襲的な頭で居ることは出來ない、特に勞働者は此の勞資關係の革命に面して、資本家の奴隷になつたり窮屈な法律に縛られたりして無理解無省察のまゝに過され無くなる。行く／＼はヘンダーソン、バーンス、ゴンパースのような指導者も出て來ねばならぬ、勞働會議に行く各階級の代表者は、普通の米國見物と違つて夫々苦心もある代りに舞臺としては面白い。

▽日本勞働委員の讃美

山川均

一

日出づる國から日沒する夷狄の國へ、遙々八時間制の實施と夜業禁止との、除外例歎願の爲めに出掛る使節の顔觸れも、何うやら極つたやうである。外國に使ひして君命を辱しめずなどといふ場合には、何でも彼でも强がりに往くことを意味してゐたが、變れば變る世の中で、今日は、手前の方は印度同様の『國情』ゆへにこのところ何とか御勘辨に預かり せめて十年だけなりと命を助けると思召し何卒除外例を……と七重の膝を八重に曲げても、低頭哀願、大に弱はがつて拜み倒して來るのが即ち勞働使節の大任を辱しめざる所以である。

この有かたい大任を、二つ返事で引受ける犠牲的人物があるのだから、日本はまだ愛國の志士に乏しからずと申すべきであらう。

そこで勞働使節の適任か何うかと云ふことは、畢竟この拜み倒しの技倆があるか無いかに歸着する。鎌田氏は喜んで此の大任を受けられたといふことであるから、定めしこの技倆には充分の自信を持たれることと考へ、鎌田氏を尊敬する意味から氏の適任を信じて置く。

二

資本家階級が武藤山治氏を代表委員に選んだことは意味深長である。

武藤氏は、鐘紡の職工優遇施設を以て有名な人である。それと同時に、八時間勞働には斷乎として反對する人である。更に武藤氏は、紡績業の七割八割の配當は、紡績業者が社會公衆の爲めに危險を冒して、原料綿花買占の投機に成功した當然の報酬であつて、之が爲めに時價よりも安い綿糸を供給して居るものであつて、社會は紡績業者に向つて宜しく感謝すべしと云

ふ、「公開書を發表して、『紡績業者に對する社會の誤解』を叱正せられた人である。

言葉を換へて云へば、武藤氏は勞働者に對する恩惠の必要を最も早く覺つた先覺者であると共に、勞働者の權利として勞働條件を改善することには、最も頑強に抵抗せられる人である。そして斯くして搾取した利潤に對しては、驚く可き執着を示した人である。武藤氏は其身に、資本主義的貪婪を最もよく體現せられて居る點に於いて、慥かに國際勞資協調會に資本家階級の貪婪を代表するの資格ある人物である。

更に武藤氏が、紡績業資本の代表者であるところに、一段の妙味がある。

纖維工業は近世の機械工業中、最も原始的の工業であつて、各國の工業發達史は、何づれも纖維工業より鐵工業に推移した變遷であると云ふことができる。更に近世工業の歴史を、利潤搾取の方法の上から見れば、成るべく勞働時間を延長しようとする無制限の勞働搾取から、成るべく僅少の勞働時間より(從つて成るべく僅少の機械運轉の時間より)最大の利潤を收得しようとする、能率的の勞働搾取に推移した變遷である。日本に於いても、他の工業資本家が八時間制に同意して居るにも拘らず、紡績業者が最も頑強な抵抗を示して居るのは、近世機械工業中の最も原始的な紡績業が、勢ひ原始的の搾取方法たる無制限搾取の傳説の上に立つて居るが爲めに外ならぬ。無制限なる勞働搾取を基礎として發達して來た紡績業は、今も尚ほ此の傳説的基礎に噛ぢりついて居る。そして此の紡績資本の利害を最も能く代表する人は吾が武藤山治であつた。

更に製糸及び綿糸工業の女工が、日本の勞働階級中、最も抵抗力の薄弱な部分であることは云ふ迄でもない。是等の纖維工業が、日本に於ける殆んど唯一の工業と目せられて居た間は、勞働運動の起るべくして起らなかつた一事によつて知ることができる。そして無制限搾取の重量が、この最も抵抗力の弱い部分に、最も强く壓下して居るのは怪むに足らぬ。

紡績業の非八時間説が大阪工業會の八時間説に勝つたのは、一面には日本の工業に於ける綿糸業の勢力の、まだ中々有力なことを示して居ると同時に、日本の一般資本家が、無制限たる原始的搾取方法の傳説から、まだ充分に脱し得て居らぬことを物語つて居る。

資本の目的は、最大の剩餘價値を搾取することである。搾取の方法と樣式とは必ずしも問ふ所でない。最大の剩餘價値に對する資本の貪婪を代表することにおいて、武藤氏は確かに適任者であることを疑はぬ。

三

國際聯盟は、來る可き階級戰に對する神聖同盟であり、若くは神聖同盟となる可き運命を有するものである。この國際聯盟規約一部を成して居る國際勞働會議の性質の何たるかは、今更いふ迄もあるまい。國際聯盟規約そのものの運命が、米國の上院で行惱んで居る國際勞働會議を規定した聯盟規約そのものは、斯ように成立しては居らぬものである。ところが最近の新聞電報によると、聯盟規約の成立と否とに拘らず、勞働會議は豫定の期日に開催するといふことである。此の一事は、各國の勞働問題が、如何に資本家政府を威嚇して居るか、そして各國の資本家政府が、如何に周章狼狽して居るかを遺憾なく語つて居る。斯ように資本家階級の必要によつて開かれる國際會議を、國際資本會議と云はないで、國際勞働會議と名づけたところに第一の欺瞞がある。勞働會議といふことは、必ずしも勞働者會議といふことを意味せぬことを記憶しなければならぬ。

國際聯盟の原則九ヶ條の劈頭には、『勞働は單に貨物或は商品と認むべからず』と云ひ、『締盟國は凡て原則として勞働を單なる商品と見做さざる事を主張す』とも云つて居るが、賃銀制度の存續する限りは、勞働は商品である。勞働を商品と見做さざることは、精密に賃銀制度の撤廢を意味して居る。國際勞働會議の目的は、現在の經濟組織——賃銀制度——の撤廢であるか維持であるか。現在の經濟組織を固執しつつ、勞働は商品に非ずといふが如きは、僞善と僞瞞の甚だしいものであつて、吾々は國際資本會議が、此の最大の僞瞞を基礎として居ることを忘れてはならぬ。

要するに國際勞働會議は、最も善意に解決しても、國際勞働協調會である。國際資本家と勞働者との『隔意なき諒解』である。資本と勞働との隔意なき諒解なるものか、資本の爲に行はれるものであるか、勞働者の爲に行はれるものであるかは、『隔意なき諒解』の下に行はれた、最近の勞働代表選定協議員の選舉が、最も明白に證明して居るではないか。此の國際勞資協調會が、勞働は商品に非ずと『主張』するのは、泥棒の晩餐會が所有權の神聖を『主張』する以上の滑稽である。

四

勞働代表者は今日の所では、まだ中々極まりそうもない。日本政府は、或は勞働代表者を送ることが、出來ぬかも知れぬ。國際資本會議に代表者を出し得ないことは、日本の勞働階級に取つては必ずしも悲む可き事ではない。若し悲むべき事だとしても、それは政府や資本家階級に取つて悲む可き事である程に、しかく悲む可き事ではない。勞働代表者を付ふことによつ

て、除外例の眞願が資本勞働の『隔意なき諒解』の結果であることを、列國の資本家と勞働階級の前に示さうとする、折角の計畫が目茶々々になつた政府、資本家に取つて悲しむべき事である程に、日本の勞働階級に取つては、しかく悲むべき事ではない。

假りに協議員が正當に選擧され、勞働代表者が正當に選出せられて居たとしても、實際勞働會議に臨んでは、其主張の上に多くの掣肘を受けることは云ふ迄でもない。況んや政府の代表者一人、資本家の代表者一人、勞働者の代表者一人と云へば、如何にも公平に聞えるが、政府は概して資本家階級の利益を代表して居るものである。如何なる民主國の政府でも、少くとも賃銀制度の維持——從つて勞働を必然に商品とする現在の經濟組織の維持——といふ一點では、各國の政府のうちで、資本階級の利益を代表して居らぬものは無いと斷言して差支へない。殊に日本の場合には、當面の問題たる八時間制の實行と夜業廢止の如き問題で、政府と資本家とは全く『隔意なき諒解』に達して居る。して見れば、勞働代表者が正當に選出せられた場合にも、資本家側は勞働會議に二票を有し、勞働者側は一票を有するに過ぎない。ところが政府と資本家とは此の二票に滿足しないで、三票を悉く自家の掌中に收めやうとした。吾々は日本の勞働團體が、何故に資本家二票勞働者一票の代表權に疑問を挿まないで、政府の協議に預かつたかをすらも、既に疑問として居つた。然るに政府と資本家とは、『豫定の筋書』乃至は當意即妙の官僚智慧を絞つて、更に殘りの一票までも卷き揚げようとした。少くとも、卷き揚げようとするかの如くに見えた。流石の堅忍な勞働團體も蹶起した。之が協議員會紛擾の意義である。

勞働代表者公選説が初めて主張せられだした當時、予は寧ろ日本の勞働者は、此の選擧にボイコットするが得策であると主張した。之れ第一には、日本政府の『誠意』の下には、公平なる選擧の、到底不可能なことを信じたからである。そして第二には、假りに政府が現在の勞働團體を基礎として、誠實に其內から勞働代表者を選擧せしめるとしても、現在の勞働團體の實狀から考へて、其結果は却つて各勞働團體の反目暌離を來すの虞れが充分にある。況んや其れらの勞働團體の間には、當初より如何はしき使命を以て急造せられたと傳へられるものすらある。少くとも此種の勞働團體は、此機會に乘じて離間中傷の暗中運動を試みることは明白である。そして其結果は日本の勞働運動の第一歩に、早くも階級的團結の障礙となるべき歴史と行懸りとを造るの虞れがある。日本の勞働團體が、國際資本家

本會議に代表者を送らざるの不利益は一時であるが、各國團體が代表を爭ふた結果は持久的である。

最善に於いても、資本は二票を有し、勞働は一票しか有しない代表制度を承認して、本議の結果に對して、勞働階級が資本家階級と責任を分つことは、不利益であるばかりか、勞働階級の屈辱である。況んや資本家側の二票を向ふに廻はして、日本の勞働階級が其一票を以つて如何に力戰したとても、除外例問題に就いて、勞働者側がワシントンの票決に敗れることは明々白々である。ただ日本の勞働者が勞働會議に臨むの意義は、必ずしも勝つ爲めではなくて、日本の政府と資本家とに對して抗議することでなければならぬ。成敗は初めから打算の外にある。けれども單に抗議する爲めならば、日本の勞働代表者が『隔意なき諒解』の下に資本家の代表者と同船して米國に渡ることによりも、選擧ボイコットすることは、一層有力なる抗議である。

予は斯くの如き實際上の根據から、選擧不參加を主張した。

五

協議會の結果は、大なる迂回をして、事實上これと同一の結論に日本の勞働者を到達せしめたものである。尤も此の廻り道は、決して無益ではなかった。何故ならば、之によつて政府や資本家の謂はゆる『隔意なき諒解』の眞性質が、最も明からさまに、日本の勞働階級の前に暴露せられたからである。

斯くて日本の勞働階級は、勞働代表者の選擧をボイコットした。そして其結果は豫想の如く、勞働階級の階級的自覺と、階級的團體との促進であつた。國際勞働會議に對して日本の勞働者の取る可き、殘されたる途は唯だ一つである。それは世界の舞臺に、勞働代表者の資格を爭ふことである。山本農相は「政府としては、日本に勞働團體が無いと云ふ理由の下に、獨斷で一人を選出する事さへ出來るし、又國際會議の性質は之を許るしたのであつた」と云ひ、『友愛會其の他が華族會館で妨害したら、政府は彼等は棄權した者だと云つて了ふ』と云ひ、『尚ほ政府は勞働委員を出さぬ事も出來るのだ』と威嚇せられて居る。(以上九月十六日東京日々)。政府は明らかに、勞働階級に對して宣戰を布告したものではないか。

此の形勢の下に、豫定の筋書、乃至は即席の妙智として、代表者の候補者に選ばれた本多、高野の二博士が、揃ひも揃ろつて二日間づゝも『熟考』せられたのは、到底、常識を以ては判斷することの出來ない現象である、考へる餘地の無いことを、二日間も考へ拔くところに、學者の非常識があるとも謂ふことができる。

今朝の新聞では、二博士も愈辭退らしいが、桝本氏の態度に

て、除外例の表顯が資本勞働の『隔意なき諒解』の結果であることを、列國の資本家と勞働階級の前に示さうとする、折角の計畫が目茶々々になつた政府、資本家に取つて悲しむべき事である程に、日本の勞働階級に取つては、しかく悲むべき事ではない。

假りに協議員が正當に選擧され、勞働代表者が正當に選出せられて居たとしても、實際勞働會議に臨んでは、其主張の上に多くの掣肘を受けることは云ふ迄でもない。況んや政府の代表者一人、資本家の代表者一人、勞働者の代表者一人と云へば、如何にも公平に聞えるが、政府は概して資本家階級の利益を代表して居るものである。如何なる民主國の政府でも、少くとも賃銀制度の維持——從つて勞働を必然に商品とする現在の經濟組織の維持——といふ一點では、各國の政府のうちで、資本階級の利益を代表して居らぬものは無いと斷言して差支へない。殊に日本の場合には、當面の問題たる八時間制の實行と夜業廢止の如き問題で、政府と資本家とは全く『隔意なき諒解』に達して居る。して見れば、勞働代表者が正當に選出せられた場合にも、資本家側は勞働會議に二票を有し、勞働者側は一票を有するに過ぎない。ところが政府と資本家とは此の二票に滿足しないで、三票を悉く自家の掌中に收めやうとした。吾々は日本の勞働團體が、何故に資本家二票勞働者一票の代表權に疑問を挿まないで、政府の協議に預かつたかをすらも、既に疑問として居つた。然るに政府と資本家とは、『豫定の筋書』、乃至は當意卽妙の官僚智慧を絞つて、更に殘りの一票までも卷き揚げようとした。少くとも、卷き揚げようとするかの如くに見えた。流石の堅忍な勞働團體も蹶起した。之が協議員會紛擾の意義である。

勞働代表者公選說が初めて主張せられだした當時、予は寧ろ日本の勞働者は、此の選擧にボイコットするが得策であると主張した。之れ第一には、日本政府の『誠意』の下には、公平なる選擧の、到底不可能なことを信じたからである。そして第二には、假りに政府が現在の勞働團體を基礎として、誠實に其內から勞働代表者を選擧せしめるとしても、現在の勞働團體の實狀から考へて、其結果は却つて各勞働團體の反目睽離を來すの虞れが充分にある。況んや其れらの勞働團體の間には、當初より如何はしき使命を以て急造せられたと傳へられるものすらある。少くとも此種の勞働團體は、此機會に乘じて離間中傷の暗中運動を試みることは明白である。そして其結果は日本の勞働運動の第一步に、早くも階級的團結の障礙となるべき歷史と行懸りとを造るの虞れがある。日本の勞働團體が、國際資本家

本會議に代表者を送ちざるの不利益は一時であるが、各國團體が代表を爭ふた結果は持久的である。

最善に於いても、資本は二票を有し、勞働は一票しか有しない代表制度を承認して、本議の結果に對して、勞働階級が資本家階級と責任を分つことは、不利益であるばかりか、勞働階級の屈辱である。況んや資本家側の二票を向ふに廻はして、日本の勞働階級が其一票を以つて如何に力戰したとても、除外例問題に就いて、勞働者側がワシントンの票決に敗れることは明々白々である。ただ日本の勞働者が勞働會議に臨むの意義は、必ずしも勝つ爲めではなくて、日本の政府と資本家とに對して抗議することでなければならぬ。成敗は初めから打算の外にある。けれども單に抗議する爲めならば、日本の勞働代表者が『隔意なき諒解』の下に資本家の代表者と同船して米國に渡ることによりも、選擧ボイコツトすることは、一層有力なる抗議である。

予は斯くの如き實際上の根據から、選擧不參加を主張した。

五

協議會の結果は、大なる迂回をして、事實上これと同一の結論に日本の勞働者を到達せしめたものである。尤も此の廻り道は、決して無益ではなかつた。何故ならば、之によつて政府や資本家の謂はゆる『隔意なき諒解』の眞性質が、最も明からさまに、日本の勞働階級の前に暴露せられたからである。

斯くて日本の勞働階級は、勞働代表者の選擧をボイコツトした。そして其結果は豫想の如く、勞働階級の階級的自覺と、階級的團體との促進であつた。國際勞働會議に對して日本の勞働者の取る可き、殘されたる途は唯だ一つである。それは世界の舞臺に、勞働代表者の資格を爭ふことである。山本農相は『政府としては、日本に勞働團體が無いと云ふ理由の下に、獨斷で一人を選出する事さへ出來るし、又國際會議の性質は之を許したのであつた』と云ひ、『友愛會其の他が華盛頓で妨害したら、政府は彼等は棄權した者だと云つて仕ふ』と云ひ、『尚ほ政府は勞働委員を出さぬ事も出來るのだ』と威嚇せられて居る、（以上九月十六日東京日々）。政府は明らかに、勞働階級に對して宣戰を布告したものではないか。

此の形勢の下に、豫定の筋書、乃至は即席の妙智として、代表者の候補者に選ばれた本多、高野の二博士が、揃ひも揃つて二日間づゝも『熟考』せられたのは、到底、常識を以ては判斷することの出來ない現象である、考へる餘地の無いことを、二日間も考へ抜くところに、學者の非常識があるとも謂ふことができる。

今朝の新聞では、二博士も愈辭退らしいが、桝本氏の詮衡に

至つては、更に忖度の限りでない。初めの意氣込みと『自信』とは二つ返事で受けなければならぬ所だが、斯う迄で反對の火の手が揚つても、尚ほ『飽く迄で勞働者の爲めに盡される』自信がある、かは疑問であるが、官選候補者にでもならうといふ優等人種のことは、到底、種族を異にする吾々の淺慮をもつては計られぬ。

要するに本多博士にせよ、高野博士にせよ、乃至は桝本學士にせよ、日本の政府資本家と隔意なき諒解の下に、國際資本の勞働會議に代表の使命を完ふすべき、極めて適任の人物であらうと思ふ。(九月廿三日)

▽勞資兩者無自覺

前田蓮山

一

國際勞働會議に列席せしむべき勞働代表を選定するために、政府は全國の三百人(?)以上の職工を使用する工場及び數個の勞働者團體から協議員を選出せしめて協議會を開いた所が、協議員中の鈴木文治君から、海員を除外したのは不都合である。又た協議員中には資本家の傀儡と見らるべき者があるから、先づ協議員の資格を審査しなければ協議を始むることは出來ぬと云ふ異議が起つた。

一應理由ある異議である。如何にも鈴木君の言ふ通り、工場主等が干渉して好い加減に協議員を選定したと云ふこともあらう。併し之れは勞働組合法の制定なき我國として免れ得ざる結果で、政府に對して干渉呼はりをするのは酷である。國際勞働會議に於ける勞働團體とは國家が公に認めたる團體即ち勞働組合法と云ふ法律に據る團體を意味するので、今日我國に存在する友愛會とか信友會とか何々會とかの如き自稱勞働團體を指すのではない。故に我國にはまだ勞働團體はないのであるから、政府が今回執りたる處置は、誰れがやつても先づ其れ位の所で、止むを得ざる臨機の方法として是認するより外はなからうと思ふ。

言ふまでもなく法律は議會の協贊を經なければ成立しないのであるから、今から法律を作らうとしても、第一回會議の間には合はぬ。鈴木君は全國勞働者の總投票に依りて代表者を選定せよと要求して居るけれども、勞働者各個は何人が代表として適任であるかと云ふ判斷をなし得ると思ふか。各候補者が印刷物や演說で其の抱負を勞働者の間に宣傳する方法を採つた所

で、今日多數の勞働者には到底聰明な判斷を為し得る能力はあるまい。何故なれば我國勞働界に取りては餘り事件が突發的で、彼等の多數は今日まで、代表選定と云ふが如き問題に對して考慮したことがないからである。決して勞働者を無智、馬鹿し云ふのではない。問題に對する研究がない、少くとも足らぬと云ふのである。故に勞働團體なき日本では、各工場より然るべき協議員を選出せしめ、此の協議員をして審議せしむるのが、最も聰明な判斷を為す道であらうと信ずる。

鈴木君は此の協議員選出の方法が正當に行はれて居ないと苦情を述べてゐる。如何にも此の非難は起り得る理由があらう。併し今日の如く團體的訓練なく、問題の研究なき勞働者にありては、假令投票で協議員を選ぶとしても、自然工場主や職工長等の指導の下に行はるべく。結果は彼等の指定と同じだらうと思はれる。鈴木君は其の主張通り總投票が行はるゝとしても、必ず選擧後には——若し自身が當選しなかつたなら——政府の干渉、資本家の干渉を叫ぶであらう。

鈴木君は勞働代表は勞働團體から選ばねばならぬと絶叫して、一寸聞けば友愛會とか信友會とか云ふ自稱勞働團體から選出しなければならぬと云ふやうに解せらるるが、眞逆鈴木君の主張は然う云ふ意味ではなかつたのであらう。吾輩は寧ろ鈴木君等の如き自稱勞働團體から協議員が出たのを不思議とする。協議員は原則として全國の三百人以上の職工を有する工場から選出されたのに——之れは合理的である——鈴木君の團體は其の工場の職工を會員として成立して居るのである。即ち鈴木君の團體は二重に協議員を出したのである。吾輩は政府を攻擊するならば寧ろ之れを攻擊せんとする者である。又た代表は肉體勞働者(手足勞働者)から選出すべしと云ふ叫びもあつたが、吾輩は彼等に對し手足勞働者中に適任者を見出し得る程度にまで向上せよと勸告したい。而かも米國まで押しかけて行つて、故障を言はうとするなどは、支那人にも劣つた精神だ。海員を除外した理由は政府の說明する所で明白だ。即ち巴里講和會議では、海員に關する議論も出たには出たけれども、結局英國案に依りて、陸上の工業(インダストリアル)勞働者に對する一般的原則を定むるを以て原則とし、商業、農業、及び海上勞働者は一時除外することになつたのである。之れは去る八月倫敦に開かれたる國際勞働準備委員會に於ても、右工業勞働と云ふ範圍を列擧的に定めたのであるから、議論の餘地はない。尤も之れは第一回會議のことであつて、第二回からは商業勞働者も農業勞働者も海上勞働者も入れるか、或は別個に會議を開くことになるか、其れは別問題である。

二

併し吾輩は無條件に政府の態度を是認するものではない。勞働組合法が制定されてないから止むを得ないとして、遺憾ながら一時認容して置く次第である。政府は勞働組合法の制定に躊躇して居るやうであるが、之は是非共來議會に提出しなければならぬ。多くの人は治安警察法第十七條を非常に邪魔者に考へ、之が廢止を要求して居るけれども、之れは完全な勞働組合法さへ制定さるれば、强ち邪魔になるものではない。寧ろ保存の必要があるかも知れぬ。該案は左の通りである。

治安警察法第十七條　左ノ各項ノ目的ヲ以テ他人ニ對シテ暴行、脅迫シ若クハ公然誹毀シ又ハ第二項ノ目的ヲ以テ他人ヲ誘惑若ハ煽動スルコトヲ得ズ

一、勞務ノ條件又ハ報酬ニ關シ協同ノ行動ヲ爲スベキ團結ニ加入セシメ又ハ其ノ加入ヲ妨グルコト

一、同盟解雇若ハ同盟罷業ヲ遂行スルガ爲メ使用者ヲシテ勞務者ヲ解雇セシメ若ハ勞務者從事スルノ申込ヲ拒絶セシメ又ハ勞務者ヲシテ勞務ヲ停廢セシメ若ハ勞務者トシテ雇傭スルノ申込ヲ拒絶セシムルコト

三、勞務ノ條件又ハ報酬ニ關シ相手方ノ承諾ヲ强ユルコト

耕作ノ目的ニ出ヅル土地賃貸借ノ條件ニ關シ承諾ヲ强ルガ爲メ相手方ニ對シ暴行脅迫シ若ハ公然誹毀スルコトヲ得ズ

英國に於ても勞働者脅迫の時代、即ち千七百九十九年に、之れと似たる法律制定せられ、二十人以上の勞働者が團結して、賃銀の値上又は勞働條件の改善を目的とする組合を組織することを嚴禁したのであるが、個人自由の思想が發達してから之を廢止した。

併し我が治安警察法第十七條は――官憲の手心に依つては勞働者脅迫ともならうが――强ち勞働者脅迫のために設けられたものでないことは、本文を讀めば判然するだらう。勞働組合法がない時代には勞働者脅迫の爲めに適用せらるることが多いだらうけれども、完全な勞働組合が制定せらるれば、此の治安警察法のあるのが適當ではあるまいか。即ち今日の社會主義若くは社會改善思想の傾向は、個人自由の極端に陷つた反動として、自由競爭、自由契約を制限しやうとするのである。――之れは聊か言ひ過ぎかも知れんが、少くとも自由思想の反動が主なる動機であらうと思はれる。玆に之れを評論する時間も頁も持たないが、治安警察法第十七條を正當に解するならば、却つて進んだ意味を發見せらるるだらうと思ふ。

兎も角、勞働組合法の制定は焦眉の急務である。政府は何故に勞働組合法の制定を急いで勞資協調會などに力を注ぐか。勞

資協調會も結構である。吾輩は決して之れが成立に反對はしない。唯だ協調の目的の下に勞働組合法の制定を必要とするのである。勞働組合法がなければ完全な協調は出來ないのである。故に勞働組合法も制定し、一方に勞資協調會も設けると云ふなら、吾輩は全然賛成するものであるが、單に協調のみでやつて行かうと云ふ方針ならば不賛成である。否な事實に於てやつて行けるものでないと信ずるのである。

溫情と云ふものは一般人間の道德で、今更言新らしく主張する必要もなく、反對すべき理由もない。唯だ勞働者の人格、權利を認めず、單に慈善、恩惠でやつて行かうとするものを溫情主義と稱するならば、吾輩は溫情主義には反對である。否な事實に於て溫情主義で勞働問題を解決することは出來ないと信ずるのである。所が現在の日本の貴族富豪等にして、進歩したらしく、解かつたらしく、勞働問題を說く連中は、多くは「勞働者の境遇は氣の毒である同情に價すべき階級である」として、賃金を上げてやるとか、慈善病院を設けるとか、彼等に恩惠を施こさうとするのであつて、勞働者に言はせると、自分は乞食ぢやない、働いて居るのだ。此の働きに對する正當の報酬を得る權利を有して居る。自分は貨物ではない、一個の人間だ。人間として生活することを國家に要求する權利があると主張するのである。

尤も今日の勞働者は、未だ恐く自覺したとは言へぬ。前にも述べた通り、其の代表者さへも適當に選出すると云ふ聰明もなければ研究もない。然れども結局其處に到達するものと見なければならぬ。否到達させなければ文化は發達しない、産業は發達しない。國家は現に教育を奬勵して居るではないか。一方には教育を奬勵し、一方には勞働者を貨物として使用しやうと思ふのは矛盾だ。教育を奬勵するのは文化發達のため、産業發達のためで、文化の發達、産業の發達に貢獻しうる人間は、必ず人格的自覺があるのである。

茲に一つ、勞働者も資本家も政治家も、充分に考慮しなければならぬことは、國家のための勞働改善か、勞働者自身の安逸のための勞働改善かの問題である。英國等に於いては、最初勞働者を牛馬の如く使役し、資本家を保護して——産業の保護と言つて居る——世界一の富強國となり、然る後に勞働者の自覺反抗となつたもので、勞働問題は單に勞働者の地位を高め、生活を安樂にすると云ふことにあつた。卽ち貧乏人が粗衣粗食して金を溜め、老後に美衣美食しやうと云ふのである。併し日本は現に貧乏人が粗衣粗食して金を溜めんとしつつある狀態である。英國の貧乏時代には、五歳六歳の幼年勞働者を感心だと言

つて、學者も責めたものである。然るに日本では貧乏人の癖に英國等の金持ちに倣つて、幼年勞働を禁じ、八時間勞働を主張しつゝある。國際勞働會議は、一面から觀察すれば、秀才の書生が夜間ソット勉強して置いて、學友を散歩に誘ひ、滿腹者が空腹者を強いて斷食の申し合せをやるやうな類だ。歐米の勞働者は成るべく少い時間に多額の賃金を取つて樂に暮したいが、東洋の勞働者が多くの時間に少額の賃金で働くならば、國際的經濟競爭に負ける。そこで勞働條件を各國同樣としやうと云ふのだ。

併し吾輩は貧乏時代の英國のやうに、勞働者を虐使しなくとも、競爭に堪へ得る方法があると思ふ。否な勞働者の教育が進んで、人格的自覺が出來るやうになるならば、彼等は自己一個の[illegible]の爲めでなく、國家のために勞働すると云ふ國家的自覺も出るだらうと信ずる。而して勞働時間其の他の改善は、勞働能率を增加するための目的を含んで計畫するを必要とし、單に勞働者が樂になるやうにとするのは、貧乏な日本國民の望むべきことではない。夫れこそ僕は昔の本で、失業の憂目に會ふであらう。若し夫れ國家が資本家の暴利を制限することは論ずるに及ばぬことである。

▽高野博士と友愛會

法學博士 吉野作造

◉高野博士は遂に起つた。第二候補者に擧げられて愈々承諾する間際までの博士を中心としてのいろ〳〵の行きさつは新聞によつて僅かに之を知つただけで、恰度出行つて他行して居つた爲めに、親しく內部の事情を聽くの機會を有たなかつた。恰度博士の承諾を與へた前日東京に歸つて二三の友人より稍々詳細な報告を聽くを得たのである。

◉其時高野博士の態度は、自分には多少自信もあり、抱負もある。國家の爲めに此大任を引き受けてもいゝが、併し自分は豫々勞働組合論者として起つて來たから、日本に於ける代表的組合としての友愛會との間に諒解を見ずして行く事は如何にも心苦しいと云ふのであつた。聞く所によれば博士は此理由に據つて第一候補者たる本多博士にも辭退を嚴しく勸告したといふ事である。而して今や高野博士を起つるにあらずんば殆んど收拾の途が無いと見て、博士の親友は博士を心安く起たしむべく何とかして友愛會との間に疏通の途を圖らんと奔走する者があつた。

◉友愛會が今度の勞働代表の選定について反對の態度を執つて居るのは勞働運動に對して政府に誠意が無いと認めたからである。代表者選定に關する細かしい方法其物についても不平はあつたやうだ。けれども事態を徒らに紛糾せしめさらんが爲めに彼は兎も角之を承認したらしい。之は鈴木會長が九月十五日の協議會に一旦出席した事によつて明白である。只此方法によつていよ／＼協議員を選定すると云ふに方り、中には官憲の惡辣なる壓迫を加へた所もあり、少くとも官憲は本來の趣意に從ひ公平忠實に選擧の行はるゝやう努めなかつたと云ふ怠慢は免れない。之れは勞働運動に對する不誠意の表示であり、否一歩を進めて勞働運動に對する侮蔑とさへ見られ得る。此點に於て友愛會が協議會の參加を拒んだのは當然であり、從つて又此協議會に於て擧げられたる代表者に積極的の贊意を表し能はざるは當然である。

◉然るにも拘らず高野博士と友愛會との間に疏通を計らんとするには先づ政府をして友愛會との間に疏通する所あらしめねばならぬ。併しながら政府としては一友愛會に對して、わるかつたと云つて頭を下げる事も出來まいし、又選擧を遣り直しすると云ふも出來まい。友愛會としては勞働運動に對する官憲の無理解不信實と戰ふと云ふ深い意味のある反對を試みて居るのだから、貸した金を返されたからいゝと云ふ風においそれと態度を改める譯には行かない。畢竟友愛會としては當初の方針で進むより外に途はない。政府と友愛會との間に疏通を計ると云ふが如きは畢竟不可能の事である。若し疏通が出來たとすればそは必ずや友愛會の墮落を意味するものである。

◉高野博士は友愛會の評議員である。若し友愛會の見地のみを重んずるならば博士は當初の說を固守して斷じて辭退すべきであつた。現に博士は友愛會との疏通なしには起ち得ないと明言して居つた。友愛會は固より高野博士其人に何等の異議はない。否、好個の代表者として進んで推薦するに躊躇しないと云つて居つた。けれども之を認むることは即ち不當なる選擧を追認することになり、其結果また勞働運動に對する政府の不信實を默過することになる。之は友愛會の到底讓步し得ざる所である。友愛會が只一友愛會の面目の爲めに何處までも頑張るのだと見るのは誤りであらう。斯くして問題は益々紛糾した。友愛會は斷じて當初の方針を改めないと決意した。然らば高野博士は到底起つことが出來ない譯になる。友愛會の諸君も亦斯く觀て疑はなかつたやうだ。

◉併しながら高野博士を友愛會の評議員としてのみ觀るのは誤りである。博士は一個の國士である。殊に勞働問題については

深き造詣あると共に又深刻なる熱情を有する人である。恐らく博士は今度の國際會議にはどうしても日本の勞働者は發言權を失つてはならないと考へて居られたに相違ない。今度の會議は日本に所謂個々の勞働問題を議するばかりでなく、又實に世界の平和的改造の大業を議するものである。此の高大なる聖業に參加するの機會を我から放擲するは決して世界文運の進歩に貢献する所以ではない。日本をして否日本の勞働者をして世界的に意義あらしむる爲めには是非共此好機會を捉ふべきである。此爲めには自分の面目も、友愛會に對する義理も、友人の思惑も、況して世間の非難攻撃も顧るべきではない。博士には確かに此れ丈けの考のあつた事は多少博士の平常を知る我輩には初めから明かであつた。從つて我輩は友愛會の諸君の推測に反して博士が斷じて起たないと觀るは早計であると斷言した。若し僕が博士の地位にあつたら大局の爲めに萬障を排して起つ、また起つのが國士の本領であると云つた。

◉博士は果して起つた。此最後の決心をするについては流石に情の人として博士は幾多悲痛の思をなしたであらう。けれども博士があらゆる一切の事情を捨てて、敢然として大局の爲めに一身を献げた點に對しては萬腔の尊敬と同情とを表すべきであると思ふ。或は博士を目して、豹變なりといひ、又は政府の勸誘に對抗し切れなかつた薄志弱行の徒なりとし、甚だしきは之を以て豫定の筋書だとするに至つては、人を傷くるも亦甚しいといはなければならない。

◉博士が正當なる方法で選ばれなかつたと云ふ事は博士自らも認める。けれども今日の勞働規約の文面に照して自分は全然其資格がないものとは見て居られまい。假令内實上には干渉や買收が行はれても擧げられた代議士が一國の選良として人も許し又自らも許して居ると同じ意味に於て博士は立派な勞働代表である。若し夫れ姑く選任の順序を問はず博士其人が理想的の勞働代表たるの點に於ては天下何人も之を爭ふものはなからう。

◉是に於て我々には次の問題が起る。勞働代表選任の順序には缺點がある。けれども偶々高野博士と云ふ理想的の代表者が擧げられた。之に對して我々はどう云ふ態度を執るべきか。之と同じ問題は恐らく友愛會にも起つて居るだらう。高野博士が友愛會との諒解を唯一の理由として最後まで政府に衝つぱつた結果、友愛會がどれだけ重きをなしたか分らない。此點について友愛會は恐らく情として多大の感謝を表して居るに違ひない。けれども義に於て選任の順序方法に對しては又大いに爭はねばならぬから積極的に高野博士を後援することは出來ない筈である。世間には友愛會と博士との間に妥協があるなどといふもの

がある けれども其斷じて誤りなるは予の保證し得る所である。少くとも今度の事件に於て友愛會の歩んだ途は理義極めて明白なものであつた。只高野博士に對しては、意見は違つても紳士的禮儀を以て之に對し恐らく好意的傍觀の態度を執るであらう。之が友愛會にとつて唯一の正しい態度である。

◎併しながら我々は高野博士に對しては更に一歩進んだ態度を取りたい。博士が大局の爲めにあらゆる犠牲を拂つた其悲壯なる決心には無限の感謝を拂ふ必要を認めるからである。無論あの場合博士は飽くまで辭退すべきであつたと云ふのも一說ではある。併しながら、自分の說を以て人に迫り、他が異つた決定をしたからと云つて、他を罵るは餘りに狹量である。博士の決定には議論の餘地ありとしても博士の學殖と人格とが、勞働代表として極めて適任である以上博士をして其志を遂げしむるは國士を待つ所以であり、又日本の爲めでもある。

◎博士を後援すると云ふ事はひねつて考へれば政府の仕事を援けたと云ふ事にもなる。併しながら之を以て政府の一切の失態を看過するものといふならば大いなる誤りである。博士を後援するも日本勞働運動の爲めである。此同じ日本勞働の爲めには又大いに政府の失態と戰ひ、又此戰を續くることによつて國民の反省を促す必要がある。高野博士を後援するの熱情に燃ゆる丈けそれ丈け我々は又勞働運動の爲めに奮鬪しなければならない。我々は高野博士を後援したから政府にも強く當れまいなどと云ふ外面的の非難に超越して何處までも内面の要求を唯一の手引として自由潤達の活動をなさなければならない。

◎何れにしても高野博士の奮起を見たのは國家の幸慶此上もない。鎌田氏も或意味に於て其人を得て居る。武藤氏も資本家代表としは最良の人物であらう。併しながら勞働問題の解決者として、又此解決によつて日本と世界との進歩を大いに促進する當事者として我々は獨り高野博士に大いに期待せんとするものである。

◎九月三十日附記　昨夜半、意外にも高野博士は一旦決めた奮起の意思を更に再び飜すの已を得ざる所以を公表された。而して其理由は、友愛會との協定を見なかつた爲めだと云ふ。高野博士と友愛會との關係の、當に如何にあるべきかは、予の前本文說く通りであるが、一方高野博士は、友愛會よりモツト進んだ後援なければ起てないと云ひ、他方友愛會は、好意的傍觀の態度どころか、斷然高野博士を起たしめざるの目的を以て極力反對すると云うて居るので、到底其の間に疏通の途が無かつた。此の双方の態度に、予は甚だ不滿であるけれども、何れも純乎たる誠意に出づる主義の爭なので、局外より如何ともする事が出來ない。理義の問題としては、予輩にも大に異議あるが、其至醇の動機には多大の敬意を表しつゝ、玆に理想的の勞働代表を送る能はざるに至つた事を遺憾とする旨を附記して置く。

日本に生れたる者は福なり漱石全集を自國語にて讀みうべければ也

漱石全集

第二回 豫約募集

1. 吾輩は猫である
2. 短篇小説集
3. 虞美人草 坑夫
4. 三四郎 それから 門
5. 彼岸過迄 行人
6. 心 道草
7. 明暗
8. 文學論 文學評論
9. 小品 評論 雜篇
10. 初期の文章 詩歌 俳句
11. 日記及斷片
12. 書簡集
13. 續書簡集

全十三册

略規

豫約者にのみ頒つものにして豫約外に販賣せず又選擇豫約の求めに應ぜず

体裁 洋裝菊判天金一册平均約八百五十頁表紙布地木版朱色手摺

會費 每月拂一册四圓宛一時拂四十八圓五十錢

刊行 來る十二月より每月一册宛十三ヶ月

申込金 二圓（此申込金は最終分會費に繰入れ）

▼詳細は內容見本及規定書に依られたし▲

◉入會申込 大正八年 十月三十一日限

內容見本及規定 御申越次第進呈

豫約元 東京市神田區南神保町岩波書店內
電話本局 一一四〇・三六八八番
振替口座東京三八一五一番
漱石全集刊行會

申込所
東京神田南神保町 振替東京三八一五一 岩波書店
東京日本橋通四丁目 振替東京一六一一七 春陽堂
東京日本橋通一丁目 振替東京二三八 大倉書店

時論

勞働代表としての高野博士の選定について

法學博士 吉野作造

先月十五日に第一回の會合を見た全國協議員總會の波瀾以來、世上の視聽を聳かした勞働代表の選定も、廿三日高野博士の快諾によつて辛やく足が附いた。政府代表の他の一名の選定が今日の所まだ決まつてゐないやうであるが、兎に角之れで主たる代表者が確定した譯で、來るべき米國の勞働會議に於て我國が如何なる態度を採るかの大勢は已に明かになつたものと見てい〻。而して今日勞働問題の大勢に通ずるもの〻眼から觀れば、今度の會議で如何なる問題が如何樣に議せらる〻かは略ぼ明白であり、且つ原則として日本は獨り強く特殊孤立の地位を主張し得ざるのみならず、又大勢に從ふことが大體に於て日本の結局の發達の爲めに必要であると認めて居るから、此等我黨の士が勞働會議代表者諸君に期待する所も亦今日略ぼ一致して居る。只我々の豫測にして誤らずんば、政府代表と資本家代表とは歸する所如何にして此大勢の侵入を日本に於て阻止し得んかに努むるに過ぎざるべきが故に、眞に日本の全班の利益の爲めに殊に多年虐げられたる弱者の爲めの憚る所なき代辯者としては專ら之を高野博士に期待せざるを得ない。此點に於て高野博士の選定は最も其人を得たものである。それ丈けまた高野博士の選定は他の鎌田、武藤兩氏のそれに比して更に重要の意義がある。

勞働代表として斯くの如き恰適の選定を見たにつけても、返す〴〵も遺憾なのは、博士の選定を見るに至るまでの順序に重大の缺陷があつたことである。尤も我輩は世間一部の人が云ふが如く、今度政府の執つた勞働代表選定の方法は、勞働規約の規定に反し、從つて之を不法の決定として華盛頓會議に爭ひ得べき性質のものとは思はない。勞働規約は明白に代表任命の權を各國の政府に認めて居る。只國內勞働者の多數を代表する勞働團體ある場合には之と協議して代表を選べとある。協議の方

法等については特に何等指　する所は無い。政府の今度採つた方法に精密を缺いたといふ點はあらう。けれども右の規定に對する指摘と認むべき點は少くとも表面上に之を見出し難い。然らばどの點に政府の手落ちを責むべきやといへば、一つには前にも述べた如く方法の精密を缺いた點であり、又一つは已に定めた方法によつて事を進むるに當り忠實を缺いたと云ふ點である。方法の精密を缺いた事は、突嗟の場合深く責むるのが寧ろ酷である。只忠實に事の進行を計らざりしの一事に至つては大いに之を責めなければならない。政府が折角出來る丈け多數の勞働者の希望を參酌して代表者を舉げしめようとの考から兎も角もあれ丈け細かな方法を立案したのだから、各府縣に於て之を實行するに方つても、出來る丈け其趣意の通るやうに親切に監督すべきであつたのに、規則を作つた事によつて一切の責任が免れたといつた風に、後はどうなるかといふ事を全然放擲するゝ云ふ例の官僚式を遺憾なく發揮したから、或は地方長官の指名によつたり或は會社の重役の勝手次第に勞働者と何の係りなきものを臆面もなく代表者として送つたと云ふ失態を見るに至つた。所謂筋肉勞働者でなければ代表者たるの資格が無いとか、協議員たるの資格が無いとかいふの必ずしも取るに足らない事は云ふ迄もないが、兎に角協議員中の大部分が、所謂隔意なき諒解を勞働者より得たるものにあらずして、友愛會其他の勞働團體の反對を叫ぶのは決して不當の事では無い。若し夫れ砲兵工廠の同盟罷業其他最近の勞働運動に對して政府の執つた苛酷辛辣なる對勞働政策が如何に政府に對する勞働者の反感を高めたか、從つて又代表選定に關聯する政府の方針に對しても動もすれば不當の推測を逞うせしめたかは茲に管々しく論ずるまでもあるまい。

代表選定の方法に重大の缺陷があると云ふ事は自ら我々をして適當なる人物の舉げられざるべきの結果を豫想せしめた。友愛會其他の團體の早く已に政府反對の氣勢を舉げたのも畢竟此爲めでは無かつたらうか。然るに事實は意外なる回轉を見て、幸にも高野博士の如き又と得難き適任者の選定を見た。是に於て曩に政府反對の聲を擧げた連中が此決定に對して如何なる態度を取るべきかが問題となる事と察する。此點が又我々局外者に取つても最も興味ある問題である。

此問題に關して我々は天下の勞働者諸君に向つて次の四事を希望したい。

第一は我が帝國全體の利害より見て、今度の勞働會議には是非共然るべき人物を送らなければならぬ事である。第一回の勞働會議に日本の勞働者が全然發言權を放棄するといふ事は實に

國家の一大不利である。此國家的大問題の爲めには勞働團體の面目の如きは勿論、勞働者の階級的利害と雖も一時之を犧牲にするの覺悟がなければならない。兎に角當面の問題に對する諸君の態度を決するの第一の出發點は是非共誰かを米國に送らねばならぬと云ふ事でなければならぬと思ふ。

第二に前項の當然の結論として勞働代表の送否問題については諸君の態度は斷じて破壞的であつてはならぬ事である。何とかして誰かゞ行けるやうにする事は勞働者の國家に對する當然の義務である。代表選定に際しての政府の處置に不都合な點のあつた事は斯くして擧げられたる代表者を絶對に否認するの理由とはならない。定められた方法を忠實に實行しなかつたといふ事は國會議員の選擧にもある。地方長官が其權力を濫用して大干渉を遣ることは今日と雖も決して珍らしくないが、それでも我々はサンヂカリストの如く全然當選の代議士を否認するの態度に出でない。我々はたゞ力を盡して不當の壓迫と戰ひ、多數國民の後援により遠からず政界を廓清し得べきの希望を抱きつゝ奮鬪しつゝあるではないか。勞働者は政府の干渉に厭くまで反抗するはいゝ。已に擧げられたる代表に對しては出來る丈け積極的の態度を採りたい。況んや偶々其人に最良の適任者を得たるに於てをや。

第三には政府の不當の處置に對しては厭くまで反對の態度を採るべきことである。假りに國家的義務の觀念に一歩を讓つて、已に擧げられた勞働代表を後援し且つ彼をして成績を擧げしむる爲めに相當の積極的助力を惜まないと云ふ事に極めても、政府の執つた不當な處置は之れ啻に勞働者に對する侮辱たるのみならず、勞働運動の國家的意義を沒却するものなるが故に、勞働者の名によつて、又實に國家の名によつて大いに爭はなければならない。偶々高野博士の如き適任者を擧げ得たといふても、滿足すべき結果を擧げた事は全く偶然で、普通に期待すべきは不滿足なる結果で無ければならない。之も反對の一つの理由であるが、よしんば滿足な結果を得るにしても勞働運動の本質を擁護する見地から諸君は斷じて不當を不當として爭ふの勇氣を鈍らしてはならない。

第四には勞働者は以上の如き當面の問題に沒頭しながらも又常に勞働者の開發を計り、並に其結束を堅うするといふ根本問題を等閑に附すべからざる事である。當面の問題に熱中するものゝ動もすれば陷る缺點は、根本問題の閑却によつて遂に自ら智識的並に道義的に荒み行くことである。勞働者が動ともすれば政府並に資本家の乘ずる所となるも多くは此爲めだ。よしんば乘ずる所とならないとしても智識的並に道徳的の荒廢は識者の

國情を繋ぎ得ざるのみならず、延いて其最も大事な文化的使命の達成を過るの結果となる。勞働運動に於て最も肝腎な點の此處に伏在するは改めて云ふの必要はなからう。

司法官吏の新傾向

大岡越前守を理想の裁判官と認めた舊幕時代の傳習に囚へられて、明治何年の司法官は、聞く所によれば法の適用に於て相當に世態人情の幾微と國家社會の利害とを念頭に置いたといふ事である。然るに治外法權の撤去に伴つて我國が急速に西洋の法律制度を模倣するの必要に迫られ、大急ぎで多數の青年に西洋の法律を滅茶苦茶に詰め込んだ結果は、明治時代の司法官をして法律の形式的適用の外、何物をも眼中に置かないと云ふ極めて融通の利かない窮屈千萬な沒常識漢たらしめた。明治廿四年時の露國皇太子に對する傷害事件起るや、時の政府は加害者を死刑に處すべきの政策を定めて極力脅迫を加へたに拘らず、時の司法官は法に正條なきものは罰せずとするの形式論に拘泥して之を普通の殺傷事件とするの態度を固執して屈せなかつた。今より考へて時の政府の決定が必ずしも正しくはない。其猛烈なる脅迫に屈しなかつた法官の態度は寧ろ之を美談として傳ふべきであるとは思ふも、他の一面に於て當時の法官が如何に法律の形式的解釋に心酔して居つたかを語るものである。更に例を近きに求めん乎、電氣盜用事件がある。葉煙草一厘盜用事件がある。舊刑法が財物の竊取を罰するも、電氣は之を物と認めざるの故を以て無罪とするの外、致方がないと云ふのが前者で、後者は葉煙草栽培者が政府專賣の結果政府の所有に歸して居るのではあるが、もと／＼自分が造つたものであり、又現に自分が保管して居る所から、其中のたつた一枚を飲んだと云ふのが、價格を一厘と見て政府の財物を盜んだと云ふ罪に問はれたのである。事柄の善惡は予輩の玆に爭はんとする所ではないが、兎に角明治の法官が形式に拘泥するの餘り、社會普通の常識と著しく飛び離れた裁判をして顧みなかつたと云ふ事は之を以て想像する事が出來よう。

法の適用の嚴格にせざるべからざる事、就中情實によつて曲げらるゝ危險に對しては細心の警戒を要する事は云ふ迄もない。併し嚴格にも程度がある。畢竟法律を定めたのも國家社會の利益を計るが爲めに外ならないから、之によつて國家社會の利益が蹂躙せらるゝ事あらば玆に多少反省するの必要がないだらうか。無論社會國家の利益と調和せしむるの必要は法律の改

正によつて目的を達し得る。けれども法律改正はなか〳〵手續が面倒だ。是に於て所謂自由法說などと云ふやうな、法の解釋をもつと自由にして、この同じ目的を達せしめようと云ふ考が起つた。多くの法學者は之を以て法曹界の一進步と認めて居るやうだ。

我國今日の法官は右の點に關してどれ丈け新らしくなつて居るかは予輩未だ十分に之を知らない。けれども今日の裁判官が更にもう一步進めて、啻に法の解釋適用に於て、社會國家の利益を顧慮すると云ふに止らず、風敎の維持、思想の矯正、秩序の確立と云ふが如き經世的見地を有つて國家の進步に貢獻せんとするの態度を示して居ることは最近殊に著しい現象である。明治時代の裁判官が法あつて國家あるを知らざりし態度に比すれば大正今日の裁判官の進步は實に隔世の感ありと云はざるを得ない。

只我輩の甚だ遺憾に堪へないのは彼等が此或意味に於て喜ぶべき新傾向を著しく惡用して居ることである。何故なれば彼等の社會風敎を憂ふるの念は極めて尊重すべきであるけれども、彼等の思想は不幸にして餘りに頑迷固陋にして到底今日の風敎を論ずるの資格が無いからである。此等の事は一々例を引くまでもなく、言論の取締に關する彼等の昨今の態度、勞働運動に對する彼等の昨今の態度を見れば分る。彼等に經世的見識の開けたるは大いに喜ぶべきも、近代思潮に對する何等の諒解なくして此問題に突入するは之こそ實に危險極りない。

役人にはそれ〳〵專門がある。然れども其如何なる種類にも必要なるは經世的眼光である。已に開けた經世的見識は假令之を惡用するものがあつても再び之を昔に還すのは失當であり又不可能でもある。予は此新傾向の法曹界にあらはれたのを見て何處までも之を擁護し促進したいと思ふものであるが、只彼等が殆んど擧つて頑迷固陋の見を抱き、驚くべき、時としてはまた頗る笑ふべき失態を演じて文運の進步を阻礙しつゝあるを見て、一面に於て甚だ憂慮して措かざるものである。斯くして予輩は頑迷固陋の二大源泉として軍閥と共にまた法官階級の反省を促さざるを得ない。

治安警察法適用の問題

治安警察法第十七條は(一)暴行脅迫(二)誹毀(三)誘惑煽動を罰して居る。(一)と(二)とは全然同一ではないが、普通の刑法でも罰して居るから治安警察法所揭の目的の爲めに之を爲して

罪せらるゝは致方が無い。只(三)が普通刑法の放任して顧ざる所なるに拘らず獨り治安警察法が之を罰するが故に世上の問題となる。

何を以て誘惑煽動と認むるか。學者の説にはいろ〳〵寛嚴廣狹の差はあらうが、今日我國裁判所の公權的解釋は所謂宣傳(プロパガンダ)の意に解して居るやうだ。而して單純なる宣傳は今日我々の團體生活に於て必要缺くべからざるものなるは云ふ迄もなく、又如何なる方面に於ても之が犯罪の理由となつてゐない。獨り治安警察法第十七條は其目的が資本家にあつては同盟解雇、勞働者にあつては同盟罷業なる時、誘惑煽動を罪すべきものとして居る。而して實際上資本家に對して本條の適用を見ること絶對に無かるべきが故に、畢竟本條は勞働者が同盟罷業をなすの目的を以てする誘惑煽動を罪せんとするものである。換言すれば誘惑煽動を罪することによつて同盟罷業を禁ぜんとするものである。同盟罷業を禁ずることによつて勞働組合の成立を困難ならしめ、少くとも其發達を不可能ならしめ、以て所謂勞働者の解放運動を沮止せんとするものである。

同盟罷業の不祥事なるは云ふ迄もない。併しながら法の制裁を以て之を禁ずるは、主人の許しがなければどんな事があつても女中が暇を取れないと云ふと同じく、雇主にとつて此上もない好都合ではあるが、斯くては雇人に永久奴隷的地位より浮び上る望みはない。

此點が實に今日治安警察法第十七條の適用に反對するもの丶主たる理由である。反對者は必ずしも勞働者にストライキを慫慂するものではない。ストライキを有效になし得る獨立對等の地位を勞働者に保障せよといふのである。之は果して不當の要求であらうか。

原内閣成立の當初内務當局は民間の要求に答へて、治安警察法第十七條は拔かずの太刀にして置かうと云つた。多くの人も之を信じて疑はなかつた。然るに最近砲兵工廠同盟罷業事件の起るに會して當局者は遂に拔かずの太刀を拔いた。之について責任ある某官吏は云うた。軍需品の如き公益事業にまでストライキをやるやうになつては打棄てゝ置けぬ。而かも之のみを罰して他を放任すると云ふ譯に行かないから遂に本條を適用することになつたと。之も一理がある。軍需品製造の如き公益事業には我々も亦該官人と同じくストライキを絶對に入れたくない。どうすればいゝかは飽くまで十分に研究もしたい。併しながら角を矯めんとして牛を殺すは達識あるものゝ常に愼んで避けざるべからざる所である。斯くして我々の前には次の問題が提供されざるを得ない。曰く國家は公益を理由として如何なる

程度まで勞働者の虐使を默過することを得るか。若し公益を理由としてストライキを否認すべしとせば、其代りに解雇を禁控へ、法律を以て最小限度の生活を保障せなければならぬ、之をやらないで只ストライキが惡いと云はれては勞働者に立つ瀬がない。國家は公益を理由として斯くまで勞働者を虐使し得るものか。又曰く勞働者の解放により國家精力の見えざる伸張と所謂公益を理由とする一時の利益と何れを重しとすべきか。

尤も右の問題は抽象的には決められない。勞働者の智識道德の發達の程度如何によつては、積極方針を可とする事あり又消極方針を執らざるべからざる事もある。此點に於て今日我國の勞働者の狀態が問題の解決に最も重きをなすものであるが、たゞ茲に予輩の斷言し得る點は(一)今日の支配階級の人々は勞働階級の進步の程度を不當に低く見て居る事と(二)勞働階級の開發の爲めにする社會的努力の殆んど缺けて居る事である。予輩は不完全なる今日の狀態の下に於ける勞働者階級の驚くべき速度の進步を見て大體前途の光明を信じて疑はざるものであり、從つて治安警察法第十七條の撤廢は世間の輿論と共に其必要を認むるものである。が姑く此點に關する積極的の議論にまだ多少爭ふべき餘地ありとするも、今日同法の存置を主張するものゝ論據が餘りに資本家本位に偏し、又餘りに不健全な盲目的國家主義に僻して居る事丈けは明白疑を容れない。

戰國的道德感より醒めよ

朝鮮の爆彈事件に關聯して水野總監が色を失つて待合室に逃げ込んだとか、齋藤總督までが内心の恐怖を包み切れず、馬車を自働車に代へて官邸に駈け附けたとか云つて其膽力の据らざることを罵倒するものがある。風說の當否は姑く別問題として事實斯くの如くであつたとすれば、之れ亦修養の足らざる結果にして餘り褒めた事でないに相違ない。併しながら爆彈の見舞を喰つて顏色を變へた事が事々しく問題とする程の弱點であらうか。怎んな場合に遭遇すれば僕自身にも固より泰然自若として動ぜざるの自信が無い。而かも顏色を變へて震ひ上つたとしても僕は別に大した恥辱とも考へない。普通の人間としては當り前の事だからである。

總督總監ともいはるゝ程の人が狼狽したといふ事を僕はさらさら辯護する積りはない。けれども彼等のいはゞ臆病な行動と非難する所の世間が、斯う云ふ場合にビクともしないと云ふや

うな修養を先第に求むるを知つて、更に之よりも大切なるは我々自身其日々々の平凡な生活を比較的完全にやつて行くことであるを等閑に附するものあらば之れ大なる誤りである。爆弾の襲擊にビクともしないでも、平常の行狀がだらしがなくては今日文明國民としての資格が無い。今日の世間が國民の修養を論ずるに方り、此點に於て本末を顚倒するの嫌がないだらうか。

僕曾て田舍の青年會に講演に招がれた事があつた。同じく招ぎに應じて來た某軍人は頻りに勇猛果敢の精神を鼓吹し、剛毅果斷沈勇の德を力說し、豐富なる材料によつて頗る青年の志氣を作興して居つたが、其晩定められた宿屋に歸らず怪しげな料理屋に泊りたがつて幹事を手古摺らして居つた事を覺えて居る。斯う云ふ人は爆弾の襲擊を受けても決して色を失ふまい。而して今日我國は斯くの如き修養を積んだ人の餘りに多きに困んで居るのではないか。

剛毅、果斷、沈勇等の美しき文字によつて表徴さるゝ道德は今日でも我々に有つて欲しいが、主としては戰國殺伐の世に必要な德目である。門を出でゝは七人の敵ありと教へた封建武門の時代に於て斯の修養の第一位を占めて居つた事は當然である。併しながら今日は人間の人間としてのあらゆる能力を自由に發展せしむる事によつて平和と文化とを競ふ世の中である。剛健、沈勇の德を高閣に束ねていゝとはいはないが、それよりも大事なのは繰り返して云ふが平凡な日常生活の出來る丈け完全な遂行である。而して此點に尙一層の努力を傾倒せしめんが爲めの手段として、僕は戰國道德感よりの覺醒を叫ばざるを得ない。

對支政策の低迷

近着の支那新聞に財政部は國庫窮乏の爲め一種の定期證券を發行して一時の急に應ぜんとして居る。證券は五元、一元、の二種であつたけれども、昨今五十錢のものをも造ることにし、目下印刷中であると云ふ報道があつた。小額債券も五十錢と落ちては如何に窮乏の極に苦しんで居るかが思ひ遣らるる。之れ畢竟革命以來の內爭の結果で、只さへ疲弊して居つた中央、地方の財政は無用の軍費の爲めに蹂躙され、産業的並びに文化的の一切の設備は荒廢に歸してより日已に久しく、而かも其軍費すら十分に支拂ひ兼ねて居る。直隷、河南境界の廣平縣に兵變起るとの報道が九月央ばにあつたが、此種の危險は今や到る處に醞釀されて居るに相違ない。支那に於て爲すべき事は數限りなくあるけれども、目下應急の策として何よりも大事な事は財

政の窮乏を救ふことであらう。而して支那の政治家は頻りに內債募集の聲を高めながら、其到底賴むに足らざるを知る所から、內心實は何とかして外國の援助にたよらんとして居る事は云ふ迄もない。

此秋に方つて外國の執る態度に二つの種類があり得る。一つは彼の眞實の要求を明にし、之に十分な援助を與へて其文化開發の目的を達せしむることであつて、二は彼の窮迫に附け込んで高利の金を貸し、彼の弱點に乘じて自家の利益の思はざる伸張を計ることである。如何に援けても支那に開發の見込無しとすれば別問題だが、苟しくも然らざる以上右の態度の何れを取るのが支那の爲めになり、又延いて東洋全體の爲めになるかは根本原則にして一點の疑あるべき道理は無い。我々の執るべき對支政策は固より日本の利益と相反するものたるを許さざるが、日本の利益をのみ主たる根據として切り盛することは斷じて誤りである。

此頃久し振りに支那で永年商賣をして居る友人に會うた。彼は排日運動今尚減退の模樣無く、在支實業家の打擊少からざるを述べて云ふ。我々は最初ボイコットで困るのは寧ろ支那人の側だと高を括つて居つた、けれども彼等はよく困難に堪へて今尚折れて來る見込のないばかりでなく、此頃は世間體を憚つて、我々と交際することをすら避くる傾向がある。此儘に放任しては帝國實業の前途實に憂ふべきものがある。加之此間漁夫の利を收めんとする外國人の活動頗る目覺ましきものあるの外、支那人自身の工業の發達がまた計算の外に置くことが出來ない。之れ豈に由々しき大事ではないか。今の中に何とかせねば取り返しのつかぬことになると。

友人の議論はここまではいい。今の中何とかせねば取り返しのつかぬことになると云ふに於て予輩は全然同感である。只大事な問題はそんならどうすればいいかと云ふ點である。之に對して友人は排日運動の結果我商人の蒙れる損害に對して何等救濟の根本策を定めず、單に形式的抗議を無力なる政府に致すのみとして盛んに政府を攻擊して後二つの對策を提案した。一は事情調査の上小資本家に一時金融の途を開くことである。二は內政干涉とならない範圍に於て我より和平統一を助成し鞏固有力なる中央政府を樹立せしめ、協力して不逞の徒を排除するの積極方針に出づることである。併し予輩の觀る所では前者は明白に一時の姑息的手段に過ぎずして後者は又尙一層明白に對支政策の醜き逆轉である。

或新聞の報道する所によると、九月九日の外交調査會では、

新借款團の計畫に對する我商業除外の要求の結果、恐らく外交界に孤立するを免れないだらうが、一つには之に應ずる爲め、又一つには近時大いに發展して來る米國の資本的帝國主義に對抗する爲め一層深く支那と結ぶ方針を樹てたと云ふ事である。只如何にして支那と結ぶかといへば「公明正大の方針にて南北の實力者と結び、出來る限りの援助を與へて妥協統一を促進せしめやう」と云ふのである。之も前の實業家の對策と餘り大した違ひはない。

我々は實力者を援けて妥協統一を促進せんとする試みに於て已に幾度か苦い經驗を嘗めて居る。袁世凱を援けたのも此趣意に出で、段祺瑞を援けたのも此考から出たのであつた。而かも此試みが總て失敗に歸した所以は之れ實に民意に反し、大勢に背き、就中支那全民の輿論の實相を看得するに誤つたからである。之が間違つたから原内閣は態々對支政策の根本改革を聲明したのではないか。然るに變更後の新政策未だ其緒に就かずして一時排日的反抗に狼狽するの餘り、また元の有力者援助策に復歸するも恰度眼を瞑つて物を探すものが、諸所方々を隈なく渉つて、つひに肝腎の處を掴み損ねたやうなものである。後で取り返しのつかぬ事になつては大變だと云ふなら、何よりも早く爲すべき今日の急務は、支那の民心を掴む事の外に方法が無いではないか。

排日運動に擊退されて日本の實業家が段々地歩を失つてゐる跡へ、外人殊に英米の資本家が遠慮なく其巨手を伸ばしつつあるは前記友人の說を聞くまでもなく事實であらう。他人が手を拔いたあとへ自分が機敏に手を出すといふ事は善惡の批判は別として疑もなく商家の常であり、外國貿易に於ても誰も此事あるを怪むべき理由がない。單に之れ丈けならば英米の資本今や正に支那を壟せんとすなどといふのは少しく血迷ふたるの譏りを免れまい。向ふが商賣が上手だからとて嫉妬を燒くのは局外から觀て見つともない。といつて獨り英米を揚げて我　胞を誡る譯ではないが、予輩は只英米の遣り方は少くとも大體に於て若し彼我地を換へれば我の必ずや爲したであらう所と異ならざるべきを思ひ、玆に退いて此商業競爭に於て何故に英米が成功して日本獨り蹉跌するかを反省するの必要を力說したい。

英米の商業が成功して我國のそれが動もすると蹉跌するの原因に至つてはいろ／＼複雜なものがあるが、中で最も主要なるものは、彼の商業が全然獨立であるに反し、我の商業が常に政府と密接の關係を有することである。政府の推輓に賴み、其直接關係の後援に餘り憑りすぎて居るの結果は、政府の政策並に

之に對する對手國民の感情によつて商賣の景氣が著しく左右される。之が詰り排日運動に苦んで居る根本の原因ではあるまいか。官憲の後援を得ることは一時大いに商家の利便とする所に相違ない。併しながら怠け者が獨案内によつて得た一時の成功が決して永く續かざるのみならず、また實力を競ふ他流試合に通用しない。日本が眞に支那に於て確實の地歩を占めんと欲せば、一時成績の低落するを忍んで、實業家に官憲と云ふ獨案内を捨てさせなければならない。政府と實業家と兩々相待つて東洋に於ける我國の眞實の利益を擧げしむるには、其必要なる第一歩として官憲に對する奴隷的地位より實業家を解放せなければならない。

小題小言六則

◎國民的宣傳機關設置の議

支那や亞米利加に於ける排日的氣勢の滔々として止る所なきに鑑みてにや近頃頻りに國民的宣傳機關の設置を叫ぶものがある。之は實に排日的氣勢の有無如何に拘らず必要なので、今日の場合特に之が設置を急務とするは云ふ迄もない。只問題は、如何なる人を其局に當らしむるかの點である。苟くも日本と名の附くものは何も彼もいいといふ風に、黑いものをも白といひ張るやうな人を遣つては駄目だ。叉いひ張らないまでも愚にも附かないものを、之が日本特有の美風で御座るなどと擔ぎ廻つて、黑白の見分けの附かないものを遣つても駄目だ。更に又黑白の見分けの附く人でも、日本が——日本の一部を代表する一部の官民が——支那や朝鮮に於てどんな事をして居るかの事實を知らない人を遣つても亦何の役にも立たない。どうせ大金をかけて宣傳機關を設くる位なら、何の爲めに之を設けたかの目的を明かにし、其目的の達成に堪ゆるやうな人を擧げなければならない。宣傳機關設置の最高の目的は彼我國民の融和でなければならない。金で頼まれる辯護士のやうに、ひたすら當方の利益を主張するが如きは、寧ろ此目的に反するものである。然らば其局に當るものは、國際融和の意義を了解し、其實現の希望に燃えて積極的に之を成し遂げ得る確信と能力とを兼ね備ふる人を選らなければならない。それが爲めには政府の政策夫自身の非難を其當局者から發せらるる場合あることをも覺悟せねばならない。之が嫌だからとて一時の胡魔化しを宣傳機關の任務として強いるならば必ず失敗するに決まつて居る。宣傳機關設置の議は甚だ結構だが、之は當面直接の利益を主張する外交機關でないことを忘れてはならない。

◎國際勞働會議に關する新聞報道に警戒せよ

新聞の報道などはアテニなるものでないと云ひながら、新聞報道ほど世間の輿論を作るに與つて力あるものはない。之れ今日最も有力なる宣傳機關として盛んに新聞が利用せられて居る所以である。而して今日一部の官僚軍閥の徒が如何に新聞紙の巧妙なる利用によつて世論を混亂しつゝあるかは公知の事實である。殊に事一度び對外交渉の問題になると、動もすれば昂奮し易き國民性に乘じて些かの誤報が意外の排外思想を激成して、重大の結果を惹き起すことも亦我々の常に嘆ずる所である。最近巴里の講和會議に於ても、いろ〳〵爲めにする所ある報道が如何に諸外國に對する民論の反感を不當に挑發したか分らない。而して此所謂爲めにする所ある誤報は其局に當るもの﹅、失態の責任を掩はんとする所から來る事あるは我々の見逃してならぬ點である。そこで今度の國際勞働會議に於ても一高野博士を除いて、他は皆資本家臭味を帶ぶるものであるから而して會議の大勢は必ずや此等資本家臭味を有する人の主張と相容れざるべきを以て、彼等が大勢に對する自己の不明を掩ひ、其失敗の因念を内國の民論に巧みに説明するの必要上、どう云ふ報道を送つて來るか分らない。ゴムパースがパーンスと内密に結托してあの問題を斯う引つ張つたとか、日本の要求をどう斥けたとか云つたやうな得手勝手の報道がどん〳〵送らるゝに相違ない。若し我々國民が之を以て英米の勞働者が日本國家を蔑ろにしたと云つて怒るならば、之れ大いなる誤りである。之れ啻に事物の不當なる解釋たるのみならず又徒らに他を呪ひ、自らの利益を資本家の蹂躙に委して省ざるものである。無論資本家階級も亦固より忠良なる國民の一人であるから、彼等が彼等の立場から劃策する所、また之が爲めに努力する所を敬意を以て聽くは當然である。けれども從來の例によると兎角く斯う云う方面からいろ〳〵誤つた報道が傳へらるゝを常とするから、我々は今の中から警戒の必要を叫んで置く。更に若し斯う云ふ提案が容れらるゝものなら、例へば各種の勞働團體の如きが聯合して各新聞社の特派員を招待し、親しく所見を吐露して意思の疏通を計つて置くがよからうと思ふ。

◎勞働顧問の資格について

勞働會議の各代表委員が帶同すべき顧問の人選は之れまで新聞にあらはれた所によると、二三經濟學者を含んで居る外、大抵は各方面の實際勞働界の事情に通じて居る人のみである。之も素より必要であるが、併し今度の勞働會議の問題は個々の勞働者に如何なる利益幸福を與ふべきやと云ふ所謂社會政策的事業ばかりでな

く、労働者の社會的地位を如何に認むべきや、今日の狀態を如何にせば尙よりよきに進ましむることを得るかと云ふ社會の根本的改造の事業もある。然らば此等の問題について十分滿足なる解決をなし得んが爲めにはどうしても哲學者の見識を藉らなければなるまい。尤もここに云ふのは哲學を專門として居る人と云ふ意味ではない。世界の大勢を哲學的に理解し、其理解に基いて洗錬されたる人生觀を有し、而かも圓滿なる常識を有する人をいふ。人を以て例とするなら、新渡戸博士の如き最も適任であつたと思ふが、之は已に國際聯盟の方に取られたから致し方がない。探せば外にも在らう。兎に角顧問の人選については餘りにせせこましく局部的に偏してはいけまいと思ふ。巴里講和會議でも此點に於て大いに手落ちがあつた。今度の會議でまた其轍を履むのは餘りに智慧のない話である。

◉公休日の制定と社會教育家の活動

労働運動の流行につれて各工場の休日が多くなつた事の外に各商店などでも新たに公休日を設くるやうになつた。之は誠に結構な事であるが併し之と伴つて所謂社會教育家が起つて之が後始末の爲めに活動する所なければ何にもならない。よく資本家は云ふ、労働者に給料を増して遣ると怠ける癖がつく。さらでも一日十五日の休みの翌日は前日の惰性で兎角缺勤が多いと。之れ皆社會が労働者をして其休日を最も愉快に最も有益に送るの設備を怠つた結果である。設備が無いから折角の休日を却つて惡用する。惡用するからと云て休みをやらない方がいいと云ふ理屈は立たない。寧ろ無設備のまゝに労働者を解放した社會の怠慢を責むべきである。政府に向つて自由廢業の正理を主張するなら、他の一面に廢業者救濟の設備がなければならない。公休日さへ定めて貰へばそれで労働者の向上發展が直ちに計れるものと思ふは大いなる誤りである。向上發展の途には常に多大の献身的努力を要求する。労働者の品性の爲めに、殊に其責任感を鋭敏ならしむる爲めに社會教育家の續々蹶起するものなくんば今日の労働運動は、龍を畫いて睛を點ぜざるものである。此點に於て予輩は更に大いに社會教育家の發奮を促さざるを得ない。と云つて公休日に労働者を何處かへ集めて浪花節や教育講談を聴かせるやうな事を推奬する意味は毛頭無い。

◉資本家の誤譯

労働問題を取扱ふ學者に對し、資本家は動もすれば西洋の學理を其儘直譯しては困ると。併しながら一から十まで西洋の學術を直譯して居るのは寧ろ彼等の經營する工場工業ではないか。而かも労働者取扱の方法に至つては誤譯の甚しいものがある。否、杉山茂丸氏の言ひ草ではないが妄譯の甚しいものがある。天下は久しく此誤譯に氣附かなか

つた。気附いても矢釜しく之を指摘しなかつた。之をいい事にして資本家は自分の懐ろを肥やし得る方法には西洋の學理を忠實に逐字譯し、幾分でも其不利に歸する方面は誤魔化し譯で平然として居つた。恰度カンニングで成功した優等生が官界實業界に幅を利かすやうなものであつた。盲人千人の世の中では之でも通る。併し他流試合となつたらどうか。近く開かるべき國際勞働會議に於て資本家出の優等生がどんな掛引をなさるかが心配で堪らぬ。

◉**普通選擧論について**　今年の春から夏にかけて政論の主題は普通選擧論から勞働問題に一轉した。夏から秋にかけて勞働問題は更に再轉して普通選擧論に其席を讓らんとして居る傾が見える。之は啻に段々政治期節に進んで來た爲めばかりではない。勞働問題の解決も畢竟普通選擧の實施と相伴はねばならぬと云ふ事が分つたからであらう。そこで先輩の政治家中にも犬養氏の如き、安達氏の如き普通選擧論を說き出したものがある。改造同盟の諸君が専ら之を以つて今秋の政界に馳驅せんとして居ることは已に明白であるが、聞く所によれば、憲政會に於ても普通選擧提案の議ありと云ふ。否、政府が進んで之を提案するだらうなどといふものさへある。何れにしても此傾向は誠に喜ぶべきことに相違ない。此秋に方つて政界の一角に次のやうな事を云ふ人がある。「普通選擧は成程大勢かも知れない、然し今春改正したばかりの選擧法を又直ぐ改めると云ふのは餘りに輕卒であつて國政を弄ぶの嫌がある。」と、確か大木遠吉伯は此やうな意見を新聞で發表されたと記憶して居る。成程國政は輕卒に弄ぶべきではない。黨略や何ぞの爲め深く考へずして改變を屢々するは斷じて宜しくない。けれども斷じて不可なりとする故は、其根本の精神にあつて外形にあるのではない。其根本に於て改變すべき理由があるならば何遍改めたつて構ふことはない。兎角確信なきものは外面的なるものに自分の行動を支配せしめて怪しまない。昨日否といつたから今日は然り（イエス）といへぬといふは俗人の常である。併し眞に内面の良心に自分の活動を支配せしむる以上は何も昨日の言質に拘束さるる必要はない。今年の春不徹底の改正を加へたのを輕卒といふなら分る。更に之を徹底的に改善するを餘りに時が早いからと云つて輕卒といふのは俗論である。

思潮

米の根本問題

中澤臨川

米價騰貴に就て世論の喧ましい時代である。政府は之に對して、一方には暴利取締令を制定し、一方には拓植保護の法律を布き、或は外米を輸入し、或は無賃輸送を行ひ（鐵道國有が創始以來初めてたつた一度の效果を現はした）、そのほかいろ〳〵にして其防禦に手を盡してゐるが、仲々效蹟の認むべきものがない。世間では代用食が奬勵せられ、食養の科學的研究が行はれ、財政經濟の道に携はつてゐる人たちは殆んど異口同音に通貨の縮少といふことを説いてゐる。そのどれもが一面の眞理ではあらうが、然しそのどれもがさほどの效果を現はさないところを見ると、根本の病根は確かに外にあるとより思はれない。

代用食といふことは仲々實行困難であらう。元來幼少から米食の爲めに馴らされてゐる日本人の胃の腑に、急に他の物を當てがはうといふのであるから、胃の習慣から直ほしてかゝらねばならないわけだ。大工に急に左官をさせるやうなものだ。習慣といふ奴が仲々頑强な奴で、例へば今日の官僚にデモクラシイの要諦がやす〳〵と呑み込めないやうに、米食に馴された胃の腑は他の代用食をやす〳〵と呑み込めないのである。

食養の科學的研究は、農の改良と並んで、今後非常に必要な學問であると思ふ。學者の説によると今日世界が産する食糧だけでも今の人口の少くとも一百倍以上を養ふに足りるだけの營養素を有してゐるといふことだ。我等の肉體經濟がどれだけ低劣な能率で行はれてゐるかは之でわかる。

通貨の縮少に至つては皮肉である。通貨を縮少すれば商工業に大打擊が來る。それかといつてこの儘で放任すれば、賃金値上の勞働運動でおびやかされる。今日の資本家は痛し痒しのていだ。そこへ持つて來て、資本家と百姓との御機嫌をとるに汲々たる今の政府のことであるから、縣會議員の改選を目前に控へての今日、通貨縮少とは行けない道理だ。學者と雖も、事實今の社會に於て通貨縮少の及ぼす利害を斷然と言明しうる者はなかりさうに考へられる。そこで政府も資本家も學者もこの

問題では三すくみの有様である。我等の思ひ當るのは、今日の社會には何等かの深い缺陷がある爲めに、かうした不自然の結果を來たすのだといふことだ。

今日世間に行はれ又は稱へられてゐるやうな米價調節の百の方法、千の方法を以てしても、米の價格の騰貴は防げないといふのは、如何なる理由によるのであらうか。現實に最有效と看做されてゐる通貨縮少策が、却て政府、資本家、學者を困らせるといふのはなぜだらうか。それはかうだ。今の社會には根本に無理がある。その組織に不自然が生じて來た。資本的社會はマルクスの豫言した如く、それ自らのうちに必然に含まれた理法によつて、今や解體の前兆であるかに見える Unstable の平衡狀態にある。この「不安」がいろ／＼の方面に現はれたものの一つが食糧問題である。

資本主義の目的はより多き利潤である。元來人間の經濟は人類の必需品を造り出すといふのが根本目的であるが、人智の發達につれて勞働、土地及び原料以外に蓄財（資本）を生産要件の一つに組み入れるようになつてから、次第に資本が重要視せられ、從て勞働よりも資本を重く視、需用よりも利潤を生産の目的となす時代に這入つた。今日の産業はいかにして人類の必需品を造るべきかといふことよりも、いかにして同一の資本から多くの利潤を上ぐべきか、いかにして儲かる品物を造るべきかといふことを先にしてゐる。從て經濟の大本から言へば、その機關の驚くべき進步にも拘らず、今日の産業は甚だしく非能率的である。世界の蓄積された富に比例して我等の衣食住の充されないのはその爲めである。

之を食糧問題に就て看よう。食糧の不足は世界共通の問題である。その原因は何處にあるだらうか。人口增加のせいか、農業の技術のその割に進步しないせいか。第一の疑問はマルサスの人口論以來隨分やかましかつたものであるが、今日は事實がそれを打破つてゐるから、我等は之を懸念するに及ばない。然らば、第二の農業の技術に關する疑問はどうであらうか。科學の發達により他の生産機關は十九世紀以來非常な進步をしてゐるのに、農業のみは依然として振はないのであらうか。確かにその傾きはある。世界は儲かる工業にばかり熱中して、パンの問題を稍や輕視し過ぎたといはれよう。その酬ひは覿面に、戰時及戰後の世界をおびやかしてゐるではないか。また諸科學の中でも有機化學の進步は比較的晩かつたので、農業が一の化學工業として學術的に取扱はれるのは、今後の時代に俟たねばならない。然しそれにも拘らず、過ぐる一世紀を通じての農の技術の進步には驚くべきものがある。最近の改良方法によると、

亞米利加の大規模農業に於て一人當りの農夫が得る小麥の收穫は二百五十人分の食糧に當るといふし、北佛蘭西あたりの農夫の用ゐてゐる反復的耕作法では、狹い土地から前掲の亞米利加の農業を賄ふに足りるだけの收穫が上るといふことである。西亞米利加の農夫が一エーカーから十五ブッシエルの穀物を收めるのに對して、北佛蘭西の農夫は同じ地面から四十ブッシエル、多い時は六十ブッシエルもの穀物を獲つてゐる。これだけの事例を見ても、今日の食糧不足が技術の庸劣に原因してゐるのでないことがわかる。

農業の技術は相當以上に進步してゐるのであるが、今までは金の餘り儲からない仕事であつたので、資本家が手を出さなんだ。產業革命以來工業熱に浮かされた社會は、とかく農業を賤む習癖を附けた。近代に入つて資本家氣質に感染した地主は、小作に薄くして儲けた金をば農の改良に使はずに、他の事業に投資した。農業輕侮――これが食糧不足の遠い第一原因である。農業輕侮はやがて農民輕侮となる。それが心理的にどれだけ農業の發達を妨げたかわからない。昔は商工の上に位した農であるが、大正の代では『百姓』といふ詞は一種侮蔑にも聞える。全國の最大多數の人口が之に從事してゐる農業を司る農商務省に商工の名を冠した局はあつても、農の名を冠した局一つない。之が人間の最必需品たる食物を得る勞働を待遇す正當の態度であらうか。剩さへ、遊食の徒に近い一部の都人士間には、米の高いのは百姓が贅澤になつて、「米を食ふやうになつたからだ」といつてゐる者さへある。更に、所謂知識階級を以て自任しつゝある「白い手」の誇りの徒輩を見るに、その生れは大概百姓の子でありながら、農業には殆んど趣味を有してゐない有樣である。かうした反感、ディスカレッヂメントが何れだけ農の發達に禍してゐるかは想像に難くない。

農業衰頽の第二原因は、壯丁の多くが徵兵されることと、工業の隆盛につれて農民の多數が都市に吸收せられ、從て田園の人口が年々荒廢することである。わたくしは屯田兵の組織は深い意味を有してゐると思ふ。それが最近の兵術に不便とあれば、兵役年限二年のものを四年としても差支ないから、一ケ年中農繁の半ケ年を歸田させ、半ケ年を調練に用ひてもいゝではないか。農民が工業に吸ひとられるといふことは、今の經濟制度が改まらない限りは續くであらう。日本が中途半端な工業國是を捨てない限りは已まぬであらう。農商務省の調査に依れば、今次の時局以來でも農から工に轉じた勞働者の數は十五萬に上るといふではないか。米價騰貴以來折角浮びかけた農業は、不自然な方法で米の値がまた下げられゝば、再び衰頽に向ひ、我等

の食ふ米は益々減少するといふものだ。原首相は旨い事を言つた、「米の問題は値の問題でなくて量の問題だ」と。實際さうだ。一時を彌縫する爲めに米の値を下げるといふことは、一層米の産出を減らすといふことで、愚策たるに相違ない。

米價騰貴の第三原因は、これも資本慾、工業熱の罪である。今日の産業が利潤一點張りであるところから、その生産は主として贅澤品に向ふ。なぜなら贅澤品を買へるほどの者は金のある輩らで、從てかやうな品物には儲けも多かるべき筈であるから。そこで薄利の米作よりも値の高い生糸を作るといふことになる。肥えた田畑は一年々々に桑園と變じて行く。田の草取りよりは自然と蠶業に身が這入る。かうしてつぶされた耕地の面積は莫大なものである。

どの道、米價騰貴の根本原因は煎じつめて行くと資本主義の罪といふところに落ちつく。誰がこの見易い道理を否定できるか。それは人口の増える罪でもない。農業技術の振はない罪でもない。科學者の無能の致すところでもない、農民の遊惰に流れた結果でもない。みんな、一切が萬事が資本主義の罪だ。或る紡績業のオーソリチイは、紡績業の暴利といふことを言ひわけして、斯業は明治廿年來薄い利潤で通して來たのであるから、平均すればその資本家は暴利をえてゐるのでないと言つてゐるが、この論法で言へば、神代以來並みひと通りでない苦役を重ねて來た農民が二三年この方米を高く賣つたとて、さう咎むべきではなからうでないか。紡績業が資本に對して年拾幾割かの儲けをしていいならば、三拾圓餘の實費のかゝる一石の米を四拾幾圓に賣るといふことに不思議はない。今の爲政者や資本家の得手勝手な獨斷論ぐらひ滑稽で、馬鹿々々しいものはない。

英國あたりでも、食糧不足から急に氣が附いて、今迄の工業過重、農業輕視の政策の非を悟り出した。食糧問題は人間生活の根本問題であるだけ、社會の諸般に結果するところはかなり大きいだらう。農業は工業と違つて、集中的でなく分散的である、都市的でなく田園的である。工業を産業の中心に置くと農業を産業の中心に置くとでは、おのづから社會組織も變つて來る。今後の社會改造論はこの點をも考へに入れる必要があらう。

遊惰民のミレンニウム

今日の勞働者が夢みつゝある社會主義的黄金世界(ミレンニウム)がわたくしの想像にあり〳〵と浮ぶ。

あらゆる生産機關を掌握しえた後の彼等は、今日有福な人々の獲得してゐる如き凡ての慰安や快樂を得ることが能きると考

へてゐる。極く尠な數時間の勞働を了へさへすれば、それで彼等の義務は終るので、殘りの一日は全く彼等の「自由」に費すことが能きる。誰も彼等を制裁する者がない。彼等は電燈と瓦斯と水道との好き勝手に使へる、立派な部屋の幾つかを持つた家に住ひ、食べたい物を食べ、飲みたい物を飲み、家内にも小供にも贅澤の有りたけをさせる家庭を想像する。女中の二三人は置いてもいゝ位に思ふ。米は今のやうに「百姓」といふ種屬が汗水滴らして作つてくれ、溝浚ひは「人夫」がする。その黄金世界には矢張今の社會のやうに——否やそれよりもずつと完備した三越と白木屋があり、毎日曜日には互に着飾つた彼等の同僚たちが妻子を伴れて買物に出懸ける。カフエー・ライオンは街の辻々に巍峨と聳へて馥郁たる飲料の香ひを漾えてゐる。芝居と活動とはいつでも彼等の爲めに開かれてゐる。到るところに媚を賣る女がゐる…………………

やめよ汝の妄想を！

少なからぬ心配と恐怖と、恐わい物見たさの好奇心とを以て勞働者のミレンニウムを想像しつゝある知識階級は、先づ自分たちも一種の勞働者であると考へる。腦の勞働が手の勞働よりずつと高貴であり、ずつと世の中の爲めに必要だと考へる。であるから、未來の社會に於ても彼等だけは今と同じ職業を許され、賢明なる勞働者諸君から眞實の尊敬をうけ、今日の資本家の下にあるやうな壓迫から免れるだらうと想像する。恩給と年金とは當然增すものゝやうに獨りぎめする。まかり間違つてもまさか土掘りはさせられまい、火夫のお鉢は廻つてこまいなどと考へる。だが子孫の事が氣に懸かる。結局は今の狀態がまだ當分は續くだらうと安心する。

已めよ汝の妄想を！

我等は先づ勞働のいかなるものであるかを自覺せねばならぬ。それに伴ふ不健全な苦痛は除かれるにしても、勞働は矢張勞働である。勞働とは筋肉の貯へたるエネルギーの消費である。それには必然に努力と疲勞と汗とが伴ふ。勞働はミレーの畫にみる如く earnest である。勞働の本義はそれの受くる報酬ではなくして、それ自らである。labour as ends である。勞働は自由でなくてはならないと同時に重大な責務である。

ボンダレフ主義

トルストイの『現代の奴隷制度』が百島操氏によつて譯されて世の中へ出た。わたくしはこの時宜をえた努力に對して譯者に感謝する。私の時宜をえたといふのは、勞働問題の喧ましい今

日、この書が際物として成功したといふ意味ではない。百のマルクスものが出たからとて、それが實際に誠實なものでないならば、却て讀者を迷はすだけの事である。トルストイも日本の文壇ではもうそろ〳〵時代後れの感がある。然し何といつてもこの天才の筆には捨てがたいところがある。こゝに譯された書物などは彼の著作中でも至て拙作の部類に屬すべきもので、歸するところは無政府的虛無主義を出でないのであり、我等は時としてブランデスと與に彼の科學的推理力の有無を疑ふ場合さへあるが、隨所に輝く誠實と深い洞察力とは貴い寶玉から出る光のやうに我等を射るのである。

然し私のこゝに紹介しようとするのは彼自らの說ではなくて彼が『勞働と怠惰』なる一文に於て推奬してゐるところのボンダレフの說である。

今日の我等は勞働を除りに方便視してゐる。最も善き社會改造論でさへが、勞働の苦痛を除去するに就てのあらゆる方法を講じてゐるが、勞働それ自らが自足した人生の一目的であり、人間の性の基に根ざす要求であることを說いてゐる者はない。人は無智である方がより幸福に見へ、考へることは億劫なことのやうであるにも拘らず、矢張知識を求めるのが人間の本性である。之と同じく、我等は怠惰を愛し、苦痛なしに欲望を充さうとするにも拘らず、矢張り汗水たらして勞働するところに眞の滿足がある。然るに今日の改造論者は勞働の消極的方面ばかりを重く見て、その積極的本義を忘れてゐる傾がある。ボンダレフ主義は之に對するよき反省劑である。

ボンダレフはいふ、世間には多くの義務があるが、その義務には最初のものと最後のものとがある。然るに我等は犂をとる前に耙を取つてはならないやうに、最初のものを滿さないうちに最後の物を充たしてはならないことを忘れてゐる。

然らば我等の最初の義務――凡ての法則の長子――は何であるかといふに、ボンダレフによれば、それは聖書の眞先きに宣べられてゐるところの「汝は汝の面に汗して食物を食へ」といふ義務である。生きる爲めには人は働かねばならぬといふことは、我等が世間のいざこざから離れて正直に考へるときに、誰でも必ず認容しなければならない、避くることの能きない、主要の、第一の、惠みある法則である。

この法則は極めて單純明白で、疑ふ餘地のないものであるにも拘らず、今日の人々は實際はこの法則を認容しないばかりか、却て之を避けるやうな努力に追はれてゐる。彼等は逆の方向へ車を押してゐる。であるから、車の方向から直ほしてかゝらぬ限りは、百の改造策も無駄である。それは桶に底を嵌めないで、

何か巧みな方法で水をこぼれないやうにしようとする工夫と變りはない。實際、今の人間は餘り多くの義務や法則を作り過ぎた。その爲めに彼等は第一の義務を忘れて末の義務にばかりこだはつてゐるのである。

生きる爲めには人は働かねばならぬ。

「汝は汝の面に汗して食物を食へ。」これほど明確な眞理があるだらうか。百の僞科學も之を破ることが能きないほどボンダレフ主義は眞理である。

何人にも理解でき、何人も拒むことの能きないこの單純な義務を人間の心に復活し、この法則を各人が一の宗教的戒律として守るといふとは決してむづかしい事ではない。例へば基督教會で洗禮式や斷食日が行はれるやうに、回々教徒が一日九回の祈禱を行ふやうに、パンの爲めの我等の勞働を宗教的義務として萬人が實行するといふことは不可能のことであらうか。一般の教會にさへ一年に約八十の聖日がある。その聖日の代りに「パンの勞働」を以てするといふのは、いかにも愉快で有意味のことではなからうか。ボンダレフの計算によると、我等の勞働の理由は一ケ年に僅か四十日で事足りるといふ。(この計算は今の科學から見て決して妥當を缺いてゐない)。

何人も即時に行ひうるほどに何等の巧妙さも持たない此の單純な方法が齎す結果はどうであらうか。第一に、若し人類がこの根本義務を認容し、各自が喜び勇んで、一ケ年の僅かの聖日をパンの勞働に從事するやうになれば、凡ての人類は一つの神聖な目的(ボンダレフはそれを神と稱んでゐる)及び相互の愛に於て結合され、社會のさまざまな不調和はその爲めに除かれる。第二に、この義務の遂行は二つの相爭ふ階級に別れようとしてゐる人類の恐ろしい傾向を打破することが能きる。第三に、パンの勞働は凡ての者を平等にし、奢侈と肉慾との頭を刎み切つて了ふ。第四に、人はこの勞働によつて、自然的な生活から離れてゐた爲めに失つてゐた理性を回復し、幸福と滿足とを與へられる。第五に、飢餓、缺乏、過勞等から起るところの人類の過半の罪、及び浪費、怠惰等から生るるところの諸ろの惡は、お互がパンの勞働に感謝しつゝ從事することにより自然に消滅する。

ボンダレフ主義は私たちに深い根本的疑問を與へてくれる。多くの飢えたる隣人を眼の前に見ながら、私たちが爲す凡ての仕事――眞理の探究、藝術、政治――は、よしんばそれが善いことであらうと、いつもそれには底知れぬ不安が伴つてゐる。その不安は我等が善しと信じてなしつゝある事も必ずしも最も善い事でないといふことを證るものではないか。それは我等の忘

れてゐる事でもつと重要な義務があるのだといふことを知らせるものではないか。ボンダレフはそこへ我等を眼さめしめる。第一の義務としてのパンの勞働に我等が感謝して就きえたときに（想像するだけでも心から愉快だが）、我等は初めて固い大地を踏み、永い放浪の旅から自由の故郷へ歸つた思ひをするだらう。そこにはもう私たちを厭氣味惡く苛める不安はないだらう。「汝は汝の面に汗して食物を食ひ終に土に歸らん」――この惠み深い詞の中に勞働の眞の意義がある。

河上博士に答ふ

「社會問題研究」九月號で、河上肇博士は私のマルクス唯物史觀評を論難されてゐる。わたくしはそれに對して成るべく簡單に答へたいと思ふ。

河上氏の論難の主旨はかうである。（一）お前はマルクスの唯物史觀の成立を疑つてゐるが、「實用ある社會觀察」からいへば、彼の「必然論」は動かすべからざる事實ではないか。（二）假りにマルクスの唯物史觀が成立するとすれば、お前は「その機械的世界に於ては凡てが生産の方式から制約されるので、人間の意志はこの間に立つて全然無力である。人類は理想に從て目的論的に努力する必要もなければ、その餘地もない。そこは無爲の天地であり、そして怠け者にふさはしい世界である」と言つてゐるが、人間には、一部の階級の利益の爲めに社會の生産力が人爲的に束縛せらるゝ事を、永く默過し得ざる性質を有すといふ觀察が、其唯物史觀の中心を爲す所の社會組識進化論の根柢に横はつて居るので……　……其多數の人々は必然的に不平を鳴らし、必然的に社會組織の改造に熱中するに至るものである。マルクスは此の如く考へて其必然論を打立てたのである」。で、彼の唯物史觀はお前の言ふやうに人間を怠け者にするどころか、却て彼をして社會の改造に熱中せしめるのだ。（三）「唯物史觀は理想を無視するといふ批評も亦當らぬ」。（四）「私は哲學の門外漢だから能くは分らぬ」が、お前は彼の唯物史觀を哲學となし世界觀となしてゐるが、あれは「一の歴史觀であり、一の社會變動觀である。そが唯物論と稱せらるゝは、社會變動の根本的原因を唯一の物質的原因に歸せんとするが爲めであつて、かの宇宙の本體を物質と觀る所の哲學的唯物論又は唯物的世界觀とは全く別種のものである」と。

これ等の凡ての點に就て、「經濟學の素人」たる私は「哲學の門外漢」たる河上氏（私のは眞實の告白だが、氏のは全く謙遜の詞である）と全然意見を異にしてゐることを不幸に思ふ。と

のうち(一)及び(四)は隨分重大な問題で、學者の間にもいろいろ喧ましい議論が行はれてゐる。然し(二)及び(三)の問題に就ては河上氏の說に少なからぬ誤謬のあることを斷言しても差支なからうと思ふ。

私は便宜の爲めに先づ(四)の問題から初める。河上氏は哲學上の唯物論と唯物史觀とを「全く別種」のものだとしてゐるが、果してかやうな不自然な截り離しかたが能きるものだらうか。氏はそれに就てゴルテルの『唯物史觀解說』を引いて居られる。私の知る範圍では、以太利の碩學クローチェが矢張同じやうな見方をしてゐる。然し哲學上で唯心論の立場にある者が、その社會觀——人間の集つて作つて社會の觀かた——に於て特に「社會變動の根本原因を唯一の物質的原因に歸せんとする」唯物史觀を持しうるといふことは、全く考へ及ばぬことであり、また物心二元論に哲學的立脚地を置く人にしてが、社會的變動だけは「唯一の物質的原因」に依るのだとは言ひえない筈である。果してさうだとすると、彼の所謂「心」は人間社會より外の世界——例へばどつか遠い神の世界——だけに存在する實在(?)となり、矢張人間の住む世界は「物」だけの世界だといふ唯物論に歸して了ふ。

そこで河上氏の說の可能を承認する爲めに僅かに考へうる一つの見方は、こゝに物心二元論を信ずる人があり、その人が便宜の爲めに「物」の力の働く一面からのみ社會の出來事を觀察したとする。その場合は彼の哲學と史觀とは別物、あるといふいふことが能きる。然しかやうな 觀は、當然跛足的であつて、彼自身でさへ安心の能きるものでないだらうし、第一には便宜の爲めとはいへ、「物」のみの働く社會を假想しうる彼は、物心二元論者とは稱するものゝ「物」の方を甚だ重く見るところから、一種の唯物論者だと言はれても辯護の能きない立場に陥るであらうと思ふ。譬へば、俺は公平だぞと言ひ乍ら、その人の爲るところを見ると、甲を疎外して乙にばかり贔負するやうなものだ。

どの道、唯物史觀はその根底に唯物哲學を置かなければ完全には立ち得ないのであつて、この兩者は河上氏のいふ如く「全く別種」ではあり得ない。

私は哲學上の唯物觀と社會上の唯物史觀とが、いかなる場合を假定しても、別種のものでありえないことを說いたのであるが、然らばマルクスの場合はどうかといふに、幸か不幸か彼はかやうな矛盾を冒さないだ「マルクス自身は、歴史の觀察に於て唯物論を採りしと同時に、哲學上に於ても一個の唯物論者であつた」と河上氏の言つてゐるとほり、彼は斷乎たる唯物哲學

の信者であつた。彼は言つた、「物質から思想を離すことは不可能である」と。また言つた、「私の見るところによれば、觀念とは人間の腦に於て變形された物質にほかならぬ」と。マルクスが唯物哲學と唯物史觀とを同時に持つたことに就き、河上氏は「それは偶然にとも言へやうし、或は又、哲學上の唯物論者なりし故に、歷史上の唯物論に想ひ到つたとも言へやう」と述べてゐるが、氏の推奬措く能はざるマルクスともあらうが、哲學的の深い信念の上に立たずして、偶然にも唯物史觀を奉ずるに到つたなどと想像するだけでも大きな冒瀆であらう。神の觀念と神の子の觀念とは偶然にも一致したのだと考へる基督教徒があるだらうか。

（二）の問題に移らう。マルクスは彼の信ずる唯物哲學の立場から、唯物史觀へ往つた。逆に彼の唯物史觀は經濟史の說明に止らずして一般人生の說明にまで進んだ。彼の經濟的必然論は哲學の領域に座を占めた。彼によれば、經濟的生產及交換の方法は、それから必然に來る社會組織を定めるばかりでなく、「政治的及精神的出來事」の一切をも制約するのである。'Die Produktionsweise des materiellen Leb'ens bedingt den socialen, politischen und geistigen Lebensprocess überhaupt.'

玆にある"überhaupt"（一般に）の文字は、どうも曖昧である。マルクスの明白な物質一元論――それから必然に到達する機械的宿命說から見れば、物質的生產方法が凡ての「社會的、政治的及精神的生活を決定する」と見るのは當然の結論で、彼自身の說明を要するまでもないが、その「決定する」を斷然と言ひきらないで、「一般に決定する」と述べてゐるところが何となく煮え切らない。

この煮え切らない矛盾的態度が一生マルクス及エンゲルスの言說に附き纒つてゐた爲めに、屢々世の誤解を招いたのである。エンゲルスは、「我等の唯物史觀によれば、歷史の最終決定因子は實際生活に於ける生產であるといふのである。之より以上はマルクスも私も甞て言つたことがない。若しこの命題を解して經濟的因子が唯一の元素だと解する者があらば、彼はこの命題を無意味な、抽象的な、馬鹿げた文句となすものである」と逃げを打つてゐるが、彼等の唯物觀よりすれば後の說のやうに解するほか道がないではないか。若しエンゲルスの說く如く物質的生產方法と並んで（最終決定的でなく、力弱いにもせよ）精神的因子が在るとすれば、彼等の唯物史觀は根底から崩れなければならない筈である。そこで彼等はいふ、精神的因子も働くには働くが、それは物質的因子と並存するのではなく、前者は後者の分身であるのだと。すると矢張歸するところは、物質的

因子が歴史の唯一の元素だといふことになる。ところにしても歸着するところは同じである。經濟的生産といふ物質的因子が一に一切の社會現象を制約する。そこには自由意志もなく、「物」と獨立した「觀念（イデオロギイ）」もない。從てこの世の中は機械的宿命――必然――の領土である、といふのがマルクスの經濟史觀でもあり、同時に彼の哲學でもある。實際、彼が未來に豫言した「大變革」にしてが、次で起る共産社會にしてが、かやうな必然律を度外して成立つものでないことは言ふまでもない。

そこで私は言つたのだ、「マルクスの機械的世界觀に於ては凡てが生産の方式から制約されるので、人間の意志（觀念）はこの間に立つて全然無力である。我等は手を拱いて資本主義の瓦壞と共産社會の出現とを俟てばよいのである。人類は理想に從て目的意識に努力する必要もなければ、その餘地もない」と。この一節は頗る河上氏の神經にさはつたらしいが、マルクスの機械的宿命觀を正當に解する場合には、かういふ結論よりほかには達すべき道がなからう。

河上氏は「人間は、一部の階級の利益の爲めに社會的生産力が人爲的に束縛せらるゝ事を、永く默過し得ざる性質を有すといふ觀察が、その唯物史觀の中心に横はつてゐる」といつてゐるが、之は大きな誤謬である。先に述べた如く、マルクスの唯物史觀は「觀念」又は理想の自由行動を許さない世界を認定するのであるから、その世界の唯一の支配者たる「社會的生産力」が「人物的に束縛せらるゝ事」のあらう筈はないし、「永く默過しえざる性質を有」したからとて無力の人間の意志がそれをどうすることが能きようぞ。況んや、かやうな思想が「その唯物史觀の中心」の何處に横はつてゐるかを、河上氏に聞きたいものである。

唯物史觀に現はるる如きかやうに横暴な必然律を見ては、「多數の人々は必然的に不平を鳴らし、必然的に社會組織の改造に熱中するに至るものである」と河上氏は言つて居らるゝが、それも同樣の誤解である。然しそれは河上氏一人が惡いわけてなくて、本尊マルクスからが矛盾してゐるのである。唯物史論者としてのマルクスは、人間の意志ではどうにもならない必然世界を作つて置き乍ら、「共産黨員」としての彼は打つて變つて「彼等（共産黨員）の目的は唯だ現存する凡ての社會制度を力づくで破壞するにある」と宣言してゐる。一方では、默つてゐても歴史の必然から共産社會は來るのだ、もがいたつて人間の力ではどうにもならないさ、と言ふかと思へば、他方では直ぐにも力づくで破壞せよとおだてる。この矛盾した兩面を持つ所が

マルクスの身上だ。それを丹念に、無理をしてまで一つに纏めようとなさる河上氏こそ骨折損だ。

河上氏は一つの喩を擧げていふ。「天下の水は必然的に海に注ぐといふ必然論を會得したからと云つて、吾等は必ずしも治水の事に無為拱手の態度を採らなければならぬといふ筈はない。否な寧ろ其逆である。吾等は水に關し一定の必然性を理解すればこそ、始めて巧に水を治め得る」と。然し我等が水に對してかく言ひうる如く、我等が人間に對してかく言ひうるには、我等は社會の外に立たねばならぬ。社會が水なれば我等はその水の一分子だ。必然の重力に牽かれて海に注ぐ水の分子たちが自分に關する一定の運命を理解したからとて、巧みに自分たちを利用できると思ふか。眞にかく我等がありうる爲めには、我等は必然則の外に立つて其法則から支配されない自由な何物かを持たねばならない。その物とは我等の精神である。則ち知る、河上氏はこの比喩に於て必然律の外に超立する自由意志の存在を認容してゐることを——換言すればマルクスの唯物史觀を裏切つてゐることを。

(一)の、お前はマルクスの唯物史觀をなぜ是認しないかといふ問に對しては、私の今迄書いた二三の物、之から書くであらう幾多の物が、おのづから私の立場を明らかにするであらう。只一言申して置くべきことは、河上氏は「純理上」はとにかく、「實用ある觀察」をうるためにマルクスの置いた必然論の前提を是認して掛かると言はるゝが、學者が純理に根底を有しない觀察を以て滿足するといふことは不安ではなからうか。

それから河上氏は、今日東京の眞中に生れ落ちた一個の無産者を例に引き、彼の境遇が資本家に對する賃銀勞働者としてよりほかにはどうにもならないことを述べ（死んで了ふよりほかには）、「一定の、必然的の、彼等の意志より獨立した關係」とマルクスの言つた唯物史觀を認めて居らるゝが、之はまた「社會組織の改造に熱中する」自由意志を有する人間、必然の外に立つて「巧みに水を治める」人間とは別人でがなあらう。

(三)の唯物史觀は理想を無視しないといふお說に對し、私はから答へる。マルクスは確かに理想を認めてゐる——甚だ微か乍ら、そして甚だ曖昧乍ら。然し彼の唯物論から行けば理想の働く餘地は寸毫も存しない。彼の理想の認容は彼のヂレンマである。

わたくしは言ひ過ぎたであらうか、私は禮を失したであらうか。然らば一に不德を謝するほかはない。

終に臨み、この機を利用して誠實篤學の博士に敬意を表したいと思ふ。



性に眼覺める頃

室生犀星

私は七十に近い父と一しよに、寂しい寺領の奥の院で自由に暮した。そのとき、もう私は十七になつてゐた。

父は茶が嗜きであつた。奥庭を覆ふてゐる椿の新しい若葉の影が、濕つた苔の上に揺れるのを眺めながら、私はよく父と小さな茶の爐を圍んだものであつた。夏の暑い日中でも私は茶の爐に父と一緒に坐つてゐると、茶釜の澄んだ奥深い韻しみ深い鳴りやうを、却つて涼しく爽やかに感じるのであつた。

父はなれた手つきで茶筅を執ると、南蠻渡りだといふ重い石器時代のうつはものの中を、靜かに然も細緻な顫ひをもつて、かなり力強く、巧みに掻き立てるのであつた。みるみるうちに濃い綠の液體は、眞砂子のやうな微細な純白な泡沫となつて、しかも輕いところのない適度の重さを湛えて、芳醇な高い氣品をこめた香氣を私どものあたまに沁み込ませるのであつた。

私はそのころ、習慣になつたせいもあつたが、その濃い重い液體を靜かに愛服するといふまでではなかつたが、妙ににがみに甘さの交はつたこの飲料が好であ

つた。じつと舌のうへに置くやうにして味ふと、父がいつも言ふやうに、何となく落ちついたものが精神に加はつてゆくやうになつて、心がいつも靜まるのであつた。

「お前はなかなかお茶の飮みかたが上手くなつたが、いつの間に覺えたのか……」などと、父は言つたりした。

「いつの間にか覺えてしまつたんです。いつもあなたが服んでゐるのを見ると、ひとりでに解つてくるぢやありませんか。」

「それもさうぢや。何んでも覺えて置く方がいい。」

さういふとき、父はいろいろな古い茶碗を取り出して見せてくれた。初代近い谷らしいといふ古九谷の青や、まるで腐蝕されたやうな黑漆な石器や、黃と緑との強い支那のものなど、みな幾十年來の數繁き茶席の清い垢と光澤とによつて磨かれたのが多かつた。さういふものは私にはわからなかつたが、父の愛陶の心持ちがいつの間にか私をして、やはり解らぬままに陶器を好くやうにさせてゐたことは實際であつた。

父は、そのなかから薄い卵黃色の女もちにふさはしい一つの古い茶碗をとり出して、

「これはお前ののにするといい。」

と、私の手にわたした。

私はそれを茶棚の隅に置いて、自分のもちものにすることが嬉しかつた。

父は童顏仙體とでもいふやうに、眉まで白く長かつた。いつも靜かな看經のひまひまには、茶を立てたり手習ひをしたり、暦を繰つたり佛具を磨いたりして、まめまめしい日を送つてゐた。若いころに妻をうしなつてから、一人の下男と音のない寂しい日をくらしてゐた。茶を立てる日になると、井戸水はきめが荒くていけないといふので、朝など、

「お前ご苦勞だがゴミのないのを一杯汲んで來てお呉れ。」と、私がうるさく思ひはせぬかと氣をかねるやうにして、いつも裏の犀川の水を汲みにやらせた。東京では隅田川ほどあるこの犀川は、瀬に砥がれたきめのこまかな柔らかい質に富んでゐて、茶の日には必要缺くことのできないものであつた。私はそんなとき、手桶をもつて、すぐ磧へ出てゆくのであつた。庭から磧へ出られる石垣があつて、そこから川へ出られた。

この犀川の上流は、大日山といふ白山の峯つづきで、水は四季ともに澄み透つて、瀬にはことに美しい背があると云はれてゐた。私は手桶を澄んだ瀬につき込んで、いつも、朝の一番水を汲むのであつた。上流の山々の峯のうしろに、どつしりと聳えてゐる飛彈の連峯を霧の中に眺めながら、新しい手桶の水を幾度となく汲み換えたりした。汲んでしまつてからも、新しい美事な水がどんどん流れてゐるのを見ると、いま汲んだ分よりも最つと鮮かな綺麗な水が流れてゐるやうに思つて、私は神經質にいくたびも汲みかへたりした。

この朝ごとの時刻には向河岸では、酒屋の小者の水汲みが初まつてゐた。小者はみな裸體になつて、あふれるほど汲んだ二つの手桶を天びんにかついで、街の方へ行つた。靜かな朝など、桶からはみ出た水が光つて、まるで白刄のやうに新しい朝日に輝いてゐた。私の故鄕にはこの川の水から造られた「菊水」といふ美しい味をたたへた上品なうまい酒がとれた。

この磧からは私の住む寺院がよく見えた。二本の高い榎の大樹をその左右にして、本堂を蔽ふた椽や楓、大樹のひろがつた枝は、川の方へ殆んど水面とすれすれに深く茂り込んでゐた。そこは、用水から餘つた瀬尻(せり)が深く水底を保つて、どんよりと蒼々しい淵をつくつてゐた。鮎や石斑魚(うぐひ)などを釣る人が、そこの蛇籠に蹈んで、默つて終日釣り暮すのを

受ることがあつた。

父は私の汲んで來た一番水を毎時もよく洗はれた眞鍮の壺に納めて、本堂へ供えた。それを日の入りには川へ流すのが例になつてゐた。あとの水は、茶の釜にうつした。午前九時ころになると、釜は、父の居間で靜かに鳴りはじまつて、ことに冬など、襖越しにそれが遠い松風のやうに、文字通りな時雨の過ぎ去つてゆくやうな音を立てた。そういふとき、父は一つの置物のやうに端然と座つて、湯加減を考へるやうに小首をかたげてゐた。夏は純白な麻の着物をまとふて、鶴のやうに瘠せた手を膝の上にしてゐる姿は、寂しさ過ぎて嚴めしく見えた。時々、仲間の坊さん連のやつてくる外は、たいがい茶室で默つてくらすことが多かつた。

私は私で學校をやめてから、いつも奥の院で自分のすきな書物を對手にくらしてゐた。學校は落第ばかり續いてゐたので、やさしい父は家にゐて勉强したつて同じだと言つてくれたのを幸ひにして、まるで若隱居のやうに、終日室にこもつてゐた。

そのころ私は詩の雜誌である「新聲」をとつてゐて、はじめて詩を投書すると、すぐに採られた。K・K氏の撰であつた。私はよく發行の遅れるこの雜誌を毎日片町の本屋へ見に行つた。この「新聲」の詩壇に詩が載ることは、ことに私のやうに地方に居るものにとつては困難なことであつたし、實力以外では殆んど不可能なことであつた。そのかはりそこに掲載されれば、疑ひもなく一個の詩人としての存在が、わけても地方にあつては確實に獲得できるのであつた。私は、本屋までの途中、載るか載らないかといふ疑惑に胸さわぎして、ひとりで、蒼くなつたり赤くなつたりした。

「新聲ですか。まだ來てゐませんよ。來たらおとどけいたします。」

などと、本屋の小僧は、まるで私の詩が沒書にでもなつたやうな冷たい顔をして言つた。私はそのたびに

「あ。そう。」

と、きまり惡くそそくさと歸つた。そんな日は私は陰氣に失望させられてゐたが、その夜が明けると、もう朝のうちに本屋へ行つて「新聲」が來てゐるかどうかといふことを確かめないと、落ちついて室にもゐることが、できなかつた。私は本屋の店さきに立つて、新刊雜誌を一と通りづつと見渡して、まだ着いてないことが判つても、もしも何かついてまだ解かないのではなからうか(そんなこともあつたのだ。)などと思つて、一度問ひ訊して見なければ氣がすまなかつた。

「君。「新聲」はまだ來ないかね。」

と言つて私は赤くなつた。

「今お宅へとどけやうと思つてゐたところです。お持ちになりますか。」

「あ。持つて行く。」

私は、雜誌をうけとると、すぐ胸がどきどきしだした。本屋から旅館の角をまがつて、裏町へ出ると、私はいきなり目次をひろげて見た。いろいろな有名な詩人小説家の名前が一度にあたまへひびいてきて、ただでさへ慌ててゐる私であるのに、殆んど沒書といふ運命を豫期してゐた私の詩が、それらの有名な詩人連に挾まれて、規律正しい眞面目な四角な活字が、しつかりと自分の名前を刷り込んであるのを見たとき、私はかつとなつた。血がみな頭へ上つたやうに、耳がやたらに熱くなるのであつた。

私はペエジを繰る手さきが慄へて、何度も何度も同じペエジばかり繰つて居た。肝腎の自分の詩のペエジを繰ること

のできないさと讀てこんだ。やつと自分の詩のペエジに行きつくと、私はそこにこれまで見なかつた立派な世界に、いまここに居る私よりも別人のやうな偉らさを見せて、しかも徹頭徹尾まるで鎧でも着て座つてゐるやうに、私は私の姿を見た。東京の雜誌でなければ見られない四六二倍の大判の、しかも其中に自分の詩が出てゐるといふ事實は、まるで夢のやうに奇蹟的であつた。私は七月の太陽が白い街上に照りかへしてゐるのに眼を射られながら、どこからどう歩いてどの町へ出たか、誰に會つたか覺えてゐなかつた。私はまるで夢のやうに歩いて、いつの間にか寺の門の前に來てゐた。

私は家へ這入ると雜誌を机の上に置いて、あまりの嬉しさにしばらく茫然としてゐた。何を見るともない眼で、微笑をうかべたまま障子のそとの磧を見てゐた。磧から大橋が見えた。通行人が、たえず歩いて行つた。私はそのとき初めて大橋をいま渡つて來たことを、たしかに下駄の踏み工合で地面とは異つてゐたことを思ひ出した。けれどもやはりどの道を歩いたか覺えなかつた。

私は雜誌を机の上に置いたり讀んだりしてゐるうちに、これは是非父に言つておかなければならないと思ひながらも、何だか非常に耻かしくも感じたが、しかし言ひたくてしかたがなかつた。私は父の家へ雜誌をもつて這入つて行つた。

「東京の雜誌に私の書いたものが載つたんです。この雜誌です。」

と私は新聲をとり出した。

「そうか。それはいゝ鹽梅だつた。一生懸命にやれば何んだつてやれるよ。お見せなさい。」

と、父は私の詩をよんでゐたが、解りさうもないらしい顏をした。いくたびも讀かへして

「むかしの漢詩みたいなものだ。それとは違ふかな。」

「まあ同じいものです。」

と、私は苦笑した。

私は自分の室へかへると、自分の詩が自分の敬する雜誌に載つたといふ事實を今ははつきりと意識することができた。そして、あの雜誌を讀む人人はみな私のものに注意してゐるに違ひないと思つた。この故郷の人も近隣の若い娘らまできつと私の詩をよむにちがひない。私は全世界の眩しい注目と讃嘆の的になつてゐるやうな、晴々しい押へがたい昂奮のために、庭へ出て大聲をあげたいやうにさへ思つた。私の詩のよしあしを正しく批判するに値する人は、決してこの故郷にはゐないやうに思はれた。私は私の故郷に於いてもつともすぐれた詩人であることを初めて信じていいと思つた。

私はその翌日から非常に愉快に生活することができた。私は每日詩作をした。机にかじりつきながら、どうかして偉くならなければならないといふ要求のために、每日、胸さわぎと故もない震へやうを心に感じながら、庭の一點をみつめたままで暮すやうなことがあつた。それから撰者のK・K氏に長い手紙をかいて、自分は決して今の小ささでゐたくないことや、これからも殆んど自分の全生涯をあげても詩をかきたいことなどを傳へた。K・K氏は强烈な日夜の飲酒のために、その若い時代をソシアリストとして、しかも社會主義詩集まで出した人であつた。返事が來た。「君のやうな詩人は稀れだ。私は君に期待するから詩作を怠るな。」とあつた。それから、ハガキで朴訥な、にじりつけたやうな澀筆で「北國の荒い海濱にそだつた詩人に熱情あれ。」といふやうな、何處か酒場にでもゐて書いたやうなもののやうなハガキも來た。

私はその撰者の熱情に深い尊敬をもつてゐた。そのころ詩壇では新しい口語詩の運動が起りかけてゐたが、流行を趁

ふことなき生一本なK・K氏の純情にたいしては、その藝術よりも私は深く敬愛してゐたのである。

いろ青き魚はなにを悲しみ
ひねもすそらを仰ぐや。
そらは水の上にかがやき亘りて
魚ののぞみとどかず。
あはれ、そらとみづとは遠くへだたり
魚はかたみに空をうかがふ。

明治三十七年處女作

そのころ私と同じく詩をかいてゐる表棹影といふ友人が居た。この友は、街のまん中の西町といふ處に住んでゐた。私に交際したいといふ手紙をよこしてから三日目に、この見ず知らずの友は、私の寺をたづねにやつて來た。

表は大柄なのに似合はない可愛い圓い頬をしてゐて、あまり饒舌らない默つた人であつた。かれは私と同じ十七であつた。私だちはすぐに仲よしになつた。

私もすぐにこの新しい友を訪ねた。姉さんと母親との三人ぐらしで、友の室は二階の柿の若葉した水水しい窓際に机が据えられてあつた。新聲や文庫といふ雑誌が机の上に重ねてあつた。

「君の「新聲」の詩を讀んで感心しました。たいへんうまいと思ひましたよ。」

と言つて、自分の短歌を見せた。「麥の穂は衣へだてておん肌を刺すまで伸びぬいざや別れむ」「日は紅しひとにはひとの悲しみの厳かなるに涙は落つれ」の二首は私を驚かしたものであつた。このやうな立派な美しく巧みな歌をよむ友

が、私以外にもこの故郷にゐたことを喜んだ。それと同時に「おん眼を刺すまで伸びぬ」はたいへんうまいと思つた。表の作品はすべて情操のしつとりとした重み温かみを内にひそませてゐるものが多かつた。ことに「君」といふ相對的な名詞が私の注意を惹いたのみならず、きつと「君」といふからには、ラバアがあるにちがひないと思つた。表はたえず手紙をかいて女のところに出してゐた。そして幾人の女からも手紙をもらつて、それをよく私に見せた。

「どうして君はそんなに女の人と近づく機會があるんだ。」

と、私は寂しい思ひをさせられながら訊ねると

「女たんかすぐに友達ちになれるよ。君にも紹介してやるよ。」

と、わけもなく言つた。

「僕にも一人こさへてくれたまへ。」

などと私も思はず言ふと、かれは「もうしばらく待ちたまへ。」などと言つた。

ある日、表と私とは劇場へ行つた。私どもは二階にゐた。表はそはそはと階下へ降りたり上つたりしてゐたが、

「あの女はちよいときれいだらう。今手紙を送つたんだ。あす返事が來るよ。」

などと、あごで指つて、桝を指した。そこには女學校に通ふてゐるらしい十七八の桃割の、白い頸首と肥えた白い頬とが側面から見えた。すぐよこにお母さんらしい人が座つてゐて、前の方には、この城下町の昔からしきたりのやうになつてゐる物見遊山に用ゐられる重詰のご馳走がひらかれてあつた。

「どうして手紙を渡せるんだ。あそこへ君は持つて行つたんぢやなからうが。」

「なあに君、たいがいの女は手紙をうけ取つてくれるもんだよ。」

「だつてあの女の人が、お母さんに言ひつけたら君はどうするんだ。」

「言ふもんかね。大丈夫言ひはしないよ。そんな頓間なことを言つたらあべこべにお母さんに叱られるばかりだよ。ほらこつちを向いたらう。手紙を讀みたくてしやうがないんだよ。」

實際、色白な娘が、そしらぬ振をしながら、此方をときどき盗み見た。私ははつとしたが、表は落ちついてゐた。どちらかといへば不思議なやうな、それでゐて馴れやすい目をもつた女は、私よりもやはり絶えず表に注意をしながら二階の方を素知らぬふりで幾度も見た。

「このつぎの幕間に僕はあの女を呼んで見せるよ。僕の近所の女なんだよ。向ふだつて知つてゐるに決つてゐる。」

「だつて呼ぶつてどうするんだ。向ふにお母さんがついてゐるぢやないか。」

「まあ見ゐてたまへ。」

と、表らしく落ちついて、次の幕のハネるのを待つやうに言つたので、私はその娘の桃割と派手なつくりのお太皷とを見つめてゐた。そのおとなしさうで内氣な女が、いま私の傍にゐる友の手紙をうけ取つたといふことさへ殆んど奇蹟的であるのに、表が彼女を呼んで見せるといふことが、これまた信じることの出來ない不審なことであつた。表は女性にたいしては無雜作であるやうで、いつも深い計劃の底まで見貫く力をもつてゐることは實際であつた。かれは決してきむすめ以外には手出しをしなかつたし、生娘なればたいがい大丈夫だとも言つて居た。

「駄目な時は初めつから駄目なんだ。向ふが少しでもいやな顔をしたり、手を握らせなかつたりしたら、どんなに焦つても駄目さ。そんな奴はやめてしまふさ。それに成るべく美人の方がやりいいね。」

「なほ六つかしいぢやないか。」

と、私は問ひ返した。

「きれいな女は二三度引つかゝつてゐなけりや、子供の時分から人に可愛がれてゐるから馴れてゐてやりよいのさ。」

と表は眞面目な顔をした。

「そんなもんかなあ――僕はその反對だと思つてゐたんだ。」

私は表の言葉の中に、本當なところがあるやうな氣がした。

「だから美人はたいがい墮落する――僕の經驗から言つても、わるい女はきつと刎ねつけるやうだね。」

私たちがひそひそ話してゐるうちに、幕が引かれた。表は騷がしい埃の立つた桝の方をぢつと凝視してゐたが、急に立つて廊下の方へ行つた。そして女の桝からやや隔れた棧敷の圍ひのそとに永く立つてゐた。私は胸に鼓動をかんじながら見てゐると、女はお母さんと何か話をしいしい表の方へ目をやつてゐた。表は右の手を自分の膝のところで、妙に物を摑ふやうた格構をして、一種の秘密な手招きをやつてゐた。女は私の目にも判るほどおろおろした、落ちつかつかない樣子で、ぼんやり引幕をながめたり、また急に表の方を氣にしたりしてゐた。それらの態度の慌ろたえた内氣な、それでゐて怖れに充ちてゐるのが、私には限りなく優しいものに見えた。表は表で、他の見物にそれと分りかねるやうな、狐憑きのやうな手招きを執拗につづけてゐた。そのうち女はもうどうにもならない樣な中腰になつてまで、しばらく躊躇ふてゐたが、ふと立つて廊下の方へ出て行つた。なりの高い頸の細い女であつた。そのとき表もすぐ娘の出て行つた廊下へうろたへて行つた。

私は娘が立つた瞬間から、頭にかつと血が上つたやうに、呼吸さへ窒るやうな昂奮をかんじた。そして、すぐ表のそばへ行つて見たいやうな氣がした。何だかあの娘が可愛想な氣がしたりして、もう座つてゐることができなかつた。私

は立つて階下へゆかうとしたが行つてはいけないやうにも思はれるし、行かなければならないやうに思はれ、自分でないほどふらふらと目まひまでが仕出した。

　そこへ表がかへつて來た。れいの優しい目つきで、しかも何處か昂奮したらしい少し潤ひを帶びた聲で

「もう仲善しになつてしまつたんだ。見てゐたのかい。」

「うん。すこしはかり——話しをしたの。」

「明日ね。さつきの返事をよこすつて言つてゐた。」

　私は默り込んでゐた。表も私を前に置いてあゝまでしなければよかつたと云ふやうな顔をして、氣まづく默つてゐた。

そして

「君にも紹介するよ。」と、氣休めらしく言つたが、私はわざと默つて、席についた桃割をじつと見てゐた。あの女がいますこし前に表と話したりしたといふ事實が、あゝも手早く簡單に行はれたといふことを、殆んど有り得べからざるもののやうに思へた。烈しい嫉妬をかんじながらも、あまりの不審さと餘りに奇蹟的なのに私は呆れ返つてゐた。

　女はつぎの幕間には、ときどき表の方を向いてはそれとなく微笑して見せたりした。表はそんなとき、思ひきつた大膽な微笑を送つた。それがいかにも開け放しで、つき込んだ微笑であつた。私は心の中で益々ひどい寂しさをかんじた。私より表は柔らかい[illegible]ことなどもいつも思ふことながら私の氣を益々鬱ぎ込ませた。

　私達は芝居を見るとすぐに別れた。

　表の眼だけを見てゐると、そのいつも近眼鏡の下に柔和しく瞬いてゐて子供のやうに圓々して、そこに狡猾さも毒々しさもなかつた。わけても緣日や劇場であゝまで大膽に女に接近するさまは、不審すぎるほど不審で、いつも一歩も假借

したかつた。

あるとき、劇場などで、わざわざ娘らしい女の座つた足に躓いて見せて

「どうも失禮しました。」

と、白々しく、しかも叮嚀に詫びると、却つて對手が赤くなつて

「いいえ。」

と、はにかむと、かれはいつも其隣席へ割り込むのであつた。そして、幾時間も一しよに座つてゐるうちに、かれは實にたくみに話しかけては對手の心をだんだんに柔らげると、いつの間にか手を握るところまで、圖々しく衝き込んでゆくのが癖であつた。傍によその人が注視してゐても、それにはまるで氣に懸けないで、殆んど無智なほど大膽で巧妙であつた。

かれは、いつも眼鏡のそとから、じろりと秋波めいたものを送るとき（彼は私と對談してゐるときも嫌な横目をした。）何かしら厭らしい淫猥な、陰險な氣持を含んでゐた。しかも彼が私と同じい年頃であるに拘はらず、その長い髪を眞中から分けてゐるところや、氣のきいた帽子をかむつてゐた點は、私の學生じみた格構よりも、ずつとませ込んでゐた。

私は彼の「君」といふ相對語の意味がだんだん解りかけてゐた。それに一方嫉妬をかんじながらも、私は何かしら彼が懐かしかつた。別にかれが「女を紹介する。」と言つても、紹介しもしなかつたが、そのもの柔らかな言葉や、詩の話などが出るごとに、あの惡魔的な大膽な男が、よくもかうまで優しい情熱をもつてゐるかと思ふほど、初々しいところがあつた。それに詩作では全く天才肌で、何でもぐんぐん書いて行つた。（數年後私は上京したときK・K氏が彼は全く驚異すべき大才をもつてゐたといふことを説いた。）

かれは子供のときから印刷工場に勤めてゐたといはれてゐたが、私と知るやうになつてから、もう何處へも勤めに出てはゐなかつた。かれは私と同じいやうに毎日机にむかつて、姉に保護されてゐた。

寺のことはたいがい父がしてゐた。本堂に八基の金燈籠、觀音の四燈、そのほか客間、茶室、記帳場―總て十二室の各座敷の佛壇や佛像の前には、みな燈明がともされてゐた。それらは、よちよちと油壺と燈心草とをのせた三寶を持つた父が、朝と夕との二度に、しづかな足袋づれを疊の上に立てながら點して歩くのであつた。寺へ來る人人は、よく父の道樂が、御燈明を上げることだなどと言つてゐた。それほど父は高價な菜種油を惜まなかつた。父自身も、

「お燈明は佛のご馳走だ。」と言つてゐた。

しかし境内の二基の瓦斯燈は、ときとすると下男のゐないときは、いつも私が點さなければならなかつた。

私が讀書などしてゐて午后五時ころになると、もう父のお燈明配りが初まつてゐた。幾十年來點しつけてゐる其手つきは枯れたものであつた。新しい燈心草を土器に挿すと、油壺は靜かに寬くその土器にそそがれ、そしていつも點火された。それは實に靜かで、いかにも清淨な仕事で私は見てゐていつも感心してゐた。

襖々がすーと音がして開いたり閉つたりすると、足袋ずれが次の室から次の室へと遠のいて行つて、そのたびに、一つ一つの室に新しい燈明がぱつちりとあかるく點されてゆくのであつた。それを見てゐると、まだそとが明るいけれど、もう晩になつたやうな氣がしてくるのであつた。

私はよく夕方境内を歩くことがあつた。幾抱へもある大きな樹が立つてゐて、どんなに雨が降つても其根元を濕ほすことがなかつた。その下に迷ひ子の墓碑があつて、子供が道に迷つたりすると、この墓碑に祈願すれば、ひとりで子供

の迷ふてゐる町が判るといはれてゐるお[illegible]したこの界隈は、いつも私が行つたり隱れたりするに都合がよかつた。廓に近い界隈だけに、夕方など、白い襟首をした舞妓や藝者がおまゐりに來たりした。櫻紙を十字にむすんだ緣結びを、金比羅さんの格子戸に括つたりして行つた。その緣結びは、いつも鼠啼きをしてちよいと口で濡して、する習慣になつてゐるらしく、私はその櫻紙に口紅の烈しい匂ひをよく臭ぎ分けることができた。そのうすあまい匂ひは私のどうすることもできない、樹木にでも縋みつきたい若い情熱をそそり立て、悩ましい空想を駈り立ててくるのであつた。

私の幼年のころ川から拾ひ上げた地藏尊は、境内の堂宇に納まつてゐた。私はそこへゆくといつも姉を思ひ出した。姉は間もなく隣國の越中へ行つて、永く命はなかつた。あの小さい姉とこの地藏尊のお祭りしたことも、いつも、そのころ建てた流れ旗や三寶や佛器が今もこの堂宇に納まつてゐるのを見ると、私が寺院に貰はれて來たことにも、みな深い因緣があるやうに思はれた。行衛不明になつた母は、死んだと云ふ人もあり、まだ生きてゐるといふ人もあつたが、死んだ方がたしかに事實らしかつた。父が法名をかいてくれて佛壇に納めてあつた。父が法名をかいてくれた日を命日として、私は心まで精進してゐた。

いろいろな噂をとりあつめると、私の母は派手なところがあつて、虚無僧が塗り下駄をはいてお城下さきを尺八をながしてあるくのを見ると、若い母は、その翌日は虚無僧と同じい黑塗りの雪駄をひつかけた。さういふ小さな例からも、私はあの落ちついた母にさういふ輕はづみな若いときがあつたかと、却つて嬉しさうにしてゐる姿を目に見るやうで不快ではなかつた。私が養家さきから、ひつそりと會ひに行つて、つい寢込んでしまつた母の膝のふれ心持のよかつたことも、ずつと頭の奥の方に、いまも溫かにふうはりと殘つてゐるやうな氣がするのであつた。

私は地藏堂のそばへゆくと、それらの果しない寂しい心になつて、いつも塞ぎ込のむであつた。私は人の見ないとき、

そつと川から拾ひ上げた地藏尊の前に立つて手を合せた。母を祈る心と自分の永い生涯を祈る心とをとりまぜていのることは、何故かしら川から拾つた地藏さんに通じるやうな變な迷信を私はもつてゐたのである。自分が拾ひあげたといふ一つのことが、地藏さんと親しみを分け合へるやうに、幼年の時代から考へた癖が今もなほ根を張つてゐるのであつた。

參詣人のなかにはもう見知り顔もできてゐた。あるじが長い航海に出てゐるのを平穩無事にと祈願しにくる中年の婦人は、いつも靜かな、温かい母親の示すやうな挨拶をいつも私にした。そのひとは、いつも手を合せて、永い間、懐中から手帛につつんだ寫眞をとり出して、それを膝の上にのせては、低い聲で何か祈りながら、板敷の上に座つてゐた。毎日、毎日、まるで印刷にしたやうに午后になるとやつてきて、二時間あまりも座つてお詣りしてゆくのであつた。時には、父におくじを引いてもらつて、海上生活が安穩であるかどうかといふことを見てもらつてゐた。もう三十をよほど越した人であつたが、内氣なやうな皮膚の美しい人であつた。

それから中婆さんの手癖のよくないのもゐた。その中婆さんはいつも他の參詣人のゐないとき、たとへはお晝(ひる)飯のころとか、午后の四時近いときかに、たくみに參詣人の途絶えたとき、賽錢箱の錠を開けることが非常に上手であつた。これは、一本の釘を錠穴から挿し込んで、逆にねぢあけると、いつも容易に開くのであつた。

その中婆さんは、すぐ裏町に娘と二人で住んでゐて、いつもやつて來ては、あり金を掻き集めて持つてゆくとが、私にはよく判つてゐた。あるとき私は、わざと錠に釘をつき込んだとき、本堂の内部からガタガタ音させてそれとなく注意したが、ひよいと本堂の内部を覗ふだけで、やはり錠を開けはじめるのであつた。二三度、顔も見知つてゐたので、年

寄りを責める氣にもなれなかつた、と云つて、記帳場（寺の事務所）へ告げる氣にもならなかつた。一つには中婆さんに娘もあつたせいもあつた。娘はせいの高い堅肥りのかなりな器量をもつてゐた。東京へ逃げて行つたこともあり品行も惡いといふ評判であつたが、それとは反對に水々しい若さと美しさに富んでゐた。

毎月十八日のお觀音の祭日には、きつと親子揃つて詣りにやつてくるのであつた。そして二人とも揃ひも揃つた一種の盗癖をもつてゐたのである。中婆さんはいつも手近に落ちてゐる銅貨をたくみに膝頭に敷き込んでは、ふくら脛のあたりへ手をやつては、袂へ投ち込んでゐた。それは、たとへ隣によその人がゐても、ちよつとの隙に禮拜するやうに板敷の上へ額をこすりつけてゐる間に行はれるので、たいがいの人には判明らなかつた。

私は記帳場の重い戸板の節穴から、すべての參詣人が何をしてゐるかといふことが、よく眺められるのを幸ひにして、よく彼の娘を見ることができた。彼女は中婆さんのすることを横目でちよいちよい見てゐたが、すぐ自分のたの膝から二三寸前の方に落ちてゐる銅貨に、たえず氣を奪られてゐるらしく、いくども横目でじろじろ見てゐたが、急に膝のに敷き込むといふこともなかつたし、まさか、この美しい娘がわづかなものを掠めとるといふことも考へられなかつた。彼女はもう九か二十歳に見えたほど大柄で、色の白い脂肪質な皮膚には、一種の光澤をもつてゐて、その澄んだ大きな目は、ときどき、不安な瞬きをしてゐた。

私はそのとき彼女の左の手が、まるく盛り上つた膝がしらへかけて弓なりになつた豐かな肉線の上を、しづかに、おづおづと次第に膝がしらに向つて辷つてゆくのを見た。指はみな肥り切つて、關節ごとに糸で括つたやうな美しさを見せてゐて、ことに、そのなまなましい色の白さが、まるで幾疋かの蠶が這ふてゆくやうに氣味惡いまで、内陣の明りをうけて、だんだん膝がしらへ向づて行つた。彼女の手がその膝がしらと疊との二三寸の宙を這ふやうにしておろしかゝ

つたとき、彼女は鋭い極度に不安な、掏摸のやうに烈しくあたりの參詣人の目をさぐつて行つて、自分に注意してゐるものが居ないといふことを見極めると、五本の白い蛇のやうに宙に迷ふてゐた指は、その銅貨の上にそつと弱々しく置かれた。と同時にその手はいきなり引かれて、觀音の內陣の明るい燭火に向つて合掌された。

私はそれを見てゐて息が窒るやうな氣がした。心持ちからか彼女はすこし蒼ざめたやうな頰をして、その合せた左の手が不自然な、柔らかい格構をして握られると、いきなり袂の中へ飛び込んだ。なぜ、ああいふ美しい顏をしてゐる女に、小さな醜い根性が巢くつてゐるのかと、私はじつと見てゐた。――彼女はさういふ手段で幾度も幾度もやつたが、だんだん機敏に、いきなり目的に向つて、さきのやうな不必要な細心さや周到な注意を拂ふことがなかつた。また、誰もこの美しい娘が小さな盜みのために座つてゐるとは思へなかつた。私はこのことは記帳場へは話をしなかつた。記帳場ではよくありがちなことであるから大槪は意見をするだけで、見て見ぬ振りをするのが多かつたからである。

それから二三日後、私は記帳場から何氣なく境內の門のそとの道路を見てゐると、一人の若い女が門のうちへ入つてくるのが見えた。そして私ははつとした。それは十八日の晩の女であつたから私は驚いたのである。私はすぐにある不吉な場面を想像した。そしてすぐに例の秘密な節穴から彼女を監視することにした。

彼女はさつぱりした姿で、紅い模樣のある華美(はで)な帶をしめてゐた。彼女はいきなり板敷の上に座ると、あたりを見廻した。格子の內部は暗い內陣になつてゐたので、そこを透して誰か居ぬかと見てゐたが、こんどは境內を見渡した。夏のことで暑いさかりの參詣人も途絶えて、湧くやうな蟬時雨が起つてゐるばかりであつた。彼女は一本の釘をとり出した。そして母親のする通りに錠穴から挿し込んで、逆にねぢむげると、錠はかつちりと鳴つて、賽錢箱から離れた。彼女は自分でその音に驚いたやうに非常に蒼白い顏をして、あたりを叮嚀に見廻した。誰か不意に參詣人が來はしないかと

いふ懸念や、本堂の內部から見てゐはしないかといふ心配に、何者かのけはひに聞耳を立ててゐたが、その白い手は戰しく震へてゐるのが私の方からも見えた。この指はすんなりと長くて肥つて、一本一本の關節がうす紅くぼかしたやうになつて小さい可愛い靨さへ浮いてゐた。

私はそのとき、どうしたはづみであつたか、戸板に額をふれさせたので、重い戸板がことんと音を立てた。そのとき、彼女は吃驚していきなり戸板の方を凝視した。ちやうど私の覗いてゐる節穴の正面に。しかも一生懸命になつてゐる烈しい恐怖におそはれた、ありとあらゆる不安をあつめた彼女の大きな眼は、むしろ凄艶な光をたたへてじつと私の額に熱い視線を射りつけたのであつた。私はすぐに節穴から離れやうとしたが、さうすれば節穴が明るい記帳場のひかりを透すであらうと思つて、わざと不動としてゐた。それに節穴が非常に小さかつたのと、あたりがやや暗い堂內であつたために、すぐ彼女はそのしつこい視線を解いた。私は膝頭が震えて、からだが、すくみ上るやうな堅苦しい息塞りをかんじた。彼女は誰も見てゐないと知ると、こんどは、賽錢箱から一錢二錢の銅貨や五錢の白銅、または紙にくるんだのなどをすつかり小さな女持の、紅い美しいガマ口におさめてしまつた。ガマ口に容れきらないのは、別に紙につつんで帶の間にはさみ込んだ。そして、また、がつちりと錠を卸して、あとをも見ずに寺を出て行つた。そのせいの高いすらりとした背後姿は、その紅い帶とともに私の目にいつもありありと描き出された。

私は然うした彼女の行爲を見たあとは、いつも性慾的な昂奮と發作とが頭に重りかかつて、たとへば、美少年などを酷くいぢめたときに起るやうな、快よい慘虐な場面を見せられるやうな氣がするのであつた。それと一しよに、彼女があゝした仕事に夢中になつてゐる最中に飛び出して行つて、彼女をじりじりと脅かしながら、そのさくら色をした齒痒いほど美しい頬の蒼ざめるのを豪然と眺めたり、または靜かに今彼女のしてゐる事はこの世間では決して許されない事で

あり、してはならないことであることを忠告して、彼女がこころから濱罪の涙を流して泣き悲しむのを見詰めたりしたら、どんなに快よい痛痒い氣持ちになることであらう。そしてまた彼女が悔ひ改めて自分を慕つて、しまひには自分を愛してくれるやうになつたら、自分はきつと寂しくないにちがひない。そうでなくとも、彼女の弱點につけ込んで、自分はどんな冒瀆的なことでもできるのだなどと、私は果しもない惱ましい妄念にあやつられるのであつた。爽なれば、きつと此壓時彼女を强迫してしまふにちがひない。そして直ぐに自由にしてしまふにちがひない。

私は板戸をはなれて記帳場へくると、事務員の年寄りが彼女が盜みをしたかどうかといふことを訊ねた。四五日前に來たときにも、どうも素振りがあやしいし、あの女のきた日は賽錢がすくないなんて言つた。私はそのたびごとに

「何もしなかつたやうですよ。この間のはきつと出來心ですよ。あんな女のひとが盜みをするなんてことはありません。」

と言つて、決して言はなかつた。

「そうですか。ともかくいい鹽梅です。わるいことをされると此方で默つてゐるわけにゆきませんからね。」

と年寄連は言つてゐた。

しかし彼女は益々はげしく、殆んど毎日のやうにやつて來た。しまひには記帳場でも嚴しい監視をしてゐたが、やはり彼女に疑ひはかかつてゐても、かれであるといふことが判らなかつた。そういふ話のでるたびに

「けふも怪しい男が本堂のところに休んでゐましたよ。どうもおかしい奴だつた。」

と、私は見もせぬ作りごとを言つておいた。

「そうですか。氣をつけなければいけませんな。」

と年寄は不安さうに言つてゐた。

しまひに父までが、

「このごろは少しもお詣りがないのか、あがりがないやうだね。」

と記帳場の帳面を見ながら言つてゐるのをきいて、私ははつとした。年寄連もふしぎがつてゐた。だんだん何んだか私が盗んでゐるやうな、やましい氣がしてならなかつた。ことに記帳場の手前もあつたので、私が盗んだやうに思はれるのが厭だつたので、彼女があり金をそつくり持つて行つたあとに、私はそれほどの金高をあとから小使のなかから割いて、こつそりと賽錢箱に入れて置いたりした。その何より一番困ることは、賽錢の性質上、すべて銅貨でくずして入れてをかなければならないことであつた。そのために、よく向ひの花賣りの店でこはしてもらつては、そつと入れておいた。その效果はすぐに現はれた。記帳場の年寄りは

「このごろ來なくなつたやうですよ。本當にいい工合だ。」

と言ふのを聞いて、私はひとりで苦笑した。しかし、ここに困つたことは三日や四日はゴマ化したものの、毎時そう小使ひが私に無かつたために、父に毎日のやうに此間から貰つてゐるので、言ひにくかつた。と言つて賽錢箱の方を打つちやつて置くわけにもゆかなかつた。ある日、父の金簞笥の中から少額ではあつたが、銀貨や銅貨をとり出した。簞笥の中は紙幣やら銀貨やらで、だらしなくなつてゐたので判明りさうもなかつた。味をおぼえて次の日もこんどは紙幣の束からそつと幾枚かを抜き出した。そしてくずしては例の箱の中へ入れておいた。私は重い金簞笥に手をかけるときその金具ががちやがちや鳴るのを氣にしながら、いつも人の善い父の微笑を思ひ出した。ことに、少年として過分な小使を貰つてゐるのに、いつも小言一つ云はないで呉れる父を、私は私の盗みをするときにのみ「濟まないな」と切にか

んじた。しかし私にはさうするより外に方法がなかつた。それ、彼女の盗みの埋め合せばかりでは無くなつて、だんだん自分の用途にも使ふやうになつてゐた。ノートや青いインキ壺などが、次第に私の机の上を新しく賑やかにして行つた。

そとでは毎日彼女はやつて來た。

いつも午后三時ごろの、日ざかり過ぎの靜かな埃つぽい日、彼女のやや明るい紅い帶が、そのすつきりした高い姿とともに寺領の長い廊下の中に現れた。私はそんなとき、すぐに「困つたな、また來たな。」と心でつぶやいた。その一面には何んだか永い間待つてゐた人が來たやうな氣もした。しかし私は彼女の盗みを記帳場へは絶對に知らすまいと思つてゐた。一つは可愛想でもあるし、また、さういふことが知れたら決して彼女は寺へ來られなくなるだらう。來なくなるといふことは、私にとつてはいまは可成りに寂しいことであつた。そうかと言つて彼女の仕事の最中に飛び出して叱責する勇氣はなかつた。また一方にはさうそう父の金錢筒に手をかければ、しまひに發見するにちがひない。私はどうしていいか分らなかつた。内と外とで示し合せたやうな盗みが行はれてゐるのが、私には實に堪らない苦しさであつた。彼女さへ盗みをしなければ、私は勿論あゝいふ盗みをしなくていいのだ。とさへ思ふやうになつた。何んだか、ときには女の人にとり縋つて姉にたいするやうな甘えた心持で、それを訴へて見たいやうな、まるで子供らしい考へに耽けることもあつた。

私はある日、彼女のやつてくる時刻に、一通のてがみを書いて、それを賽錢箱の中へ入れて置いた。そうすれば、彼女と一しよに辷り出てゆくにちがひないし、出れば讀むに決つてゐると思つた。それは、「あなたは此處へ來てはいけません。あなたの毎日せられたことはお寺にみんな知れてゐるから、この手紙を見たらもう來てはいけません。」と書いたのだ。

私はそれを箱の中へ入れてからも、これを見たら彼女が來なくなるだらうといふ寂しい心持ちになつた。そして入れなければよかつたとも思ひ、とり出してしまうかと、落ちつかない心持ちになつた。

しかし時間はもう彼女のやつてくる時に迫つてゐた。私はれいの戸板のところで、くらやみから這ひ出てくる蚊をはらひながら待つてゐると、彼女はやつてきた。そして、もうすつかり馴れた手つきで素早く錢をつつ込むと、錠はあいた。そして箱をしづかになゝめに傾けると、一方の錠のあいた方から、銅貨や銀貨がぞろぞろと辷つて出た。そのとき、私の入れた手紙が出た。「田中様に」とかいておいたので、彼女は一ト目見るなり、さつと顔を赤めた。私はれいの節穴から一心に見詰めてゐた。恐ろしい好奇心に瞳を燃しながら、彼女の一擧一動を見逃すまいとして――かの女は顔を赤めた瞬間、すぐに稲妻のやうな迅速な驚愕を目にあらはしながら四邊を見廻した。見るうちに彼女の手や膝頭や、それらの一切の肢體が烈しく震えた。彼女はおそるおそる手紙をとると、その瞬間、一種の狡猾な表情と落着きとを現はして、表と裏とを見くらべたりして封を切つた。讀んだ。その刹那彼女の眼は實に大きく一時にびつくりしたやうな色を帶びた。そして讀み終るとすぐさま手紙を懐中へねぢ込んで、まるで蹴飛ばされたやうに急いで雪駄をつきかけると突然駈け出した。寺の門のところで一寸振りかへつて見た。これは本當に二分間もかからなかつた間のことである。

私はそのうしろ姿を見てゐて、非常に寂しい氣がした。私はああするより外書方がなかつたのだ。彼女は驚きと極度の恐怖との中に駈け出したのだ。あれで彼女が正しくなれば私の書いたことはよかつたのだ。彼女は怨んでゐるにちがひなからう。これより永く彼女が寺へくることになれば、私も同じ苦しみ盗みの道に踏み迷はなければならないのだ。

私は「なぜああいふ美しい顔をして、ああいふ汚ないことをしなければならないか。」といふことを考へたり、また、ああいふ手紙をかいたものが私であるといふことを知つてゐるだらうかなどと考へ込んだ。しかし私は自分の持ち物を

そつくり棄ててしまつたやうな術ない寂しさに閉されはじめた。しかし私はその日から父の金箪笥に手をふれることをしなくなつた。幸ひ私のやつたことは判らなかつたので、私はいつかは父に謝まる時があるだらうと、それきり、あの重い箪笥のそばへも寄らなかつた。

私は間もなく、毎時、彼女のやつてくる午后三時ころになると、境内をあちこち歩いたりして、もうあれきり來なくなつたのを非常に寂しく感じた。小さくお太皷に結んだ紅い帯地の模樣を、時々、あたまの中で靜かに考へ出しては、ぼんやり栂の老木の根元にしやがんで、二時間も三時間も高い頂に登つたり下りたりしてゐる蟻の行列を眺めたりしてゐた。私はなぜ、彼女にああいふ手紙をやつて注意したのか、なぜ、あのまま彼女を毎日寺の方へ來させて置かなかつたのか。しかし段々考へると、うちのものに見付けられるより私が發見したのはよかつたのだ。私はどうにもならないやきもきした感情で永い間、來もしない彼女の姿を門内の長廊下や、堂前の板敷の上に描き出して、白いえくぼのある手や、盛りあがつた座り工合を想像した。さういふとき、私は一言も話したこともない彼女との間に、ふしぎに心で許し合つたやうなもの、お互の弱點をつき交ぜたものが彼女との隔離を非常に親しく考へさせた。

私はどうかしてもう一度彼女を見たいと思つた。ああいふ手紙をやつたものが私であるといふ卑しい報告によつて、明らかに彼女の胸に私が救ひ主であることを辯解させたいと思つた。その一面には、彼女が自分の惡事を看破られた理由から、あるいは、私を却つて憎々しく考へるにちがひないといふ不安もあつたが、ともかく、私はもう一度彼女を見たいと云ふ欲求に燃えた。

彼女は私だちの町のすぐ裏になつてゐる、お留守組町に住んでゐることを私は知つてゐた。加賀藩の零落れた士族の

多く住んだ町で、ちやうど彼女の家は前庭のある低い平家で、それも古い朽ちはてた屋根石のあひまあひまには、まだ去年の落葉を葺き換えない貧しい家であつた。小さい柴折戸のやうな門構えのなかは、すももと拓榴とが二三本立つてゐて、拓榴の小さいやつが實りはじめにゐた。

家のなかはしんとしてゐて、臺所口に水の音がちやぶちやぶしてゐた。私はそのとき、すぐ胸がおどおどして直覺的に彼女が臺所に居るやうな氣がした。水を何かにかける音がざあーとすると、こんどはタワシでごしごし桶のやうなものを洗つてゐる音がした。私はすぐさま、あの白い餅のやうに柔らかい靨穴のたくさん彫られた手を思ひ出して、またそのそこまでしんとしてその美しい形ちや凹みを描いた。

彼女がうちにゐるといふ事實をたしかめるに有力な證據としては、紅い鼻緒の立つた籐表の女下駄が、日ぐれどきの玄關のうすら明りに、ほんのりと口紅のやうに浮んでゐるのを見たときを、たしかに家にゐると云ふことが感じられた。それは、あの紅い緒の下駄をいつも彼女がはいては寺へ參詣にやつて來たからであつた。堂前のだんだんにいつも脫いであるのを殆んど私は毎日のやうに眺めもしてゐたし、あざやかに私は頭にきざみ込まれてゐたからである。

臺所口に格子の小窓がついてゐて、そこに黑い濃い束髮が動いてゐるのを見たとき、疑ひもなく彼女であることを知つた。私は胸がわくわくするのと、音を立てないで通りに立つて居るのとで、膝がしらがぶるぶる顫へるのを、おさへるやうにしてゐたが、砂利に下駄が食ひ込んでがりがりと音を立ててしまつたので、はつと汗を掻いた。そのとき、彼女はふいと小窓から通りを見て、私の立つてゐるのを見ると何だか顏色をかへたように思はれた。それがいかにも袈裟箱をこじ開けたときの彼女とは、全く別な美しい顏であつて、その大きな目さへ、嚴格に正面から私を瞠めたのである。

私はその大きな、艶透な目の光を感じると同時に、いくらか肉肥りした姿のよい鼻と脣と、多血質な美しい皮膚とを

射るやうに視線のなかに感じた。それらの喜ばしい艶やかな雑作は一瞬の間に、彼女が卑しい盗みをやつたことを思はせたが、やはり、そのときとは別な、美しい女性としての威光をもつて、ぶしつけに垣のそとに立つてゐる私を譴責するもののやうに思はれた。私は一目見たいといふ望みが充たされたばかりでなく、彼女のこころよい皮膚の櫻色した色合ひがしつとりと今心にそそぎ込まれたやうな満足をかんじた。「あの人の盗みをしたことと、あの人の美貌とは決して係つてゐない。あの人はいつまでも美しい。そして盗みはみにくい。別々なものだ。」と私は考へ込んだりした。然してまた「あの人は美しいから盗みをしても不快ではないのだ。美しい手で錠をこじあけたから私は惹きつけられたのだ。」――私はさういふことを考へながら、そつと柴折戸を離れた。私はそのとき要垣の朱い葉を二つ三つ千切(ちぎ)つた。その深い茜に近い朱色な葉ツ葉のなかにも、彼女の皮膚の一部を想像することができたからである。

私は裏町から通りへ出て、犀川のへりの方を歩いた。磧の草叢は高く茂り上つて、橋の腹にまでとどいて、水は涸れ込んでゐた。鐵橋の方は殆んど岸もわからないほどの一面の草原になつて、涼みかたはら歩く人も多かつた。私はそれらの景情にひたりながらも、さきから引き續いた女の幻影を、こんどは、かへり途にもう一度見たいといふ執念強い要求のもとに縛りつけられて、私はまた、あの裏町へ歩いて行つた。

間もなく彼女の家近くまで來ると、胸さわぎと同時に急に早足で歩かなければならないやうな、足は足で、別に命令されたもののやうな歩き方をしてゆくのであつた。そこの柴折戸の前までくると、いきなり玄關の格子戸が開いて、彼女は何處かへ外出するらしい他所行着(よそゆき)をして出かかるのと、私の眼とぴつたりと突き當つた。私は思はず赤くなつて目を伏せると、彼女はにつと微笑したやうに思はれた。氣のせいであつたのか、それとも一種の幻惑の種類であつたのか、ともかく、彼女の厚い唇もとから鼻すぢへかけて、深い微笑の皺が縒れこんだことは實際であつた。それと同時にいき

なり柴折戸のところへやつてくるので、私はいそいで、今來た道へ引き返すやうな樣子をした。彼女は例のやうに柴折戸をあけると、私とは反對な道へ行つた。ふりかへると、もう一町もさきへ行つて、向ふからも振りかへつた。

私はあんな手紙などやらなければよかつたやうな氣がし出した。そして彼女の弱點につけ込んでゆくやうな卑しさ恥づかしさが度を増して、彼女が町角をまがつて見えなくなつてしまつたあとで、ひとりで顏が赤くなつた。

寺の記帳場では

「近頃ちつとも彼の女が來ないやうですね。あの人が來なくなつてから、間違ひがなくなつたが、やはりあの女は怪しい――。」と記帳の年寄が言つた。

「だつて僕が幾度も發見してゐたけれど、怪しいことがなかつたんだもの。」

と言つておいた。しかし心の内では、年寄連が私のああした仕事を知つてゐるらしくも思はれたりして、いつも、いい加減に座をはづすのであつた。

私は机に向つてゐるときでも、よくあの女の皮膚の一部や、粗雜なだけ親密になれるやうな物腰、それとははつきり判らなかつたが、印象の深い微笑などがあの日から目にうかんで來て、我知らず、お留守組町まで用もないのに歩くことがあつた。たとへば、玄關先の雪駄の紅い鼻緒にしろ、要の若葉の朱いのにしろ、その前庭の土の工合までが、一つ一つ懷しいもののやうに目に觸れてくるのであつた。ことにああいふ盜みなどをするといふ大膽さの底の底には、きつと優しい、私の心を容れてくれるものが湛えられてゐるやうに思はれた。

私はその日もふらふらと釣られるやうに彼女の家の前までくると、家の内部は寂然として、氣のせいか女の聲らしい話しごえがしてゐるやうであつた。前の庭はきれいに掃いてあつて、柘榴の蔭にはおいらん草が裏町の庭らしく乏しい

花をつけてゐるのが、わけても今日はなつかしく眺められた。しづかな家の内部はいかにも彼女の溫かい呼吸や、血色のよい櫻色した皮膚に彩色せられたやうに、そこに何ともいはれぬ溫かい空氣が漂ふてゐるやうに思はれた。

いつまで立つてゐても、人のけはひがしないので、私はすごすごと去らうとするとき、庭の石のところに、糸屑を丸めたのが打棄てられてあるのが、その紅や白の色彩ともとに、ふいと目にとまつた。それがどういふ原因もなしに、ふいとほしくなり出した。しかし其處まで這入るときはどうしても柴折戸を開かねばならなかつたので、私はしばらく考へてゐたが、急に柴折戸をそつとあけた。柴折戸はべつに音も立てなかつたので、私は十歩ほど忍び足になつて、糸屑を拾ふことができた。

糸屑はいろいろな用にたたないのを丸めにあつたので、彼女を忍ぶよすがもなかつたが、そのふわふわした筋ばつた小さい玉を、握りしめて見ると、何かしら一種の女性に通じてゐる心持ちが、たとへば無理に彼女の手なり足なりの感覺の一部をそこに感じられるやうに思はれるのであつた。その紙屑を拾ふときに殆んど突然に玄關先に脫ぎすててある紅い緒の立つた雪駄をほしいやうな氣がしたのは、自分ながら意外であつた。何といふことなしに、その雪駄の上にそつと自分の足をのせて見たら面白いだらうといふ心持ちと、そこに足をのせればまるで彼女の全身の溫味を感じられるやうに思はれたからである。私は子供のときから姉の雪駄をはいてはよく叱られたものであるが、それよりも、もつと强い烈しい秘密な擽ぐつたいやうな快よさが、きつと私が雪駄に足をふれさせた瞬間から、私の全身をつたはつてくるにちがひない。恰度、踵からだんだん膝や胸をのぼつてきて、これまで覺えたこともない美しいうつとりした心になるにちがひないと、私は雪駄をじつと怨めしく眺めたのであつた。それは誰でも男は女の下駄を思はず引つかけて見たい一種の好奇心があるやうに、私の場合では、籐表のところで思ふさま手を探つて見たいやうな、も一つはその雪駄を緒は緒、

裏は裏、齒は齒といふ順序にばらばらに壞して見たいやうな慘忍に近い氣持ちが、また、ふいに顏を出して來たりした。

も一つ心の奧からの惡戯の萌さしかけたのは、ともかく私がこの庭まで忍び込んだといふ證據として、また、その事實を彼女に何かしら知らしめたいといふことから、彼女の雪駄を片足だけ（私はこの場合兩方が决して欲しくなかつた。）盗んでみたらとさへ思ふやうになつたのである。それは一つには私があの雪駄を盗んでも、それはきつと彼女に發見されても、許して貰へる理由をつかんでもゐたし、また彼女としてそれを叱責しないやうな氣もするのであつた。玄關には格子戸が閉つてゐるので、それを開ければきつと音がするに定つてゐるし、音がすれば誰か出てくるにちがひないといふ不安があつた。私はどうして格子戸を開けたらいいかといふことを考へた。それに人通りのすくない裏町であるとはいへ、やはり途切れながらも通る人があつた。さういふときは、やはり散步する人のやうにゆつくりと步いて見せて、人が通つて行つてしまふと、いそいで私は玄關の内部を狙ふた。そこには紅い緒の雪駄が、もはや雪駄以上な別な値のあるもののやうに、べつな美しい彼女の肢體の一部分を切離して、そこに据えつけてあるやうな、深い惱ましい魅力をもつて私を釘づけにしたやうに立たせるのであつた。

私はそのとき、何者かがゐて急に私に非常な力を注ぎこんだやうな戰慄を感じながら、あたりの人通りに注意した。ちやうど途絶えた其隙に私は何者かから背後から押し込まれたやうに柴折戸を辷り込んで、そつと玄關の格子戸に手を觸れると、私はまるで雷に打たれたやうな顫えが全身に荒い脈搏をつたへたのを知りながら、少しづゝ格子を開けはじめた。格子戸は思つたよりも靜かに、特に軋むといふこともなく二寸三寸と開かれて行つた。もう私の小さな體軀をよこにして這入れるやうにまで開けると、私は裸足になつて玄關の中へ這入りこんだ。そとは異つたひいやりした濕り氣のある涼しい空氣と、庭のたたきの冷たみとが踵裏から全身につたはつてきて私はなほ烈しい慄えをかんじた。私は見た。

そこにあつた紅い緒の下駄を――いきなりそつと掴むと殆んど夢か幻の間に格子をするりとぬけて庭から、柴折戸を潜つて外へ出た。そのとき柴折戸に着物が引つかかつたので無理に引いたので、柴折戸はやや高い軋るやうな音を立てた。私はそのとき殆んど眼まひを感じながら一散にかけ出した。

寺へかへると、私は懐中から女下駄をとり出した。まだ新しい籐表のつやつやしたのであつた。私はそれを凝乎と見詰めてゐると不思議にこの雪駄を盗み出したことが、非常に恐ろしい罪悪のやうに暫くでも持つてゐてはならないやうな、追つ立てられるやうな不安と焦燥とをかんじ初めた。まるでそれは一つの肉體のやうな重さと、あやしい女の踵の膏じみた匂ひとを漂はした。私はそれを懐しげに眺めるといふよりも、自分がなぜかういふものを盗む氣になつたかといふことを考へた。私は机の下に入れて置いたが、ふいと父にでも見つけられてはと思ひ、こんどは縁の下の暗いところへ蜘蛛の巣と一しよに押し込んで置いたが、その暗いところにありありと隱されてあるのが目にうかんで落ちつけなかつた。私はしまひにはどうしても此雪駄を持つてゐるうちはほつと落ちついて座つてゐることさへ出來なかつた。

私の心はだんだん後悔しはじめた。どんなに彼女が捜してゐることだらう。そしてもし私のしたことだと判明すれば私は彼女と同じい罪を犯したも一般だ。私は恐ろしくなりはじめた。私は縁の下からまた取り出して土を拂つて、そつと懐中へ入れて、また寺を出て行つた。彼女の家の前へ來たのは、殆んど前に忍び込んだときとは一時間ほどの後であつたので、家の中はやはり寂然としてゐた。私はそつと柴折戸から入つて、玄關へ雪駄をそつと挿し込むやうに入れて置いて、すぐに通りへ出た。さきの位置に雪駄を置くときは、格子を一尺近くあけなければならなかつたので、私は犬でもいたづらしたやうにみせるために、すぐ閾のよこに置いたのであつた。奥のたたきの上には、つれに離れた片方の雪駄が寂しさうにひとりで、やがて來るつれを待つてゐるやうに取り殘されてゐた。

私はそののち暫らく外出をしないで、室にばかり籠つてゐた。殆んど自分でも豫期しないあゝした發作的な惡戯をしてからといふものは、たえず外出をすれば何者かに咎められるやうな氣がして仕様がなかつた。だんだん日が經つにしたがつて、私のあゝした惡戯が眞實に行はれたことがどうかといふことさへ疑はしく思はれた。

もちろん彼女はもう寺の前をも通らなかつた。私は父を本堂へ上るときに手を引いたり、茶の湯の水汲みをやつたりしてゐた。寺にはあやしい御符といふ加持祈禱をした砂があつてよく信者がもらひにやつて來た。わづか五粒か六粒ほどづつ紙につつんで、清い水で嚥むと、ふしぎに滯きものや、硬ばつた死人が自由に柔かくなるといふ藥餌であつた。私はそれを見るごとに不思議な氣がした。

もう一つは「おくじ」をひきに來る女が多かつた。此市街でもかなり名のある日本畫家の中年の母親は、いつも娘の縁談があるごとに、父に伺ひにきて、そして「おくじ」を引いて判斷してもらつてゐた。その娘は有名な美しい娘であつた。いつも母親と一しよにお觀音にお詣りにきた。奇體なことは、この古いお城下町は古くから佛教信者が多かつた。それは年寄ばかりではなく、若い娘をもつ母親は、もう娘の六つか七つの時にお寺詣りにつれてあるいて、娘らのこころに信仰を築きあげることや、宗教が女の生活に最も必要なことを教へたり、あるいはお寺詣りに據つてこれらを暗示したりしてゐた。その畫家の娘は實に凄いほど色の白い、どこか肺病のやうな弱々しい惱ましさを顔にもつてゐた。

母親はいつも父に

「こんどの嫁入口はたいがい良い方なんでございますが、念のため「おくじ」を引いて下さいませんか。」

と言うて父に「おくじ」を引かせた。父は本堂から下りて來て、

「おくじにあらはれたところは、あまり思はしくないんですけれど、あなたさへよければお嫁入りさせたらいいでせ

う。」

と言つた。それは畫家の妻がもう三年越しに娘の幸福な嫁入口をさがして歩いて、いつもおくじを引くと凶が出るので、父も氣の毒に思つて然う言つたのであつた。

「まあ、おくじが悪いんですか。」

と言つて彼女はいつも失望したばかりではなく、折角の縁談も中止するのが常であつた。私はいつもあの「おくじ」一本によつて人間の運命が決定される馬鹿々々しさと、それを信ぜずに居られない母親のかたよつた心を氣の毒に思つてゐた。

「あゝ人はおくじを引きにくるけれど、おくじを信じることができない人だ。」

と父が言つてゐた。

私は先月父にこんなことをおくじに引いてもらつた。あたるかあたらないかを私自身ではつきり見たいためもあつた。

「東京へ送つた書き物がのるかのらないかを見て下さい。」と。

父は本堂から降りて來て

「出る。たしかに出る。」と言つた。何んだか父が私が失望しはせぬかといふ懸念のためにいい加減に言はれたやうな氣がした。

「本當ですか。どんな「くぢ」なんです。」

「旭の登るが如しと言ふのぢや。」

と言つて、竹の札（くち箱にはそれが百本入つてゐて、一本づゝ振ると出て來る。その偶然が人人にとつての運命になつてゐる。）を見せた。それには文字通りの「ト吉」が出てゐた。

そして私の詩が印刷された。私はそれからは信じきれないうちにも、時々信じるやうになつてゐた。神秘に近いものが毎時おくじに現はれてゐるやうにさへ思ふのであつた。米の相場師などがよく朝早くやつて來た。「吉」が出ると、

「買つていいんですな。本當にいいんですな。」

と血眼になる人もあつた。「おくじ」の出たとほりにやつて儲かつた人は、よく大きな金燈籠や眞鍮の燭臺や提灯などを運んでお禮を述べに來たりした。

若い藝者などはよく緣の有無を判斷しにもらひに來た。父は、どんな人にも口數をきかなかつた。要領だけ言つていつも奧へ這入ることが多かつた。

そのころから十年前に寺の庫裡から失火して、屋根へ火がぬけたことがあつた。まだ宵のくちであつたから、火はすぐに揉み消すことが出來た。けれどもあとで氣がつくと父の姿が見えなかつた。搜すと父は本堂の護摩壇で般若經を誦んでゐた。と目擊した人は、「あの小さいお上人さんがまるで鐘のやうな聲でお經をよんでゐたのは本當に凄かつた。」とあとで言つてゐた。

「お前お茶をあがらんか。」

と、父は私の讀書してゐる室へ呼びにくることがあつた。寂しいほど靜かな午後になると、さういふ父も寂しさうにしてゐた。

「え。どちそうになります。」

父の室へはいると相變らず釜鳴りがしてゐた。父はだまつて茶をいれて服ませた。それに菓子などが添へられてあつた。父は草花がすきで茶棚には季節の花がいつも挿されてあつた。

「お前も早く成人しなければいかん。」

、などと時折に言つた。

私は父の顔を凝視するごとに、この父もきつと世を去るときがあるにちがひない。それも近いうちにあるにちがひないと云ふ觀念をもつた。そしてなほつくづくと父の顔を眺め悲しんだ。

父の立てた茶は温和にしつとりした味ひと湯加減の適度とをもつて、いつも美しい緑のかぐはしさを湛えてゐた。それは父の優しい性格がそのまま味ひ沁みて匂ふてゐるやうなものであつた。

父はいつも一個の朱銅の瓶かけを爐の外にも用意してあつた、大きさから重さから言つても實に立派なものであつた。

父はいつも

「わしが死んだらお前にこの瓶かけを上げやう。」

と言つてゐた。そして時をり絹雑巾で朱銅の胴を磨いてゐた。私もほしいと思つてゐた。(父の死後、私はこの瓶掛を貰つた。いまはこの郊外の家の私の机のそばにある。)

表の評判は惡かつた。表が劇場や緣日を夜歩きをすると、町の娘らは道を譲るやうに彼を避けるほどになつてゐて、みな、うしろから指をさしながら、この優しい不良少年を恐がつた。女學校などでもたいがい表の名前が知れてゐたらしかつた。

そのころ、表は公園のお玉さんといふ、掛茶屋の娘と仲よくしてゐた。藤棚のある小綺麗な、噴水の池が窓から眺められる茶店で、私もよく表につれられて行つた。お玉さんはメリンスの前掛れをしめてゐて、表とはいつの間にか深い交際をしてゐた。

よく表と二人で散歩のときによると

「けふはお母さんが留守なんですから、ゆつくりしてゐらしやいましな。」

などと言つた。表はさういふとき

「然う、では露助にもらつた更紗をM君に見せてあげなさい。M君はあんな巾類が大變すきなんだなら。」

「さうですか。ではお見せしますわ。」

と言つて、いろいろな布類のはいつた交ぜ張りの、いかにも娘のもつらしい箱をもつて來たりした。ちやうど露西亞の捕虜がゐるころで、みんなこの茶店へ三時の散歩にはやつて來たもので、なかにひどく惚れこんでゐたのもあつた。

「これなんぞ隨分きれいでせう。」

それは眞正のロシア更紗で、一面の眞紅な地に白の水玉が染め拔かれてあつた。なかにはこまかな刺繍を施した布面に高まりを見せた高價なハンカチなどがあつた。それから古い銀の十字架細工のピンなど、實に立派なものが多かつた。

表はそんなとき

「戰爭にゆくのによく此麼ハンカチなぞ持つてゐたもんだね。やつぱり露西亞人はのんびりしてゐるね。」

と言つた。私は

「そして捕吏がいつも來るんですか。」とたづねると

「え。散歩の時間になりますと入らしやいますの。」

と言つて、表に氣をかねてお玉さんは默つた。表はそんなとき不機嫌にしてゐた。そして午後三時ごろになると表はやけた調子で、

「もう三時だ。散歩の時間だ。かへらう君。」

と、表は焼け氣味な皮肉を言つて出てゆくのであつた。まだ十七になつたばかりのお玉さんは、何か言ひたいやうな可憐な寂しい目をして見送つてゐた。表には此處でビールをのんでもいつもお玉さんが家の前をとりつくらうてくれて拂はせなかつた。

私はお玉さんが非常に表を愛してゐると思つた。あのおどおどした目つきが、いつも表の一擧一動毎にはらはらしてゐるさまが見えたからである。そしてあいふ可憐な娘にはいつも非常に愛される質を彼はもつてゐた。やり放しのやうで、それでゐて、いつも深い計劃のもとに働くのは表の巧みな、女にとり入る術であつた。

ある日のこと、表の不在中、警察から高等刑事が來て、表の平常の生活を調べて行つたりした。そして巡査がやつて來て、夜あまり外出させてはいけないと母親に言つて行つたと、あとで表は笑ひながら言つてゐた。けれども表はやはり縁日や公園へ行つてはお玉さんを誘ひ出したりして、永く夜露に打たれたり、更けて歸つたりしてゐた。

ある日、表をたづねると、かれはすこし蒼いむくんだやうな顔をしてゐた。そして

「君、僕はやられたらしい。」

と私に言つた。

「肺かね。しかし君はからだが丈夫だから何んでもないよ。氣のせいだ。」といふと

「さうかなあ――。」

と、かれは考へ込んでゐた。

そして私どもはよくお玉さんのところへ出かけた。もう私はビールの味を知つてゐた。私どもにお玉さんを加へて、時々默つて永い間座つてゐることがあつた。そんなときは、きつと表がお玉さんと二人きりで話したいといふ心になつてゐることが、私にもう判るやうになつてゐた。

そんなとき、私だけさきにかへつた。お玉さんは坂の上まで送つてきたりした。

「またいらしてくださいましなね。」

「ありがとう。表はからだをわるくしてゐるやうだから、ビールをあまりすすめない方がいいね。」

「えゝ。私もすこし變に思つてゐますの。時々厭な咳をなさいますもの」

「だいぢにしてお上げ。さよなら。」

「さよなら。」

と別れた。

そういふ日は、表は默つて拜むやうな目を私にしてゐた。私はなぜだか表の弱々しい一面が好きであつた。あの大膽な女たらしのやうな男に、何ともいへない柔らかい微妙な優しさがあるのを私は戀に近い感情をもつて接してゐた。私は晩など、お玉さんによく握られたらしい彼の手を强く握つたものであつた。柔らかい併し大きい手であつた。

私はかれの病氣は眞正の肺であることを疑はなかつた。頬がだんだんに赤みを帶びてゐるのが不自然であり、その微

候でもあるらしく思つた。

かれは「文庫」で短篇を發表してゐた。

「晩などよく呼びに來るんだよ。口笛を吹いてね。」

と、表はお玉さんが呼出しにくるのを嬉しさうに言つてゐた。あの西町の靜かな裏町の夕方などに、表の家の前を往つたり來たりして口笛を吹くお玉さんの下町娘らしい姿を私はよく浮彫りにするやうに、心で描いた見た。それに表はお玉さんができてから、よその女にはあまり目をかけなくなつてゐた。かういふ二人の間のやさしい愛情を私は詩のやうに美しい心になつて考へてゐた。決して妬ましいといふ心など微塵も起らなかつた。ああいふ可憐な女性によつて。あの友の顏までが心と一しよに美しくなるやうにさへ思はれるのであつた。

ある日、私は久しぶりで表をたづねた。かれは奥の間に床をとつて臥てゐた。

「とうとう床についてしまつた。」

と青い顏をしてゐた。わづかの間にかれは非常に瘠せ衰へてゐた。

「今朝ね。もう柿の葉が散り出したのを見て、非常に寂しくなつてしまつた。」

と言つた。

庭には鳳仙花がもう咲いてゐた。

「君がねやうとは思はなかつた。當分外へ出ないんだね。」

「しばらく養生するつもりだ。今死んではたまらない。もつと色々なものを書きたくて耐らない。」

と力強く言つた。唇ばかりが熱で乾いて赤く冴えてゐた。

「お玉さんは知つてゐるのかい。君の臥たことをね。」

「いや知らないらしい。でね。夕方などよく呼びにくるんだよ。口笛が合圖になつてゐるんで、來てゐてもはらはらするの。出たいけれど出られないしね。母の前もあるしね。」

「お母さんは知らないのか。」

「感づいてゐないらしい。すまないけれど君が會つて來て僕のことを話してくれないか。」

「ぢや今日歸へりによつてあげやう。」

私は凝然と狹い庭をながめてゐた。そして心の中で柿の葉が散つたのを見て寂しくなつたといふ友のことを考へた。

私どもはしばらく默つてゐた。

「僕はどうしても死なないやうな氣がするんだ。死ぬなんてことがありさうもないやうにね。」

表は私の顔をぢつと見た。弱い精のつきたやうな眼の底に何かしらぎらぎらと感情的な光を見せてゐた。私はそれには答へないで默つてゐると

「君はどう思ふかね。死の豫則といふものがあるものだらうか。」

「さあ。僕はいまどうと言つて言へないが、死の瞬間にはあるだらうね。」

「死の瞬間――死の間際だね。」

とかれはまた考へ沈んだ。かれはまた永い間經つて言つた。

「僕はお玉さんのことを母に言はうとして言へないよ。僕はあのことを言はないで置きたいのだ。母にも姉にも心配をかけ通しだからね。」

私も時々表のお母さんにいつそ言つた方がよ　ないかと考へたが、やはり言ひ出せなかつた。表の顔を見ると決していへないやうな氣がした。いろいろな自由な生活をした放埒さがどうしてもお母さんに今更ら表に女があるといへなかつた。

「そうね。言はない方がいいね。知れる時には知れるからね。」

「知れる時には知れる——」

と表は口ごもつて神經的に目をおどおどさせた。私は表が殆んど此前に會つたときよりも、非常に神經過敏になつたことや、少しづつあの大膽なやり放しな性格が弱つてゆくのがだんだん分つて來た。

　私は間もなく暇を告げて立ちかけると

「明日來てくれるかね。」

「明日はどうだか分らない。來られたら來るよ。」

「來てくれたまへ。臥てゐると淋しくてね。待つてゐるからね。」

と、私の顔をいつもにもなく靜かではあつたが、强く見詰めた。私はややうすくなつた友の髮を見ると、急に明日も來なければならないと思つた。

「きつと來るよ。それに「邪宗門」が着いたから持つてくるよ。」

「あ。邪宗門が來たのか。見たいなあ。今夜來てくれたまへ。」

　表は急に昂奮して熱を含んで言つた。

「明日來るから待つてゐたまへ。さやうなら。」

「きつとね。」

私は街路へ出ると深い呼吸をした。

公園の坂をあがりかけると、もう蟬の聲もまばらになつて、木立が空いて見えた。私はお玉さんの茶店へよつた。折よくお玉さんが出て來た。私は何かしら顏が赤くなつたやうな氣がした。いつも會つてゐたけれど一人のときはすくなかつたからである。

「いらしやいよし、よくこそ。」

とお玉さんは、なめらかな言葉で言つた。しばらく見ない間に餘計に美しく冴え冴えした顏をしてゐた。

「表はとうとう床につきました。けふ寄つてきたんですが――さう言つておいてくれとのことでした。しかし大したことはないんです。」

と私は言つた。

「まあ。わたしもそんな氣がしてをりましたの。そしてひどいことはないんでせうかしら。」

「え。しかしだいぶ痩せました。」

私どもは暫く默つてゐた。突然お玉さんが言つた。

「やつぱりあの病氣でせうか。あの病氣は仲々なほらないさうですつてね。」

「十に九までは駄目だと言ひますね。しかし表君はまだそれほど心配するほどでもありませんよ。」

お玉さんの目ははや濕つてゐた。生一本な娘らしい涙をためた美しい目は、私の感じやすい心を惹いた。そして女は

涙をためたりするときに、へいぜいより濃い美しさをもつものだといふことを感じた。

「こんど何時いらしやいますの。」

「明日もゆきます。お言傳があつたら言つて下さい。」

お玉さんは稍々ためらつてゐたが、

「どうぞね。おだいぢになすつて下さいと言つて下さいまし。わたしもお癒りになることをお祈りしてをりますから。」

「そ言つてをきます。」

私は表とお玉さんの交情が、あたかも美しい物語りめいたもののやうな氣がして、私の表にたいする懐しい友愛は、とりもなほさずお玉さんを愛する情愛になるやうな氣がするのであつた。二人をならべて見るとき、私のかたよつた情熱はいつもこの二人をとり揃へて眺めることに、より劇しい滑らかな愛をかんじるのであつた。

「あなたは本當に表を愛してゐるのでせうね。」

と私は思はず言つた。そしてお玉さんが顏を赤めたとき、言はなくともよいことを言つたと思つた。

「ええ。」

と、お玉さんは低い聲ではあつたが、心持ちのよい聲で言つた。そして、

「うちのものがうすうす知つてゐて、ずいぶんなことを言ひますけれど……。」

私は力をこめて、

「表はいい人です。永くつきあつてあげて下さい。」

「ありがたうございます。」

と涙ぐんだ。

私は間もなく別れを告げた。藤棚の下の坂道を下りかけると、見送つてゐたお玉さんがいそいで走つて來て、そしてもぢもぢし乍ら

「あの―わたしお願ひがございますの。」

と低い聲で言つた。

あたりはもう暮れかけて、涼しさが少し寒さを感じさせるほどになつてゐた。お玉さんはぴつたり私により添つて、

「いちど逢はして下さいまし。」

と、思ひ詰めたやうに言つた。彼女の顔から發散する溫かみが遠い炭火にあたるやうに、私の頬につたはつた。それに烈しい髮の匂ひがした。

「それは私も考へてゐるんですけれど、表はそとへ出られないし、あなたは公然と訪ねて行けませんしね。」

「ほんとに私わがままを言ひましたわね。ごめんなさいましね。」

彼女はぢつと地べたを眺めて言つた。その細いきやしやな頸首がくつきりした白さで、しづかに呼吸につれてうごいた。

「わたし、わるうございました。失禮します。」

と、彼女は坂を上つて行つた。重い足どりが坂を下りて行く私にきこえなくなると、私は何氣なく振りかへると、お玉さんは停つて私の方を見送つてゐた。その愁はしげな姿は私をして胸をおもくした。

私は翌朝、父に妻の病氣の一日も早く全快するやうに誦經して異れるやう賴んだ。父は、法衣を肩にまきつけながら

「あのお人かい。そりやお氣の毒だ。お經をあげませう。」

と言つて本堂へ上つて行かれた。私もぢつと父の誦經が降るやうにきこえる下の壇で、一心に靜かに祈つてゐた。どうにもならない病氣とは知りながらも、何故かよそから力が加はることを信ぜずには居られなかつた。父の枯れ込んだ腹の底からな聲は、古い本堂の鐸鈴にひびいたりた。嚴そかな一時間がすぎた。

父は本堂を降りて來られた。その顏は憂はしげな、なにか不吉なものの豫言に苦しめられてゐるやうであつた。

父は言つた。

「おいくつかね。」

「十八なんです。」

「實はね。お經中にお燈明が消えてしまつたのぢや。その方はむつかしいやうだね。時々さういふお燈明のきえたことがあるが、そんなときはむつかしいね。」

と、父は私の顏をみつめた。

「ほんとうでせうか。」

「疑ひなさんな。」

と言葉すくない父は次の茶室へ這入つて行つた。私は信じていいか惡いかを決めることができなかつた。

午後、私はしきりに妻のことが考へられて仕方がなかつた。病み衰えた靑白い顏が目にうかんだ。それが靜かに室の隅の方で私の名を呼んだ。「安生君」といふ聲がきこえた。私はすぐに友を訪ねるために外へ出て行くのであつた。

私は果物をすこし買つた。

友の家の前で私は永い間、聽耳を立てて何事か起つては居はしないかと從ふてゐたが、家の中は寂しく靜かにあつた。ときどき力のない咳の音がした。私はその音をきくと、どんと胸を小衝かれたやうな恐怖をかんじた。やはり惡いのだなと思ひながら入つた。

表は私の顏を見ると嬉しさうに、飛びかかるやうに言つた。

「よく來てくれたね。今朝から表の方で下駄の音がすると、君が來てくれたのかと幾度も幾度も立ちかけたんだ。――君はいま表でじつと內の樣子をきいてゐたらう。下駄の音が突然やんだので分つたよ。」

私はぎくりとした。けれども嘘はいへなかつた。

「ずいぶん過敏になつてゐるね。」

と私は表のお母さんが座をはずした際に、

「昨日お玉さんに會つて話しておいたよ。」

「そう。ありがとう。」

と、表は私から報告される言葉を期待してゐるやうに、目をかがやかした。

「あの人は君を愛してゐるね。君がねてゐると言つたら、だいじにして與れるやうに言つてゐたよ。」

表は默つてゐた。

「でね。いちど逢ひたいつて――僕は何だか氣の毒だつた。ほんとに優しい人だね。君は仕合だ。」

「でも女はわからないよ。心の底はどうしても分らないよ。」

「でも君の人は君を心から愛してゐるよ。感謝したまへ。」

表はいつかしたやうな疑ひ深さうに、自分の手を見つめてゐたが、

「僕だつて愛されてゐると思ふが、何故か信じられなくつてね。僕はいろいろなことを考へると生きたいね。早く癒つてしまひたいね。」

「きつとよくなるよ。林檎をやらんか。」

「ありがとう。少しやらう。」

私は林檎の皮をむき出した。林檎はまつかな皮をだんだんにするするとむかれて行つた。表はそれを眺めてゐたが、

「こんど手紙をもつて行つてくれたまへ。たのむから。」

と、やや明るい言葉でいつた。

「いいとも。かきたまへ持つて行くから。」

「その林檎はいい色をしてゐるね。」

「あ。」

私達はこの柔らかい果物をたべてゐた。突然また表が云つた。

「逢ひたい氣がするね。」

「よくなつてからさ。」

この西町の午後は靜かで、そとの明るい日光が小さい庭にも射し入つてゐた。私はそれを見てゐたが、約束の邪宗門を出して見せた。

「もう出たんだね。」

妻は手にとつて嬉しさうに見た。草刷のやうな羽二重をまぜ張つた燃ゆるやうなこの詩集は彼を逸さめた。感覺と異國情調と新しい官能との盛りあがつたこの書物の一ページ毎に起る高い鼓動は、友の頬を紅く上氣せしめたのみならず、友に強い生きるちからを與へさへした。

友はこの書物をよこに置いて、

「此間短かいのを書いたから見てくれ。」

とノートを出して見せた。ノートも藥が沁み込んで、頁をめくるとパツトその匂ひがした。私はしばらく見なかつた作品を味ふやうにして讀んだ。

* * * * * *

この寂しさは何處よりおとづれて來るや。
たましひの奥の奥よりか
空とほく過ぎゆくごとく
わが胸にありてささやくごとく
とらへんとすれど形なし。
ああ、われ、ひねもす座して
わが寂しさに觸れんとはせり。
されどかたちなきものの影をおとして。

わが胸を日に日に衰へゆかしむ。

* * * * * *

私はこの詩の精神にゆきつまつた寂の孤獨になやまされてゆく友を見た。しかも彼は一日づつ何者かに力を掠められてゆくもののやうに、自分の生命の微妙な衰へを凝視してゐるさまが、私をしてこの友が死を否定してゐながら次第に肯定してゆくさまが、讀み分けられて行くのであつた。

「病氣になつてから書いたんだね。」

「四五日前にかいたのだ。やはりその氣持から離れられないのだ。」

私だちはまた暫らく默つてゐた。彼はその間に二三度咳をした。ちからのない聲は、私をして面をそむけさせた。私はときどきは傳染(うつ)はしないだらうかといふ不安を感じたが、しかしすぐに消えて行つた。

私は間もなく別れてかへつた。かへるときにひどく發熱してゐた。

もう夏は殘る暑さのみ感じられるだけで、地上の一切のものは凡て秋のよそほひに急ぎつつあつた。寺の庭の萩がつぼみをもつたり、桐が重さうに梢にさがり出した。けれども土は乾き切つて白かつた。なぜかそれらを見てゐると、夏の終りから秋の初めに移る季節のいみじい感情が、しつとりと私のこころに頭りかかつてくるのであつた。

秋のお講連中が三十三ケ所の札所廻りに、よく私の寺の方へもやつてきた。寂しい白の脚袢をはいた女連れのなかに、若い娘だちも雜つてゐた。それらの連中が觀音さんのお堂の前で御詠歌を誦んで去ると、賑やかで寂しい一と頻りの騷ぎが過んだあとゆゑ、ことに秋らしい淋しさを感じるのであつた

私は毎日詩作してゐた。友が病んだ後は私一人きりな孤獨のうちに、さえた自分の心と一しよに生活をするやうに、

川近い書齋にこもつてゐた。

その日も表をたづねた。この友は四五日見ない間に非常に瘠せ込んで、もう臥たきりで起き上らなかつた。

「どうかね。きつと快くなると信じて居れば快くなるもんだよ。」

と言ふと、かれは白いやうな、淋しい微笑を浮べた。それが自分の病氣を嘲けつてゐるやうにも、また私が彼の病氣にかかはつてゐないことを冷笑してゐるやうにも受とれるのであつた。深刻な、いやな微笑であつた。

「どうも駄目らしく思ふよ。こんなに瘠せてしまつては……」

と友は手を布團から出して擦つて見せた。蒼白い弛んだつやのない皮膚は、つまんだら剝げさうに力なく見えた。

「ずいぶん瘠せたね。」

と私は痛々しく眺めた。

「それからね。お玉さんと君と友達ちになつてくれたまへな。僕のかはりにね。この間から考へたんだ。」

と、かれは眞摯な顏をした。私はすぐ赤くなつたやうな氣がしたが、

「そんなことはどうでもいいよ。快くなれば皆して又遊べるぢやないか。何も考へない方がいいよ。」

「さうかね。」

と力なく言つて咳入つた。

と、彼は突然發熱したやうに上氣して、起き直らうとして言つた。

「僕がいけなくなつたら君だけは有名になつてくれ。僕の分をも二人前活動してくれたまへ。」

私はかれの目をぢつと見た。眼は病熱に輝いてゐた。

「ばかを言へ。そのうち快くなつたら二人で仕事をしやうぢやないか。」

と、はげましたが、友はもう自分を知つてゐたらしかつた。あのやうな衰へやうはこの頑固な友の強い意志を挫いた。

しかし彼はまた言つた。

「僕が君に力をかしてやるからね。二人分やつてくれ。」

と私はすぐに答へた。

「僕は一生懸命にやるよ。君の分もね。十年はやり通しに勉強する。」

と、私はつい昂奮して叫んだ。

二人は日暮れまでこんな話をしてゐた。間もなく私はこの友に暇を告げてそとへ出た。そとへ出て私は胸が迫つて涙をかんじた。秋も半ばすぎにこの友は死んだ。

喪の葬ひの日は彼岸に近い寂しく白々と晴れた午後で、いよいよ柩が家を出るとき、お玉さんが近所の人込みの間に小さく挟まれたやうにひつそりと唯一人で見送つてゐるのが、いぢらしいその涙ぐんだ眼とともに私の目にすぐに映つた。参詣人といつてもわづか四五人の貧しい葬ひは、長々とつづいた町から町を練つて野へ出て行つた。野にはもう北國の荒い秋の野分が吹きはじまつて、桑の道つづきや、里芋の畑の間を人足どもの慌しい歩調がつづいた。

喪の短かい十七年の生涯は、それなりでも、かなりな充實した生涯であつた。私はかれがいろいろな悪辣な手段をもつて少女を釣つたり、大膽な誘惑をしかも何等外部から拘束せられることなく、また少しも顧慮しないで衝き進んだこともだんだん私の心の持ちやうにも染みてゆくところがあつた。しかしまた一面には何ともいはれない[illegible]をもつて

ゐたことも忘られないことであつた。

葬ひが濟んでから、私は家へかへつて寂しい日を送つて行つた。ある日、公園のお玉さんのところへ行つて見るやうな氣になつた。いちど行こうと思ひながらも、死んだ友人の愛した女を訪ねてゆくといふことが、しきりに氣が咎めてしかたがなかつた。一つには、もう表も居なくなつたから、却つてゆつくりお玉さんと話しができるといふ邪魔者のない明るい心持と、表もいろいろな悪いことをやつたのだから、私があの人と交際したつて關ふものかといふ心と、もう一つは、死んだ魂の前にたいする深い耻づかしさとが、私をしてつい彼女を訪ねさせなかつた。

もう公園の芝草のさきが焦げはじめて、すすきや萩の叢生したあたりに野生の鈴蟲のなきさかるころで、高い松の群生したあたりをあるくと、自分の下駄の音が、一種のひびきをもつほど空氣が透つた午後であつた。

茶店へよると、お玉さんが出て來た。そのしほらしい赤い襷もよく冴えて、はつきりと目にうつつた。

「よくいらしつて下さいましたわね。」と言つて、彼女はいちはやく私を見ると、すぐ表を思ひ出して涙ぐんだ。私も二人きりで會つたことがよけいないだけ、すぐに彼女の眼の濕ふたのに誘はれながら、やや胸が迫るやうな氣がした。

私たちはいろいろなことを話した。死んだ表がたえず私たちの間に、しよんぼり座つてゐるやうにも思はれたりした。そして、いつか「お玉さんと交際してくれたまへ。君となら安心できるから」と表が言つたことを思ひ出した。よその人となら僕は死にきれないが君となら安心できると言つた表は、自分でさう言ひながら寂しい顏をした。

「これから時々いらしつて下さいまし。わたし本統にお友だちがないんですから。」

と、彼女は言つた。人間一人の死は、私と彼女との間にはさまつて、ことに娘らしい弱い彼女をだんだんに安心させて私に近づかせてくるやうであつた。私は私で、表の死んだのを餌にしてゐるやうな心苦しさを氣にしながら、なれや

すい優しい女の性からくる親しみをすこしづつ感じた。

「あの方のことはもうおしやらないで下さいまし。わたしいろいろなことを思ひ出して悲しくなりますから。」

と言つた。私はそれをきくと、彼女ができるなら少しでも表のことを忘れるやうにつとめてゐるのを感じた。私はそれが物足りない氣がした。また一方には死んだものをいつまでも慕ふてゐることも、しほらしい彼女にとつてはしかたがないことであつたが、なんだかこれまで經驗したことのない妬ましさをもかんじた。

「表さんの病氣はうつるつて言ひますが本統でせうか。」

とお玉さんは言つた。それと同時に私も表と一しよによく肉鍋をつついたり、酒をのんだりしたことを思ひ出して、自分にも傳染してはゐないかと、一種の寒さを感じた。

「食べものからよく傳染ることがありますね。からだの弱い人はやはりすぐにうつりやすいやうです。」

と言ひながらも、いつか表が咳入つてゐたとき、蚊のやうな肺病の蟲が、私の座つたところまでぱつと廣がつたやうな氣のしたことを思ひ出した。そのときは、なに傳染るものかといふ氣がしたし、友に安心させるためにわざと近々と顏をよせて話したことも、いま思ひ出されてきて、急に怖氣がついてきて、とりかへしのつかないやうな氣がした。

「わたし此ごろ變な咳をしますの。顏だつて隨分蒼いでせう。」

といふのを見ると、はじめて會つたころよりか、いくらか水氣をよくんだやうな青みを帶びてゐるやうに思はれた。そして私はすぐに表と彼女との關係が目まぐるしい程の迅さで、二つの魂の結ばれてゐるさまを目にうかべた。あの美しい詩のやうな心でながめた二人を、これまでいちども感じなかつた或る汚なさを交へて考へるやうになつて、妬みまでが烈しくずきずきと加はつて行つた。いま此處にかうした眞面目な顏をして話をしてゐながら、「

き友に開いて見せたかと思ふと、あの執拗な病氣がすつかり彼女の胸にくひ入つてゐることも當然のやうに思へるし、また何かしら可憐な氣も起させてくるのであつた。また一面には小氣味よくも感じ、それをたねに脅かして見たいやうな、いらいらした氣分をも感じてくるのであつた。そうかと思ふと、彼女と表と關係があつたために、このごろ毎日家で責められてゐて、すこしも寛ろいだ氣のするときのないことや、よく表に融通したかねのことなどで絶えず泣かされることをきくと、私は「表もずいぶん酷いやつだ。」と考へるやうにもなつた。

「みんな私がわるかつたんですから、わたしあの方のことなんかすこしも怨みません。」

と言つて私を見た。

「表ももすこし生きて居れば、何とかあなたのことも具體的にできたのでせうけれど。」

と私は言ひながらも、いつも表の感情が決して的確な地盤の上で組み立てられてゐないことを、ことにお玉さんの身の上にもかんじた。表にただ享樂すればよかつた。表は未來や過去を考へるよりも、目の前の女性をたのしみたかつたのだ。私は表のしてゐたことが、表の死後、なほその犧牲者の魂をいじめ苦しめてゐることを考へると、人は死によつてもなほそそぎつくせない瀆罪のあるものだといふことを感じた。本人はそれでいいだらう。しかし後に殘つたものの苦しみはどうなるのだらうと、私は表の生涯の短かいだけ、それほど長い生涯の人の生活だけを短かい間に仕遂して行つたやうな運命の猾るさをかんじた。

「このごろ死ぬやうな氣がしてしやうがないんですの。」

「あんまりいろいろなことを考へないやうにした方がいいね。」

「でもわたし、ほんとにそんな氣がしますの。」

と、女のひとにありがちな、やさしい死のことを彼女も考へてゐるらしかつた。私はまたの日を約して別れた。

十一月になつて、ある日、どづと寒さが日暮れ近くにしたかと思ふと、きうに大つぶなカツキリした寒さを含んだ霰になつて屋根の上の落葉をたたいた。その烈しい急霰の落ちやうは人の話し聲もきこえないほどさかんであつた。私は書院の障子をあけて見ると、川の上におちるのや、庭のおち葉をたたきながら刎ねかへる霰はまるで純白の玉を飛ばしたやうであつた。私は毎年この季節になると、ことにこの霰を見ると幽遠な氣がした。冬の一時のしらせが重々しく叫ばれるやうな、慌しく非常に寂しい氣をおこさせるのであつた。父は茶室にこもりはじめた。しづかな釜鳴りが襖越しに私の室にまでつたはつて來た。「お父さんはまたお茶だな。」と思ひながら私は障子をしめた。梅が香の匂ひがどの室で焚かれてゐるのか、ゆるく、遠く、ただやふてきた。

私は夕方からひつそりと寺をぬけて出て、ひとりである神社の裏手から、廓町の方へ出て行つた。廓町の道路には霰がつもつて、上品な絹行燈のともしびがあちこちにならんで、べに塗の格子の家がつづいた。私はそこを小さく、人に見られないやうにして行つて、ある一軒の大きな家へはいつた。

「先日は失禮しました。どうぞお上りなつて下さいまし。」

と、二階へ案内された。私はさきの晩、なりの高い女を招んだ。私はただ、すきなだけ女を見てをればだんだん平常の餓えがちなものを埋めるやうな氣がした。

「金比羅さんの坊ちやんでしたわね。いつかお目にかかつたことのある方だと思つてゐたんですよ。」

と言つて、小さい妹藝者を振りかへつて笑つた。私はいつも彼女を寺の境内で、そのすらりとした姿をみたときに逢

つて話したいと思つてゐて、かうしてやつて來て、いつも簡單に會へるのがうれしかつた。

「雨のふるのによく入らしつたわね。」

と、彼女は火鉢の火を掻いた。この廓のしきたりとして、どういふ家にもみな香を焚いてあつた。それに赤襟といはれてゐる美しい人形のやうな舞妓がゐて、姉さんと一しよに座敷へやつてくるのが例になつてゐた。

「お酒を召しあがりになりますの。」

と、彼女はちよいと頷いた。

「すこしやれるんだから、とつて下さい。」

と、このごろ少しくやれる酒を言ひ付けた。

「あなたはいつも默つてゐるのね。」

と、女は手持無沙汰らしく言つた。私はべつに話すこともなかつたし、妙に言葉が円まひしたやうにいへなかつた。それにこの廓町へはいると、いつもからだが震へてしかたがなかつた。ことに女と話してゐると、その濃厚な大きい顔の輪廓や、自分に近くどつしりと座つてゐるのを見ると、一種の押されるやうな美しくもあやしい壓迫をかんじた。それがだんだん震えになつて、指さきなどがぶるぶるしてくるのであつた。お玉さんなどと會つてゐても身に感じなかつたものが、いつも此處では感じられてくるのであつた。

「ぢつとしていらしやい。きつと震えないから。」

と女は言つたが、ぢつと力をこめてゐてもやはり手さきが震へた。こらへれば、こらへるほど烈しい震ひやうがした。

そこでは、いつも時間が非常に永いやうな氣がした。たとへば女と私とが僅か三尺ばかりしか離れてゐないために、

女のからだの悩ましい重みが、すこしづつ、その美しい間いぼたぼたした座り工合からも、谷間からな曲線からも、ことにその花々しい快活な小鳥のくちのやうに開かれたりするところからも、一種の魅力をもつて、たへず私の上にのしかかるやうで、弱い少年の私の肉體はそれに打ちまかされて、話をするにも、どこかおづおづしたところがあるのに氣がついた。

「變ね。昨日もおまゐりに行つたとき、あなたがもしも境内にでも出ていらしやらないかと思つて、しばらく廊下にゐましたの。」

「僕は奥にゐるからめつたに外へ出たことがない――。」と、女がなんだか、ありさうもないことを言つたやうで變な氣がした。それにしきりに先刻から寺のことが考へられて仕方がなかつた。父のことや、父を欺して貰つて來た金のことなどが、たへず頭のなかで繰り返されて來て、落ちつかなかつた。たとへば私のこんな遊びをしてゐる間に、ひよつとしたことから火事でも出たら大變だといふ懸念や、何か特別な災災が起つて來さうに思はれて仕方がなかつた。ことに北國はでな座敷のいろいろな飾り立てや、女のもつて來た三味線や、業々しく併べ立てられた果物の皿などが、寺の靜かな部屋とくらべて考へると、ここに座つてゐるだけでも非常な惡いことのやうな氣がした。しまひには、ひとりで顔が蒼くなるほど煩さく種々なことを考へ出して胸が酸つぱくなつて一時も早く歸へらなければならないやうな氣がした。

「僕は今夜はすこし急ぐから。」

と言つて立ち上つた。

「もつとゆつくりしたつていいぢやありませんか。あまり晩くなるとお家へいけないでせうが、でもまだ九時よ。」

と引止められても、私はどうしても歸へらなければならない氣がして、外へ出た。

寺へ歸へると、父の顏が正視できないやうな、今までゐたところをすつかり父が知つてゐるやうな氣がした。

「だいぶ遲いやうだが若いうちは夜あまり外出しない方がいいね。」

と、父がやさしく言ふ。

「つい友達のところで話し込んでしまつたものですから。」

と、逃げるやうに自分の室へはいるのであつた。

自分の室はすぐ椽から犀川の瀨の音がするところにあつた。今夜はなぜかその瀨の音までが、いつものやうにすやすやと自分をねむらせなかつた。私はながい間目をさましながら、もつと女のところに居ればよかつたとも考へた。

「あなたのやうなお若い方はおことはりしてゐるのですが、おうちをよく存じ上げてゐるものですから……」

といふおかみまでが、しみじみした、これまでにない或る種類の人情をかんじた。しかし私は座敷へ呼んで見た女が、どうしても寺へお詣りに來て、いつもちやんと座つて熱心な祈願に燃えてゐる有様と、まるで別人のやうな氣がしてならなかつた。その合掌して、目を閉ぢて頻りにすすり泣くやうなこゑをあげて祈つてゐるのが、帳場にゐてもそれときき分けられるほど、鋭い艶々しい性慾的であるのに、會つてゐると、あれほどの刺戟性もなければ美しさもなかつた。それに彼女の銀杏返しが本堂內で見るとき、天井から吊しさげられた奉納とか獻燈とか書いた紅提灯との調和が非常によく釣り合つてゐるのにくらべて、目の前で見てゐると、ただの女のやうで味氣なかつた。私の求めて行つたものがいつも失はれてゐるやうな氣がした。

その結果、私はもう行くまいと考へたり、自分がああいふところに行くやうになつたことを非常にわるいことに考へられて仕方がなかつた。

私はひとり机に向つてゐるときでも、いろいろな戀の詩をかいたり、または、いつまでも一つところを見て、何をするといふこともなくぼんやりしてゐることが、多かつた。妙にからだ中がむづがゆいやうな、頭の中がいらいらしくなつて、たへず女性のことばかり考へられてくることが多かつた。たとへば自分の蒼白い腕の肉をじつと見つめたり、伸ばしたり曲げたりしながら、それが或る美しい曲線をかたちづくると、そこに强烈な性慾的な快感を味つたり、自分で自分の堅い白い肉體を吸つて見たりしながら、飽きることのない惱ましい密室の妄念にふけつてゐるばかりではなく、ときとすると、新聞の廣告に挿入されたいまはしい半裸體の女などを見ると、自分の內部にある空想によつて描かれたものの形までが手傳つて、永い間、それを生きてゐるもののやうな取扱ひに心は惱みながら、快感の小さい叫びをあげながら、その美しい形ちを盛りあげたり、くずしてみたりするのであつた。

朝々の目ざめはいつもぼおつとした熱のやうなものが、瞼の上に重く蜘蛛の巣のやうに架つてゐて、拂はうとしてもとりのけられない霞のやうなものが、そこら中に張りつめられてゐるやうで、懶い、毎日がつづいた。

私はふらふらとそとへ出た。

霰が二三度ふつてきてから、國境の山々の姿は日に深く、削り立てたやうな、厚い積雪の重みに輝いてゐた。磧の草はすつかり穂を弱しながら、いまは、蕭々とした荒い景色のなかに顫えて、もう立つことのない季節のきびしい風に砥がれてゐた。誰しも北國に生れたものの感じることであるが、冬のやつてくる前の息苦しい景色の單調と靜止とは、ひとびとの心にまで乘りうつつて、なにをするにも鈍な、かじかんだところが出てくるのであつた。

向河岸の屋根は曇つた日のなかに、そらと同じい色にぼかされ、窓々の障子戸ばかりがさむざむと水面に投影してゐるのが眺められた。私はそれから坂をあがつて、公園の方へ出た。

冬のはじまりは公園の道路に落ちしかれた落葉にも、掛茶屋のぴつたり閉めきつた障子戸にも、刈り込められた秋の坊主株が曲水のあちこちに寂しくとり殘されたあたりにも感じられた。葉をふるひおとした明るい雜林に交つて咲いたさざんかの冷かに零れた土の濕り氣は、もう、いつでも凍れるやうな荒さを夜毎の降霜や、霰にいためられながら、處々にむくれ上つてゐた。

私はその疎林を透して、やや下地になつた噴水の方を見た。たたた……たたた……と水面をたたいて落ちる飛沫は、小さい其處にあるつつじの葉ツ葉をぬらして、たへまなく、閑寂な、冷やかな單調な音をつづつてゐた。私はしやがんで、表がよくここらでお玉さんとあひびきしたことを考へた。すぐ噴水のそばに彼女の家があつたが、ひつそりと靜まりかへつた障子戸のうちは、深い山里の家のやうな寂しさを私に思はせた。ことにこの頃になると散歩する人もなくなつてゐたから、いたづらに掃く園丁の忠實な仕事振りも、ただ、そこらの道路をひとしほ寂しく白々と眺めさせるのみであつた。

私はお玉さんの家の前へ行つた。そして「ごめんなさい」といふと、なかからひそひそ聲がした。それは誰の聲とも分らなかつたが、なぜかしら不安な氣をおこさせた。そのひそひそ聲が止むと、お玉さんのお母さんが出てきた。二三度あつてゐて知つてゐた。

「入らしやいまし。」と言つたが、私はその母なるひとの顏を見ると、何か取り込んだ落ちつかぬ色を見た。「お玉さんは」

といふと母親は私のそばへ寄るやうにして

「實は先日からすこし加減をわるくして寢(やす)んでゐますので……」

といはれて、私はぎつくりした。すぐ、この前に會つたときの蒼い水氣をふくんだ顏をすぐ思ひ出した。「うつつたな」

というふ心のなかの叫びは、すぐに「やられたな」とつぶやいた。

「よほどお悪いんですか。」

「え。よかつたり悪かつたりして、お醫者では永びくだらうと言つてらしやいましたが、やはり表さんと同じい病氣だと思ふんでございますよ。」

と言つた。いくらか皮肉なところもあつたので、私は

「お大切になさい。どうかよろしく言つて下さい。」

と、すぐ表へ出た。

私は途々、あの恐ろしい病氣がもうかの女に現はれはじめたことを感じた。私自身のなかにも、あの病氣がありはしないだらうかといふ不安な神經をやみながら、あの小さい少女らしい可憐な肉體が、しづかに家に横臥へられてゐることを考へると、やはり表のやうに、とても永くないやうな氣がした。私はじつと噴水のたへまなく上るのを見ながら沈んだ心になつて、公園の坂を下りて行つた。「わたしこのごろ死ぬやうな氣がしますの。」

と此間云つてゐた言葉が、眞實にいま彼女の上に働きかけてゐることを感じた。



妖婆續篇

芥川龍之介

その晩も亦新藏は惡夢ばかり見續けて、碌々眠る事さへ出來ませんでしたが、それでも夜が明けると、幾分か心に張りが出來したので、砂を嚙むより味のない朝飯をすませると、早速泰さんへ電話をかけました。「莫迦に、早いぢやないか。僕のやうな朝寢坊の所へ、今時分電話をかけるのは殘酷だよ。」――泰さんは實際まだ眠むさうな聲で、かう苦情を申し立てましたが、新藏はそれには返事もしないで、「僕はね、昨日の電話の一件があつて以來、とても便々と家にやゐられないからね。これからすぐに君の所へ行くよ。いゝえ、電話で君の話を聞いた位ぢや、とても氣が休まらないんだ。好いかい。すぐに行くからね。」と、だだつ子のやうに云ひ張つたさうです。この興奮し切つた口調を聞いちや、泰さんも外に仕方がなかつたのでせう。「ぢや來給へ。待つてゐるから」と、素直に答へてくれたので、新藏は電話を切るが早いか、心配さうな母親にもむづかしい顏を見せただけで、何處へ行くとも斷らずに、ふいと店を飛び出しました。出て見ると、

空はどんよりと曇つて、東の方の雲の間に赤銅色の光が漂つてゐる、妙に蒸暑い天氣でしたが、元よりそんな事は氣にかける餘裕もなく、すぐ電車へ飛び乘つて、すいてゐるのを幸と、まん中の座席へ腰を下したさうです。すると一時恢復したやうに見えた疲勞が、意地惡くまだ殘つてゐたのか、新藏は今更のやうに氣が沈んで、まるで堅い麥藁帽子が追々頭をしめつけるのかと思ふ程、烈しい頭痛までして來ました。そこで氣を紛せたい一心から、今まで下駄の爪先ばかりへやつてゐた眼を、隣近所へ擧げて見ると、この電車にも亦不思議があつた。――と云ふのは、天井の兩側に行儀よく並んでゐる吊皮が、電車の動搖するのにつれて、皆振子のやうに搖れてゐますが、新藏の前の吊皮だけは、始終ぢつと一つ所に、動かないでゐるのです。それも始は可笑しいな位な心もちで、深くは氣にも止めませんでしたが、その內に又誰かに見つめられてゐるやうな、氣味の惡い心もちが自然に强くなり出したので、こんな吊皮の下に座つてゐるのが、いけないのだらうと思ひましたから、向う側の隅にある空席へわざ〳〵移りました。移つて、ふと上を見ると、今まで搖れてゐた吊皮が、突然造りつけたやうに動かなくなつて、その代りさつきの吊皮が、さも自由になつたのを喜ぶらしく、勢よくぶらつき始めたぢやありませんか。新藏は毎度の事ながら、この時もやはり頭痛さへ忘れる程、何とも云へない恐怖を感じて、思はず救ひを求める如く、外の乘客たちの顏を見廻しました。と、斜に新藏と向ひ合つた、何處かの隱居らしい婆さんが一人、黑絽の被布の襟を拔いて、金縁の眼鏡越しにぢろりと新藏の方を見返したのです。勿論それはあの神下しの婆などとは何の由緣もない人物だつたのには相違ありませんが、その視線を浴びると同時に、新藏は忽お島婆さんの靑んぶくれの顏を思ひ出しましたから、もう矢も楯もたまりません。いきなり切符を車掌へ渡すと、仕事を仕損じた掏摸より早く、電車を飛び降りてしまひました。が、何しろ凄まじい速力で、進行してゐた電車ですから、足が地についたと思ふと、麥藁帽子が飛ぶ。下駄の鼻緒が切れる。その上俯向きに前へ倒れて、膝頭を摺

剝くと云ふ騷ぎです。いや、もう少し起き上るのが遲かつたら、砂煙を立てて走つて來た、何處かの貨物自働車に、轢かれてしまつた事でせう。泥だらけになつた新藏は、ガソリンの煙を顏に吹きつけて、橫なぐれに通りすぎた、その自働車の黃色塗の後に、商標らしい黑い蝶の形を眺めた時、全く命拾ひをしたのが、神業のやうな氣がしたさうです。

それが鞍掛橋の停留場へ一町ばかり手前でしたが、仕合せと通りかかつた辻車が一臺あつたので、兎も角もその車へ這ひ上ると、まだ血相を變へた儘、東兩國へ急がせました。が、その途中も動悸はするし、膝頭の傷はづきづき痛むし、おまけに今の騷動があつた後ですから、いつ何時この車もひつくり返りかねないやうな、緣起の惡い不安もあるし、殆ど生きてゐる空はなかつたさうです。殊に車が兩國橋へさしかかつた時、國技館の天に朧銀の緣をとつた黑い雲が重なり合つて、廣い大川の水面に蜆蝶の翼のやうな帆影が群つてゐるのを眺めると、新藏は愈自分とお敏との生死の分れ目が近づいたやうな、悲壯な感激に動かされて、思はず淚さへ浮めました。ですから車が橋を渡つて、泰さんの家の門口へやつと梶を下した時には、嬉しいのか、悲しいのか、自分にも判然しない程、唯無性に胸が迫つて、けげんな顏をしてゐる車夫の手へ、方外な賃錢を渡す間も惜しいやうに、倉皇と店先の暖簾をくぐりました。

泰さんは新藏の顏を見ると、手をとらないばかりにして、例の裏座敷へ通しましたが、やがてその手足の創痕だの、綻びの切れた夏羽織だのに氣がついたものと見えて、「どうしたんだい。その體裁は」と、呆れたやうに尋ねました。「電車から落つこつてね、鞍掛橋の所で飛び降りをしそくなつたもんだから」「田舍者ぢやあるまいし、――氣が利かないのにも、程があるぜ。だが何だつて又、あんな所で、飛び降りなんぞしたんだらう。」――そこで新藏は電車の中で出會つた不思議を、一々泰さんに話して聞かせました。すると泰さんは熱心にその一部始終を聞き終つてから、何時になく眉をひそめて、「形勢愈非だね。僕はお敏さんが失敗したんぢやないかと思ふんだが」と獨り言のやうに云ふのです。新藏は

お敏の名前を聞くと、急に又動悸が高まるやうな氣がしましたから、「失敗したんぢやないかつて？　君は一體お敏に何をやらせようとしたんだ。」と、詰問する如く尋ねました。けれども泰さんはその間には答へないで、「尤もかうなるのも僕の罪かも知れないんだ。僕がお敏さんへ手紙を渡した事なんぞを、電話で君にしやべらなかつたら、あの婆も僕の計畫には感づかずにゐたのに違ひないんだからな。」と、如何にも當惑したらしいため息さへ洩らすのです。新藏は愈々たまらなくなつて、「今になつてもまだ君の計畫を知らせてくれないと云ふのは、あんまり君、殘酷ぢやないか。そのおかげで僕は、二重の苦しみをしなけりやならないんだ。」と、聲を震はせながら怨じ立てると、泰さんは「まあ」と抑へるやうな手つきをして、「そりや重々尤もだよ。尤もだと云ふ事は僕もよく承知してゐるんだが、あの婆を相手にしてゐる以上、これも已むを得ない事だと思つてくれ給へ。現に今も云つた通り、僕はお敏さんへ手紙を渡した事も、君に打明けずに默つてゐたら、もつと萬事好都合に、運んだかも知れないと思つてゐるんだ。何しろ君の一言一動は、皆お島婆さんにや見透しらしいからね。いや、事によると、この間の電話の一件以來、僕も隨分あの婆に睨まれてゐないもんでもない。が、今までの所ぢや、兎に角僕には君程の不思議な事件も起らないんだから、實際僕の計畫が失敗したのかどうか、それがはつきり分るまでは、いくら君に恨まれても、一切僕の胸一つにおさめて置きたいと思ふんだ。」と、諭したり慰さめたりしてくれました。が、新藏はさう聞いた所で、泰さんの云ふ事には得心出來ても、お敏の安否を氣使ふ心に變りのある筈はありませんから、まだ險しい表情を眉の間に殘した儘、「それにしても君、お敏の體に間違ひのあるやうな事はないだらうね。」と、突つかかるやうに念を押すと、泰さんもやはり心配さうな眼つきをして、「さあ」と云つたぎり、暫くは思案に沈んでゐましたが、やがてちよいと次の間の柱時計を覗きながら、「僕もそれが氣になつて仕方がないんだ。ぢやあの婆の家へは行かないでも、近所まで偵察に行つて見ようか。」と、思ひ切つたらしく云ふので

す。新藏も實は悠長にかうして喋りこんでゐるのが、氣が氣でなかつた所ですから、勿論いやと言ふ答はありません。そこですぐに相談が纏つて、もの五分と經たない内に、二人は夏羽織の肩を並べながら、匆々泰さんの家を出ました。

所が泰さんの家を出て、まだ半町と行かない内に、ばたばた後から駈けて來るものがありますから、二人とも、同時に振返つて見ると、別に怪しいものではなく、泰さんの店の小僧が一人、蛇の目を一本肩にかついで、大急ぎで主人の後を追ひかけて來たのです。「傘か。」「へえ、番頭さんが降りさうですから御持ちなさいましつて云ひました。」「そんならお客様の分も持つてくりや好いのに。」――泰さんは苦笑しながら、その蛇の目を受取ると、小僧は生意氣に頭を掻いてから、とつてつけたやうに御辭儀をして、勢よく店の方へ駈けて行つてしまひました。さう云へば成程頭の上にはさつきよりも黑い夕立雲が、一面にむらむらと滲み渡つて、その所々を洩れる空の光も、まるで磨いた鋼鐵のやうな、氣味の惡い冷たさを帶びてゐるです。新藏は泰さんと一しよに歩きながら、この空模樣を眺めると、又忌しい豫感に襲はれ出したので、自然相手との話もはづまず、無暗に足ばかり早め出しました。ですから泰さんは遲れ勝ちで、始終小走りに追ひついては、さも氣忙しさうに汗を拭いてゐましたが、その内にとうとうあきらめたのでせう。新藏を先へ立たせた儘、自分は後から蛇の目の傘を下げて、時々友だちの後姿を氣の毒さうに眺めながら、ぶらぶら歩いて行きました。すると二人が一の橋の袂を左へ切れて、お敏と新藏とが日暮に大きな眼の幻を見た、あの石河岸の前まで來た時、後から一臺の車が來て、泰さんの傍を走り拔けましたが、その車の上の客の姿を見ると、泰さんは急に眉をひそめて、「おい、おい」と、けたたましく新藏を呼び止めるぢやありませんか。そこで新藏もやむを得ず足を止めて、不承々々に相手を見返りながら、うるささうに「何だい」と答へると、泰さんは急ぎ足に追ひついて、「君は今、車へ乘つて通つた人の顏を見たかい」と、妙な事を尋ねるのです。「見たよ。痩せた、黑い色眼鏡をかけてゐる男だらう。」「

―新蔵はいぶかしさうにかう云ひながら、又さつさと歩き出しましたが、泰さんは更にひるまないで、前よりも一層重々しく、「ありやね、君、僕の家の上華客で、鍵惣つて云ふ相場師だよ。僕は事によるとお敏さんを妾にしたいと云つてゐるのは、あの男ぢやないかと思ふんだがどうだらう。いや、格別何故つて譯もないんだが、ふとそんな氣がし出したんだ」と、思ひもよらない事を云ひ出しました。が、新蔵はやはり沈んだ調子で、「氣だけだらう」と云ひ捨てた儘、例の桃葉湯の看板さへ眺めもせずに歩いて行くのです。と、泰さんは蛇の目の傘で二人の行く方を指さしながら、「必しも氣だけぢやないよ。見給へ。あの車はお島婆さんの家の前へ、ちやんと止つてゐるぢやないか」と、得意らしく新蔵の顔を見返しました。見ると實際さつきの車は、雨を待つてゐる葉柳が暗く條を垂らした下に、金紋のついた後をこちらへ向けて、車夫は蹴込みの前に腰をかけてゐるらしく、悠々と梶棒を下ろしてゐるのです。これを見た新蔵は、始めて浮かぬ顔色の底に、かすかな情熱を動かしながら、それでもまだ懶げな最初の調子を失はないで、「だがね、君、あの婆に占を見て貰ひに來る相場師だつて、鍵惣とかの外にもゐるだらうぢやないか」と面倒臭さうに答へましたが、その内にもうお島婆さんの家と隣り合つた、左官屋の所まで來かかつたからでせう。泰さんはその上自説も主張しないで、油断なくあたりに眼をくばりながら、まるで新蔵の身をかばふやうに、夏羽織の肩を摺り合せて、ゆつくり、お島婆さんの家の前を通りすぎました。通りすぎながら、二人が尻眼に容子を窺ふと、唯ふだんと變つてゐるのは、例の鍵惣が乘つて來た車だけで、これは遠くで眺めたのよりもずつと手前、丁度左官屋の水口の前に太ゴムの轍を威かつく止めて、パットの吸殻を耳にはさんだ車夫が、尤もさうに新聞を讀んでゐます。が、その外は竹格子の窓も、煤けた入口の格子戸も、乃至はまだ葭戸にも變らない、格子戸の中の古ぼけた障子の色も、すべてが何時もと變らないばかりか、家内もやはり日頃のやうに、陰森とした靜かさが罩もつてゐるやうに思はれました。まして萬一を僥倖をして來た、お敏の姿

らしいものは、あのしほらしい紺絣の袂が、ひらめくのさへ眼にはいりません。ですから二人はお島婆さんの家の前を隣の荒物屋の方へ通りぬけると、今までの心の緊張が弛んだと云ふ以外にも、折角の當てが外れたと云ふ落膽まで背負はずにはゐられませんでした。

所がその荒物屋の前へ來ると、淺草紙、龜の子束藁、髮洗粉などを並べた上に、蚊やり線香と書いた、赤提燈が、一ぱいに大きく下つてゐる——その店先へ佇んで、荒物屋のお上さんと話してゐるのは、紛もないお敏だらうぢやありませんか。二人は思はず顔を見合せると、殆一秒もためらはずに、夏羽織の袖を翻しながら、つかつかと荒物屋の店へはいりました。そのけはひに氣がついて、二人の方を振り向いたお敏は、見る見る蒼白い頬の底にほのかな血の色を動かしましたが、さすがに荒物屋のお上さんの手前も兼ねなければならなかつたのでせう。軒先へ垂れてゐる柳の條を肩へかけた儘、無理に胸の躍るのを抑へるらしく、「まあ」とかすかな驚きの聲を洩らしたとか云ふ事です。すると泰さんは落着き拂つて、ちよいと麥藁帽子の庇へ手をやりながら、「阿母さんは御宅ですか。」と、さりげなく言葉をかけました。「はあ、居ります。」で、「あなたは？」「お客様の御用で半紙を買ひに——」——かう云ふお敏の言葉が終はらない内に、柳に塞がれた店先が一層うす暗くなつたと思ふと、忽ち蚊やり線香の赤提燈の胴をかすめて、きらりと一すぢ雨の糸が冷たく斜に光りました。と同時に柳の葉も震へるかと思ふ程、どろどろと雷が鳴つたさうです。泰さんはこれを切つかけに、一足店の外へ引返しながら、「ぢやちよいと阿母さんにさう云つて下さい。私が又見てお貰ひ申したい事があつて上りましたつて——今も御門先で度々御免と聲をかけたんだが、一向音沙汰がないんでね、どうしたのかと思つたら、肝腎の御取次が此處で油を賣つてゐたんです。」と、お敏と荒物屋のお上さんとを等分に見比べて、手際よく快活に笑つて見せました。勿論何も知らない荒物屋のお上さんは、かう云ふ泰さんの巧な芝居に、氣がつく筈もありませんから、

「ぢやお敏さん、早く行つてお上げなさいよ」と、氣忙しさうに促すと、自分も降り出した雨に慌てて、蚊やり線香の赤提灯を匆々とりこめに立つたと云ひます。そこでお敏も、「ぢや叔母さん、又後程」と挨拶を殘して、泰さんと新藏とを左右にしながら、荒物屋の店を出ましたが、元より三人ともお島婆さんの家の前には足も止めず、もう點々と落ち來る大粒な雨を蛇の目に受けて、一つ目の方へ足を早めました。實際その何分かの間は、當人同志は云ふまでもなく、平常は元氣の好い泰さんさへ、愈運命の賽を投げて、丁か半かをきめる時が來たやうな氣がしたのでせう。あの石河岸の前へ來るまでは、三人とも云ひ合はせたやうに眼を伏せて、見る間に土砂降りになつて來た雨も氣がつかないらしく、無言で歩き續けました。

その内に御影の狛犬が向ひ合つてゐる所まで來ると、やつと泰さんが頭を擧げて、「此處が一番安全だつて云ふから、雨やみ旁々、この中で休んで行かう」と、二人の方を振り返りました。そこで皆一つ傘の下に雨をよけながら、積み上げた石と石との間をぬけて、ふだんは石切りが仕事をする所なのでせう。石河岸の隅に張つてゐる蓆屋根の下へはいりました。その時は雨も益凄じくなつて、竪川を隔てた向う河岸も見えない程、まつ白にたぎり落ちてゐましたから、この一枚の蓆屋根位では、到底洩らずにすむ譯もありません。のみならず、霧のやうな雨のしぶきも、濕つた土の匂と一しよに、濛々と外から吹きこんで來ます。そこで三人は蓆屋根の下にはいりながらも、まだ一本の蛇の目を賴みにして、削りかけた儘になつてゐる、門柱らしい御影の上へ、目白押しに腰を下しました。と、すぐに口を切つたのは新藏です。

「お敏、僕はもう御前に逢へないかと思つてゐた。」――かう云ふ内に又雨の中を斜に蒼白い電光が走つて、雲を裂くやうに雷が鳴りましたから、お敏は思はず銀杏返しを膝の上へ伏せて、暫くはぢつと身動きもしませんでしたが、やがて全く色を失つた顏を擧げると、夢現（うつつ）のやうな目なざしをうつとりと外の雨脚へやつて、「私ももう覺悟はして居りました。」

と氣味の惡い程靜に云ひました。心中――さう云ふ穩ならない文字が、まるで火でも書いたやうに、新藏の頭腦へ燒きついたのは、實にこのお敏の言葉を聞いた、瞬間だつたと云ふ事です。が、二人の間に腰を据ゑて、大きく蛇の目をかざしてゐた泰さんは、左右へ當惑さうな眼を配りながら、それでも聲だけは元氣よく、「おい、しつかりしなくつちやいけないぜ。お敏さんも男氣を出すんです。得てかう云ふ時には死神が、とつ着きたがるものですからね。――そりやさうと今來てゐる御客は、鍵惣つて云ふ相場師でせう。ええ、私もちよいと知つてゐるんです。あなたを妾にしたいつて云ふのは、あの男ぢやないんですか」と、早速實際的な方面へ話を移してしまひました。するとお敏も急に夢から覺めたやうに、涼しい眼を泰さんの顏に注ぎながら、「ええ、あの人なんでございます。」と、口惜しさうに答へたさうです。

「それ見給へ。やつぱり僕の見込んだ通りぢやないか。」――かう云つて泰さんは、得意らしく新藏の方を見返りましたが、すぐに又眞面目な調子になつて、勵るやうにお敏の方へ向ひながら、「この降りぢや、いくら鍵惣でもまだ二十分や三十分は御宅にゐるでせう。その間に一つ、私の計畫がどうなつたか話して聞かせて下さい。もし萬事休したとなりや、男は當つて碎けろだ。私がこれから御宅へ行つて、直接鍵惣に懸合つて見ますから。」と、新藏の耳にも頼母しい程、男らしく云ひ切りました。その間も雷は愈烈しくなつて、實ながらも大幅な稻妻が、殆絶え間なく瀧のやうな雨をはたいてゐましたが、お敏はもうその悲しをさへ忘れる位、必死を極めてゐたのでせう。顏も美しいと云ふよりは、寧ろ凄いやうなけはひを帶びて、これぱかりは變らない、鮮な脣を顫はせながら、「それがみんな裏を掻かれて、――もう何も彼も駄目でございますわ。」と、細く透る聲で答へました。それからお敏が、この雷雨の席屋根の下で、殘念さうに息をはづませながら、途切れ々々に物語つた話を聞くと、新藏の知らない泰さんの計畫と云ふのは、たつた昨夜一晩の内に、こんな鋭い曲折を作つて、まんまと失敗してしまつたのです。

泰さんは始新職から、お島婆さんがお敏へ神を下して、伺ひを立てると云ふ事を聞いた時に、咄嗟に胸に浮んだのは、その時お敏が神懸りの眞似をして、あの婆に一杯食はせるのが一番近道だと云ふ事でした。そこで前にも云つた通り、家相を見て貰ふのにかこつけて、お島婆さんの所へ行つた時に、そつとその旨を書いた手紙をお敏に手渡しして來たのです。お敏もこの計畫を實行するのは、隨分あぶない橋を渡るやうなものだとは思ひましたが、何しろ差當つてその外に、目前の災難を切り抜ける妙案も思ひ當りませんから、明くる日の朝思ひ切つて、「しやうちいたしました」と云ふ返事を泰さんに渡しました。所がその晩の十二時に、例の如くあの婆が竪川の水に浸つた後で、婆娑羅の神を祈り下し始めると、全く人間業では仕方のない障害のあるのを知つたのです。が、その仔細を申し上げるのには、今の世にあらうとも思はれない、あの婆の不思議な修法の次第を御話して置かなければなりますまい。お島婆さんはいざ神を下すとなると、あらう事がお敏を湯卷一つにして、兩手を後へ括り上げた上、髮さへ根から引きほどいて、電燈を消したあの部屋のまん中に、北へ向つて坐らせるのださうです。それから自分も裸の儘、左の手には裸蠟燭をともし、右の手には鏡を執つて、お敏の前へ立ちはだかりながら、口の内に秘密の呪文を念じて、鏡を相手につきつけく、一心不亂に祈念をこめる――これだけでも普通の女なら、氣を失ふのに違ひありませんが、その内に追々呪文の聲が高くなつて來ると、あの婆は鏡を楯にしながら、少しづゝぢりぢり詰めよせて、しまひには、その鏡に氣壓されるのか、兩手の利かないお敏の體が仰向けに疊へ倒れるまで、手をゆるめずに責めるのだと云ふ事です。しかもかうして倒してしまつた上で、あの婆はまるで屍骸の肉を食ふ蛆蟲類のやうに這ひ寄りながら、お敏の胸の上へのしかゝつて、裸蠟燭の光が落ちる氣味の悪い鏡の中を、下からまともに何時までも覗かせるのだと云ふぢやありませんか。すると程なくあの婆娑羅の神が、まるで古沼の底から立つ瘴氣のやうに、音もなく暗の中へ忍んで來て、そつと女の體へ乗移るのでせう。お敏は次第に

眼が据つて、手足をぴくぴく引き攣らせると、もうあの婆が口忙しく畳みかける問に應じて、息もつかずに、秘密の答を語り續けると云ふ事です。ですからその晩もお鳥婆さんは、かう云ふ手順を違へずに、神を祈下さうとしましたが、お敏は泰さんとの約束を守つて、うはべは正氣を失つたと見せながら、内心は更に油斷なく、機會さへあれば眞しやかに、二人の戀の妨げをするなと、婆の神託を下す心算でゐました。勿論その時あの婆が根掘り葉掘り尋ねる問などは、神慮に叶はない風を裝つて、一つも答へない事にきめてゐたのです。所が例の裸蠟燭の光を受けて、小さいながら爛々と輝いた鏡の面を見つめてゐると、いくら氣を確に持たうと思つてゐても、自然と心が恍惚として、何時となく我を忘れさうな危險に脅され始めました。さうかと云つて、あの婆は、呪文を唱へる暇もぬかりなく、ぢつとこちらの顏色を窺ひすましてゐるのですから、隙を狙つて鏡から眼を離すと云ふ譯にも行きません。その内に鏡はお敏の視線を吸ひよせるやうに、益々怪しげな光を放つて、一寸づつ、一分づつ、宿命よりも氣味惡く、だんだんこちらへ近づいて來ました。おまけにあの青んぶくれの婆が、絶え間なく呟く呪文の聲も、まるで目に見えない蜘蛛の巣のやうに、四方からお敏の心を搦んで、何時か夢ともわからない境へ引きずりこまうとするのです。それがどの位かかつたか、お敏自身も後になつて考へたのでは、朧げな記憶さへ殘つてゐません。が、兎も角も自分には一晩中とも思はれる程、長い長い間續いた後で、とうとうお敏は苦心の甲斐もなく、あの婆の秘法の罠に陷れられてしまつたのでせう。うす暗い裸蠟燭の火がまたたく中に、大小さまざまの黑い蝶が、數限りもなく圓を描いて、さつと天井へ飛舞上つたと思ふと、その眼の前の鏡が見えなくなつて、何時もの通り死人も同樣な眠に沈んでしまひました。

お敏は雷鳴と雨聲との中に、眼にも唇にも懸命の色を漲らせて、かう一部始終を語り終りました。さつきから熱心に耳を傾けてゐた泰さんと新藏とは、この時云ひ合せたやうに吐息をして、ちらりと視線を交せましたが、軈て計畫の尖

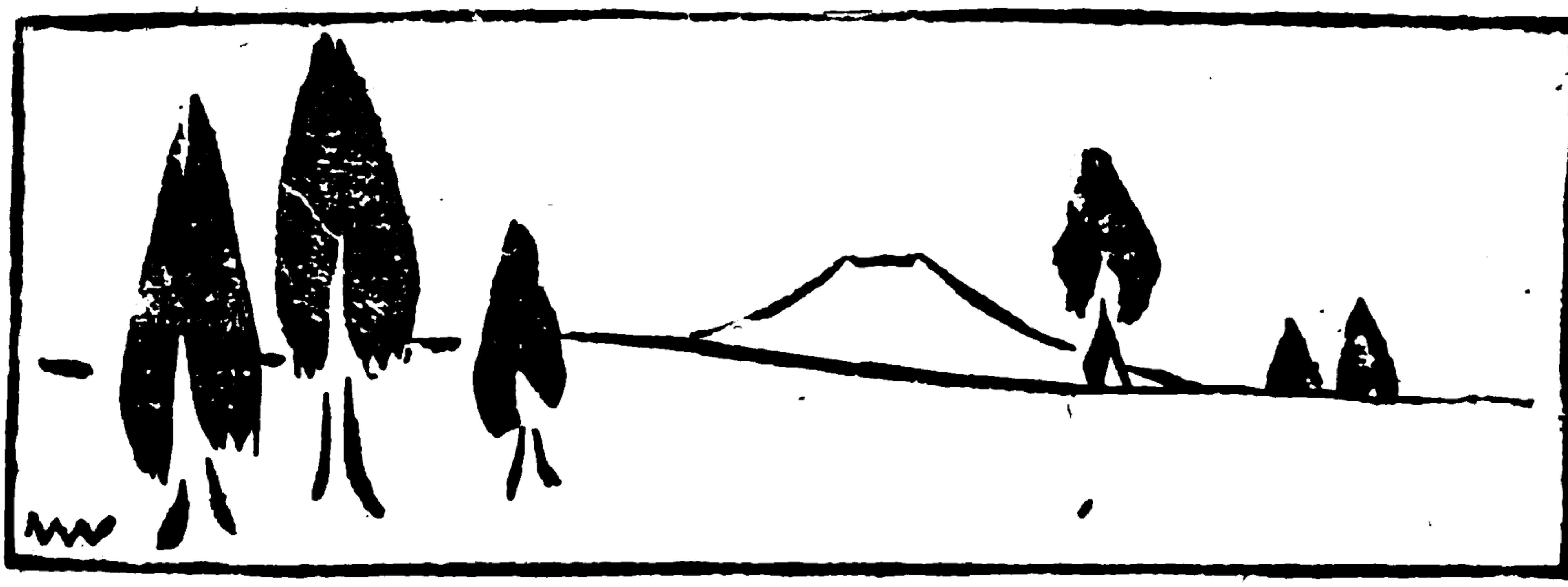
敗は覺悟してゐても、一々その仔細を聞いて見ると、今度こそすべてが畫餅に歸したと云ふ、今更らしい絕望の威力を痛切に感じたからでせう。暫くは二人とも唖のやうに口を噤んだ儘、天を殺して降る豪雨の音を茫然と唯聞いてゐました。が、その內に泰さんは勇氣を振ひ起したと見えて、今まで興奮し切つてゐた反動か、見る見る陰鬱になり出したお敏に向つて、「その間の事は何一つまるで覺えてゐないのですか」と、勵ますやうに尋ねたさうです。と、お敏は眼を伏せて、「ええ、何も――」と答へましたが、すぐに又哀訴するやうな眼なざしを恐る恐る泰さんの顏へ擧げて、「やつと正氣になりました時には、もう夜が明けて居りましたんです。」と、怨めしさうにつけ加へると、急に袂を顏へ當てて、忍び泣きに咽び入りました。さう云ふ內にも外の天氣は、まだ晴れ間も見えないばかりか、雷は今にも落ちかかるかと思ふ程、殷々と頭上に鳴き渡つて、その度に瞼を燒くやうな電光が、しつきりなく簷屋根の下へも閃いて來ます。すると今まで身動きもしなかつた新藏が、何と思つたか突然立ち上ると、凄じく血相を變へた儘、荒れ狂ふ雨と稻妻との中へ、出て行きさうにするぢやありませんか。しかもその手には、何時の間にか、石切りが忘れて行つたらしい鑿を提げてゐるのです。これを見た泰さんは、蛇の目を其處へ拋り出すが早いか、やにはに後から追ひすがつて、抱くやうに新藏の肩を抑へました。「おい、氣でも違つたのか。」――思はずかう泰さんは怒鳴りつけながら、無理に相手を引き戾さうとすると、新藏は別人のやうに上づつた聲で、「離してくれ給へ。もうかうなりや、僕が死ぬか、あの婆を殺すかより外はないんだ。」と、夢中で喚き立てるのです。「莫迦な事をするな。第一今日は鍵惣も來合せてゐると云ふぢやないか。だから僕が向うへ行つて――」「鍵惣が何だ。お敏を妾にしようと云ふやつが、君の賴みなんぞ聞くものか。それよりか僕を離してくれ給へ。よ、友達甲斐に離してくれ給へつたら。」「君はお敏さんの事を忘れたのか。君がそんな無謀な事をしたら、あの人はどうするんだ。」――二人がかう揉み合つてゐる間に、新藏は優しい二つの腕が、わなわな震へながらも

力強く、首のまはりに纏つたのを感じました。それから涙に溢れた涼しい眼が、限りなく悲しい光を湛へて、ぢつと彼の顔に注がれてゐるのを眺めました。最後に大雨の音を縫つて、殆聞きとれない程かすかな聲が、「御一しよに死なせて下さいまし。」と、囁いたのを耳にしました。と同時に近くへ落雷があつたでせう。天が裂けたやうな一聲の霹靂と共に紫の火花が眼の前へ散亂すると、新藏は戀人と友人とに抱かれた儘、昏々として氣を失つてしまひました。

それから何日か經つた後の事です。新藏はやつと長い惡夢に似た昏睡狀態から覺めて見ると、自分は日本橋の家の二階で、氷嚢を頭に當てながら、靜に横になつてゐました。枕元には藥罎や檢温器と一しよに、小さな朝顔の鉢があつて、しほらしい瑠璃色の花が咲いてゐますから、大方まだ朝の内なのでせう。雨、雷鳴、お島婆さん、お敏——そんな記憶をぼんやり辿りながら、新藏はふと眼を傍へ轉ずると、思ひがけなく其處の障子際には、銀杏返しの髮がほつれた、まだ頬の色の蒼白いお敏が、氣づかはしさうに坐つてゐました。いや、坐つてゐるたばかりか、新藏が正氣に返つたのを見ると、忽ちかすかに顔を赤らめて、「若旦那様、御氣がつきなさいましたか」と、つつましく聲をかけたぢやありませんか。「お敏。」——新藏はまだ夢を見てゐるやうに心もちで、かう戀人の名を呟きましたが、その時又枕もとで、「まあ、これでやつと安心した。——おつと、その儘、その儘、たる可く靜にしてゐなくつちいけないぜ」と、これもやはり思ひがけない泰さんの聲が聞えました。「君もゐたのか。」「僕もゐるしさ。君の阿母さんも此處に御出でなさる。御醫者様は今し方歸つたばかりだ。」——こんな問答を交換しながら、新藏は眼をお敏から返して、まるで遠い所の物でも見るやうに、うつとりと反對の側を眺めると、成程泰さんと母親とが、ほつとしたやうな顔を見合せて、枕もとに近く坐つてゐます。が、やつと正氣に返つた新藏には、あの恐しい大雷雨の後、どうして日本橋の家へ歸つて來たのか、更にさう云ふ消息がのみこめませんから、暫くは唯茫然と三人の顔ばかり眺めてゐましたが、その内に母親は優しく新藏の

顔を覗きこんで、「もう何事も無事に治まつたからね、この上はお前もよく養生をして、一日も早く丈夫な體になつてくれなけりやいけませんよ」と、劬はるやうに言葉をかけました。すると泰さんもその後から、「安心し給へ。君たち二人の思が神に通じたんだよ。お島婆さんは鍵惣と話してゐる内に、神鳴りに打たれて死んでしまつた。」と、何時もより快活に云ひ添へるのです。新蔵はこの意外な吉報を聞くと同時に、喜びとも悲しみとも名状し難い、不思議な感動に蕩揺されて、思はず涙を頬に落すと、その儘眼をとざしてしまひました。それが看護をしてゐた三人には、又失神したとでも思はれたのでせう。急に皆そはそはと立ち騒ぐやうなけはひがし出しましたから、新蔵は又眼を開くと、腰を浮かせかけてゐた泰さんが、わざと大袈裟に舌打ちをして、「何だ。驚かせるぜ。——御安心なさい。今泣いた烏がもう笑つてゐます。」と、二人の女の方をふり返りました。實際新蔵はもうこの世の中にあの怪しい婆の影がささなくなつたのだと考へると、自然と微笑が唇に浮んで來るのを感じたのです。それから又暫くの間、この幸福な微笑を樂んだ後で、新蔵は泰さんの顔へ眼をやりながら、「鍵惣は？」と尋ねました。と、泰さんは笑ひながら、「鍵惣か。鍵惣は目をまは　ただけだつた。」と云つて、何故かちよいとためらつたやうでしたが、やがて思ひ直したらしく、「僕は昨日見舞に行つて、あの男自身の口から聞いたんだがね。お敏さんは神を下された時に、君たち二人の戀の邪魔をすれば、あの婆の命に關ると、繰返し々々云つたさうだ。が、あの婆は狂言だと思つたので、明くる日鍵惣が行つた時に、この上はもう殺生な事をしても、君たち二人の仲を裂くとか、大いに息まいてゐたらしいよ。して見ると、僕の計畫は、失敗に終つたのに違ひながいんだが、その又計畫通りの事が、實際は起つてゐたんだらうぢやないか。しか　お島婆さんがそれを狂言だと思つた揚句、とうとう自滅したなんぞは、どう考へても豫想外だね。これぢや婆娑羅の神と云ふのも、善だか惡だかわからなくなつた。」と、怪訝さうに話して聞かせるのです。かう云ふ話を聞くにつけても、新蔵は愈この間から、自分を夢中に

弄んだ、幽冥の力の怪しさに驚かないではゐられませんでしたが、忽ち又自分はあの雷雨の日以來、どうしてゐたのだらうと思ひ出しましたから、「ぢや僕は」と尋ねますと、今度はお敏が泰さんに代つて、「あの石河岸からすぐ車で、近所の御醫者樣へ御つれ申しましたが、雨に御打たれなすつたせいか、大層御熱が高くなつて、日の暮にこちらへ御歸りになつても、まるで正氣ではいらつしやいませんでした。」と、しみじみした調子で口を添へました。これを聞くと泰さんも、滿足さうに膝をのり出して、「その熱がやつと引いたのは、全く君のお母さんとお敏さんとのおかげだよ。今日でまる三日の間、譫言ばかり云つてゐる君の看病で、お敏さんは元より阿母さんも、まんじりとさへなさらないんだ。尤もお島婆さんの方は、追善心に葬式萬端、僕がとりしきつてやつて來たがね。それもこれも阿母さんの御世話になつてゐない物はないんだよ。」と、末は勵ますやうに述べ立てるのです。「阿母さん。難有う。」「何だね、お前、私より泰さんに御禮を申し上げなくつちや。」――かう云ふ内に親子とも、いや、お敏も、泰さんも、皆淚を浮べてゐました。が、泰さんは男だけに、すぐ元氣な聲を出して、「もう彼是三時でせう。ぢや私は御暇しますかな」と、半ば體を起しかけると、新藏は不審さうに眉をよせて、「三時？　今はまだ朝ぢやないのかい」と、妙な事を尋ねるのです。呆氣にとられた泰さんは、「冗談云つちやいけない」と云ひながら、帶の間の時計を拔いて、蓋を開けて見せさうにしましたが、ふと新藏の眼が枕もとの朝顏の花に落ちてゐるのを見ると、急に晴れ晴れした微笑を浮べて、こんな事を話して聞かせました。「この朝顏はね、あの婆の家にゐた時から、お敏さんが丹精した鉢植なんだ。所があの雨の日に咲いた瑠璃色の花だけは、奇體に今日まで凋まないんだよ。お敏さんは何でもこの花が咲いてゐる限り、きつと君は本復するに違ひないつて、自分も信じりや僕たちにも度々云つてゐたものなんだ。その甲斐があつて、君が正氣に返つたんだから、同じ不思議な現象にしても、これだけは如何にも優しいぢやないか。」（八・九・二十二）



惡靈

江口渙

飽き飽きするほど降り續いてゐた長雨が、土曜日の午後になつて、始めてからりと霽れ亘つたので、愼吾は久し振りで裏の畑の方へ出懸けて行つた。學校の事務が忙しかつたのと、長雨の加減か普段よりは一層氣がくしやくしやしてゐたので、久しく見舞はなかつた豚小屋の樣子が、妙に氣に懸つたからである。

六月も半ば過ぎになると、流石に冬國である北海道も段々夏らしく時めいて來た。殊に、久し振りの雨上りで、一度に眞白な太陽が照り亘つたためか、愼吾の持つてゐるさゝやかな畑の上にさへ、恰かも甦つたやうな光が、如何にもいきいきと漲り始めた。艶の好い葉並を揃へた除蟲菊の畑の上にも、又、その畑の所々に立つてゐる林檎の梢にも、さては、隣の畑の地界のためにずらりと一列に植えてある脊の低いグウスベリーの生垣の上にも、今までに見られなかつた伸びやう伸びやうとする强い力が溢れてゐた。殊に、まだ眞盛とまでは行かないが、見事の大きさに咲き始めた一番咲きの除蟲菊が、燃え立つやうな葉並の間に眞白な花を一面蒔き散らしてゐるのと、隣の畑に咲き揃つた亞麻の花の艶々とした桔梗色とが、長らく鬱り切つてゐた彼の心を少なからず晴れやかなものにした。

彼れは毎日毎日頭の中に詰つてゐた古綿が一度に無くなつて終つたやうな、清々しい氣持になりながら、少し鼻緒のゆるんだ下駄を引き摺つて、ぶらぶらと豚小屋の前まで行つた見た。

農具置場の一部を僅かに改築した形ばかりの豚小屋の中には、この間買つたばかりの小豚が四頭、相變らず薄汚い體を不様に動かしてゐた。雨のために糞を搔き出してやらなかつた上に、何處からか多少水でも流れ込んだためか、狹い小屋の中は、一面に眞黑な沼のやうになつてゐた。蒸れ切つた糞尿の匂が、ぷうんと烈しく彼の鼻を刺した。然かもその汚れ切つた小屋の中で、四頭の小豚は一隅にかたまつて、揃つて鼻を動かしては、せつせと土を掘つてゐる。好く見ると、掘り揚げた土でもつて小屋の隅を三角に仕切つて、一列に細い堰を作つてゐるのである。つまりかうして築き上げた一列の堰によつて、一隅の三角へ糞尿の洪水が押し寄せて來ないやうに努めてゐるらしい。

それに氣がついた時、彼は思はず心からの微笑を洩した。由來、俗說に從へば、穢ければ穢いほど歡ぶものだと云はれたゐる豚でさへも、…………見たところ、體中を糞尿だらけにして平氣でゐるらしい豚でさへも、實は、穢いものが自分の側へ押し寄せて來るのを、どうにか喰ひ止めようとしては、かうして四頭が四頭とも一緒になつて土を掘つて、せつせと堰を造るのである。まして人間が、有ゆる穢いものを自分の側に寄せつけたくないと願ふのも、決して無理な事ではない。殊に、自分が見るに堪へないほど不愉快なあの信雄を、どうにかして自分の側から遠ざけたいと願ふのも、強ち非道な考とばかりは云へないらしい。實際のところ、世間に對しても、亦、家庭に對しても、公然自分の兒として發表出來ずにゐる上に、殆ど白痴兒と云つても好い位な信雄の事を思ふと、どんな晴々とした時でも直ぐに心が眞暗になる。一層の事、あの信雄が自分の眼の屆くところにゐてくれなかつたら、否、更にこの世の中から姿を隱してくれて終つたら、自分のこの苦しさもどれだけ救はれたか解からない。かう思つた彼は、糞尿の洪水の中にゐながら、せめて自

分達のゐる僅かな周圍だけでも居心地好いものにしやうとしては、力を併せて努めてゐる小豚の様子を見ると、何とも知れずなつかしいやうな、然かも、ものあはれな心持がした。

で、彼は急に豚小屋の掃除をしてやらうと思ひ立つて、直ぐ右手に續いてゐる農具置場の戸を開けて、熊手と、高箒と、それから特に豚のために造つてやつた塵取に似せた糞さらひとを取り出した。そして、鼻を突き刺すやうな烈しい臭氣を我慢しながら、どろどろした糞尿を掻き寄せては取り、掻き寄せては取りしては、それを小屋の外にある肥料溜の中へ運んでやつた。

小屋の掃除を大半片附けた時、彼が骨憩めに一寸小屋の外側に立ち止つてぼんやり卷煙草を吹かしてゐると、向ふの牧場の上を越えて二つほど小さい人影がこつちへ近附いて來るのを見懸けた。

彼が立つてゐる小屋の後あたりから、××の村はづれまで、凡そ十丁ほどの間は、後の山から段々雪崩れ落ちた丘の波が、一旦、一丁幅位の中窪みになつた後、恰も丘の波の最後の餘波でもあるやうに、やや蒲鉾型に盛り上つた草原が凡そ五六丁もずつと海岸まで續いてゐる。中窪みになつたところには青々とした大豆畑と、一面に桔梗色の花を綴つた亞麻畑とが、何かの織り出し模樣ででもあるやうな美しさを、日盛りの光の下に展べて居た。そして、村の共同放牧地になつてゐる蒲鉾型の草原と、窪地の間には、一本の國道が白白と細長く續いてゐた。野中の一軒家とでもいふ可き彼の家と、窪地の向ふにちらちら見える村端れの家並との間には、無論、他に一軒の家もない。

最初、牧場を越えて近附いて來る小さな人影を見懸けた時、彼にはそれが誰であるか、少しの見當もつかなかつた。何となれば、先刻村まで買物に出懸けた妻のしげ子が歸つて來たのだとすれば、當然、村端から續いてゐる國道を通つて來べき筈である。何もわざわざ遠廻りをして、海岸の方から牧場を越えて來る筈はない。「誰かしら。盛に牛蝨が湧き

始めてゐる牧場の中を、わざわざ通つて來るのは……」と、思ひながら、又見るともなくぼんやりその人影を眺めてゐた。

その草原の端れの、如何にもひろびろと伸びてゐる緩い曲線の上には、銀色に輝く雲の峰を後から後からと絶え間なく吐き出す北日本海の湖の色が、横に引いたやうな一抹の碧をくつきりと細長く覗かせてゐる。それが夏らしい光を眞上から浴びるためか、或は、雨上りの大氣がすつきり澄んでゐるためか、いつもよりは遥かに力強い碧に見えた。そして、その強い碧の一抹と、ぐんぐん湧き揚る雲の峰と、更に、思ひ切り霽れ亘つた大空とに圍まれながら、草原の端れに働いてゐる人影は、恰も周圍の力強さと偉きさとに威壓されて、殊更、自分自身を小さなものにしてゐるのではないかと思はれるほどに小さく見えた。その小さな人影が動くともなく動いて來るのを見てゐると、何かのお伽噺で讀んだ景色を眼のあたりに見るやうな氣持がして、うつとりする程、彼の心を歡ばせた。そして、彼は何時の間にか思はず凡を忘れて見惚れるほどの爽かな醉心地になつて行つた。

然し、その歡ばしい醉心地は、さう永くは續かなかつた。人影が段々こちらへ近附いて、段々大きくなるにつれ、第一に、妻のしげ子がさしてゐるのに相違ない、流行後れの牡丹色の洋傘が見えた。その次には、洋傘の側に動いてゐるのは、今年十四になる信雄である事がはつきり解つた。それとともに、折角久し振りで晴れ晴れとなつた彼の心も、忽ちもと通りにすつかり暗くならざるを得なかつた。

見ると、信雄は頻りにはしやいででもゐるらしく、しげ子の周圍を小止みなくぐるぐる廻つては、殆ど縺れるやうに歩いてゐる。然かも、その様子は唯單に子供らしく無邪氣にはしやいでゐるとか、甘へてゐるとか云ふのではない。帶のあたりに絡つたり、腕にぶら下つたり、時には後から脊中へ飛びついたりしてゐる。それに對してしげ子は、例の如

く格別手荒な取り扱ひはしないらしい。唯、時々、絡る信雄を振り縦いては、一寸身を退いて何か言つてゐるらしい様子が、

「そんな事をすると、お伯父さんにいつけますよ」

と、でも云つてゐるやうな風である。然かも、信雄はあたりに人のゐないのを好い事にして、益々執念くまつはるらしい。

それを見ると、彼は又しても見る可からざるほどに汚れたものを止むなく見せつけられたやうな氣持がして、忽ちそのままぢつとしてはゐられないやうな忌しさと苦しさとに、心の凡を覆はれて終つた。そして、熊手や、高鍬や、糞淩ひをいきなり叩きつけるやうな勢で農具置場の中へ投げ込むが早いか、ぴしやりと荒々しく戸を締めて、恰もあんな忌しいものは、二度と再び見たくない、と云つた風に烈しく頭を左右に振つたと思ふと、ずんずん裏の丘の裾にある玉蜀黍畑の方へ行つて終つた。その時の彼の顔には、どうにも抑へきれない惱みを無理矢理に抑へつけやうと焦るためか、如何にも険しい心の閃きが口元の不氣味な痙攣となつて溢れてゐた。

實際、愼吾は信雄を手元に引き取つたその日から、否、一と眼見たその日から今日まで、骨に喰ひ入るやうな烈しい心の惱みに、一日でも襲はれない日はなかつた、と云つて好いほとである。殊に、如何にも白痴見らしい信雄の顔附の何處かが、たしかに自分にも、亦、その母親にも似寄つてゐる事を思ふと、尚更堪へ難い程の氣持に打たれるのである。

彼が信雄の母親であるお米を初めて知つたのは、今から殆と十五六年も以前の事であつた。その頃、東京に近いある

縣の師範學校を出た彼は母方の遠い親戚の世話で、その親戚の住んでゐるある避暑地の小學校で、始めて教鞭を採つたのである。無論、まだ獨身ではあつたが可なりに薄給の身であつたので、割合に費用のかゝる下宿住居などをするよりは、一層、留守番かたがた來てゐて呉れないかと勸められるまゝに、彼は自分を學校へ世話してくれたその親戚の別莊の一間に起臥する事になつた。然し、彼がそこへ住み込むやうになつた前から、その別莊には純粹の別莊番とも云ふ可き婆さんと、その娘である十六になる女の子とが、門の直ぐ左脇の別棟に貧乏くさく住つてゐた。その女子が、すなはちお米であつた。

お米は肉附の好い割合に蒼白い顔色をして、何時も物に驚いたやうなきよときよと落ち着きのない樣子をしてゐる少女であつた。然かも、全體として小柄であるに關らず、軀の或る部分部分ははつきり眼に立つほどの特殊な發達を見せてゐた。それが、始めてお米を見た時から、妙に愼吾の心を誘つた。

愼吾が別莊の一室に引き越して來たその日から、お米は「先生」「先生」と云つて、ものなつかしさうに愼吾の後を追つて歩いた。鼻が惡いせいか、何時もぐつぐつと鼻を鳴らしながら、少し舌つたるい聲でもつて何かと愼吾に話しかけては、何の隔りもなく、絡みついたり、飛びついたり、さては、首條へ兩手をかけてぐいぐい強く引つ張つたりする樣子だけでは、如何にも無邪氣な駄々つ子のやうに見える。然し、さう云ふ時のお米の顔附を好く見ると、愼吾は何時も不思議なほどに怖しい刺戟を感ぜざるを得ないのであつた。殊に執念く絡み着いてゐればゐるほど、お米は瞳を異樣に輝かせ、何時の間にか兩手の指先に段々不氣味な力を入れて、正體もなく彼の體を絞めつけるのである。そんな時には、必ずお米の襟元から汗とも脂ともつかない匂が溢れ出して、忍び込むやうに段々心の奥に泌みて來るので、愼吾は何時も自分ながらどうにも出來ないほどの惱しい氣持に陷つて終ふのであつた。

その裡に、お米が子供の時から極端に學校を嫌つて、とうとう尋常三年の半途からずるずるに退學して終つたきり、書物などは一度も讀んだ事が無いと云ふ事をその母親から聞かされた愼吾は、どうもお米に低能兒らしい樣子の見えるところから、お米に對して低能兒教育を施してみやうと云ふ、興味に強く動かされた。

然し、後で考へると、それが却つて凡の禍のもとになつたのである。實際、如何に愼吾の方で一心になつて書物を敎へて見ても、お米の方ではてんで相手にしなかつた。それが、唯單に相手にしなかつたと云ふだけではない。何時も直ぐ飽きて終つて机の上の書物や鉛筆を投げ飛ばすのを愼吾が何とかすかしたり騙したりして後を續けささうとする度にお米は無闇に無理な駄々をこねてこねて、果は猛然と武者振りついて來ては、どうする事も出來ないほどに愼吾を梃摺らせるのであつた。然かもそれを無理にも云ふ事を聞かさうとすると、唯に泣いて嫌がるばかりではなく、遂には抑へられない怒を顏に漲らせて、獸物のやうに處きらはず愼吾の腕に嚙みつくのであつた。さう云ふ時のお米の顏には……その狹い額や、眦の下つた小さな眼や、生々しい程に眞赤な唇や、殊に、顏全體と調和のとれない位に高いけれど何處かに鈍さの見える鼻つきなどに、如何にも救はれ難い人間の淺猿しさがありありと現はれてゐた。その度に、愼吾はお米に對して、必ず烈しい人格的の嫌惡を感ぜざるを得なかつたのである。

お米が愼吾に對して投げかける力強い肉體的な魅力と、見るに堪へないほどな人格的の淺猿しさとが、息の詰りさうな苦しい渦となつて絶えず、心の奥で相爭つてゐる樣に、愼吾は又一つお米に就いて困つた性癖を見出した。それはお米が屢々酒を飮んでゐるらしい樣子の見える事であつた。お米自身の云ふ處に依れば、母親が晩酌の相手に飮ますのだと云ふけれども、實際は、お米が母親の酒を盜んで飮むのであるらしかつた。然かも、一度酒を飮むと愼吾に對するお米の恣な態度は、更に幾倍その狂暴の度を增した。そして、相手を飽くまで自分の世界へ誘ひ込まずには置かないと云つ

た風な、到底逃れる事の出來ない程の力強さをもつて、ぐんぐん慎吾の心を壓するのであつた。

もうそろそろ避暑地も賑ひ始めやうとする夏の或る夜の事であつた。可なり夜が更け亙つてから、門の内の別棟でお米親子の烈しく云ひ爭ふ聲が起つた。それが可なりに長く續いた後、俄かにぴたりと止んだと思ふと、臺處口の戸を開けて、だらしなく寐間着を着崩したお米が突然慎吾の部屋へ入つて來た。そして、涙で汚れた顏を振り立てるやうに動かしながら、

「先生、母ちやんを撲つて頂戴よう。後生だから撲つて頂戴よう。猫板でこんなに私を撲つたんですもの」

と、云ひながら、机の前に座つてゐる慎吾をぐんぐん引き立てやうとした。

見るとお米は平生よりは更に烈しく醉つてゐるらしく、如何にも臭い息がぷうんと慎吾の鼻を打つた。その上、撲られたためかすつかり崩れ落ちてゐる髮の毛の間からも、亦、肌が見えるほどにはだけた胸のあたりからも、汗とも脂ともつかない匂が平生よりは一層烈しく湧き溢れた。

「先生。こんなになつたのよ。こんなに。ねえ先生。見て下さいてばよう。先生」

あまりに醉つてゐるらしいので、慎吾が如何にももてあまして、暫時、默つて相手の顏を見詰めてゐると、お米は尚も訴へるやうにかう云つて、ぺたりと慎吾の側に座つた。そして十六の少女とは思はれないほどの大きな軀を慎吾の前に横に崩した。

「先生。見て頂戴よう。これ。こんなになつちやつたのよう」

かう云つたお米の聲は、何時の間にかすつかり甘へ切つた聲に變つて行つた。そして、直ぐ様、何の蟠りもなく着物をまくつて、慎吾の眼の前にその傷ついた脚を見せた。見ると、成程膝頭の直ぐ上のあたりに、蒼く腫れ上つた傷痕が、

蚯蚓ほどの大きさに三四本も入り亂れて着いてゐた。そして、その傷痕はうつかり下手に觸りでもしやうものなら、ずるずると皮が剝げて直ぐにも血を噴き出しはしまいかと思はれるほどに、生々しいものであつた。

「隨分、ひどくなつてるね」

「ええ。ほんとうに痛いのよ。これ、みんな母ちやんがしたの、先生、さすつて頂戴な。後生だから、ねえ、先生」

肩を左右に振りながら甘へるやうにかう云つたお米は、いきなり愼吾の首條へからみついたと思とふ、兩方の指と指とを組み合せて、二度も三度もがくがくするほどその首を振つた。その時、蒸れたやうな汗臭い匂と髮の香とが、又、更めて覆ひ被さるやうに烈しく愼吾の鼻を打つた。

一旦、取り返しのつかない事をして終つた時、愼吾はどれだけ烈しい自責と自嘲の心に、自分自身を苛みぬかれたか解らなかつた。それとともに、再びかかる過ちを犯すまいとして、どれだけ嚴かな禁制の宣言を自分自身に加へたか知れない。然し、過ちを犯した後のお米は、前よりも遙かに狂暴な力をもつて、更にその過ちを繰り返すべく飽くまで愼吾を壓倒しなければ止まなかつた。實際に、その力は愼吾が極力反抗しやうとして如何に苦しみぬき惱みぬいても、どうにも脫れる事の出來ないほどに狂暴なものであつた。そして、最後に當然すぎるほど當然な怖ろしい日が、とうとう愼吾の上に來たのである。

いよいよお米に子供の出來たのが解つた時、そして、その父がたしかに愼吾であるとお米自らきつぱり云ひ切つた時、愼吾は今更ながら居ても立つてもゐられないほど烈しい恐怖に襲はれた。然かもその事件の一切が、お米自身の口から無雜作に洩れて、ぱつと周圍に傳るとともに、お米の母親にも、亦、愼吾の親戚に當るその別莊の持主にも凡ての事情が知れ亘つた時、實際自分ながらあまりに身の置きどころのないために、一層の事、お米とその子供とを殺した上で、

更に自身も思ひ切つて死なうかとさへ思ひ詰めたのであつた。ところが、幸に別莊の主人の十分思ひやりのある取り計ひのお蔭で、生れた子供はお米の私生兒として處分して貰つた後、彼自身は殆ど夜逃げ同樣な淺ましい思をしながら、北海道の日本海に面した漁村にある同じ親戚の農園に、とにかく軀だけを移したのであつた。

然し、北海道へ來てからの懺悔は、全く日夜十字架を背負つて步いてゐると云つても好いほどの苦しみを甞めた。かうして自分の過去の凡に就いて誰一人として知る者のない遠國へ來て終へば、彼が如何に大手を振つて步いても、周圍から少しも痛い眼を向けられずに濟む事は解つてゐた。然し、實際のところ周圍が彼を何の汚れもなき青年として素直に取り扱へば扱ふほど、彼の中に隱されてゐる黑い影は、益々烈しく彼の心を脅かすのであつた。その上、彼がどうにかしてその黑い影を克伏しやうとしては、絕えず切ない努力を續けてゐると、何時の間にか彼の姿が思ひがけなくも極めて敬虔な青年として、世間の瞳に映るやうになつて終つた。その時以來、彼は覆面をして生きて行く事の苦しさをつくづく味つた。然かも、自らその覆面を脫いで世間に向つて一切を告白し　上で、更めて寬恕して貰ふだけの勇氣は、何故か彼の中から出て來なかつた。從つて、世間が彼に敬意を拂へば拂ふほど、日增しにその生活を嚴肅にして行つた彼は、自分自身でも知らない裡に、何時か求道者と同じやうな態度をもつて周圍に對するやうになつたのである。

北海道へ來てから二年ほどの間、農園の監督の助手をしてゐた彼は、やがて、すすめられるままに再び村の小學校に教鞭を採るやうになつた。然かも教師としての彼は、珍しいほどの人格者として、父兄の間にも、亦、兒童の間にも、頗る評判が好かつた。そのためか、村長はその人となりを見込んでとうとう娘を彼にくれた。それが現在の妻のしげ子である。その裡に、今年九つになる卓爾が生まれ更に選まれて主席の訓導となり、やがて校長が老年の故をもつて退職すると、遂にみんなから推されてその後を襲ふやうになつたのである。そして、早くも北海道へ來てから十何年の月日

が經つて終つた。

かうして樹園の敬意を一身に集めて彼が平和な、そして順潮な月日を繰り返してゐる間にも、お米と、お米に生ました信雄との事が時々眞黒な影となつて烈しく彼の心を脅かした。三年に一度位は北海道へ農園の見廻りに來るその親戚の人の口から、信雄がどうも生れながらの白痴兒らしいと云ふ事や、その後お米が益々酒好きになつて行つて、遂には酒のために盜みさへするやうになつた上に、痴呆の傾きが更に甚しくなつたと云ふ事や、さては、その痴呆を好い事にして近所のものが寄つてたかつて弄ぶためか、年々相手のない子を産み落して、後にはそれが三人にもなつたと云ふ事を聞いた時、彼は自分の過つて犯した事の結果が、あまりに大きくばかりなつて行くのを見て、今更ながら一擧に腦髓を打ち碎かれるほど烈しい身慄ひを感じるのであつた。殊に母親が死んで終つた後のお米は、まさか追ひ出して終ふわけにも行かないので、そのまゝ監禁同樣に裏の物置に入れてあるが、時々四人の白痴兒をぞろぞろと連れて物置から出て行く樣子は、殆ど野良犬同樣であると云ふ事を聞いた時、彼はその野良犬の一つは自分自身の眞實の子であり、又その最も大きな一つはかつて自分が子供を生ませた相手である事を思つて、實際、自然にがたがたと軀が慄へたため、遂にはその場にゐたたまれなくなつた程の苦惱に襲はれたのであつた。そして、その野良犬達が淺猿しいほどに不樣な顏と、汚れ切つた軀とをくつつけながら、ぞろぞろと物置を出たり入つたりする有樣を思ふ度に、彼は自分の住んでゐる世界の全部が、忽ち眞暗になつて行くのを、自分ながらどうする事も出來なかつた。

ところが今年の春になつて、彼は自分が永年怖れに怖れてゐたその暗黒に對して、いよいよ面接しなければならない時が來た。それはお米がこの多の流行性感冒で突然死んだとともに、他の三人の親なしつ子は養育院へ入れたから信雄だけは厭でも引き取つてくれろと云ふ手紙に接したからである。彼はその時一層の事、過去の一切をしげ子に打ち開け

て終つて、心からの謝罪しやうと、幾度思ひ詰めたか知れなかつた。そして、今日打ち開けやうか、明日打ち開けやうかと思ひあぐんでは、毎日苛々と一人で心を苦しめてゐた。然し、一旦その怖る可き暗黒の凡を打ち開けた時、自分をこれほど信じ切つてゐる妻や、妻の兩親や、さては自分を飽くまで敬愛してゐる學校の兒童や、その父兄達が自分に對して如何なる態度を採るやうになるであらうか、殊にほんとうの一人つ兒と思ひ切つてゐる卓爾が、もしも白痴の兒があると云ふ事を知つたならば、果して如何なる怖しい變化をその幼い心の上に起すであらうか、と云ふ風な事を考へると、彼は結果の凡があまり怖しいので、遂自分ながら見す見す機會を逸して終つた。否、實際のところ、打ち開けやうと思へば打ち開ける機會は幾つでもあつた。然しその機會が來る度に、何時も彼は唯徒らに機會の前に戰慄したに過ぎないのである。然かも、その上或る日しげ子に向つて「こんど餘儀ない事情で親戚の白痴兒を引き取つて世話をしなければならなくなつた」と云ふ、好い加減な造り事を云つたために、その機會は永久に去つたのである。そして、その裡に、とうとう信雄と、信雄を送り屆けて來た親戚の若者とを乘せた汽船が、村の沖に着く日が愚圖愚圖の裡に來て終つた。

出迎へのために艀船を漕ぎつけた彼が、汽船から降りて來る信雄の顏を見た時、十四年振りで見るその顏は、彼が思つてゐたよりも遙かに淺猿しく遙かに醜いものであつた。豚のやうな形をした不樣な赤鼻を中心にして、きよときよと動く小さな眼と、薄い眉毛と、可なりに分厚な唇とが、そのてかてか光る顏の中にだらしなく散らばつてゐる樣子は、誰が見ても直ぐ樣、言葉通りの白痴兒である事がはつきり解つた。その上、妙に下つ腹の突き出した大きな軀を、外輪に動く足で支へてよちよちと歩くのが、一層全體の感じを不愉快なものにしてゐた。それを一と眼見た時、これが自分の眞實の子であるのかと思つた。そしてむしろ眞實の子であるが故に、尚更、出來る事ならその場から逃げ出したい程の氣持がした。

殊に、家へ伴れて來てからの信雄は、事々に彼を苦しめる種となつた。物の云ひ方や、起居振舞の普通外れて不樣な事は云ふまでもない。絶えず極度に甘へたり拗ねたり、時には極度に怒つたりする。そして、好い加減な嘘ばかりついてゐながら、格別それを惡いとも思つてゐない。その上、たしかに生れながらの盜癖があるらしいのと、歳の割合に早くも色慾が頭を持ち上げてゐる事とが、最も深く愼吾の心を苦しめた。殊に、最後の二つのものが、かうして一緒に住つてゐる以上、最愛の卓爾に必ず怖しい影響を與へずには置かないであらうと云ふ事を考へると、彼は實際、堪らないほど切ない氣持になるのであつた。そして、そのために今まで折角明るかつた彼の世界も、見る見る暫へられない程、眞暗なものになつて終つた。

成程、冷靜に信雄の事を考へれば、何と云つても眞實の子であるが故に、殊に救はれ難い白痴兒であるが故に、自然と心の底から泌み出るやうな深い憐憫を感じないわけには行かなかつた。然し、その淺猿しい顏形を眼のあたりに見ると、彼は自分でどうする事も出來ないほどの、烈しい感覺的な嫌惡を感ずるのであつた。殊に信雄の顏を見る度に、その顏は自分の醜い過去が生んだ惡果が、まさしく自分を苛むために現はれて來たのではないかと云ふ風な氣持がして、彼には到底、それを靜視してゐるだけの力がなかつた。

「實際、おれがお前をこれほどに堪らなく思ふのは、決して直接お前自身を嫌ふからではない、お前を生んだおれの過去を、醜さの限りを盡したおれの過去を嫌ふからだ。そして、おれ自身の過去がお前の顏や形に現はれて、烈しくおれを苦しめるからだ。おれはお前を愛してゐる。これからももつともつと愛さうとしてゐる。然しお前の顏におれ自身の過去を見出す時、おれはその過去をどうしても憎まずにはゐられないのだ」

愼吾は幾度か心の中でこんな言葉を繰り返しては、私かに信雄に對して詫びて見た。然し、かかる言葉の蔭からでも、

直ぐ樣、信雄に對する感覺的な不愉快がぐんぐん頭を上げて來るのを、彼はどうしても抑へる事が出來なかつた。そして、その苦しさと忌しさとが、信雄を引き取つてから今日まで、殆どものの三月も續いたのである。…………

遠く牧場を越えて歸つて來るしげ子と信雄との姿を豚小屋の蔭から見懸けて、今までの忌しさに又一つの新しい忌しさを加へられたために、身慄ひの出るほどの思に苦しまされた愼吾が、やがて、平生よりは一層蒼褪めた顏色をしながら、再び家へ入つて來たのは、それから殆ど小一時間の後であつた。

茶の間の硝子窓の下で平生のやうに、せつせと針仕事をしてゐるしげ子を見るや否や、彼は抑えに抑えた不機嫌を忽ち外へ押し出したやうな顏附をしながら。

「おい。如何してあんな遠廻りをして、わざわざ牧場なんか通つて來るんだい」

と、少し衝つ懸るやうな態度でいつた。

「だつて、信ちやんが、濱へ行かう、濱へ行かうつてきかないんですもの。あなた何處から私達の歸つて來るのを御覽になつてたの」

しげ子は暑さのために赤味を帶びた小さな顏に、少しきまりの惡さうな色を見せた。

「だつて豚小屋のところからなら一と眼に見えるぢやないか。わざわざあんな牛蝨の多い處を歩く必要がどこにある。それとも何か特別の用でもあつたんかい」

「いゝえ。唯ね。信ちやんが無闇に草の深いとこを撰つて歩くんですもの。いくら停めたつてきかないのよ」

「あんな莫迦は、甘やかして置けばいくらでもつけ上るんだから、そんな時には構はず打つ來らかして來るんだ。でないと切りがないぜ。それに、卓爾は何處にゐるんだ」

「先刻、お友達のところへ行つたまんま、まだ歸つて來ないやうですよ」

「さうか、友達のところなら好いけど……信雄とは出來るだけ一緒に遊ばさないやうにしなくつちや、駄目だぜ。あの莫迦が卓爾にどんな惡い事を敎へないとも限らないからね……」

「ええ。そりや出來るだけ氣をつけますけど……でもね、信ちやんだつて、それほど惡い子供でもないやうよ」

「莫迦を云ふな。彼奴は純粹の白痴だ。低能以下だ。あんな奴を普通の人間と思つたら、とんだ事になる」

愼吾が信雄の事を如何にも憎々しく罵る度に、しげ子は却つて反對に信雄を庇ふやうな樣子を見せた。それが、尙更、愼吾の心を苛立せた。成程、しげ子の方から云はせれば、むしろ低能兒であるが故に、凡の事を許してやらなければいけない。それを何の假借もなしに頭から罵られると、却つて信雄が氣の毒になる……と云ふのであらう。然かもそれが充分解つてゐながら、しげ子に信雄を庇はれると、彼は何故か無闇に腹が立つた。

「お前は信雄の事になると、何でもおれに反對するけど……あんな奴を甘やかして置けば際限がないぜ」

かう云つた愼吾の言葉は、何時の間にか、頭から相手を抑えつけずには置かないと云つた風な峻しい樣子に變つてゐた。そして、詫びるやうな眼附をしながら、唯、おどおどと見上げてゐるしげ子をそこへ置き去りにしたまま、ぐるりと軀を向け直すが早いか、苛々と顔を慄はせて、自分の書齋へ歸つて終つた。

近頃信雄は何故か無闇に家をぬけ出しては、村の方の、然かも可なりの遠くまで一人で遊びに行く癖がつき始めた。それが又愼吾に一つの新しい心配の種を與へた。

狹い漁村の事ではあるし、然かも、みんながみんな毎日出來事の乏しいのに苦しんでゐる以上、今では、信雄の事が

到る處で話頭にのぼつてゐる事は、解り切つてゐた。そして、怖らく校長さんとこの莫迦とか何とか云ふ名をつけられて、その噂がみんなの口から口へと擴つてゐるのであらう。その上、信雄が何處でどんな醜い事、淺猿しい事をするかも知れない。さう思ふと、信雄が一人で何處かへ出懸けたと云ふ事を聞く度に、愼吾は何時でも自分自身の世界がずんずん突き崩されて行くやうな氣持がした。で、彼は學校の歸りなどに暇さへあれば村のところどころを廻つて見ては、人目に立たない程度に於いて、必ず信雄の姿を搜すのであつた。

八月も間近になつた、ある日の午後であつた。愼吾は例に依つて學校の事務を終ると、又々信雄の樣子を見張るともなく、ぶらぶら村のそこここを歩いて見た。

村端れにあるアイヌ部落の横をぬけて段々海岸の方へ出て行つた愼吾は、部落と村との界とも云ふ可きあたりの、平生村の漁船を引き上る場所になつてゐる砂濱に、大勢の子供が焚火を圍んで面白さうに遊んでゐるのを見かけた。假令北海道の北日本海に面したこんな漁村でも、流石に夏になると子供達は、天氣の日に限つて、みんな爭ふやうに海へ入るのである。然かも、潮があまりに冷いために、二十分と續けて入つてゐる者は一人もない。それでも上つて來る時にはあまりの寒さに思はず焚火を圍まざるを得ないのである。

濱に添つて弓なりに長く走つてゐる波除けの堤の一端に立つて、暫時子供達の樣子を見てゐた愼吾は、その裡に一團の焚火の群が何か頻りに笑ひ崩れて如何にも面白さうに騷ぎ始めたのを見出した。子供達は、立つてゐるのも、胡座をかいてゐるのも、みんな手を打つたり、軀を搖す振つたりして、一齊に何かに向つて喝采でもしてゐるらしい樣子である。そして他の焚火の群からも、大勢の子供達がその方へばらばらと走つて行くのが見え始めた。

見ると一人の男の兒がずらりとみんなに圍まれながら、砂の上に這ひつくばつて、頻りに何か卑猥な眞似をしてゐる

らしい。それが妙な足附をして無闇に脚を揺す振つては、見るに堪えないやうな格恰をする度に、みんなは如何にも面白さうに囃し立てて、わいわいと騷ぐのである。そして騷ぎながらも　砂だの木片だのを、その子供に向つてばらばらと投げつけるのが、はつきり見えた。

その裡に、四つん這ひになつてゐた子供が突然立ち上つたと思ふと、更に一倍不様な形をして、その砂にまみれた軀を周圍の一人一人に喰つ附けやうとでもするらしく、よちよちとみんなの方へ動き始めた。みんなは喰つ附けられまいとして逃げ廻る。子供は好い氣になつて後を追ふ。騷ぎは一段大仰になつた。

好く見ると、驚くまい事か、みんなに弄ばれてゐるその子供は信雄である。それに氣のついた瞬間、口惜しいと云はうか、情けないと云はうか、自分ながら言葉は現はし切れないとどの烈しい侮辱を感じた。そして、軀中から見る間に氣持の惡い汗が一齊に泌み出すとともに、何時か自然に手足が慄え始めた。と思ふと、彼は何か怖ろしい力に彈かれたやうに、思はず知らず、その子供達の方に向つて驅け出した。

眞蒼な顏をしながら駈けつけて來た校長の姿を見ると、子供達は如何にも驚いたらしく、突然口々に何か罵り合ひながら、裸のまんま處かまはず逃げて行つた。唯、信雄だけは、軀についた砂を拂はうともせず、不様な形を更に一層不樣にして、一人でにやにや笑ひながら立つてゐた。それを見ると、今が今、子供達の手に依つて心に深く刻みつけられた屈辱が、何時か炎のやうに烈しい怒となつて、愼吾の心の底から渦巻き上つた。

「何をしてゐるんだ。莫迦野郎」

にやにやしてゐる信雄の顏を見た時、たつたこれだけの言葉が、愼吾の云ひ得た凡てであつた。そして、後を云はうとしても如何にも言葉が出て來ないと云ふ風に、唯、ぴくぴくと口元を慄はせながら、暫時の間、老爺と信雄を見詰め

て立つてゐた。

すると、信雄は矢張卑しげな笑を浮べて、出臍をいぢくつてゐる自分の指先と、前に立つてゐる愼吾の顏とを見較べるやうに、頻りに顏を動かしてゐたが、何と思つたか、突然、くるりと向き直ると、一氣に海へ向つて走り出した。

それを見ると愼吾は、如何に我慢をしやうとしても、もう如何する事も出來なかつた。いきなり信雄の後を追つて、二三間ほど馳けたと思ふと、忽ち右手を伸してその首條をいやと云ふほど摑むが早いか力任せに信雄の軀を砂地の上へ引き倒した。そして、尚も逃げ出さうと藻搔くのを、半ば上からのしかかるやうに飽くまで膝頭で抑えながら、拳を固めて、額と云はず軀と云はず、手當り次第に撲ちのめした。

やがて、ひいひいと身を切られるやうに泣き立てる信雄を引き摺り起して、軀についた砂をすつかり拂つてやつた愼吾は、遠くの方に脫ぎ捨ててある着物を自分で拾つて來て、更にそれを丁寧に着せてやつた。そして、まだまだ涙の溢れてやまない顏を、上から覗き込むやうにして、

「いいかい。もう二度と再びあんな人達と遊んぢやいけませんよ。みんなはね、お前を莫迦にしきつて、好い玩具にしてゐるんだから………これからは決してあんな下等な眞似をするんぢやありませんよ。若しね、一寸でもみんながいぢめたら、何時でも私にいつけておくれ。二度といぢめないやうに、私がきつと叱つてやるから」

かう云つた愼吾の聲は、段々微かに慄えて行つた。

それに對して信雄が今日に限つて素直に合點合點をするのを見ると、忽ち全身を絞めつけられるやうな悲しみが、愼吾の心の底から湧いて來た。そして、何時の間にか眼の中が熱くなつて、瞼の裏で何かがちかちか光つたと思ふと、涙が靜かに溢れて來た。

信雄を引き取つてこの方、愼吾はこの時位、心の底からしみじみ信雄をあはれに、思つた事はなかつた。

信雄が濱邊で大勢の子供達に無殘な嬲り物になつてゐるのを見た日から、愼吾の心持は更に幾倍か暗くなつた。實際、明けても暮れても、一度眼を閉ぢれば、直ぐ樣信雄の淺猿しい姿が浮んで來て、それが際限もなく彼を脅かして止まないと云つても、敢て必ずしも過言ではなかつた。毎日學校の行き歸りに村の何處かで子供達が面白さうに騷ぐのを見懸けでもすると、その度に愼吾は、又してもそこに信雄が弄んで恥暴しをしてゐるのではないかと危んでは、一度にたら〳〵汗が湧き出すほどの切ない思をするのであつた。そして、それが何でもない唯の遊びである事が知れる時、その時、愼吾は始めてほつと息をついては、僅かに心を落ち着ける事が出來るのであつた。

その事が絶えずあまりに心を脅かすので、愼吾は一層の事座敷牢でも造つて、斷然、信雄を檻禁しやうかとも思つた。實際、これほどに苦しむよりは、如何にも信雄には可哀さうであるが、むしろ思ひ切つて檻に入れた方が、どれだけましであるかも知れない。少くとも自分一人は、それに依つて少しは心を安かにして村を歩く事が出來る。かう考へては、何度その事を實行しやうと思ひつゐたか解らない。然し、他人に格別危害を加へないものを、殊更、狂暴な精神病者同樣に取り扱ふわけにも行かなかつた。殊に、それに對して世間がどんな烈しい非難を向けないとも限らない。さう思ふと、自分が小學校の校長として、又、珍らしい人格者として、周圍の敬意を集めてゐればゐるほど、彼には尚更、斷乎たる處置を取り得るだけの力が遂に出て來なかつた。

無論、濱邊の出來事以來、自分達夫婦が連れて出る以外、信雄には絶體に外出を禁じて終つた。それでも信雄は矢張り僅かばかりの隙を見ては、巧みに二人の監視を破つて相變らず村へばかり遊びに出懸けた。殊に、愼吾が學校へ出た

後、しげ子と女中ばかりになると、信雄は殆ど公然と云つても好い位な態度でもつて、どしどし家を出るのであつた。若しもそれを止めでもすると、さんざ、拗ねたり、怒つたりした後で、遂には力に訴へてまでも押し通さずには置かなかつた。その上、同じく村へ連れて行くにしても、しげ子一人で行かうものなら必ず途中で勝手に逃げ出して、何處かへ姿を隱して終ふのである。そんな事が何度も何度も重なる度に、愼吾は信雄に對して、全くどうにも手の着けやうがなくなつて終つた。

その裡に、信雄に關する忌しい噂が、段々愼吾の耳へ入つて來た。その噂はしげ子が里方から持つて來たり、女中が何處かで聞いて來たり、時には、九つになる卓爾の口からさへも傳つたりして、毎日毎日、いろいろと形を變へては絶えず愼吾の心を苦しめるのであつた。

信雄に關する噂と云ふのは、無論、その早熟極る性欲發動と、生まれながらに持つてゐる盜癖とであつた。今日は何處の女の子を脅かしたとか、今日は何處のおかみさんに忌しい眞似をしかけたとか、或は何處の店先で駄菓子を盜んだとか、悉くさう云ふ類の噂ばかりであつた。

それを聞く度に必ず愼吾の心に浮んで來るのは、昔、避暑地の村を逍遙ひ歩いてゐた、あのだらしないお米の姿であつた。彼がお米を捨てて逃げた後では、尙更お米はそのだらしなさを烈しくさせて、怖らく信雄を伴れて歩きながらも、村中の到る處で若い者の好い玩弄物になつたのであらう。然かも、かうして自ら進んで弄ばれ、歡んで蹂躙を受けてゐる裡に、何時か野良犬のやうにぞろぞろと子供を殖して行つたのであらう。その上、到る處で酒をねだつたり盜んだりして飲んだために、生れた子供達が悉く救はれ難き白痴兒になつたものに違ひない。時には一杯の酒を得たいばかりに、その體を歡んで若い者の足下に横たへたのかもしれない。然かも、かつてお米が酒のためにしたのと全じやうに、今、

信雄は幾個かの駄菓子のために、自ら進んで平然と生き恥を曝してゐるのではないかしら。それを好い事にして、尚更、大勢の子供達は、否、その中に大人さへ交つて、益々信雄を蹂躙するのではないかしら。さう思ふと、彼は信雄に對しても、亦、それを弄ぶ子供達に對しても、居ても立つてもゐられないほどの、口惜しさと腹立しさとを感ずるのであつた。

然し、一度、十五六年前に於ける自分自身を省みると、自分もお米に對して略同じやうな態度を、必ずしも取らなかつたと斷言し得る事が出來ないやうな場合もあつた。それを思ふ時、愼吾は今更ながら身慄のするほど烈しい自責を感じるのである。實際、信雄の忌しい噂を耳にする度に、彼にはそれを單なる信雄一人の噂としてのみ受取る事は出來なかつた。その噂を生む信雄の蔭には、必ずお米の姿が伴ひ、更にそのお米の蔭には、必ず以前の醜い自分自身が一緒になつて浮んで來るので、それから受ける彼の苦しさは、まさに三重の苦しさ、否、それ以上の苦しさであると云つても好かつた

信雄の事に就いてすつかり思ひあぐんだ結果、低能兒や白痴兒に對する何か好い生理的療法でもないものかしらと思つた愼吾は、ある時それを知り合の村醫に訊ねて見た。すると、村醫は、早熟の性慾發動に就いては格別好い療法もないらしいが、盜癖に對しては、滿腹療法と云ふものを施して見れば、或は多少の効果があるかも知れない、と云ふ風な事を云つた。で、彼は信雄に對して早速それを施して見た。その療法は、いやしくも子供の喰べたがる物ならば、少しの制限をも加へずに何でも彼でも喰べたいだけ喰べさせるのである。そして、絶えず滿腹させて置けば、それが飲食の慾求から生じる盜癖である以上、盜み喰をする必要がなくなるために、當然盜癖が消滅すると云ふのである。

「これが今のところ駄菓子や、果物や、せいぜい副食物位の滿腹療法だから、まだまだ始末が好いけど、酒や麥酒の滿

腹療法なんかをするやうにでもなつたら堪らないね」

愼吾はしげ子に向つて、こんな戯談を云ひながらも、とにかく半月ばかり實行して見た。然し、その結果は信雄をして唯徒らに不消化下痢を起させた上に、そのぶよぶよした顔を尙一層靑ん膨れにして終つた。實際、それ以外にとうとう何等の效果も上らなかつたばかりでなく、お仕舞には下痢のために、ところ關はず大便を洩らすやうにさへなつて行つた。それを知つた時、愼吾としげ子とは空しく苦笑しながら、折角あてにしてゐた療法をも遂に思ひ止るより他に仕方がなかつた。

八月も終りに近い或る日であつた。

學校の始る前に、一と通り庭を綺麗にして置かうと思つた愼吾は、少し日射しの蔭るのを見計つて庭へ出た。そして、頻りに草を毟つたり芥を掃き取つたりして、殆ど日の暮れるまで一人でせつせつと働いてゐた。その裡に、いよいよ薄暗くなつて來たので、今日はもうこれで切り上げやうと思つて、手脚を洗ふために台所の側にある井戸のところまで行つて見た。すると、そこに卓爾が一人、裏の除蟲菊畑の方を眺めながら何故かぼんやりと立つてゐた。そして、飼犬のジョンがその脚元へまつわるやうに軀をこすりつけながら、頻りに尾を振つては、甘へ甘へ下からその顔を見上げてゐた。

「卓坊。お前そんな處で何をしてゐるんだ。もう直ぐ御飯だよ」

彼が何の氣もなくかう云つて呼びかけると、如何にも不意を喰つて慌てたらしく振り返つた卓爾の顔には、何故か不思議にどきまぎとした色を見えた。

「そんな處にぼんやりしてゐないで、そろそろ家へ入つたらどうだい」

愼吾は尚も優しく話しかけて、段々側へ寄つて行つたが、卓爾は矢張り返事をしない。見ると兩手を固く握り締めて、棒のやうに突つ立つたまゝ、眼をきよときよと動しながら、物に脅えでもしたやうな變な様子を顔に現はしてゐた。そして、兩方の口元と喉のあたりを無闇にひくひくと動かしてゐる。

「お前どうしたんだ。えつ。何か喰つてるな」

思はずから云つた愼吾が直ぐ樣側へ行くと、卓爾の幼い顔は早くも微かな泣き顔に變つて終つた。そして、矢張、何の返事もせずに、唯、眼だけを徐々苦しさうに動しながら、何故か父親の近附いて來るのを怖れるやうに少しづつ後退りを仕始めた。

「おい。どうしたんだ。一體、何を喰つてるんだ」

然し、卓爾は矢張それには答へずに、愈々顔を赤く息張らせて、無闇に苦しさうな様子を見せたが、遂には體を次第に前屈みにすると同時に喉の奥から不氣味な低い呻き聲をさへ發し始めた。

「おい。しげ子。早く來てくれ。卓坊が何だか喉へ詰らせて苦んでゐるから」

その様子にすつかり驚かされた愼吾は、思はずあたりへ響き亘るほどの大聲でから叫んだ。するとそれが直ぐに聞えたものか間もなくしげ子も前掛で手を拭き拭き、如何にも慌てたらしく走つて來た。

やがて、苦しんでゐる卓爾を二人で出來るだけ力を盡して、水を飮ませたり背中を叩いたりしてやつた。その御蔭で暫時すると口から何か小さな塊を吐き出した卓爾は、始めてやつと氣力を回復する事が出來た。

その時、やつと安心したしげ子は、卓爾の脚下に何か小さな箱のやうなものの落ちてゐるのを見出して、體を屈めて拾ひ上げたが、

「これ。何でせう。今、脊中を叩いてやつてゐる裡に、卓坊の懐から落ちたのよ」

云ひながら、それを眼のところへ持つて來て、乏しい光の中へすかして見た。

「何だい。それは」

「あら。キヤラメルよ」

「お前でもやつたんぢやないのかい」

「いいえ………。まあ。卓坊。どうしたの。このキヤラメルは。お前、今、これを喉へ詰らせたんですね」

しげ子がかう云つて訊ねると、卓爾は唯「御免なさい。御免なさい」と、泣き聲になつて云ふだけで、少しもそれに對する答をしない。

「おい。お前、何處からこれを貰つて來たんだい。正直に云つて御覧。正直に」

愼吾も側から言葉を添へて訊ねて見た。然し、矢張、卓爾は唯繰り返し繰り返し謝るだけである。その時、信雄の盗癖の事が忽ち電のやうに愼吾の頭に閃いた。そして、このキヤラメルも、吃度信雄が何處からか盗んで來て、卓爾にやつたものに相違ないと云ふ考が、直ぐ樣あとから湧き上つた。

「卓坊。貴樣、これは信雄に貰つたんだらう。正直に云へ。好いか。ほんとうの事を云はないと酷いぞ」

愼吾の聲は抑えられない不愉快と怒りとのために、微かな慄へをさへも帶びてゐた。そして、右手でもつて卓爾の頭を鷲掴みにしながら、

「さうだらう。吃度、さうだらう。正直に云へ」

と、何度も何度も繰り返して、上から荒々しく抑えつけた。

「もう、しませんから御免なさい。きつとしませんから」

「何處から持つて來た。貴樣、すつかり知つてるんだらう」

「村の××屋で取つたんです……もうしませんから御免なさい」

「何？ 貴樣も一緒になつて盗んだんか」

思はず知らずから叫んだ愼吾の言葉には、恰も何かに鋭く心を突き刺されでもしたやうな、如何にも悲痛な色が泌み出てゐた。そして、自分ながらその苦しみに堪えられないと云つた風に、忽ち烈しく全身を慄せたが、更に、卓爾の頭を強く掴んだまま、息を殺して、上からぢつとその小さな姿を見下してゐた。

「おい。卓坊、一寸こつちへ來い。……それから、信雄も引張つて來い」

やがて、卓爾としげ子とに交る交るかう云つた愼吾は、頻りに泣きながら謝る卓爾の襟首を引き摺りながら、ぐんぐん家の中へ引つ張つて來た。そして、茶の間の眞中に大きく切つてある爐の側へ、卓爾と信雄とを座らせて、更めて、今日のキヤラメルに關する凡の事に就いて問ひ糺した。

すると、矢張、今日二人で村へ遊に出懸けた時、信雄が卓爾を唆かして、××屋の店で十錢のキヤラメルを一度に三箱も盗ませたが、信雄自身は二箱取つて、殘りの一と箱を卓爾にやつと云ふ事が始めて解つた。信雄が來て以來、毎日のやうに愼吾がひたすら怖れてゐた事が……信雄の怖るべき惡癖が、今まで順潮に成長して來た卓爾の心に忌しい感化を與へはすまいかと怖れてゐたその事が、遂に事實となつて現れたのである。それを知つた時、自分の過去の惡靈がかうまで自分の一家の上に禍を持來すものかと考へて、愼吾は今更ながら、しんしんと寂さが背に喰ひ入るほどの身慄ひを感じた。

卓爾が唆かされて盗みをしたのは、どうも今日が始めてであるらしい。それが慎吾にとつてまだしもの心遣りであつた。然し、その惡癖がまだまだ骨身に喰ひ入らない裡に、一擧にそれを押し潰して終はなければならないと思つたので、彼は見せしめのために殊更思ひ切りひどく卓爾を叱りつけた。

「平生(ふだん)から家では欲しいものなら何でも買つてやつてるぢやないか。それだのに何故こんな下等な事をしてくれたんだ。ほんとうなら父さんはね。申し譯のためにお前を撲ち殺しても好いんだ。それに盗んだのは、ほんとうに三つだけか隠さずにみんなここへ出して見ろ」

「いいえ。ほんとうに三つだけです」

卓爾が泣きながらやつとこれだけ答へた時、慎吾は膝の前に置いてあるキャラメルの箱を取り上げた。そして中を開けて見ると、何時の間に喰べたものか、たつた二包しか殘つてゐない。

「どうだ。これは。驚いたな、もう大方喰べちやつてゐる。……」

かう云つて一寸しげ子の方を省みた慎吾は、その箱を腹立しさうに爐の中へ投げつけると、更に又、言葉を繼いだ。

「おい。貴樣達はな。今日、こんな惡い事をして來たんだから、明日起きたらすぐに××屋へ行つて、昨日はどうも大變惡い事をしましたつて謝つて、金を拂つて來い。………好いか。屹度謝つて來い。謝つて來ないと承知しないぞ」

慎吾がかう云ひ終るか終らない裡に、それまで一と言も物を云はずにゐた信雄が、

「おら、何時でも謝つてるよう」

と、力の抜けたやうな聲で云つて、突然、にやにやと笑ひ出した。それを見ると慎吾はそのあまりに甚しい莫迦さ加減に對して、全くぢつとしてゐられない程烈しい感覺的の不愉快を感じた。そして、忽ち物凄い憤怒を顏に漲したと思ふ

と、突然、半ば立ち上つて拳を上げた。それを見ると信雄はいきたり盤の上を這ふやうにして逃げ始めた。續いて卓爾も逃げ出した。然かもかうして逃げられると、愼吾の怒は更に烈しく燃え上つた。そして、どうにも我慢が出來ないと云つた風に猛然として立ち上ると、柱にかけてあつた箒を取つて、直に二人の後を追つた。

茶の間を逃げ出した二人は、台所へ續く土間へ一旦降りた後で、一寸逃げ場を失つたためか、妙にまごまごしてゐたが、とうとう信雄が先に立つて、土間から裏の方へ伸びてゐる便所の廊下へ走り込んだ。廊下の衝き當りが用心口になつてゐて、ひらきさへ開ければ直ぐに畑へ出られるのである。二人がその衝き當りで、又暫時まごまごしてゐる間に、愼吾はしげ子が一心にとめるのも聞かずに、箒の柄で二人を何度も力任せに撲りつけた。廊下が眞暗なので、二人のどつちをどの位撲つたのか、少しも見當がつかなかつた。唯、箒が打ち降される度に、二人は頻りに氣魂しい叫びを上げてゐたが、何時かとうとう掛金を外してひらきを開けて、揃つて畑へ逃げ出して終つた。

「やあ、小便をしてゐやがる。まるで猫見たいだ…………でも餘程、怖かつたと見えるね」

二人が逃げ出した後で、茫然と箒を持つて土間へ出て來た愼吾は、そこに泣きながら立つてゐるしげ子を見ると、いまいましさうにかう云つた。

「あなた。どつちを撲つたとお思ひになるの。卓爾ばつかりよ。だつて、信ちやんは先へ逃げ込んで、おまけに蹲んで掛金を外したんですもの。ちつとも撲られなかつたのよ」

袂でもつて涙を拭きながら、しげ子がもう一度不服さうにかう云つた時、愼吾はそれに對して、唯、切ない苦笑を洩らすより他に仕方がなかつた。

「あんな莫迦でも、歳が歳だけに妙なところで妙な智慧が出るものだね。然し、あんな奴はいくら撲つたつてとても駄

目なんだからな……唯、卓爾だけは二度と再びこんな事をしないやうに、思ひ切り懲して置く必要がある。でないと、これから先、取り返しのつかない事になるからな」

云ひわけともつかず、敗け惜しみともつかない調子で、かう云つた愼吾は、自分ながらどつちであるかはつきりとは解らなかつた。然かも卓爾だけを撲つたのを可哀想に思ふよりも、むしろ、信雄のために巧みに身をかわされた事の方が、何故か遙かに強く彼の心を騷した。

その晩、彼は一人爐の前に胡座をかいて、可なりの夜更までいろいろ取り止めもない思ひに耽つた。

信雄の惡癖の影響が、假令一度でも卓爾に働きかけた事を知つた以上、愼吾はそれ以來、極力二人を引き離すやうに努めはしたが、それでも何かにつけて以前よりは一層暗澹たる不安にばかり襲はれてゐた。何となれば野中の一軒家のやうなこの家に二人が揃つてゐる以上、如何に引き離さうと努めても、要するに不可能であつたからである。若し二人を一緒に遊ばせまいとすれば、どつちかを外へばかり出すより他はない。然し卓爾はさう外へ遊びにばかりやるにしてはあまりに歲が小さかつた。こんな事を考へる度に、愼吾は若しこのままで行くならば、自分のほんとうの一人つ子と云つて好い位な卓爾をさへも、見す見す泥沼の中へ沈ませて終ふ氣がして、實際、考へて見るのも堪らないほど、切ない思ひがするのであつた。

四五日降り續いた雨が上るとともに、俄かに冷氣が增して來たある日の夕方であつた。愼吾は信雄の事に就いて、又してもいろいろ暗い物思ひに耽りながら、一人書齋の緣側に臥ころんで、ぼんやり庭のあたりを眺めてゐた。片隅に大きく一と塊りになつて咲いてゐるヂキタリスの花の色が、紅であるか紫であるか、はつきり見分けがつかない位に、外

は段々暮れかけて來たのにも關らず、彼は敢てランプをつけやうともせず、その薄暗い中にぢつと軀を横たへてゐた。

すると、その裡に、一人の人が表の方から入つて來る氣合がした。その人は玄關の方へは行かずに、庭と玄關との界になつてゐる生籬の木戸を開けて、案内も請はずにずんずん書齋の方へやつて來た。見ると、しげ子の父である村長の高倉老人である。何時も休日か半どんでなければ遊びに來ない習慣である老人が、どうして今時分、然かもこんな道の惡い雨上りに、わざわざ提灯までも用意してやつて來たのかと思ふと、愼吾には一寸見當がつかなかつた。

「どうしたんです。眞つ暗ぢやありませんか」

「ええ。先刻から不精をして、ついランプを點けずにゐるんですが……それでも中にゐると、それほど暗くもないんですよ」

一と通りの挨拶がすんだ後、高倉老人と、愼吾との間に最初こんな會話が取り交された。然し、その間にも、何となく用ありげな落ちつかない老人の樣子が、愼吾の心に絶えず重々しい壓迫と不安とを與えた。

「何か御用でもあつてわざわざお出で下すつたんですか」

とうとう愼吾は我慢し切れなくなつてから訊いた。

「ええ。實はね。お宅の信雄さんの事ですが」

「ああ、信雄の事ですか。あの莫迦にも、實際困つたもんです。唯今では私ももうすつかり持て餘してゐるんですが」

「御尤もですな、お察しします……實は、その信雄さんの事に就いて、少し御相談したい事があるんですが」

信雄の事なら、實際、少しも聞きたくない。聞かなくつても、も十分に解つてゐる。解り過ぎるほど解つてゐる。……

……忽ちこんな考が愼吾の心に湧き上つたが、まさか、わざわざ出懸けて來てくれた身に對して、そんなそつけない態

度を取るわけにも行かない。さう思つた愼吾は、

「そんな所にお出でにならず、とにかくこつちへお上りになりまんか、直ぐにランプをつけますから」

と、云つて、一と先づ老人を書齋の中へ通した。

すると老人は、薄暗い座敷の眞中程に腰を卸すが早いか抑へ切れないやうに直ぐ樣口を切つた。

「信さんの事について、近頃村中で實に怪しからん噂を立ててゐるんです。私はね、それを聞いた時にほんとに腹が立つてね。………だつて、あなたに對してあんまりな事を云ふんですからなあ。始め聞いた時は、私もあんまり莫迦々々しくつてねえ、てんで、相手にする氣にはなれなかつたんですがね、まあとにかく一度はあなたの耳へも入れて置かうと思つて………」

「ぢや、一體、何なんです」

老人の段々亢奮して來る樣子が、妙に苦しく彼の心を突き刺したので、愼吾は思はずかう訊き返した。

「何つて、云はばまあ取るに足らない噂なんですがね………實は、近頃、村中でね、みんなが信さんの事を、あなたのほんとの子に違ひないつて云つてゐるんです。それもね、あなたが北海道へ來る前に、内地で造つて來た私生兒だつて云ふんです………でないと、あんな莫迦をわざわざ引き取る筈がないつて云ふんです。それにね、顏も何處か似てるんださうですよ。實際、人を莫迦にしてるぢやありませんか」

老人は、好い加減な出鱈目を云つて、恣な噂を立てる村の人達に對して、如何にも憤慨を禁じ得ないと云ふ風に、かう云つて言葉を切つた。然も默つてそれを聞いてゐた愼吾の顏は、その言葉の終らない裡に早くも抑へ難き悔恨と羞恥とのために、見る見る火焰のやうに燃え上つて終つた。そして、首筋から頭へかけて全身の血が一瀉にぐんぐん上つて

行つたと思ふと、こんどは顏中の筋肉が自分にもはつきりと解るやうに、段々烈しく硬張つて行つた。これが若しランプでも灯つてゐやうものなら、一度に朱よりも赤くなり、石よりも硬くなつた自分の顏は、老人の疑を必ず呼び起さずには置かないであらう。さうしたら、今まで如何に自分を信じ切つてゐた人でも、自分の曳いてゐる黑い影を、いやでも直覺したに違ひない。然し今幸に、遇然、ランプをつけてゐなかつた事と、自分が緣側を脊中にして闇に向つて座つてゐる事とが心の底から迸り出たこれほど明らさまな羞恥と狼狽とを僅かに覆ひ隱してくれたのである、さう思ふと、彼は間一髮のところで僅に危機を脫し得たやうな氣持がして、始めて漸く立ち上つて燐寸を搜し始めた。然かもその間に尙一層心を落ち着かせやうと思つたので、殊更、搜しあぐんでゐるやうな樣子をして、又、暫時薄暗い中を往つたり來たりしてゐた。

好い加減間を見計つて彼が漸くランプをつけた時、自分ながら心が少しづゝ落ち着いて來た事を感じた。そして、始めてほつと安心して、漸く眞面（まとも）に老人の顏を見る事が出來た。然し、すつかり彼を信じ切つてゐる老人の如何にも善人らしい顏附を見ると、彼は今が今まで永年の間、この善良な老人をあれほど欺き切つてゐた事が、實際心から濟まなくなつて來た。無論、殊更欺かうと思つて欺いたわけではない。唯、惡い惡いと思ひながらも、周圍の事情から止むなく凡てを隱し通したのである。然かも、その秘密は何時か早くも村へ傳つて來て、かうまで自分を取り圍んで終つた以上今ではもう如何する事も出來ない。この上ちつと我慢してゐるよりも思ひ切つて凡てを告白して、更めて罪を許して貰つたら、その方がちつと秘密を抱いてゐるよりは、少しは苦しみが減るかもしれない。それには、今が最も大事な機會である。すつかり思ひ詰めた彼は、愈々心を決してその怖しい一語を「實は噂のやうに私の私生見です」といふその一語を思ひ切つて口から外へ出さうとしかけた。然し、一旦、打ち明けた後、老人やしげ子や殊に幼い貞爾などが、その

ためにどれほど無殘に心を傷けられ、どれほど苦しい心持で自分に對するやうになるであらうかと考へると、彼には短いその一語を、口から外へ押し出すだけの强い力が、どうしても遂に心の底から出て來なかつた。

その裡に、聲を聞きつけたものか、しげ子が少し慌て氣味に入つて來た。

「私、物置の方へ行つてたもんですから、つい存じませんで……」

こんな事を云つて父親に挨拶をした。そして、更に、向き合つたまま默つて座つてゐる二人を見較べながら、

「お二人とも如何かなすつたの？……何か御用？」

と、云つて少し不思議さうな顔附をした。

「用事と云ふほどでもないけどね……近頃、信雄がおれの私生兒だつて云ふ噂を、頻りに村で立てるんださうだ。それでね、お父さんが心配して、わざわざ來て下すつたんだよ」

今が今まで、打ち明けようか打ち明けまいかと一人で心を苦しめてゐたその人が、咄嗟の間にかうまで態度を變へて然かも少しの狼狽もないのが、愼吾には自分ながら全く意外の氣持がした。然かも、一旦思ひ切つてその怖しい溝を飛び越えて見ると、その後は、何故か心が一段と力强い落ち着を保つて來た。そのためか、老人が、

「まさか、ほんとうぢやないでせうね」

と、少し氣の毒さうな顔附をしながら、最後のだめを押した時にも、愼吾は、

「無論ですとも。だつて解つてゐるぢやありませんか」

と、きつぱり云い切る事が出來た。

「ぢやねえ、あなた御自身一度村の主立つた人に逢つて見て、すつかりほんとうの事を話てやつたらどうなの。だつて、

そんな根もない事を云はれては。あんまり酷ぢやありませんか」

村に擴がつてゐるとりどりの噂に就いて父が愼吾にいろいろ話して聞かすのを、默つて側で聞いてゐたしげ子は、話し終ると、始めてやうやく口を開いた。その時のしげ子の顏には何時にない烈しい、亢奮の色が溢れてゐた。

「然し、そんな事は結句打つ棄つて置くより他に仕方がないよ。如何したつて云ひたがる奴は云ふんだから」

「だつて、ねえ、あなた。ほんとうの事を云はれるのなら、いくら云はれたつて好うございますけど、無い事を云はれるなんてあんまりぢやないの」

「さうぢやないさ。無い事だから平氣でゐられるんだ。」

「でもね、あんまり口惜しかなくつて」

「いゝや。違ふさ。……顧みて直くば千萬人と云へども吾行かん……こつちさへ疾しくなけりや、何と云はれたつて好いぢやないか。遠くつたつて、どうせ身内だもの、顏位少しは似てゐるさ、ハハハツ……」

愼吾は最後の言葉に無理にも力を入れて云ひ棄てた後で、殊更、大きな聲で笑つて見せた。それを見るとしげ子は、もう何を云つても馱目だと思つたものか、そのまますつかり言葉を切つた。然し、暫時すると、又々、如何しても云はずにゐられないと云ふやうに、眉と眉との間に小さな皺を刻んで、再び鋭く彼を見詰めた。

「實はね、今までほんとに何度も何度も云はうと思つて、如何しても云へなかつたんですけどね、私、今夜は是非ともお願ひしたい事があるんですの」

「お願つ、何なんだい。構はず云つたら好いぢやないか」

「あのね、後生ですから、信ちやんを何處か他の親類へお預けになつて戴けないでせうか。それはね、卓爾の事もあり

ますし、又、世間の噂だの何だのと云ふ事もありますけど、それよりも、私、この頃では信ちやんと同じ家に住んでるのがつくづくいやになつたんですから。だつてね、あの人、私に、それはいやな眞似をするのよ。とても十四位の子供なんかに出來ないやうないやな事をするのよ。それが始終なんですもの」

「そりや、お前があんまり可愛がるからだよ」

「可愛がる」と云ふ言葉に殊更力を入れて云つて愼吾は、云ひ終ると、一寸しげ子に向つて輕い苦笑を浴せた。

「いいえ。そんな事ぢやないの。信ちやんはね。私なら、何をしたつて負けないと思つてゐるからよ。だつて、あの人、莫迦力があるんですもの」

かう云ふ裡にも、口惜しさうに段々聲を尖らせて行つたしげ子は、何時かもう眼に一つぱい涙を溜めてゐた。

「それにね、あの子が來てから、あなただつて、毎日毎日怒つてばつかりゐらつしやるんですもの。私つくづくいやになつちやつたのよ」

もうこれより以上に云へないと云ふ風に、しげ子は言葉を切ると一緒に、何時か聲を出してしくしくと泣き始めた。それを默つて聞いてゐた愼吾の顏は、何時か物凄いほどに蒼ざめて行つて、その引き結んだ口元には、怖しい憤怒の稻妻が如何にも不氣味に閃いてゐた。然かもその顏さへ、お仕舞には段々重さうに俯向けて終つた。その時老人の口から苦しさうな溜息が洩れた。それがすつかり靜まり返つた室の中を一層靜かなものにした。

その日も學校から歸つて來た愼吾は、救はれ難き苦しみに心を締めつけられて、無闇に額を苛々させながら、一人で裏の畑を歩いてゐた。

もういよいよ信雄を如何にか處分しなければならない時が來た事を思ふと、愼吾の心は日増にぢりぢりと撹亂されて行くやうな苦しみを覺えるのであつた。村の事や、卓爾の事や、殊に、しげ子の訴へた言葉を思ふと、全く居ても立つてもゐられない程の氣持になる。實際のところ、自分の眞實の子である以上、愼吾自身だけは信雄を養育院にでも入れやうと云ふ風な氣には、如何に何でもなれなかつた。と云つて、何處かへ預けやうとしても、今のところ、格別預ける當もない。彼は自分ながら、唯、空しく途方に暮れるより他に、全くどうする事も出來なかつた。

その時、不圖、母家と豚小屋との間の空地で、しげ子に向つて何か頻りに無理を云つてゐる信雄の姿を見懸けたので、この間の晩のしげ子の言葉を思ひ出すと、實際、見るに堪えないほどの穢いものに觸るやうな氣持がして、愼吾はどうしてもそつちへ歩いて行く氣になれなかつた。

で、彼は後の丘の裾が畑の中まで流れ込んで小高くなつてゐるところへ登つて、心を晴らすやうに暫時あたりを見廻してゐた。

三月ほど前には、桔梗色の綺麗な花をびつしり着けてゐた亞麻畑は、もうすつかり實を結んだものと見えて、つやつや光る鼈甲色の莖と葉とを、透み切つた光の中に、如何にも明るく並べてゐた。それが麥畑のないこのあたりに、さながら麥秋が來たやうな感を與へた。そして、花の無くなつた除蟲菊畑の悄然とした葉並の間に、ぽつぽつ立つてゐる林檎の樹には、何時か美事な赤い果實が、幾つも幾つも捥ぎとられるのを待つやうに如何にも大きく下つてゐた。

愼吾は、段々秋めいて來た畑の樣子を眺めながら、何とか好い考が浮ばないかと思つて、一人で心を痛めてゐた。

その時、豚小屋の隣の方から、突然、しげ子の物に脅えたやうな聲が聞えて來た。信雄が側に喰つ附いてゐるのを知つてゐる愼吾は、はつと息を殺して、思はずその方へ聞き耳を立てた。

「お止しなさいつてば。信ちやん。何をするの、いやらしい……後生だから、止して頂戴つてば、信ちやん。………ほんとにいやらしい子ねえ。あんまりきかないとおぢさんに云つけてよ」

かう云ふ叫びが途斷れ途斷れに聞えて來た時、愼吾は、見る間に手足ががたがたと烈しく慄え出すと同時に、軀中の血が一度にぴつたり止つたやうに、暫時、息が詰つたと思ふと、氷のやうに冷いものが忽ち脊髓の左右を走つて上つた。そして、その次の瞬間には、彼は何か怖しい力に依つて烈しく軀を彈かれたやうに、慌しく脚を上げて一氣に豚小屋の方へ走り出した。

「誰か來て下さい。誰か……信ちやんが、信ちやんが……」

愼吾が豚小屋の直ぐ側まで漸く駈けつけた時、再びかう云ふしげ子の聲が聞えたと思ふと、すつかり顏を眞赤にして、裸足になつたしげ子の姿が、突然愼吾の直ぐ前へよろめきながら現はれた。そしてそのすぐ後には、信雄が豚のやうな鼻の先をつき出してにやにや笑ひながら、何か抱へるやうに兩手を擴げて出て來たのである。

それを見ると、愼吾は忽ちくらくらと眼が廻るやうな氣持して、その瞬間周圍の凡ての事が一時すつかり頭の中から消えて終つた。そして、信雄に對する心からの憎惡だけが、たつた一つ、それらのものの消え去つた跡に殘つて烈しく軀中を躍り廻つた。と思ふと、彼は矢庭に小屋の横側に立てかけてあつた、施肥用の天秤棒を取るが早いか、いきなり怖しい一擊を信雄の頭上に向つて加へた。何か石でも撲つたやうな音と一緒に、天秤棒が突然愼吾の掌から飛んで、恰もはづみを喰つたやうに二度ほど地面の上で躍り上つた。

やがて、周圍の凡ての物が再び甦るやうにはつきり心の中に映つて來た時、彼は、自分の脚の直ぐ前に、信雄の軀がぴくぴくと動きながら、面を下にして倒れてゐるのを見出した。

「どうしませう。あなた。どうしませう。信ちやんが死んぢまつたらどうしませう」

おろおろした聲を出して、信雄の周圍を廻つてゐたしげ子の顔は、何時か全く透き通るやうに蒼褪めてゐた。そして軀を動かす度に足をわなわなと慄せるので、今にもそのまま倒れて終ひはしないかと思はれるほどの樣子に見えた。

「大丈夫だよ。こんな奴は、殺されたつて死ぬもんか」

この時の愼吾の聲は、不思議に強い底力をもつて鋭くあたりに響き亘つた。然し、その顔は、何時か物凄い土氣色に變つてゐた。(八、九、一三)

中央公論大賣捌所

同　神田區裏神保町　上田屋
同　京橋區銀座三丁目　東海堂
同　京橋區元數寄屋町　北隆館
同　京橋區西紺屋町　良明堂
同　日本橋區本石町　至誠堂
同　本郷區本富士町　盛春堂
大阪市北區梅田町　盛文館
同　北區東梅田町　立盛堂
京都市七條停車場前　共盛社
同　四條西洞院　前田大盛社
名古屋市富澤町　中京堂
朝鮮京城本町二丁目　日韓書房

○定價　金五拾錢郵税金貳錢（海外郵税拾錢但支那を除く）

册數＼國別	內國	外國
六册	金參圓	金參圓六拾錢
十二册	金六圓	金七圓貳拾錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金八圓五拾錢外國は金拾圓貳拾錢の割となれども頁數の部合にて臨時變更することあるべし。

一誌代郵税は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金口座は東京三十四番なり
一郵券代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるゝを拒ます
一代金引替小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄　金八錢

但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正八年九月三十日印刷納本
大正八年十月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　菅谷憲治
印刷人　高木西三

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地
中央公論社
電話｛小石川一四四〇／小石川三四二〇｝
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町二丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

號特價金七拾五錢

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す